静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第63集

西　向　遺　跡

袋井市・磐田市

平成26年度～令和３年度二級河川太田川河川改修事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０２２

静岡県埋蔵文化財センター

序

西向遺跡は静岡県の西部、袋井市と磐田市の市境付近にあり、太田川の西側の岸を中心に広がっています。太田川の河川改修事業では、平成６年度の元島遺跡の発掘調査に始まり、富里遺跡、西向遺跡の順に調査を行ってきました。今回の報告書刊行で、同事業に伴う発掘調査は一区切り付くことになりますが、一連の発掘調査で、弥生時代から江戸時代に至る人々の暮らしの痕跡を明らかにし、静岡県の歴史復元の一助となる成果を公表してきました。

今回報告する西向遺跡の発掘調査は、平成 21 年度調査の後を受けて、平成 26 年度から令和３年度にかけて行ったもので、弥生時代中頃から鎌倉時代に至る様々な調査成果がありました。

弥生時代中頃には方形周溝墓が作られ、墓域として使われていたことがわかりました。これらの墓を作った人々が暮らしていた集落は、まだ発見されていませんが、近隣の地下に眠っているのではないかと思われます。

古墳時代には、集落が営まれたようで、掘立柱建物跡や住居状遺構、井戸、土器集積遺構が発見されました。掘立柱建物跡の中には、独立棟持柱を持つものがあり、特殊な性格の建物があったことがうかがえます。その近隣では井戸と土器集積遺構が発見されました。井戸からは多くの土器が出土し、井戸の廃棄に際して祭祀が行われたと思われます。土器集積遺構からは多量の土器片が出土し、手捏ね土器も見られたことから、これも何らかの祭祀が行われたものと考えられます。

奈良時代には、掘立柱建物群が作られました。検討の結果、これらの建物の主軸の方向が、近隣で発見された郡衙跡の可能性が高い掛之上遺跡の掘立柱建物群の主軸の方向と一致することがわかり、掛之上遺跡の掘立柱建物群とほぼ同じ時期の８世紀前半に作られた地域共有の建物群であった可能性が高くなりました。

その後は、平安時代～鎌倉時代にも掘立柱建物群が建てられ、集落が継続していたことがわかりました。

このような調査成果が、地域の歴史、さらには静岡県の歴史解明の資料として活用されることを願っております。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、静岡県袋井土木事務所をはじめ、各関係機関の御理解と御協力をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

2022 年３月

静岡県埋蔵文化財センター所長
野 村 浩 司

例言

1　本書は、袋井市中及び磐田市和口に所在する西向遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、二級河川太田川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県袋井土木事務所の依頼を受け、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。

3　本調査の期間及び面積は次のとおりである。

現地調査　平成 26 年７月～平成 27 年３月　調査対象面積 4,200 ㎡
　　平成 27 年７月～平成 28 年３月　調査対象面積 3,885 ㎡
　　平成 28 年７月～平成 29 年３月　調査対象面積 4,318 ㎡
　　平成 29 年７月～平成 30 年３月　調査対象面積 2,751 ㎡
資料整理　平成 30 年８月～平成 31 年３月　令和元年８月～令和２年３月
　　令和２年８月～令和３年３月　　令和３年７月～令和４年３月

4　調査体制は次のとおりである。

平成 26 年度（現地調査）
所長　赤石達彦　次長兼総務課長　長谷川明子　調査課長　中鉢賢治　主幹兼事業係長　杉山智彦
主幹兼総務係長　大坪淳子　総務課事業係　青木修　総務課総務係　橋野大輔
主幹兼調査係長　及川司　調査担当　主幹　富樫孝志　主査　大谷宏治
平成 27 年度（現地調査 ）
所長　赤石達彦　次長兼総務課長　田中雅代　調査課長　中鉢賢治　主幹兼事業係長　杉山智彦
主幹兼総務係長　大坪淳子　総務課事業係　青木修　総務課総務係　河井義治
主幹兼調査係長　富樫孝志　調査担当　主幹兼係長　富樫孝志　主査　大谷宏治
平成 28 年度（現地調査）
所長　堤敏幸　次長兼総務課長　田中雅代　調査課長　中鉢賢治　主幹兼総務係長　土戸美樹
主幹兼調査係長　富樫孝志　調査担当　富樫孝志　主査　井鍋誉之
平成 29 年度（資料整理）
所長　酒井敏明　次長兼総務課長　山本広子　調査課長　中鉢賢治　総務班長　土戸美樹
調査班長　溝口彰啓　調査担当　主査　井鍋誉之
平成 30 年度（資料整理）
所長　酒井敏明　次長兼総務課長　中野克彦　調査課長　中鉢賢治　総務班長　土戸美樹
調査班長　溝口彰啓　調査担当　主査　岩本　貴　保存処理担当　主査　大森信宏
平成 31 年度・令和元年度
所長　酒井敏明　次長兼総務課長　中野克彦　調査課長　中鉢賢治　総務班長　土戸美樹
調査班長　溝口彰啓　調査担当　主査　勝又直人　保存処理担当　主査　大森信宏
令和２年度
所長　酒井敏明　次長兼総務課長　中野克彦　調査課長　中鉢賢治　総務班長　島田真紀
課長代理兼調査班長・調査担当　富樫孝志
令和３年度
所長　野村浩司　次長兼総務課長　吉田光廣　技監兼調査課長　中鉢賢治　総務班長　島田真紀
課長代理兼調査班長・調査担当　富樫孝志

5　本書の執筆は、第６章以外は富樫孝志が行い、第６章第１節は鈴木三男、第６章第２節はパレオ・

ラボ AMS 年代測定グループの伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・小林克也、第３節は小林克也（株式会社パレオ・ラボ）、第４節は三谷智広（株式会社パレオ・ラボ）が行った。

６　本書の編集は、静岡県埋蔵文化財センターが行った。

７　発掘調査における業務委託は次のとおりである。

掘削等業務委託　株式会社イビソク（平成 26 年度～平成 29 年度）

遺跡測量等業務委託　株式会社フジヤマ（平成 26 年度～平成 29 年度）

整理作業・保存処理業務委託　株式会社イビソク（平成 30 年度～令和３年度）

木製品樹種同定業務委託　東北大学名誉教授　鈴木三男

同定調査及び年代測定業務委託　株式会社パレオ・ラボ

８　発掘調査では、次の方々から御指導、御教示をいただいた。厚くお礼申し上げる。

大村至広　河合修　菊池吉修　佐口節司　白澤崇、鈴木敏則、竹内直文、藤原治、松井一明、水野雅彦、向坂鋼二、室内美香　山本義孝、渡邊武文（五十音順、敬称略）

凡例

本書の記載については、次の基準により統一を図った。

1　本書で用いた遺構・遺物などの位置を示す座標は、平面直角座標第Ⅷ系（世界測地系）を基準とした。

2　調査区の方眼設定は、平面直角座標第Ⅷ系の次の座標を基準として設定した。

（Ｘ＝-143530，Ｙ＝-55060）＝（Ａ，１）

3　出土遺物は通し番号を付けて取り上げた（遺跡略号ＴＮＭ）。本文中の遺物番号とは一致しない。

4　色彩の用語・記号は、新版『標準土色帳』（農林水産省技術会議事務局監修　1992 年）を使用した。

5　本文中の周辺の遺跡分布図（第２図）は、国土地理院発行の電子地形図 25,000 を使用した。

6　遺構略号は、次のとおりである。

SA: 柵列　SB: 掘立柱建物跡　SD: 溝跡　SE: 井戸跡　SH: 住居状遺構　SK：土坑　SP: 柱穴もしくは小穴　SR: 流路跡　SX: その他の遺構

7　遺構略号の次に付けた遺構番号は、次の基準で付けた。

１千番台：平安時代後期～鎌倉時代と考えられる遺構

２千番台：奈良時代～平安時代前期と考えられる遺構及び２面目調査面で検出した遺構で、時期の判断が困難な遺構

３千番台：古墳時代と考えられる遺構

４千番台：弥生時代と考えられる遺構

目次

序　例言　凡例　目次

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　遺跡の概要
第１節　地理的環境 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　発掘調査の方法と経過
第１節　現地調査 …… 7
第２節　資料調査 …… 11

第４章　調査の成果
第１節　土層と地形 …… 13
第２節　各時期の遺構の概要 …… 16
第３節　平安時代後期～鎌倉時代の遺構と遺物 …… 35
第４節　平安時代前期～奈良時代の遺構と遺物 …… 98
第５節　古墳時代の遺構と遺物 …… 119
第６節　弥生時代の遺構と遺物 …… 156
第７節　包含層出土の遺物 …… 167

第５章　まとめ …… 192

第６章　自然科学分析
第１節　西向遺跡から出土した木材の樹種 …… 197
第２節　放射性炭素年代測定 …… 231
第３節　西向遺跡出土炭化材の樹種同定 …… 237
第４節　西向遺跡出土の動物遺体 …… 240

写真図版
抄録

挿図目次

第１図　太田川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の履歴……２
第２図　西向遺跡周辺の遺跡分布と旧河川等の分布……４
第３図　調査区の設定と調査年度……７
第４図　調査区とグリッド配置図……８
第５図　土層断面図１……14
第６図　土層断面図２……15
第７図　平安時代後期～鎌倉時代の主要遺構分布……17
第８図　奈良時代～平安時代前期の主要遺構分布……18
第９図　古墳時代の主要遺構分布……18
第 10 図　弥生時代の主要遺構分布……19
第 11 図　第１面遺構分布１……21
第 12 図　第１面遺構分布２……22
第 13 図　第１面遺構分布３……23
第 14 図　第１面遺構分布４……24
第 15 図　第１面遺構分布５……25
第 16 図　第１面遺構分布６……26
第 17 図　第１面遺構分布７……27
第 18 図　第２面遺構分布１……28
第 19 図　第２面遺構分布２……29
第 20 図　第２面遺構分布３……30
第 21 図　第２面遺構分布４……31
第 22 図　第２面遺構分布５……32
第 23 図　第２面遺構分布６……33
第 24 図　第２面遺構分布７……34
第 25 図　柵列 SA1001 ～ 1004 実測図……36
第 26 図　柵列 SA1001、1002、1004 出土遺物実測図……37
第 27 図　掘立柱建物跡 SB1001 実測図……39
第 28 図　掘立柱建物跡 SB1002 実測図……40
第 29 図　掘立柱建物跡 SB1002 出土遺物実測図……40
第 30 図　掘立柱建物跡 SB1003・1004 実測図……41
第 31 図　掘立柱建物跡 SB1005 実測図……43
第 32 図　掘立柱建物跡 SB1006・1007 実測図……44
第 33 図　井戸跡 SE1001 ～ 1004 実測図……46
第 34 図　井戸跡 SE1005 ～ 1007・1011 実測図……48
第 35 図　井戸跡 SE1003・1005・1007 出土遺物実測図……49
第 36 図　井戸跡 SE1008・1012・1013 実測図……51
第 37 図　井戸跡 SE1008・1012・1013 出土遺物実測図……52
第 38 図　井戸跡 SE1009 実測図……54
第 39 図　井戸跡 SE1009 出土遺物実測図……54
第 40 図　井戸跡 SE1010 実測図……56
第 41 図　井戸跡 SE1010 出土遺物実測図……57
第 42 図　井戸跡 SE1014 ～ 1017 実測図……60
第 43 図　井戸跡 SE1014 ～ 1017 出土遺物実測図……61
第 44 図　土坑 SK1001 ～ 1007 実測図……63
第 45 図　土坑 SK1008 ～ 1010・1011・1013・1014 実測図……64
第 46 図　土坑 SK1015・1017 ～ 1021・1023 ～ 1025 実測図……65
第 47 図　土坑 SK1005・1011・1014 出土遺物実測図……66
第 48 図　柱穴 SP1013・1014・1020・1043・1086・1120・1180・1185 実測図……68
第 49 図　溝跡 SD1001・1025 実測図……70
第 50 図　溝跡 SD1003 ～ 1006・1008 ～ 1011、自然流路跡 SR1003 ～ 1005 実測図……71
第 51 図　溝跡 SD1001・1007・1023、自然流路跡 SR1003・1005 出土遺物実測図……71
第 52 図　溝跡 SD1007・1015 実測図……74
第 53 図　溝跡 SD1023 実測図……75
第 54 図　自然流路跡 SR1001・1002 実測図……76
第 55 図　自然流路跡 SR1001 出土遺物実測図１……77
第 56 図　自然流路跡 SR1001 出土遺物実測図２……78
第 57 図　自然流路跡 SR1022 実測図……79
第 58 図　自然流路跡 SR1022 出土遺物実測図……80
第 59 図　溝跡 SD1012 ～ 1014・1016 ～ 1020・1022、自然流路跡 SR1007 ～ 1009・1010・1011 実測図……81
第 60 図　溝跡 SD1013、自然流路跡 SR1099 ～ 1011 出土遺物実測図……82
第 61 図　溝跡 SD1024・1026 ～ 1031、自然流路跡 SR1012・1015 ～ 1017・1019・1021・1024 ～

1026 実測図 …… 83
第 62 図　溝跡 SD1019・1024・1026・1030、自然流路跡 SR1021・1024・1025 出土遺物実測図 …… 84
第 63 図　溝跡 SD1032 ～ 1036 実測図 …… 87
第 64 図　溝跡 SD1032・1034・1036 出土遺物実測図 …… 87
第 65 図　被熱遺構 SX1001 実測図 …… 88
第 66 図　被熱遺構 SX1001 出土遺物実測図 …… 89
第 67 図　５区谷状地形検出杭列実測図１ …… 91
第 68 図　５区谷状地形検出杭列実測図２ …… 92
第 69 図　５区谷状地形杭列出土杭実測図１ …… 93
第 70 図　５区谷状地形杭列出土杭実測図２ …… 94
第 71 図　遺物集積遺構 SX1002・1003 実測図 …… 95
第 72 図　遺物集積遺構 SX1002・1003 出土遺物実測図 …… 96
第 73 図　柵列 SA2001 実測図 …… 98
第 74 図　掘立柱建物跡 SB2001 実測図 …… 99
第 75 図　掘立柱建物跡 SB2001 出土遺物実測図 …… 100
第 76 図　掘立柱建物跡 SB2002 実測図 …… 101
第 77 図　掘立柱建物跡 SB2002 土層注記 …… 102
第 78 図　掘立柱建物跡 SB2002 出土遺物実測図 …… 103
第 79 図　掘立柱建物跡 SB2003 実測図 …… 105
第 80 図　掘立柱建物跡 SB2004 実測図 …… 106
第 81 図　掘立柱建物跡 SB2005 実測図 …… 107
第 82 図　掘立柱建物跡 SB2005 出土遺物実測図 …… 107
第 83 図　柵列 SA2002 実測図 …… 108
第 84 図　井戸跡 SE2001 実測図 …… 109
第 85 図　井戸跡 SE2001 出土遺物実測図 …… 110
第 86 図　井戸跡 SE2002 実測図 …… 110
第 87 図　土坑 SK2001 ～ 2007 実測図 …… 112
第 88 図　土坑 SK2008 ～ 2016 実測図 …… 113
第 89 図　土坑 SK2017・2019 ～ 2024 実測図 …… 115
第 90 図　土坑 SK2017、溝跡 SD2002 出土遺物実測図 …… 116
第 91 図　溝跡 SD2002 実測図 …… 117
第 92 図　遺物集積遺構 SX2001 実測図 …… 118
第 93 図　遺物集積遺構 SX2001 出土遺物実測図 …… 118
第 94 図　柵列 SA3001 実測図 …… 119
第 95 図　掘立柱建物跡 SB3001 実測図 …… 120
第 96 図　掘立柱建物跡 SB3001 出土遺物実測図 …… 121
第 97 図　掘立柱建物跡 SB3002 実測図 …… 122
第 98 図　掘立柱建物跡 SB3003 実測図 …… 123
第 99 図　掘立柱建物跡 SB3004 実測図 …… 123
第 100 図　掘立柱建物跡 SB3005 実測図 …… 124
第 101 図　掘立柱建物跡 SB3006 実測図 …… 125
第 102 図　住居状遺構 SH3001 実測図 …… 126
第 103 図　住居状遺構 SH3001 出土遺物実測図 …… 127
第 104 図　住居状遺構 SH3002・3003 実測図 …… 129
第 105 図　住居状遺構 SH3004、土坑 SK2025 実測図 …… 130
第 106 図　住居状遺構 SH3004、土坑 SK2025 出土遺物実測図 …… 131
第 107 図　住居状遺構 SH3005 実測図 …… 132
第 108 図　住居状遺構 SH3006 実測図 …… 133
第 109 図　住居状遺構 SH3007 ～ 3009 実測図 …… 134
第 110 図　住居状遺構 SH3006・3007 出土遺物実測図 …… 134
第 111 図　住居状遺構 SH3010 ～ 30212 実測 …… 135
第 112 図　井戸跡 SE3001 ～ 3003 実測図 …… 137
第 113 図　井戸跡 SE3004 実測図 …… 138
第 114 図　井戸跡 SE3001 ～ 3004 出土遺物実測図 …… 139
第 115 図　井戸跡 SE3005 実測図 …… 141
第 116 図　井戸跡 SE3005 出土遺物実測図 …… 142
第 117 図　井戸跡 SE3006 実測図 …… 143
第 118 図　井戸跡 SE3006 出土遺物実測図 …… 144
第 119 図　井戸跡 SE3007・3008 実測図 …… 147
第 120 図　井戸跡 SE3007・3008 出土遺物実測図 …… 147
第 121 図　土坑 SK3001 ～ 3005, 3007 実測図 …… 149
第 122 図　土坑 SK3001・3002・3004 ～ 3006 出土遺物実測図 …… 150
第 123 図　溝跡 SD3016 ～ 3018 実測図 …… 152
第 124 図　遺物集積遺構 SX3001 実測図 …… 153
第 125 図　溝跡 SD3018、遺物集積遺構 SX3001 出土遺物実測図 …… 153
第 126 図　遺物集積遺構 SX3002 実測図 …… 154
第 127 図　遺物集積遺構 SX3002 出土遺物実測図 …… 155
第 128 図　方形周溝墓分布図 …… 157
第 129 図　方形周溝墓 SZ4001 実測図 …… 158
第 130 図　方形周溝墓 SZ4002 実測図 …… 159

第 131 図　方形周溝墓 SZ4002 主体部実測図 …… 160
第 132 図　方形周溝墓 SZ4002 出土遺物実測図 …… 161
第 133 図　方形周溝墓 SZ4003 実測図 …… 162
第 134 図　方形周溝墓 SZ4003 出土遺物実測図 …… 163
第 135 図　方形周溝墓 SZ4004 実測図 …… 164
第 136 図　方形周溝墓 SZ4005 実測図 …… 165
第 137 図　方形周溝墓 SZ4005・4006 出土遺物実測図 …… 165
第 138 図　方形周溝墓 SZ4006 実測図 …… 166
第 139 図　包含層出土遺物実測図１ …… 168
第 140 図　包含層出土遺物実測図２ …… 169
第 141 図　包含層出土遺物実測図３ …… 171
第 142 図　包含層出土遺物実測図４ …… 173
第 143 図　包含層出土遺物実測図５ …… 175
第 144 図　包含層出土遺物実測図６ …… 176
第 145 図　包含層出土遺物実測図７ …… 177
第 146 図　包含層出土遺物実測図８ …… 179
第 147 図　包含層出土遺物実測図９ …… 180
第 148 図　包含層出土遺物実測図 10 …… 181
第 149 図　包含層出土遺物実測図 11 …… 182
第 150 図　包含層出土遺物実測図 12 …… 184
第 151 図　包含層出土遺物実測図 13 …… 185
第 152 図　包含層出土遺物実測図 14 …… 186
第 153 図　包含層出土遺物実測図 15 …… 187
第 154 図　包含層出土遺物実測図 16 …… 188
第 155 図　包含層出土遺物実測図 17 …… 189
第 156 図　包含層出土遺物実測図 18 …… 191
第 157 図　掛之上遺跡検出の掘立柱建物群 …… 194
第 158 図　マルチプロット図 …… 232
第 159 図　暦年較正結果１ …… 234
第 160 図　暦年較正結果２ …… 235

挿表目次

第１表　本書で使用する遺物編年のおよその対応表 …… 16
第２表　５区谷状地形杭列に使用された樹種 …… 90
第３表　樹種同定結果一覧 …… 212
第４表　時期別樹種構成一覧 …… 216
第５表　時期別器種別樹種構成一覧 …… 217
第６表　測定資料及び処理 …… 233
第７表　放射性炭素年代測定および暦年補正の結果 …… 234
第８表　西向遺跡出土炭化材の樹種同定結果 …… 237
第９表　遺構観察表・新旧遺構名対照表 …… 243
第 10 表　遺物観察表（土器） …… 257
第 11 表　遺物観察表（土製品） …… 268
第 12 表　遺物観察表（木製品） …… 269
第 13 表　遺物観察表（石器・石製品） …… 270
第 14 表　遺物観察表（金属製品） …… 270
第 15 表　掘立柱建物跡観察表 …… 270

挿写真目次

写真１　掘立柱建物跡の調査状況（２区） …… 12
写真２　古墳時代遺物集中箇所の調査状況（４区） …… 12
写真３　遺物実測の状況 …… 12
写真４　遺構図トレースの状況 …… 12
写真５　出土木材顕微鏡写真１ …… 217
写真６　出土木材顕微鏡写真２ …… 218
写真７　出土木材顕微鏡写真３ …… 219
写真８　出土木材顕微鏡写真４ …… 220
写真９　出土木材顕微鏡写真５ …… 221
写真 10　出土木材顕微鏡写真６ …… 222
写真 11　出土木材顕微鏡写真７ …… 223
写真 12　出土木材顕微鏡写真８ …… 224
写真 13　出土木材顕微鏡写真９ …… 225
写真 14　出土木材顕微鏡写真 10 …… 226
写真 15　出土木材顕微鏡写真 11 …… 227
写真 16　出土木材顕微鏡写真 12 …… 228
写真 17　出土木材顕微鏡写真 13 …… 229
写真 18　出土木材顕微鏡写真 14 …… 230
写真 19　西向遺跡出土炭化財の走査型電子顕微鏡写真 …… 238
写真 20　井戸跡 SE1013 出土の動物遺体 …… 242

写真図版目次

図版１　調査区遠景（５区、南から）
図版２　１　調査区遠景（５区、北から）
　　２　調査区遠景（２区、東から）
図版３　２区１面目調査区完掘状況（北から）
図版４　SB1005 完掘状況
図版５　SX1001 遺物出土状況
図版６　２区１面目 SR1001、SD1001 他完掘状況
図版７　１　２区２面目完掘状況（北から）
　　２　２区奈良時代掘立柱建物跡分布状況
図版８　SB2001 完掘状況
図版９　SB2002、2003、2004 完掘状況
図版 10　SB2005、SA2002 完掘状況
図版 11　SB3002 完掘状況
図版 12　３区２面目完掘状況
図版 13　SX3002 遺物出土状況
図版 14　SB3006 完掘状況
図版 15　１　５区検出谷地形と杭列検出状況
　　２　５区完掘状況
図版 16　１　３区西壁北側断面
　　２　３区西壁南側断面
図版 17　２区１面目俯瞰写真
図版 18　１　２区 SA1001-P1 半裁状況
　　２　３区 SA1002-P1 柱根検出状況
　　３　３区 SA1003-P2 完掘状況
　　４　３区 SA1004-P1 柱根検出状況
　　５　３区 SB1001-P5 柱根検出状況
　　６　３区 SB1001-P9 根石検出状
図版 19　１　３区 SB1001-P14 柱根検出状況
　　２　３区 SB1002-P10 柱根検出状況
　　３　３区 SB1003-P1 柱根検出状況
　　４　３区 SB1003-P2 柱根検出状況
　　５　３区 SB1005-P17 遺物出土状況
　　６　３区調査面１面目柱穴群（西から）
図版 20　１　２区 SE1001 完掘状況（東から）
　　２　２区 SE1002・1004 完掘状況（東から）
図版 21　１　２区 SE1003 完掘状況（東から）
　　２　２区 SE1005 完掘状況（東から）
図版 22　１　２区 SE1006 完掘状況（東から）
　　２　２区 SE1008 完掘状況（東から）
図版 23　１　２区 SE1007 覆土断面（西から）
　　２　２区 SE1007 完掘状況（東から）
図版 24　１　２区 SE1011 覆土断面（東から）
　　２　２区 SE1011 完掘状況（東から）
図版 25　１　３区 SE1012 覆土断面（東から）
　　２　３区 SE1012 遺物出土状況（東から）
図版 26　１　２区 SE1009 覆土断面（北から）
　　２　２区 SE1014 完掘状況（東から）
図版 27　１　２区 SE1010 覆土断面（東から）
　　２　２区 SE1010 完掘状況
図版 28　１　３区 SE1015 覆土断面（東から）
　　２　３区 SE1015 完掘状況（東から）
図版 29　１　３区 SE1016 遺物出土状況（東から）
　　２　３区 SE1016 完掘状況
図版 30　１　４区 SE1017 遺物出土状況（東から）
　　２　４区 SE1017 完掘状況（東から）
図版 31　１　２区 SK1002 完掘状況（北から）
　　２　３区 SK1004 完掘状況（東から）
図版 32　１　３区 SK1011 遺物出土状況
　　２　３区 SK1014 完掘状況（東から）
図版 33　１　３区 SK1018 完掘状況（東から）
　　２　３区 SK1023 完掘状況（西から）
図版 34　１　３区 SP1086 柱根検出状況（東から）
　　２　３区 SP1180 柱根検出状況（東から）
　　３　２区 SD3001 遺物出土状況（西から）
　　４　２区 SD1003 覆土断面（南から）
　　５　２区 SD1003、1004 完掘状況（東から）
　　６　２区 SD1008 完掘状況（東から）
図版 35　１　２区 SR1005 完掘状況（西から）
　　２　２区 SD1007 覆土断面（南から）
　　３　２区 SD1007 完掘状況（南から）
　　４　２区 SD1009 完掘状況（西から）
　　５　２区 SD1020 完掘状況（東から）
図版 36　１　３区 SD1026 遺物出土状況（南から）
　　２　３区 SR1031 完掘状況（北東から）
　　３　３区 SR1025 覆土断面（南から）
　　４　２区 SX1001 遺物出土状況（北から）

5　３区 SX1001 完掘状況（北から）
6　３区 SX1003 遺物出土状況
図版 37　1　４区 SD1031・SR1025 完掘状況（南から）
2　５区 SD1035 完掘状況（南東から）
図版 38　２区２面目完掘状況俯瞰（左方向が北）
図版 39　1　２区 SB2001-P1 覆土断面（西から）
2　２区 SB2001-P2 覆土断面（東から）
3　２区 SB2001-P2 柱検出状況（南から）
4　２区 SB2001-P3 覆土断面（東から）
5　２区 SB2001-P4 覆土断面（南から）
6　２区 SB2001-P5 覆土断面（南から）
図版 40　1　２区 SB2001-P6 覆土断面（西から）
2　２区 SB2002-P1 覆土断面（東から）
3　２区 SB2002-P1 覆土断面（西から）
4　２区 SB2002-P2 覆土断面（西から）
5　２区 SB2002-P3 覆土断面（北から）
6　２区 SB2002-P4 覆土断面（北東から）
図版 41　1　２区 SB2002-P4 覆土断面（南西から）
2　２区 SB2002-P5 覆土断面（北から）
3　２区 SB2002-P5 覆土断面（北から）
4　２区 SB2002-P6 覆土断面（西から）
5　２区 SB2003-P6 柱検出状況（北から）
6　２区 SB2002-P7 覆土断面（西から）
図版 42　1　２区 SB2002-P8 覆土断面（南から）
2　２区 SB2002-P8 柱検出状況（南から）
3　２区 SB2002-P9 覆土断面（西から）
4　２区 SB2002-P10 覆土断面（西から）
5　２区 SB2002-P10 柱検出状況（北から）
6　２区 SB2002-P11 覆土断面（北から）
図版 43　1　２区 SB2002-P12 覆土断面（北から）
2　２区 SB2002-P13 覆土断面（西から）
3　２区 SB2003-P13 柱検出状況（西から）
4　２区 SB2002-P14 覆土断面（西から）
5　２区 SB2002-P14 柱検出状況（西から）
6　２区 SB2002-P15 覆土断面（南から）
図版 44　1　２区 SB2002-P16 覆土断面（東から）
2　２区 SB2002-P16 覆土断面（西から）
3　２区 SB2002-P17 覆土断面（東から）
4　２区 SB2002-P18 覆土断面（東から）
5　２区 SB2002-P19 覆土断面（西から）
6　２区 SB2003-P1 覆土断面（東から）
図版 45　1　２区 SB2003-P2 覆土断面（北から）
2　２区 SB2003-P7 覆土断面（西から）
3　２区 SB2003-P9 覆土断面（西から）
4　２区 SB2003-P10 覆土断面（西から）
5　２区 SB2003-P11 覆土断面（西から）
6　２区 SB2003-P12 覆土断面（北から）
図版 46　1　２区 SB2003-P13 覆土断面（北から）
2　２区 SB2003-P14 覆土断面（西から）
3　２区 SB2004-P2 覆土断面（北から）
4　２区 SB2004-P3 覆土断面（南東から）
5　２区 SB2004-P9 覆土断面（東から）
6　２区 SB2004-P10 覆土断面（南東から）
図版 47　1　２区 SB2004-SP10 覆土断面（北西から）
2　２区 SB2004-P11 覆土断面（南から）
3　２区 SB2004-P12 覆土断面（南東から）
4　２区 SB2004-P12 覆土断面（北西から）
5　２区 SB2005-P1 覆土断面（西から）
6　２区 SB2005-P3 覆土断面（北から）
図版 48　1　２区 SB2005-P4 覆土断面（東から）
2　２区 SB2005-P5 覆土断面（東から）
3　２区 SB2005-P10 覆土断面（西から）
4　２区 SB2005-P11 覆土断面（西から）
5　２区 SB2005-P12 覆土断面（西から）
6　２区 SA2002-P1 覆土断面
図版 49　1　３区 SE2001 覆土断面（北から）
2　３区 SE2001 完掘状況（北から）
図版 50　1　２区 SE2002 覆土断面（東から）
2　２区 SE2002 完掘状況（北から）
図版 51　1　３区 SK2024 完掘状況（東から）
2　２区 SX2001 検出状況
3　２区 SB3001-P1 柱検出状況（東から）
4　２区 SB3002-P2 覆土断面（西から）
5　２区 SB3002-P4 覆土断面（北から）
6　２区 SB3002-P5 覆土断面（北から）
図版 52　４区２面目完掘状況俯瞰（上が北）
図版 53　1　２区 SB3002-P8 覆土断面（南から）
2　２区 SB3002-P10 覆土断面（東から）
3　２区 SB3002-P11 覆土断面（北から）
4　４区 SB3004-P1 覆土断面（北から）
5　４区 SB3004-P2 覆土断面（北から）
6　４区 SB3004-P3 覆土断面（北から）

図版 54　1　２区 SB3004-P6 覆土断面（西から）
2　４区 SB3004-P7 覆土断面（北から）
3　４区 SB3004-P8 覆土断面（北から）
4　４区 SB3004-P8 根石検出状況（東から）
5　４区 SB3005 検出状況（西から）
図版 55　1　４区 SB3005-P1 柱根検出状況（東から）
2　４区 SB3005-P3 覆土断面（東から）
3　４区 SB3005-P4 柱根検出状況（東から）
4　４区 SB3005-P5 覆土断面（南から）
5　４区 SB3005-P6 覆土断面（南から）
6　４区 SB3005-P7 覆土断面（南から）
図版 56　1　４区 SB3005-P9,10-1 覆土断面(南東から)
2　４区 SB3005-P10-1 柱根検出状況(東から)
3　４区 SB3005-P10-2 覆土断面（西から）
4　４区 SB3005-P11 覆土断面（西から）
5　４区 SB3005-P12,13 覆土断面(南東から)
6　４区 SB3006-P12,13 完掘状況（東から）
図版 57　1　４区 SB3005-P14 覆土断面（北から）
2　４区 SB3005-P15 覆土断面（北から）
3　４区 SB3005-P16 覆土断面（北から）
4　４区 SB3005-P17 柱検出状況（東から）
5　４区 SB3006-P14 棟持柱覆土断面(南から)
図版 58　1　４区 SB3006-P2 覆土断面（東から）
2　４区 SB3006-P3 覆土断面（東から）
3　４区 SB3006-P4 覆土断面（北東から）
4　４区 SB3006-P5 覆土断面（南から）
5　４区 SB3006-P6 覆土断面（南から）
6　４区 SB3006-P7 覆土断面（北東から）
図版 59　1　４区 SB3006-P8 覆土断面（西から）
2　４区 SB3006-P9 覆土断面（西から）
3　４区 SB3006-P10 柱痕検出状況(南東から)
4　４区 SB3006-P11 覆土断面（北から）
5　４区 SB3006-P12 柱痕検出状況（北から）
6　２区 SH3001-P5 覆土断面（東から）
図版 60　1　２区 SH3001 完掘状況（東から）
2　３区 SH3004・SK2025 遺物出土状況（西から）
図版 61　1　３区 SK2025 遺物出土状況（北から）
2　３区 SH3004 遺物出土状況（南東から）
3　３区 SH3004-P1 完掘状況（北西から）
4　３区 SH3004-P2 遺物出土状況（西から）
5　３区 SH3004 完掘状況（北から）
図版 62　1　３区 SH3006 完掘状況（北から）
2　３区 SH3007 完掘状況（東から）
図版 63　1　４区 SH3008 完掘状況（北から）
2　４区 SH3009 完掘状況（南から）
図版 64　1　４区 SH3010 完掘状況（北西から）
2　４区 SH3010 壁溝（南東から）
3　４区 SH3010-SD3015 完掘状況（西から）
図版 65　1　４区 SH3011 完掘状況（西から）
2　４区 SH3012 完掘状況（北から）
図版 66　1　４区 SH3012 竈内覆土断面（北から）
2　４区 SH3012 内検出 SK3006 遺物出土状況
図版 67　1　２区 SE3001 完掘状況（南から）
2　３区 SE3002 覆土断面（南から）
図版 68　1　３区 SE3002 遺物出土状況（東から）
2　４区 SE3003 覆土断面（西から）
図版 69　1　４区 SE3003 遺物出土状況（北東から）
2　４区 SE3003 遺物出土状況（東から）
図版 70　1　４区 SE3005 検出状況（北から）
2　４区 SE3005 遺物出土状況（北西から）
図版 71　1　４区 SE3005 遺物出土状況（西から）
2　４区 SE3005 覆土断面（西から）
図版 72　1　４区 SE3005 完掘状況（西から）
2　４区 SE3006 遺物出土状況（北から）
図版 73　1　４区 SE3006 完掘状況（北から）
2　４区 SE3007 覆土断面（東から）
図版 74　1　４区 SE3007 完掘状況（北東から）
2　４区 SE3008 覆土断面（南から）
図版 75　1　４区 SE3004 遺物出土状況（南東から）
2　２区 SK3001 遺物出土状況
3　３区 SK3005 完掘状況（東から）
4　４区 SK3007 遺物出土状況（北西から）
5　４区 SK3007 完掘状況（東から）
図版 76　1　４区 SD3017 完掘状況（北西から）
2　２区 SX3001 遺物出土状況
3　３区 SZ4001 完掘状況（西から）
図版 77　３区２面目完掘状況俯瞰
図版 78　1　２区 SZ4001-SD4001 完掘状況（西から）
2　３区 SZ4002 主体部 SK4001 検出状況（東から）

3　3区 SZ4002 主体部 SK4001 検出状況（東から）
4　3区 SZ4002-SK4001 完掘状況（東から）
5　3区 SZ4002-SD4005 遺物出土状況（南から）
6　3区 SZ4002-SD4005 遺物出土状況（東から）
図版 79　1　3区 SZ4002-SD4005 遺物出土状況（東から）
2　3区 SZ4002-SD4005 遺物出土状況（東から）
3　3区 SZ4002-SD4006 覆土断面（南東から）
4　3区 SZ4002-SD4007 覆土断面（北から）
5　3区 SZ4002-SD4008 遺物出土状況（東から）
6　3区 SZ4002-SD4008 覆土断面（南から）
図版 80　1　3区 SZ4002 完掘状況（西から）
2　3区 SZ4003 完掘状況（西から）
図版 81　1　3区 SZ4003-SD4021 覆土断面（東から）
2　3区 SZ4003-SD4022 覆土断面（南から）
3　3区 SZ4003-SD4022 遺物出土状況（東から）
4　3区 SZ4004-SD4010 覆土断面
5　3区 SZ4005 完掘状況（西から）
図版 82　1　3区 SZ4006 完掘状況（北西から）
2　3区 SZ4006-SD4016 覆土断面（東から）
3　3区 SZ4006-SD4017 覆土断面（南から）
4　3区 SZ4006-SD4019 遺物出土状況（北西から）
5　3区 SZ4006-SD4020 覆土断面（南東から）
図版 83　遺構出土遺物 1
図版 84　遺構出土遺物 2
図版 85　遺構出土遺物 3
図版 86　遺構出土遺物 4
図版 87　遺構出土遺物 5
図版 88　遺構出土遺物 6
図版 89　遺構出土遺物 7
図版 90　遺構出土遺物 8
図版 91　遺構出土遺物 9
図版 92　遺構出土遺物 10
図版 93　遺構出土遺物 11
図版 94　遺構出土遺物 12
図版 95　遺構出土遺物 13
図版 96　遺構出土遺物 14
図版 97　遺構出土遺物 15
図版 98　遺構出土遺物 16
図版 99　遺構出土遺物 17
図版 100　遺構出土遺物 18
図版 101　遺構・包含層出土遺物 1
図版 102　包含層出土遺物 2
図版 103　包含層出土遺物 3
図版 104　包含層出土遺物 4
図版 105　包含層出土遺物 5
図版 106　包含層出土遺物 6
図版 107　包含層出土遺物 7
図版 108　包含層出土遺物 8
図版 109　包含層出土遺物 9
図版 110　包含層出土遺物 10
図版 111　包含層出土遺物 11
図版 112　包含層出土遺物 12

第１章　調査に至る経緯

静岡県西部を流れる太田川水系の河川は、記録に残っているだけでも享保 19 年（1734 年）以降、昭和 49 年の「七夕豪雨」を始め、何度も洪水を起こし、流域に大きな水害をもたらしてきた。そのため、静岡県は昭和 27 年以降、太田川水系の洪水対策を計画的に実施してきた。平成 13 年には、「太田川水系河川整備基本方針」に基づいて「太田川水系河川整備計画」を策定した。この計画の中で、太田川の河口から４㎞、太田川と原野谷川の合流地点まで区間で、3,200 ㎥／秒の流量を確保するための河積拡大計画が示された。

この計画の対象となった太田川の河口から４㎞までの区間には、『静岡県文化財地図Ⅱ』（静岡県教育委員会 1989 年）では元島遺跡が登録されており、平成６年度～平成 10 年度、太田川住宅宅地基盤特定治水施設等整備工事に伴って、県袋井土木事務所からの依頼を受けて財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が、元島遺跡の発掘調査を行い、弥生時代～室町時代の複合遺跡であることを明らかにした。室町時代には水運の拠点となっていたと考えられ、クリークで囲まれた集落遺跡を調査し、貿易陶磁や美濃産陶器など、各地から集積された多くの遺物が出土したことは特記できる。その後も太田川河川改修事業の進捗に伴って、元島遺跡の発掘調査を断続的に行い、規則的に配置された弥生時代の方形周溝墓や、低地に築造された古墳の存在などを明らかにした。

元島遺跡よりも上流では、埋蔵文化財包蔵地の状況がはっきりしていなかったため、平成 21 年度に県袋井土木事務所の依頼を受けた財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が、元島遺跡の上流部分の太田川河川改修事業の計画区域内で、55,000 ㎡の範囲を対象に埋蔵文化財の確認調査を行った。この調査で富里遺跡と西向遺跡の存在が明らかになり、両遺跡ともこの確認調査後、周知の埋蔵文化財包蔵地として、新規に登録された。

西向遺跡では平成 21 年度、確認調査に続いて 2,550 ㎡に渡って本調査を実施した。そして、西向遺跡の地形が、微高地と低地から構成されており、微高地上に古墳時代中期～鎌倉時代の集落が展開していたことを明らかにした。この調査で、微高地と低地の境界部分に、南北方向に直線的に伸びる奈良時代の溝を検出した。この溝の検出は、平成 26 年度の調査で奈良時代の掘立柱建物群の発見につながる重要な発見であった。

平成 24 年度～平成 29 年度には、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の解散後に業務を引き継いだ静岡県埋蔵文化財センターが富里遺跡を発掘調査した。そして、弥生時代～古墳時代の住居跡や、壺を沈めた井戸跡などから構成された集落跡、飛鳥時代～奈良時代の方形区画溝と区画内に配置された竪穴状の作業場等の施設からなる集落跡、平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物跡や葦敷きの土坑などからなる集落跡を調査し、太田川流域の微高地に展開した集落変遷の一端を明らかにした。

このように、太田川の河川改修事業に伴う発掘調査は、下流の元島遺跡から、富里遺跡の順に行われ、平成 26 年度には、県袋井土木事務所の依頼を受けた県埋蔵文化財センターが西向遺跡で、平成 21 年度調査区の南側隣接地の調査を開始することとなった。この時点では、西向遺跡が河川改修計画区域内で、川の下流側（南側）に広がっていると想定されていたが、南側の限界が不明確であった。そこで平成 27 年度、県教育委員会文化財保護課が確認調査を行い。河川改修計画区域内での西向遺跡の南端を突き止め、これにより、太田川河川改修事業に伴う西向遺跡の本発掘調査の範囲が確定した。

以上の太田川河川改修事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査履歴については、第１図にまとめた。

第１図　太田川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の履歴

第２章　遺跡の概要

第１節　地理的環境

静岡県西部の太平洋に面した地域では、縄文海進以降、波による土砂の堆積作用により、海岸線に平行した砂堤列（浜堤）が発達し、縄文時代後期以降の遺跡の形成と密接な関係のあることが指摘されてきた（渡邊 1995、松原 2007 など）。このことは、西向遺跡の周辺でも同様である。

西向遺跡は、袋井市中～磐田市和口にある。同遺跡のある平野部は、北西は磐田原台地、西は天竜川、東は小笠丘陵に囲まれており、南は太平洋に面している。約６千年前、当地は縄文海進によって内湾となっていたが、天竜川が運搬した土砂が海流によって東進し、５千年前には砂堤列（砂堤列１、第２図）を形成し、内湾となっていた当地を閉塞し、潟湖化が進んだ（渡辺 1995、廣内ほか 2017）。その後も土砂の堆積は続き、３千年前には、２列目の砂堤列（砂堤列２、第２図）が形成され、さらにその後、現在の海岸線を縁取っている３列目の砂堤列（砂堤列３、第２図）が形成された（渡辺 1995）。このように、太田川周辺の平野には、1995 年の時点で３列の砂堤列が確認されている。その後 1998 年、元島遺跡の報告書が刊行され、同遺跡が砂堤列上に形成されていることが報告された。この砂堤列は、渡辺 1995 で報告された砂堤列１の延長に当たる可能性が考えられる。

富里遺跡は、最初に形成された砂堤列１よりも内陸にあり、現在のところ周辺で砂堤列は確認されてない。県が HP で公表している近隣でのボーリングデータ（発注番号 23-K2814-01-13-08）では、地表下６ｍ以下で非常に硬い地層に当たっていることから、安定した地盤があると考えられる。この地層が砂堤列ではないとすると、安定した自然堤防が考えられる。

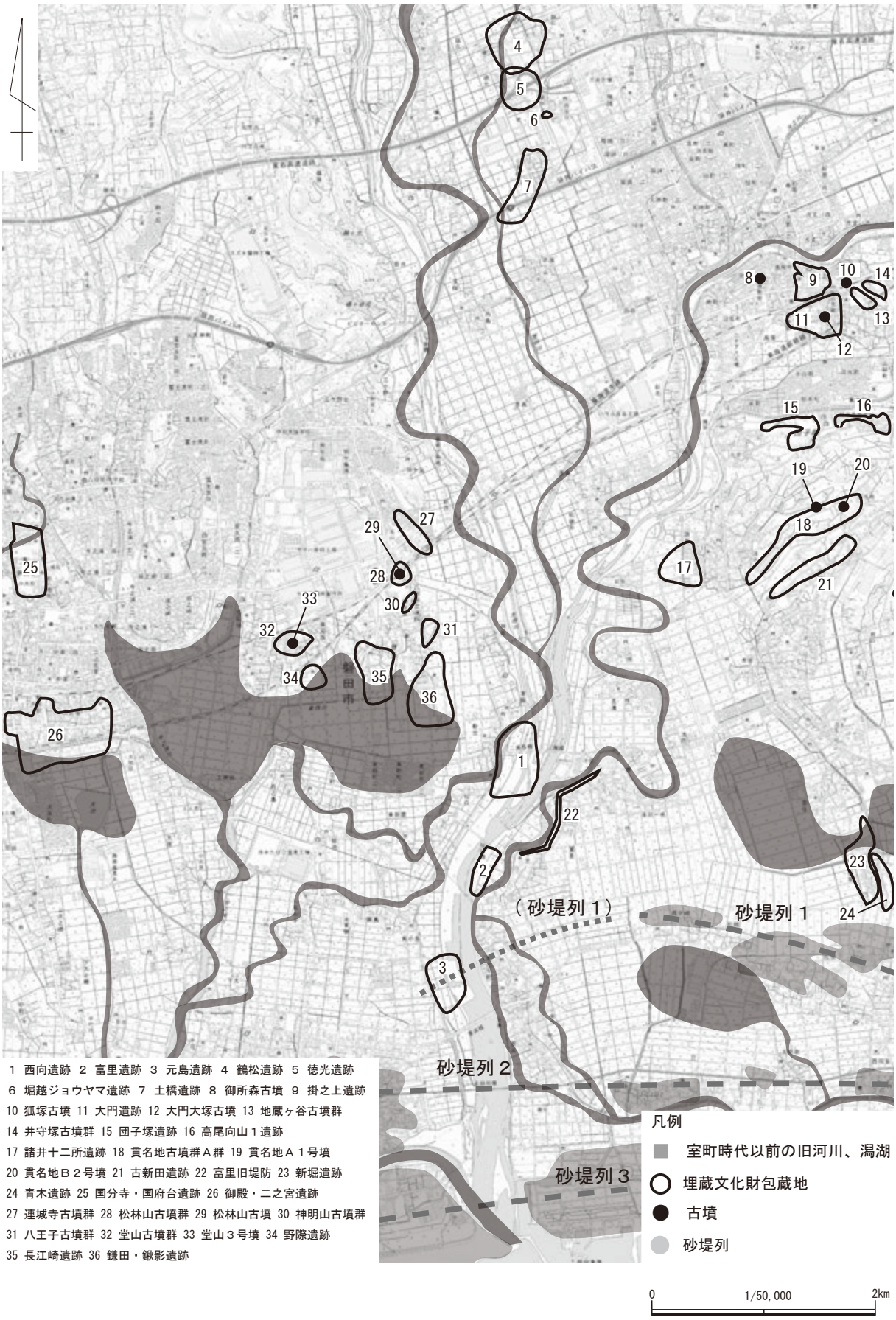
西向遺跡は、砂堤列Ｉよりも内陸にあり、周辺で砂堤列は確認されていない。県が HP で公表している同遺跡近隣でのボーリング調査のデータ（発注番号 23-K2814-01-13-05）では、地表下 15 ｍ程度まで、水を含んだ砂質シルト層が続いており、この層は、渡辺 1995 で報告された「上部シルト」に当たっていると考えられる。上部シルトは、陸成堆積物とされていることから、西向遺跡は、砂堤列Ｉが形成された後の潟湖堆積物の上に形成されていると考えられる。

ここで、太田川周辺の河川と流域遺跡との関係を理解するために、旧河道について触れておく。

室町時代までは、太田川流域には潟湖が残り、太田川、原野谷川などの河川は、平野部を縦横に流れていた（第２図）。今も残る富里旧堤防はその名残である。しかし、これらの河川は頻繁に洪水を引き起こし、流域に水害をもたらしてもいた。それでもこれらの河川と潟湖は、当時の水運に重要な役割を果たしていた。現在でこそ福田港などの良港に恵まれている遠州灘であるが、江戸時代以前は、太平洋の荒波にさらされ、港の設置が困難な場所であった。したがって、波の強い沿岸部よりも川をさかのぼった内陸の潟湖で水運物資を陸揚げした方が、安全面でも陸上運搬の効率面でも有利である。集落遺跡が潟湖や旧河道の周辺に分布していることが、このことを物語っている。

しかし、平野部で水田を開発するためには、洪水対策が不可欠である。そこで、江戸幕府から検地のために遠州灘沿岸の新田開発をするよう命を受けた伊奈忠次は、慶長９年（1604 年）から、太田川、原野谷川の治水に着手した。原野谷川を現在の袋井市長溝で締め切り、太田川は現在の磐田市稗原で締め切った後、両川を合流させて、太平洋に流れるよう、直線的な河道を新たに作ったのである。これが、現在の太田川と原野谷川の合流地点よりも下流の流路である。

したがって、遺跡と河川の関係を考える上では、旧河道との関係を考えることが不可欠である。



1 西向遺跡 2 富里遺跡 3 元島遺跡 4 鶴松遺跡 5 徳光遺跡
6 堀越ジョウヤマ遺跡 7 土橋遺跡 8 御所森古墳 9 掛之上遺跡
10 狐塚古墳 11 大門遺跡 12 大門大塚古墳 13 地蔵ヶ谷古墳群
14 井守塚古墳群 15 団子塚遺跡 16 高尾向山１遺跡
17 諸井十二所遺跡 18 貫名地古墳群Ａ群 19 貫名地Ａ１号墳
20 貫名地Ｂ２号墳 21 古新田遺跡 22 富里旧堤防 23 新堀遺跡
24 青木遺跡 25 国分寺・国府台遺跡 26 御殿・二之宮遺跡
27 連城寺古墳群 28 松林山古墳群 29 松林山古墳 30 神明山古墳群
31 八王子古墳群 32 堂山古墳群 33 堂山３号墳 34 野際遺跡
35 長江崎遺跡 36 鎌田・鍬影遺跡

第２図　西向遺跡周辺の遺跡分布と旧河川等の分布

第２節　歴史的環境

１　旧石器時代～縄文時代

太田川流域の低地で旧石器時代～縄文時代の遺跡は確認されていない。旧石器時代の遺跡は、西向遺跡の北西にある磐田原台地、縄文時代の遺跡は、当地の東側にある小笠丘陵で認められている。太田川流域の低地の下には、埋没谷があることがわかっており、現地表下 50 m～ 60 mに基盤沖積層があることが報告されている（渡辺 1995）。したがって、旧石器時代の遺跡が存在するとすれば、基盤沖積層の下にあることになる。縄文時代に太田川流域の低地で居住、資源探索等の活動の痕跡を示す遺跡があるとすれば、基盤沖積層の上になるが、遅くとも縄文時代前期の８千年前以降は、沖積作用によって、谷が急速に埋まっていったことが示されている（渡辺 1995）ことから、縄文時代の太田川流域の低地は居住には適さなかったと考えられる。遺跡があったとしても、資源探索をした際の小規模な作業場程度の遺跡が、現地表下 10 mよりも深い場所に埋没していると考えられる。

２　弥生時代

弥生時代中期になると、太田川流域の低地にも遺跡が見られるようになる。太田川の中流域には鶴松遺跡（袋井市 1982）、弥生時代の箱形木棺が出土した徳光遺跡（袋井市 2016）、堀越ジョウヤマ遺跡（袋井市 1991）などで中期～後期の集落が形成されている。原野谷川沿いでは、掛之上遺跡（袋井市 2012）で大規模な集落跡が発見され、銅鐸の破片が出土した。集落内で銅鐸を用いた祭祀が行われたことを想定させる貴重な事例である。西向遺跡の周辺では、諸井十二所遺跡（浅羽町 2002、袋井市 2007）で住居状遺構や祭祀土坑などから構成された集落跡が調査されている。太田川沿いの富里遺跡（静岡県埋蔵文化財センター 2018）でも住居状遺構や井戸などから構成される集落が確認された。同じく太田川沿いの元島遺跡（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998･2005、静岡県埋蔵文化財センター 2012）では、中期後葉の方形周溝墓が計画的に配置された状況が報告されている。

一方、丘陵部でも集落の形成が見られ、団子塚遺跡（袋井市 1992）では、住居状遺構、掘立柱建物跡などからなる集落に隣接して、方形周溝墓群が発見され、大規模な集落と墓域が形成されていたことが報告された。

このように、弥生時代中期以降になると、太田川、原野谷川流域では、丘陵と低地の両方で集落が展開するようになり、土地利用が大きく進展したことがわかる。

なお、弥生時代後期の遺跡は、台地や丘陵部では発見されているが、平野部では確認されていない。これについては、弥生時代後期に一時的な地殻変動があり、地盤が沈降したため、海が入り込んだことが判明している（藤原ほか 2015）。これが原因となって、一時的ではあるが、太田川流域の低地が利用できなくなった時期があったと考えられている。

３　古墳時代

平野部には、青木遺跡（浅羽町 1982）、新堀遺跡（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992）、元島遺跡（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998）などで前期の集落が見られる。古新田遺跡（浅羽町 2002）では、５世紀の居館跡が発見されている。谷を埋めた広場の周囲に倉庫群と考えられる掘立柱建物群、政庁跡と考えられる四面庇建物のある掘立柱建物群などが調査され、有力な豪族の居館跡があったと考えられている。この発見から、５世紀には太田川、原野谷流域を治めた権力者が存在したことがうかがえる。このことを裏付けるように、丘陵部には五ケ山Ｂ２号古墳（浅羽町 1999）、貫名地

Ａ１号墳、貫名地Ｂ２号墳（浅羽町 2002）などの前方後円墳を始め、団子塚古墳群（袋井市 1992）や神明山古墳群など、多くの古墳が築かれた。中でも松林山古墳（静岡県 1939）は、全長 107 ｍの前方後円墳で、1931 年に発掘調査が行われ、竪穴式石室から内行花文鏡や三角縁神獣鏡、琴柱形石製品・石釧・貝釧などの装飾品の他、豊富な武器が出土した。団子塚９号墳は６世紀前半の円墳で、主体部から、挂甲や鉄地銀装ねじり環頭大刀などの副葬品が出土したことが報告されている。

４　奈良時代

奈良時代の遺跡は、平野部を中心に展開するようになり、地域の拠点となる遺跡も見られるようになる。御殿・二之宮遺跡（磐田市 1981）では、大型の掘立柱建物群や大量の墨書土器などが発見され、遠江国府の有力な候補地となっている。国分寺・国府台遺跡では、遠江国分寺跡（磐田市 2019）の存在が確認されている。鎌田・鍬影遺跡（磐田市 1987）では、奈良時代の寺院跡や同時代の墨書土器、祭祀跡などが発見され、太田川下流域の拠点集落の１つであったと考えられている。

原野谷川の中流では、掛之上遺跡では、東西 70 ｍ、南北 80 ｍの範囲に、「ロ」の字形に配置された大型掘立柱建物群が発見されており、中には双倉も確認されている。原野谷川を利用した水運と古代東海道を利用した陸運といった交通の要所になっていたと考えられている。墨書土器といった文字資料は出土していないが、山名郡衙正倉の有力な候補地となっている。

新堀遺跡では、掘立柱建物群と「山名厨」と書かれた墨書土器が発見された。潟湖に面した遺跡であることから、水運の拠点に設けられた山名郡衙に関連する倉庫の可能性が考えられている。古新田遺跡では、柱穴の直径が１ｍ近くある掘立柱建物跡と、須恵器や土師器を破砕して土坑に廃棄した後、その上に土壇を築いた遺構が発見されており、特殊な性格の集落が存在したことが指摘されている。

このように、奈良時代になると、太田川流域にも国府や郡衙が置かれたと考えられ、その関連遺跡が次々に発見されている。

５　平安時代～室町時代

平安時代以降も平野部での遺跡の展開は続く。諸井十二所遺跡では、平安時代の大型掘立柱建物群と方形木組井戸が発見され、平安時代後期に成立した山名荘の南端に当たっていると考えられている。これに続いて、鎌倉時代には居館が作られたことが判明している。

元島遺跡では、12 世紀に始まり、15 世紀に最盛期を迎えた集落跡が発見されている。クリークに囲まれた微高地上に掘立柱建物跡が計画的に配置され、船着き場と思われる遺構が検出され、木製の碇や貿易陶磁器などが出土したことから、水運よる物資の集積拠点になっていたとされている。

磐田市鎌田は、平安時代に伊勢神宮の所領となり、「鎌田御厨」と呼ばれた地域で、現在でも「御厨」の地名が残っている。ここに長江崎遺跡（磐田市 1987、1996）が形成され、鎌倉時代～室町時代には太田川流域での一大集落に発展した。

第３章　発掘調査の方法と経過

第１節　現地調査

１　調査区の設定

発掘調査の範囲は、平成 21 年度に行った確認調査の結果をもとに、平成 21 年度発掘調査区の南側（太田川の下流側）に隣接して、河積拡大範囲を発掘調査の対象とした。この時点で、平成 21 年度の確認調査の結果からは、西向遺跡の南端が不明確であったため、発掘調査に並行して西向遺跡の南端を決めるための確認調査を行うこととし、平成 27 年度に静岡県教育委員会文化財保護課が実施した。

調査区は、平成 21 年度の調査区を１区として、平成 26 年度以降の調査区に２区以降の番号を割り当てることとした。そして、年度単位で調査を終了できる範囲を単年度の調査面積として、２区～５区を設定した（第３図、第４図）。

２　調査の実施方法

各年度の調査面積から、平成 26 年度～平成 28 年度は調査担当職員を２名とし、現地調査最終年度の平成 29 年度は調査担当職員を１名とした。

調査担当職員は静岡県埋蔵文化財センターの職員とし、担当職員は調査全体の計画と掘削等業務と遺跡測量等業務の委託業者等との調整、現地調査での判断、遺跡の評価を行い、掘削等業務と基礎整理作業、仮設工などは、掘削等業務として民間に委託した。水準点測量や基準点測量、空中写真測量、遺構個別測量、景観写真撮影等は、測量等業務として民間に委託して実施した。委託業者名は例言に記した。

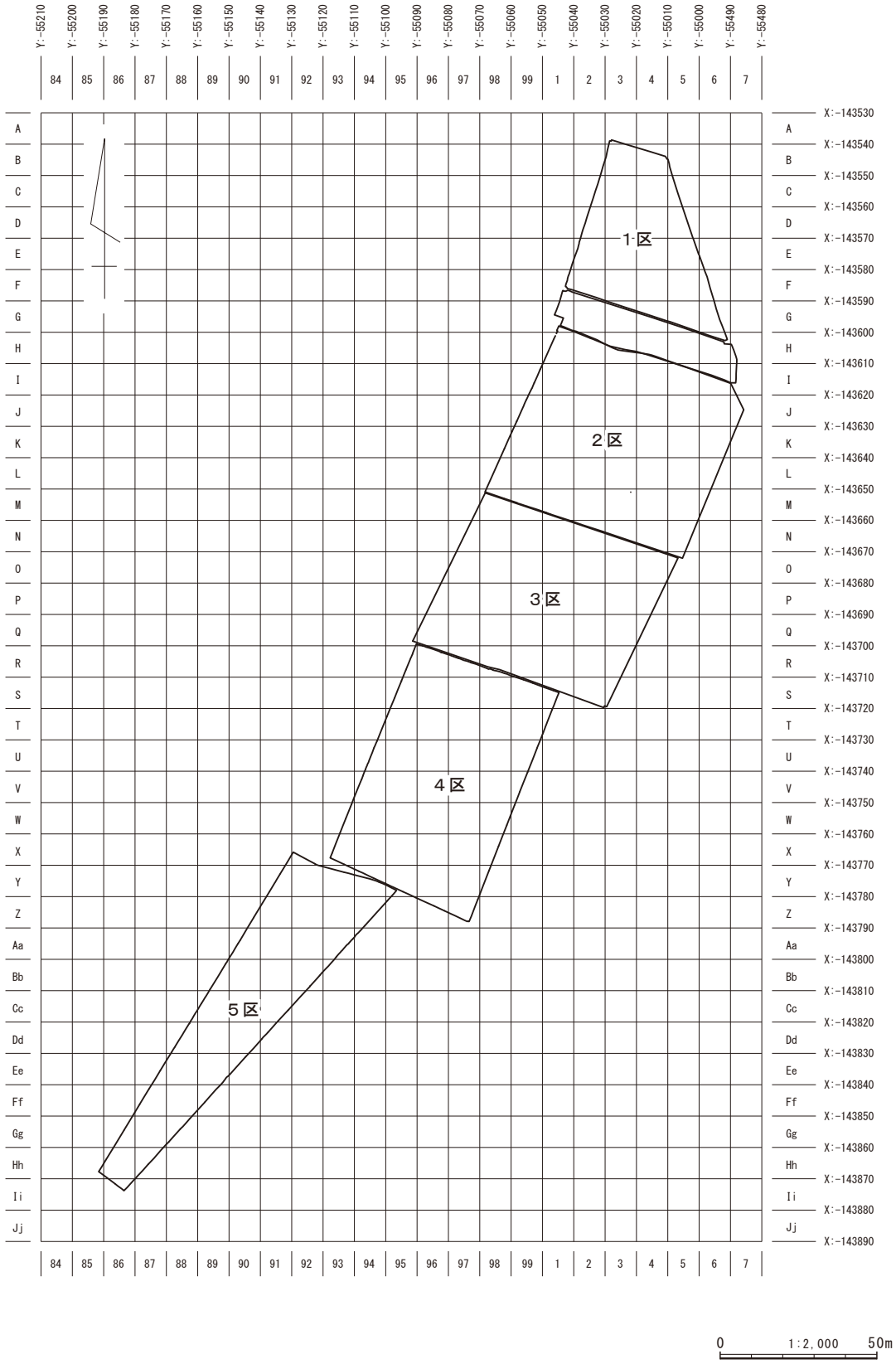
調査は、１区の発掘調査と平成 21 年度の確認調査の結果から、調査面は２面あり、１面目が中世、２面目が古代以前と想定して計画をたてた。

３　平成 26 年度の調査経過

８月６日、表土除去を開始。９月 12 日、包含層掘削を開始。10 月６日、台風 18 号による大雨で太田川が増水、調査区全域が完全に水没。水位が下がった 10 月９日から調査区内の排水を開始。10 月 16 日になってようやく水が抜けたが、調査区内に大量の土砂が流れ込み、乾燥するまで調査区内への立ち入りが不可能な状態。10 月 20 日から流入した土砂の除去を開始。10 月 29 日から土砂の除去と並行し

西向遺跡調査歴
２次調査
１区　現地調査平成 21 年度
　　資料整理平成 22 年度
３次調査
２区　現地調査平成 26 年度
３区　現地調査平成 27 年度
４区　現地調査平成 28 年度
５区　現地調査平成 29 年度
２区～５区
資料整理平成 30 年度～令和３年度

第３図　調査区の設定と調査年度



第４図　調査区とグリッド配置図

て包含層掘削を再開。土砂の除去作業は 11 月 14 日までかかった。12 月８日、包含層掘削終了。12 月９日、遺構検出を開始。井戸跡や掘立柱建物跡などを検出。12 月 12 日、遺構掘削を開始。平成 27 年２月３日、高所作業車を使用した全体写真撮影。２月４日、ラジコンヘリによる景観写真撮影と写真測量。２月６日、２面目の包含層掘削開始。２月９日には、２面目調査面の遺構検出を開始。掘立柱建物群があることを把握。日に日に掘立柱建物跡の柱穴が増えていき、台風被害で調査工程が遅れたこともあり、年度内の調査終了が危ぶまれる。柱穴の検出、掘削、断面写真撮影、断面実測、完掘、完掘写真撮影、遺構個別図作成の流れ作業を連日続け、３月４日の景観写真撮影、全体写真測量に漕ぎ着ける。３月８日に現地説明会を実施。新聞、テレビで報道される。３月 25 日、現地事務所を撤収し、現地調査を終了。

４　平成 27 年度の調査経過

７月 29 日、表土除去を開始。８月 31 日から包含層掘削に入る。９月８日、大雨により太田川増水、調査区が水没。９月 10 日、水位が下がったため、調査区内の排水を開始。9 月 14 日、調査を再開。９月 16 日、表土除去終了、包含層掘削を開始。10 月 20 日、被熱遺構（SX1001）を確認。12 月２日、包含層掘削終了。遺構検出開始。井戸跡や土坑などを検出。12 月８日、遺構掘削を開始。平成 28 年１月 20 日、高所作業車を使用した全体写真撮影。１月 21 日、ラジコンヘリによる景観写真撮影、空中写真測量。１月 25 日、次の包含層掘削を開始。２月９日、包含層掘削を終了、遺構検出を開始。方形周溝墓と住居状遺構を確認。２月 12 日、遺構掘削を開始。２月 26 日、高所作業車を使用した全体写真撮影、２月 27 日、ラジコンヘリによる景観写真撮影、空中写真測量。３月５日、現地説明を会を実施。３月 24 日、現地事務所を撤収し、現地調査を終了。

５　平成 28 年度の調査経過

８月９日、表土除去を開始。９月６日、包含層掘削を開始。11 月４日、包含層掘削を終了、遺構検出を開始。11 月 17 日、遺構掘削開始。11 月 30 日、ラジコンヘリによる景観写真撮影、写真測量。
12 月１日、次の遺構検出面に向けて包含層掘削を開始。12 月 16 日、遺構検出を実施。井戸跡や土師器の集中域を検出。１月 11 日、遺構掘削を開始。井戸跡には祭祀に伴うと思われる遺物が入っていたため、慎重に掘り下げ、記録をとる。土師器の集中域は高坏が多く、ミニチュア土器も含まれていることから祭祀遺構の可能性が高いと判断。慎重に掘削し、全容をはっきりさせる。祭祀跡の調査成果を公表するため、遺物が出土した状態で現地説明会を実施することとし、２月８日、高所作業車を使用した全体写真撮影。ラジコンヘリによる景観写真撮影、写真測量。２月 12 日に現地説明会を開催。新聞、テレビ局が取材に来る。その後に遺物を取り上げ、３月 17 日に調査を終了。

６　平成 29 年度の調査経過

９月４日に表土除去を開始。９月 21 日、表土除去終了、包含層掘削開始。10 月 23 日、台風による太田川の増水により、調査区水没。10 月 25 日調査区内の排水終了。10 月 26 日、流入した泥を除去。調査も再開。11 月 17 日、谷状の落ち込みを検出。旧太田川か旧原野谷川、あるいはそれらの支流に接続する入り江の可能性があったため、落ち込み部分の周辺でも慎重に遺構検出を実施。その結果、調査区内で完結する落ち込みと判断したが、埋土に多量の山茶碗などが含まれていること、11 月 29 日には谷状地形内に杭列があることを確認。谷状の落ち込みの調査に重点を置くこととする。１月 12 日、ラジコンヘリによる景観写真撮影、写真測量。１月 15 日、高所作業車を使用した全体写真撮影。１月６日、杭列の解体調査。２月 14 日調査終了。

７　掘削等作業の方法

表土はバックホーを使用して除去した。除去した土はクローラーダンプで調査区隣接地に搬出し、仮置きした。調査区の壁面は、砂を含んだ軟弱なシルト層であったため、原則として 45 度の角度を付けて安全勾配を確保するとともに、崩落を防止するために、ブルーシートで保護した。表土より下の掘削は、掘削深度が１ｍ弱であったため、垂直掘削として、掘削防護柵を設置して壁面崩落を防止した。

遺物包含層の掘削、遺構検出、遺構掘削は人力により行い、掘削した土はベルトコンベアーで調査区隣接地に運搬、重機で移動後、成形し、仮置きとした。

包含層掘削は、土層から掘削深度を決め、設定した深度で掘削を止めるよう、慎重に行った。

遺構検出は、作業員が横一列に整列して遺構検出面をジョレンで削り、削った直後にセンター職員が遺構確認を行った。

試掘調査と平成 21 年度の調査結果から、調査面は２面あり、１面目は平安時代以降の時代、その下の２面目は奈良時代以前の時代と想定して調査を行った。実際の調査では、概ねこの想定通りではあったが、１面目で検出した遺構の中で、最終的に奈良時代以前の遺構と判断したものや、２面目の調査面で、平安時代以降と判断できる遺構も存在した。後者は１面目で捉えきれなかった遺構の残存である。２面目の調査面では、奈良時代、古墳時代、弥生時代の遺構を同一面で検出した。詳細な検出レベル差により、遺構の時代分けができるか検討したが、不可能であったため、２面目の調査面で検出した遺構は、出土遺物や周辺遺構との関連などから各遺構の所属時期を判断することとした。なお、表土除去の途中で、平安時代の被熱遺構の存在を把握したことから、１面目の調査面の上に、平安時代以降の調査面がもう１面存在した可能性があるが、その調査面の把握は極めて困難であった。そこで、１面目の調査面では、平安時代以降の遺構を把握することに努めた。

遺構掘削は、溝、自然流路については適宜土層観察用の土層帯を残して掘削した。土坑については、半裁して土層を確認、記録後、全掘した。掘立柱建物跡の柱穴の可能性が高い遺構の場合は、土層堆積の記録を直交する２方向でとることとしたため、遺構を 1/4 分割し、対角になる 1/4 区画を掘削し、２方向の断面図を作成し、写真撮影も２方向から行った。

調査区は川に隣接した低地であるため、雨水が溜まりやすく、多量ではないが、湧水もあったため、調査区周縁に排水溝を掘り、調査区端に設置した集水桝に水を集め、ポンプで太田川に排水した。

包含層から出土した遺物は､原則として層ごと､グリッド単位で取り上げた。包含層からの出土であっても、遺物が密集して出土した場合は、遺構の可能性があるため、掘り込み等の遺構の有無を慎重に確認したうえで、掘り込み等が確認できた場合は、遺構として調査し、掘り込み等が確認できなかった場合は、出土状況を実測した後、遺物のまとまりごとに番号を付けて取り上げた。

８　記録作業の方法

平面直角座標を使用した記録用グリッドは、平成 21 年度調査の時に設定したグリッドを使用した。Ｘ＝-143530，Ｙ＝-55060 の地点を原点として、ここの座標を（Ａ，１）とした。そして、Ｘ軸とＹ軸の交点には、次のルールで座標を示す記号を付けた。Ｘ軸上では南方向に 10 ｍごとにアルファベット順にＡ、Ｂ、Ｃ･･･の記号を付けた。Ｚよりも南では、アルファベットの大文字と小文字を組み合わせて、Aa、Bb、Cc･･･という記号を付けた。

Ｙ軸上では、東方向に 10 ｍごとに１、２、３･･･の順に数字を付け、原点よりも西方向では、99、98、97･･･の順に数字を付けた。調査区内では、Ｘ軸とＹ軸の交点に木杭を打設し、４級水準点測量と同等の精度で、全打設杭に打った釘の頂部の標高を求めた。

測量は、調査の過程で各遺構の平面図、断面図、遺物出土状況等の実測を行い、全遺構の掘削終了後にラジコンヘリコプターを使用して６×4.5判のリバーサルフィルムと白黒フィルムを使用して、全体の写真測量を行った。

写真による記録は、記録保存用の写真は、６×７判のリバーサルフィルムと白黒フィルムを使用し、特に重要な写真は、４×５判のリバーサルフィルムと白黒フィルムを使用した。写真撮影の際は、必ず三脚を使用し、シャッターを押す際はレリーズを使用して、手振れを防止した。また、必要に応じて足場を組んで、その上から撮影した。さらに、調査終了後の全体写真の撮影では、高所作業車を設置し、４×５判カメラと６×７判カメラを使用して写真を撮影した。合わせて、測量等委託の中でラジコンヘリコプターを使用して、６×4.5判のフィルムを装填したカメラを使用して景観写真を撮影した。

９　基礎整理作業

遺物は、出土位置を記録したラベルを付け、土器、石器、木製品、金属製品、自然遺物といった種別ごとに通し番号を付けて取り上げた。そして、洗浄後、土器、石器には、遺跡の略号（TNM）に調査区番号と遺物取上番号を注記した。木製品と金属製品、自然遺物には注記をせず、出土位置を記録したラベルに遺跡の略号と遺物番号を記入した。これと並行して、木製品を水漬けのままシーラーパックして応急保存処理を施すとともに、写真整理（フィルム収納と写真台帳作成）と図面整理（図面台帳の作成）を行った。

10　現地説明会の実施

各年度の調査成果の概要を公表するため、現地説明会を実施するとともに、調査成果の概要を報道提供した。現地説明会当日は100人を超える参加があり、新聞、テレビ局による取材もあった。現地説明会の実施日は次のとおりである

実施日：平成27年３月８日、平成28年３月５日、平成29年２月12日

第２節　資料調査

１　資料調査の実施方法

資料調査は、平成30年度～令和３年度に実施した。調査担当職員は、当センター職員を１名割り当て、全体の計画と資料整理・保存処理を委託した業者との調整、監督業務、資料調査における判断、成果の評価、報告書原稿の作成等を行った。遺物の実測、トレース、版組、遺構図面のトレース、版組、遺物写真撮影と写真の版組等の作業、木製遺物、金属製遺物の保存処理は、整理作業・保存処理業務として民間に委託した。

木製遺物の樹種同定、放射性炭素年代測定、動物骨の種の同定は、専門業者に委託した。

２　資料調査の経過

（１）平成29年度

現地調査と並行して資料調査を開始した。平成26年度～平成28年度までに現地で作成した図面をパソコン上で編集して遺構図面を作成し、描画ソフトを使用してトレースを行った。これと並行して土器の接合と復元を開始した。

（２）平成30年度

遺構図面の作成、土器の接合と復元を継続した。この年から、木製品と金属製品の保存処理を開始した。木製品については、実測と写真撮影を行い、樹種同定用のサンプルを採取した後、安定化処理といった

保存処理を行った。金属製品については、処理前記録の作成、写真撮影を行った後、Ｘ線写真撮影、クリーニング、修復の順で実施し、最終的に処理後の記録を作成し、保存処理を終了した。

（３）平成 31 年度（令和元年度）

遺構図面の作成を継続した。木製品と金属製品の保存処理もこの年度で終了した。土器の接合と復元も終了し、土器と石器、石製品の実測を開始し、実測に続いてパソコンの描画ソフトを使用したトレースを行った。また、当センターの写真スタジオを使用して、土器、石器、石製品の写真撮影を開始した。

（４）令和２年度

遺構図面の作成を継続し、この年度で報告書に掲載する遺構図面は完成させた。土器と石器、石製品については、実測とトレース、写真撮影を継続し、この年度ですべて完成させた。また、木製品の樹種同定、炭化物の放射性炭素年代測定、動物骨の種同定を専門業者に委託して実施した。

（５）令和３年度

遺物実測図、遺物写真、遺構写真の版組を行うとともに、報告書の原稿を作成し、報告書の印刷を委託し、報告書を刊行した。

写真１　掘立柱建物跡の調査状況（２区）

写真２　古墳時代遺物集中箇所の調査状況（４区）

写真３　遺物実測の状況

写真４　遺構図トレースの状況

第４章　調査の成果

第１節　土層と地形

旧河道を復元すると、西向遺跡は、旧太田川と旧原野谷川に挟まれた場所（第２図）にあることから、両方の川が形成した自然堤防上にあると考えられる。発掘調査で当地の微地形を復元すると、微高地と低地から構成されていることが明らかとなった（第５図）。

地形は、全体的に北から南に向かって、緩やかに下っており、これは現在の地形でも同様である。遺構検出面の標高を見ると、１面目の調査面の場合、２区の微高地上で標高 1.2 m程、３区の微高地上では標高１m程、４区の微高地上では標高 0.8 m程、５区に至ると標高 0.4 m程になる。低地部分や遺構の底面では、標高０m程になる箇所もある。

平成 26 年度、２区の調査時、産業技術総合研究所の藤原治氏に西向遺跡の土層の解釈について、現地指導をいただいた。その際の御教示によると、西向遺跡に堆積している土層は河川堆積物とのことである。また、西向遺跡、富里遺跡、元島遺跡等がある太田川河口付近は、過去 2000 年間で約２m沈降していることがわかっている（藤原ほか 2015）ため、弥生時代では２mほど、古墳時代後期では 1.5 m、平安時代終り頃では 1.0 mほど、現在よりも標高が高かったと考えられるとのことである。

調査範囲が２区～５区で 300 m近くあり、遺跡内の堆積物は河川堆積物が主体であるため、場所によって堆積している土層が異なっている。したがって、標準土層を設定して標準的な土層番号を付けることができなかった。そこで、鍵になる土層を次の通り、第５図、第６図に明示した。

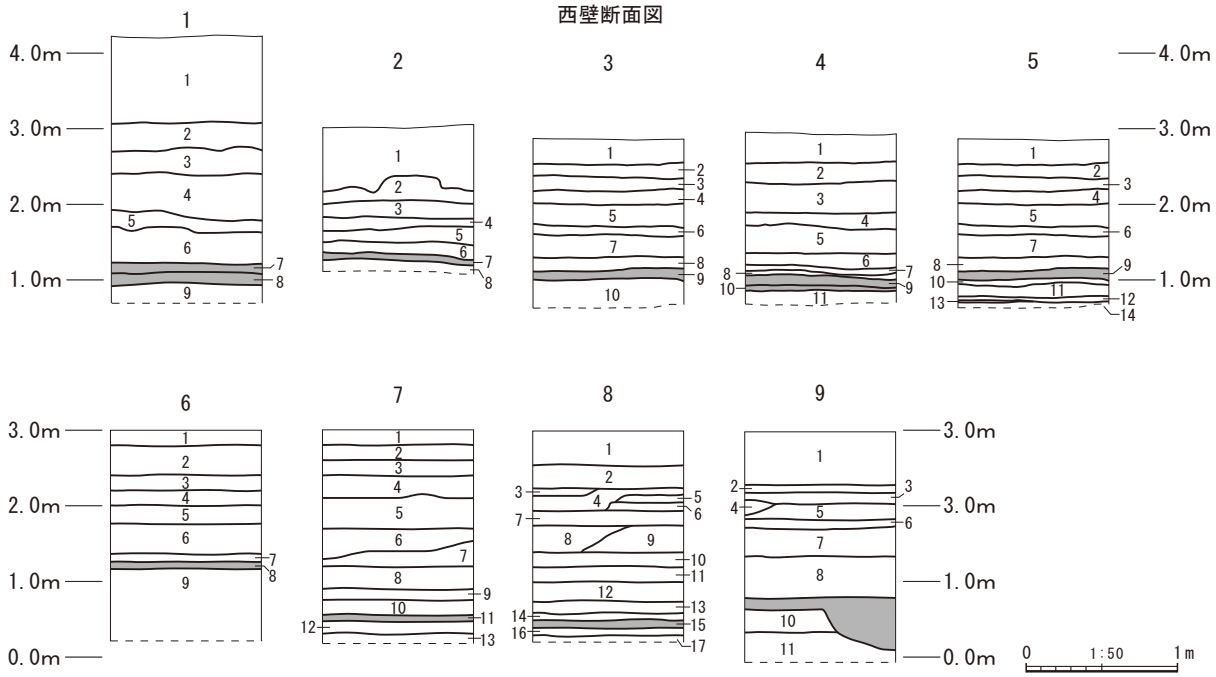
・基盤層は、土層注記に「地山」と明示した。

・１面目の調査面と２面目の調査面を分ける黒色系の色調を示す土層は、トーンを掛けて明示した。

地山は粘質のある灰色土、あるいは灰白色土で、未分解の植物遺体を含んでいる。地山の上に堆積した黒色系の色調を示す土層も、未分解の植物遺体を多く含んでいる。これらの地層の形成時期は明らかでないが、少なくとも、太田川下流で確認された貝化石や海砂を含んだ海成堆積層（藤原ほか 2015）ではないことから、砂堤列１（第２図）の形成によって当地が内湾から潟湖に移行した後に堆積したと考えるのが妥当であろう。

第５図、第６図にトーンで示した土層の上面が１面目の調査面に当たり、この層の下が２面目の調査面に当たる。この土層は、微高地と低地の両方に堆積していることから、低地でも水の流れで流出することはなく、これらの土層の堆積前後は、当地は比較的安定した土地であったと考えられ、その時期に西向遺跡が形成されたことになる。ただ、この層は厚さが 20cm ～ 30cm 程度であるため、その層の上下で遺構検出面が分かれるとはいえ、先に記したように、調査面によって、検出した遺構の時期が明確に分かれる訳ではない。

なお、太田川流域の発掘調査や河川改修工事現場では、地層中に津波に伴う堆積物が発見されている（藤原ほか 2008、Gallet et al2016、産業技術総合研究所ほか 2019 など）。この発見は、津波対策への活用に大きな期待がかかっている。平成 26 年度の藤原治氏による現地指導では、２区の土層断面を観察した限りでは、津波堆積物は認められないとのことであった。



トーンは遺物包含層　この層の上面が１面目調査面　下面が２面目調査面

－1－
1. 褐灰色土 7.5YR 4/2
2. オリーブ黒色粘土 7.5Y 3/2
3. 灰色粘土 10Y 4/1
4. 灰色粘土 10Y 4/1
5. 灰色土 10Y 5/1
6. 灰色粘土 10Y 4/1
7. オリーブ黒色粘土 7.5Y 3/1
8. 灰色粘土 5Y 4/1
9. 灰色粘土（地山）7.5Y 4/1

－2－
1. オリーブ灰色土（砂含む。鉄分で橙褐色に染まった部分多い）
2. 灰色土（砂含む。鉄分で橙褐色に染まった部分多い）
3. 灰色土（砂少量含む。鉄分で橙褐色に染まった部分少しあり）
4. 灰色土（砂含む）
5. 灰色土（砂含む）
6. オリーブ灰色土（砂ほとんどなし）
7. 黒灰色土 2.5Y 2/1
8. 灰白色土（地山）

－3－
1. オリーブ灰色土（砂多く含む。鉄分で橙褐色に染まった部分多い）
2. 灰色土（砂多く含む。鉄分で橙褐色に染まった少しあり）
3. 灰色土（砂少量含む。鉄分で橙褐色に染まった部分僅かにあり）
4. 灰色土（砂含む。鉄分で橙褐色に染まった部分僅かにあり）
5. 灰色土（砂多く含む）
6. オリーブ灰色土（砂ほとんどなし）
7. 灰白色土（砂ほとんどなし）
8. 淡黒灰色土（遺構埋土）
9. 黒褐色土（遺構埋土）
10. 灰白色土（地山）

－4－
1. 暗灰黄色～灰オリーブ砂 2.5Y 4/2～5Y 4/2
2. 灰オリーブ砂 5Y 4/2
3. 暗オリーブ灰色粗砂 2.5GY 3/1
4. 暗オリーブ灰色砂 5Y 4/3
5. 灰色粘性シルト 7.5Y 4/1
6. オリーブ黒色粘性シルト 5Y 3/1～7.5Y 3/1（包含層 1）
7. 黒褐色～オリーブ黒色粘性シルト 5Y 3/1～7.5Y 3/1（SD1031・SR1032）
8. 灰色粘土 5Y 4/1～7.5Y 4/1
9. 黒褐色粘土 2.5Y 3/1
10. 黒色粘土 2.5Y 2/1
11. 灰色粘土（地山）5Y 4/1

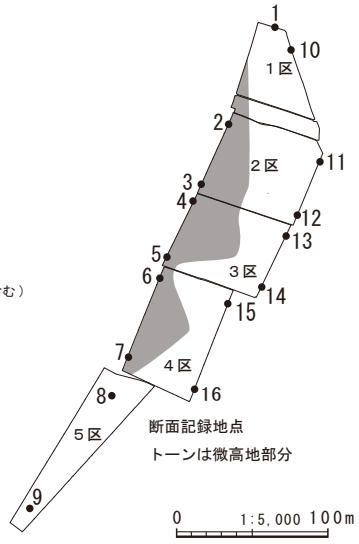
－5－
1. 灰色砂 5Y 4/1（ラミナ・鉄分多く含む）
2. 灰オリーブ砂 5Y 4/2（ラミナ含む）
3. 暗オリーブ灰色粗砂 2.5GY 3/1（ラミナ含む。4 層より黒色味強い）
4. 暗オリーブ灰色粗砂 2.5GY 3/1（ラミナ含む）
5. 灰オリーブ砂 5Y 4/2（鉄分含む）
6. 暗オリーブ灰色砂 5Y 4/3
7. 灰色粘性シルト 7.5Y 4/1
8. オリーブ黒色粘性シルト 5Y 3/1～7.5Y 3/1（包含層 1）
9. 黒褐色～オリーブ黒色粘性シルト 5Y 3/1～2.5Y 3/1(SR1032)
10. 灰色粘土 5Y 4/1～7.5Y 4/1（地山）
11. 黒褐色粘土 2.5Y 3/1（鉄分少量含む。地山）

－6－
1. 褐色土
2. 褐色土（粘土ブロック多く含む）
3. 明青灰色粘土（斑鉄含む）
4. 暗青灰色粘土（細砂含む）
5. 暗灰色粘土（管状斑鉄含む）
6. 暗灰色粘土（管状斑鉄含む）
7. 暗灰色粘土（紫色味帯びる）
8. 暗灰色粘土（強く紫色味帯びる）
9. 灰色粘土（褐色粒子含む。地山）

－7－
1. 褐色土
2. 褐色土（粘土ブロック含む）
3. 明青灰色粘土（管状斑鉄含む）
4. 青灰色粘土（細砂含む）
5. 青灰色粘土
6. 明青灰色粘土
7. 明青灰色粘土（下位に細砂帯状に含む）
8. 青灰色粘土（緑色粒子含む）
9. 暗灰色粘土（やや紫色味帯びる。包含層）
10. 暗灰色粘土（強く紫色味帯びる。包含層）
11. 黒色土
12. 灰白色粘土（黒色・褐色ブロック含む）
13. 灰白色粘土（地山）

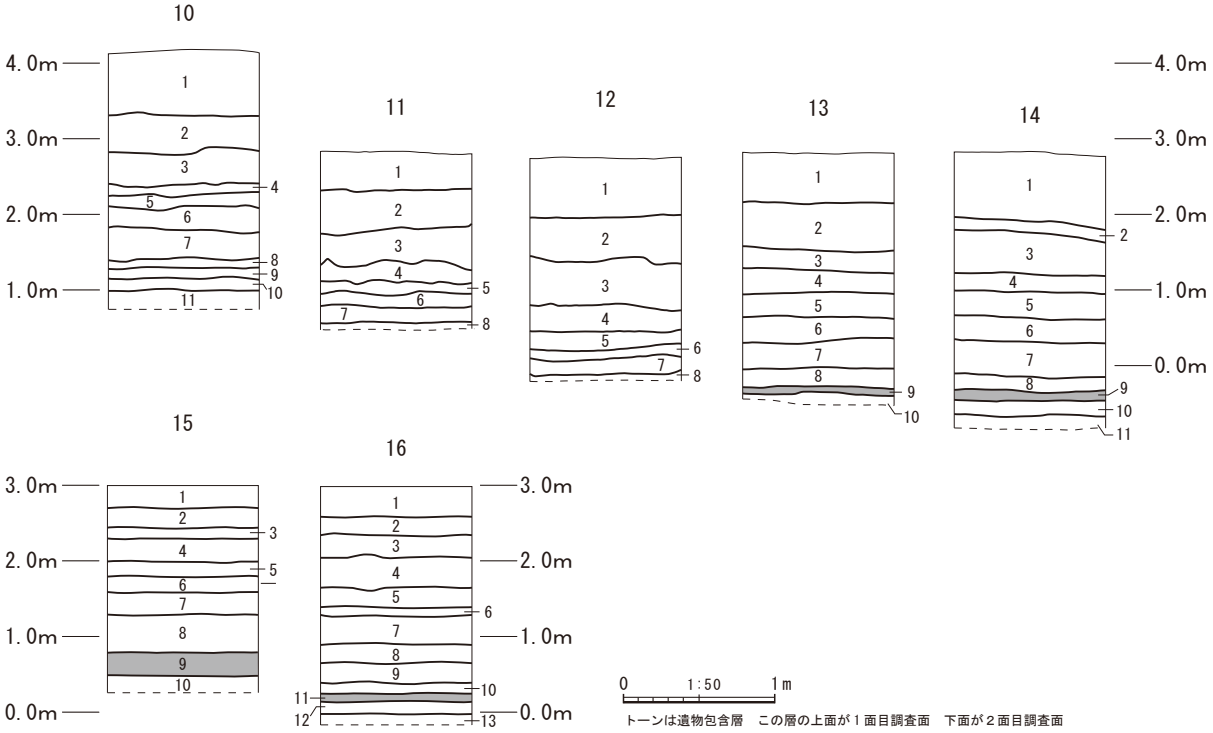
－8－
1. 褐色土
2. 青灰色粘土 5Y 5/1（管状斑鉄含む）
3. 暗青灰色粘土 7.5Y 4/1（細砂含む）
4. 暗青灰色砂質土 7.5Y 4/1
5. 暗青灰色粘土 10Y 4/1
6. 暗青灰色粘土 7.5Y 4/2
7. 青灰色粘土 7.5Y 4/1（管状斑鉄含む）
8. 明青灰色粘土 7.5Y 5/1
9. 青灰色粘土 7.5Y 4/1（細砂含む）
10. 暗灰色粘土 10Y 4/1（細砂・褐色粒子含む）
11. 暗灰色粘土 10Y 4/1（細砂含む）
12. 暗灰色粘土 5Y 5/1（弱く紫色味帯びる）
13. 暗灰色粘土 5Y 4/1（強く紫色味帯びる）
14. 黒色粘土 10YR 4/1（白色ブロック含む）
15. 濃茶褐色粘土 2.5Y 4/1（褐色粒子・黒色ブロック含む）
16. 濃茶褐色粘土 10YR 4/1
17. 灰白色粘土（地山）

－9－
1. 褐色土
2. 青灰色粘土 5Y 5/1（斑鉄含む）
3. 青灰色粘土 5Y 5/1（斑鉄多く含む）
4. 暗青灰色粘土 7.5Y 4/1（斑鉄含む）
5. 暗青灰色砂質土 10Y 4/1（粗砂含む）
6. 暗青灰色砂質土 5GY 4/1（細砂含む）
7. 青灰色粘土 7.5Y 4/1（緑色粒子含む）
8. 青灰色粘土 10Y 5/1（褐色粒子多く含む）
9. 暗灰色粘土 5Y 5/1（弱く紫色味帯びる。包含層）
10. 灰白色粘土 5Y 4/3（褐色粒子含む。覆土）
11. 灰色粘土 7.5Y 4/1（緑色粒子少量含む。地山）



第５図　土層断面図１

東壁断面図



-10-
1. 褐灰色土 7.5YR 4/2
2. 暗オリーブ灰色粘土 2.5GY 3/1
3. 灰色粘土 10Y 4/1
4. 灰色粘土 10Y 4/1
5. オリーブ黒色粘土 2.5GY 4/1
6. 灰色粘土 10Y 5/1
7. オリーブ黒色粘土 10Y 3/2
8. 灰色粘土 10Y 4/1
9. オリーブ黒色粘土 7.5Y 3/1
10. 灰色粘土（地山）5Y 4/1
11. 灰色粘土（地山）7.5Y 4/1

-11-
1. 灰色砂 N 6/（ラミナ（河川堆積物）含む。鉄分で 7.5YR 7/8 黄橙色に染まった部分あり）
2. 灰色土 N 6/（砂少量含む）
3. 黄灰色土 2.5Y 6/2（砂少量含む。鉄分の凝集多い）
4. 灰色土 10Y 6/1（砂少量含む。鉄分で 7.5YR 6/6 橙色に染まった部分多い）
5. 灰色土 N 6/（砂なし。鉄分で 7.5YR 6/6 橙色に染まった部分あり）
6. 灰白色粘質土 N 7/（砂なし。鉄分少量含む）
7. 灰色粘質土 N 5/（砂なし。鉄分の凝集少しあり）
8. 灰色粘質土 N 4/（砂・鉄分なし）

-12-
1. 灰色砂 N 6/（ラミナ（河川堆積物）含む。鉄分で 7.5YR 7/8 黄橙色に染まった部分あり）
2. 灰色土 N 6/（砂少量含む）
3. 黄灰色土 2.5Y 6/2（砂少量含む。鉄分の凝集多い）
4. 灰色土 N 6/（砂僅かに含む。鉄分の凝集多い）
5. 灰色土 N 6/（砂なし。鉄分の凝集少しあり）
6. 灰白土 7.5Y 6/1（砂なし。鉄分の凝集少しあり）
7. 灰色粘質土 N 6/（砂なし。鉄分の凝集少しあり）
8. 灰白色粘質土 N 7/（砂・鉄分なし）

-13-
1. 灰色粗砂 5Y 4/1（ラミナ含む。河川堆積）
2. 灰色砂 10Y 4/1（ラミナ少量含む）
3. 灰色粘性シルト 10Y 4/1（ラミナ少量含む。粗砂なし）
4. 灰色粘性シルト 7.5Y 4/1（粗砂なし）
5. 灰色粘性シルト 7.5Y 4/1 ～ 10Y 4/1（粗砂やや含む）
6. 灰色粘性シルト 10Y 4/1（粗砂やや含む）
7. オリーブ黒色粘性シルト 5Y 3/2
8. オリーブ黒色粘性シルト 5Y 3/1（1 面包含層）
9. 黒色～オリーブ黒色粘性シルト 5Y 2/1 ～ 5Y 2/2（遺物包含層）
10. 灰色粘性シルト（地山）5Y 4/1

-14-
1. 灰色砂 5Y 4/1（ラミナ・鉄分多く含む。河川堆積）
2. 灰色粗砂 2.5Y 4/1（ラミナ・鉄分多く含む。河川堆積）
3. 灰色粘性シルト 10Y 4/1（砂多く含む。鉄分やや多く含む）
4. 灰色粘性シルト 7.5Y 4/1（砂多く含む。鉄分やや多く含む）
5. 灰色粘性シルト 7.5Y 4/1 ～ 10Y 4/1（砂多く含む）
6. 灰色粘性シルト 10Y 4/1（砂多く含む）
7. オリーブ黒色粘性シルト 5Y 3/2
8. オリーブ黒色粘性シルト 5Y 3/1（1 面包含層）
9. 黒色～オリーブ黒色粘性シルト 5Y 2/1 ～ 5Y 2/2（2 面包含層）
10. 灰色粘性シルト 5Y 4/1 ～ 7.5Y 4/1（地山）
11. 灰色粘土 5Y 4/1 ～ 7.5Y 4/1（地山）

-15-
1. 褐色土
2. 褐色土（粘土ブロック含む）
3. 暗青灰色粘土（細砂含む）
4. 暗青灰色粘土
5. 青灰色粘土（細砂含む）
6. 暗青灰色粘土
7. 明青灰色粘土
8. 青灰色粘土
9. 暗灰色粘土（紫色味帯びる）
10. 濃茶褐色粘土

-16-
1. 褐色土
2. 暗青灰色粘土（細砂含む）
3. 明青灰色粘土
4. 明青灰色粘土（細砂含む）
5. 暗青灰色粘土（細砂含む）
6. 明青灰色粘土（細砂含む）
7. 暗青灰色粘土（細砂含む）
8. 明青灰色粘土
9. 暗灰色粘土（やや紫色味帯びる。山茶碗出土）
10. 暗灰色粘土（強く紫色味帯びる。包含層）
11. 黒色土
12. 灰白色粘土（地山）
13. 灰白色粘土（地山）

第６図　土層断面図２

第２節　各時期の遺構の概要

１　本書で用いる時期区分

時期は時代ごとに次のとおり区分した。

平安時代後期～鎌倉時代　奈良時代～平安時代前期　古墳時代　弥生時代

遺物の編年観については、次の文献を参考にした。

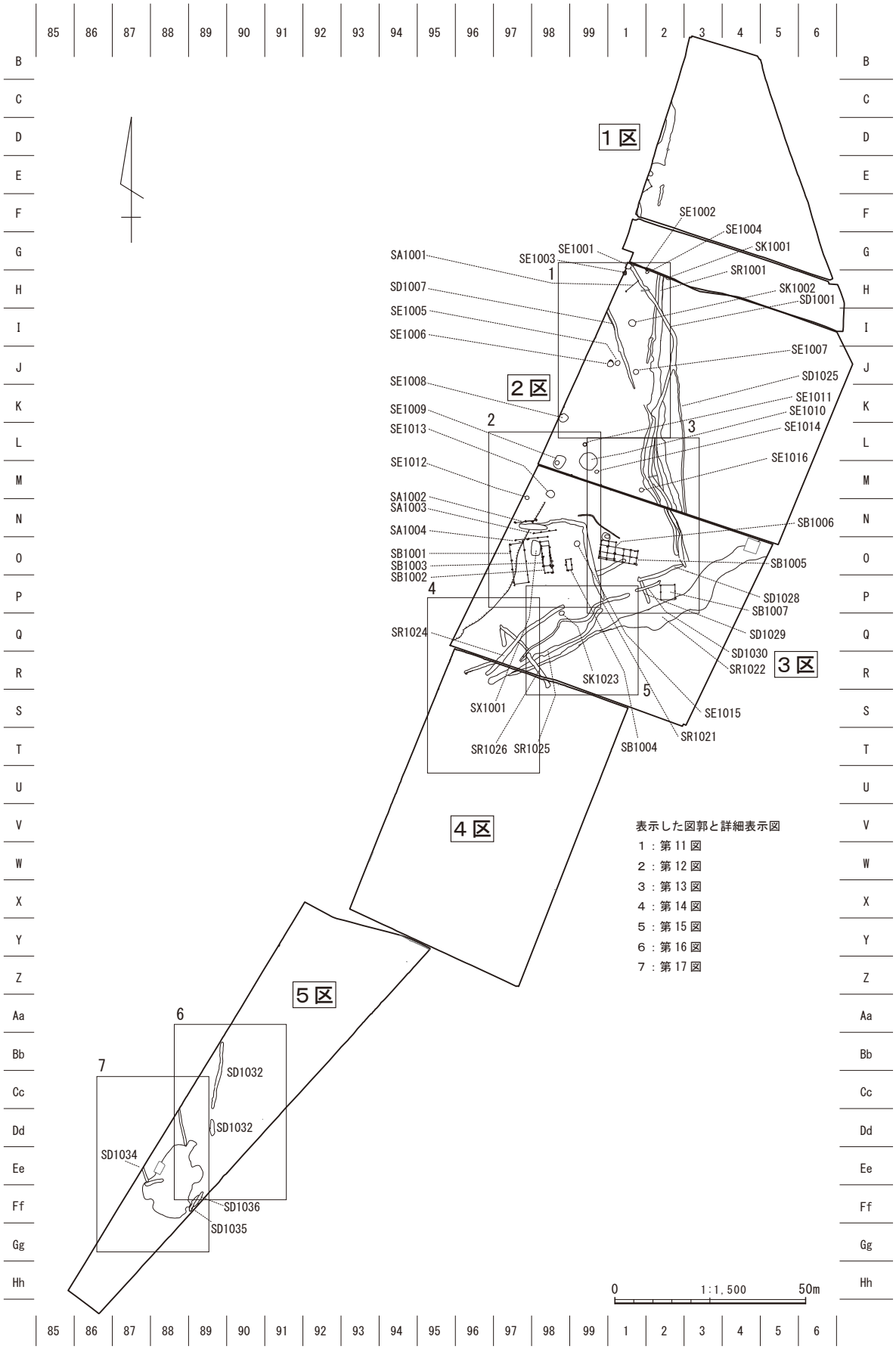
須恵器：遠江編年（鈴木 2001、2004）、灰釉陶器：猿投編年（山下 1995）、山茶碗：渥美・湖西編年、清ヶ谷編年（松井 1989）、中世の鍋：北村和宏氏による編年（北村 2001）

これらの編年のおよその対応関係は次のとおりである（第１表）

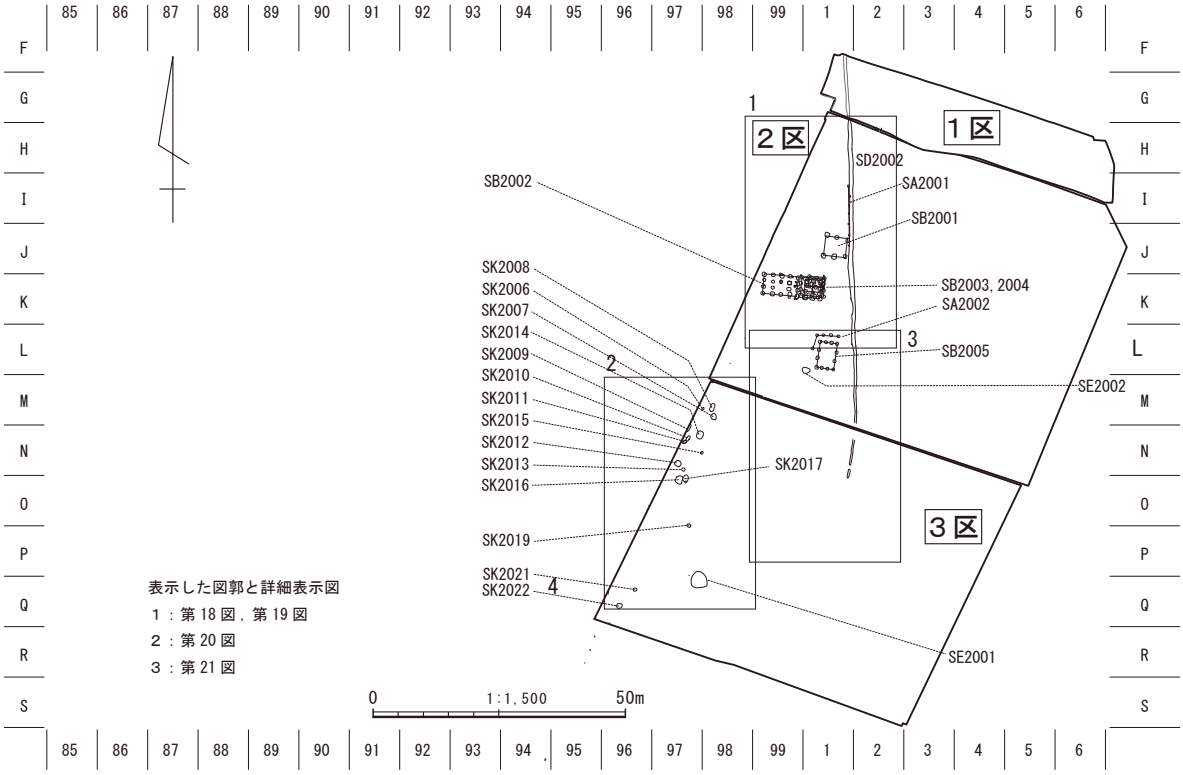
第１表　本書で使用する遺物編年のおよその対応表

世紀	西暦	須恵器	灰釉陶器	中世鍋
		鈴木 2004	山下 1995	北村 1995
６世紀		Ⅰ期末		
		Ⅱ期		
	550	Ⅲ期前葉		
		Ⅲ期中葉		
	600	Ⅲ期後葉		
７世紀		Ⅲ期末		
	650	Ⅳ期前半		
		Ⅳ期後半		
	700	Ⅳ期末		
８世紀		Ⅴ期前半		
	750			
		Ⅴ期後半		第Ⅰ段階 第１小期
				第Ⅰ段階 第２小期
		Ⅴ期末		
	800			第Ⅰ段階 第３小期
９世紀			黒笹 14 窯式	第Ⅰ段階 第４小期
	850			
			黒笹 90 窯式	第Ⅰ段階 第５小期
	900		折戸 53 窯式	

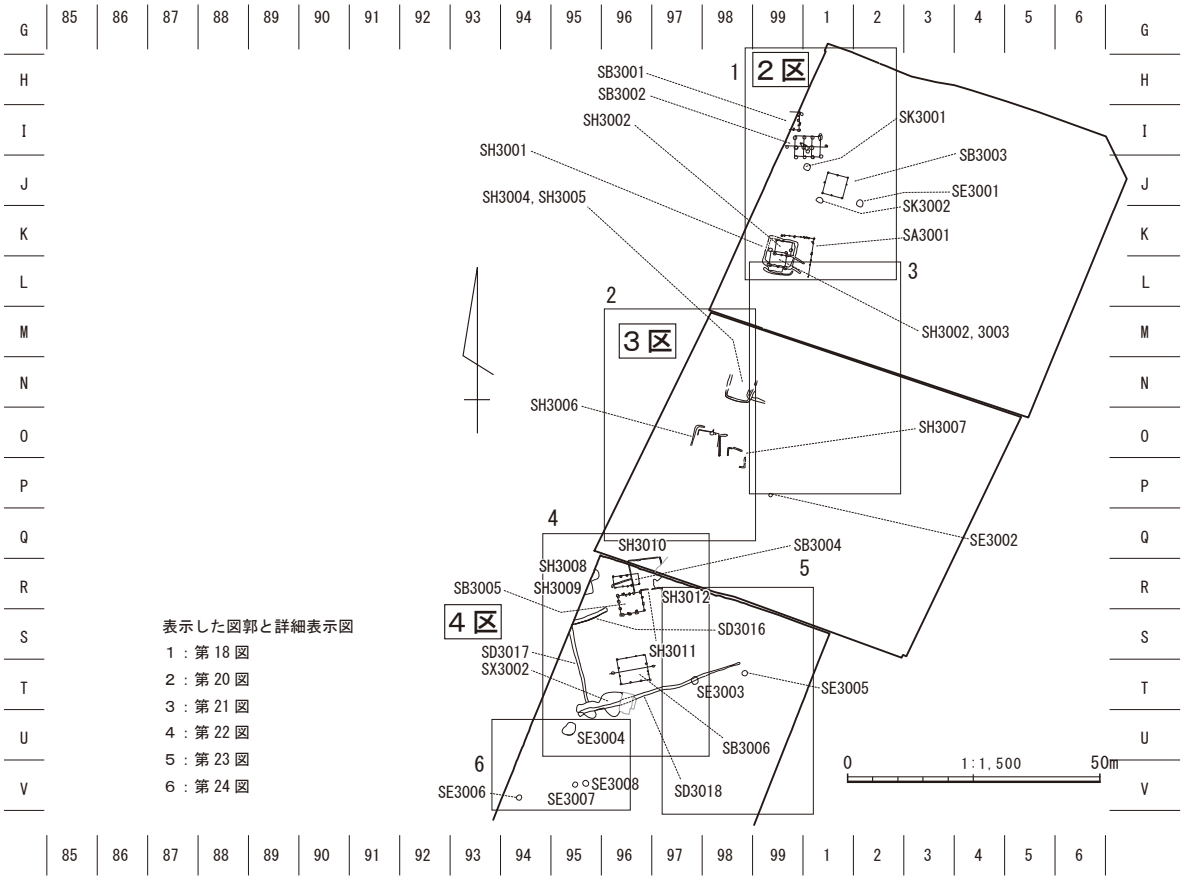
世紀	西暦	灰釉陶器	中世鍋	山茶碗	山茶碗
				渥美・湖西	清ヶ谷
		山下 1995	北村 1995	松井 1989	松井 1989
９世紀	900	折戸 53 窯式	第Ⅰ段階 第５小期		
10 世紀			第Ⅱ段階 第１小期		
	950				
		東山 72 窯式	第Ⅱ段階 第２小期		
	1000				
11 世紀			第Ⅱ段階 第３小期		
		百大寺窯式			
	1050				
		（尾張１）			
		（尾張２）			
	1100	（尾張３）			
12 世紀				Ⅰ期－１	Ⅰ期
	1150				
				Ⅰ期－２	
				Ⅱ期	Ⅱ期
	1200				
13 世紀				Ⅲ期－１	Ⅱ期？
	1250				
				Ⅲ期－２	
	1300				



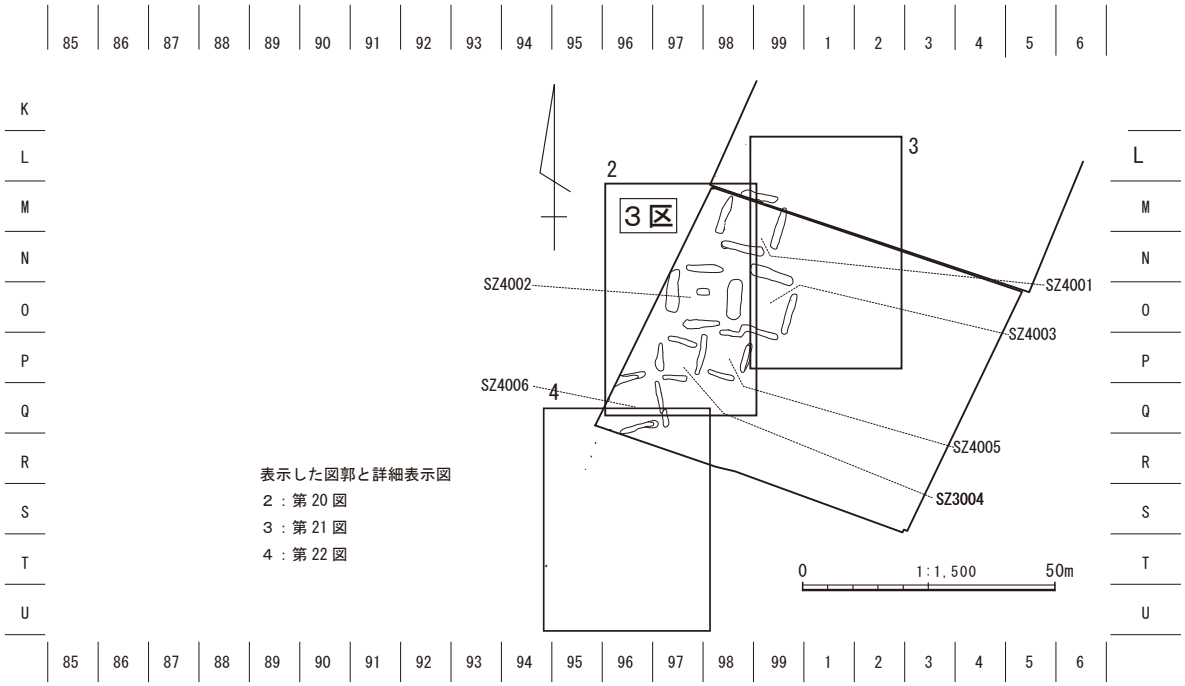
第７図　平安時代後期～鎌倉時代の主要遺構分布



第８図　奈良時代～平安時代前期の主要遺構分布



第９図　古墳時代の主要遺構分布



第 10 図　弥生時代の主要遺構分布

各時期の遺構分布の概要を第７図～第 10 図に示し、第７図～第 10 図に示した図郭ごとの遺構分布を第 11 図～第 24 図に示す。

１　平安時代後期～鎌倉時代の遺構

ここでいう平安時代後期とは、山茶碗出現以降（12 世紀以降）を指す。遺構の分布は２区と３区に集中している（第７図）。地形的には２区～３区で、北西～南東方向と北東～南西方向の流路が削りだした微高地があり、その微高地上に掘立柱建物跡や井戸跡などが分布している。

掘立柱建物跡は、主軸の方向が N8°　W の一群の SB1001、SB1002、SB1004 と、わずかに主軸がずれる N5°　W の SB1003 がある。SB1005（主軸方向 N82°　W）と SB1006（主軸方向 N8°　E）は直交する関係にある。SB1007 だけは主軸方向が N3°　W で、これと主軸の方向が揃う、もしくは直交する建物はない。

柵列 SA1002 ～ SA1004 は、SB1001 ～ SB1004 に直交する方向で、SB1001 ～ SB1004 の妻面に面していることから、SB1001 ～ SB1004 と同時期に建てられた可能性がある。また、北西～南東方向、あるいは北東～南西方向で直線的に伸びる溝の SD1001 は、区画溝の可能性がある。

井戸跡は微高地上に点在するように分布している。今回の調査で検出した井戸跡について、山本義孝氏の御教示によると、当地は、海面下まで粘土層が堆積しているため、かなり深く掘らないと地下水は湧いてこない。このことから、これらの井戸は湧水を狙ったものではなく、水を貯めておくための井戸の可能性が高いとのことである。

特記できる遺構としては、被熱遺構 SX1001 がある。非常に強く被熱した遺構であったため、当初は鍛冶関連の遺構と考えたが、鍛冶関連の遺物が出土しなかったこと、焼成不良の土師質の小皿が複数出土したことから、土器焼成遺構の可能性も考えた。しかし、土器焼成遺構とするには、出土した土器の数が少ないことから、火葬跡の可能性も考えられた。出土した炭化物を使用した放射性炭素年代測定の結果は、11 世紀後半～ 13 世紀前半の幅広い結果が得られた。

５区で検出した谷状遺構は、埋土から出土した土器が、古墳時代～鎌倉時代の幅広い時期に渡っていたことから、かなりの長期間にわたって埋没していったと考えられる。

２　平安時代前期～奈良時代の遺構

ここでいう平安時代前期とは､灰釉陶器出現～消滅までの時期(９世紀～11世紀)を指す。微高地上で、掘立柱建物跡を検出した。これらは、主軸の方向から、次の５種類に分けることができた。

Ａ群：主軸の方向がN84°　W、あるいは、これに直交するN6°　Eの一群

Ｂ群：主軸の方向がほぼ東西方向になる一群

Ｃ群：主軸の方向がN8°　Wになる一群

Ｄ群：主軸の方向がN80°　Eになる一群

Ｅ群：主軸の方向が上記以外のもの（該当は１棟のみ）

Ａ群は、柱穴の一辺が１ｍ前後の方形、もしくは直径１ｍ前後の円形の柱穴からなる掘立柱建物跡が主体で、時期を決定する遺物が乏しいが、掛之上遺跡（袋井市）で報告された８世紀前半の掘立柱建物群と、主軸の方向が一致することから、Ａ群は８世紀前半と考えられる。

Ｂ群～Ｅ群は、柱穴が直径50cm程度の円形、もしくは不整形の柱穴からなる掘立柱建物跡で、Ａ群に比べて、柱穴の規模が明らかに小さい。後述するが、Ｂ群～Ｅ群は古墳時代の掘立柱建物跡と考えられ、時期は、５世紀前半のものと７世紀後半のものに分けられる。

今回の西向遺跡の発掘調査で最大の成果を上げたのは、２区で検出した奈良時代の掘立柱建物群で、上記のＡ群に該当するものである（第８図)。ほぼ一直線に掘られたSD2002が微高地の脇を通り、微高地上に大型掘立柱建物群が配置されていた。２区で検出した掘立柱建物跡は５棟あり、建物の主軸の方向は、N84°　WとN6°　Eのほぼ直行する２方向があることから、計画的に配置されたと考えられる。柱穴の中には、掘り直した痕跡が見られるものがあることから、何度か建て替えがあったと考えられる。

SD2002は、平成21年度の調査で検出されたSD3の続きで、SD3は、出土遺物から８世紀中頃か、中頃をやや遡る時期と報告された。掘立柱建物跡は、出土遺物が極めて少なかったため、時期の判断が困難であったが、８世紀前半と報告された掛之上遺跡の掘立柱建物群と主軸の方向が一致すること、１次調査で報告したSD2002との関連が伺えることから、これらの遺構と同時期で、８世紀前半～中頃と考えるのが妥当である。

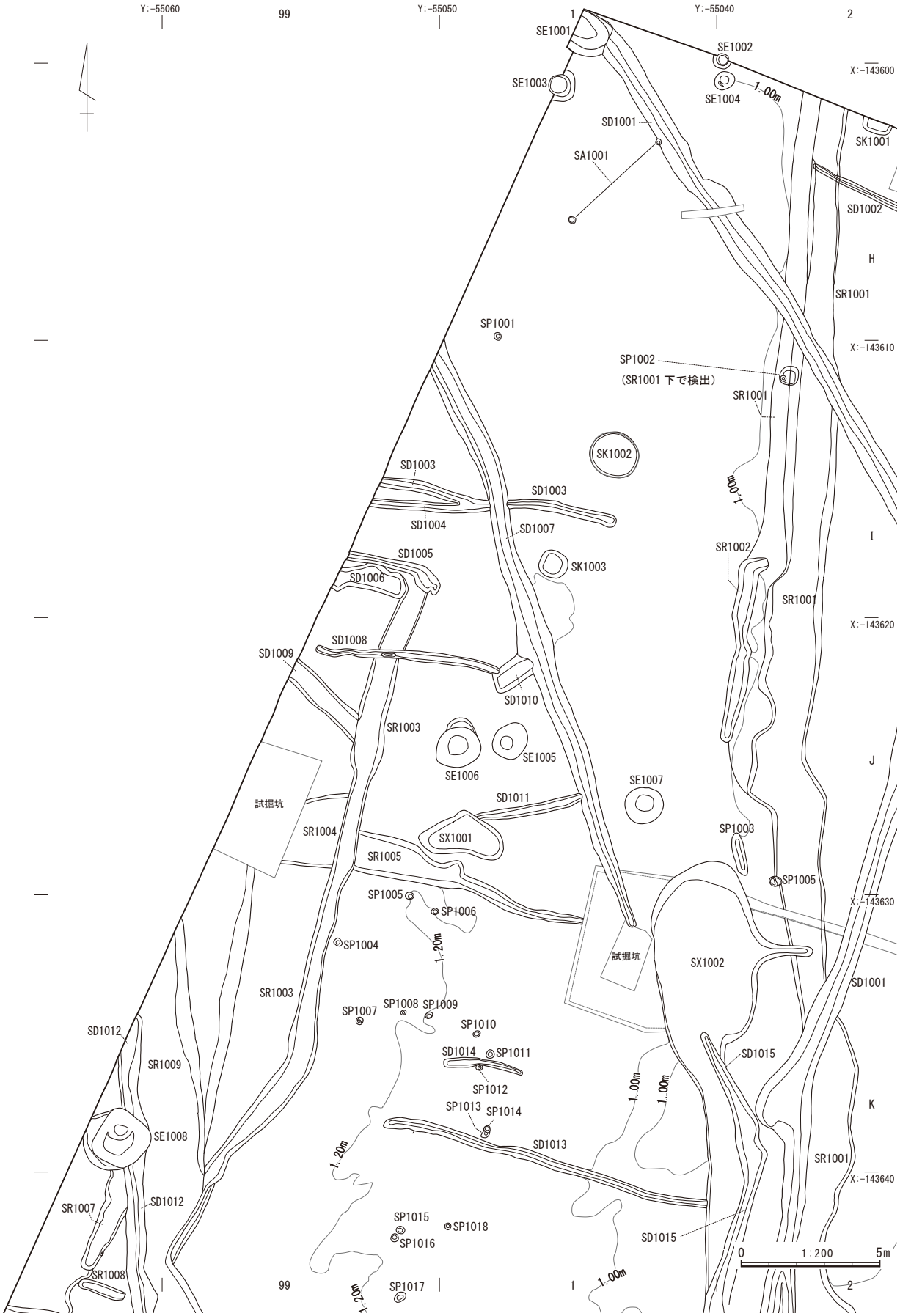
掘立柱建物群の性格は、同時期の官衙関連遺跡と推定されている掛之上遺跡の掘立柱建物跡に比べると、柱穴の平面形や配置が整っていないことから、官衙関連と考えるよりも、郡の下位にあたる郷、もしくは里単位で作られた共同倉庫といった性格が想定される。

３　古墳時代の遺構

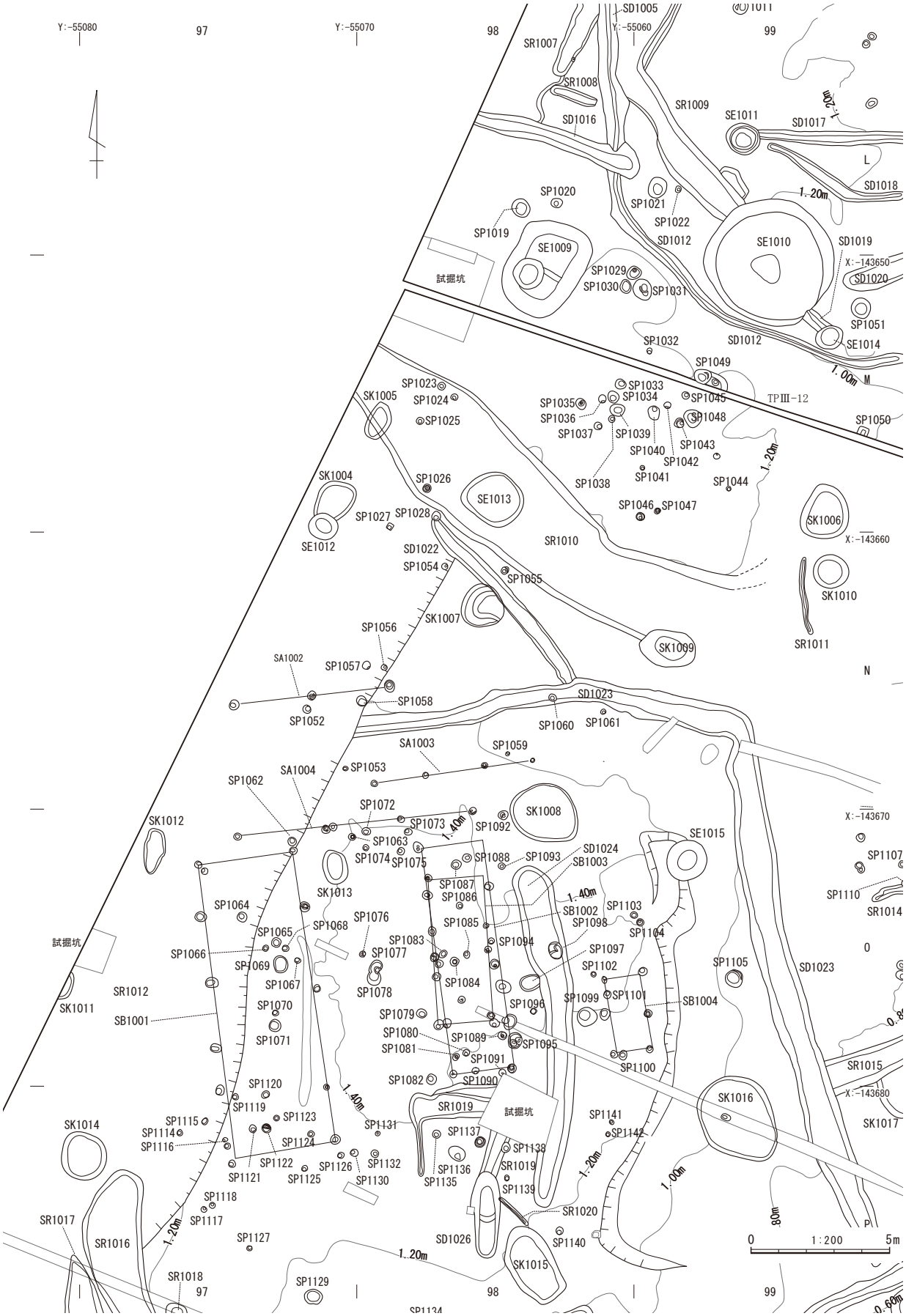
この時代の遺構は多くないが、掘立柱建物跡、住居状遺構、井戸などの遺構が見られる（第９図）。所属時期は、後期（７世紀代）のものと前期～中期初頭（５世紀前半）のものがある。前期～中期初頭の遺構では、次の遺構を特記できる。

井戸跡を８基検出し、うち６基からは高坏などが出土した。井戸を廃棄する際に祭祀を行った可能性が考えられる。また、遺物集積遺構SX3002を検出した。意図的な破砕かどうかは判断が難しいが、高坏などの土師器の破片の集積で、手捏ね土器も複数見られたことから、これも何らかの祭祀が行われた可能性が考えられる。

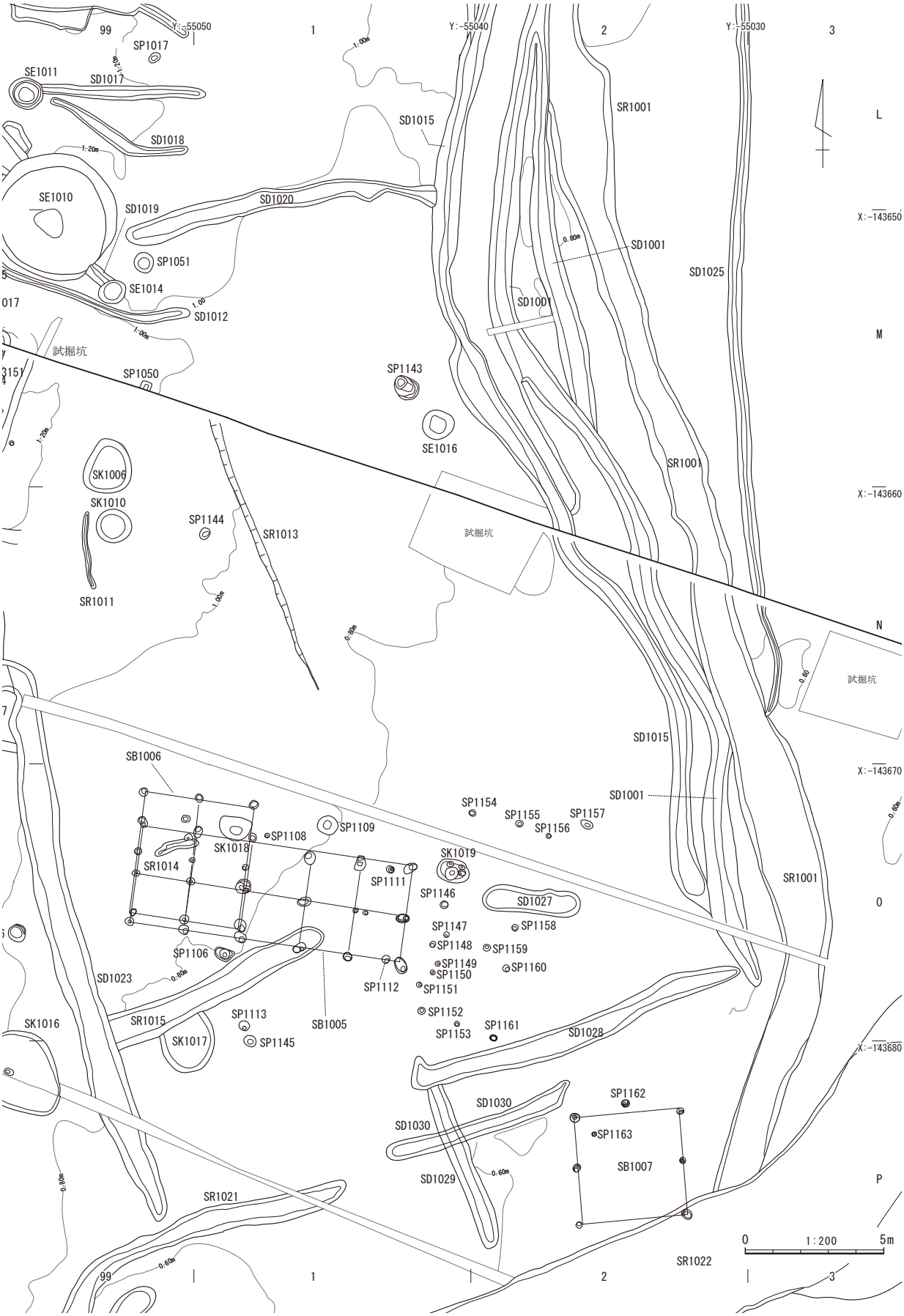
住居状遺構は集中することはなく、点在している。いずれも上面を削平されていると考えられ、掘り込み、壁溝ともに浅いものであった。４区では、棟持柱を持つ掘立柱建物跡SB3006を発見した。方形区画内に高床式の建物があったと推定される。



第 11 図　第１面遺構分布１



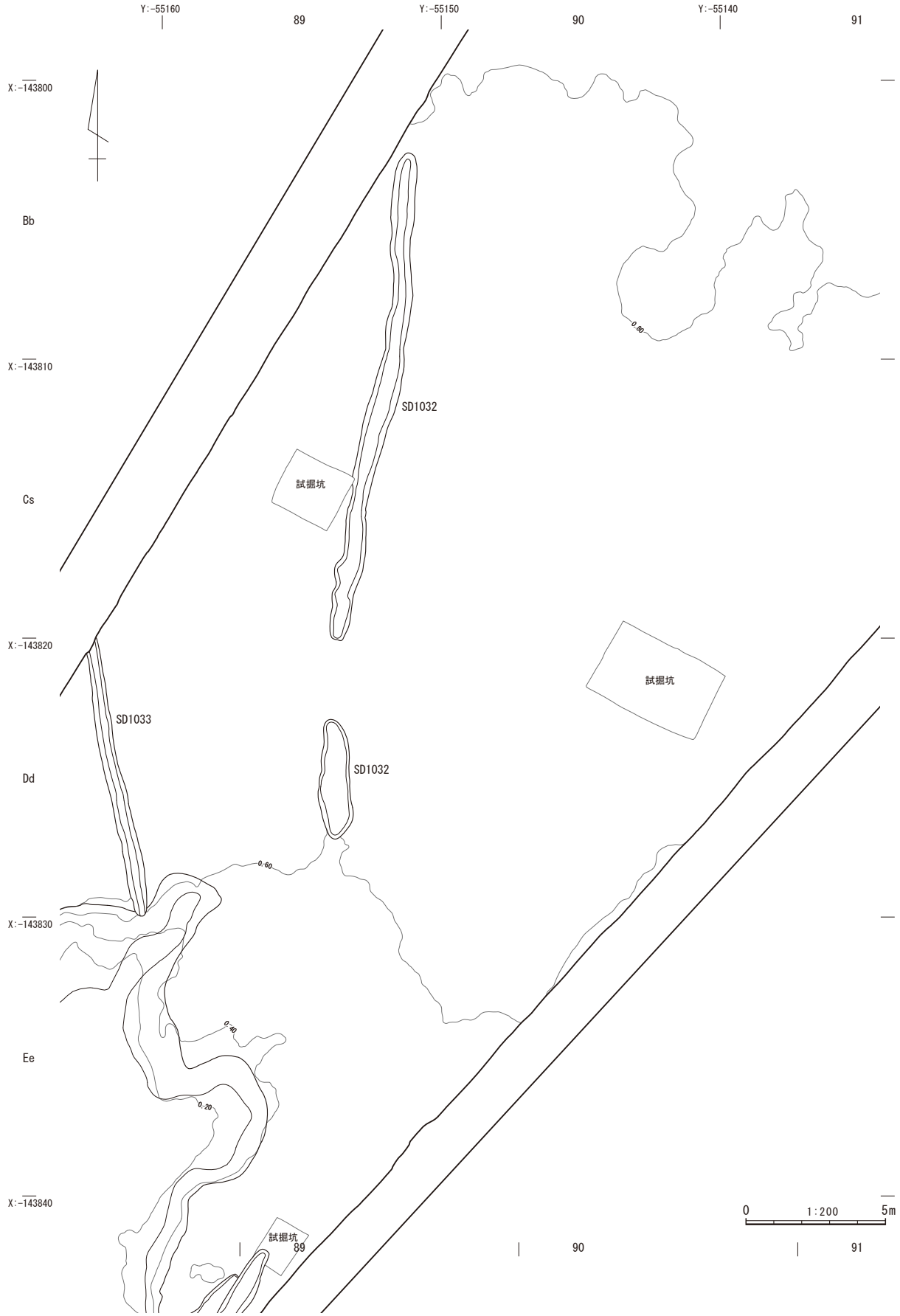
第 12 図　第１面遺構分布２



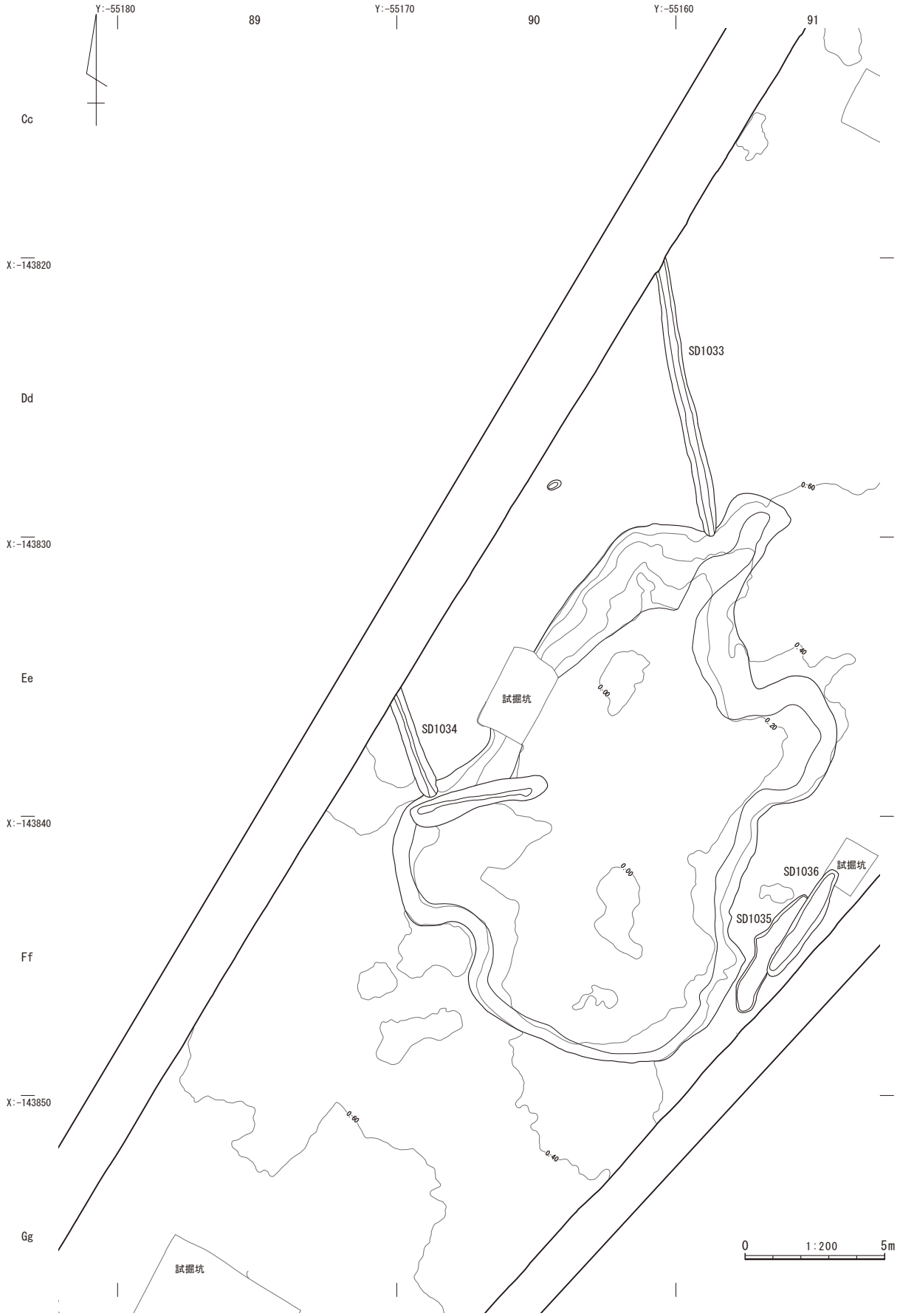
第 13 図　第１面遺構分布３

第 14 図　第１面遺構分布４

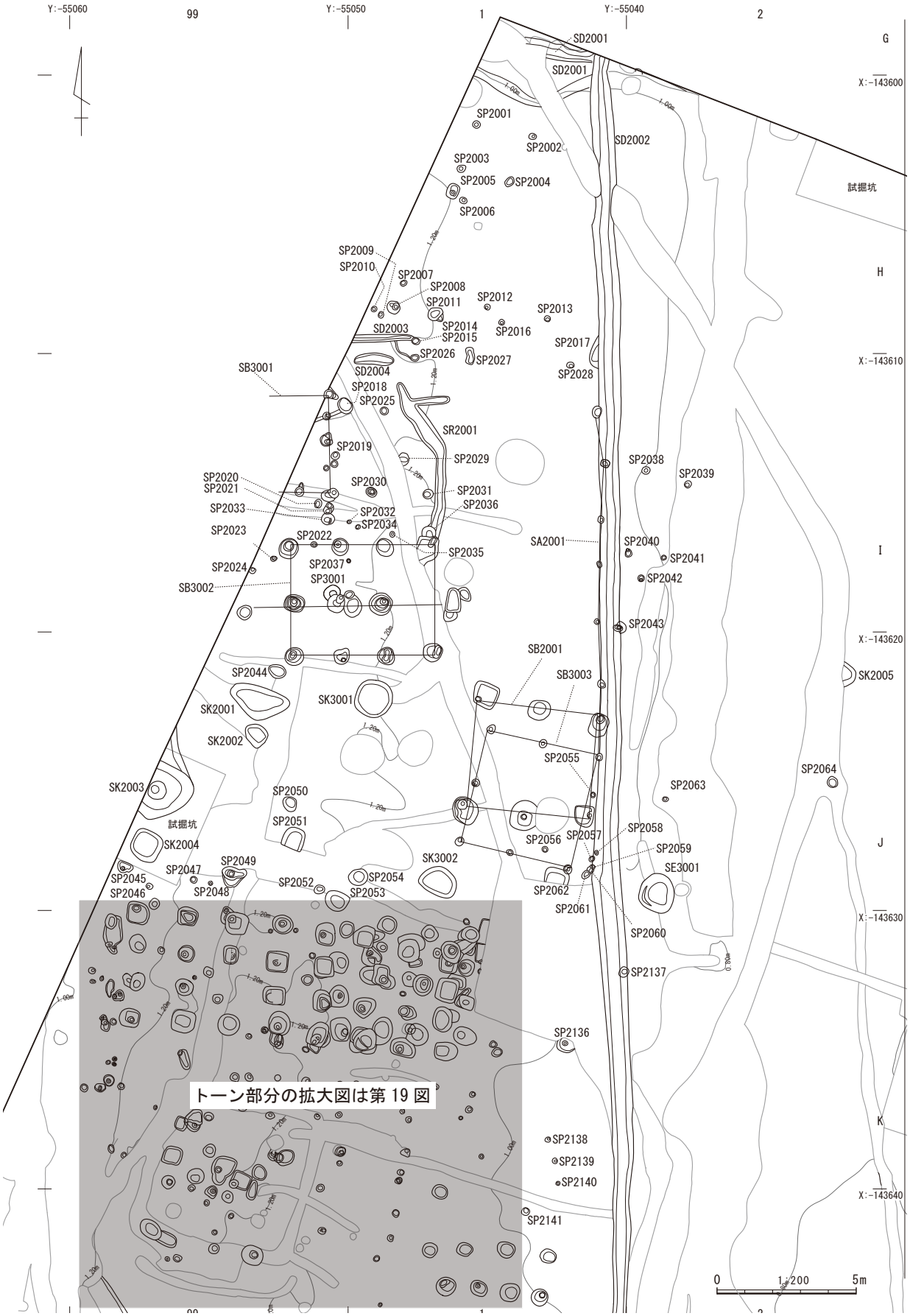
第 15 図　第１面遺構分布５



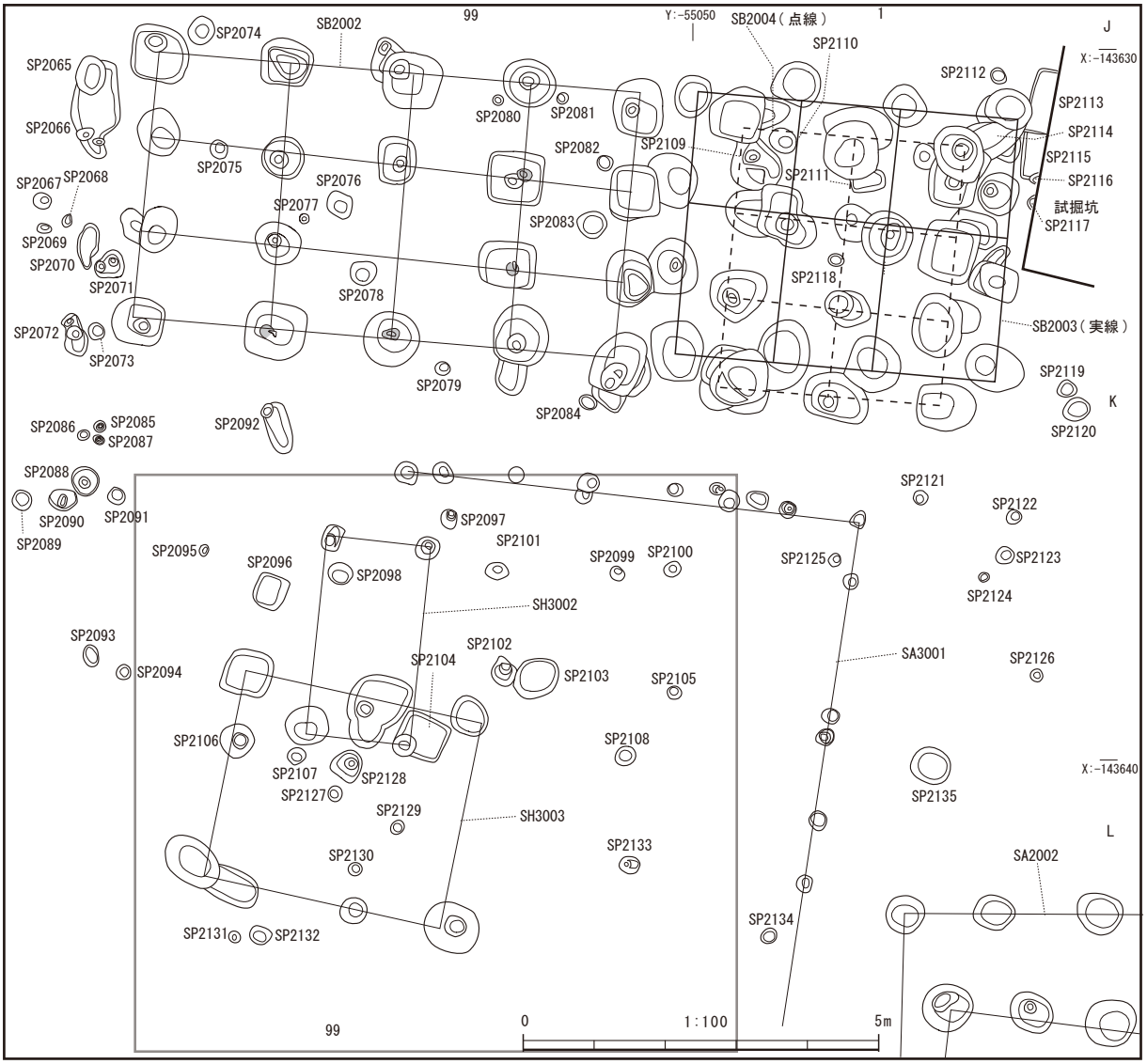
第 16 図　第１面遺構分布６

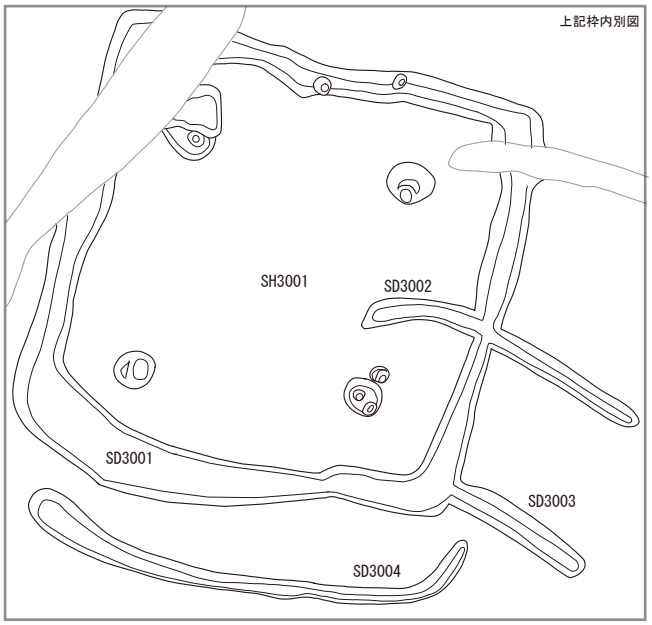


第 17 図　第 1 面遺構分布 7



第 18 図　第２面遺構分布１

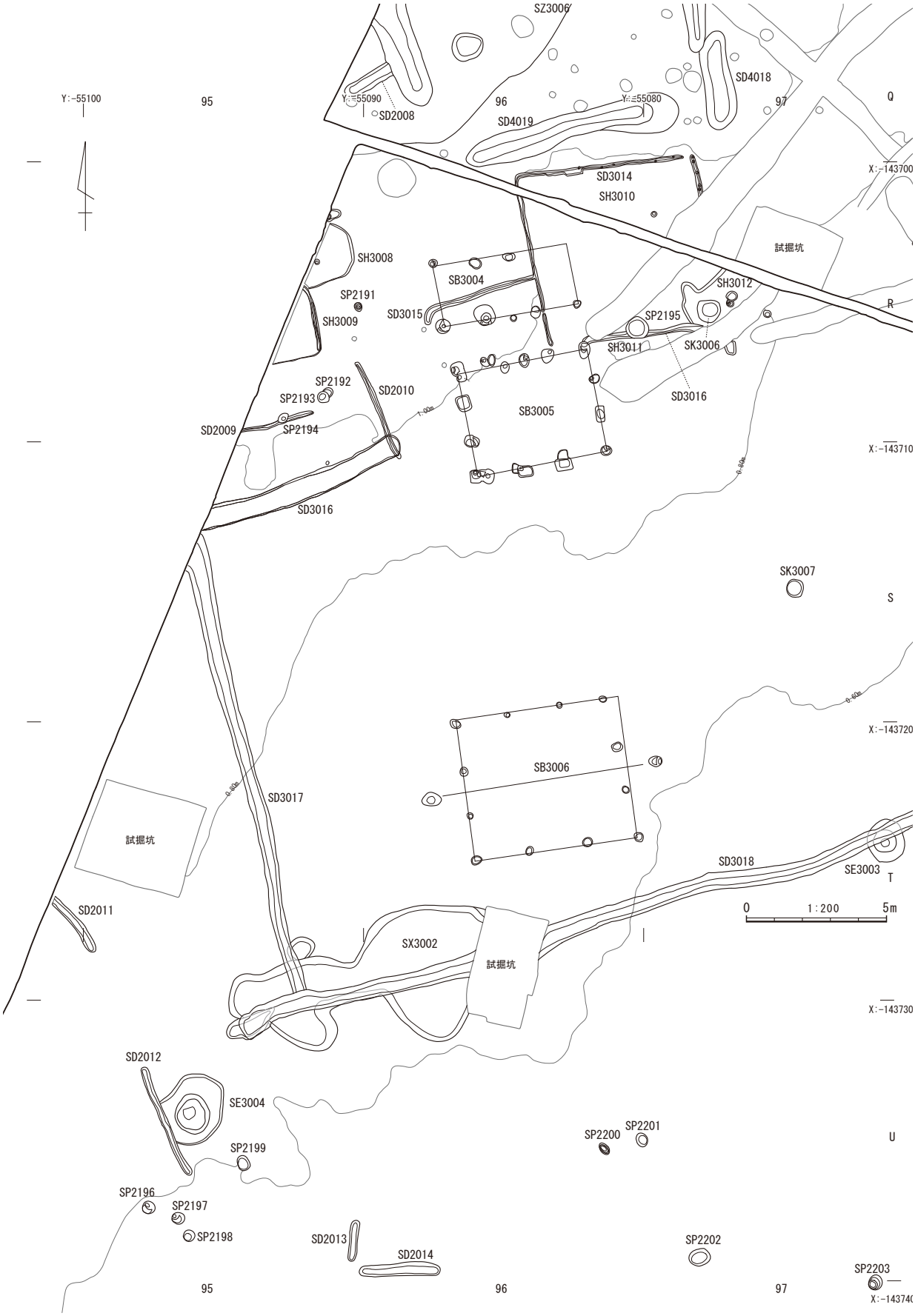




第 19 図　第２面遺構分布２

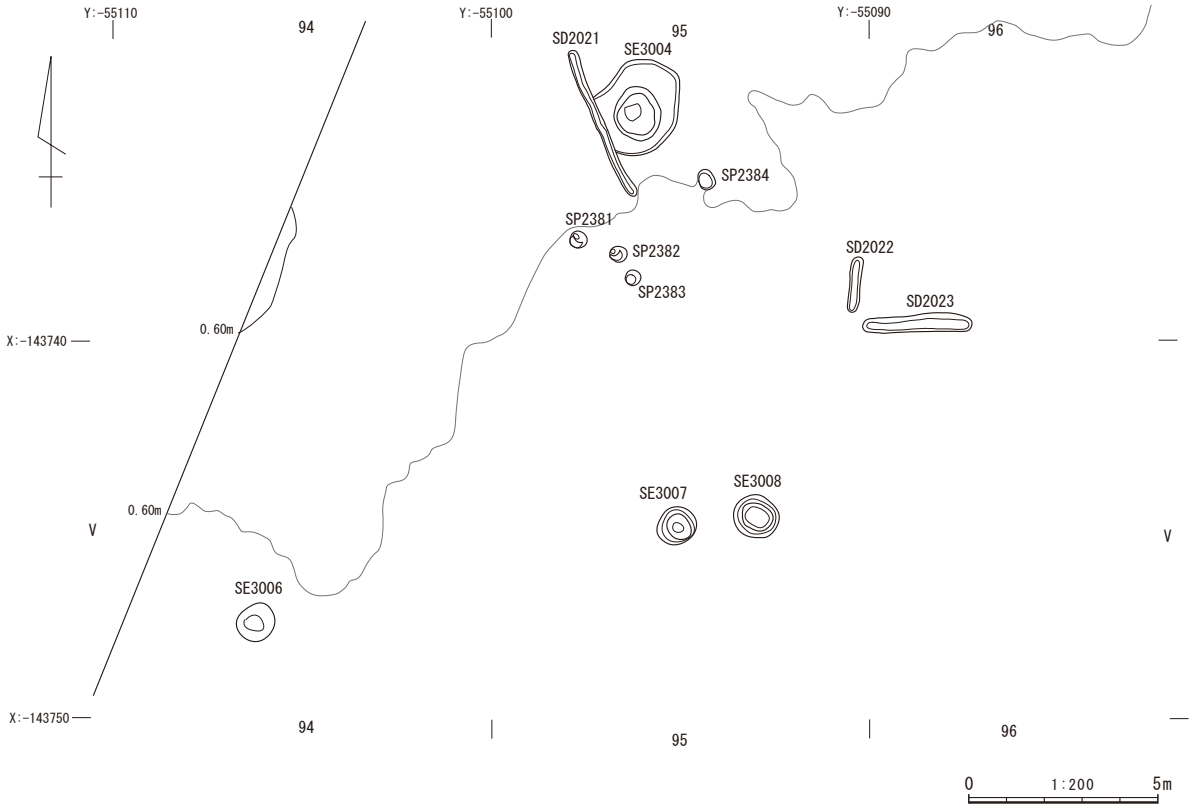
第 20 図　第２面遺構分布３

第 21 図　第２面遺構分布４



第 22 図　第２面遺構分布５

第 23 図　第２面遺構分布６



第 24 図　第２面遺構分布７

４　弥生時代の遺構

３区で方形周溝墓を６基発見した（第 10 図）。いずれも周溝の四隅が切れるタイプである。出土した遺物は少なかったが、周溝から出土した土器から、弥生時代中期後葉に属すると考えられる。

方形周溝墓は、溝の規模の大きい SZ4001 ～ 4003 と溝の規模の小さい SZ4004 ～ 4006 に分けることができる。これらの中には、２つの方形周溝墓が１本の周溝を共有するものがあることから、連続して作られたもので、SZ4001・SZ4002 → SZ4003 → SZ4005 → SZ4004・SZ4006 の順に作られたと考えられる。方形周溝墓群は、調査区の東側にも広がっている可能性が高い。主体部が残っていたものは１基だけであったが、木棺の痕跡を検出できた。

同時期の方形周溝墓は、西向遺跡の南約 1.5km にある元島遺跡で多数報告されている。

近隣の弥生時代集落は、諸井十二所遺跡や団子塚遺跡で発見されている。団子塚遺跡は集落と墓域が近接していることから、西向遺跡でも近隣に弥生時代の集落があったと想定される。

第３節　平安時代後期～鎌倉時代の遺構と遺物

本節で報告するものは、主として調査面の１面目で検出した遺構と出土した遺物である。遺構分布の詳細は第 11 図～第 17 図に示した。遺物が出土しなかった遺構の時期については、遺構からの判断は極めて困難であったため、可能な限り、周辺遺構との関連から時期を推定した。包含層から出土した土器の時期も合わせて考えると、第 11 図～第 17 図に示した遺構のうち、調査面の１面目で検出した遺構で、時期を特定できなかったものは、概ね 12 世紀中頃～ 12 世紀後半に入ると思われる。時期が下るものがあったとしても、13 世紀前半までと推定される。

１　柵列

この時期と考えられる柵列は４基検出した。これらのうち SA1002 ～ 1004 は、近接しており、方向は N82°Ｅで、同一方向である。これらの柵列の南側には、主軸が柵列と直交する掘立柱建物跡 SB1001 ～ 1004 が並んでいる。このことから、SA1002 ～ 1004 は、SB1001 ～ 1004 と関係した柵で、極めて近接した時期に設置された可能性が考えられる。

（１）SA1001（第 25 図）

２区の H1 グリッドで検出した。当初、P1 と P2 を調査した際、両方とも柱根が残っていたため、掘立柱建物跡を構成する柱穴の可能性を想定し、周囲でこれに組み合う柱穴の検出に努めたが、周囲で遺構を発見できなかったため、これら２つの柱穴が柵列を構成していると判断した。柱穴の間は 4.2 ｍある。P1 の底には、礎石と思われる板状の石を敷いてあり、その上に据えられた柱根の一部が残っていた。樹種はモミ属である。P2 にも柱根が残っており、樹種はアカマツである。

P1 からは、山茶碗（第 26 図－１）が出土した。高台はしっかりと外側に踏ん張るように付けられている。体部～口縁は緩やかな曲線を描くように立ち上り、口縁は外反している。東遠江産の山茶碗で、時期は 12 世紀前半（Ⅰ期）まで遡ると思われる。

P2 からは、山茶碗（第 26 図－２）と須恵器（第 26 図－３）が出土した。２は山茶碗の小碗で、高台はしっかりと外側に踏ん張るように付けられている。高台を付けた際の撫でも丁寧である。体部は緩やかな曲線を描いて立ち上り、口縁は外反している。内面には重ね焼きの痕跡が見られる。全体的に丁寧な作りである。東遠江産の山茶碗で、12 世紀前半（Ⅰ期）になると思われる。

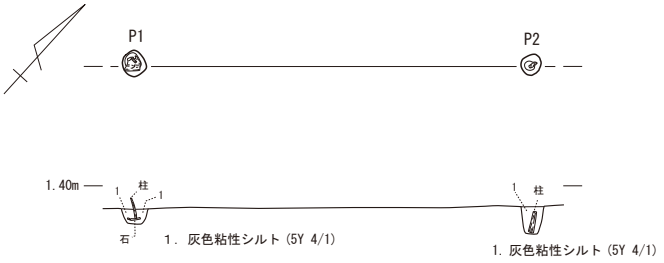
３の須恵器は、小片であるが、片面に自然釉が付いていることから、蓋と思われる。内面側に「神」の墨書の一部が確認できる。時期は奈良時代（Ⅴ期）に入ると思われる。これは流れ込みの可能性が高い。

（２）SA1002（第 25 図）

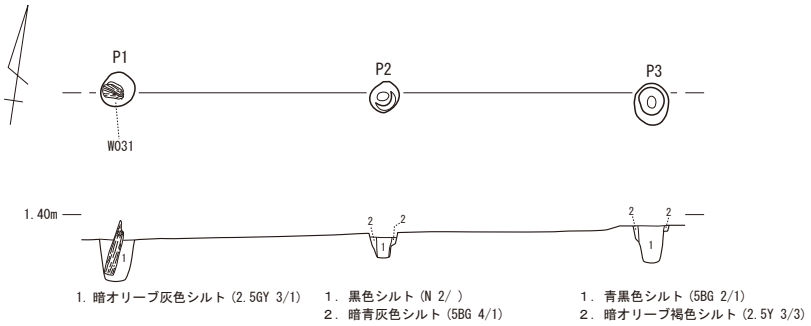
３区の N97 区～ N98 区で検出した。これも当初は掘立柱建物跡の柱穴の可能性を考えて、周囲で柱穴の検出を試みたが、これに組み合う柱穴が検出できなかったため、柵列と判断した。柱穴間の距離は 2.8 ｍである。P1 には柱根が残っていた（第 26 図－４）。腐食が進んでいるが、丸材と思われる。直径は 12cm 程である。下面には工具による切断痕が残っており、先端は腐食が著しい。樹種はクリである。P2 と P3 は、断面に柱の跡が観察できることから、柱が抜かれることなく、残ったままの状態で朽ちたと考えられる。

なお、近隣で検出した柵列 SA1004 と組み合って掘立柱建物跡を構成する可能性も考えられるが、次の点から、組み合う可能性は低いと判断した。

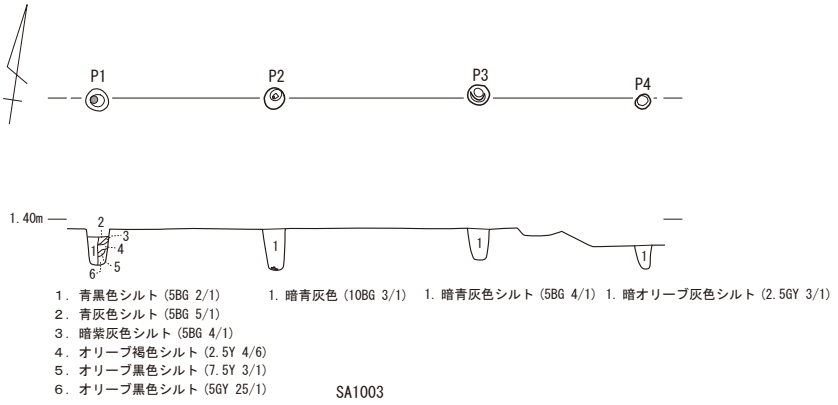
・SA1002 と SA1004 では、柱穴の規模が異なり、SA1002 の方が、柱穴が大きい。
・SA1002 と SA1004 では、柱穴間の距離が５ｍ近く開いている。
・SA1002 の柱穴 P2 と SA1004 の柱穴 P1 の位置はかなりずれる。



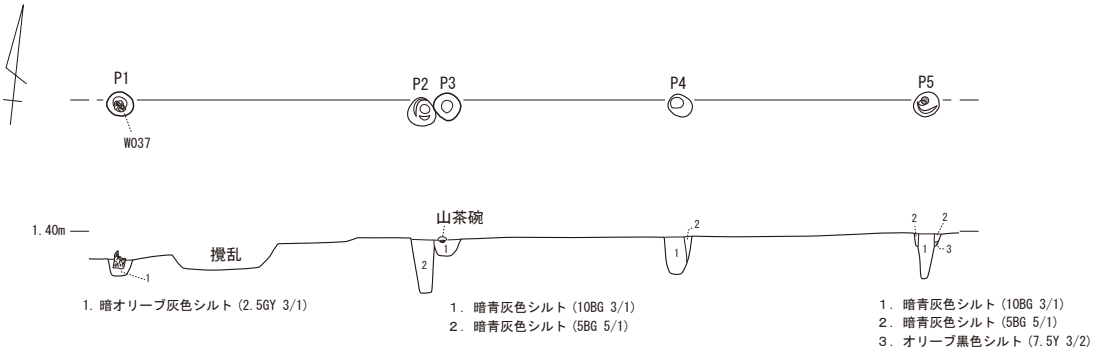
SA1001



SA1002



SA1003

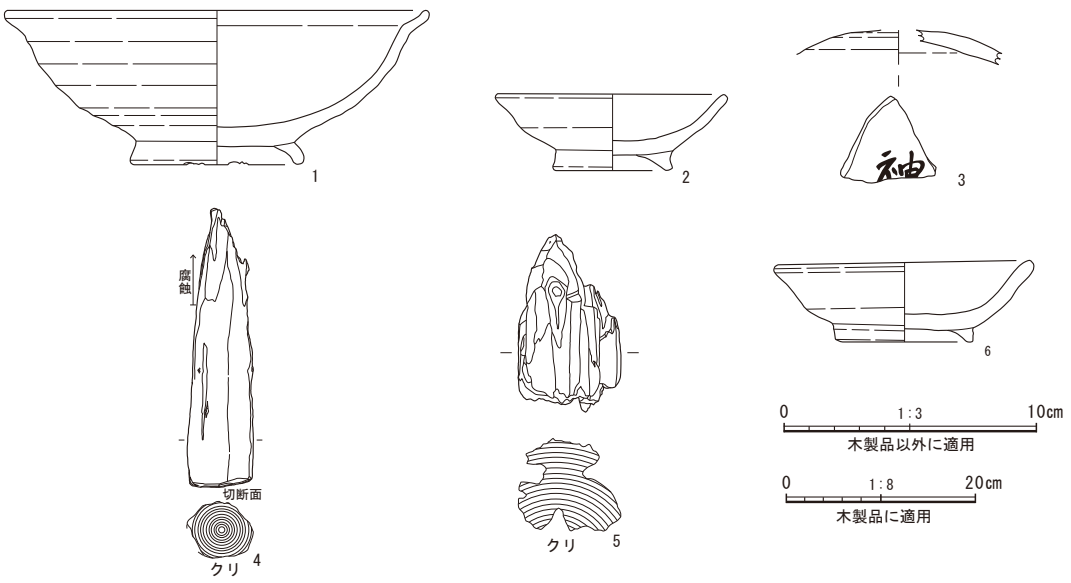


SA1004

●：柱痕

0　1:80　2m

第 25 図　柵列 SA1001 ～ 1004 実測図



第 26 図　柵列 SA1001、1002、1004 出土遺物実測図

・SA1004 の柱穴 P5 に組み合う柱穴は SA1002 には存在しない。

以上の理由から、SA1002 と SA1004 は、掘立柱建物を構成するものではなく、それぞれが独立した柵列であると考えた。ただ、SA1002 を SA1004 は方向が一致しているため、近い時期に立てられたもので、出土した遺物から 12 世紀後半と考えられる。

（３）SA1003（第 25 図）

３区の N98 区で検出した。これも掘立柱建物跡として組み合う柱穴が検出できなかったため、柵列と判断した。柱穴間の距離は、P1-P2 間が 1.84 m、P2-P3 間が 2.12 m、P3-P4 間が 1.72 mで、各柱穴間で若干の差がある。P2 の底部にかろうじて柱根の一部が残っていた。樹種はイヌマキ属である。P1 の断面を観察した限りでは、柱が抜かれた痕跡はなく、柱材が残ったまま腐食したと考えられる。柱根以外の遺物は出土しなかったため､時期の判断は困難である。隣接する SA1004 と方向が一致することから、SA1004 と近い時期、12 世紀後半に建てられた可能性が考えられる。

（４）SA1004（第 25 図）

３区の 097 区～ 098 区で検出した。これも掘立柱建物跡として組み合う柱穴が検出できなかったため、柵列と判断した。柱穴間の距離は、P1-P2 間が 3.2 m、P2-P4 間と P4-P5 間は 2.64 mである。P2 と P3 は隣接していることから、掘り直したものと考えられる。P1 と P5 には柱根が残っていた。樹種は、P1 の柱根がクリで、P5 の柱根がサカキである。P1 の柱根は第 26 図－５に図示した。腐食が著しく、残っていた部分は少ないため、丸材、角材の区別はできない。基部の切断面の有無も観察できない。先端には工具による加工痕が見られる。

P3 からは渥美・湖西産の山茶碗の小碗（第 26 図－６）が出土した。低い高台を付けてあり、高台を付けた際の高台外周側の撫では雑である。高台接地面に砂粒の痕跡がある。体部は緩やかな曲線を描くように立ち上り、口縁は外反していない。内面に自然釉が付いており、重ね焼きをした部分には付いていない。高台は低いものの、断面が三角形のしっかりした高台であり、口縁がわずかに外反していることなどから、12 世紀後半（Ⅱ期）と考えられる。

２　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は７棟検出した。これらのうち、SB1001、SB1002、SB1004 は主軸の方向がそろっていることから、同時に建っていたか、時期差があったとしても、極めて近い時期と考えられる。SB1005 と SB1006 は重複しているため、同時には存在しなかったことになるが、主軸の方向が直交していることから、極めて近い時期に建てられたと考えられる。SB1007 は、主軸の方向が揃うか、直交する建物跡がなく、孤立した感がある。

（１）SB1001（第 27 図）

３区の 097 区～ P97 区で検出した。桁行５間、梁行１間の側柱建物跡である。主軸の方向は N8°　W である。規模は桁行 10.56 ｍ、梁行が 3.44 ｍ、面積は 36.33 ㎡である。これは建物の南端を P7 と P10 までとした時の規模で、南端を P8，P9 まで伸ばすと、桁行は 10.8 ｍ、面積は 37.15 ㎡になる。柱間距離は、桁行の平均が 2.37 ｍ、梁行の平均が 3.64 ｍである。柱穴の配列、大きさは、やや不揃いである。P2 は P1 の掘り直しと思われるが、掘立柱の並びからややずれる。また、P10 と P11 もこの建物跡の柱穴と思われるが、いずれも柱の並びからややずれている。P8 は P9 と組み合う可能性があるため、この建物跡の柱穴として掲載した。P13 と P14 に組み合う柱穴は、想定される位置の試し掘りまで行ったが、検出できなかった。

柱穴の埋土はいずれも類似している。P3、P12、P13 のように、２種類の土が斑になっている埋土は、建物廃棄後に柱穴に流入した土ではなく、柱を構築した際に人為的に入れた土の可能性が高い。

柱根が残っていた柱穴と柱根の形状、残存直径、樹種は次のとおりである。

P3:丸太材、残存直径８㎝、樹種はクロマツ、P5:丸太材、残存直径９㎝、樹種はカヤ、P14:形状不明、残存直径不明、樹種はムクロジ

遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難であるが、周囲で検出した遺構や出土した遺物の時期から、12 世紀～ 13 世紀の中に収まると考えられる。

（２）SB1002（第 28 図）

３区の 098 区で検出した。桁行５間、梁行１間の側柱建物跡である。主軸の方向は N8°　W である。規模は桁行 8.32 ｍ、梁行が 2.16 ｍ、面積は 17.97 ㎡である。柱間距離は、桁行の平均が 1.88 ｍ、梁行の平均が 2.16 ｍである。柱穴の並びと大きさは、やや不ぞろいである。P1 と P4 に組み合う柱穴は検出できなかった。P10 は P9 の掘り直しと考えられる。P6 には柱根が残っていた（第 29 図－１）丸太材で、残存直径は 16㎝、樹種はツガ属である。下面には切断した際の工具痕が残っている。表面は自然面が残っている。先端側は腐食が著しい。

P11 からは渥美・湖西産の山茶碗が出土した（第 29 図－２）。器種は鉢で、底部の破片である。三日月状のしっかりした高台を付けてある。12 世紀前半～中頃（Ⅰ期－１）と思われる。

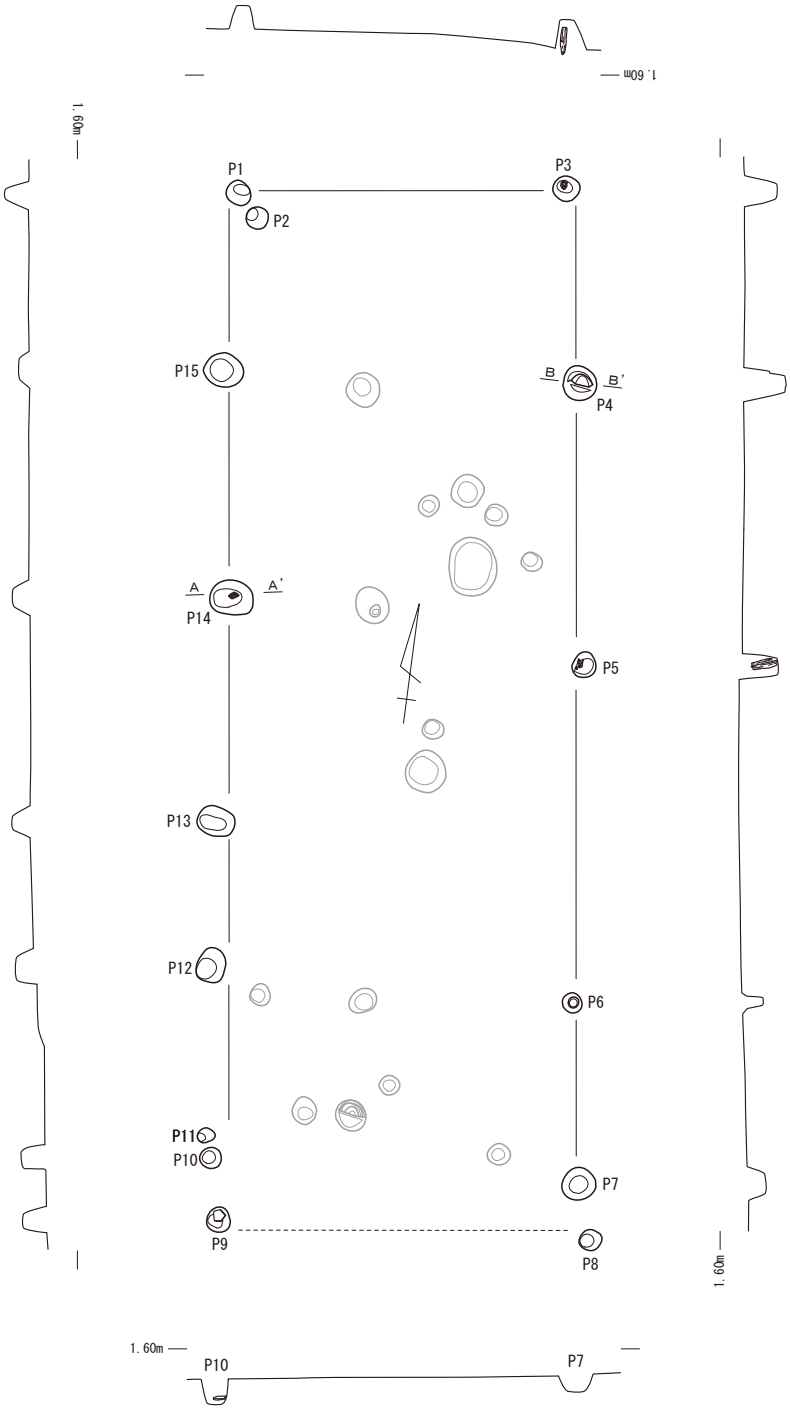
（３）SB1003（第 30 図）

３区の 098 区で検出した。SB1002 と重複する掘立柱建物跡で、桁行３間、梁行１間の側柱建物跡である。主軸の方向は N5°　W で、SB1002 とは３°ずれる。規模は桁行 5.35 ｍ、梁行が 2.00 ｍ、面積は 10.64 ㎡である。柱間距離は、桁行の平均が 1.79 ｍ、梁行の平均が 2.00 ｍである。P1 に柱根が残っていた。腐植が著しいが、丸太材と思われ、残存直径は 10㎝、樹種はイヌマキ属である。

遺物が出土していないため、時期の判断は困難であるが、SB1002 と重複していること、柱穴の埋土が類似していることなどから、12 世紀代と考えるのが妥当であろう。

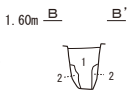
（３）SB1004（第 30 図）

３区の 098 ～ 099 区で検出した。桁行２間、梁行１間の、今回の調査で検出したものの中では、比較



柱穴埋土注記
P1: 暗灰色シルト (N3/ 0)
P2: 暗灰色シルト (N3/ 0)
P3: 暗灰色シルトと灰白色シルトの斑 (N3/ 0,N7/ 0)
P5: 黒色シルト (2.5GY 2/1)
P6: 黒色シルト (2.5GY 2/1)
P7: 青黒色シルト (5BG 2/1)
P8: 暗青灰色シルト (5BG 3/1)
P9: オリーブ黒色シルト (5GY 2/1)
P10: 暗灰色シルト (N2/ 0)
P11: 暗灰色シルト (N2/ 0)
P12: 暗灰色シルトと灰白色シルトの斑 (N3/0,N7/0)
P13: 青灰色シルトと明青灰色シルトの斑 (5PB2/1,5PB6/1)
P15: 暗灰色シルト (N3/ 0)

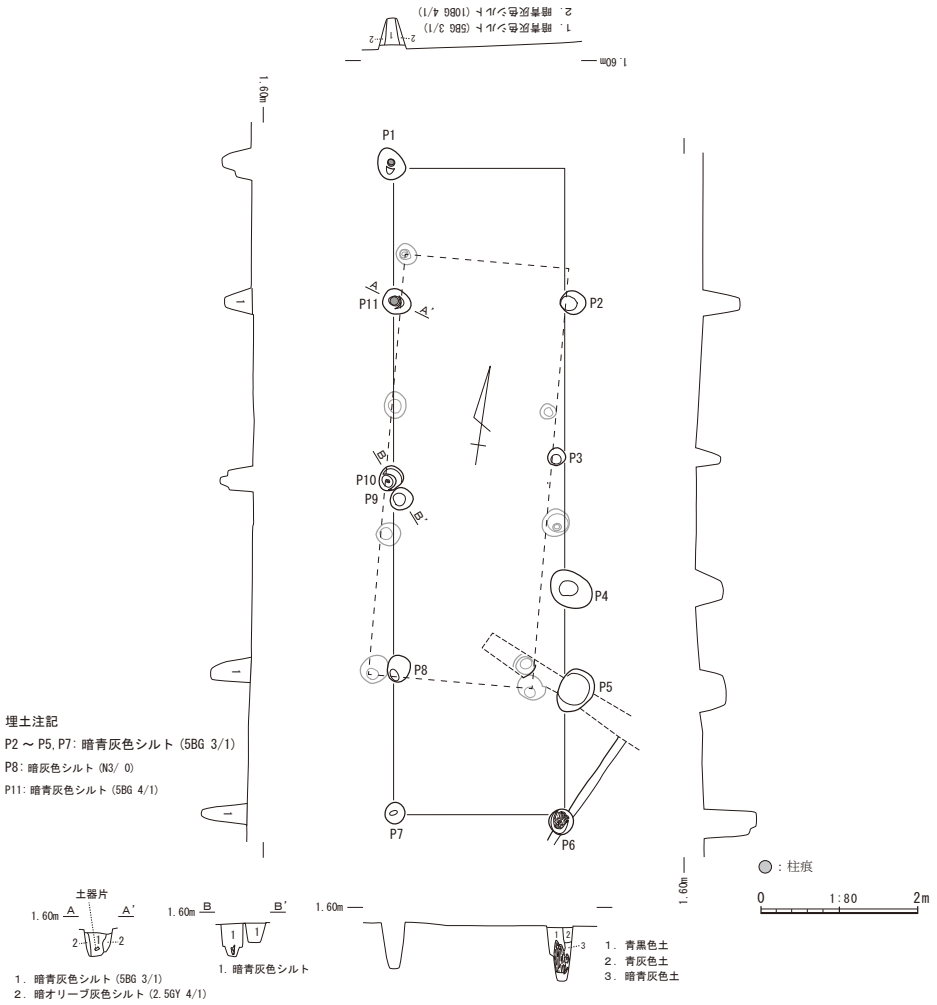
1. 暗オリーブ灰色シルト (2.5GY 3/1)



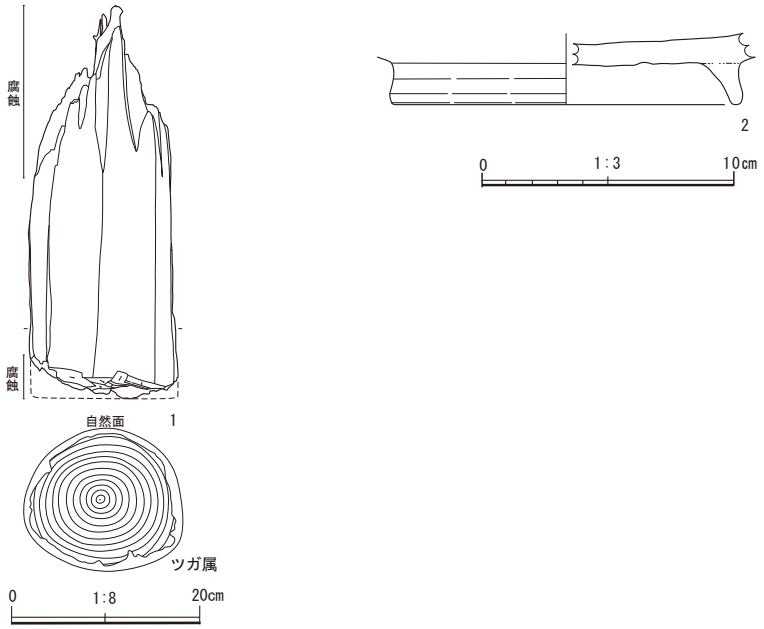
1. 暗青灰色シルト (5BG 4/1)
2. 青灰色シルト (5BG 5/1)

0　1:80　2m

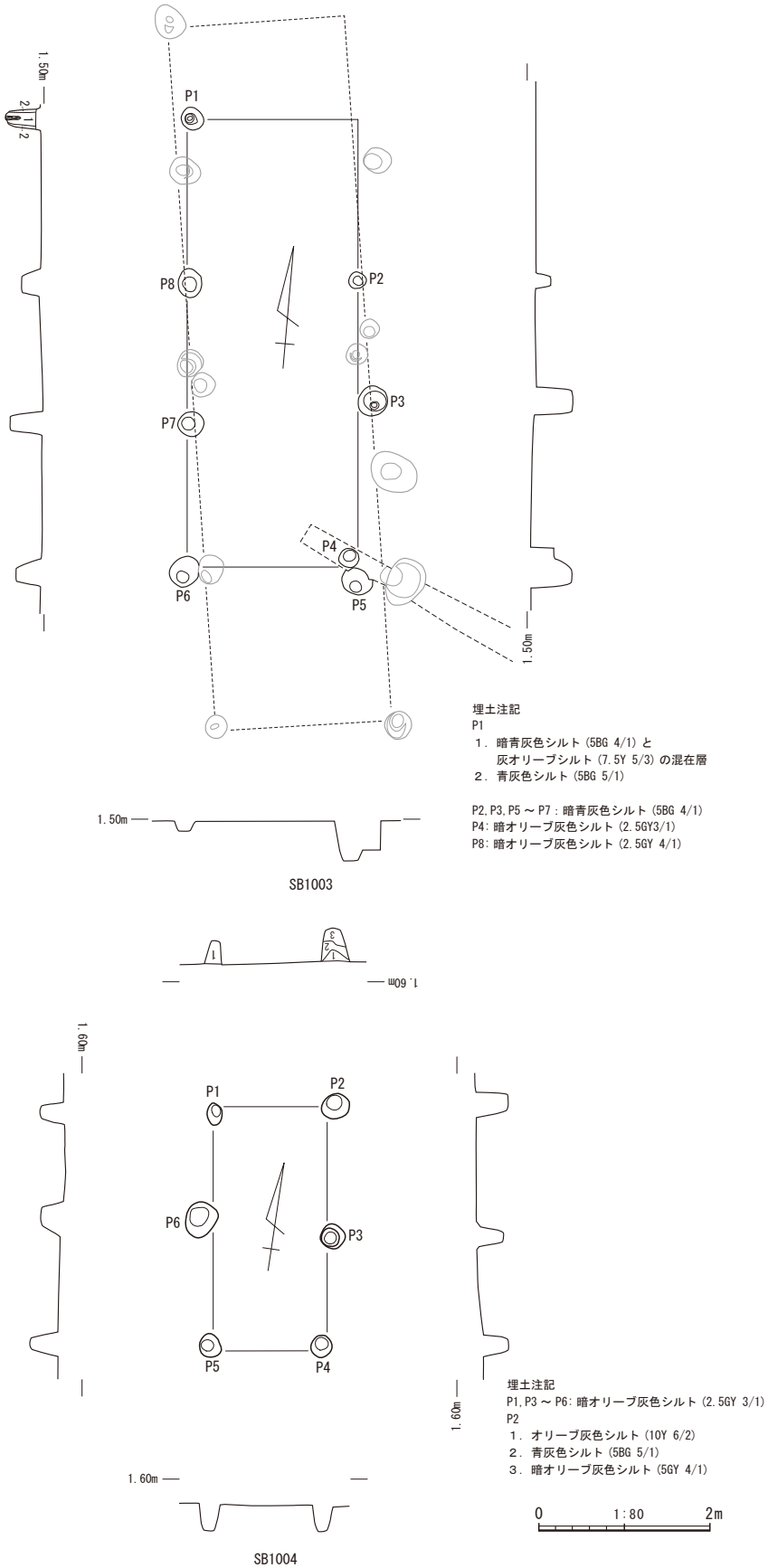
第 27 図　掘立柱建物跡 SB1001 実測図



第 28 図　掘立柱建物跡 SB1002 実測図



第 29 図　掘立柱建物跡 SB1002 出土遺物実測図



第 30 図　掘立柱建物跡 SB1003・1004 実測図

的小型の側柱建物跡である。主軸の方向はN8°　Wで、SB1001、SB1002と一致している。規模は桁行2.80 m、梁行が1.36 m、面積は3.81 ㎡である。柱間距離は、桁行の平均が1.36 m、梁行の平均が1.36 mである。柱根が残っているものはなく、P2以外の埋土は、すべて単一層であった。建物廃棄後に柱を抜いた痕跡も認められなかった。

遺物が出土しなかったため、時期の判断が困難であるが、SB1001、SB1002と主軸がそろっていること、柱穴の埋土が類似していることなどから、12世紀代と考えるのが妥当である。

（４）SB1005（第31図）

３区の099区～01区で検出した掘立柱建物跡である。桁行５間、梁行２間の総柱建物跡である。主軸の方向はN82°　Wである。規模は桁行10.00 m、梁行が1.36 m、面積は3.84 ㎡である。柱間距離は、桁行の平均が2.01 m、梁行の平均が1.80 mである。大きさの割に柱穴の直径が小さい印象を受ける。

調査当初、P1とP2は検出できず、方形周溝墓SZ4006の溝SD4022を掘削後、その底で検出した柱穴をSB1005のP1、P2と判断した。

SB1005は、穴の大きさがやや不揃いのところもあるが、並びは整然としている。P3はP4は掘り直しである。P9、P17、P19にも掘り直しの痕跡がある。

柱根が残っている柱穴はなく、埋土は単一層のものが多かった。建物廃棄後に柱が抜かれた痕跡も認められなかった。柱穴の埋土は、第31図に記載したように、色調が類似したものが多い。

同時に存在したと考えられる掘立柱建物跡が周囲で見つからなかったことから、孤立した感のある建物跡である。遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難である。根拠は乏しいが、周囲で検出した遺構の時期から、12世紀～13世紀と考えておくのが妥当であろう。

なお、この建物跡の東側にも、柱穴の可能性のある小穴をいくつか検出している。明確にSB1005の柱穴と判断できる柱穴はないが、桁行がもう１間拡大する可能性は残されている。

（５）SB1006（第32図）

３区の099～01区で検出した掘立柱建物跡である。桁行２間、梁行２間の総柱建物跡である。主軸の方向はN8°　Eである。規模は桁行4.40 m、梁行が3.84 m、面積は16.90 ㎡で、正方形に近い。柱間距離は、桁行の平均が2.20 m、梁行の平均が1.92 mである。柱穴の規模、並びとも比較的揃っている。これもSB1005の場合と同様、P6とP7が、方形周溝墓SZ4006の構成溝SD4022の底で検出した。

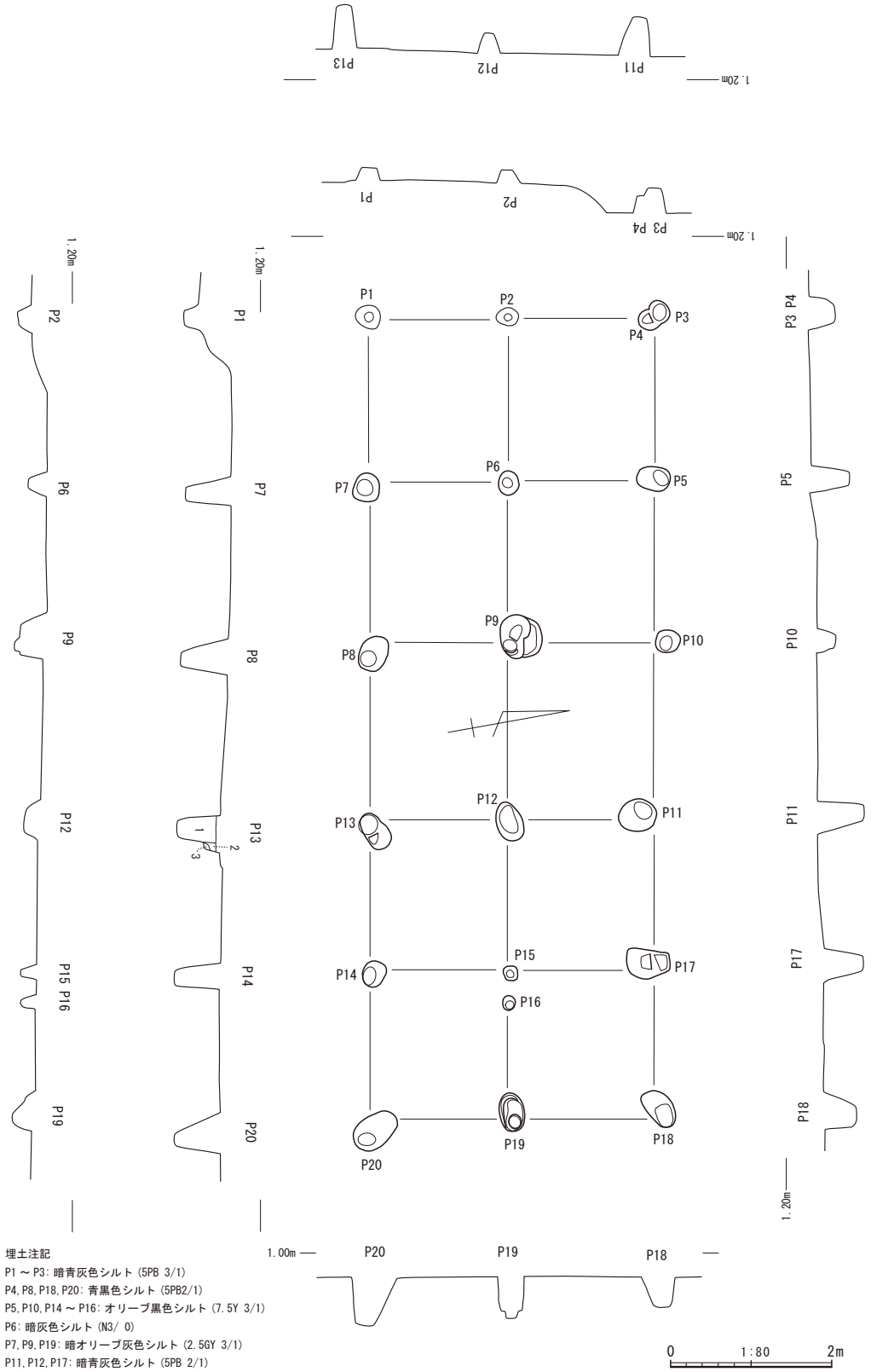
SB1005と重複しているが、双方で柱穴の切り合いがないため、前後関係の判断は困難である。ただ、SB1005とSB1006はともに総柱建物ではあるが、大きさと主軸の方向が大きく異なるため、双方の関連は薄いと考えた方が良いであろう。柱根が残っているものはなく、断面の観察では、柱穴を抜き取った痕跡も認められなかった。

この掘立柱建物跡も遺物が出土しなかったため、時期の判断が困難である。根拠としては弱いが、周囲で検出した遺構から、12世紀～13世紀に収まると考えておくのが妥当であろう。

（６）SB1007（第32図）

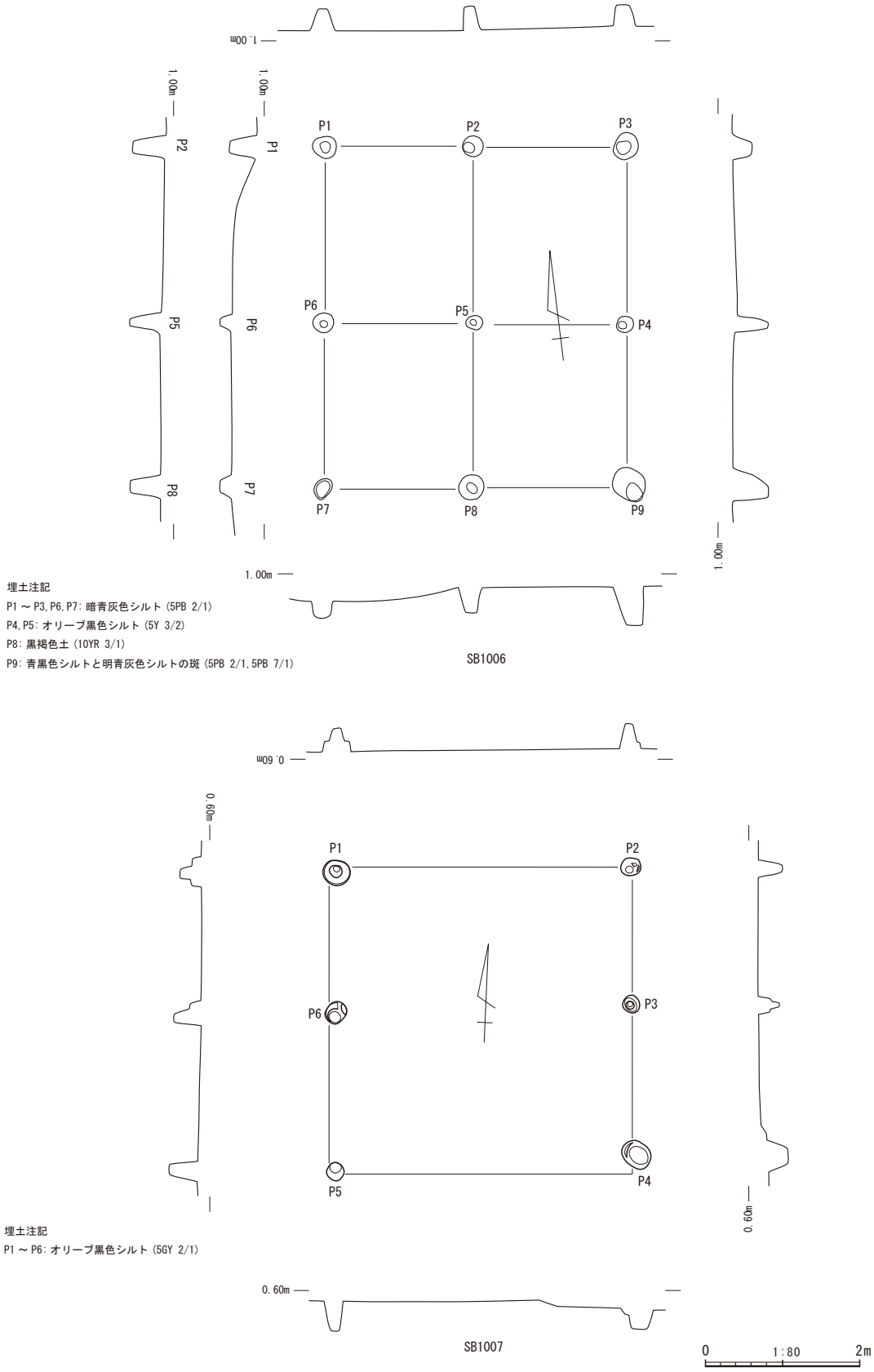
３区のP2区で検出した掘立柱建物跡で、桁行２間、梁行１間の側柱建物跡である。主軸の方向はN3°　Wである。規模は桁行3.92 m、梁行が3.76 m、面積は14.74 ㎡で、正方形に近い。柱間距離は、桁行の平均が1.81 m、梁行の平均が3.84 mである。西向遺跡で検出した掘立柱建物跡の中では、梁行の柱穴間の距離が長い方である。付近で検出したSB1005、SB1006とは主軸の方向が異なることから、単独で存在した建物と考えられる。柱穴の埋土はすべて単一層で、オリーブ黒色シルトである。

この建物跡からは遺物が出土していないため、時期の判断は困難である。これも根拠としては弱いが、他の掘立柱建物跡と同様、12世紀～13世紀に収まると考えておくのが妥当であろう。



埋土注記
P1 ～ P3: 暗青灰色シルト (5PB 3/1)
P4, P8, P18, P20: 青黒色シルト (5PB2/1)
P5, P10, P14 ～ P16: オリーブ黒色シルト (7.5Y 3/1)
P6: 暗灰色シルト (N3/ 0)
P7, P9, P19: 暗オリーブ灰色シルト (2.5GY 3/1)
P11, P12, P17: 暗青灰色シルト (5PB 2/1)
P13
１．黒褐色シルト (2.5Y 3/1)
２．灰オリーブ褐色シルト (2.5Y 3/3)
３．オリーブ黒色シルト (7.5Y 3/1)

第 31 図　掘立柱建物跡 SB1005 実測図



第 32 図　掘立柱建物跡 SB1006・1007 実測図

３　井戸跡

井戸跡は 17 基検出した。今回の調査では、井戸枠のある井戸跡はなく、井戸跡は全て素掘りであった。そのため、井戸跡と土坑の区別が困難な場合があったが、次の通り区別した。深さが 10cm ～ 30cm 程度の浅い掘り込みで、井戸としての機能が想定できない遺構を土坑とし、それよりも深いものは井戸として機能した可能性があると判断した。

井戸跡は微高地上に点在しており、掘立柱建物跡といった施設に伴うと判断できるものはない。SE1010 と SE1014 のように、近接している上に、同時期に相互関連を持っていた可能性が考えられるものもあるが、それ以外は、各井戸が単独で機能していた状況が想定される。

出土遺物から時期を判断できたものが少ないため、時期の判断が困難な井戸跡もあるが、おおかたは 12 世紀～ 13 世紀の中に収まると考えられる。

（１）SE1001（第 33 図）

２区の G1 区、調査区の北西隅で検出した。平面形は楕円形に近いと思われるが、半分程度が調査区外に出ているため、平面形の全体と長径は不明である。短径は 1.52 m、深さは 0.96 mである。断面形状は漏斗状になっている。底面は平坦である。

埋土は、黒色系の粘性シルトと灰色粘性シルトであるが、１層～３層は、この井戸跡を切っている SD1001 の埋土の可能性がある。しかし、SD1001 と SE1001 では埋土が似ているため、平面、断面ともに両者の区別は困難であった。埋土は、いずれも地山起源の土で、黒色系粘性シルトと灰色粘性シルトが互層に近い堆積になっている。このことから、洪水のような短時間での堆積ではなく、人為的に埋め戻したものでもなく、時間をかけて自然に堆積したと考えられる。

この井戸跡からは時期を特定できる遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難であるが、12 世紀の溝跡 SD1001 に切られていることから、少なくとも 12 世紀以前と考えられる。

（２）SE1002（第 33 図）

２区の G2 区、調査区の北端で検出した。半分程度が調査区外に出ているため、検出できなかった部分があるが、平面形が正円に近いと考えられるため、直径は 0.72 mと推定できる。深さは 0.60 mである。断面形状は漏斗状である。底面は平坦に近い。埋土は黒色粘性シルトで、砂を含まないことから、洪水によって短時間に堆積したのではなく、時間をかけて自然に堆積したと考えられる。

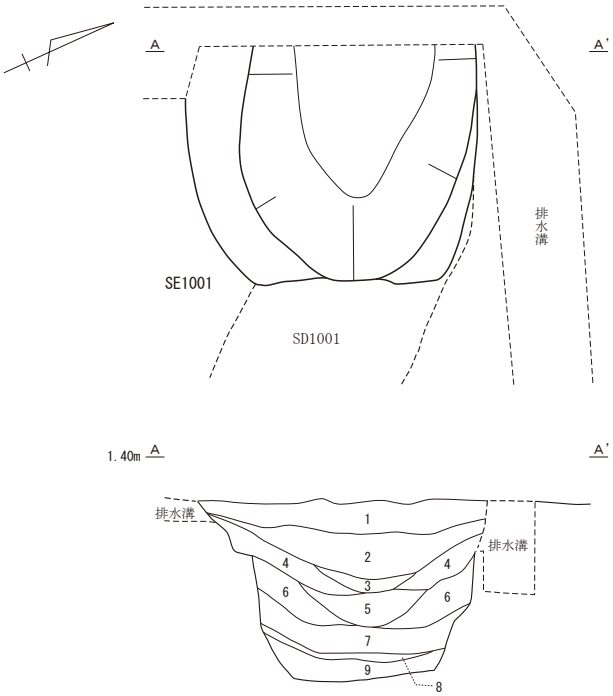
時期を特定できる遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難である。積極的な根拠はないが、他の遺構と同様、12 世紀～ 13 世紀の中に納まると推定される。

（３）SE1003（第 33 図）

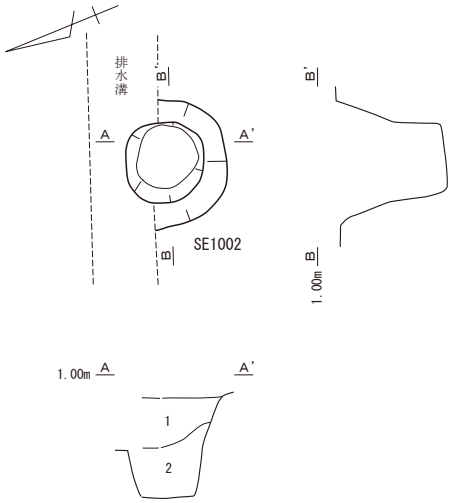
２区の H1 区で検出した。半分程度が調査区外に出ているため、検出できなかった部分があるが、平面形が正円に近いと考えられるため、直径は 1.20 mと推定できる。深さは 1.00 mである。断面形状は漏斗状である。埋土は黒色系シルトで、いずれも類似した埋土であることから、比較的短時間のうちに自然堆積したと考えられる。

この井戸跡からは、山茶碗（第 35 図－１）と木製品（第 35 図－６）が出土した。山茶碗（第 35 図－１）は渥美・湖西産で、底部の破片で、高台は低く、高台を付けた時の撫では雑である。高台接地面には籾痕が見られる。高台が低く、作りが雑なことから、13 世紀前半（Ⅲ期－１）と考えられるが、12 世紀後半にさかのぼる可能性もある。

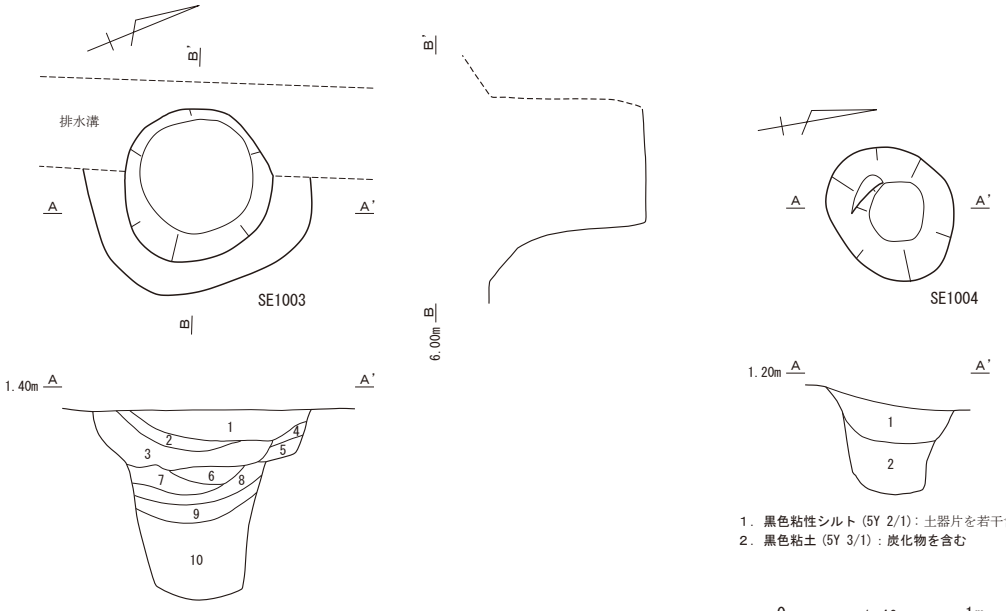
木製品（第35図－６）は、用途不明の板状木製品である。腐食が進んでいるため、加工痕は観察できない。先端が折れ曲がっているが、意図的に曲げたのか、廃棄、あるいは埋没後に曲がったのかは不明である。樹種はヒノキである。



１．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 2/2）：土器片を若干含む
２．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：地山土の流れ込み
３．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/2）：地山土の流れ込み
４．灰色粘性シルト（5Y 4/1）：炭化物を若干含む。地山土の流れ込み
５．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/2）：炭化物を若干含む。地山土の流れ込み
６．灰色粘性シルト（5Y 4/1）：3 ㎝以下の地山土の塊を多く含む。地山土の流れ込み
７．灰色粘性シルト（5Y 4/1）：地山土の流れ込み。炭化物をやや多く含む
８．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/2）：炭化物を層状に含む。地山土の流れ込み
９．灰色粘性シルト（5Y 4/1）：炭化物を層状に含む。地山土の流れ込み



１．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：細かい地山土をやや多く含む。土器片若干含む
２．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：3 ㎝大の地山土を斑点状に多く含む



１．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：細かい地山土を若干含む
２．黒色シルト（5Y 3/1）：炭化物・灰を多く含む
３．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：2 ㎝大の地山土を若干含む
４．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 2/1）：灰をやや多く含む
５．黒色シルト（5Y 2/1）：炭化物・灰を多く含む
６．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：炭化物を多く含む。3 ㎝大の地山土を含む
７．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：3 ㎝大の地山土をやや多く含む。炭化物を若干含む
８．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 2/2）：炭化物を多く含む
９．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：炭化物を若干含む
10．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：炭化物を若干含む

１．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：土器片を若干含む
２．黒色粘土（5Y 3/1）：炭化物を含む

0　1:40　1m

第 33 図　井戸跡 SE1001 ～ 1004 実測図

（４）SE1004（第 33 図）

２区の H2 区で検出した。平面形はやや歪んだ円形で、長径 0.72 m、短径 0.68 m、深さ 0.56 mである。埋土は黒色シルト～粘土で、粘性の違いにより２層に分けたが、色調は酷似している。比較的短時間で自然堆積したと考えられる。

遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難であるが、近接して検出した SE1003 と同様、13 世紀前半、もしくは 12 世紀後半の可能性が考えられる。

（５）SE1005（第 34 図）

２区の J1 区で検出した。平面形はやや歪んだ円形で、長径 1.40 m、短径 1.30 m、深さ 0.90 mである。断面形状は漏斗状になっている。埋土は地山が起源で、３層に分けたが、非常によく似ていることから、比較的短時間のうちに自然堆積したと考えられる。

この井戸跡からは山茶碗（第 35 図－２～５）が出土した。２は東遠江産の山茶碗で、口縁が外反する特徴がある。時期は 12 世紀中頃（Ⅰ期）と思われる。３も東遠江産で、高台が低く、接地面に籾痕が付いている。内面には自然釉が付いており、重ね焼きの痕跡が見られる。体部に丸みがあることから、12 世紀後半～末（Ⅱ期）と思われる。４は渥美・湖西産で、低く潰れた高台が付いていて、高台接地面には籾痕が見られる。体部の形態は不明であるが、高台の形状から 12 世紀後半（Ⅰ期－２）と思われる。５は渥美・湖西産で、低く太い高台が付いており、高台接地面には籾痕が見られる。12 世紀末と思われる。なお、４と５は体部の立ち上がりが直線的であることから、体部の丸みが無くなっている可能性があり、その場合は 13 世紀前半（Ⅲ期－１）まで時期が下る可能性が残されている。

この井戸跡の時期は、出土遺物から 12 世紀後半～末と考えられるが、13 世紀前半まで下る可能性もある。

（６）SE1006（第 34 図）

２区の J1 区で検出した。平面形は円形に近く、長径 1.84 m、短径 1.56 m、深さ 1.04 mである。井戸跡の北隅にだけ段になった部分が見られる。底面は平坦である。

埋土は灰色シルトとオリーブ黒色シルトで、いずれも地山が起源である。４層～８層が灰色シルトとオリーブ黒色シルトの互層になっているのは、オリーブ黒色シルトには未分解の植物遺体が含まれているため、重い灰色シルトが先に沈殿し、その上に軽い植物遺体を含んだオリーブ黒色シルトが沈殿するように堆積したためと考えられる。

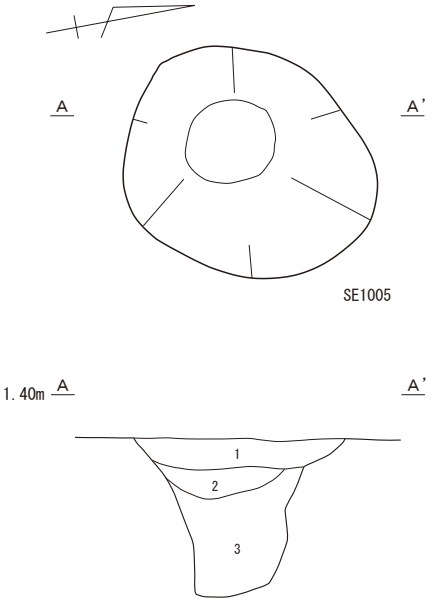
遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難である。根拠としては弱いが、SE1005 に近接して掘られた井戸であることから、時期も SE1005 と同様に 12 世紀後半～末で、13 世紀前半まで下る可能性がある。

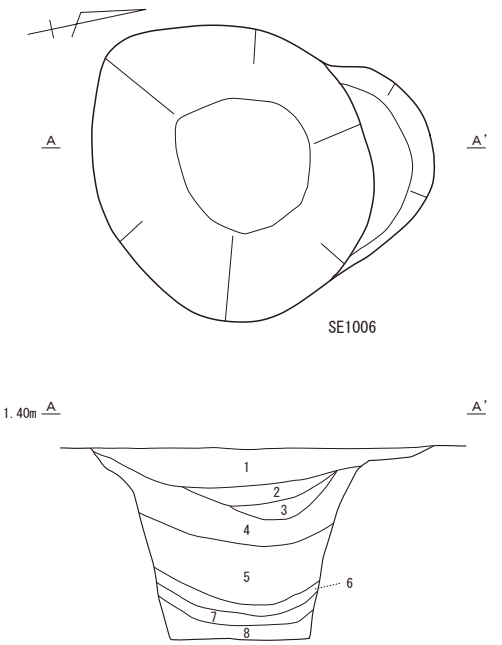
（７）SE1007（第 34 図）

２区の J1 区で検出した。平面形はほぼ円形で、長径 1.40 m、短径 1.36 m、深さ 0.96 mである。底は平坦に近くなっている。埋土はオリーブ黒色のシルトで、粘性の違いや包含物によって分層したが、色調は非常によく似ている。

この井戸跡からは、木製の柄杓が出土した（第 35 図－７）。一木から削り出してある。杓の部分に年輪が見られることから、直径 10cm 程の丸材から製作したと思われる。湾曲した柄の外周側は、柄の基部から先端に向かって工具で削っている。湾曲した内周側は、逆に柄の先端から基部に向かって工具で削っている。杓の内側は、時計回りの削り痕と平行する削り痕が見られる。杓の外側は、反時計回りに削ってある。樹種はクロマツである。

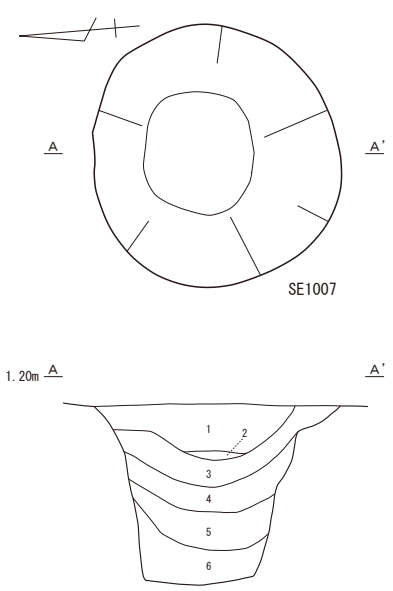
時期を判断できる遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難である。根拠としては弱いが、他の井戸跡と同様、12 世紀～ 13 世紀に掘られたと考えるのが妥当であろう。

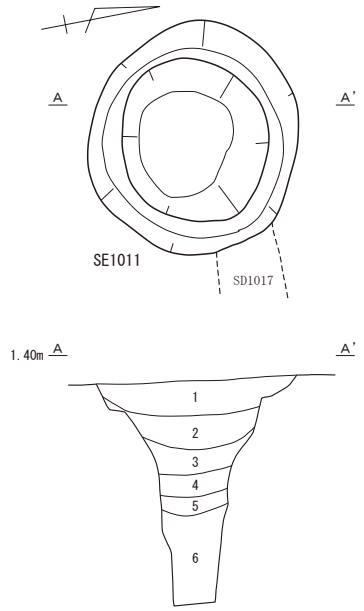




1．灰色粘性シルト (5Y 4/1)：土器片を若干含む
2．灰色粘性シルト (5Y 4/1)：細かい地山土やや多く含む
3．灰色粘性シルト (5Y 4/1)：細かい地山土と炭化物を含む

1．灰色粘性シルト (5Y 4/1)：土器片を若干含む
2．灰色粘性シルト (5Y 4/1)：土器片・5㎝程度の地山礫を若干含む
3．灰色粘性シルト (5Y 4/1)：細かい地山土を斑点状にやや多く含む。土器片を若干含む
4．灰色粘土 (5Y 4/1)：植物遺体を若干含む。細かい地山土を斑点状にやや多く含む
5．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：5㎝大の地山土を若干含む。植物遺体を含む。
細かい地山土を斑点状にやや多く含む
6．灰色粘性シルト (5Y 5/1)：地山土の流れ込み（落ち込み）
7．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：植物遺体を若干含む。細かい地山土をやや多く含む
8．灰色粘性シルト (5Y 5/1)：地山土の流れ込み（落ち込み）



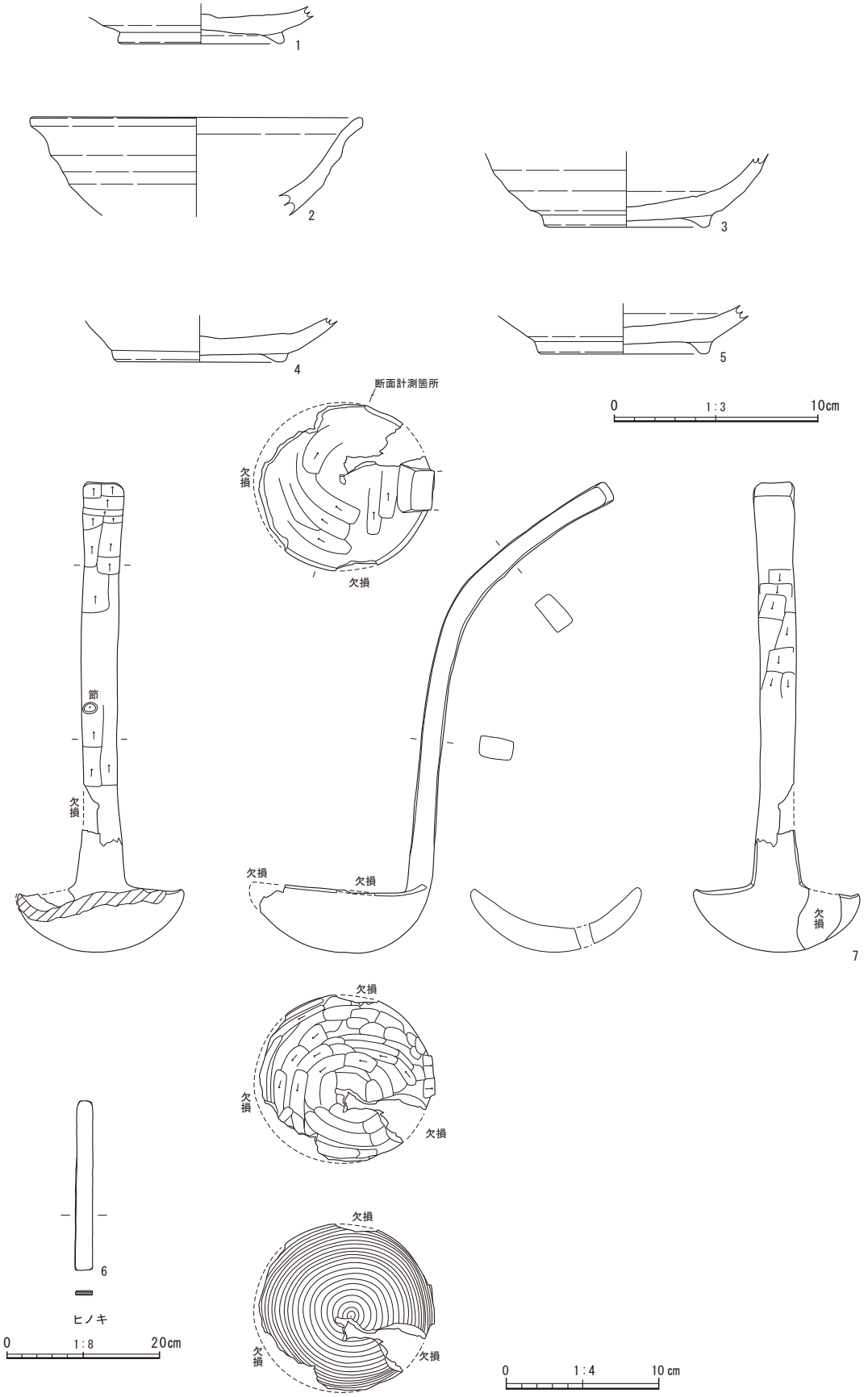


1．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：細かい地山土を若干含む
2．オリーブ黒色シルト (5Y 3/2)：炭化物・灰を多く含む
3．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：2㎝大の地山土を若干含む
4．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 2/1)：灰をやや多く含む
5．オリーブ黒色シルト (5YR 3/2)：炭化物・灰を多く含む
6．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 2/1)：炭化物を多く含む。3㎝大の地山土を含む

1．灰色粘性シルト (5Y 4/1)
2．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)
3．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：細かい地山土を含む
4．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)
5．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：細かい地山土をやや多く含む
6．灰色粘性シルト (5Y 4/1)：細かい地山土をやや多く含む

0　1:40　1m

第 34 図　井戸跡 SE1005 ～ 1007・1011 実測図



第 35 図　井戸跡 SE1003・1005・1007 出土遺物実測図

（８）SE1011（第 34 図）

２区の K98 区で検出した。平面形は円形に近く、長径 1.24 m、短径 1.16 m、深さ 1.24 mである。断面形状は漏斗状で、底に行くに従って狭くなり、底は平坦である。

平面図では、SD1017 を切っているように示しているが、調査の所見では、SD1017 とつながっていた可能性が高く、SE1011 の井戸から汲み上げた水を SD1017 を介して流していた、あるいは、SD1017 を介して SE1011 に水を流し込むといった機能を可能性を想定できる。これは、SE1011 に隣接して掘られた SD1018 も同様で、SD1018 は、SE1011 から延びるように掘られている（第 13 図）。このことから、SD1018 も SE1011 から汲み上げた水を流す、あるいは、SE1011 に水を流し込む機能を持っていた可能性を想定できる。

埋土は、灰色粘性シルトとオリーブ黒色粘性シルトで、２層～５層を形成するオリーブ黒色粘性シルトは、非常に似ており、分層が困難であった。短期間の間に堆積したと考えられる。

出土遺物は、図示はできなかったが、山茶碗の破片が出土している。時期の特定が困難な破片であるが、12 世紀代と考えられる。

（９）SE1008（第 36 図）

２区の K98 区で検出した。平面形はほぼ円形で、長径 2.30 m、短径 2.30 m、深さ 1.25 mで、西向遺跡で検出した井戸の中では、大型の部類に入る。

断面図に現れているように、掘り込みに近い部分と底部に近い部分にそれぞれ、段になった部分がある。埋土のうち最上層の１層は、この井戸の上に形成された自然流路、SD1012 の埋土である。２層以下が SE1008 の埋土で、黒色系シルトと灰色系シルトが互層に近い関係で堆積している。いずれも地山が起源の堆積物で、黒色系シルトには、未分解の植物遺体や炭化物が含まれている。一気に堆積した状況ではなく、人為的に埋めた状況でもなく、時間をかけて堆積したと考えられる。

遺物は、弥生土器（第 37 図－１）が出土している。壺と思われる器種の胴部下半～底部の破片で、外面は工具を使って丁寧に撫でてある。内面も丁寧に撫でてある。やや上げ底になっていることから、弥生時代中期末～後期初頭と考えられる。これは流れこみと考えて良い。

(10) SE1012（第 36 図）

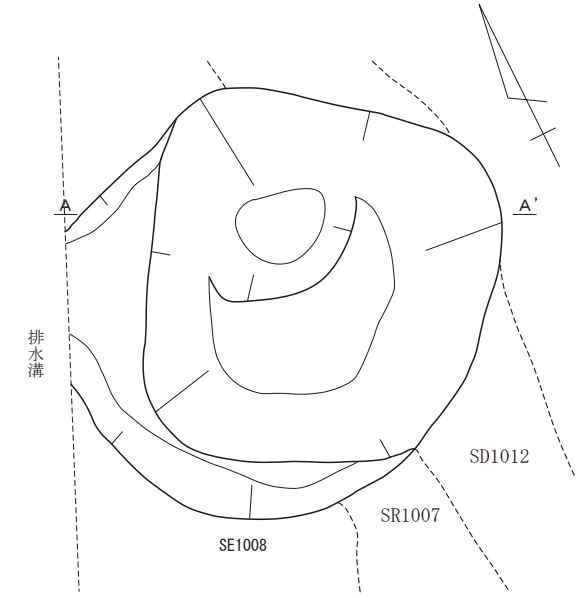
３区の M97 区～N97 区で検出した。平面形はほぼ円形で、長径 1.44 m、短径 0.96 m、深さ 1.52 mである。底に行くに従って狭くなっていくため、断面は逆台形になり、底面は平坦である。埋土は黒色系のシルトで、各層とも色調が似ているため、分層は容易ではなかった。各層を詳細に見ると、炭化物や未分解の植物遺体が細かい層状に堆積した状況が観察できたことから、時間をかけて沈殿するように堆積していったと考えられる。

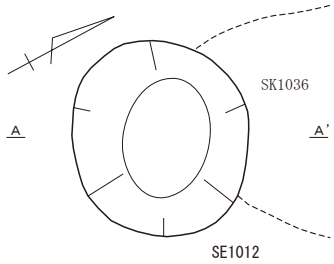
この井戸跡からは、山茶碗が出土した（第 37 図－２～４）。２は渥美･湖西産の山茶碗で高台は低く、高台を付けた際の撫で調整は雑である。底部が分厚くなっている。口縁部は僅かに外反している。内面に僅かに炭が付いている。体部の丸みが残っていることから、12 世紀後半～末（Ⅰ期－２～Ⅱ期）と考えられる。

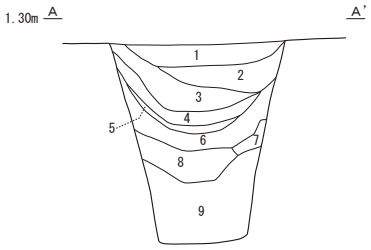
３は渥美・湖西産の小碗で、高台は外側に張り出すように付けてある。体部は緩やかな曲線を描いて立ち上り、口縁は外反している。内面に墨が付着していて、表面が滑らかになっていることから、硯に転用された可能性がある。12 世紀後半（Ⅰ期－２）と考えられる。

４は東遠江産の小碗で、高台は外側に張り出すように付けてある。体部は緩やかな曲線を描いて立ち上り、口縁は外反している。内面に重ね焼きの跡がある。内外面に自然釉が付いている。12 世紀後半（Ⅱ期）と考えられる。

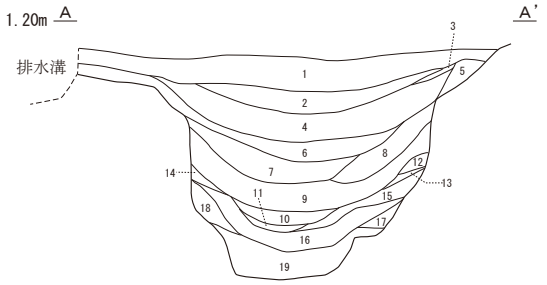
以上の出土遺物から、この井戸跡は 12 世紀後半と考えられる。





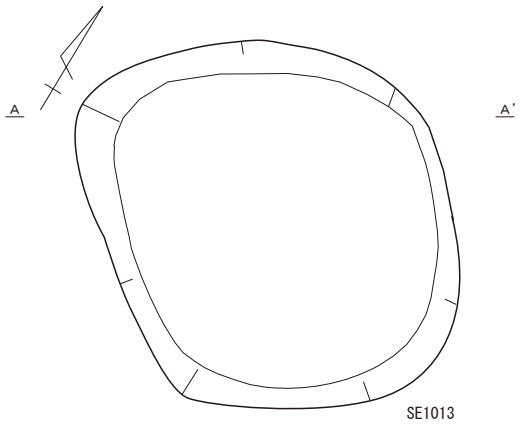


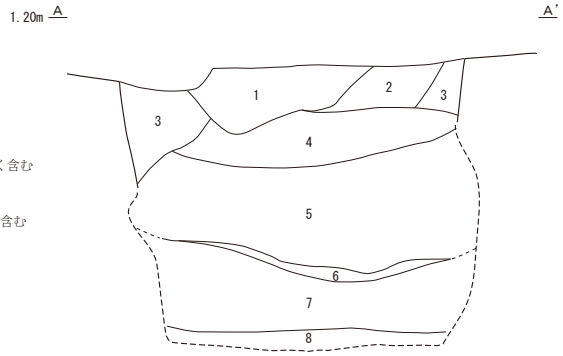
１．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/2)：鉄分を多く含む
２．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：炭化物・植物遺体をやや多く含む
３．黒色粘性シルト (10YR 1.7/1)：炭化物・植物遺体を多く含む
４．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：炭化物・植物遺体をやや多く含む
５．黒色粘性シルト (10YR 1.7/1)：炭化物・植物遺体を多く含む
６．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)
７．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：炭化物・植物遺体をやや多く含む
８．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 2/1)
９．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：炭化物・植物遺体をやや多く含む



１．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：井戸の上に形成された SD1012 の埋土

２層以下が SE1008 の埋土
２．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 2/2)：
３．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 2/2)：土器片を若干含む
４．灰色粘性シルト (5Y 4/1)：細かい地山土を斑点状に含む
５．灰色粘性シルト (5Y 4/1)
６．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 2/2)：植物遺体やや多く含む。土器片を若干含む
７．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：炭化物・植物遺体やや多く含む。土器片を若干含む
８．灰色粘性シルト (5Y 4/1)：炭化物・植物遺体やや多く含む。土器片を若干含む
９．灰色粘土 (5Y 4/1)：植物遺体多量に含む。炭化物やや多く含む。地山土塊を斑点状に含む
10．オリーブ黒色粘土 (5Y 3/1)：炭化物・植物遺体多量に含む
11．オリーブ黒色粘土 (5Y 2/2)：炭化物・植物遺体多量に含む
12．灰オリーブ粘性シルト (5Y 4/2)：地山土の崩落
13．灰色粘性シルト (5Y 4/1)：地山土の流れ込み
14．オリーブ黒色粘土 (5Y 3/1)：炭化物・植物遺体やや多く含む
15．黒色粘土 (5Y 2/1 ～ 7.5Y 2/1)：炭化物多量に含む。植物遺体やや多く含む
16．オリーブ黒色粘土 (5Y 3/1)：炭化物・植物遺体やや多く含む
17．灰色粘土 (5Y 4/1)：植物遺体多く含む
18．オリーブ黒色粘土 (5Y 3/1)：炭化物・植物遺体やや多く含む
19．灰色粘土 (5Y 4/1)：植物遺体やや多く含む

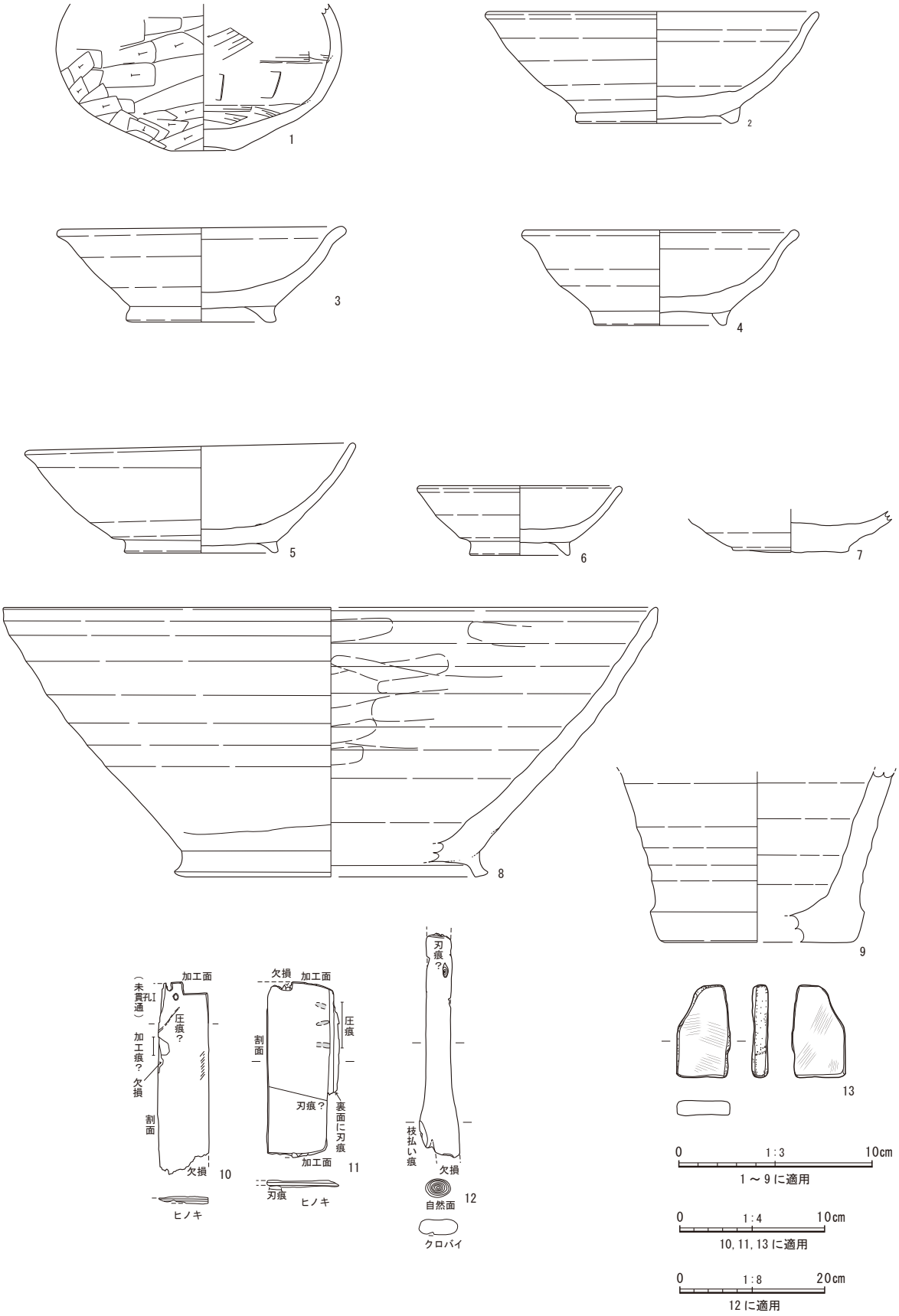




１．黒色粘性シルト (2.5Y 2/1)：焼土・炭化物多量に含む
２．灰色粘性シルト (5Y 4/1)：3 ㎝大の地山土を若干含む
３．灰色粘性シルト (7.5Y 5/1)
４．オリーブ黒色粘性シルト (5Y3 3/1)：3 ㎝大の地山土を斑点状にやや多く含む
５．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：3 ㎝大の地山土を斑点状に多く含む
６．黒色粘性シルト (2.5Y 2/1)：炭化物多量に含む
７．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：3 ㎝大の地山土・植物遺体を多量に含む
８．黒色粘性シルト (5Y 3/1)：植物遺体多量に含む

0　1:40　1m

第 36 図　井戸跡 SE1008・1012・1013 実測図



第 37 図　井戸跡 SE1008・1012・1013 出土遺物実測図

(11) SE1013（第 36 図）

３区の M98 区で検出した。平面形は不整形の井戸跡で、長径 2.04 m、短径 1.96 m、深さは、確認できたのは 1.60 mまでである。この井戸跡の掘削途中で、壁面がオーバーハングしていることが判明したが、壁面や検出面にひびが入るなど、壁面崩落の兆候が現れたため、安全を確保できる範囲での掘削に留めた。このため断面図では、掘削を停止した部分を点線で表示してある。したがって、本来の深さと壁面のラインは不明である。

埋土は黒色系のシルトと灰色のシルトからなっている。下の方に堆積した７層と８層には、未分解の植物遺体が多く含まれている。地山の中で、植物遺体を含んだ部分の土が流れ込んだと考えられる。

この井戸跡からは、山茶碗など比較的多くの遺物が出土した（第 37 図－５～ 12)。

５は渥美・湖西産の山茶碗で、高台は外側に張り出すように付けてある。体部は緩やかな曲線を描くように立ち上っている。口縁は外反していない。重ね焼きの跡がある。内面に付いた自然釉は発泡している。時期は 12 世紀後半（Ⅰ期－２）と考えられる。

６は渥美・湖西産の山茶碗の小碗で、高台は外側に張り出すように付けてある。体部は緩やかな曲線を描くように立ち上っている。内面には僅かに自然釉が付いている。これも 12 世紀後半（Ⅰ期－２）と考えられる。

７は渥美・湖西産の山茶碗で、高台は付けられていない。底面には糸切り痕が残っている。焼成は不良である。高台が付けられていないことから、13 世紀前半（Ⅲ期－１）と考えられる。

８は山茶碗類の鉢である。低い高台が付けられている。高台端部は、外側につまみだすように撫でて仕上げてある。体部は直線的に立ち上がっている。内外面とも回転撫でで仕上げてあるが、内面上半に回転撫での後に不定方向の撫でた痕跡がある。12 世紀後半～ 13 世紀前半の中に収まるであろう。

９は陶臼の胴部～底部の破片で、内外面とも回転撫でで仕上げてある。これも 12 世紀後半～ 13 世紀前半の中に収まるであろう。

10 は板状木製品で、樹種はヒノキである。半分、もしくは半分以上が欠損している。両面にわずかに加工痕が残っている。上端側面と下端側面には加工痕が残っている。実測図右端の部分は、潰れており、圧痕が残っている。

11 も板状木製品で、樹種はヒノキである。半分以上を欠損している。表面にはわずかに加工痕が残っている。上端側面には加工痕が残っている。１か所、穴を開けようとした痕跡があるが、貫通していない。10 と 11 は形態が非常に似ているため、同一個体と思われるが、接合はしない。

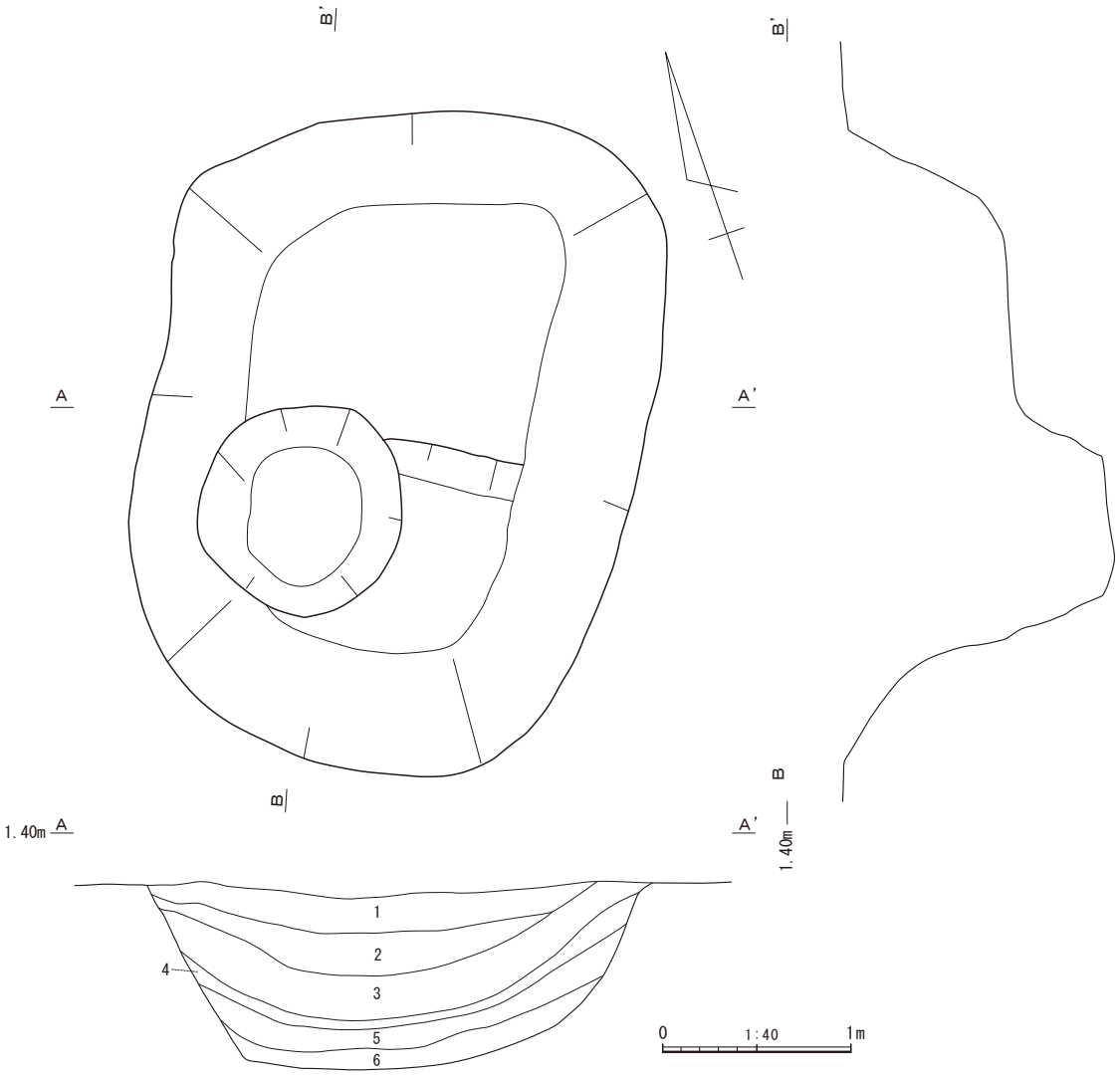
12 は杭の可能性が考えられる土木材で、樹種はクロバイである。両端は欠損している。表面に加工痕は見られないことから、丸木をそのまま使用していると考えられる。実測図下部には、枝を切り落とした痕跡が見られる。13 は砂岩製の砥石で、ほぼ全面に研磨痕が見られる。

出土した山茶碗から、この井戸跡の時期は 12 世紀後半～ 13 世紀前半と考えられる。

(12) SE1009（第 38 図）

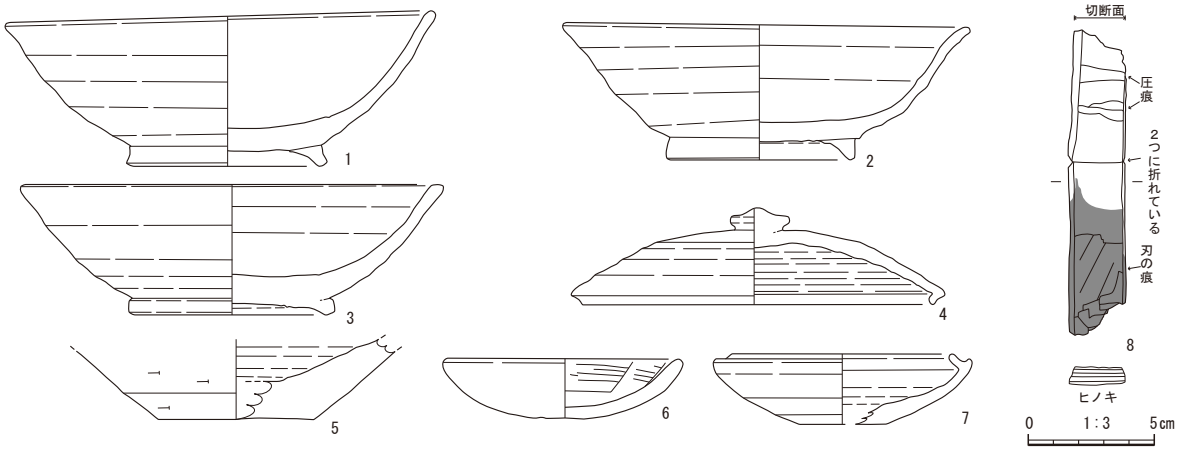
２区のL98～M98区で検出した。平面形は楕円形に近く、長径3.60 m、短径2.80 m、深さ1.00 mである。今回の調査で検出した井戸跡の中では、比較的大型である。断面図に現れているように、段になっている部分がある。井戸内部には直径 1.20 m程の円形の穴を掘ってある。埋土は灰色粘性シルトとオリーブ黒色粘土からなっており、未分解の植物遺体を含んだ層が多い。

この井戸跡からは、比較的多くの遺物が出土した（第 39 図)。１は渥美・湖西産の山茶碗で、高台は外側に張り出すように付けてあり、高台接地面には籾痕が見られる。体部は緩やかな曲線を描くように立ち上り、口縁はほとんど外反していない。内面に自然釉が付いている。12 世紀後半（Ⅰ期－２）と考えられる。



１．灰色粘性シルト（7.5Y 4/1）：土器片を若干含む
２．灰色粘性シルト（7.5Y 4/1）：細かい地山土を斑点状に含む、植物遺体を含む
３．灰色～オリーブ黒色粘土（5Y 4/1 ～ 5Y 3/1）：拳大の地山土の塊、植物遺体を含む
４．オリーブ黒色粘土（5Y 3/1）：拳大の地山土の塊、植物遺体を含む
５．オリーブ黒色粘土（5Y 3/2）：植物遺体を多く含む
６．灰色粘土（7.5Y 4/1）：植物遺体やや多く含む。土器片を若干含む

第 38 図　井戸跡 SE1009 実測図



第 39 図　井戸跡 SE1009 出土遺物実測図

２は東遠江産の山茶碗で、高台は高めで、外側に張り出すように付けてある。体部には水挽の痕跡が明瞭に残っている。体部は丸く立ち上がり、口縁は外反していることから、12 世紀中頃（Ⅰ期－１）と考えられる。12 世紀前半（Ⅰ期－１）までさかのぼる可能性もある。いずれにしても、松井 1989 で示された編年のⅠ期の中に収まると考えられる。

３は渥美・湖西産の山茶碗で、体部の大きさの割に小さめの高台が付けられている。高台の接地面には籾痕が見られる。体部は緩やかな曲線を描いて立ち上り、口縁は外反していない。内面には自然釉が付いている。12 世紀後半（Ⅰ期－２）と考えられる。

４は須恵器の蓋で、全体を回転撫でで仕上げてある。口縁端部を短く折り曲げて、受け部を作っている。８世紀前半（Ⅴ期前半）と思われる。これは SE1009 の時期を示す遺物ではない。

５は須恵器の壺の底部と思われる。底部、胴部外面とも回転撫でが見られる。内面には工具を使用した回転撫でが見られ、自然釉が付いている。８世紀代（Ⅴ期）と思われる。これも SE1009 の時期を示す遺物ではない。

６は土師器の小皿で、底部から口縁部にかけてなだらかな曲線を描くようにで立ち上げてある。風化により、調整ははっきりしないが、撫でて仕上げてあると思われる。時期の判断は困難である。

７は須恵器の坏で、口径は９cm 程度と思われる。蓋受けの部分も小さい。時期は７世紀代（Ⅲ期末～Ⅳ期）と思われる。

８は用途不明の木製品で、樹種はヒノキである。上端面に切断した痕跡が残っており、上半部には圧痕が見られる。下半の表面には加工痕が残っている。

以上の出土遺物から、SE1009 の時期は 12 世紀代の中に収まると考えられる。

(13) SE1010（第 40 図）

２区の L99 区～ M99 区で検出した。平面形はほぼ円形で、長径 4.60 m、短径 4.50 m、深さ 2.00 mで、今回の調査で検出した井戸跡の中では最大規模である。埋土は灰色粘性シルトが主体で、部分的にオリーブ黒色粘性シルトが介在している。埋土はレンズ状堆積で、人為的に埋め戻したような状況は確認できない。６層から下の埋土には、植物遺体を多量に含んだ層があり、二枚貝の貝殻も含まれている。このことから、６層から下の埋土は、この地域一帯が滞水した時期に堆積したことが考えらえる。

この井戸跡からは多くの遺物が出土した（第 41 図）。

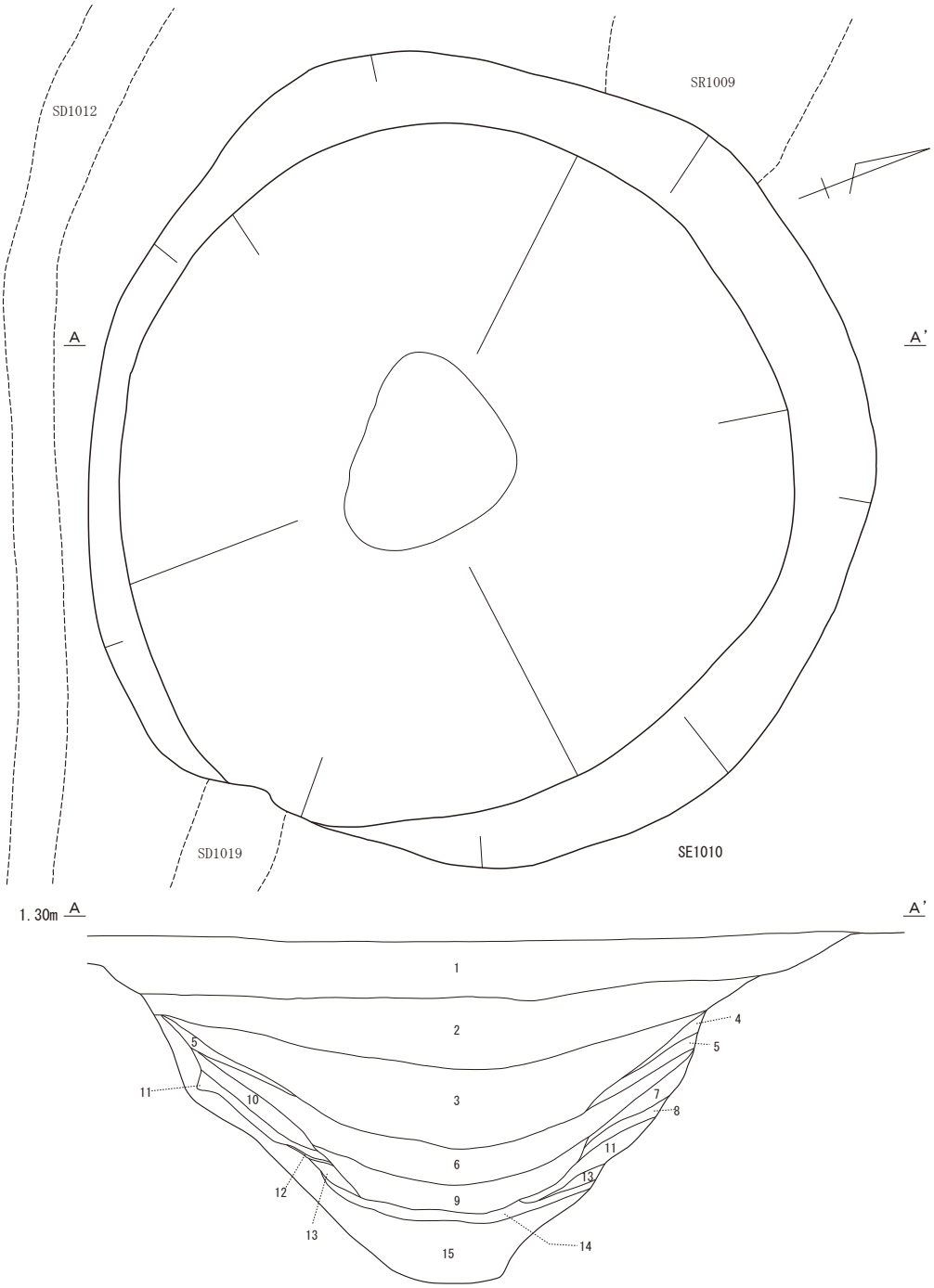
１は須恵器の壺の破片で、古墳時代後期と思われる。これは流れ込みの可能性が高く。SE1010 の時期を示す遺物ではない。

２は渥美・湖西産の輪花碗で、高台は太く、外側に張り出すように付けてある。体部は緩やかな曲線を描くように立ち上り、口縁は外反している。外面には自然釉がかかり、流れた痕跡も見られる。内面にも重ね焼きの痕跡の部分を除いて自然釉がかかっている。内面中央付近には黒色の付着物があることから、硯に転用された可能性がある。底面に「大」と見える墨書が確認できる。しっかりした高台が付いていること、体部に丸みがあり、口縁が外反している特徴から、時期は 12 世紀前半（Ⅰ期－１）まで遡ると考えられる。

３は東遠江産の小碗で、低い高台を付けてあるが、高台外側の撫でが雑である。高台接地面に砂粒の痕跡がある。内面全体に自然釉がかかっている。外面に線を一本引いただけの墨書が見られる。底面にも墨書と思われる黒ずみがあり、「×」のように見える。時期は 12 世紀中頃～後半（Ⅰ期）と思われる。

４は渥美・湖西産の小碗と思われる。低い高台を付けてあり、高台接地面には砂粒の痕跡がある。内面に自然釉がかかっている。底面中央付近には自然釉がかかっていないことから、重ね焼きをしたと思われる。底面に墨書「×」が見られる。時期は 12 世紀後半～末（Ⅰ期－２）と思われる。

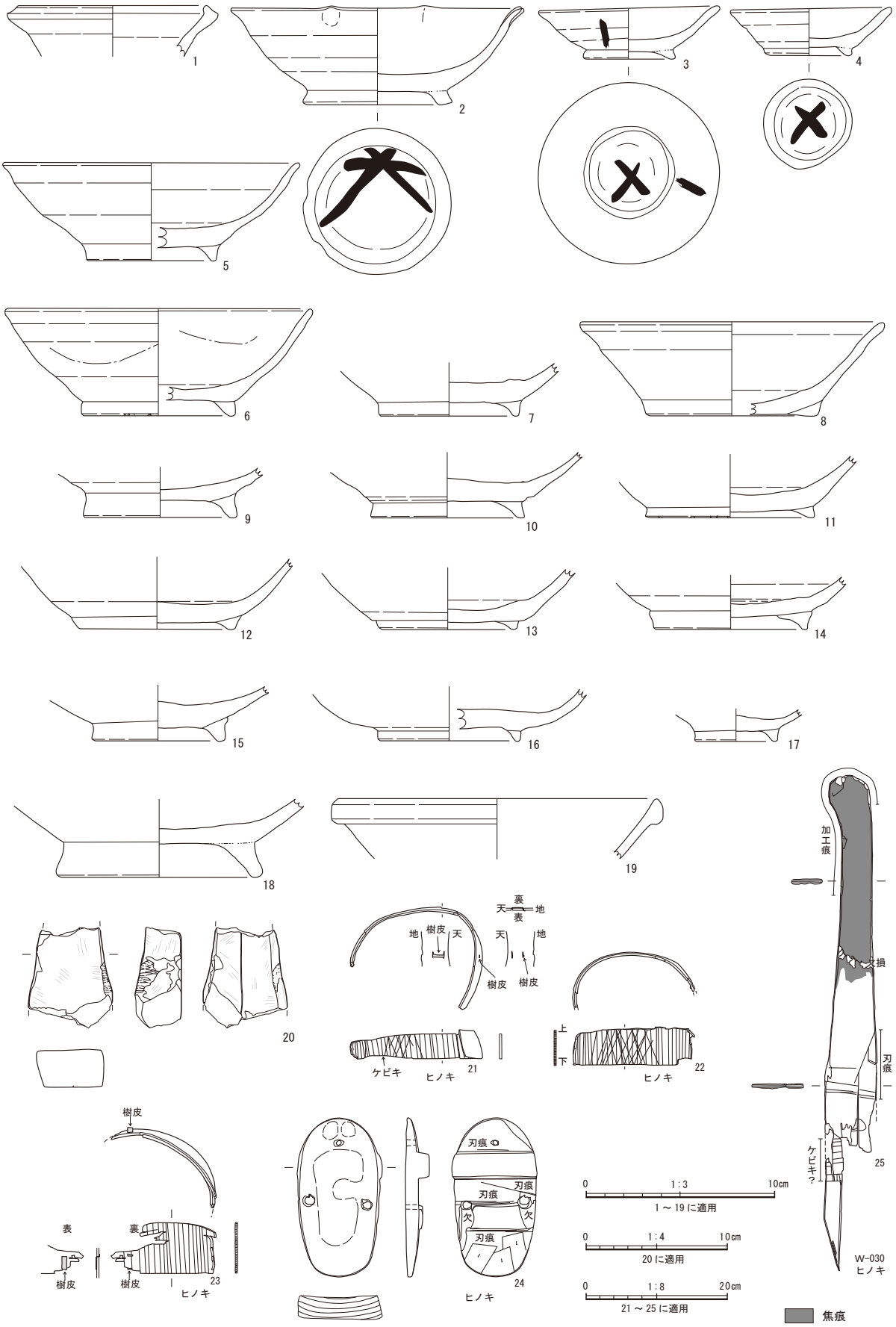
５は東遠江産の山茶碗で、高台は断面が逆台形になるしっかりした作りである。体部は緩やかな曲線



１．灰色粘性シルト (5Y 5/1)：土器片・拳大の礫を若干含む
２．灰色粘性シルト (5Y 4/1)：土器片を若干含む
３．灰色粘性シルト (5Y 4/1)：植物遺体多量に含む。土器片を若干含む
４．灰色粘性シルト (5Y 4/1)：細かい地山土やや多く含む
５．灰色粘性シルト (5Y 4/1) 植物遺体やや多く含む。細かい地山土やや多く含む
６．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/2)：植物遺体多量に含む
７．灰色粘性シルト (7.5Y 4/1 ～ 10Y 4/1)：3 ㎝大の灰色粘性シルト (5Y 4/1) 塊やや多く含む
８．灰色粘性シルト (7.5Y 4/1 ～ 10Y 4/1)：灰色粘性シルト (5Y 4/1) 粒を含む
９．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/2)：植物遺体多量に含む。土器片を若干含む
10. 灰色粘性シルト (5Y 4/1)：3 ㎝大の地山土を含む
11. 灰色粘性シルト (7.5Y 4/1 ～ 10Y 4/1)：3 ㎝以下の灰色粘性シルト (5Y 4/1) やや多く含む
12. オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：植物遺体多量に含む
13. 灰色粘性シルト (7.5Y 4/1 ～ 10Y 4/1)：細かい地山土多量に含む
14. オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：3 ㎝大の灰色粘性シルトやや多く含む
15. 灰色シルト (5Y 5/1)：植物遺体・種子多量に含む

0　1:40　1m

第 40 図　井戸跡 SE1010 実測図



第 41 図　井戸跡 SE1010 出土遺物実測図

で立ち上がり、口縁は僅かに外反している。口縁に輪花を作り出したような屈曲部分があることから、輪花碗の可能性がある。12 世紀前半（Ⅰ期）まで遡る可能性がある。

６は東遠江産の山茶碗で、高台は断面が逆台形になるしっかりした作りである。接地面には籾痕が付いている。体部～口縁は緩やかな曲線を描いて立ち上り、口縁は外反しない。口縁付近に釉を漬け掛けしてある。12 世紀前半～中頃（Ⅰ期）と思われる。

７～ 16 は、渥美・湖西産の山茶碗である。７は底部の破片で、高台はしっかりした作りである。体部の形態が不明であるが、12 世紀後半（Ⅰ期－２）になると思われる。

８の高台は非常に低く、接地面には籾痕が付いている。推定口径が 16cm 程あるが、体部が直線的に立ち上がっていることと、高台が低い特徴から、12 世紀後半～末で、12 世紀末に近い（Ⅱ期）と考えられる。

９は底部の破片で、高台は太く、高さもあり、高台を付けた際の撫でも比較的丁寧である。12 世紀後半（Ⅰ期－２）になると思われる。

10 の高台は外側に張り出すように付けられているが、推定される全体の大きさに比べると低い印象である。高台を付けた際の撫では丁寧である。内面に重ね焼きの痕跡がある。12 世紀後半（Ⅰ期－２）と考えられる。

11 の高台は低く、籾痕が付いている。高台のひび割れも多く、雑な印象を受ける。体部の立ち上がりが直線的になっているように思えることから、12 世紀末に近い（Ⅱ期）と考えられる。

12 の高台は低く、ひび割れが多く、剥落した部分もある。高台を付けた際の撫でも雑である。体部の形態が不明であるが、12 世紀後半～末（Ⅰ期－２）と考えられる。

13 の高台は低く、小さい。12 世紀末（Ⅱ期）と思われるが、13 世紀前半（Ⅲ期－１）まで下る可能性もある。

14 の高台は、つまみだすように作っているため、三角高台のように見えるが、高さが低く、高台を付けた際の撫でも雑である。高台の接地面には籾痕が付いている。時期は 12 世紀後半～末（Ⅰ期－２）と思われる。

15 の高台は太く、高さもあり、しっかりとした作りに見えるが、高台を付けた際のなでが丁寧でない。高台の設置面には籾痕が付いている 12 世紀後半（Ⅰ期－２）と思われる。

16 の高台は細く、低い。接地面には籾痕が付いている。体部の形態が不明であるが、12 世紀後半～末（Ⅰ期－２）に収まると思われる。

17 は東遠江産の小碗の底部片で、高台の作り方は丁寧である。12 世紀後半（Ⅰ期）と思われる。

18 は山茶碗の鉢の底部で、高台は外側に張り出すように付けられている。12 世紀代に収まるであろう。

19 は白磁で、口縁端部を折り返して肥厚させた玉縁碗である。12 世紀後半と考えられる。

20 は、砂岩製の砥石で、残っている部分では、全面に研磨痕がある。

21 ～ 23 は、曲げ物の側板で、樹種はヒノキである。21 と 23 には２か所に穿孔があり、樹皮製の紐を通してある。３点とも内側に、曲げ物に直行する方向と斜め方向の毛引き線が見られる。これら３点は接合はしないが、同一の曲げ物と思われる。

24 は連歯下駄で、樹種はヒノキである。一木から削りだしてあり、歯の片方は欠損している。鼻緒を通す穴は３か所開けてある。相当使い込んだと思われ、左足の方は、足の裏の形に摩滅している。

25 は、用途不明の板状木製品で、樹種はヒノキである。板状にするために表面を削った痕跡が見られる。一部に毛引きのような平行線が見られ、一端を鋭く尖らせてある。

以上のように、12 世紀後半～末の渥美・湖西産の山茶碗が多く見られることから、この井戸跡が機能した時期は、12 世紀後半～末と考えられる。

(14) SE1014（第 42 図）

３区の M99 区で検出した。平面形は円形に近く、長径 0.92 m、短径 0.88 m、深さ 0,56 mである。埋土は灰色粘性シルト、灰オリーブ粘性シルト、オリーブ黒色のシルト、粘土が主体である。いずれも地山起源の土で、地山の土を斑点状に含んでいる。

この井戸跡からは、渥美・湖西産の山茶碗が出土している（第 43 図－１）。しっかりとした高台が付けられており、高台接地面には籾痕が付いている。内面に墨が付着しており、表面が磨滅しているいることから、硯に転用されたと考えられる。体部の形態が不明であるが、高台がしっかり作られていることから、12 世紀後半（Ⅰ期－２）と考えられる。

ここで、SE1010 と SE1014 の関係、及び SE1010、SE1014 と、これらに近接する遺構 SR1009、SD1012、SD1020 との関係について触れる。

SE1010 と SE1014 は近接して掘られており、出土遺物から考えて、ほぼ同時期に機能していたと考えられる。両方の井戸の間には SD1019 が掘られており、調査時の所見から、SD1019 と SE1010、SE1019 の間に切り合いが認められないことから、SD1019 は SE1010 と SE1014 をつなぐ溝だったと考えられる。このことから SE1010 と SE1014 は、何らかの関連のある井戸であった可能性がある。SE1010 と SE1014 では、SE1010 の方が格段に規模が大きく、SE1014 は小規模であることから、積極的な根拠はないが、可能性としては、SE1014 は SE1010 の機能を補完するような役割があったと想定される。

SE1010 には SR1009 がつながっている。SR1009 の時期は後述するが、出土遺物から、SE1010 と同時期の 12 世紀後半～末の流路跡と考えられる。調査時の所見では、SE1010 と SR1009 の埋土が酷似していたこともあり、両者の切り合い関係は認められず、SE1010 と SR1009 がつながっていた可能性が高いと考えられた。このことから考えられる可能性として、これも積極的な根拠がある訳ではないが、SR1009 は SE1010 に水を流し込む機能があったと想定される。

また､SE1010 と SE1014 に隣接して SD1012 が掘られている。この溝からは遺物が出土しなかったため、この遺構単独で時期を決めることはできないが、12 世紀後半～末の SR1009 を切り、同じく 12 世紀後半～末の SD1016 に切られていることから、SD1012 は 12 世紀後半～末と考えるのが妥当である。このことから SD1012 は SE1010 と同時期に存在していた可能性が高い。これも検出状況からの想定でしかないが、SD1012 には、SE1010、SE1014 への導水といった機能が想定される。

さらに、SE1010 と SE1014 に近接して SD1020 が掘られている。この溝は長さ 26 mに渡る溝 SD1015 につながっていることから､SE1010 は､SD1020 を介して､SD1015 から集水していた可能性も想定できる。

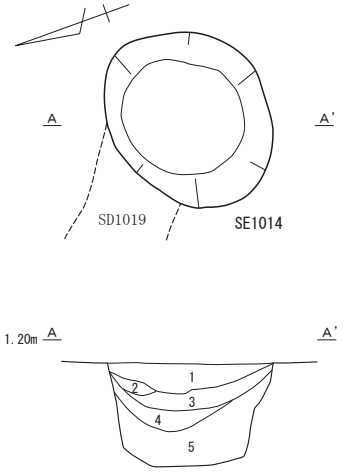
先に記載したように、当地では湧水を狙った井戸は期待できず、水を貯める井戸が主体であったことを考えると、SE1010,SE1014 を機能させるために、SD1012、SD1019、SR1009 といった導水用の溝や流路が存在したことが考えられる。

(15) SE1015（第 42 図）

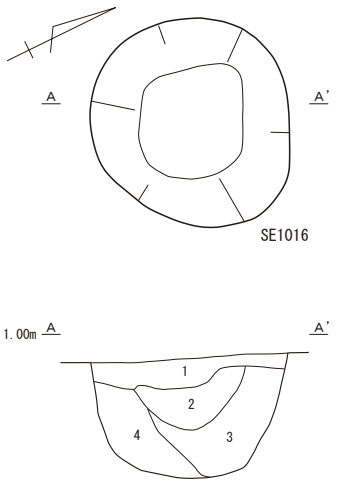
３区の 099 区で検出した。平面形はほぼ円形で、長径 1.48 m、短径 1.44 m、深さ 1.20 mである。埋土は黒色系のシルトで、色調が似ているため、分層は容易ではなかった。埋土の中には焼土を含むものがある。

この井戸跡からは、山茶碗などが出土した（第 43 図－２～５）。２は東遠江産の山茶碗で、高台は断面が逆台形のしっかりした高台であるが、高台を付けた際の撫でがやや甘い。口縁は外反している。12 世紀中頃（Ⅰ期－１～２）と考えられる。

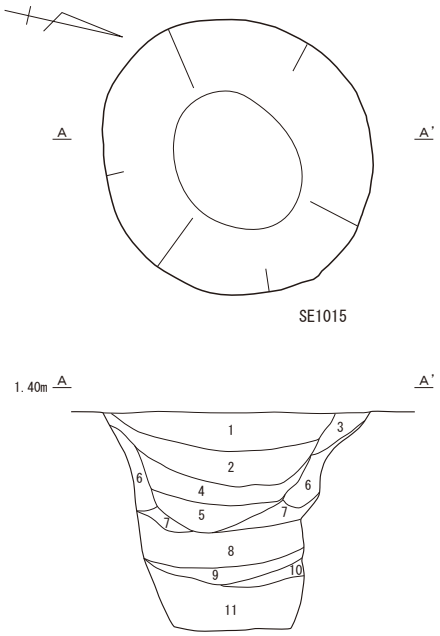
３は渥美・湖西産の山茶碗で、高台は断面が三角形に近い。体部は緩やかな曲線を描いて立ち上り、口縁は外反してない。内外面に自然釉が付いていて、内面の重ね焼きをした部分だけ自然釉が付いていない。口縁の外反が弱いこと､体部の丸みが少ないことなどから､12 世紀後半（Ⅰ期－２）と思われる。



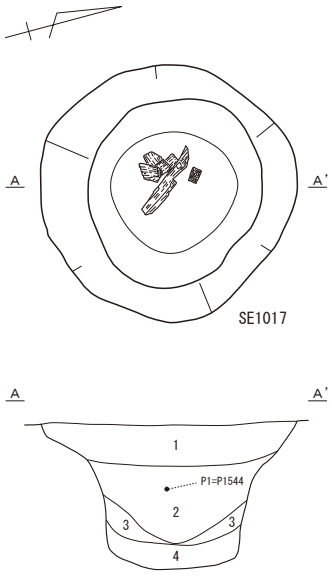
１．灰色粘性シルト (5Y 4/1)：炭化物を帯状に含む。地山土を斑点状に含む。土器片若干含む
２．灰オリーブ粘性シルト (7.5Y 4/2)：地山土の崩落
３．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：3 ㎝以下の地山土を斑点状に多く含む
４．オリーブ黒色粘土 (7.5Y 3/1)：2 ㎝以下の地山土を斑点状に若干含む
５．オリーブ黒色粘土 (7.5Y 2/2)：2 ㎝以下の地山土を斑点状に若干含む



１．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/2)：5 ㎝大の地山土塊をやや含む
２．灰オリーブ粘性シルト (5Y 4/2)：5 ㎝大の黒灰色土塊を多く含む
３．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：5 ㎝大の地山土塊を多く含む
４．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：5 ㎝大の地山土塊を若干含む。
底面に植物遺体あり



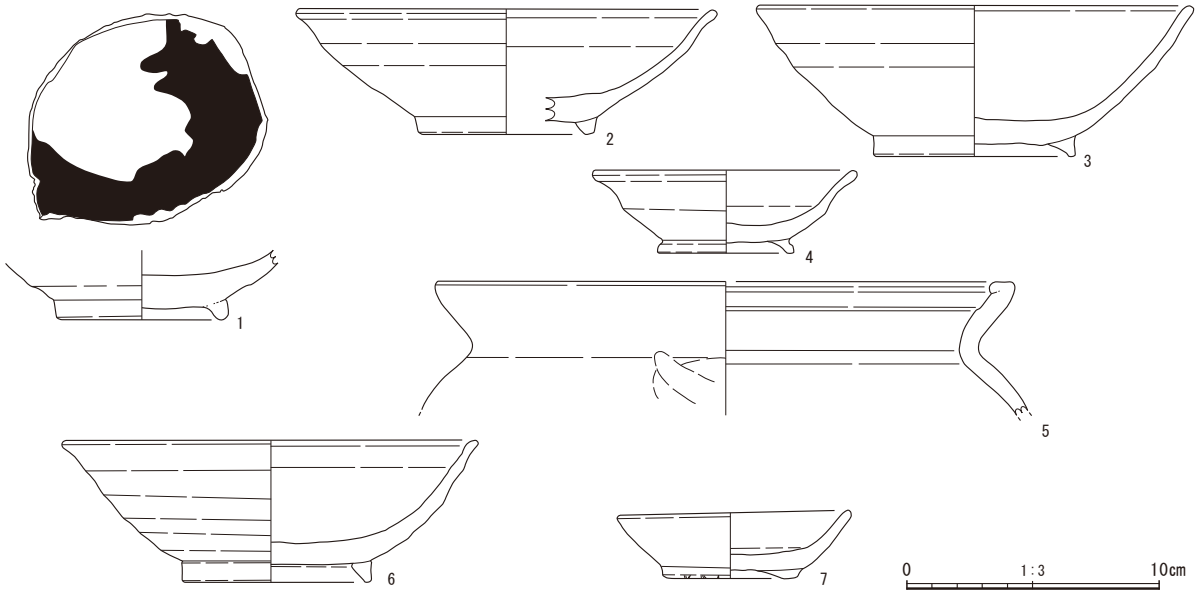
１．黒褐色粘性砂質シルト (2.5Y 3/1)：焼土粒・炭化物をやや多く含む
２．黒褐色粘性シルト (2.5Y 3/1)：粘土粒・炭化物をやや多く含む。径 2 ㎝以下の地山土を斑点状に若干含む
３．黒色砂質シルト (5Y 2/1)：炭化物を多く含む
４．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：焼土粒・炭化物をやや多く含む
５．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：焼土粒・炭化物を若干含む
６．黒色砂質シルト (5Y 2/1)：炭化物を多く含む
７．黒褐色粘性シルト (5Y 3/1)：径 5 ㎝の黒色土を斑点状にやや多く含む
８．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：有機物を多く含む
９．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：有機物をやや多く含む
10．黒色粘性シルト (5Y 2/1)
11．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：有機物を多く含む



１．暗青灰色粘土 (10BG 4/1)：鉄分含む
２．暗青灰色粘土 (10BG 4/1)
３．暗青灰色粘土 (10BG 4/1)：青灰色ブロック含む
４．暗青灰色粘土 (10BG 3/1)：木製品含む

0　1:40　1m

第 42 図　井戸跡 SE1014 ～ 1017 実測図



第 43 図　井戸跡 SE1014 ～ 1017 出土遺物実測図

４は東遠江産の山茶碗の小碗で、高台は外側に張り出すように付けてあるが、高台を付けた際の撫ではやや甘い。体部上半と下半の境界が屈曲して、口縁は外反している。12 世紀後半（Ⅱ期）と考えられる。

５は土師器の鍋で、口縁端部を短く折り返し、折り返した部分を口縁内面に密着させている。折り返し部分が短いことから、12 世紀前半と思われれる。

以上の出土遺物から、この井戸跡の時期は、12 世紀代に収まると考えられる。

(16) SE1016（第 42 図）

３区の M1 で検出した。平面形は円形に近く、規模は長径 1.08 m、短径 1.00 m、深さ 0.68 mである。埋土はオリーブ黒色粘性シルトと灰オリーブ粘性シルトからなっている。いずれも地山の塊を多く含んでいる。この井戸跡からは、渥美・湖西産の山茶碗が出土している（第 43 図－６）。高台は低く、高台を付けた時の撫では雑な印象を受ける。胴部は緩やかな曲線を描くように立ち上り、口縁は外反していない。内面に自然釉が付いており、重ね焼きの痕跡も見られる。高台の付け方は雑で、口縁は外反していないが、高台の高さがあること、体部の丸みがあることから、12 世紀後半（Ⅰ期－２）で、13 世紀までは下らないと考えられる。

(17) SE1017（第 42 図）

４区の R96 区で検出した。平面形はややゆがんだ円形で、規模は長径 1.36 m、短径 1.36 m、深さ 0.80 mである。埋土は暗青灰色粘質土で、色調が同じであるため、各層の包含物の有無と種類によって分層した。短時間のうちに堆積したと考えられることから、すべて同一層と考えても良いかもしれない。この井戸跡からは、渥美・湖西産の山茶碗の小碗が出土した（第 43 図－７）。高台は低く、高台を付けた際の撫では雑である。高台接地面に籾痕が付いている。内面にわずかに自然釉が付いている。12 世紀後半（Ⅰ期－２）と考えられるが、高台が低く、接地面に籾痕が付いていることなどから、13 世紀前半（Ⅲ期－１）まで下る可能性もある。

この井戸跡の底部からは、用途不明の板状木製品が６点、敷かれたような状態で出土した。腐植と破損が著しく、木製品としての個体数は不明である。樹種はすべてエノキである。

４　土坑

今回の調査では、円形の掘り込みを伴う遺構は、できるだけ井戸や柱穴として把握するよう努めた。したがって、土坑とした遺構は、平面形が不整形で、深さが 10cm ～ 20cm 程度と浅く、機能が推定できなかったものに限定される。いずれの土坑でも､時期の判断は困難であった。積極的な根拠ではないが、検出面から、平安時代後期～鎌倉時代の可能性が考えられる。以下、主な土坑について報告する。

（１）SK1001（第 44 図）

２区の H1 区で検出した。平面形は方形になると思われるが、半分以上が調査区外に出ている。長径は 1.12 ｍであるが､短径は不明である。深さは 0.08 ｍである。埋土は灰色粘性シルトの単一層である。遺物は出土しなかった。

（２）SK1002（第 44 図）

２区の I1 区で検出した。平面形は円形で、長径 1.76 ｍ、短径 1.68 ｍ、深さ 0.16m である。埋土は灰色粘性シルトの単一層である。遺物は出土しなかった。

（３）SK1003（第 44 図）

２区の I1 区で検出した。平面形は円形で、長径 1.04 ｍ、短径 1.04 ｍ、深さ 0.16m である。埋土は灰色粘性シルトの単一層である。遺物は出土しなかった。

（４）SK1004（第 44 図）

３区の M97 区で検出した。平面形は不整形で、長径 1.68 ｍ、短径 1.32 ｍ、深さ 0.16 ｍである。埋土は灰色粘性シルトと灰オリーブ色粘性シルトである。遺物は出土しなかったが、12 世紀後半の井戸跡 SE1012 に切られていることから、それ以前に掘られたことになる。

（５）SK1005（第 44 図）

３区の M98 区で検出した。平面形は楕円形で、長径 1.32 ｍ、短径 0.84 ｍ、深さ 0.12 ｍである。埋土は灰色粘性シルトの単一層である。この土坑からは山茶碗の小碗が出土している（第 47 図－１）。渥美・湖西産と思われるが、全体的に白っぽく焼きあがっている。底面に刃断面三角形の高台が付けられている。体部の丸みがなくなってきていることから、12 世紀末（Ⅱ期）と考えられる。

（６）SK1006（第 44 図）

３区の M99 区で検出した。平面形は不整形で、長径 2.00 ｍ、短径 1.68 ｍ、深さ 0.16 ｍである。埋土は灰オリーブ粘性シルトの単一層である。遺物は出土しなかった。

（７）SK1007（第 44 図）

３区の N98 区で検出した。平面形は円形に近く、一部を SD1012 に切られている。長径 1.60 ｍ、短径 1.52 ｍ、深さ 0.40 ｍである。埋土は灰オリーブ粘性シルトの単一層である。遺物は出土しなかった。

（８）SK1008（第 45 図）

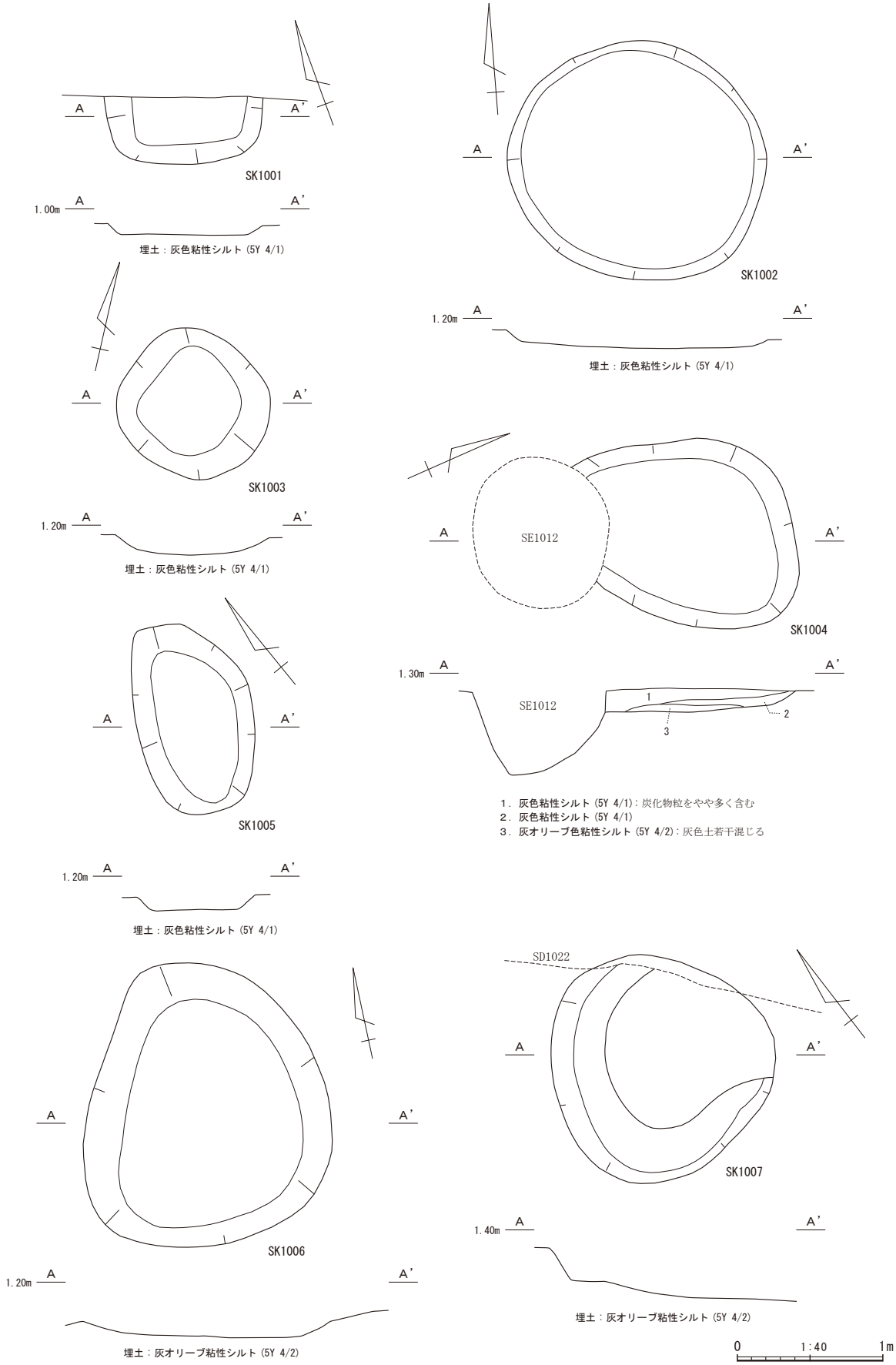
３区の N98 ～ 098 区で検出した。平面形は不整形で、長径 2.64 ｍ、短径 2.16 ｍ、深さ 0.24 ｍで大きさの割に浅い土坑である。埋土は灰オリーブ粘性シルトの単一層である。遺物は出土しなかった。

（９）SK1009（第 45 図）

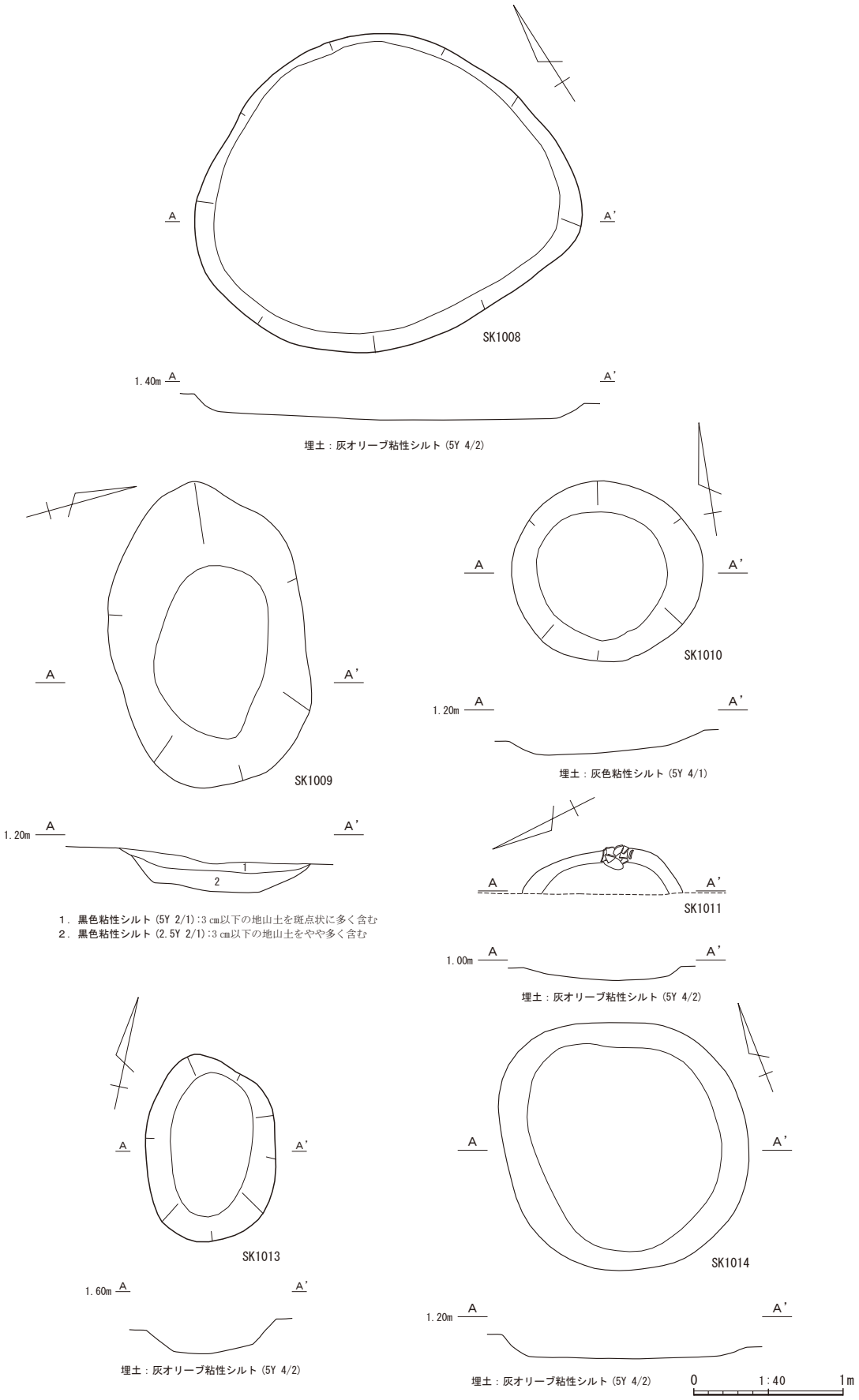
３区の N99 区で検出した。平面形は不整形で、長径 2.04 ｍ、短径 1.36 ｍ、深さ 0.32 ｍである。埋土は黒色粘性シルトである。遺物は出土しなかった。12 世紀後半の SR1010 を切っていることから、この土坑の時期は 12 世紀後半以降ということになる。

(10) SK1010（第 45 図）

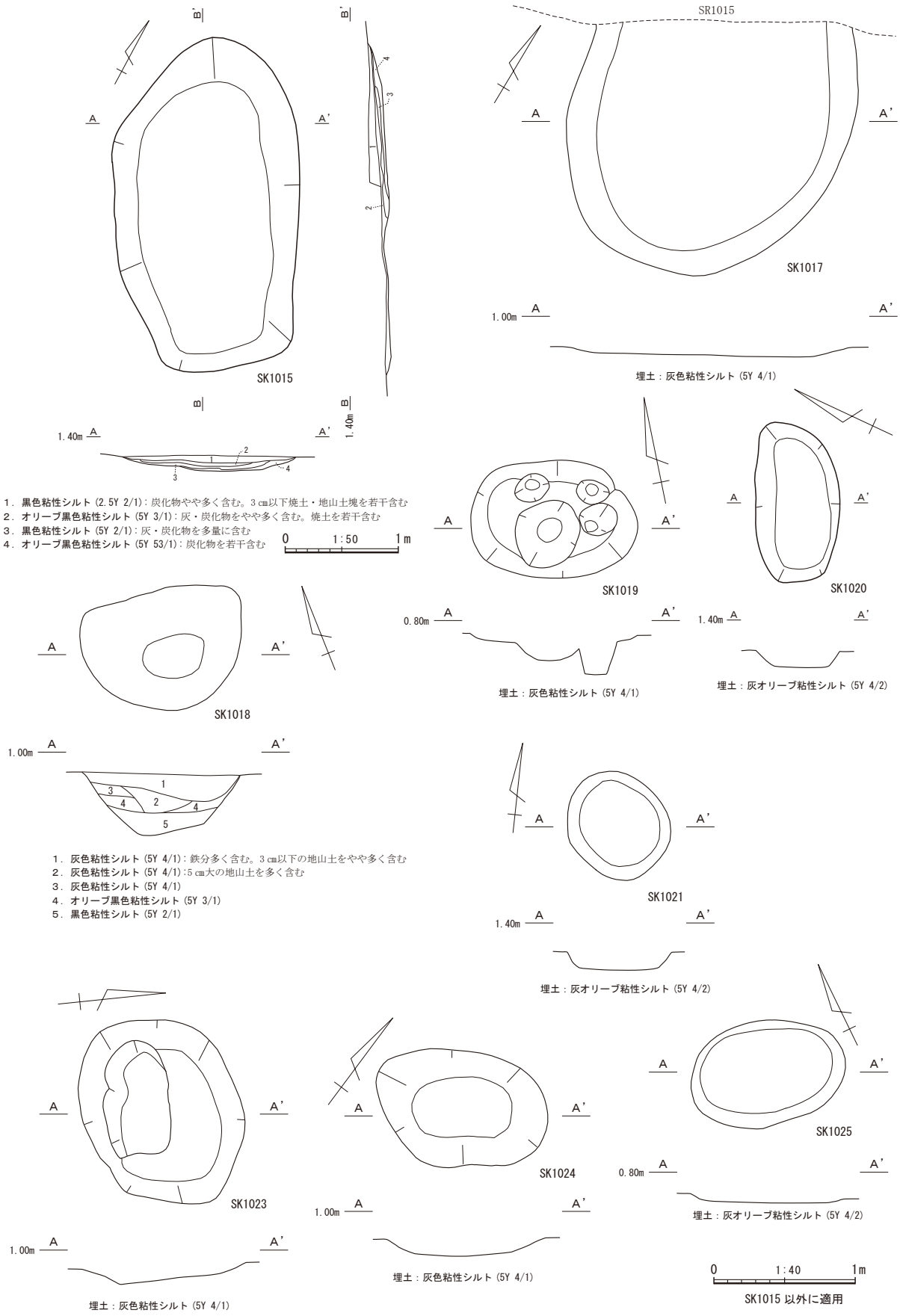
３区の N99 区で検出した。平面形は円形で、長径 1.28 ｍ、短径 1.28 ｍ、深さ 0.16 ｍである。埋土は灰色粘性シルトの単一層である。遺物は出土しなかった。



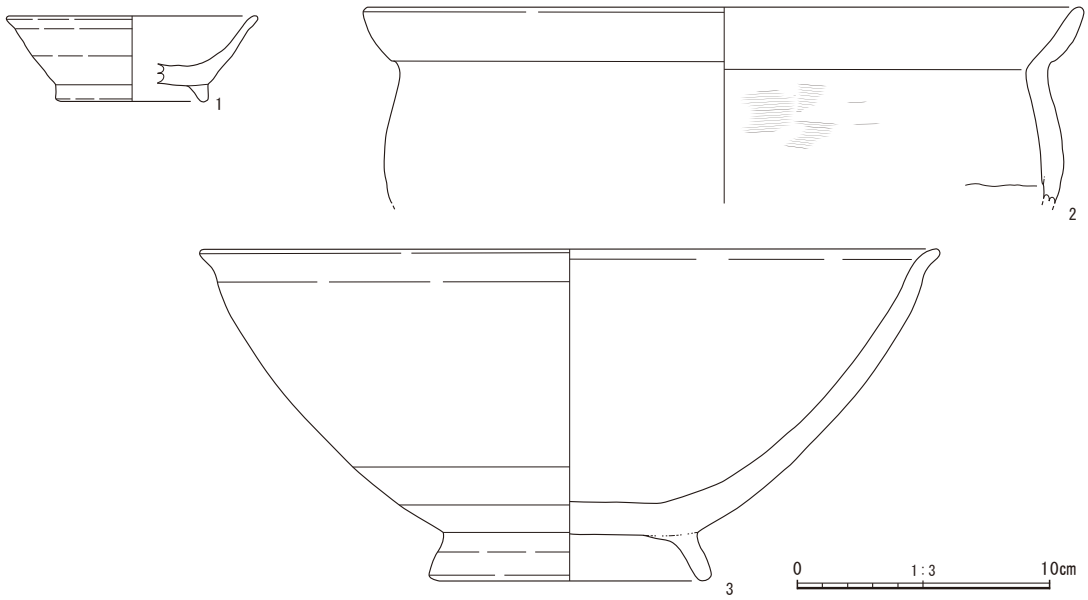
第 44 図　土坑 SK1001 ～ 1007 実測図



第 45 図　土坑 SK1008 ～ 1010・1011・1013・1014 実測図



第 46 図　土坑 SK1015・1017 ～ 1021・1023 ～ 1025 実測図



第 47 図　土坑 SK1005・1011・1014 出土遺物実測図

(11) SK1011（第 45 図）

３区の 096 区で検出した。半分以上が調査区外に出ているため、平面形は不明である。長径 1.12 m、短径は不明、深さ 0.08 mである。埋土は灰オリーブ粘性シルトの単一層である。土坑の底面で鍋（第 47 図－２）が出土した。胴部上半～口縁の破片で、頸部と口縁の境界が屈曲して口縁が外反する特徴がある。口縁を外反させる時に頸部を強く撫でているため、頸部がやや薄くなっている。口縁端部に面取りは見られない。風化が著しく、調整は胴部内面に横方向の撫でが確認できる程度である。小片のため、時期の判断は困難であるが、13 世紀代であろうか。

(12) SK1013（第 45 図）

３区の 097 区で検出した。平面形は歪んだ楕円形で、長径 1.28 m、短径 0.80 m、深さ 0.24 mである。埋土は灰オリーブ粘性シルトの単一層である。遺物は出土しなかった。

(13) SK1014（第 45 図）

３区の P97 区で検出した。平面形は円形に近く、長径 1.68 m、短径 1.68 m、深さ 0.16 mである。埋土は灰オリーブ粘性シルトの単一層である。この土坑からは山茶碗の鉢（第 47 図－３）が出土した。高台は高く、外側に張り出すように付けてある。胴部は緩やかな曲線を描くように立ち上がり、口縁は弱く屈曲するように外反している。12 世紀代と思われる。

(14) SK1015（第 46 図）

３区の P98 区で検出した。平面系は不正形で、長径 3.50 m、短径 1.70 m、深さ 0.15 mである。当初は炭化物や焼土の集中域として検出したが、掘り込みを伴っていたことから、土坑と判断した。埋土には炭化物や焼土が多く含まれていた。炭化物の年代測定から、1035-1053 cal AD および 1061-1157 cal AD の年代が得られた。11 世紀前半～ 12 世紀中頃、平安時代中期～後期に相当する。

(15) SK1017（第 46 図）

３区の P99 区で検出した。SR1015 に切られているため、平面形と長径は不明である。短径は 2.08 m、深さは 0.08 mで非常に浅いが、輪郭は明瞭に検出できたため、遺構である可能性は高い。上面が削平されて浅くなっているのであろう。埋土は灰色粘性シルトの単一層である。遺物は出土しなかった。SR1015 に切られているが、SR1015 も遺物が出土しなかったため、この土坑の時期の判断は困難である。可能性としては、12 世紀～ 13 世紀が考えられる。

(16) SK1018（第 46 図）

３区の 01 区で検出した。平面形は不整形で、長径 1.16 m、短径 0.88 m、深さ 0.44 mである。埋土は灰色粘性シルトと黒色系のシルトからなっている。遺物は出土しなかった。

(17) SK1019（第 46 図）

３区の 01 区で検出した。平面形は楕円形で、内部に４か所の掘り込みがある。長径 1.16 m、短径 0.84 m、深さ 0.32 mである。遺物は、図示できなかったが、12 世紀後半の山茶碗が出土した。

(18) SK1020（第 46 図）

３区の Q96 区で検出した。平面形は不整形で、長径 1.16 m、短径 0.60 m、深さ 0.12 mである。埋土は灰オリーブ粘性シルトの単一層である。遺物は出土しなかった。

(19) SK1021（第 46 図）

３区の Q97 区で検出した。平面形は円形に近く、長径 0.80 m、短径 0.72 m、深さ 0.16 mである。埋土は灰オリーブ粘性シルトの単一層である。遺物は出土しなかった。

(20) SK1023（第 46 図）

３区の P98 区で検出した。平面形は不整形で、内部に浅い掘り込みがある。長径 1.32 m、短径 1.20 m、深さ 0.29 mである。埋土は灰色粘性シルトの単一層である。遺物は出土しなかった。

(21) SK1024（第 46 図）

３区の Q98 区で検出した。平面形は不整形で、長径 1.20 m、短径 0.84 m、深さ 0.12 mである。埋土は灰色粘性シルトの単一層である。遺物は出土しなかった。

(22) SK1025（第 46 図）

３区の Q98 区で検出した。平面形は楕円形で、長径 1.08 m、短径 0.76 m、深さ 0.08 mである。埋土は灰オリーブ粘性シルトの単一層である。遺物は出土しなかった。

５　柱穴

柵列や掘立柱建物跡を構成しなかった柱穴を報告する。柱根や礎石があることから、本来は柵列や掘立柱建物跡といった遺構を構成するものだった可能性が高いが、組み合う柱穴は検出できなかった。

（１）SP1013、SP1014（第 48 図）

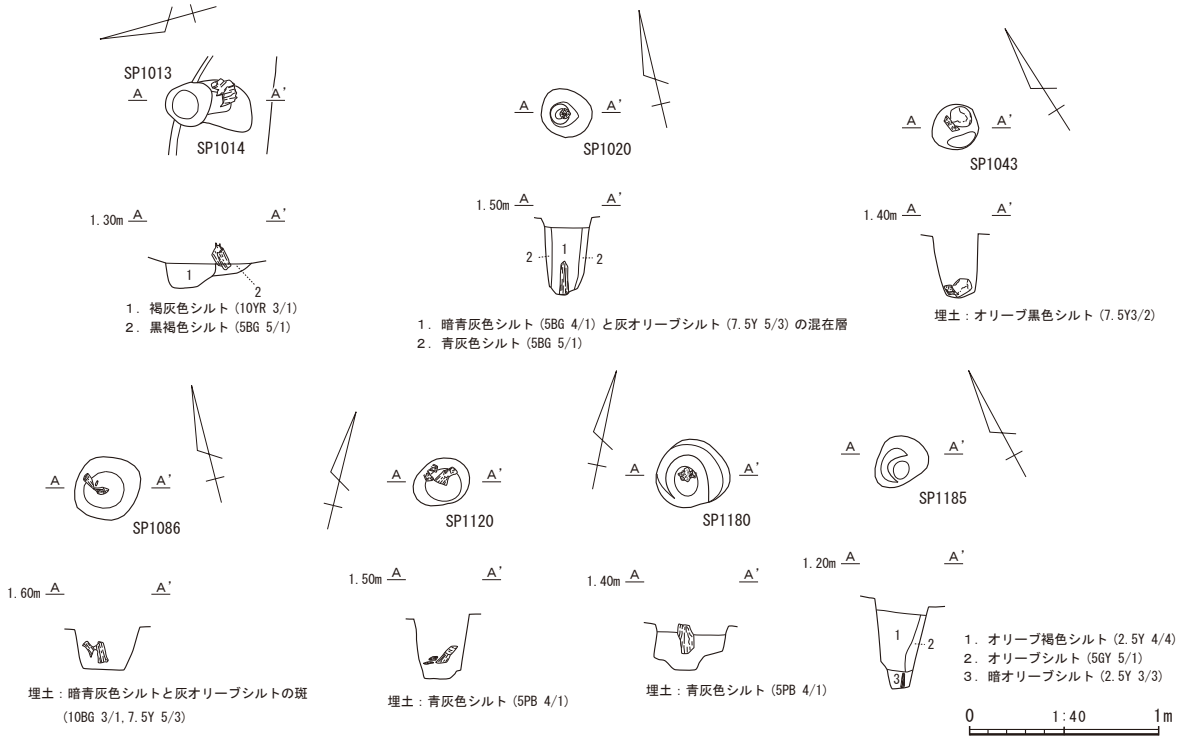
２区の K1 で検出した。２つの柱穴が切り合っており、SP1014 が先行し、SP1013 の方が後に掘られている。SP1014 の方がやや不整形で、長径は、SP1013 に切られているため不明であるが、短径は 0.28 m、深さは 0.12 mである。SP1014 には柱根の破片が残っていた。樹種はコナラ属コナラ節である。SP1013 はややゆがんだ円形で、長径 0.24 m、短径 0.24 m、深さ 0.16 mである。埋土は、SP1014 は黒褐色シルト、SP1013 は褐灰色シルトで、両者で埋土が異なる。

（２）SP1020（第 48 図）

２区の L98 区で検出した。柱根が残っており、明らかに柱穴と判断できるが、周囲でこれに組み合う柱穴は検出できなかった。埋土は青灰色系シルトで、埋土の状況と柱根の残存状況から、柱が抜かれることなく、そのままの状態であったことがわかる。平面形は円形で、長径 0.28 m、短径 0.24 m、深さ 0.40 mである。柱根の樹種はイヌマキ属である。

（３）SP1043（第 48 図）

３区の M99 区で検出した。柱根と礎石が残っており、明らかに柱穴と判断でき、周囲で比較的まとまって小穴を検出できたが、これを組み合うものはなかった。平面形は円形に近く、長径 0.24 m、短径 0.24 m、深さ 0.36 mである。埋土はオリーブ黒色シルトである。底に礎石が敷いてあり、その傍らに柱根の破片が残っていた。柱根の樹種はスギである。



第 48 図　柱穴 SP1313・1014・1020・1043・1086・1120・1180・1185 実測図

（４）SP1086（第 48 図）

３区の 098 区で検出した。柱根が残っていることから、柱穴である可能性が高い。周囲で掘立柱建物跡 SB1002、SB1003 や柱穴と思われる小穴をいくつか検出したため、この柱穴が構成する掘立柱建物跡が存在する可能性があるが、詳細な検討でも、この柱穴を伴う掘立柱建物跡は確認できなかった。埋土は暗青灰色シルトと灰オリーブシルトの混層で、自然堆積とは考えにくい。柱穴を埋める時に、暗青灰色シルトと灰オリーブシルトを混ぜた土を埋めたと考えられる。

底に近い部分に柱根の破片が残っていた。樹種はアカマツである。

（５）SP1120（第 48 図）

３区の P97 区で検出した。柱根が残っていたため、柱穴の可能性が高く、周囲で掘立柱建物跡 SB1001 や柱穴と考えられる小穴をいくつか検出したため、この柱穴が構成する掘立柱建物跡が存在する可能性があるが、この柱穴を伴う掘立柱建物跡は確認できなかった。埋土は青灰色シルトである。

平面形は楕円形に近く、長径 0.28 m、短径 0.24 m、深さ 0.36 mである。柱根の樹種はツガ属である。

（６）SP1180（第 48 図）

３区の Q97 区で検出した。柱根が残っていたため、柱穴の可能性が高く、周囲で柱穴と考えられる小穴をいくつか検出したため、この柱穴を含む掘立柱建物跡が存在する可能性があるが、この柱穴を含む掘立柱建物跡は確認できなかった。埋土は青灰色シルトである。

平面形は不整形で、長径 0.40 m、短径 0.36 m、深さ 0.24 mである。柱根が建った状態で残っていた。樹種はカラマツである。

（７）SP1185（第 48 図）

３区の Q98 区で検出した。底に近い部分に柱根がわずかに残っていたこと、直径の割に深いことから、柱穴の可能性が高いが、周囲で同様の柱穴は検出できなかった。平面形は不整形で、長径 0.28 m、短径 0.24 m、深さ 0.52 mである。埋土はオリーブ系シルトである。柱根の樹種は不明である。

６　溝跡と自然流路跡

溝跡と流路跡は多く検出できたが、両者の区別は非常に困難であった。今回の調査では、平面形、方向、深さが一定になる傾向があるものは人為的に掘られた溝の可能性が高く、平面形、方向、深さが安定しないものは自然流路の可能性が高いと判断した。

（１）SD1001、SD1025（第 49 図）

SD1001 は、２区～３区で検出した長さ 80 ｍに達する溝である。直線的になっている部分があること、微高地の裾を廻っていること、幅が 80cm 程度、深さ 70cm 程度で一定している部分が多いことなどから、自然流路ではなく、人為的に掘られた溝と判断した。

２区の北西隅から南東方向に直線的に掘られ、I2 区の辺りで、微高地の地形に沿って南方向に向きを変え、途中で、SD1025 が分岐している。SD1025 は、長さが 40 ｍ、幅は 0.4 ｍでほぼ一定して直線上に延びている。

SD1001 は、２区と３区の境界付近で、再び南東方向に向きを変えているが、この辺りでは方向が一定せず、蛇行している部分もある。最後は３区の 02 区で自然消滅している。

埋土はオリーブ黒色粘性シルトと灰色粘性シルトが主体で、いずれも地山起源の土である。

遺物は、SD1001 から山茶碗が出土している（第 51 図－１～３）。１は渥美・湖西産の小碗で、逆三角形のしっかりした高台がついており、体部はやや丸みを帯びながら立ち上がっている。高台の接地面に籾痕がついている。12 世紀中頃～後半（Ⅰ期－２）と思われる。

２は渥美・湖西産の小碗で、やや潰れ気味の高台がついている。高台接地面には砂粒の痕跡が見られる。体部の中央付近には屈曲がある。これも 12 世紀中頃～後半（Ⅰ期－２）と考えられる。

３は東遠江産の山茶碗で、高台は外側に張り出すように付けてある。内面に重ね焼きをした際、上に重ねた碗の高台の一部が貼り付いている。これも 12 世紀中頃～後半（Ⅰ期）と思われるが、高台の形態から、12 世紀前半まで遡る可能性もある。

（２）SD1003、SD1004（第 50 図）

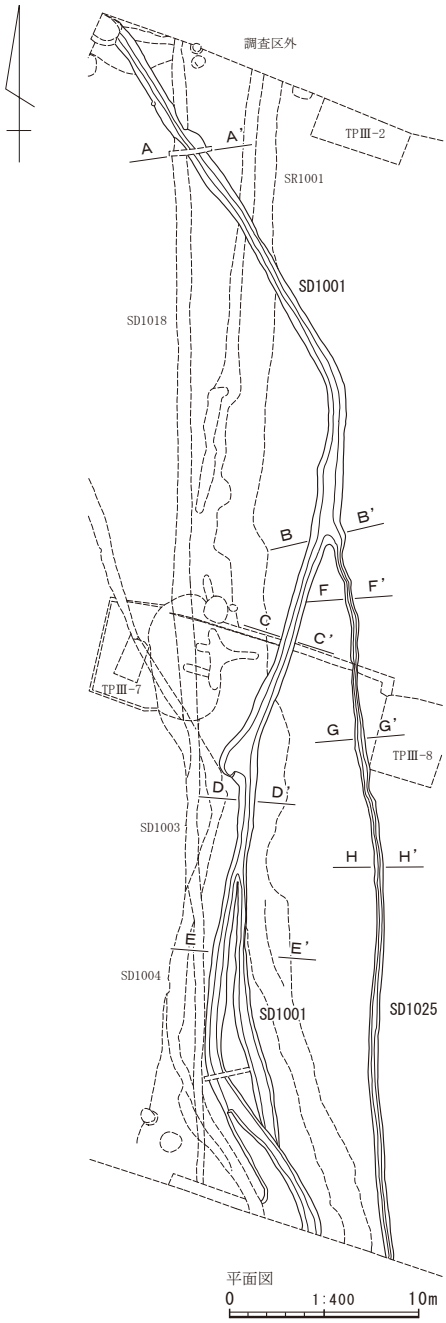
２区の I99 区～ I1 区で検出した。両溝は合流して１本の溝になっている。微高地の緩傾斜から、１本の溝が２本に分かれているというよりも、１本に合流していると考えた方が良い。ともに方向、幅、深さが一定になっていることから、深さが 0.20m 程度と浅いが、人為的掘られた溝と考えた。周囲に関連する遺構がないことから、この溝の機能の推定は困難である。SD1007 に切られているが、SD1007 も遺物が出土していないため､時期に判断は困難である。埋土は両溝ともオリーブ黒色粘性シルトである。

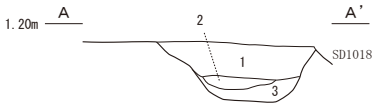
（３）SD1005（第 50 図）

２区の I99 区で検出した。調査区内で検出できたのは、3.4 ｍである。埋土はオリーブ黒色粘性シルトである。遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難である。SR1003 を切っており、SR1003 は 12 世紀中頃～後半と考えられるため、SD1005 の時期はそれ以降と考えられる。積極的な根拠ではないが、今回の調査で 13 世紀中頃以降の遺構は検出されていないことから、12 世紀中頃～ 13 世紀前半の中に収まると考えられる。

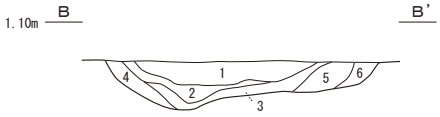
（４）SD1006（第 50 図）

２区の I99 区で検出した。ほとんどが調査区外に出ていると考えられ、検出できたのは 2.6 ｍである。幅は 0.40 ｍ、深さ 0.15 ｍであることから、ほとんどの部分が調査区外に出ているとはいえ、規模の大きな溝とは考えにくい。遺物が出土していないため、時期の判定は困難だが、12 世紀中頃～後半の SD1005 に切られ、同時期の SR1003 を切っていることから、この溝も 12 世紀中頃～後半に収まると考えられる。埋土はオリーブ黒色粘性シルトである。

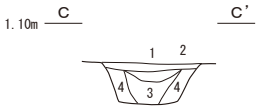




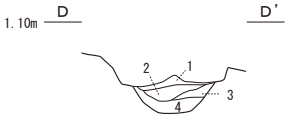
１．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/2）：土器片若干含む
２．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）
３．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/2）



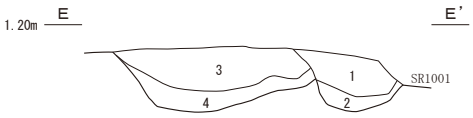
１．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：鉄分多く含む。土器片若干含む
２．黒色粘性シルト（5Y 2/1）
３．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/2）
４．灰色粘性シルト（5Y 4/1）



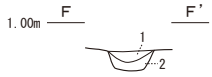
１．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：鉄分多く含む。土器片若干含む
２．黒色粘性シルト（5Y 2/1）
３．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/2）
４．灰色粘性シルト（5Y 4/1）



１．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 2/2）：細かい地山土斑点状に含む
２．灰色粘性シルト（5Y 4/1）
３．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）
４．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：黒色土やや多く含む



１．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：5㎝大地山土含む
２．灰オリーブ粘性シルト（5Y 4/2）：黒色土含む
３．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：土器片若干含む
４．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：拳大地山土をやや多く含む

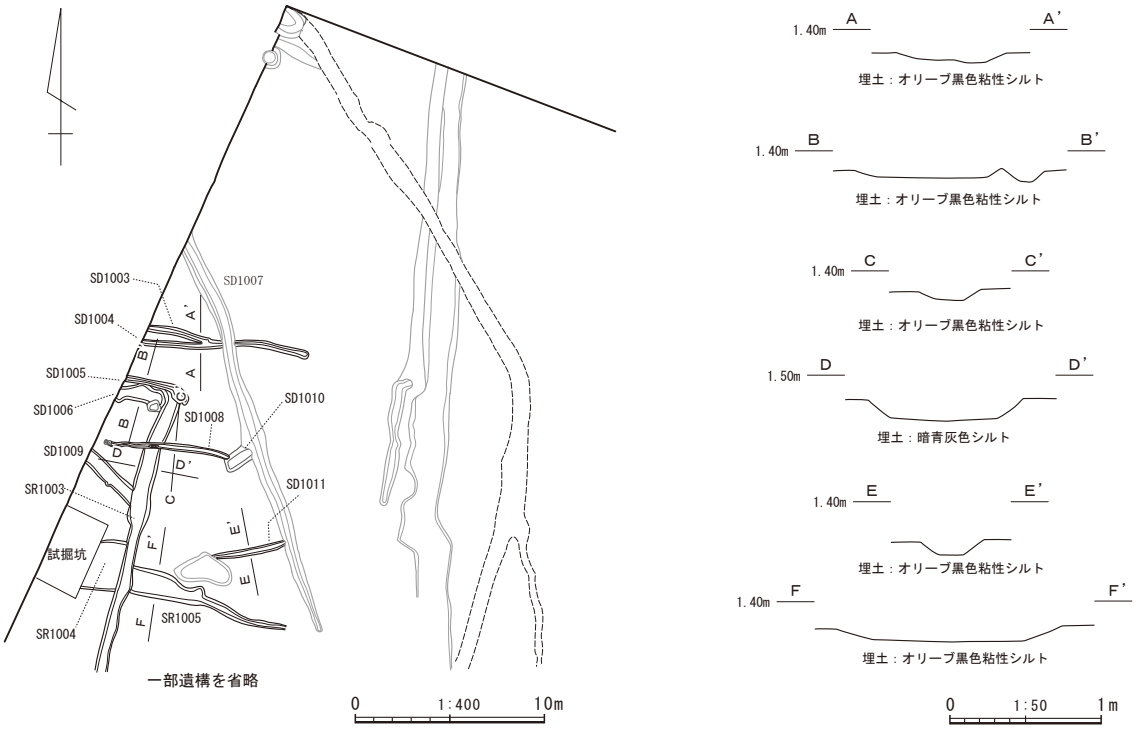


１．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：5㎝以下地山土若干含む
２．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 2/1）
３．灰色粘性シルト（5Y 4/1）

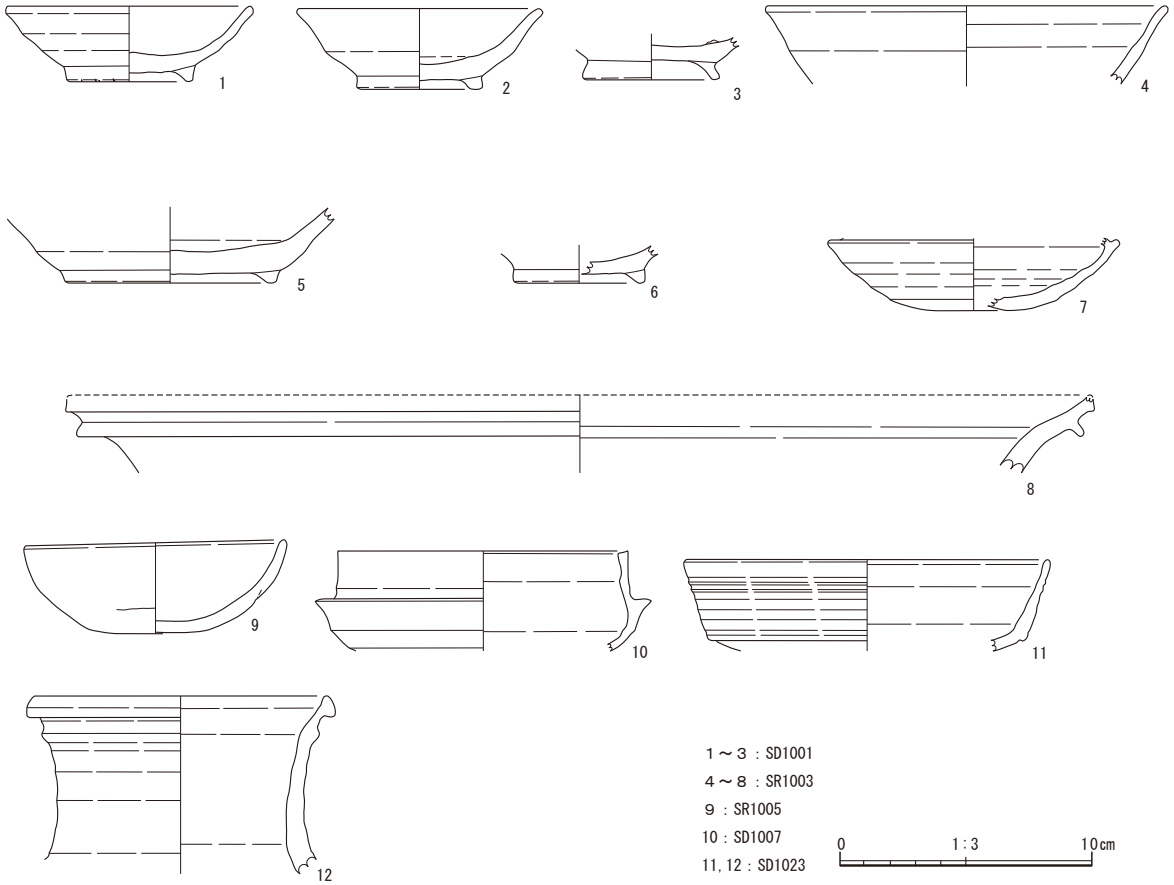
１．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：5㎝以下地山土若干含む
２．灰色粘性シルト（5Y 4/1）

断面図
0　1:50　1m

第 49 図　溝跡 SD1001・1025 実測図



第 50 図　溝跡 SD1003 ～ 1006・1008 ～ 1011、自然流路跡 SR1003 ～ 1005 実測図



第 51 図　溝跡 SD1001・1007・1023、自然流路跡 SR1003・1005 出土遺物実測図

（５）SD1008（第 50 図）

２区の J99 区～ J1 区で検出した。長さ 6.60 ｍの小規模な溝である。平面形が直線的で、幅、深さとも一定になっているので、人為的に掘られた溝と判断した。埋土はオリーブ黒色粘性シルトである。遺物が出土していないため、時期の判断が困難であるが、12 世紀中頃～後半の SR1003 を切っていることから、それ以降の溝ということになる。周辺の遺構の時期から、SR1003 とほぼ同時期、時期が下ったとしても 13 世紀前半までの中に収まるであろう。

（６）SD1009、SR1003（第 50 図）

SD1009 は２区の J99 区、SR1003 は２区の I99 区～ L99 にかけて検出した。SD1009 は直線的になっているため、人為的に掘られた溝、SR1003 は直線的になっている部分もあるが、幅と深さが一定でないため、自然流路と考えた。両者は交わっているが、埋土が同一の暗青灰色シルトであることもあり、遺構の切り合い関係は確認できなかった。両者から出土した遺物も 12 世紀後半～末のものが主体であることから、時期の前後関係はなく、同時に存在し、SD1009 が SR1003 に合流するように掘られたと考えるのが妥当であろう。遺物は、SR1003 で山茶碗などが出土している（第 51 図－４～８）。

４は渥美・湖西産の山茶碗である。口縁部分の破片で、口縁はほとんど外反していない。内外面とも自然釉が付いている。高台の形態が不明であるが、体部が直線的になっていると思われることから、12 世紀末（Ⅱ期）になると思われる。

５は渥美・湖西産の山茶碗で、低い高台を付けてある。高台のひび割れと剥落が著しい。高台接地面には砂粒の痕跡が付いている。内面には自然釉が付いているが、重ね焼きをした部分には付いていない。体部～口縁部の形態は不明であるが、高台が低くなっているはいるが、潰れたような低さではないことから、12 世紀後半～ 13 世紀前半（Ⅰ期－２～Ⅲ期－１）になると思われる。

６は渥美・湖西産の山茶碗の小碗で、外側に張り出すように高台を付けてある。底部の破片のため、高台の形態しか時期を判断する根拠がないが、12 世紀後半（Ⅰ期－１）に位置付けられるであろう。

７は須恵器で、坏として実測したが、蓋の可能性もある。かえりの形態は不明であるが、体部が半球状になっている特徴から、７世紀代（Ⅲ期末～Ⅳ期末）と思われる。

８は返りのついた甕で、口縁端部の大部分が失われているが、わずかに残っている部分から、撫でて面取りをしてある可能性がある。時期は７世紀代と思われる（Ⅲ期末～Ⅳ期末）。

以上の出土遺物から、SD1009 の時期は 12 世紀後半～ 13 世紀前半と考えられる。SD1009 が合流する SR1003 も同時期の可能性が高い。

（７）SD1010（第 50 図）

２区の J1 区で検出した小規模な溝である。検出できたのは、1.40 ｍである。SD1007 に切られて終わっている。SD1007 と埋土が酷似しているため、切り合い関係があるのか、連結しているのかの判断は困難であった。SD1010 は非常に小規模な溝で、単独で機能したとは考えにくいことから、SD1007 に連結して、SD1007 とともに機能していたと考えるのが妥当であろう。

遺物は出土していないため、時期の判断は困難である。積極的な根拠ではないが、周囲の遺構と同様、12 世紀後半～ 13 世紀前半に中に収まると考えられる。

（８）SD1011（第 50 図）

２区の J1 区で検出した長さ 3.80 ｍの小規模な溝である。SD1007 に切られるか、もしくは合流している。SD1007 と埋土が似ているため、切り合っているのか合流しているのかの判断は困難であった。現地の所見では、SD1007 が SD1011 を切っている可能性の方が高い。埋土はオリーブ黒色粘性シルトである。遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難である。積極的な根拠ではないが、周辺で検出した遺構の時期から、12 世紀中頃～後半、新しくても 13 世紀前半までの中に収まるであろう。

（９）SR1004（第 50 図）

２区の J99 区で検出した。ほとんどの部分が調査区外に出ていると考えられ、検出できたのは、1.80 mである。幅は 2.60 mと比較的広いが､深さは 0.30 mと浅い。埋土はオリーブ黒色粘性シルトである。SR1003 に切られて、その先には SR1005 が伸びている。調査当初は SR1004 と SR1005 が同一の流路と考えていたが、SR1003 をはさんで、SR1004 と SR1005 の幅が大きく異なることから、別の流路と考えた。遺物が出土していないため、時期の判断は困難である。積極的な根拠ではないが、周囲の遺構から、12 世紀中頃～ 13 世紀前半の中に収まると思われる。

(10) SR1005（第 50 図）

２区の J99 区、J1 区、K1 区で検出した。SR1003 に切られた部分から始まり、試掘坑で切られて終わっている。検出できたのは､8.20 mである。深さは 0.10 mと浅い。埋土はオリーブ黒色粘性シルトである。遺物は、土師器の坏が出土した（第 51 図－９）。風化が進んでいるため、調整は不明瞭であるが、内外面とも指押さえの後、撫でていると思われる。口縁部は薄くつまみ上げるように仕上げている。時期の判断は難しいが、古墳時代後期と思われる。

(11) SD1007（第 52 図）

２区の I1 区～ J1 区で検出した。検出できたのは 23.4 mで、調査区外まで伸びている。北西方向～南東方向にほぼ一直線に掘られている。周囲に SE1005、SE1006、SE1007 といった井戸、SK1002、SK1003 といった土坑が分布しており、その中を突っ切るように掘られている。周囲の遺構との関連を推定する根拠は、位置関係以外にはないが、井戸からくみ上げた水を流す、あるいは、井戸に集水するといった、周辺遺構と関連した機能が想定される。

遺物は、須恵器の坏が出土している（第 51 図 -10)。口縁部を２回に分けて撫でることで、高くつまみ上げている。口縁端部の蓋受け部には、僅かに段を作ってある。５世紀代と思われ、これは流れ込みで、SD1007 の時期を示す遺物ではない。

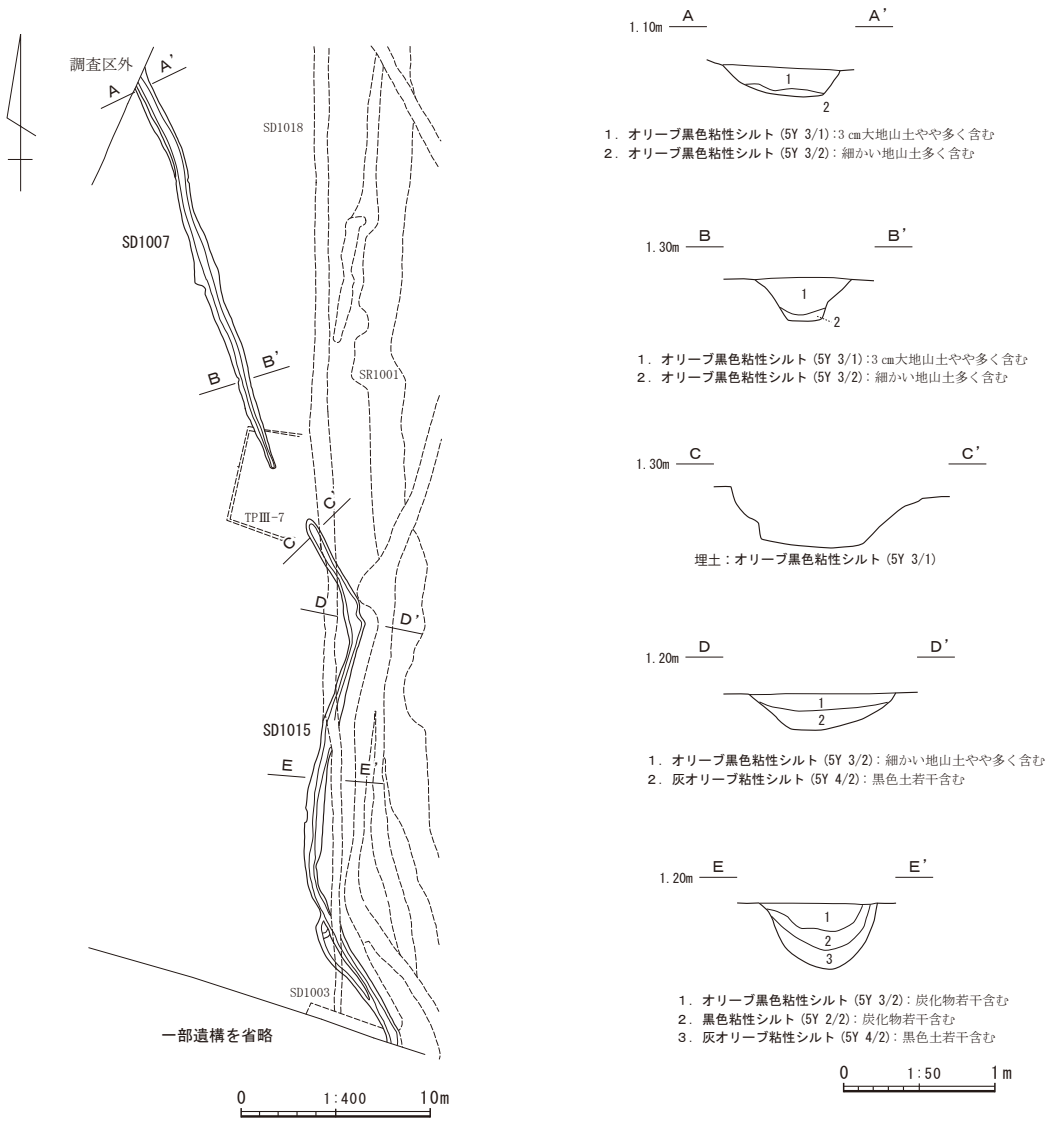
(12) SD1015（第 52 図）

２区の K1 区、K2 区、L1 区、L2 区、M1 区、M2 区、N2 区、O2 区で検出した 26.20 mに及ぶ溝である。SD1007 と埋土が酷似しており、第 52 図に示したように、本来は SD1007 と連結した同一遺構だった可能性が高い。K1 区から始まっているが、K2 区に入るとすぐに南方向に向きを変え、その後は SR1001,SD1001 といった遺構と並行しながら O2 区まで伸び、最後は SD1001 に切られて終わっている。周囲には井戸跡 SE1016 があり、井戸跡 SE1010 とは、先に記載したように、SD1020 を介してつながっていた可能性がある。周囲にある井戸への導水といった機能が想定される。

(13) SD1023（第 53 図）

３区の N98 区、N99 区、O99 区、P99 区で検出した。SA1003、SA1004、SB1001 ～ SB1004、SE1015 といった柵列、掘立柱建物跡、井戸跡がある場所を方形に区画する溝と考えられる。深さは 0.10 m程度の浅い溝であるが、上面が失われており、本来はもっと深かったと考えられる。埋土はオリーブ黒色粘性シルトで、浅いこともあって、分層は不可能であった。時期を判断できる遺物が出土しなかったため、時期の判断が困難であるが、SA1003、SA1004、SB1001 ～ SB1004、SE1015 といった遺構と同様 12 世紀前半～中頃と考えられる。

遺物は、須恵器が出土した（第 51 図 -11、12)。11 は坏で、底部と体部の境界が屈曲して、体部は直線的に立ち上がっている。体部には撫でた際の工具痕がはっきり残っている。８世紀代（Ⅴ期）と考えられる。12 は壺の頸部～口縁で、肥厚させた口縁の直下に断面三角形の凸線を巡らせている。頸部はあまり外反していない。これは７世紀代（Ⅲ期末～Ⅳ期末）と思われる。出土遺物は、年代に幅があることから、いずれも流れ込みで、SD1023 の時期を示すものではない。



第 52 図　溝跡 SD1007・1015 実測図

(15) SR1001（第 54 図）

２区～３区で検出した総延長 64.0 ｍに及ぶ自然流路跡である。方向や幅､深さが一定でないことから、自然流路と判断した。微高地の裾を流れ、この流路が微高地の裾を削って微高地の東端を形作っているといっても良い。全体的に浅く、多くの部分では深さは 0.15 ｍ程度しかない。

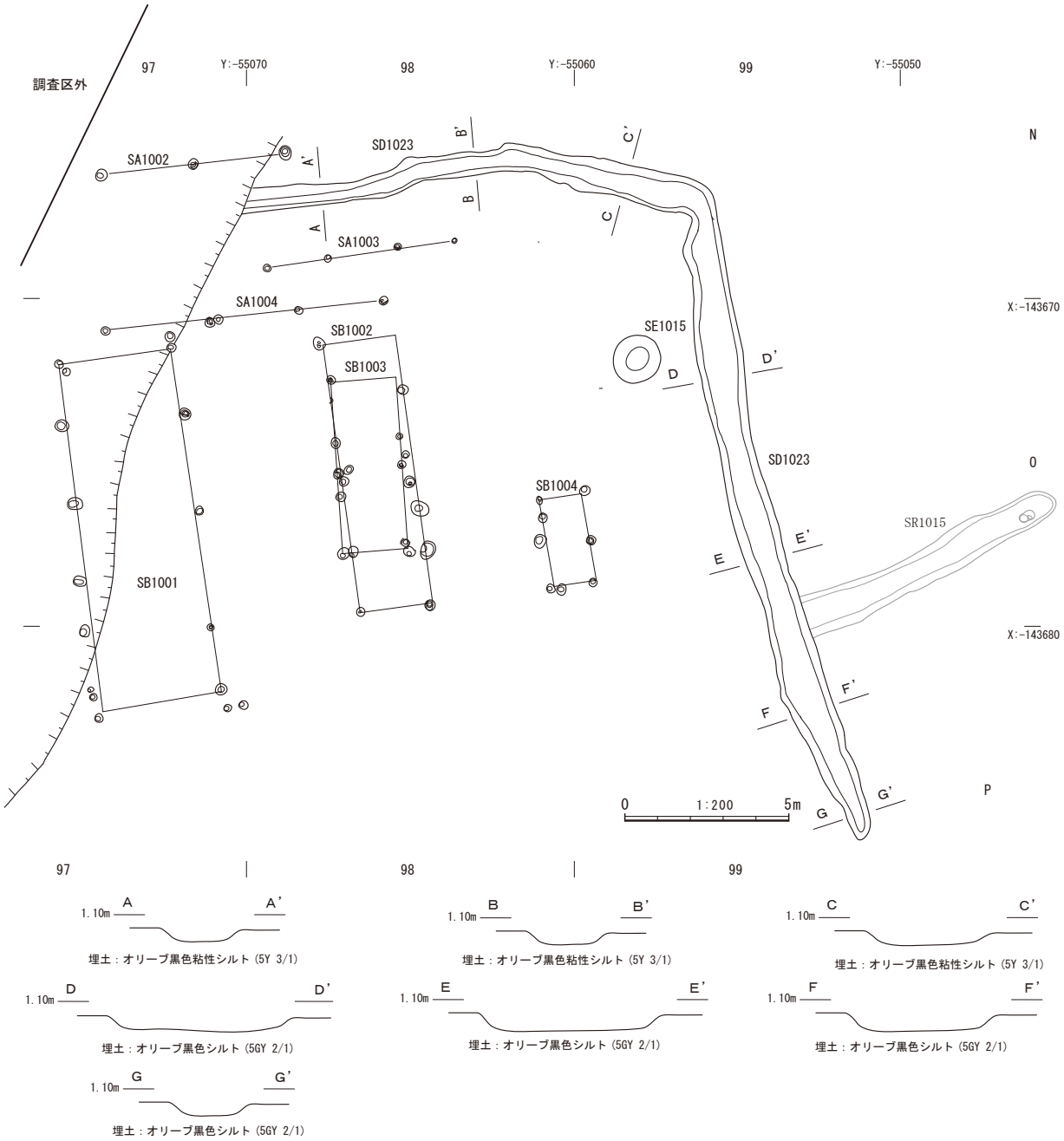
遺物は比較的多く出土している（第 55 図、第 56 図）。

第 55 図－１は長胴甕の胴部下半で、内外面とも刷毛による調整が見られる。底部には木葉の圧痕がある。古墳時代後期と思われる。

２は須恵器の高坏の脚部で、裾が広がる部分で欠損していることから、細い脚部から裾が広がる形態と考えられる。７世紀（Ⅳ期）以降と考えられる。

３は須恵器の盤の底部で、低い高台が付いている。８世紀代（Ⅴ期）と考えられる。

４は、獣足のついた短頸壺である。足は丁寧なヘラ削りで全体形を整えてある。足先の指は５本で、足先から足の付け根まで４本の切れ込みを入れて指を作り出している。足先～足の付け根まで切れ込みを入れる例は、静岡県内では、西部の古代遠江国の官衙関連遺跡で出土したものが大半との指摘がある



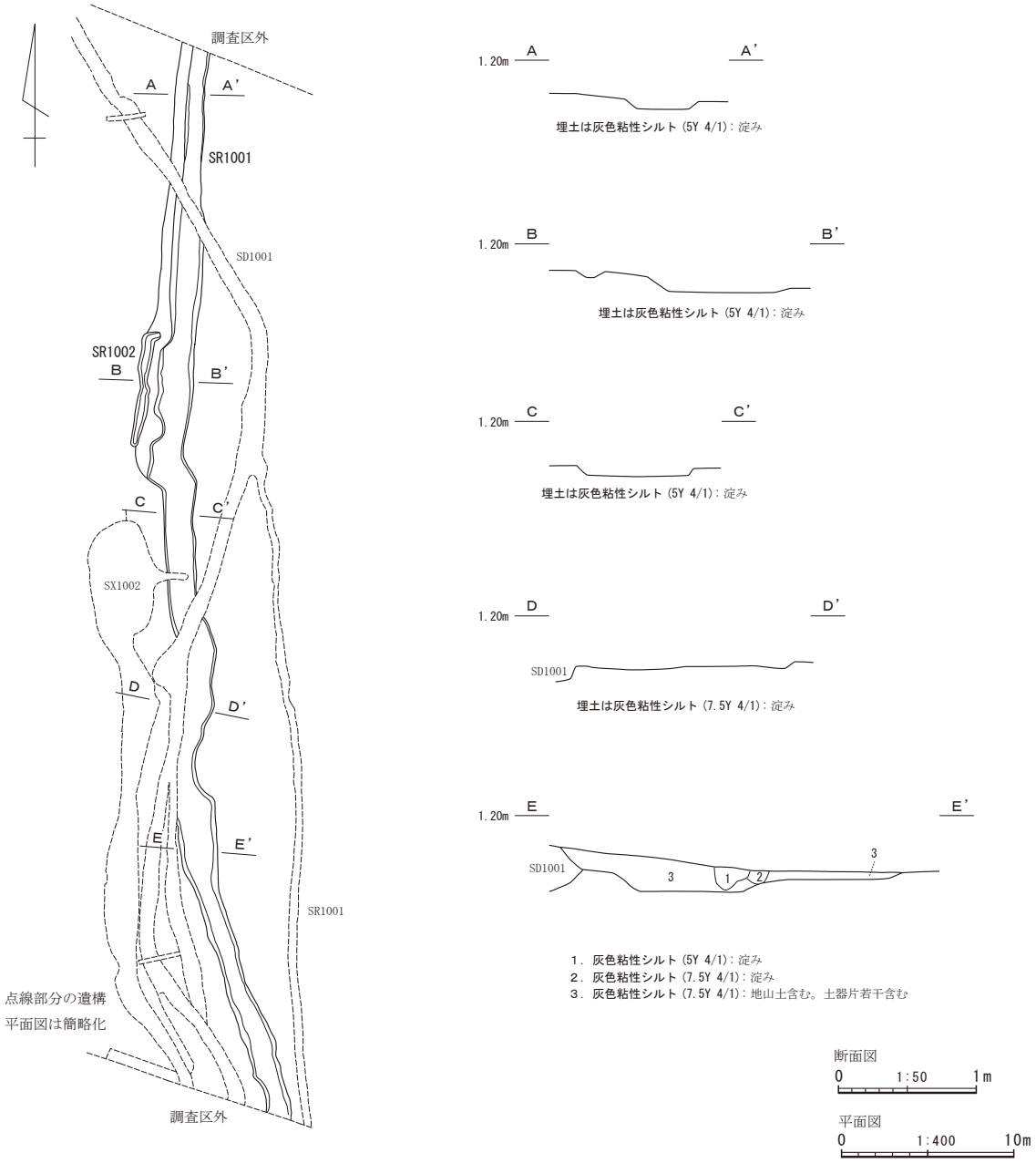
第 53 図　溝跡 SD1023 実測図

(丸杉 2000)。時期は８世紀代（Ⅴ期）と考えて良いであろう。

５～ 11 は渥美・湖西産の山茶碗である。５は高台が低く、接地面に籾痕が付いている。体部は緩やかな曲線を描くように立ち上り、口縁は外反しない。底面に墨書が見られ、残りは良いが、破片のため、墨書の全体は不明である。体部の丸みが残っていることから、12 世紀後半～末（Ⅱ期）と考えられる。

６は体部下半～底部の破片で、低いが太い高台が外側に張り出すように付けられている。高台接地面には砂粒の痕跡がある。底面に墨書が見られる。12 世紀後半（Ⅰ期－２）と思われる。

７は高台が低く、籾痕が付いている。体部は緩やかな曲線を描くように立ち上り、口縁は外反している。底面に墨書があり、残りは良いが、判読できない。高台は低いが体部の緩やかな立ち上がりと口縁の外反から、12 世紀後半（Ⅰ期－２）と思われる。



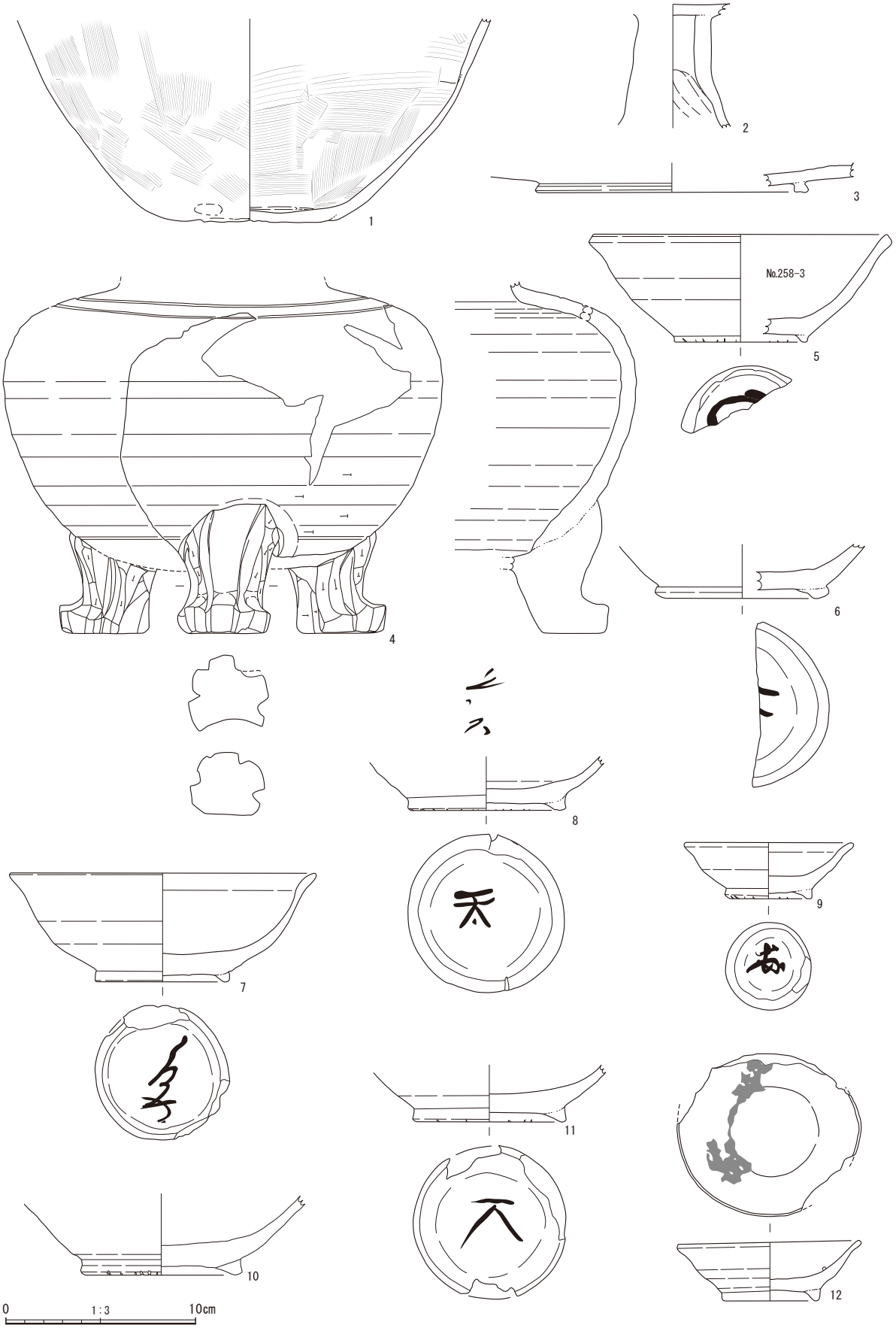
第 54 図　自然流路跡 SR1001・1002 実測図

８も高台は低く、接地面に籾痕が見られるが、高台の直径は８cm を超えていることから、大型の碗であったと思われる。内面の底が磨滅しているうえに、黒色の付着物が僅かにあることから、硯に転用された可能性がある。大型の碗であること、高台を付けた際のなでが丁寧であることなどから、12 世紀中頃（Ⅰ期－２）と思われる。

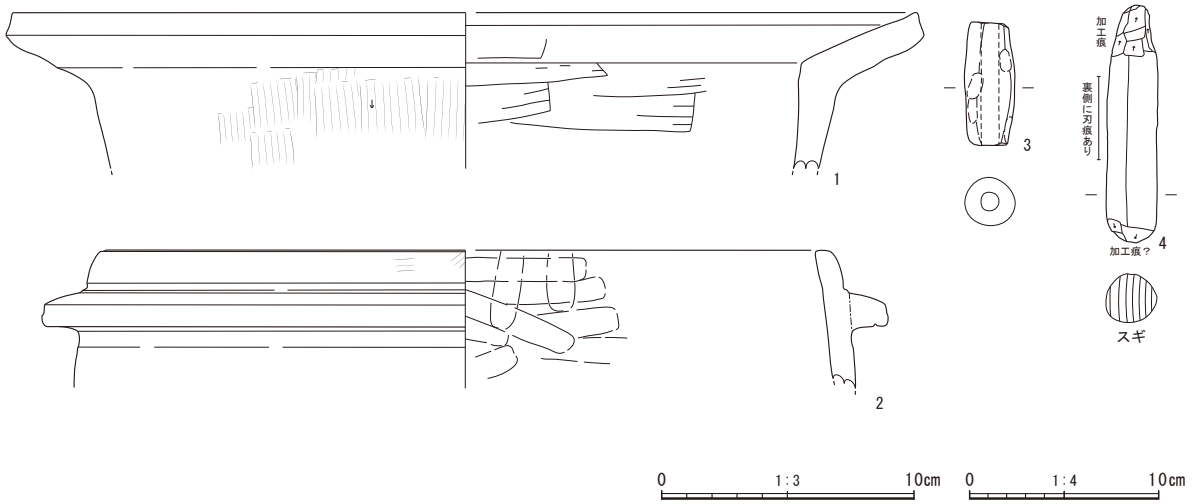
９も高台は低く、接地面に籾痕が付いている。内面には全面に自然釉が付いており、とちんの一部が付着している。底面に墨書があるが、判読は困難である。12 世紀後半（Ⅰ期－２）と思われる。

10は高台の直径が8.5cmあることから、大型の碗と考えられる。高台は低く、接地面に籾痕が見られる。高台のひび割れが著しい。想定される大きさから、12 世紀後半（Ⅰ期－２）と思われるが、 高台の作りが雑であることから、13 世紀前半（Ⅲ期－１）になる可能性も考えられる。

11 の高台は低いが、高台の直径が８cm を超えていることから、大型の碗になると思われる。底部に



第 55 図　自然流路跡 SR1001 出土遺物実測図 1



第 56 図　自然流路跡 SR1001 出土遺物実測図２

墨書「大」が見られる。12 世紀後半（Ⅰ期－２）と考えられる。

12 は東遠江産の山茶碗で、断面が三角形のしっかりした高台が付いており、口縁は外反している。内面には漆が付着している。時期は 12 世紀中頃（Ⅰ期）と考えられる。

第 56 図－１は甲斐型甕で、胎土に砂粒が多い特徴がある。頸部と口縁の境界が屈曲している。口縁は分厚く、端部はつまみだすように撫でて仕上げてある。肥厚した口縁から、10 世紀前半と考えられる。

２は羽釜の破片で、口縁は直立している。１と同様、10 世紀前半と考えられる。

３は土錘である。４は用途不明の木製品である。直径４cm 程の丸いスギ材の両端を尖らせるように削り出している。

以上の出土遺物から、10 世紀の土器が出土しているが、この流路が流れていた時期は 12 世紀中頃～後半で、13 世紀前半まで続いていた可能性もある。

(17) SR1002（第 54 図）

２区の I2 区、J2 区で検出した小規模な溝である。埋土は灰色粘性シルトで、SR1001 の埋土と似ていることから、SR1001 が埋没する過程の一時期に形成された流路で、SR1001 の一部とも考えられる。遺物は出土していないが、SR1001 と同時期で、12 世紀中頃～後半と考えるのが妥当であろう。

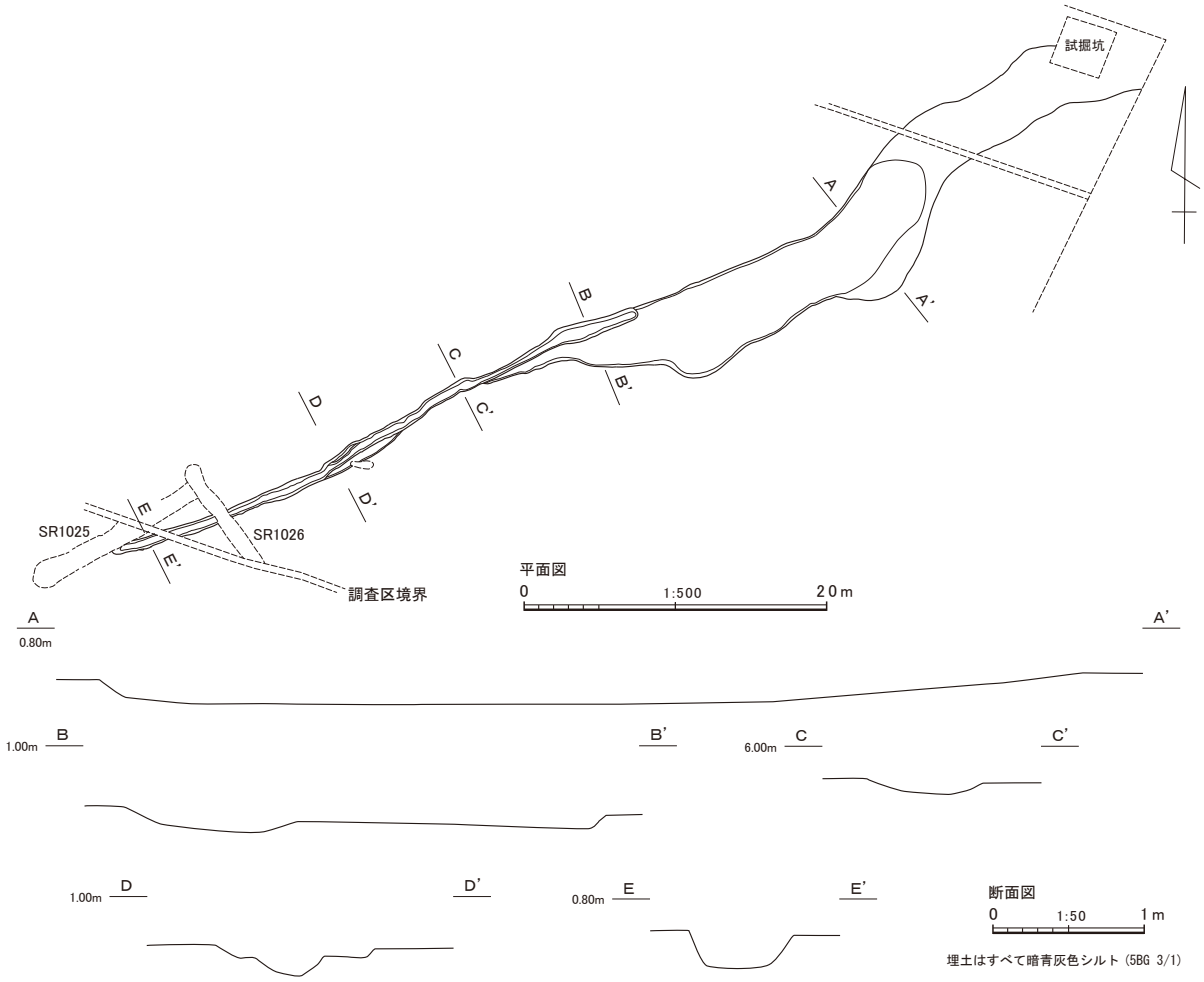
(18) SR1022（第 57 図）

３区の 05 区から R97 にかけて検出した総延長 76.5 ｍの流路である。場所によって幅が大きく異なることから、人為的に掘られた溝ではなく、自然流路と考えた。断面図に現れているように、幅が広い部分では浅く、狭い部分では深くなっている。この流路も微高地の裾を削るように流れていることから、微高地の地形を形作った流路と評価できる。埋土は暗青灰色シルトである。分層が困難であったことから、短期間のうちに埋没したと考えられる。

この流路からは山茶碗などが出土した（第 58 図）。１は渥美・湖西産の山茶碗で、高台は潰れて太くなっている。高台の接地面はに籾痕が見られる。底面に墨書「大」がある。高台があまり低くなっていないことから、12 世紀後半（Ⅰ期－２）と考えられる。

２も渥美・湖西産の山茶碗で、高台の直径が 7.6cm あることから、大型の碗であると考えられる。碗の重みで高台が潰れている部分がある。内面に煤のような黒いものが付着している。高台が低くなっていないこと、体部が丸みを帯びていることから、12 世紀後半（Ⅰ期－２）と思われる。

３はヒノキ製の曲げ物の部材である。当初は、等間隔に刻み目が入っているように見えたことから、



第 57 図　自然流路跡 SR1022 実測図

物差しの可能性を考えたが、刻み目の間隔を測ったところ、等間隔になっていない部分があること、浜松市内の遺跡で出土した物差しや曲げ物の部材と比較した結果、曲げ物の部材と判断した。

４はヒノキ製の用途不明木製品である。角柱状に削り出したもので、両端に切断面があり、表面と側面には、ほぼ全面に刃物による加工痕が残っている。

出土した山茶碗の時期から、この流路が流れていたのは、12 世紀後半と考えられる。

(19) その他の溝、自然流路１（第 59 図）

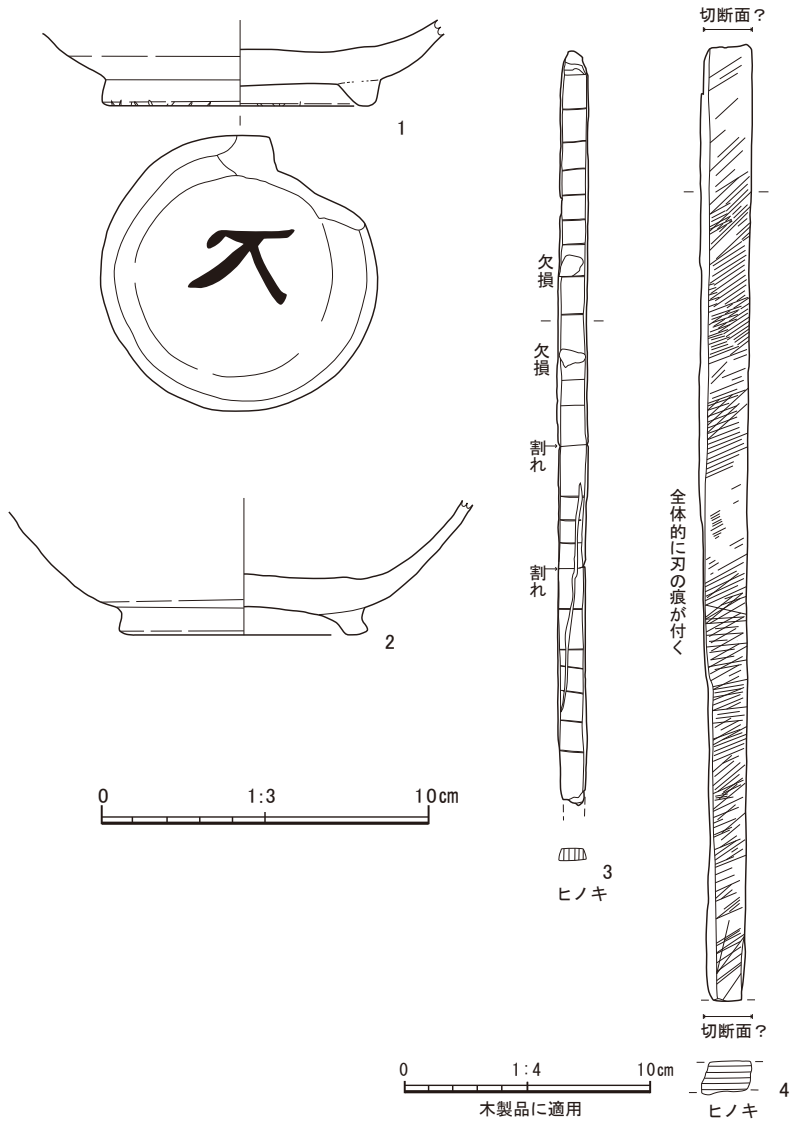
比較的小規模の溝、自然流路をまとめて報告する。

ア　SD1012

井戸跡 SE1010 に近接して掘られている。SE1010 の報告で記載したとおり、SE1010 と同時に存在し、SE1010 に導水するような機能を持っていたと想定される。時期を決定できる遺物は出土しなかったが、既に記載したとおり、12 世紀後半～末の SR1009 を切っており、同じく 12 世紀後半～末の SD1016 に切られていることから、SD1012 は 12 世紀後半～末と考えるのが妥当である。埋土はオリーブ黒色粘性シルトである。図示はしていないが、甑の把手が出土している。遺物からの時期判断は困難である。

イ　SD1013、SD1014、SD1016、SD1017

いずれも小規模な溝であるが、方向が揃っていること、幅と深さが一定になっていることから、人為的に掘られた溝の可能性が高いと判断した。埋土はいずれもオリーブ黒色粘性シルトである。



第 58 図　自然流路跡 SR1022 出土遺物実測図

SD1016 からは東遠江産の山茶碗が出土している(第 60 図－１)。高台は低いが、高台を付けた際の撫では丁寧であること、体部に丸みがあることから、12 世紀後半（Ⅰ期）と思われる。

ウ　SD1019

SE1010 と SE1014 の報告で記載したように、SE1010 と SE1014 を連結するように掘られた溝である。両井戸の間にある非常に小規模の溝であることから、単独で機能したと考えるよりも両井戸跡を結んでいたと考えた方が、この溝の存在を評価しやすい。したがって、時期も 12 世紀後半～末と考えるのが妥当であろう。埋土はオリーブ黒色粘性シルトである。

なお、SD1019 からは須恵器の坏（第 60 図－２）が出土した。平底の坏で､底面を一回転削って、その外周にもう一回転削った点で特徴があることから、８世紀前半（Ⅴ期前半）と考えらえる。これは流れ込みで、SD1019 の時期を示すものではない。

エ　SD1020

SE1010 に近接して掘られた溝で、SD1015 とつながっている。これも SE1010 と長大な溝である SD1015 を結ぶために掘られたと考えた方が、溝の存在を評価しやすい。時期も 12 世紀後半～末と考えるのが妥当であろう。埋土はオリーブ黒色粘性シルトである。

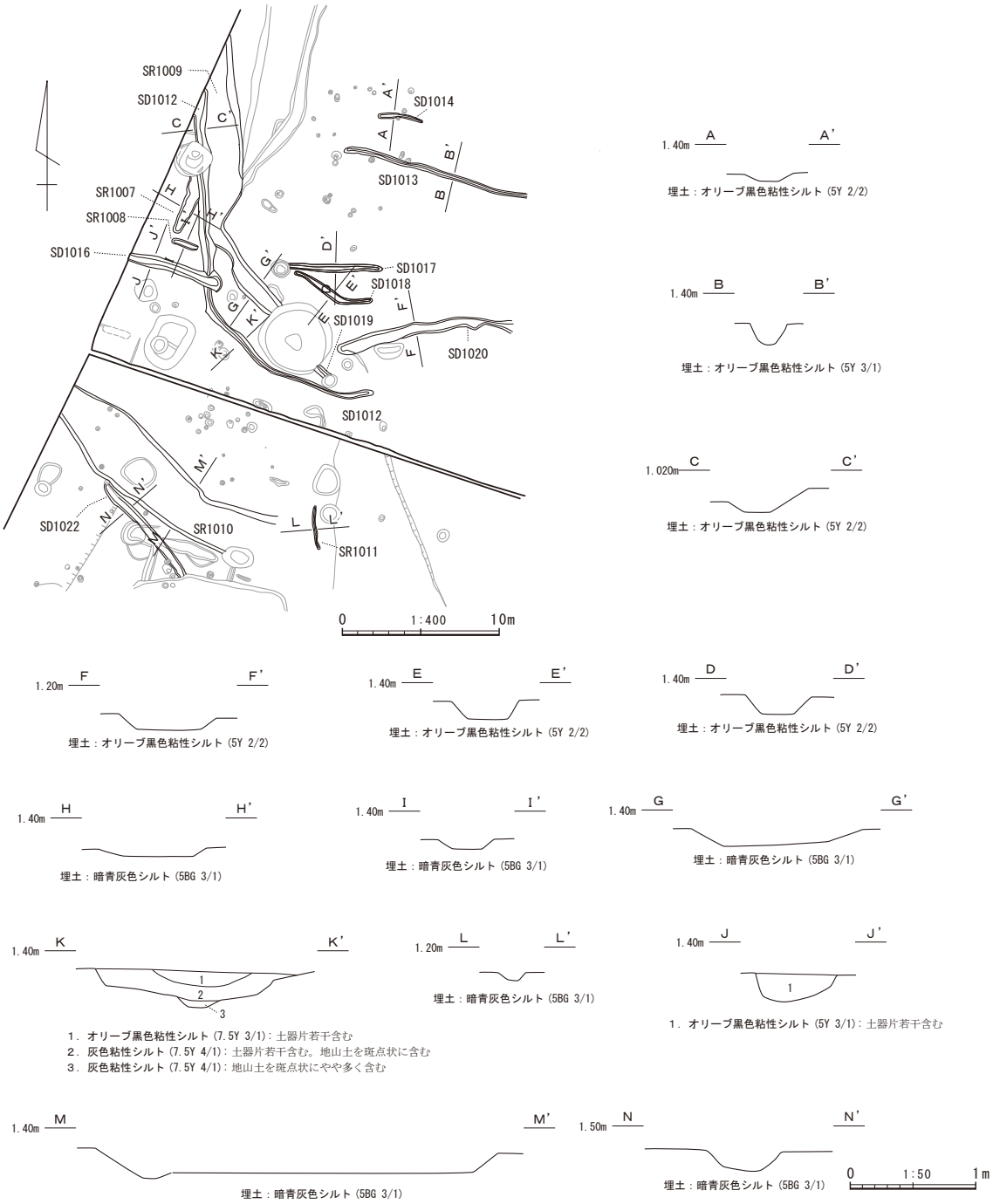
オ　SR1007、SR1008、SR1009、SR1010、SR1011

SR1010 以外はいずれも小規模な流路の跡で、水が流れたのは短期間であると思われる。出土遺物は次のとおりである。

SR1009 からは山茶碗などが出土している（第 60 図－３～６）。３は渥美・湖西産の山茶碗の小碗で、低いがしっかりした高台を付けてあり、高台を付けた際の撫でも丁寧である。内面に自然釉が付いているが､内面底面は､重ね焼きをしたらしく自然釉は付いていない。12 世紀後半（Ⅰ期－２）と思われる。

４も渥美・湖西産の山茶碗で、外側に張り出すようにしっかりとした高台を付けてあるが、高さが低いことから、12 世紀後半（Ⅰ期－２）と考えておくのが妥当であろう。

５は須恵器の蓋で、宝珠状のつまみがついている。観察できる範囲では回転撫でで仕上げてある。口



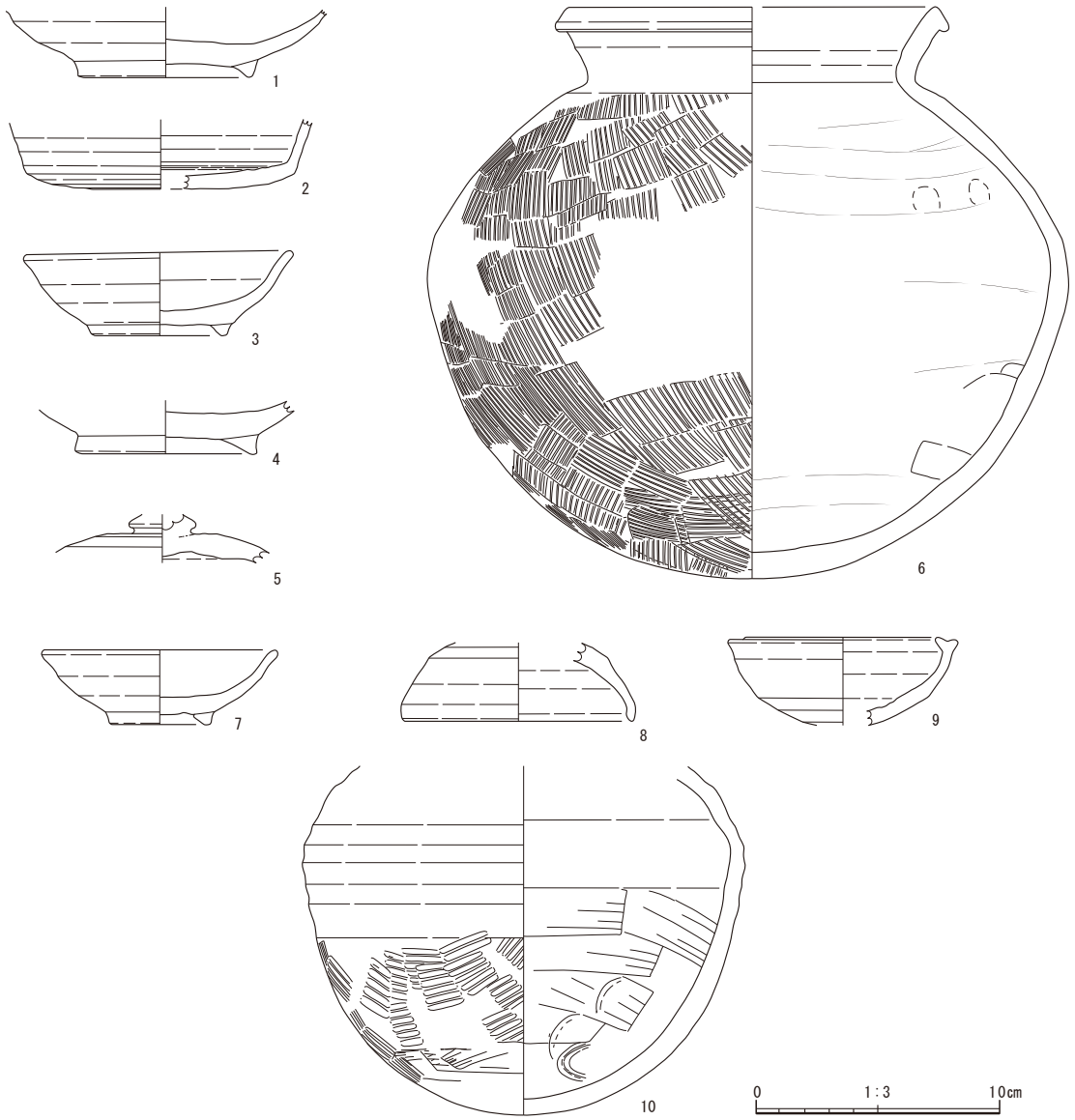
第 59 図　溝跡 SD1012 ～ 1014・1016 ～ 1020・1022、自然流路跡 SR1007 ～ 1009・1010・1011 実測図

縁部が残っていないため、時期の判断は困難だが、７世紀後半～８世紀（Ⅳ期～Ⅴ期）の中に収まると思われる。

６は須恵器の壺で、胴部外面は、全面叩き目が残る。頸部～口縁は内外面とも横撫でで仕上げてある。口縁端部は下方に拡張してある。内面は全面撫でてある。時期は８世紀代（Ⅴ期）と思われる。

SR1010 からは山茶碗などが出土した（第 60 図－７～９）。７は東遠江産の山茶碗の小碗で、高台の付け方が雑で、体部には調整に使った工具の当たりと思われる痕跡が５か所ほど見られる。内面は丁寧に撫でて仕上げてあるが、外面の仕上げは雑である。12 世紀後半（Ⅰ期）と思われる。

８は須恵器の蓋で、直径は 10cm に満たない。天井部は分厚く、口縁部は屈曲させてある。７世紀代（Ⅲ



第 60 図　溝跡 SD1013、自然流路跡 SR1009 ～ 1011 出土遺物実測図

期末～Ⅳ期末）と考えられる。

９は須恵器の坏で、体部は弓なりに弧を描くように立ち上り、口縁部は外側につまみだし、低い受け部が付けられている。底部の削りは同心円状と思われる。これも７世紀代（Ⅲ期末～Ⅳ期末）に中に収まると考えられる。

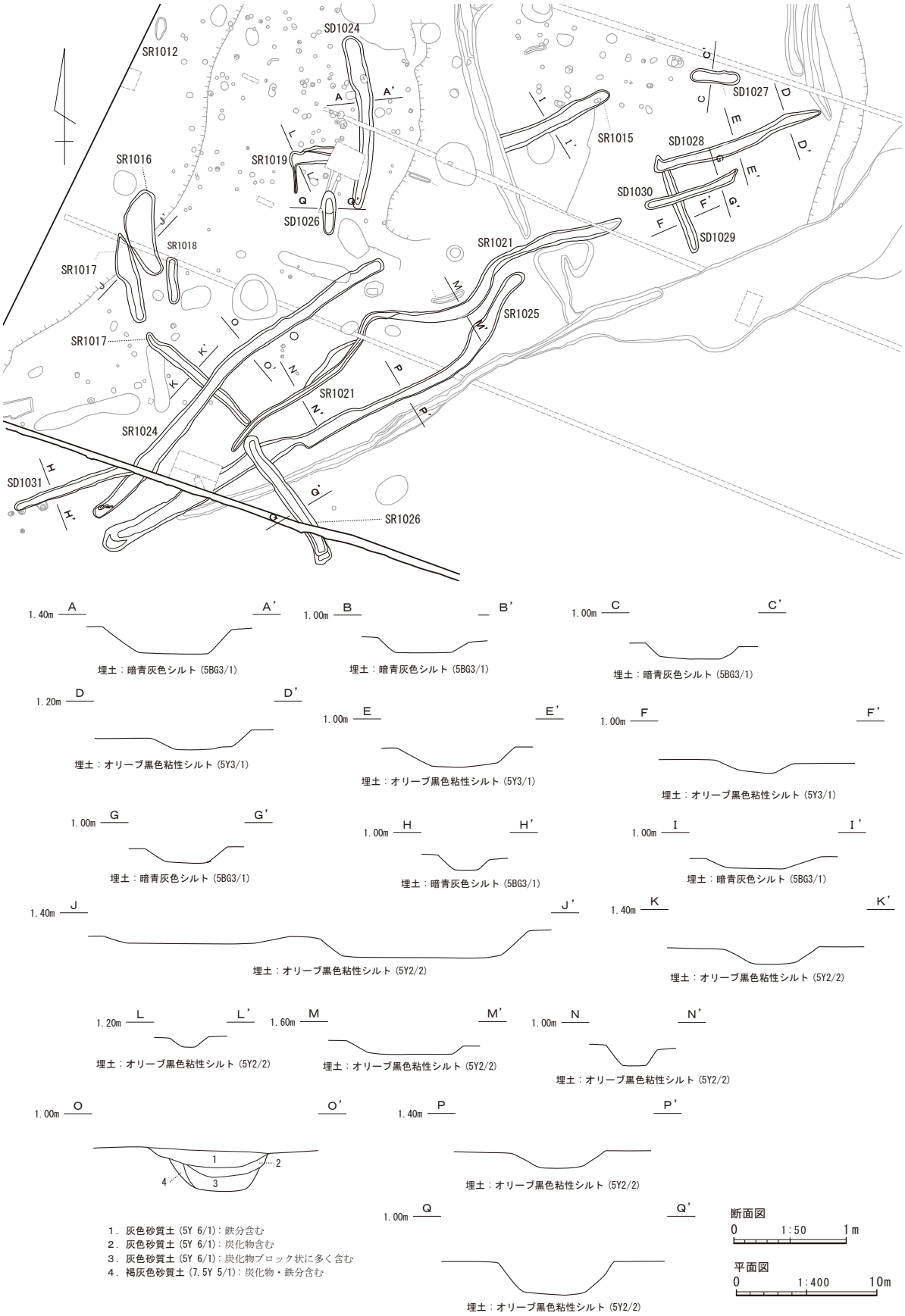
SR1011 からは、須恵器の壺が出土した（第 60 図 -10）。胴部下半外面に叩き目が見られる。内面下半は工具を使用して撫でてある。口縁部の形態が不明であるが、７世紀代（Ⅲ期末～Ⅳ期末）と思われる。

(20) その他の溝、自然流路２（第 61 図）

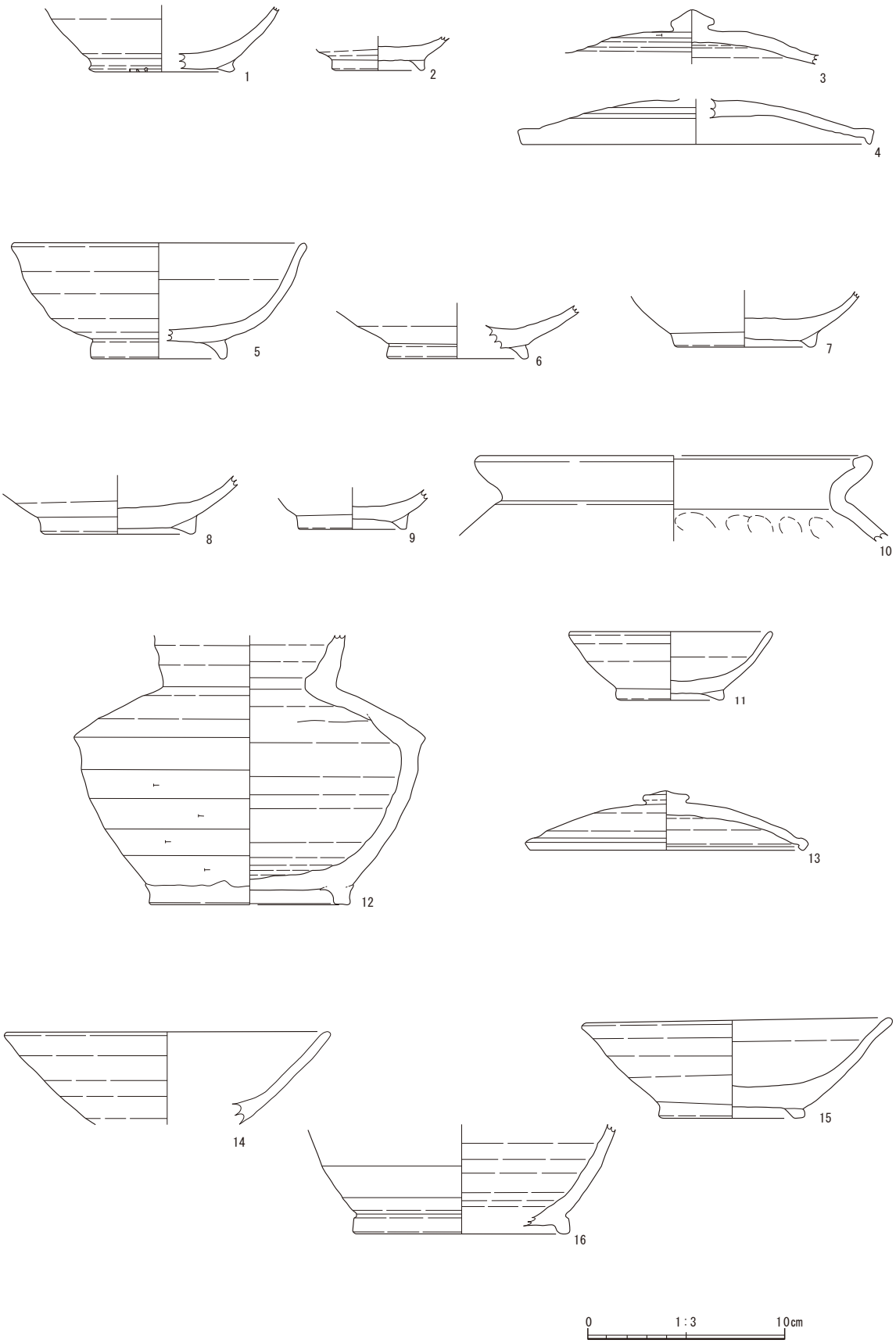
ア　SD1024、SD1026、SD1027、SD1028、SD1029、SD1030、SD1031

いずれも小規模な溝である。人為的に掘られた可能性があるとして、溝としたが、規模が小さく、どのような機能があったのか、推定が困難である。自然流路跡が含まれている可能性はある。出土遺物は次のとおりである。

SD1024 からは山茶碗などが出土した。（第 62 図－１～４）。１は渥美･湖西産の山茶碗で､高台は低く、



第 61 図　溝跡 SD1024・1026 ～ 1031、自然流路跡 SR1012・1015 ～ 1017・1019・1021・1024 ～ 1026 実測図



第 62 図　溝跡 SD1019・1024・1026・1030、自然流路跡 SR1021・1024・1025 出土遺物実測図

ひび割れ、剥落が目立つ。赤褐色に変色した部分が多いことから、２次焼成を受けた可能性がある。高台は低いが、体部に丸みがあることから、12 世紀後半（Ⅰ期－２～Ⅱ期）と思われる。

２は東遠江産の山茶碗の小碗である。高台を付けた際の撫では丁寧である。内面に自然釉が付いており、重ね焼きの痕跡も見られる。高台の高さがあることから、12 世紀後半（Ⅰ期－２～Ⅱ期）と思われる。

３は須恵器の蓋で、宝珠状のつまみがついている。天井部から端部に向かう部分が反り返るようになっているため、端部は水平に近いと推定される。８世紀後半～末（Ⅴ期後半～末）と思われる。

４も須恵器の蓋で、つまみ部分が欠損している。口縁端部を短く折り曲げて断面が三角形の受け部を作ってある。８世紀中頃（Ⅴ期前半）と思われる。

以上の出土遺物から、SD1024 の時期は 12 世紀後半になると考えられる。

SD1026 は小規模な溝であるが、出土遺物は多い（第 62 図－５～ 10）。５は東遠江産の山茶碗で、高台の断面は三日月状で、しっかりとした高台である。高台を付けた際の撫でも丁寧である。体部は緩やかな曲線を描くように立ち上がり、口縁はわずかに外反する。12 世紀前半（Ⅰ期）と思われる。

６は東遠江産の山茶碗で、高台は外側に張り出すように付けてある。底部に大きな火ぶくれがあり、焼成中に破裂したようである。内面に自然釉が付いている。外側に張り出した高台から、12 世紀前半（Ⅰ期）までさかのぼると思われる。

７は渥美・湖西産の山茶碗で、高台は低く、高台接地面には籾痕が付いている。内面には自然釉がかかっており、重ね焼きの跡が残っている。高台は低いが、体部に丸みが残っているように見えることから、12 世紀末（Ⅱ期）と考えられる。

８は渥美・湖西産の山茶碗で、高台は低く、高台を付けたときの撫では雑な印象を受ける。高台接地面には籾痕が付いている。内面には重ね焼きの跡が残っている。体部の立ち上がりが不明であるが、高台が低くなっていることから、12 世紀末～ 13 世紀前半（Ⅱ期～Ⅲ期－１）と考えておく。

９は、渥美・湖西産の山茶碗で、断面が三角形の低い高台が付いている。接地面には籾痕は付いていない。内面には自然釉がかかっており、重ね焼きの痕跡も見られる。高台が低くなっていないこと、体部に丸みが残っているように見えることから、12 世紀後半でも末に近い（Ⅱ期）と思われる。

10 は鍋の口縁で、口縁端部を内側に折り返して密着させている。折り返し部分がやや長いこと、頸部が短いことから、13 世紀前半になると思われる。

以上の出土遺物から、SD1026 の時期は 12 世紀後半～ 13 世紀前半と考えられる。

SD1028 と SD1029 は、３区の 01 区、P1 区、P2 区で検出した。両者は直行している。遺物は出土していないため、時期の判断は困難である。埋土は両方ともオリーブ黒色粘性シルトの単一層である。現地の判断に基づいて、SD1028 が SD1029 を切っているように図示したが、実際には両溝の埋土は酷似しており、切り合いの確認は非常に困難であった。

SD1030 からは、東遠江産の山茶碗の小碗（第 62 図 -11）が出土した。高台を付けた際、高台外側は丁寧に撫でてあるが、高台内側の撫では雑である。高台接地面には砂粒の痕跡が付いている。高台が低く、体部に丸みが残っていることから 12 世紀末（Ⅱ期）になると考えられる。

イ　SR1012、SR1015 ～ SR1017、SR1019、SR1021、SR1024 ～ SR1026

SR1012 は、３区の西端で検出した幅が広く浅い流路跡で、幅の西半分程度は調査区外に出ている。SR1015、SR1021、SR1024、SR1025 は、微高地の際を北東～南西方向に流れ、微高地の地形を形作っている。これらに直行しているのが、SR1017 と SR1026 である。これらは平面形がやや安定しないため、自然流路としたが、人為的に掘られた溝の可能性もある。これらの自然流路跡から出土した遺物は次のとおりである。

SR1021 からは、須恵器の台付長頸壺（第 62 図 -12）が出土した。体部下半は緩やかに弧を描くよう

に立ち上り、屈曲して肩部に至る。肩部と口縁の境界には、明瞭なつなぎ目が残っている。８世紀前半（Ｖ期前半）に位置付けられるであろう。自然流路への流れ込みと思われる。

SR1024 からは須恵器の蓋（第 62 図 -13）が出土した。器高が低く、つまみは潰れた宝珠状を呈する。体部は緩い弓なりを呈し､端部を短く折り曲げて受け部を作っている。８世紀中頃(Ｖ期前半)であろう。

SR1025 からは山茶碗などが出土している(第62図-14～16)。14は､体部～口縁が直線的に立ち上がり、口縁は外反しない特徴がある。復元口径は 16cm ほどになると思われる。口縁外面に釉を漬け掛けしてあることから、灰釉陶器の可能性がある。高台の形態が不明であるが、11 世紀後半と考えられる。

15 は渥美・湖西産の山茶碗で、高台接地面にスノコの様な圧痕がついている。高台はやや太めで、外側に張り出している。体部は直線的に立ち上り、口縁は僅かに外反する。底部は分厚い。体部が直線的に立ち上がっていることから、時期は 13 世紀前半（Ⅲ期－１）まで下る可能性がある。

16 は須恵器の壺の胴部下半と思われる。高台はやや外側に張り出し、胴部は緩やかな曲線を描くように立ち上がっている。8 世紀代（Ｖ期）であろう。

(21) その他の溝３（第 63 図）

５区で検出した溝を報告する。

ア　SD1032 ～ SD1036

いずれも小規模な溝である。SD1033 と SD1034 は谷状の地形に流れ込むように掘られている。SD1032 も非常に浅い溝のため、途中で途切れているが、谷状地形の方向に向かっていることから、本来は谷状地形に流れ込んでいた可能性がある。これらの溝跡からの出土遺物は次のとおりである。

SD1032 からは、渥美・湖西産の山茶碗（第 64 図－１）が出土した。底部は糸切りの後に撫でているが、撫でつけたように粘土が引きずられた痕跡が見られる。高台は剥落している。内面に黒色の付着物があることから、硯に転用された可能性がある。体部に丸みがあると思われることから、12 世紀末（Ⅱ期）になると思われる。

SD1034 からは知多産の山茶碗（第 64 図－２）が出土した。胎土に砂が多く、特有の白い焼き上がりから、愛知県知多産と考えられる。時期は 12 世紀代と思われる。

SD1036 からは､渥美･湖西産の山茶碗（第 64 図－３）が出土した。非常に低い高台が付けられている。内面が黒ずんでいるうえに、表面が磨滅していることから、硯に転用した可能性がある。高台は低いが、体部に丸みが残っていることから、12 世紀末（Ⅱ期）になると思われる。

７　被熱遺構

（１）SX1001（第 65 図）

３区の 097 区で検出した。表土除去中に、土が真っ赤に焼けた部分を発見したのが端緒であった。強い熱を受けた痕跡であることは明らかであったことと、周辺の遺物包含層で鉄滓を確認していたため、当初は鍛冶遺構の可能性を考えた。そこで、遺構の輪郭を確認した後、十字に土層帯を残して慎重に掘削したところ、次のことが判明した。

・鞴口、鉄滓など、鍛冶に伴う遺物は出土せず、被熱の度合いも鉄鍛冶に伴う程のものではない。

・埋土中から、焼成不良の土師器の小皿が複数出土した。

・深さは 0.24 ｍと、大きさの割に浅い。

以上のことから、火葬跡、あるいは、土器焼成遺構の可能性の方が高いと判断した。壁面は垂直ではなく、斜めに掘り込まれている。底は水平に近く掘られているが、その上に地山起源の土を貼って、さらに水平になるよう整地している。

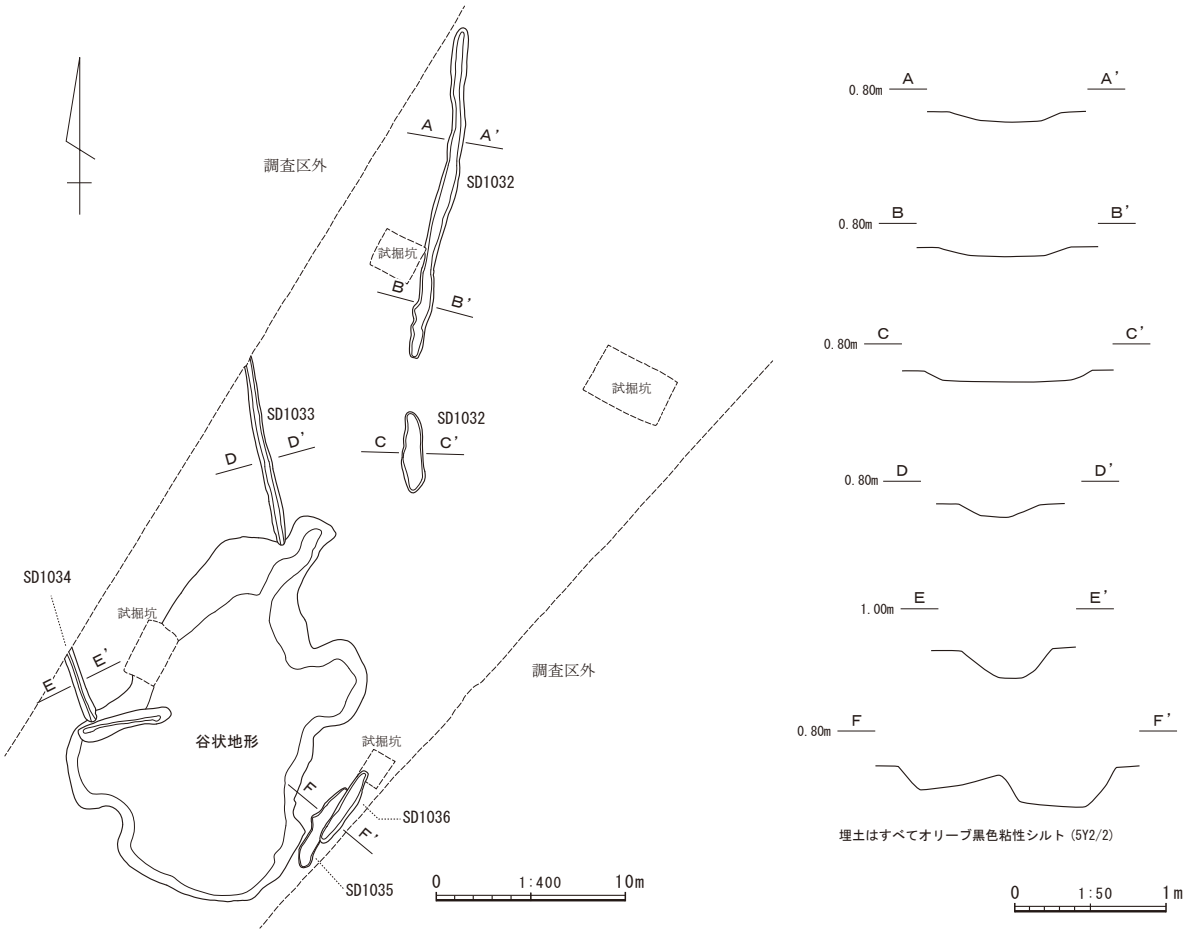
埋土の所見は次のとおりである。最下層の５層は焼土層である。その上に堆積した４層には多くの炭

化物が含まれている。３層はオリーブ黒色粘性シルトで、地山起源の可能性が高い。この層は、遺構の北端に近い部分にのみ堆積しており、焼土や炭化物が少ないため、３層自体は強い熱は受けていないと考えられるが、強い被熱によって硬化した粘土塊が含まれている。

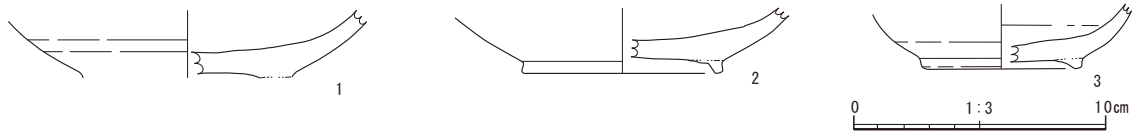
以上の所見から、次のような構築過程が推定できる。まず、長方形に近いやや不整形の穴を掘る。この時、地面を垂直ではなく、斜めに掘り込み、壁面が斜めになるように掘る。底面は平坦になるように掘る。この時点で、平面形が長方形に近い浅い皿状の掘り込みができたと考えられる。次に、底面に地山起源の灰色粘性シルトを敷き、底面を水平にならし、床面を形成する。

使用過程は次のように推定される。底面で火を焚く。これにより床面が強い熱を受け、５層の焼土層が形成された。そして、火を焚いた際の木材が炭化して４層が形成された。出土遺物は５層と４層に含まれていたことから、SX1001 が機能していた時に遺構内に置かれたと考えられる。

３層、２層、１層は地山起源の土で、人為的に埋めたとは考えられず、自然堆積と思われることから、この遺構が機能しなくなった後に流れ込んだものと考えられる。

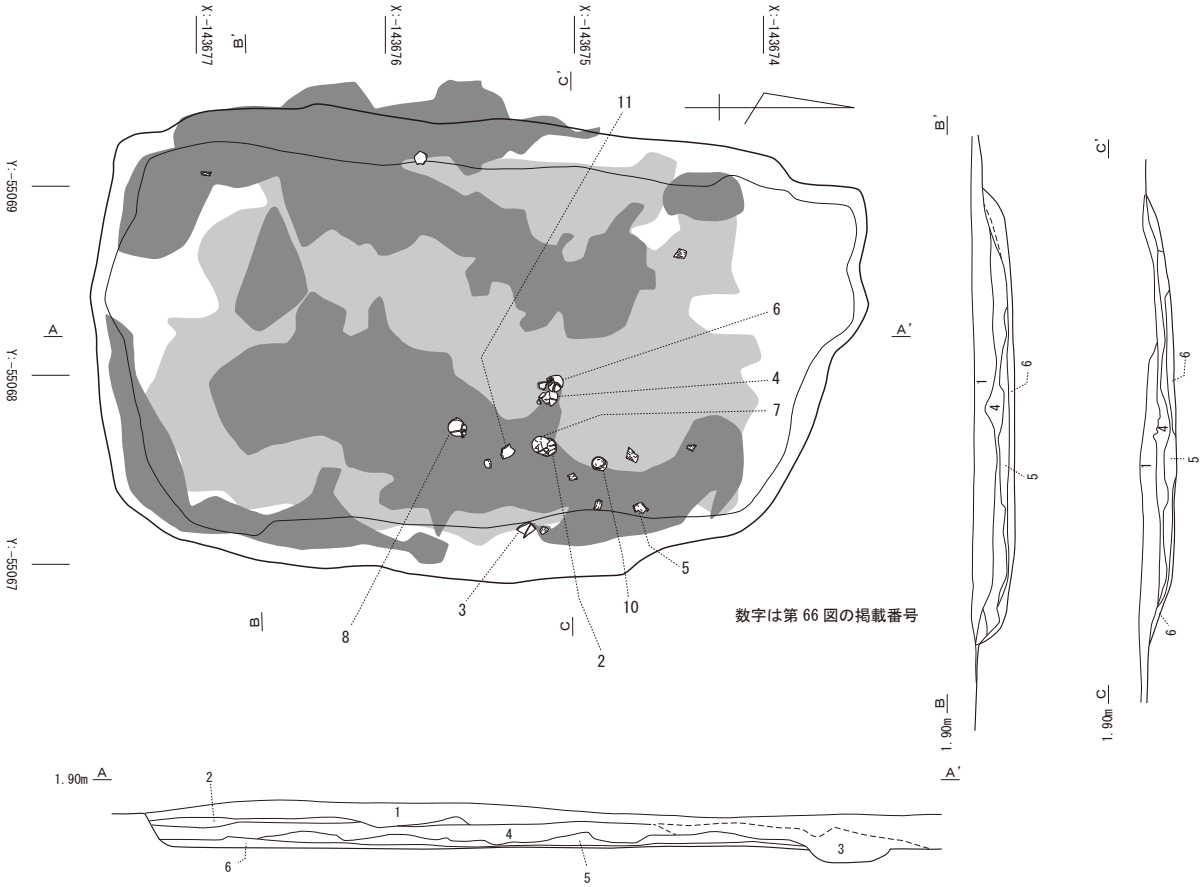


第 63 図　溝跡 SD1032 ～ 1036 実測図



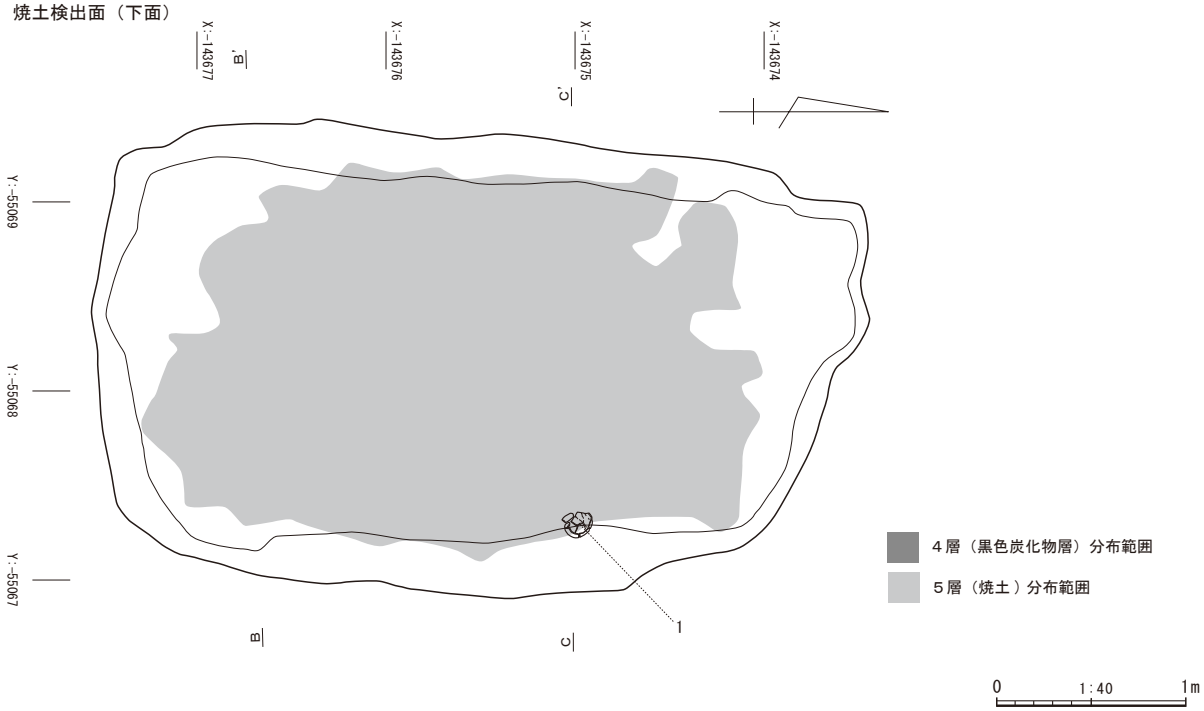
第 64 図　溝跡 SD1032・1034・1036 出土遺物実測図

炭化物検出面（上面）

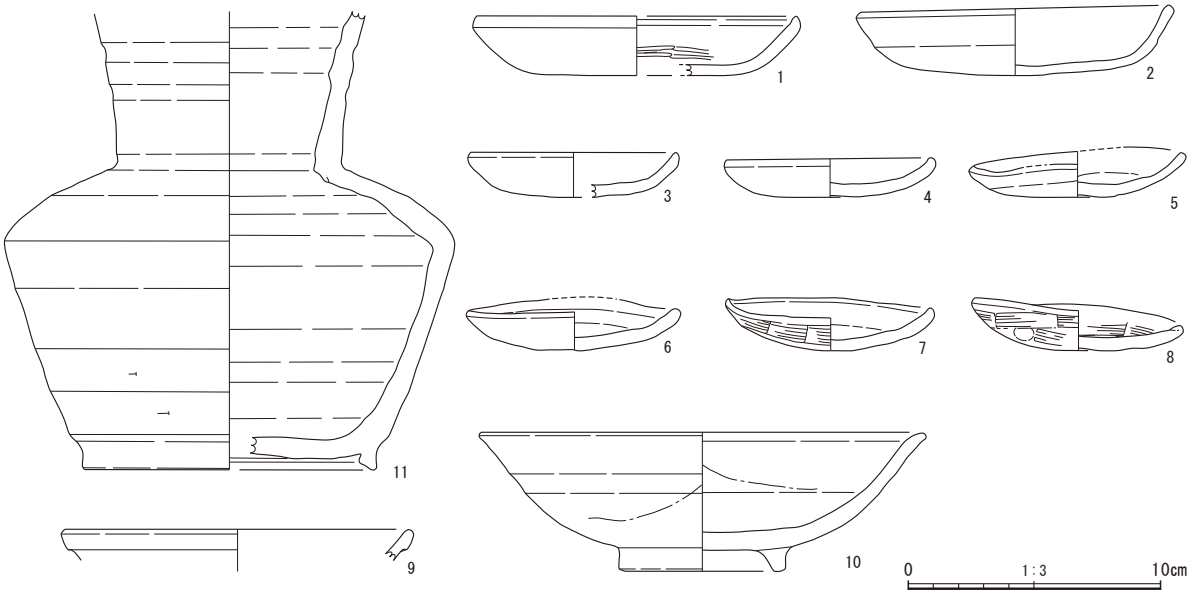


1．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/2)：覆土
2．黒褐色粘性シルト (2.5Y 2/1)：炭化物・焼土若干含む
3．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/2)：炭化物・焼土若干含む。被熱による硬化粘土を含むことから、埋戻し土の可能性
4．黒色炭化物層 (N 5/)
5．焼土
6．基盤層起源の貼り床：本来は灰色粘性シルトと思われるが、被熱により、薄赤灰色に変色、また被熱により粘性は失われている

焼土検出面（下面）



第 65 図　被熱遺構 SX1001 実測図



第 66 図　被熱遺構 SX1001 出土遺物実測図

この遺構から出土した遺物は次のとおりである（第 66 図）。１～８は土師小皿で、いずれも４層と５層から出土した。８点とも焼成不良で、時期の判断は困難である。これら、焼成不良の小皿が出土したことが、調査時に土器焼成の機能を推定した根拠である。ただ、土器焼成遺構にしては、出土土器の点数が少ないため、次の可能性として火葬墓を考えた。

９は白磁の破片で、口縁を肥厚させた玉縁口縁であることから、12 世紀代と考えられる。10 は渥美・湖西産の山茶碗で、太くしっかりした高台が付いている。高台を付けた際の撫でも丁寧である。体部は緩やかな曲線を描くように立ち上り、口縁は僅かに外反していることから。12 世紀前半（Ⅰ期－１）までさかのぼると思われる。11 は、８世紀代（Ⅴ期）の須恵器の広口壺であるが、この遺構に流れ込んだ破片と包含層から出土した破片が接合したもので、この遺構の時期を示すものではない。

SX1001 からは多くの炭化物が出土した。特に４層は炭化物層といえるほどに多くの炭化物を含んでいる。そこで、４層で採取した炭化物５点の放射性炭素年代測定を委託し、次の結果を得た（詳細は第５章第２節参照）。

試料１：10 世紀末～ 12 世紀中頃
試料２：11 世紀中頃～ 13 世紀前半
試料３：12 世紀後半～ 13 世紀前半
試料４：11 世紀中頃～ 13 世紀前半
試料５：11 世紀前半～ 12 世紀中頃

SX1001 に伴うと判断した炭化物のみを年代測定に出したため、外部から流れ込んだ炭化物が含まれている可能性は極めて低い。したがって、測定値の年代幅は、この遺構が機能した時期幅を示していると考えられるが、主要な時期は 11 世紀中頃～ 13 世紀前半と考えられる。

出土遺物のうち、土師小皿の時期の判断は困難であるが、白磁は 12 世紀代、山茶碗は 12 世紀前半であった。このことから、SX1001 が機能した時期を出土遺物から考えると、12 世紀代と考えられる。

８　杭列

５区では、調査区の中央付近で谷状の落ち込みを確認し、この谷状地形の中で杭列を検出した（第67図、68図）。谷状地形の東端に木杭が打ち込まれていたもので、護岸のような施設に伴うものと考えられる。谷状地形から出土した遺物の時期が古墳時代～鎌倉時代に渡るため、杭列の時期判断は困難であるが、12世紀後半～13世紀の山茶碗が多いことから、平安時代後期～鎌倉時代の可能性が考えられる。

杭列は、見通し図Ａ－Ａ’、Ｂ－Ｂ’で示されているように、入り江状になった部分には、ほぼ等間隔で２列打ち込んである。これに対して、谷状地形の東岸の部分は、見通し図Ｄ－Ｄ’に示されているように、深く打ち込んだ杭と浅く打ち込んだ杭がある。深く打ち込んだ杭は等間隔に並び、その間に２～３本の杭を浅く打ち込んだようになっている。このことから、長い杭を等間隔に打ち込み、その間に短い杭を２～３本打ち込んだと考えられる。

杭のうち、95点の樹種同定を行った。樹種の内訳は次のとおりである。

第２表　５区谷状地形杭列に使用された樹種

樹種	点数	樹種	点数	樹種	点数
サカキ	18	ヤブツバキ	2	コナラ属コナラ節	1
アカマツ	13	ツガ属	2	クスノキ科Ｂ	1
エノキ	9	ナツツバキ	2	イチイガシ	1
スダジイ	7	コジイ	2	ネムノキ	1
シキミ	6	イボタノキ属	1	サワラ	1
ヒサカキ属	4	クスノキ科Ｃ	1	ヒノキ	1
カラマツ	3	クスノキ科Ａ	1	カバノキ属	1
イヌマキ属	3	コナラ属アカガシ亜属	1	クロマツ	1
タイミンタチバナ	3	クリ	1	シラキ	1
クロバイ	2	コナラ属クヌギ節	1	アスナロ	1
ヤマビワ	2	エゴノキ属	1		

サカキとアカマツが多いのは、今回の調査で行った樹種同定全体の傾向と一致する。他の樹種も多く、多様な樹木を使用していたと言える。今回の調査では、サカキは19点確認され、そのうち18点が杭であった（１点は柱材）。アカマツは16点確認され、13点が杭であった（他は柱材２点、用途不明１点）。このことから、サカキとアカマツは杭材として好んで選択されたと考えられる。特にアカマツは、土の中で不朽しにくいとされていることから、杭材として選択されたことは、自然な結果であろう。

これに対して、土木用材や建築材に多用されるスギが１点も見られないことも特徴的である。スギ材が極めて少ないことも、今回の西向遺跡調査での樹種同定結果と同様である。

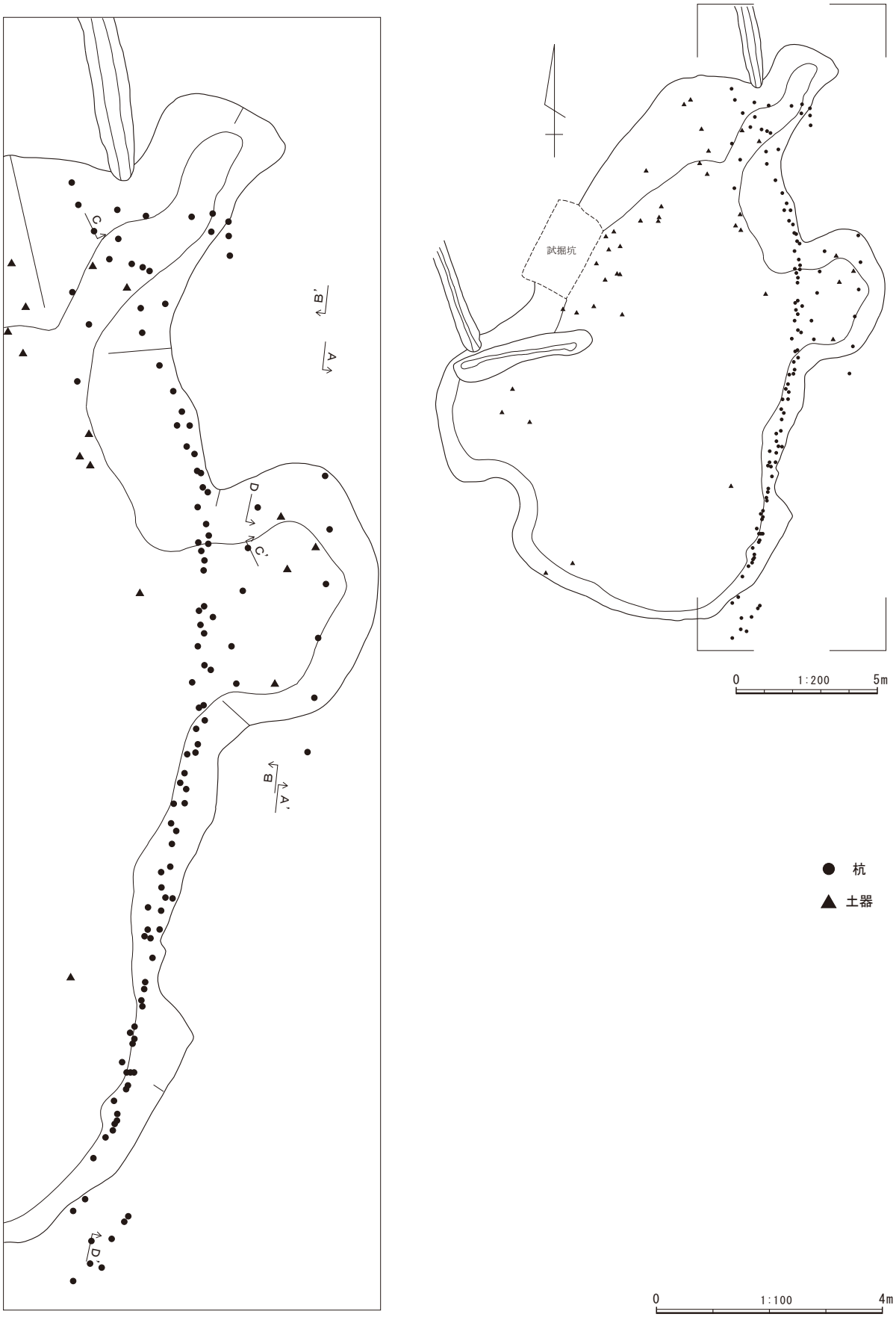
杭の形態の内訳は次のとおりである。

丸杭：89点、角杭：６点

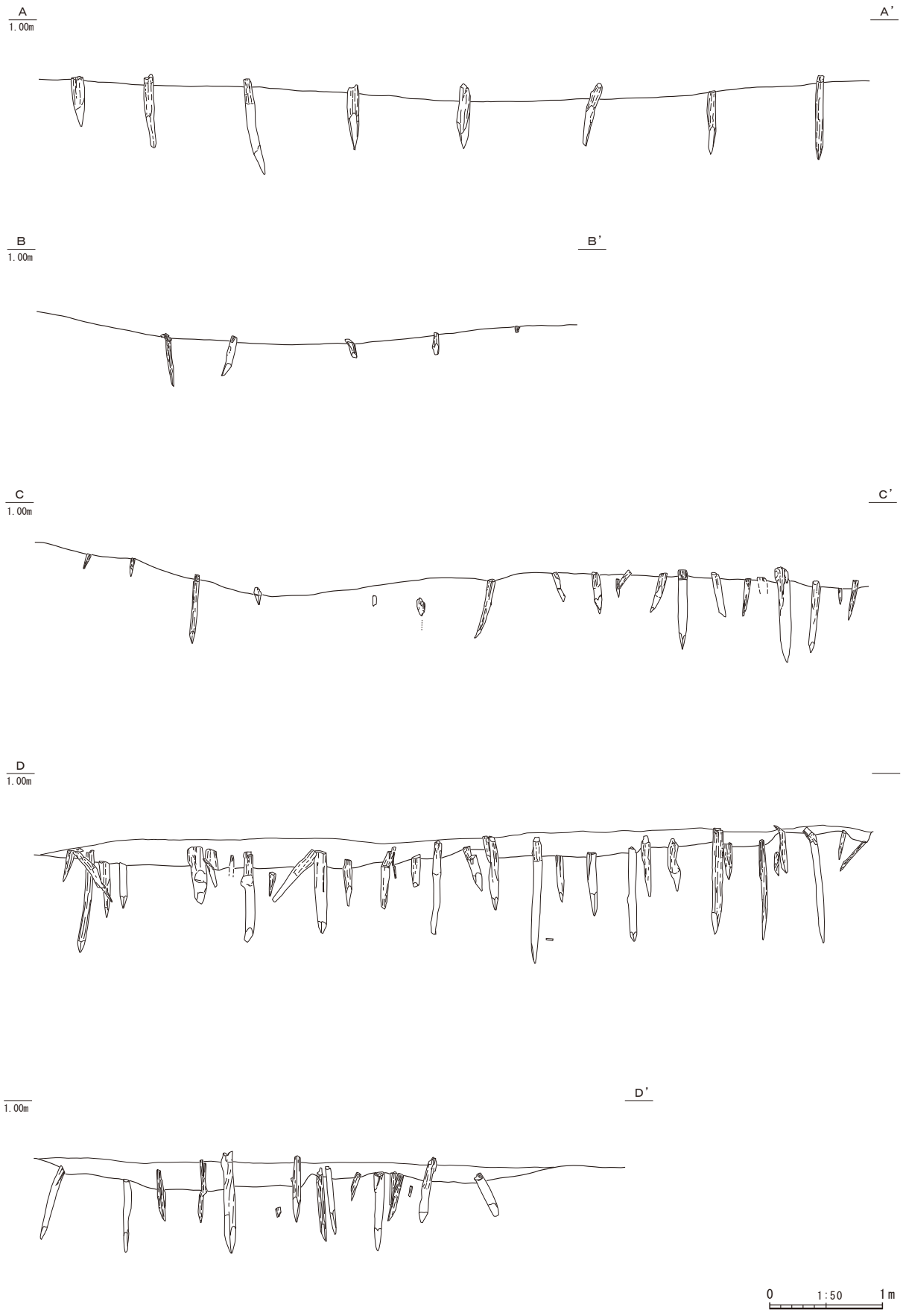
丸杭が主体で、ほとんどが自然面を残し、先端を尖らせる加工に留めてある。

主要な杭の実測図を掲載する（第69図、第70図）。第69図－１～４は角材である。１は1.4cm×1.1cmの四角形になるように加工してある。２は自然面が残っているため、断面が四角形にはなっていないが、10㎝×８㎝の角材に加工してある。３と４は割り材である。５は、断面を見る限りは角材と思われるが、腐食が進んでいるため、加工の痕跡がはっきりしない。６は直径６㎝程の丸材であるが、切り欠いた部分と、切り欠いた部分にほぞ穴のような穿孔があることから、転用材と思われる。７～12は、直径10㎝程の丸材で、先端を尖らせるように加工してある。

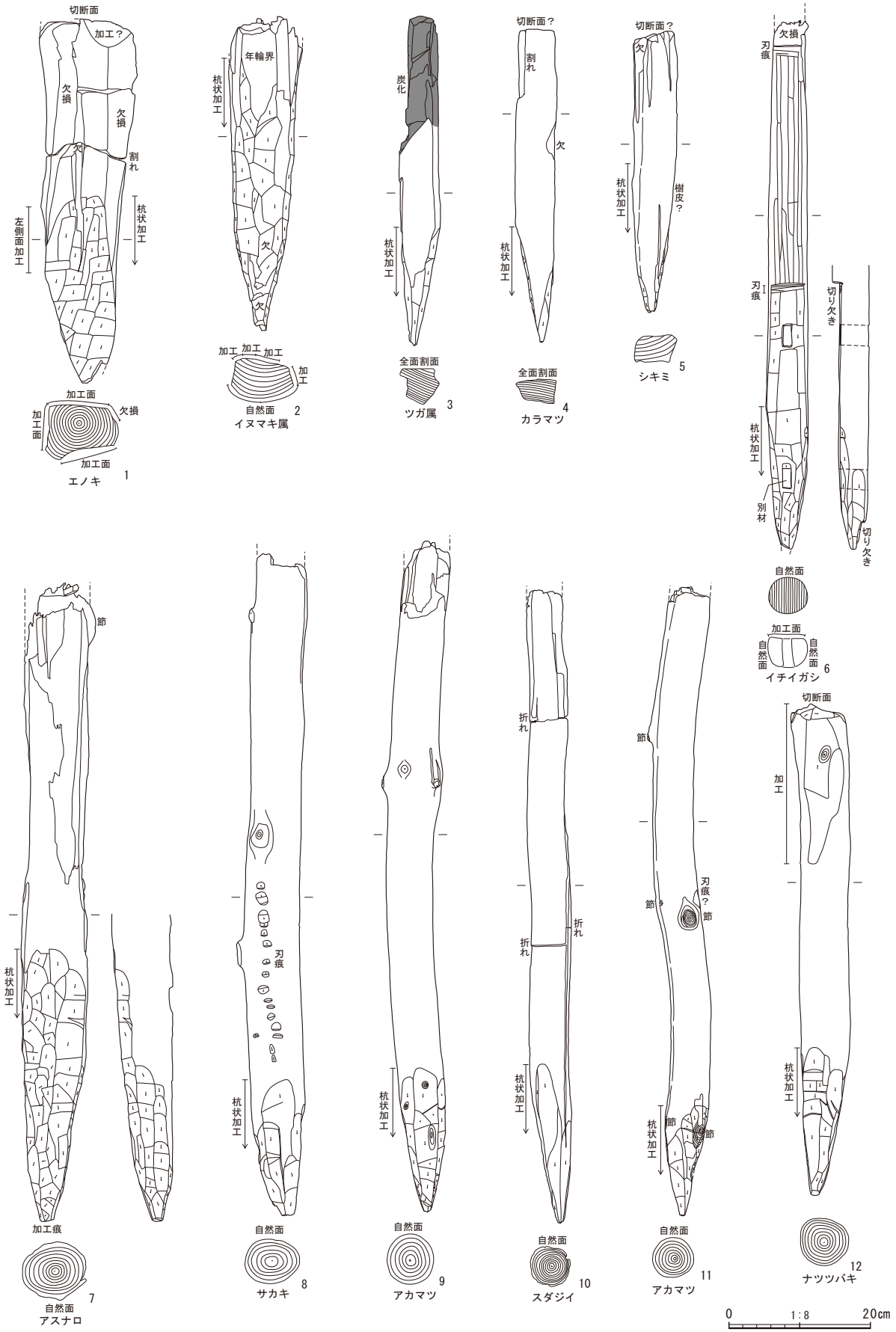
第70図の杭は全て丸材である。１の先端には加工痕のような跡が見られることから、切断している可能性がある。２、４、８、10～12には樹皮が残っている。３と９には、炭化した部分が見られる。



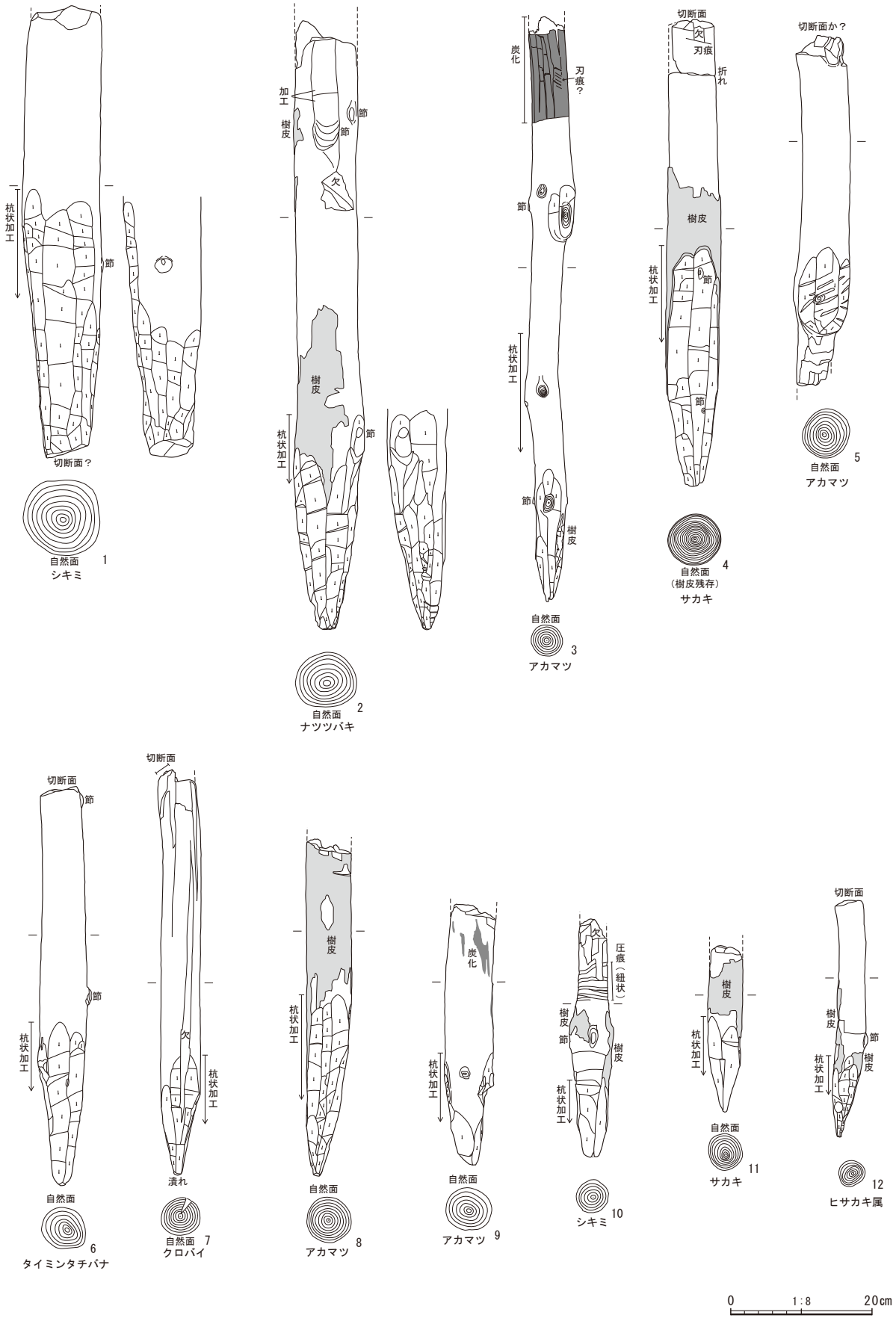
第 67 図　５区谷状地形検出杭列実測図１



第 68 図　５区谷状地形検出杭列実測図２



第 69 図　５区谷状地形杭列出土杭実測図１



第 70 図　５区谷状地形杭列出土杭実測図２

９　遺物集積遺構

ここでは、掘り込みなどの遺構を伴わない遺物集中で、時期的にまとまりのある遺物が集中したものを遺物集積遺構として報告する。

（１）SX1002（第 71 図）

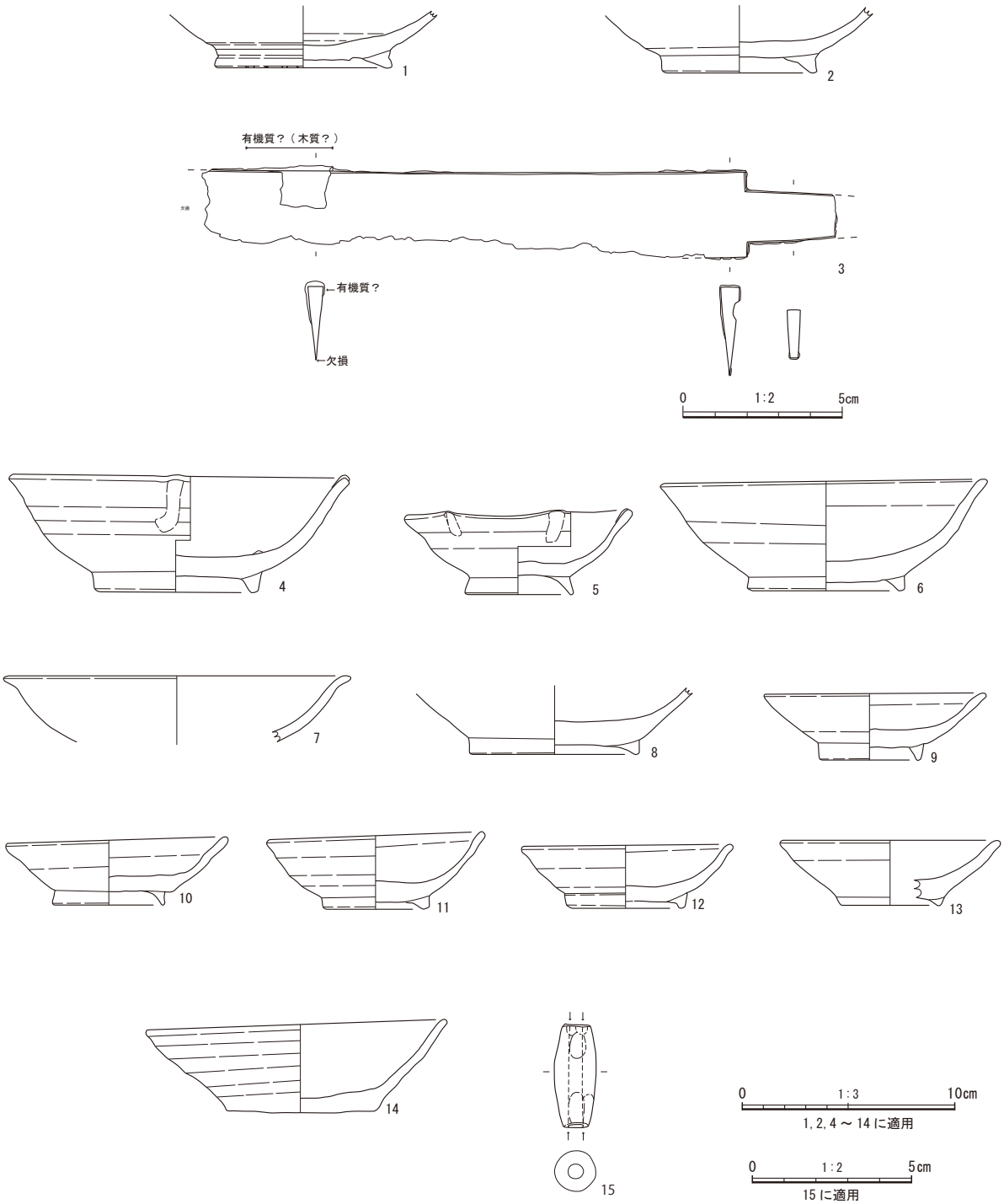
２区の K1 区で検出した土器３点と金属製品１点からなる小規模な遺物集積である。掘り込み等の遺構は確認できなかった。周囲に遺物がほとんどない場所で、土器と金属製品が、直径１ｍ程度の円内で出土した。金属製品の時期の判断は困難であったが、土器３点はいずれも 12 世紀後半の山茶碗であったため、まとまりのある遺物集積として捉えた。出土遺物は次のとおりである（第 72 図）。

第 71 図　遺物集積遺構 SX1002・1003 実測図

１は、渥美・湖西産の山茶碗で、高台端部を強く撫でているため、高台が外側に張り出すようになっている。高台接地面には籾痕が付いている。12 世紀後半（Ⅰ期－２）と思われる。

２は東遠江産の山茶碗で、しっかりとした高台が付いている。高台以外の形態は不明であるが、12 世紀後半（Ⅰ期－２）と思われる。

３は短刀である。切っ先が失われているため、全体の形は不明であるが、刃渡りが 20cm を越えると思われることから、短刀とした。一部に木質と思われる有機物が付着していることから、鞘に納められた状態であったと考えられる。



第 72 図　遺物集積遺構 SX1002・1003 出土遺物実測図

（２）SX1003（第 71 図）

３区の N98 区で検出した遺物集積である。掘り込み等の遺構は確認できなかった。遺物は 2.4 m×２mの範囲で､地面の緩傾斜に沿って分布していた。緩斜面に沿って遺物が動いた可能性があることから、当初は、遺物は１か所にまとまっていたと考えられる。出土遺物は、東遠江産の山茶碗が多い特徴がある。以下に記載するが、特記のない限りは東遠江産の山茶碗の小碗である（第 72 図)。

４は渥美・湖西産の山茶碗の輪花碗で、高台はしっかりした作りで、高台を付けた際のなでも丁寧である。輪花が失われた箇所があるが、５か所作ってあったと思われる。体部は緩やかな曲線を描くように立ち上り、口縁は外反している。内面に自然釉が付いており、重ね焼きの痕跡も見られる。体部の丸みと口縁の外反から、12 世紀前半（Ⅰ期）までさかのぼると思われる。

５は小型の輪花碗で、断面が三日月形に近いしっかりとした高台が付けられている。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁は僅かに外反している。輪花は５か所作ってある。これも体部の丸みと口縁の外反から、12 世紀前半（Ⅰ期）と考えられる。

６は渥美・湖西産の山茶碗で、逆台形の高台が付いており、高台を付けた際のなでは丁寧である。体部は緩やかな曲線を描くように立ち上り、口縁はわずかに外反している。内面に自然釉が付いており、重ね焼きの痕跡も見られる。12 世紀中頃（Ⅰ期）と思われる。

７は口縁がやや強く外反しており、内面と口縁外面に自然釉が付いている。高台の形態が不明であるが、体部の丸みと口縁の外反から、12 世紀前半（Ⅰ期）と考えられる。

８は高台が低く、接地面に籾痕が付いている。高台を付けた際のなでは丁寧である。12 世紀中頃～後半（Ⅰ期）と思われる。

９は内面と外面に自然釉が付いており、内面の釉は発泡している。内面には重ね焼きの痕跡が見られる。外面には自然釉のかかっていない部分があり、その部分だけやや焼成不良になっていることから、焼成時に熱の当たりが弱かったと思われる。三日月形の高台から、12 世紀前半（Ⅰ期－１）になると考えられる。

10 は全体形がやや歪んでいる。内面の半分ほどと、外面の一部に自然釉が付いている。重ね焼きの痕跡ははっきりしないが、内面中央付近だけ、円形に自然釉がかかっていない部分があることから、重ね焼きをしたと思われる。これも爪形の高台から、12 世紀前半（Ⅰ期）と考えられる。

11 は、内面に自然釉が付いており、重ね焼きの痕跡も見られる。体部に丸みがあることから、12 世紀中頃（Ⅰ期）と考えられる。

12 も内面に自然釉が付いており、重ね焼きの痕跡が見られる。体部は緩やかな曲線を描くように立ち上がっている。体部に丸みがあるが、口縁は外反していないことから、12 世紀後半（Ⅱ期）になると考えられる。

13 は内外面とも火襷が目立つ。全体的に白っぽく焼きあがっている点に特徴がある。高台は低いが、体部に丸みが見られることから、12 世紀末と思われるが、高台が低い点からは、13 世紀前半（Ⅱ期）まで下る可能性もある。

14 は土師器であるが、山茶碗に類似した形態である。底部は糸切りのままで、糸切り痕は、消されることなく、残っている。体部は直線的に立ち上がっており、螺旋状のなでが見られる。高台は付けられていない。15 は土錘である。

第４節　平安時代前期～奈良時代の遺構と遺物

本節でいう平安時代前期とは、灰釉陶器出現～消滅で、下限は 11 世紀までである。本節で報告するのは、調査面の２面目で検出した遺構と出土した遺物であるが、一部、１面目で検出した遺構のうち、その後の検討で、平安時代前期以前と判断した遺構も含む。遺構分布の詳細は第18図～第24図に示した。西向遺跡では、調査面の１面目と２面目で遺構の時期を分けることは、必ずしも容易ではなかった。特に２面目では、奈良時代、古墳時代、弥生時代の遺構が同一面で検出される状況であった。さらに、１面目で検出できなかった平安時代、鎌倉時代の遺構も混ざっていた。そこで、２面目で検出した遺構のうち、遺構単独で時期を判断できないものについては、周辺の類似遺構の時期から所属時期を推定することとした。特に井戸と柱穴は、今回の調査では古墳時代、奈良時代、平安時代のものがあるため、時期区分は慎重に行った。しかし、遺物が出土しなかった遺構で、時期を判断できなかったものもある。

１　柵列

（１）SA2001（第 73 図）

２区の I1 区、J1 区で検出した。SD2002 沿いに作られた柵列である。総距離は 11.8 ｍで、柱穴は、ほぼ２ｍ間隔で掘られている。柱穴の埋土は、いずれも黒褐色土である。検出状況から、SD2002 が機能していた時期に作られたと考えられる。遺物が出土した柱穴はないが、SD2002 の時期が８世紀であることから、この柵列も８世紀に作られたと考えられる。この柵列と同時に存在したと考えられる遺構は、SD2002 以外に確認できないため、SA2001 の機能や性格は明らかではない。

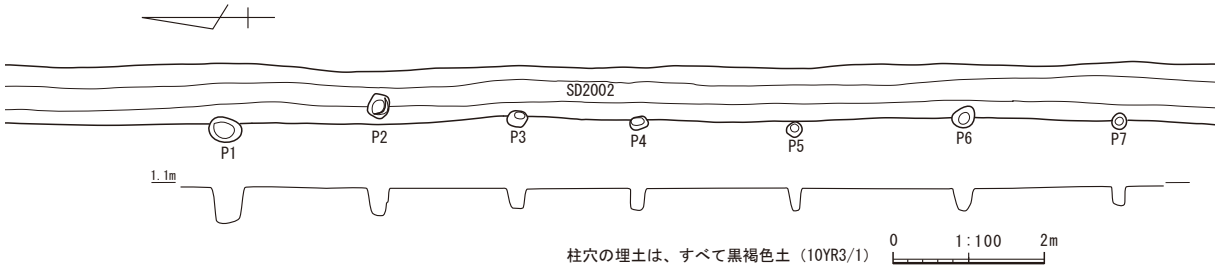
なお、柱穴のうち P7 は、後に報告する SB3003 の P3 の位置と完全に一致し、いずれの柱穴とも判断しがたい。

（２）SA2002

SB2006 に伴う可能性が高いため、SB2006 と合わせて報告する。

２　掘立柱建物跡

２面目の調査面では、掘立柱建物跡を複数検出した。柱穴の一辺が１ｍ弱あり、平面形が方形あるいは方形に近い形になる掘立柱建物跡と、柱穴の直径が数十 cm で、平面形が円形あるいは不整形になる掘立柱建物跡があった。時期を決める遺物がほとんど出土しなかったため、掘立柱建物跡の時期の判断が困難であったが、前者は、建物跡の主軸の方向が N84°Ｗと、これに直交する N6°Ｅとなっている。この方向は、８世紀前半の郡衙跡の可能性が高いとして報告された袋井市の掛之上遺跡の掘立柱建物群と主軸の方向と一致するため、これらを掛之上遺跡の掘立柱建物群と同時期（奈良時代）の掘立柱建物跡と判断した。後者の掘立柱建物跡については、古墳時代の可能性が高いと判断したため、第５節で報告する。なお、柱穴と思われる遺構は多く検出したが、建物として組み合わないものも多かった。本来はもっと多くの掘立柱建物跡があった可能性は残されている。



第 73 図　柵列 SA2001 実測図

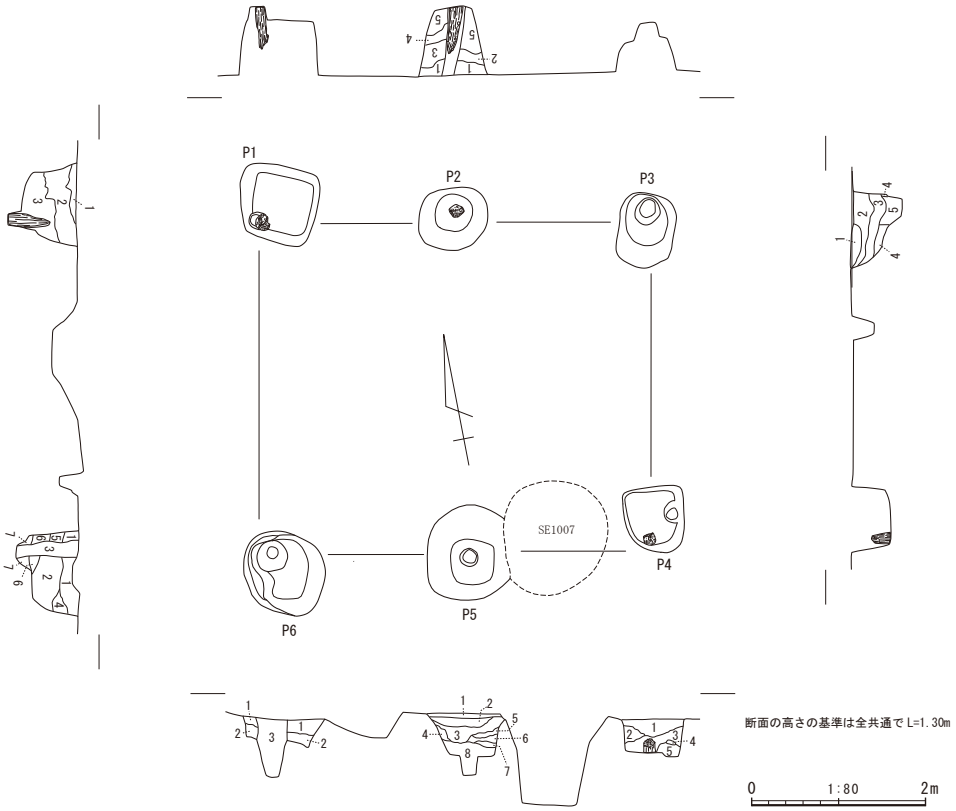
（１）　SB2001（第 74 図）

２区の J1 区で検出した。桁行２間､梁行１間の側柱建物跡である。規模は桁行 4.48 m､梁行 3.92 m、面積 17.56 ㎡、主軸の方向は N84°　W である。柱穴間距離は、桁行で 2.32 m、梁行で 3.76 m である。一部を井戸跡 SE1007 に切られているが、全体的に柱穴の埋土、柱根の残りは良好である。柱根の断面図からは、柱を抜いた痕跡はなく、柱が残った状態で建物が廃棄されたと思われる。

各柱穴の柱根の位置を見ると、いずれも柱穴の中心からずれた場所にある。特に P1、P4 の柱根、P3 の柱根があった場所は、柱穴の中心から大きく外れており、柱穴の隅と言って良い場所にある。しかし、柱根、柱根のあった場所を直線で結んで、掘立柱建物の形を描くと、柱根、柱根のあった場所は、その直線上にほぼ並ぶ。

このことから、掘立柱建物を作る際、正確に柱穴の中心を決めてから柱穴を掘ったのではなく、おおまかに柱穴の場所を決めた後に柱穴を掘り、その後、柱穴の内部で柱を立てる場所を調整して決めたことが考えられる。このような柱の場所の決め方は、他の掘立柱建物跡でも観察できる。

柱穴の埋土は、黒褐色土と灰白色土の２種類が基本である。いずれも地山が起源の土と考えられる。これら２種類の土がほぼ同量で混ざり、斑になった層と、黒褐色土が主体で灰白色土のブロックを含む



P1
1．黒褐色土（5YR 2/1）
2．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色土（5Y 7/1）の斑状
3．灰白色土（5Y 7/1）：黒褐色ブロック（5YR 2/1）含む

P2
1．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色土（5Y 7/1）の斑状
2．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）含む
3．灰白色土（5Y 7/1）：黒褐色ブロック（5YR 2/1）含む
4．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）含む
5．灰白色土（5Y 7/1）

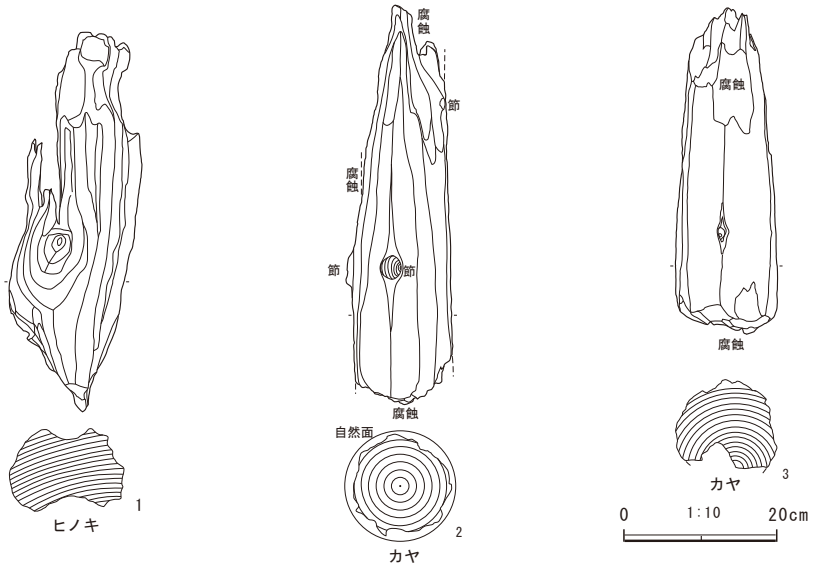
P3
1．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色土（5Y 7/1）の斑状
2．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）多く含む
3．灰白色土（5Y 7/1）：黒褐色ブロック（5YR 2/1）含む
4．灰白色土（5Y 7/1）
5．黒色土（5YR 1.7/1）

P4
1．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色土（5Y 7/1）の斑状
2．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）多く含む
3．黒褐色土（5YR 2/1）
4．灰白色土（5Y 7/1）：砂含む
5．灰白色土（5Y 7/1）

P5
1．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色土（5Y 7/1）の斑状
2．灰白色土（5Y 7/1）
3．黒色土（5YR 1.7/1）
4．灰白色土（5Y 7/1）：黒褐色ブロック（5YR 2/1）少量含む
5．黒褐色土（5YR 2/1）
6．灰白色土（5Y 7/1）：黒褐色ブロック（5YR 2/1）少量含む
7．灰白色土（5Y 7/1）

P6
1．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）含む
2．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）多く含む
3．黒褐色土（5YR 2/1）
4．灰白色土（5Y 7/1）：黒褐色ブロック（5YR 2/1）少量含む
5．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）多く含む
6．灰白色土（5Y 7/1）：黒褐色ブロック（5YR 2/1）多く含む
7．灰白色土（5Y 7/1）：黒褐色ブロック（5YR 2/1）少量含む
8．灰白色土（5Y 7/1）

第 74 図　掘立柱建物跡 SB2001 実測図



第 75 図　掘立柱建物跡 SB2001 出土遺物実測図

層、逆に灰白色土が主体で、黒褐色土のブロックを含む層の３種類がある。このような３種類の層が交互に重なっている例が多いから、ここでも３種類の土を交互に入れて突き固める工程を繰り返して柱を固定したと考えられる。

出土した柱根は次のとおりである。P1 の柱根（第 75 図－１）は、ヒノキの丸材で、腐食が著しい。残存部分の直径は 20cm ほどである。P2 の柱根（第 75 図－２）はカヤの丸材で、自然面が残っており、加工した痕跡は見られない。推定直径は 20cm 程である。P4 の柱根（第 75 図－３）もカヤの丸太を使用しており、これも腐食が進んでいる。残存部分の直径は 15cm 程である。

イ　SB2002（第 76 図）

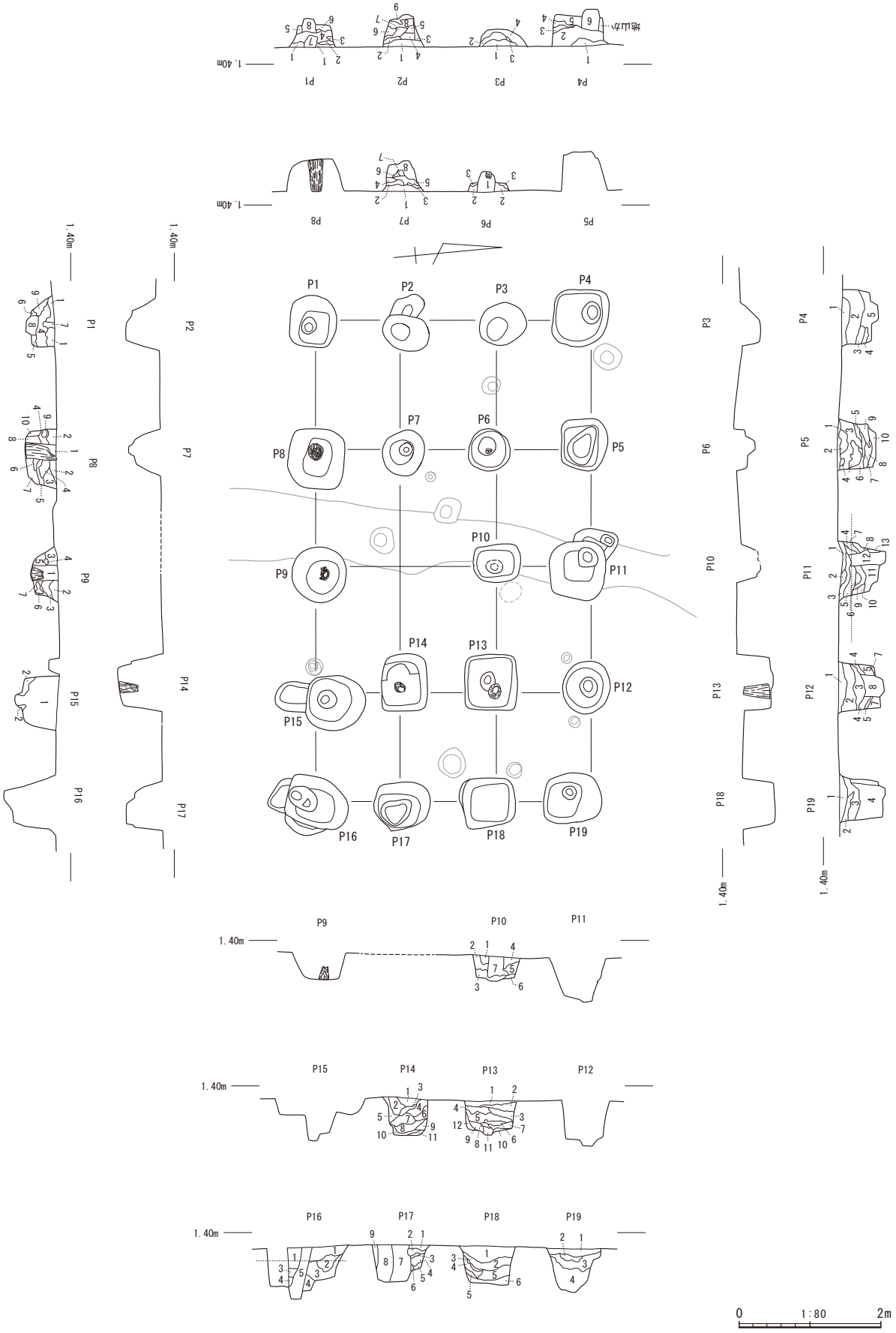
２区の K99 区で検出した。桁行４間、梁行３間の総柱の建物跡である。規模は桁行 6.72 m、梁行 4.00 m、面積 26.88 ㎡で、今回の調査で検出した掘立柱建物跡の中では最大規模である。主軸の方向は N84°W である。柱間距離の平均は、桁行が 1.67 m、梁行が 1.26 mである。柱穴の平面形は、方形と円形が入り混じっているが、いずれも深さは 60cm ～ 70cm 程で、ほぼ一定の深さで掘られている。P2 と P15 には、柱穴に付属するように小穴がある。柱穴の断面に、埋土の上面まで突き抜ける柱根が見られないことも考え合わせると、柱を傾けて引き抜いた際にできる引き抜き痕と考えられる。

柱穴が掘られた位置は、必ずしも直線上に並ばないが、その中に掘られた柱根、柱根跡のあった場所は、ほぼ直線上に並ぶことから、SB2001 の報告で指摘したように、およその位置に柱穴を掘り、その柱穴の中で、柱を立てる場所を調整して決める工法をとったためと考えられる。

柱穴の埋土は、黒褐色土と灰白色土が主体で、いずれも地山が起源の土と考えられる。黒褐色土、または灰白色土の単一層もあれば、２種類の土が混ざった層もある。この場合、質の異なる土が交互に積み重なっている状況が見られる。これまでも指摘してきたように、質の異なる土を交互に積み重ねて突き固めて柱を固定する工法が行われたと考えられる。

柱穴の断面から、柱が抜かれた後に埋没したと考えられるものと、柱が残った状態で廃棄されたものの両者が見られる。前者に属する柱穴には、P1 ～ P5、P7、P11、P12、P15、P18、P19。後者に属する柱穴には、P6、P8、P9、P10、P13、P14、P16、P17 がある。柱を抜く場合と残す場合の規則性は認められないことから、建物廃棄後、ランダムに柱を抜いたことが想定される。

なお、P9 と P10 の間にも柱穴があるはずで、精査したが、検出できなかった。



第 76 図　掘立柱建物跡 SB2002 実測図

P1
1．黒褐色土 (5YR 2/1)
2．灰白色土 (7.5Y 8/1)
3．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (7.5Y 8/1) ブロックを少量含む
4．灰白色土 (7.5Y 8/1)
5．黒褐色土 (5YR 2/1)
6．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (7.5Y 8/1) ブロックを少量含む
7．黒褐色土 (5YR 2/1)
8．灰白色土 (7.5Y 8/1)
9．黒褐色土 (5YR 2/1)

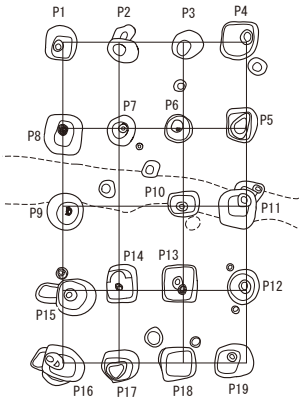
P2
1．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (7.5Y 8/1) ブロックを含む
2．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (7.5Y 8/1) の斑状
3．灰白色土 (7.5Y 8/1)
4．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (7.5Y 8/1) ブロック多い
5．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (7.5Y 8/1) ブロックを含む
6．灰白色土 (7.5Y 8/1)：黒褐色土 (5YR 2/1) ブロックを含む
7．黒褐色土 (5YR 2/1)
8．黒褐色土 (5YR 2/1)
9．灰白色土 (7.5Y 8/1)

P3
1．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (7.5Y 8/1) の斑状
2．黒褐色土 (5YR 2/1)
3．灰白色土 (7.5Y 8/1)
4．灰白色土 (7.5Y 8/1)

P4
1．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (7.5YR 8/1) ブロックを含む
2．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (7.5YR 8/1) ブロックを含む
3．灰白色土 (7.5Y 8/1)
4．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (7.5Y 8/1) ブロックを含む
5．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (7.5Y 8/1) の斑状
6．灰白色土 (7.5Y 8/1)

P5
1．灰色土 (7.5Y 4/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを含む
2．灰色土 (7.5Y 4/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを少量含む
3．灰白色土 (5Y 7/1)
4．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを少量含む
5．灰白色土 (5Y 7/1)
6．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
7．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを含む
8．灰白色土 (5Y 7/1)
9．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
10．灰白色土 (5Y 7/1)

P6
1．黒褐色土 (5YR 2/1)
2．灰白色土 (5Y 7/1)：黒褐色土 (5YR 2/1) ブロックを含む
3．灰白色土 (5Y 7/1)



P7
1．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを含む
2．灰白色土 (5Y 7/1)
3．灰白色土 (5Y 7/1)：黒褐色土 (5YR 2/1) ブロックを含む
4．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
5．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを含む
6．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1)
7．灰白色土 (5Y 7/1)：黒褐色土 (5YR 2/1) ブロックを多く含む
8．灰白色土 (5Y 7/1)

P8
1．黒褐色土 (5YR 2/1)
2．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを少量含む
3．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
4．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
5．灰白色土 (5Y 7/1)
6．灰白色土 (5Y 7/1)：黒褐色土 (5YR 2/1) ブロックを少量含む
7．灰白色土 (5Y 7/1)
8．灰白色土 (5Y 7/1)
9．灰白色土 (5Y 7/1)
10．灰白色土 (5Y 7/1)

P9
1．黒褐色土 (5YR 2/1)
2．灰白色土 (5Y 7/1)
3．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを少量含む
4．黒褐色土 (5YR 2/1)
5．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
6．灰白色土 (5Y 7/1) のブロック
7．黒褐色土 (5YR 2/1)

P10
1．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
2．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
3．灰白色土 (5Y 7/1)
4．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを含む
5．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロック多い
6．明褐灰色土 (5YR 7/1)

P11
1．黒褐色土 (5YR 2/1)
2．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
3．灰白色土 (5Y 7/1)
4．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
5．黒褐色土 (5YR 2/1)
6．灰白色土 (5Y 7/1)
7．灰白色土 (5Y 7/1)
8．灰白色土 (5Y 7/1)
9．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを少量含む
10．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
11．黒色土 (5YR 1.7/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを少量含む
12．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを多く含む
13．灰白色土 (5Y 7/1)

P12
1．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを少量含む
2．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを多く含む
3．黒褐色土 (5YR 2/1)
4．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを含む
5．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
6．黒褐色土 (5YR 2/1)
7．灰白色土 (5Y 7/1)
8．灰白色土 (5Y 7/1)：炭化物を含む

P13
1．黒褐色土 (5YR 2/1)
2．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを含む
3．灰白色土 (5Y 7/1)
4．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
5．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
6．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
7．黒褐色土 (5YR 2/1)
8．灰白色土 (5Y 7/1)
9．灰白色土 (5Y 7/1)：黒褐色土 (5YR 2/1) ブロックを含む
10．灰白色土 (5Y 7/1)
11．黒褐色土 (5YR 2/1)：黒褐色土 (5YR 2/1) ブロックを含む
12．灰白色土 (5Y 7/1)

P14
1．灰色土 (7.5 Y4/1)
2．灰色土 (7.5 Y4/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
3．灰色土 (7.5 Y4/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを少量含む
4．灰色土 (7.5 Y4/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
5．黒褐色土 (5YR 2/1)
6．灰色土 (7.5Y 6/1)
7．黒色土 (5YR 1.7/1)：灰白色土 (7.5Y 8/1) ブロックを含む
8．黒色土 (5YR 1.7/1) と灰白色土 (7.5Y 8/1) の斑状
9．灰色土 (7.5Y 4/1)
10．灰白色土 (5Y 7/1)
11．黒褐色土 (5YR 2/1)

P15
1．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを含む
2．灰白色土 (5Y 7/1)

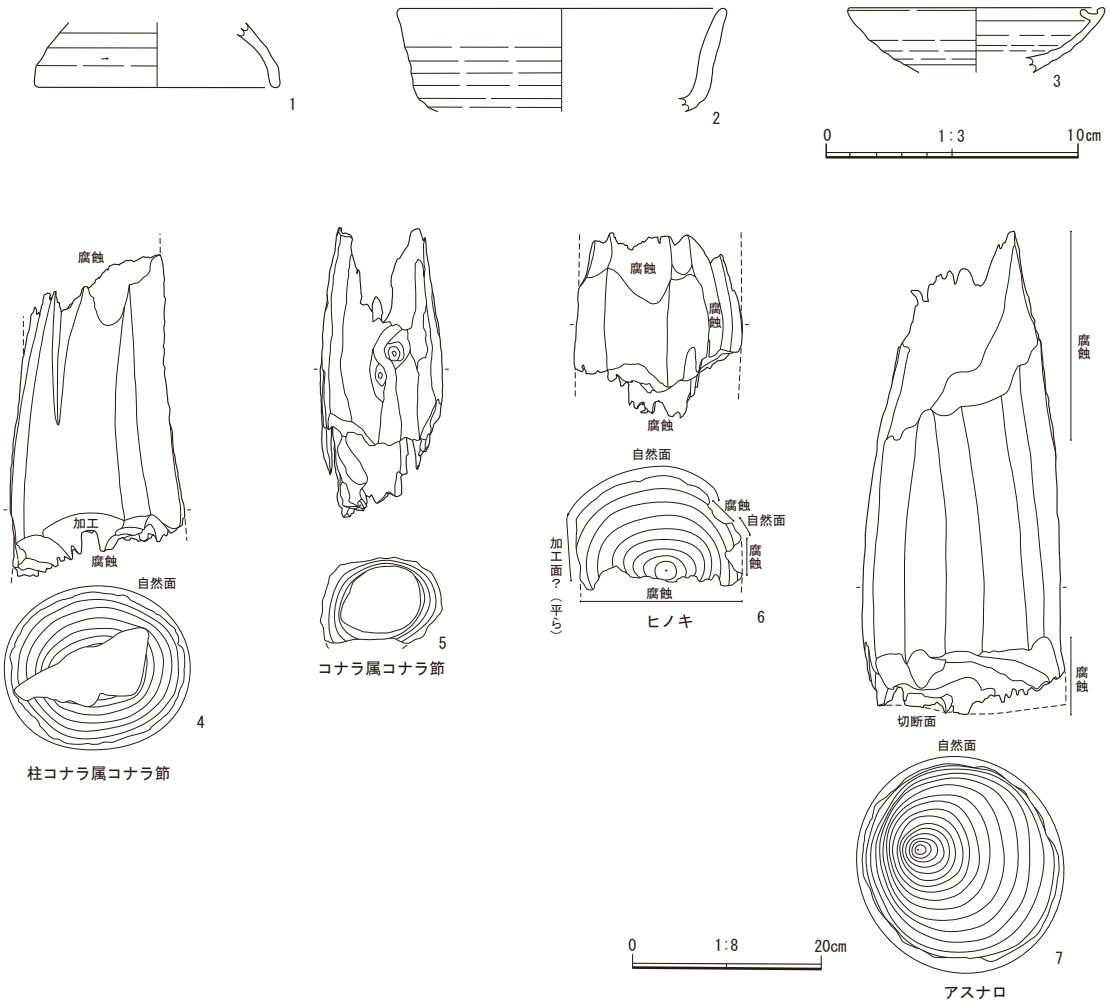
P16
1．黒褐色土 (5YR 2/1) と明褐灰色土 (5YR 7/1) の斑状
2．黒色土 (5Y 2/1)
3．黒褐色土 (5YR 2/1)
4．黒褐色土 (5YR 2/1)

P17
1．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
2．明褐灰色土 (5YR 7/1)
3．黒褐色土 (5YR 2/1)
4．灰白色土 (5Y 7/1)
5．灰白色土 (5Y 7/1)
6．黒褐色土 (5YR 2/1)
7．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
8．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを含む

P18
1．灰白色土 (5Y 7/1)
2．灰白色土 (5Y 7/1) と黒褐色土 (5YR 2/1) の斑状
3．黒褐色土 (5YR 2/1)
4．黒褐色土 (5YR 2/1)：灰白色土 (5Y 7/1) ブロックを含む
5．灰白色土 (5Y 7/1) と黒褐色土 (5YR 2/1) の斑状
6．灰白色土 (5Y 7/1)

P19
1．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
2．灰白色土 (5Y 7/1)
3．黒褐色土 (5YR 2/1) と灰白色土 (5Y 7/1) の斑状
4．灰白色土 (5Y 7/1)

第 77 図　掘立柱建物跡 SB2002 土層注記



第 78 図　掘立柱建物跡 SB2002 出土遺物実測図

出土遺物は次のとおりである。P12 からは須恵器の蓋（第 78 図－１）が出土した。復元口径が 10cm 弱であることから、6 世紀末～７世紀前半(Ⅲ期後葉～末)と考えられる。P1 からは須恵器の坏が２点(第 78 図－２、３）が出土した。２は体部～口縁は直線状に立ち上がっている。体部と底部の境界を削って面を出してある。底部は平底になると思われる。７世紀後半～８世紀前半（Ⅳ期後半～Ⅴ期前半）と考えられる。３は、口縁と蓋受けがほぼ同じ高さになっている。復元口径は 8.5cm 程度である。６世紀末～７世紀前半（Ⅲ期後葉～末）と思われる。

出土した土器はいずれも古墳時代の須恵器で、時期幅があることから、流れ込みと考えられるが、２の須恵器は、SB2002 の所属時期の上限を示している可能性がある。

P8、P9、P13、P14 には柱根が残っていた（第 78 図－４～７）。４は P13 の柱根で、コナラ属コナラ節の丸材である。残存部分の直径は 20cm である。腐食により、心材の一部が抜けている。表面は自然面と思われ、加工痕は見られない。５は P14 の柱根で、コナラ属コナラ節の丸材である。残存部分の直径は 13cm である。これも腐食により、心材部分が抜けている。６は P9 の柱根で、ヒノキの丸材である。残存部分の直径は 18cm である。腐食が進んでおり、加工痕はほとんど観察できない。７は P8 の柱根でアスナロの丸材である。残存部分の直径 22.5cm である。下面に切断面が残っており、表面にも縦方向の加工痕と思われる痕跡が見られる。この他に、P1 でクロマツ、P10 でコナラ属コナラ節を確認した。

ウ　SB2003（第 79 図）

２区の K1 区で検出した桁行３間、梁行３間の総柱の掘立柱建物跡である。規模は、桁行 4.40 m、梁行 3.60 m、面積は 15.84 ㎡である。主軸の方向は N84°　W である。柱穴間距離は、桁行で 1.44 m、梁行で 1.36 mである。柱穴の位置が不揃いであるが、他の掘立柱建物と同様、おおまかに柱穴の場所を決め、柱穴を掘ってから、柱穴の中で柱を据える場所を決めたため、不揃いでも問題はなかったと思われる。P4 と P6 には、掘り直しの痕跡が見られる。柱穴の埋土は、P1、P3、P4、P8 のように、単一層からなるものもあれば、P13、P14 のように、黒色系の土と白色系の土を交互に入れて突き固めたようになっているものもある。遺物が出土した柱穴はなく、柱根も残っていなかった。したがって、時期の判断は困難であるが、SB2001、SB2002 と主軸の方向が一致することから、これらと同様に８世紀代と考えるのが妥当である。

エ　SB2004（第 80 図）

２区の K1 区で検出した桁行３間、梁行２間の総柱の掘立柱建物跡である。規模は桁行 3.68 m、梁行 3.20 m、面積は 11.78 ㎡である。柱穴間の距離は 1.60 mほどで、桁行と梁行で差がない。主軸の方向は N6°　E で、SB2003 と直交し、隣接する SB2002 とも直交する。柱穴の大きさや形、配列が不揃いで、柱根が残っていなかったが、柱を据えた位置は直線上に揃うと思われる。埋土は、これまでの記載で指摘したとおり、黒褐色土と灰白色土を主体とする土を交互に入れて突き固めたようになっている。柱を抜いた後で版築をするとは考えにくいが、P1 と P9 には、柱を抜いた際にできると抜き取り痕が見られることから、柱を抜いた後に柱穴を埋め戻した可能性が考えられる。P2、P3、P4、P12 は、複数の柱穴が切り合っている状況が見られることから、建て替えが行われたことが考えられる。

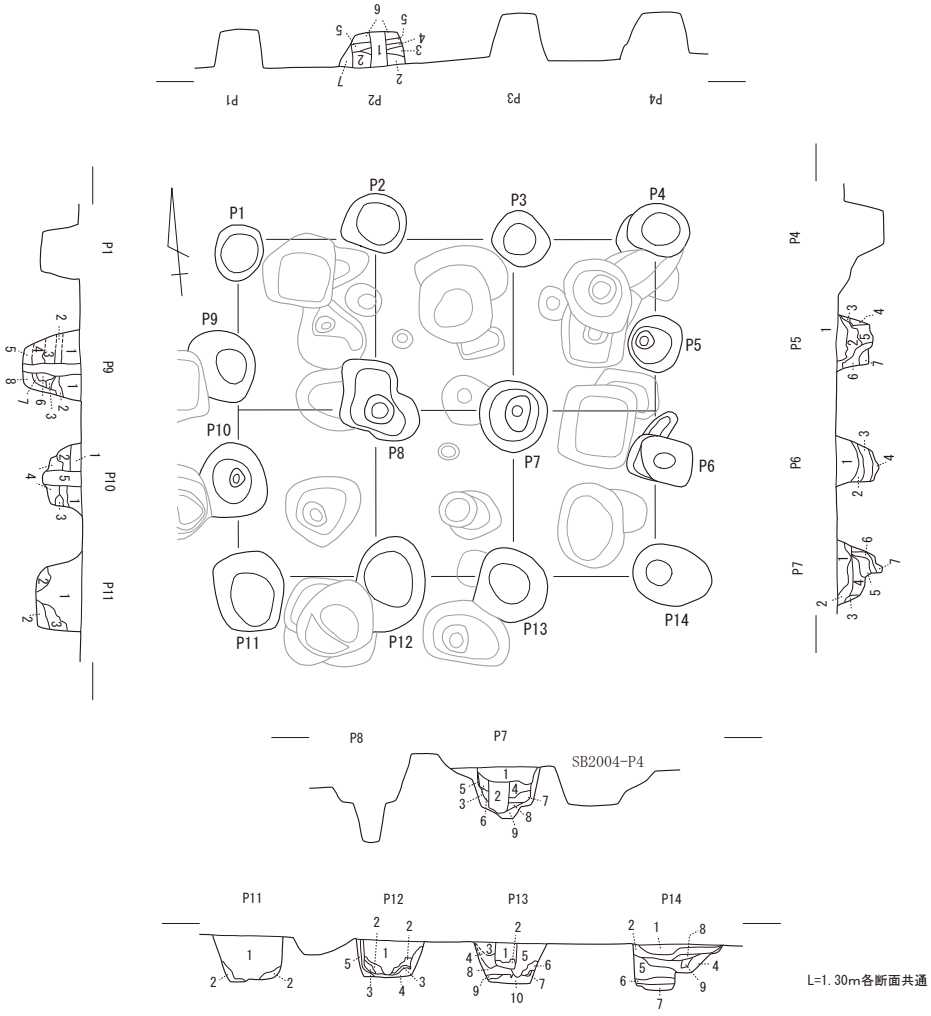
柱穴から遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難であるが、主軸の方向から、SB2001 ～ SB2003 と同様に８世紀代と考えられる。

SB2002、SB2003、SB2004 の構築順は、次のとおりである。最初に桁行と梁行の柱穴間距離が等距離の SB2004 があり、その廃絶後、主軸の方向が 90 度異なり、桁行の柱穴間距離が、梁行の柱穴間距離の 1.5 倍ほどある SB2003 が建ったと考えられる。SB2002 の柱穴には、SB2003 の柱穴を切っているものがあることから、SB2003 廃絶後に SB2002 が建てられたことになる。以上から、SB2004、SB2003、SB2002 の順に建てられたと考えられる。

ク　SB2005（第 81 図）

２区の L1 区で検出した桁行３間、梁行３間の側柱建物跡である。規模は、桁行 5.36 m、梁行 3.60 m、面積は 19.30 ㎡である。柱穴間の距離は、桁行が 1.70 m、梁行が 1.20 mで、ほぼ等間隔に掘ってある。主軸の方向は N6°　E で、SB2004 と一致し、SB2002、SB2003 と直交している。柱穴は平面形、深さ、位置とも揃っており、整然とした印象を受けるが、柱穴の中での柱の位置は、柱穴の中心からずれた場所にある。しかし、柱の位置は直線上に並ぶことから、他の掘立柱建物と同様に、柱穴を位置を大まかに決めて掘った後、柱穴の中で柱の位置を決めたためと考えられる。柱穴の埋土は、黒褐色土と灰白色土が混ざって斑状になった層、黒褐色土、あるいは灰白色土を主体として、他方の土のブロックを含んでいる層もある。黒褐色土、灰白色土を異なる割合で配合し、その土を入れて突き固める工法が行われたと考えられる。

P5 には柱根が残っていた。樹種はカゴノキである。また、P10 からは次の遺物が出土した（第 82 図－１、２）。１は須恵器の蓋で、天井部と口縁の境に明瞭な稜が作られている。口縁端部には、僅かながら段を作ってある。６世紀前半（Ⅰ期末～Ⅱ期）と思われる。２は、滑石と思われる石材で作られた紡錘車である。一部が欠けているが、完品に近い。須恵器は古墳時代のもので、この建物跡の時期を示すものではなく、流れ込みと思われる。



P1：黒褐色土（5YR 2/1）

P2
1．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：柱痕
2．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：1～2㎝大地山土多く含む
3．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：1～2㎝以下地山土若干含む
4．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：1～2㎝大地山土多く含む
5．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：1～2㎝大地山土やや多く含む
6．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：3㎝以下地山土多く含む

P3：黒褐色土（5YR 2/1）

P4：黒褐色土（5YR 2/1）

P5
1．黒褐色土（5YR 2/1）
2．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色ブロック（5Y 7/1）の斑状
3．黒褐色土（5YR 2/1）
4．灰白色土（5Y 7/1）
5．黒褐色土（5YR 2/1）
6．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）含む
7．灰白色土（5Y 7/1）

P6
1．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）のブロック多い
2．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）多く含む
3．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）少量含む
4．黒褐色土（5YR 2/1）

P7
1．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：細かい地山土多く含む
2．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：細かい地山土含む。柱痕
3．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：1㎝以下地山土含む
4．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：5㎝大地山土多く含む
5．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）
6．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：1～3㎝大地山土やや多く含む
7．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：1㎝以下地山土やや多く含む
8．灰オリーブ色粘性シルト（5Y 4/2）：黒色土若干多く含む
9．灰オリーブ色粘性シルト（5Y 4/2）：地山

P8：黒褐色土（5YR 2/1）

P9
1．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）小片多く含む
2．灰白色土（5Y 7/1）
3．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）多く含む
4．灰白色土（5Y 7/1）：黒褐色ブロック（5RY 2/1）多く含む
5．灰白色土（5Y 7/1）
6．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色ブロック（5Y 7/1）の斑状
7．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色ブロック（5Y 7/1）の斑状
8．黒褐色土（5YR 2/1）

P10
1．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）小片多く含む
2．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）多く含む
3．灰白色土（5Y 7/1）
4．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色ブロック（5Y 7/1）の斑状

P11
1．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色ブロック（5Y 7/1）の斑状
2．灰白色土（5Y 7/1）

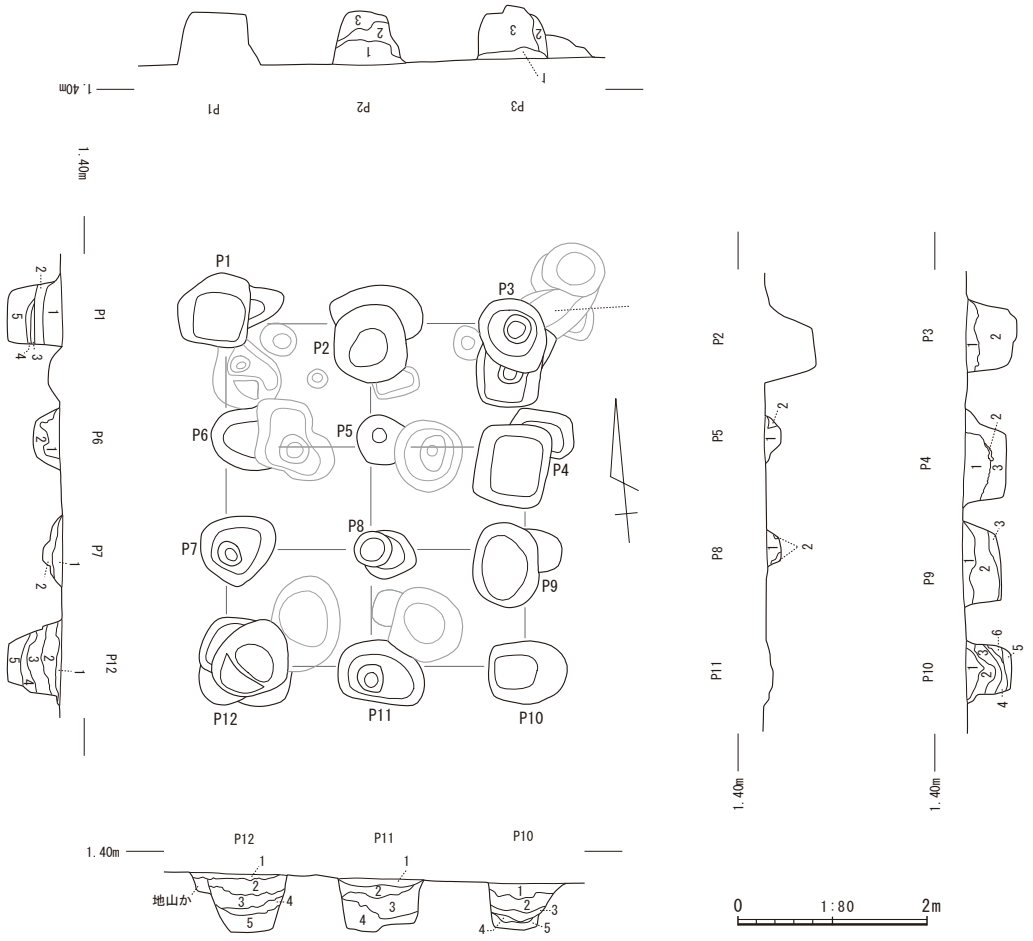
P12
1．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色ブロック（5Y 7/1）の斑状
2．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）多く含む
3．灰白色土（5Y 7/1）
4．黒褐色土（5YR 2/1）
5．灰白色土（5Y 7/1）

P13
1．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色ブロック（5Y 7/1）の斑状
2．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色ブロック（5Y 7/1）の斑状
3．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色ブロック（5Y 7/1）の斑状
4．灰白色土（5Y 7/1）
5．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）含む
6．灰白色土（5Y 7/1）
7．黒褐色土（5YR 2/1）：5層と同じか
8．灰白色土（5Y 7/1）：鉄分含む
9．黒褐色土（5YR 2/1）
10．灰白色土（5Y 7/1）：鉄分多く含む

P14
1．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）含む
2．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色ブロック（5Y 7/1）の斑状
3．灰白色土（5Y 7/1）
4．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）多く含む
5．灰白色土（5Y 7/1）：黒褐色ブロック（5YR 2/1）含む
6．黒褐色土（5YR 2/1）
7．灰白色土（5Y 7/1）
8．黒褐色土（5YR 2/1）
9．灰白色土（5Y 7/1）

0　1:80　2m

第 79 図　掘立柱建物跡 SB2003 実測図



P1
1．黒褐色土（5YR 2/1）：細かい地山土若干含む
2．黒褐色土（5YR 2/1）：3 ～ 5 ㎝大地山土多く含む
3．黒褐色土（5YR 2/1）：3 ㎝以下地山土多く含む
4．黒褐色土（5YR 2/1）：黒色土やや多く含む
5．黒褐色土（5YR 2/1）：3 ㎝大地山土若干含む

P2
1．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色土（7.5Y 2/1）の混層
2．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色土（7.5Y 2/1）の混層
3．灰白色土（7.5Y 7/2）

P3
1．黒褐色土（5YR 3/1）と灰白色土（7.5Y 1/2）の混層
2．灰白色土（7.5Y 7/2）
3．黒褐色土（5YR 3/1）：灰白色ブロック（7.5Y 7/2）少量含む

P4
1．黒褐色土（5YR 3/1）
2．黒褐色土（5YR 3/1）と灰白色土（7.5Y 1/2）の混層
3．灰白色土（7.5Y 7/2）

P5・P8
1．黒褐色土（5YR 2/1）：柱痕
2．灰白色土（5Y 7/2）

P6・P7
1．黒褐色土（5YR 3/1）
2．灰白色土（5Y 7/2）：灰白色ブロック（7.5YR 7/2）含む

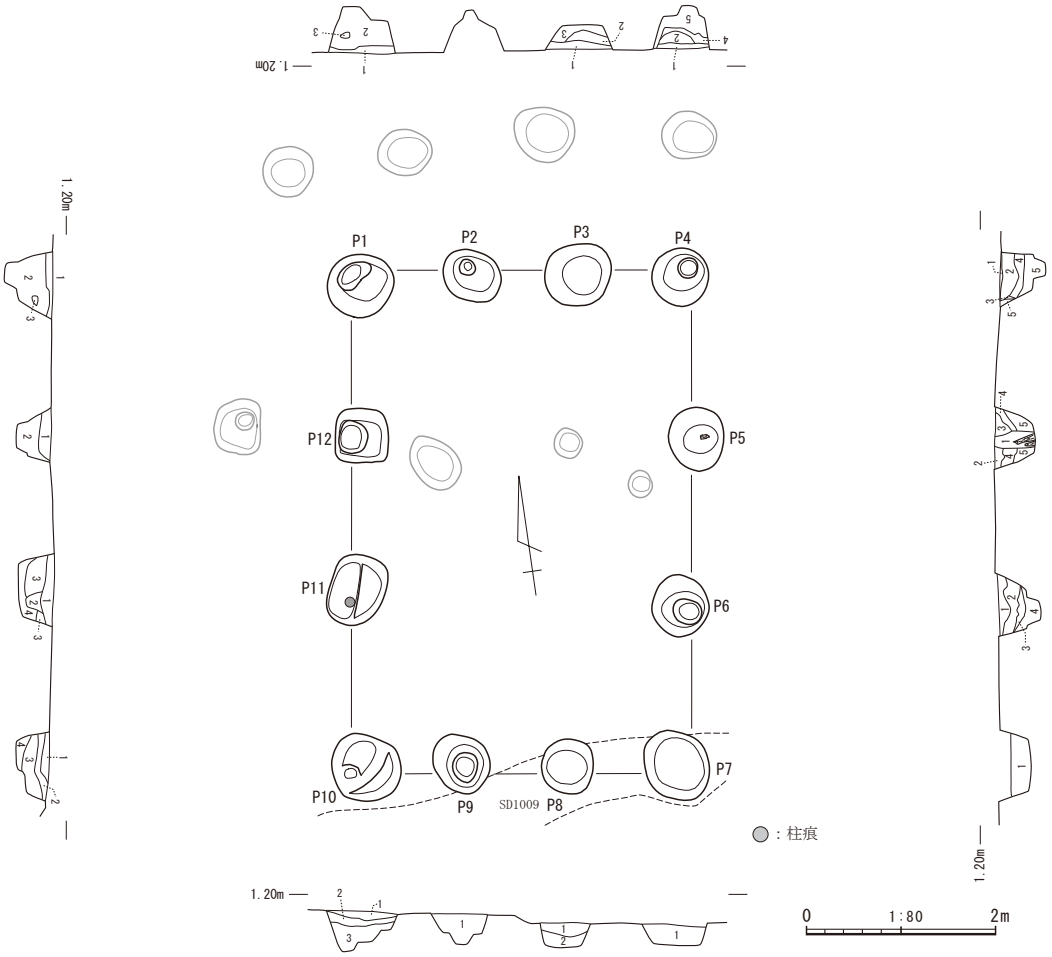
P9
1．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）小片多く含む
2．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色ブロック（5Y 7/1）多く含む
3．灰白色土（5Y 7/1）

P10
1．黒褐色土（5YR 3/1）：灰白色ブロック（7.5Y 7/2）含む
2．灰白色土（7.5YR 7/2）：黒褐色ブロック（5YR 3/1）含む
3．黒褐色土（5YR 3/1）と灰白色土（7.5Y 1/2）の混層
4．灰白色土（7.5Y 7/2）：鉄分含む
5．灰白色土（7.5Y 7/2）
6．灰白色土（7.5YR 7/1）：砂少量含む

P11
1．黒褐色土（5YR 3/1）
2．黒褐色土（5YR 3/1）と灰白色土（7.5Y 7/2）の混層
3．黒褐色土（5YR 3/2）と灰白色土（7.5Y 7/2）の混層
4．黒色土（7.5Y 2/1）と灰白色土（7.5Y 7/2）の混層

P12
1．黒褐色土（5YR 3/1）：灰白色ブロック（7.5Y 7/2）含む
2．黒褐色土（5YR 3/1）と灰白色土（7.5Y 7/2）の混層
3．黒色土（7.5Y 2/1）と灰白色土（7.5Y 7/2）の混層
4．黒色土（7.5Y 2/1）
5．黒色土（7.5Y 2/1）と灰白色土（7.5Y 7/2）の混層

第 80 図　掘立柱建物跡 SB2004 実測図



P1
１．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色土（5Y 7/1）の斑状
２．黒褐色土（5YR 2/1）
３．灰白色土（5Y 7/1）

P2：黒褐色土（5YR 2/1）

P3
１．黒褐色土（5YR 2/1）
２．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色土（5Y 7/1）のブロック含む
３．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色土（5Y 7/1）の斑状

P4
１．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色土（5Y 7/1）ブロック含む
２．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色土（5Y 7/1）の大きなブロック含む
３．黒褐色土（5YR 2/1）
４．灰白色土（5Y 7/1）：黒色土（5Y 2/1）ブロックを多く含む
５．灰白色土（5Y 7/1）

P5
１．黒色土（5YR 1.7/1）
２．黒褐色土（5YR 2/1）
３．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色土（5Y 7/1）ブロックを多く含む
４．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色土（5Y 7/1）ブロックを少量含む
５．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色土（5Y 7/1）の斑状

P6
１．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色土（5Y 7/1）ブロックを含む
２．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色土（5Y 7/1）ブロックを多く含む
３．灰白色土（5YR 7/1）：黒褐色土（5YR 2/1）ブロックを含む
４．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色土（5Y 7/1）の斑状

P7
１．黒褐色土（5YR 2/1）

P8
１．黒褐色土（5YR 2/1）
２．黒色土（5Y 2/1）と灰白色土（5Y 7/1）の斑状

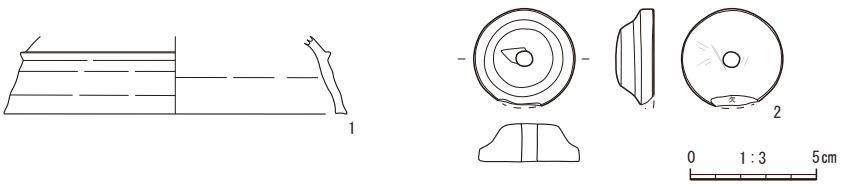
P9
１．黒褐色土（5YR 2/1）

P10
１．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色土（5Y 7/1）の斑状
２．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色土（5Y 7/1）の斑状
３．黒褐色土（5YR 2/1）
４．灰白色土（5Y 7/1）

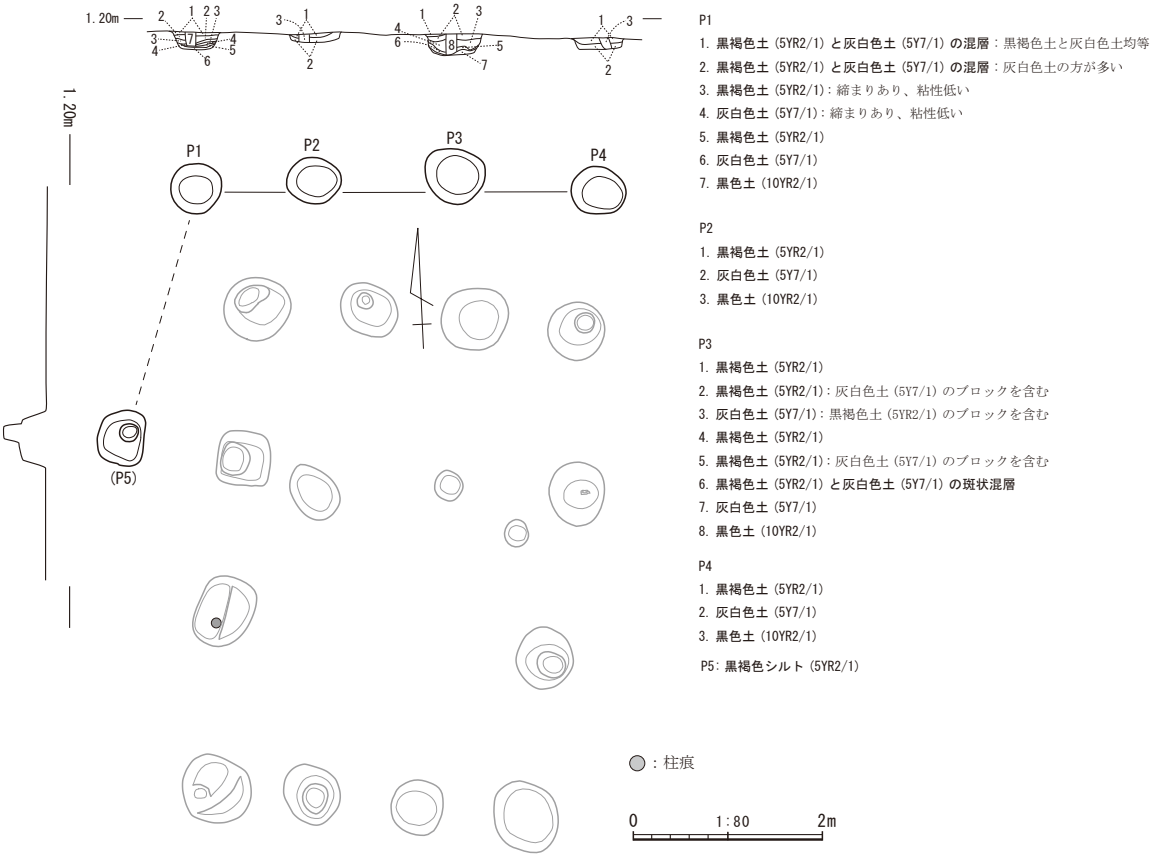
P11
１．黒褐色土（5YR 2/1）
２．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色土（5Y 7/1）の斑状
３．灰白色土（5Y 7/1）
４．黒色土（5YR 1.7/1）

P12
１．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色土（5Y 7/1）ブロックを少量含む
２．黒褐色土（5YR 2/1）

第 81 図　掘立柱建物跡 SB2005 実測図



第 82 図　掘立柱建物跡 SB2005 出土遺物実測図



第 83 図　柵列 SA2002 実測図

ケ　SA2002（第 83 図）

２区の L1 区で検出した。現地調査では、SB2005 の庇と理解していたが、その後の検討で、SB2005 とは角度がずれていることが判明した。これが SB2005 の庇であるとすると、屋根と建物本体の向きが異なっていたことになるため、SB2005 とは別の遺構、柵列 SA2002 として独立させたが、SB2005 に伴う柵の可能性が高いと考えられる。柱穴の埋土は、黒褐色土と灰白色土の２種類の単一層、あるいは混層からなっている。質の異なる土を入れて突き固める工法が行われたと思われる。

遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難であるが、SB2005 に伴う柵列の可能性が高いことから、８世紀代と考えられる。なお、P5 も SA2002 に含まれる可能性を考えたが、P1 ～ P4 に対して、直角の位置に掘られていないため、P5 は SA2002 に伴う遺構ではないかもしれない。

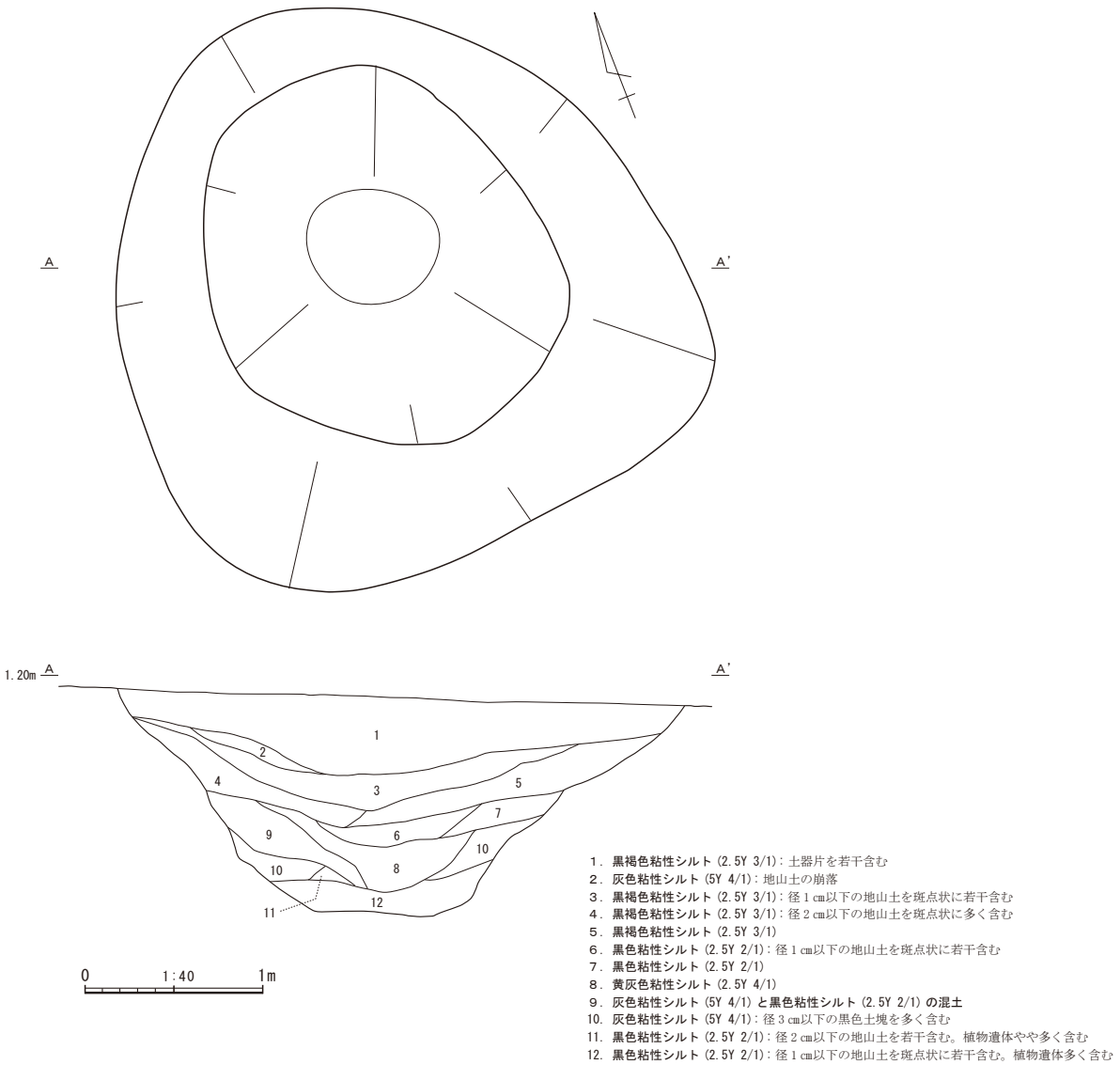
３　井戸跡

井戸跡は２基検出した。

（１）SE2001（第 84 図）

３区の P97、P98、Q97、Q98 の各区にまたがって検出した素掘りの井戸である。平面形は不整形で、3.40 m × 3.28 m、深さは 1.28 m である。平面形が大きい割には浅い印象を受けるが、平面形が不整形になっていることも考えると、肩の部分が崩れて、平面形が広がった可能性もある。周囲で関連する遺構は見つかっていないことから、微高地上にこの井戸が単独で掘られたと考えられる。

埋土は黒色粘性シルトと灰色粘性シルトを基調としている。いずれも自然堆積層である。地山の土のブロックを含む層が目立つ。底部付近に堆積した 11 層、12 層は、未分解の植物遺体を含んでいる。



第 84 図　井戸跡 SE2001 実測図

遺物は次のものが出土した（第 85 図－１～５）。

１は須恵器の有台長頸壺で、胴部下半は、底部から直線的に立ち上がり、強く屈曲して肩部につながる。肩部と頸部の境界にも屈曲が見られる。時期は、頸部の形態が不明であるが、８世紀前半（Ⅴ期前半）と考えられる。

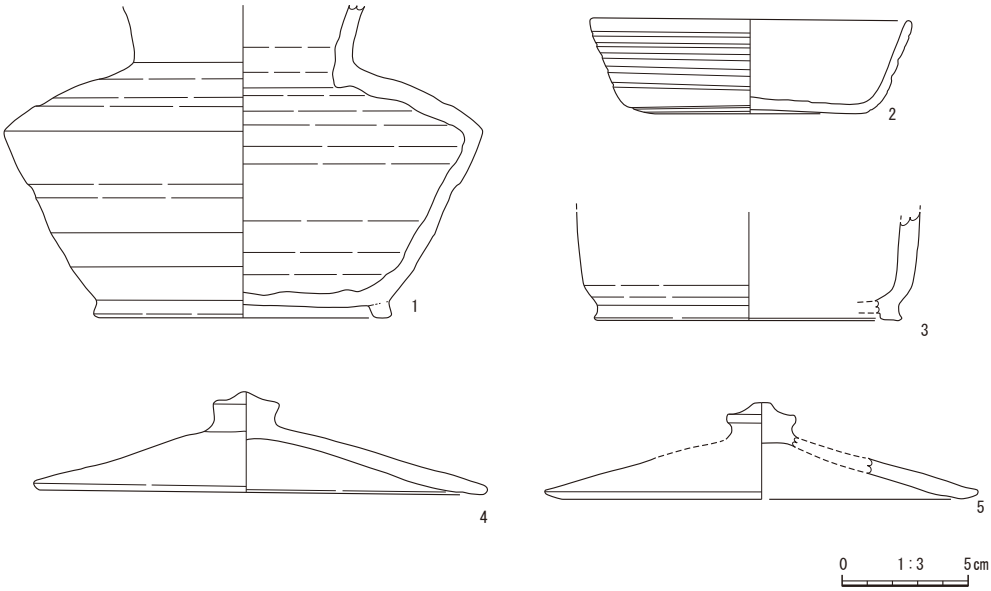
２は須恵器の坏で、平底から体部がやや外反して直線的に立ち上がっている。時期は８世紀後半～８世紀末（Ⅴ期後半～末）と思われる。

３は土師器の有台の壺の底部で、内外面とも赤色顔料を塗ってある。８世紀代と思われる。

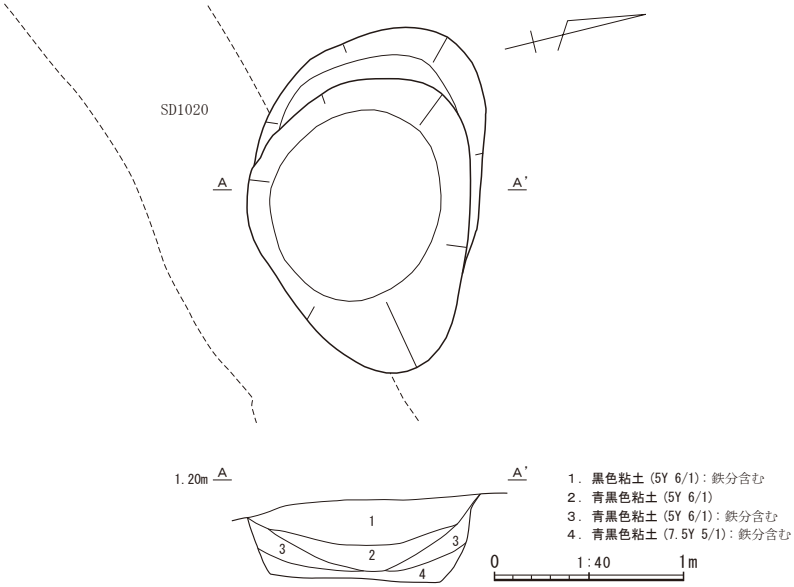
４は土師器の蓋で、全体に丹を塗ってある。風化が進んでいるため、調整は不明瞭であるが、全体を撫でて仕上げてあると思われる。時期は８世紀代に収まると考えられる。

５も土師器の蓋で、これも全面に丹を塗ってある。時期は８世紀代に収まると考えられる。

以上の出土遺物から、この井戸跡の時期は８世紀代と考えられる。遺物の中に丹塗りの土師器が複数ある点を特記できる。



第 85 図　井戸跡 SE2001 出土遺物実測図



第 86 図　井戸跡 SE2002 実測図

（２）SE2002（第 86 図）

２区の L1 区で検出した。平面形は 1.60 m× 1.20 mで、深さは 0.48 mと浅い。規模が小さいことから、井戸とは別の機能を持った土坑の可能性も考えられるが、埋土に鉄分の沈着が見られ、滞水した状況だったことがうかがえたことから、井戸と判断した。12 世紀後半～末と考えられる SD1020 に一部を切られている。埋土は黒色の粘土を基調としており、黄褐色の鉄分の沈着が認められる。遺物が出土しなかったため、時期の判断が困難であるが、SD1020 に切られていることから、12 世紀以前であることは確かであるが、調査面２面目で検出できたことを考えると、11 世紀以前と考えるのが妥当と思われる。

４　土坑

今回の調査では、柱穴、井戸以外の穴状の遺構を土坑としたため、いずれも機能や性格は不明である。時期を判断できる遺物もSK2003とSK2017を除いて出土しなかった。今回報告する土坑のうち、SK2006～SK2022は３区の西端に集中して掘られていることから、奈良時代の遺物が出土したSK2017を含めて、近接した時期に掘られた可能性がある。その一方で、３区西端の土坑の近隣では、古墳時代の住居跡が３棟検出されているため、これらと関連した古墳時代の土坑が存在する可能性もある。いずれにしてもSK2017以外では遺物が出土しなかったこと、土坑の相互関連が不明であることから、SK2017以外の土坑の時期判断は困難である。

なお、今回報告する土坑の中でSK2025は、調査当初は古墳時代の住居状遺構SH3002に伴う土坑と考えたが、検討の結果、８世紀の土坑で、SH3002とは別の遺構と判断した。したがって、本来は本節で報告する土坑であるが、SH3002との関連の検討と、両者を別時代の遺構として分離した過程を報告する必要があるため、後節でSH3002と合わせて報告する。

（１）SK2001（第87図）

２区のJ99区で検出した不整形の土坑である。埋土に土器片が含まれていたが、細片であるため、時期の判断は困難である。

（２）SK2002（第87図）

２区のJ99区で、SK2001に隣接して検出した不整形の土坑である。埋土に土器片が含まれていたが、細片であるため、時期の判断は困難である。

（３）SK2003（第87図）

２区のJ99区、調査区の西端で検出した。半分程度が調査区外に出ている。平面形は不整形で、段が形成されている部分がある。底面に非常に浅い掘り込みが認められた。図化はできなかったが、埋土中から８世紀代と考えられる土師器の破片が集中して出土した。

（４）SK2004（第87図）

２区のJ99区、SK2003に隣接して検出した方形に近い土坑である。浅い土坑であるが、埋土は３層に分層できた。いずれも地山起源の土である。

（５）SK2005（第87図）

２区のJ2区で検出した浅い土坑である。半分程度をSD1001に切られているため、全体形は不明である。

（６）SK2006（第87図）

３区のM98区で検出した楕円形の浅い土坑である。

（７）SK2007（第87図）

３区のM98区で検出した不整形の土坑である。内部に掘り込みがあり、掘立柱建物の柱穴のように見えるが、周辺で同様の柱穴、掘立柱建物跡は検出されていない。

（８）SK2008（第88図）

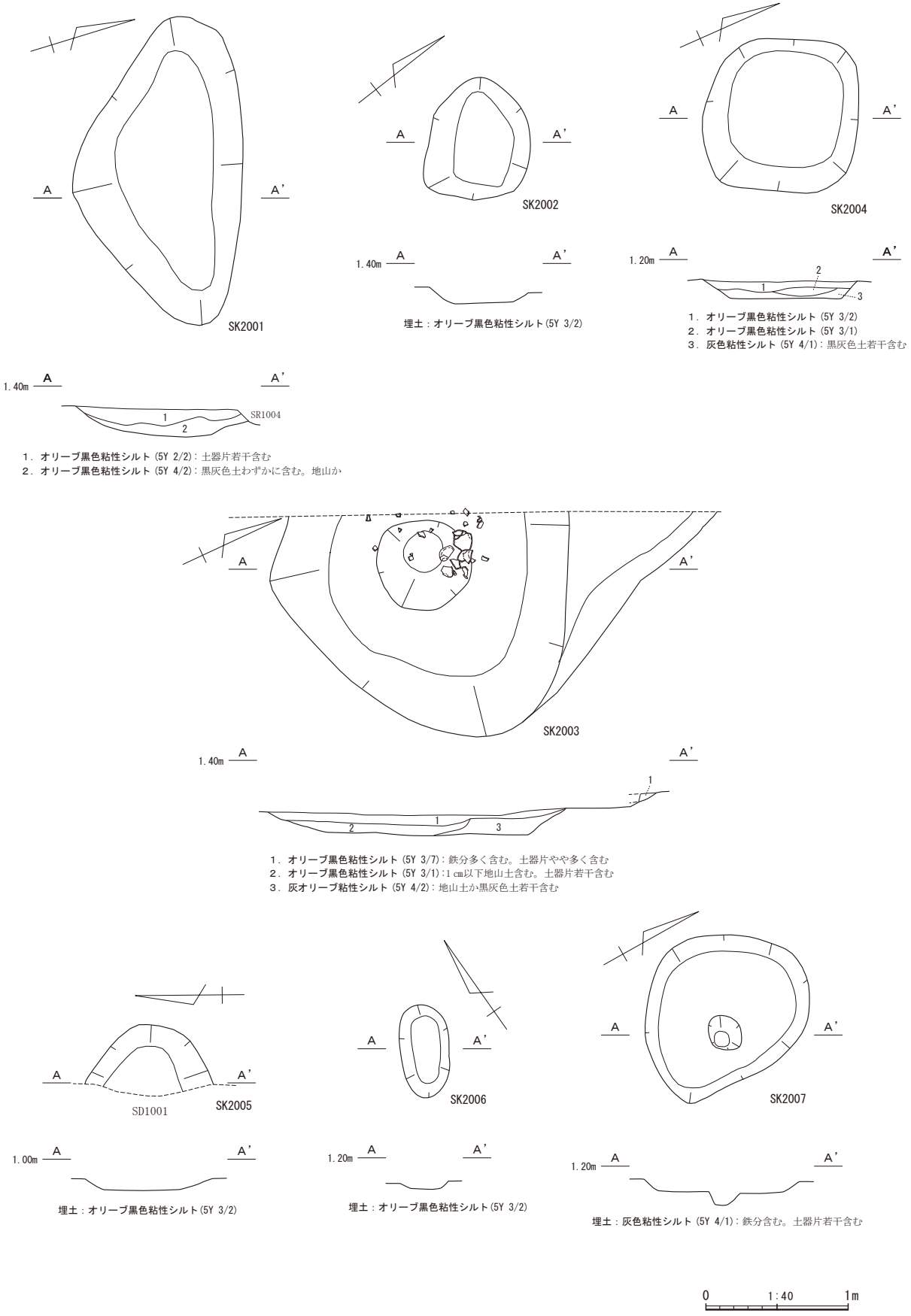
３区のM98区で検出した楕円形の土坑である。近接してSK2006とSK2007がある、相互に関連があるかどうかは不明である。

（９）SK2009（第88図）

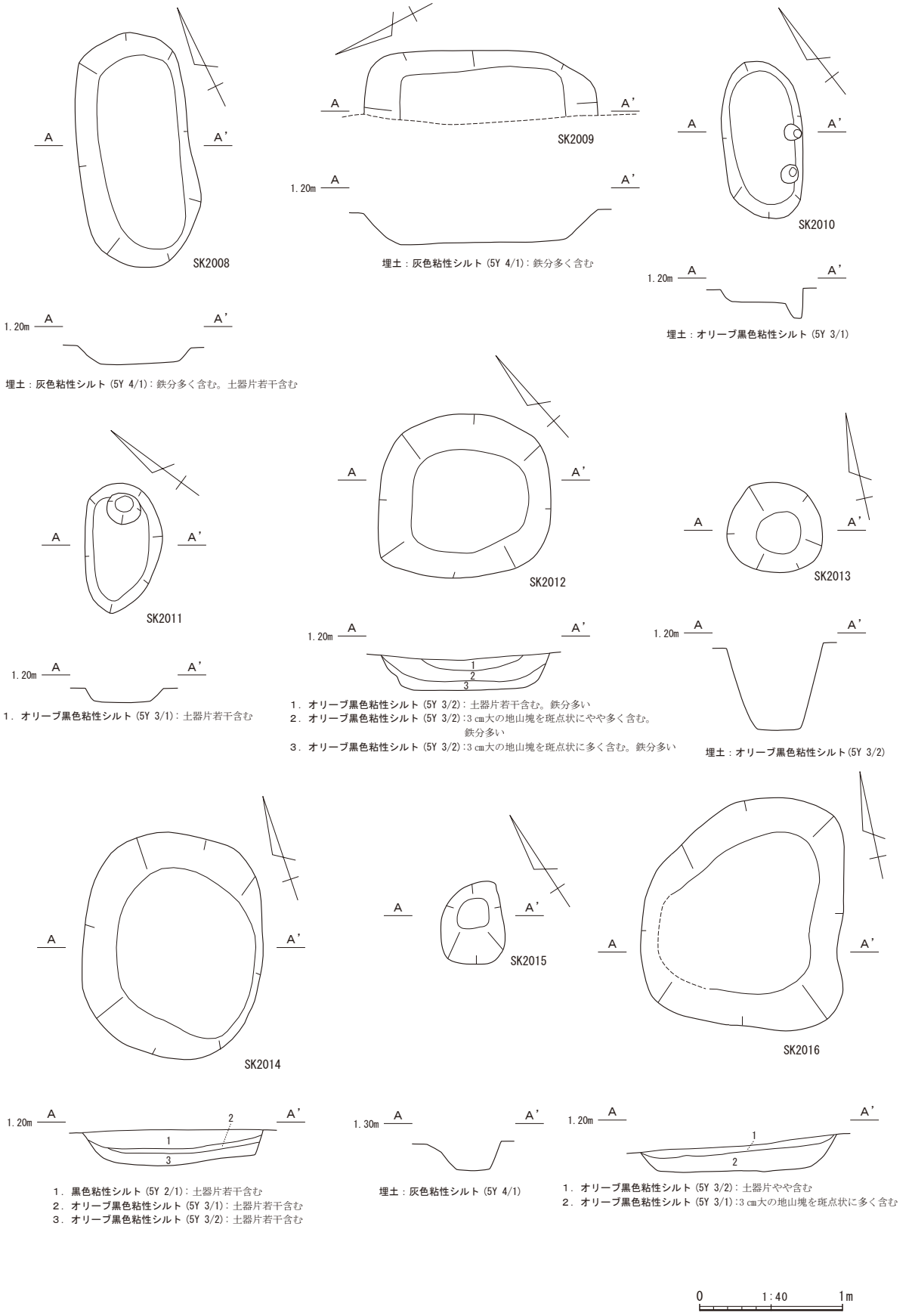
３区のN97区、調査区の西端で検出した。半分程度が調査区外に出ているが、楕円形か長方形の土坑と考えられる。

(10) SK2010（第88図）

３区のN97区で検出した楕円形の土坑である。内部に小さな掘り込みが２か所ある。



第 87 図　土坑 SK2001 ～ 2007 実測図



第 88 図　土坑 SK2008 ～ 2016 実測図

(11)SK2011（第 88 図）

３区の N97 区で、SK2010 と接するようにして検出した楕円形の土坑である。SK2010 と同様に、内部に円形の掘り込みがある。

(12)SK2012（第 88 図）

３区の N97 区で検出した円形に近い土坑である。埋土中から土器片が出土したが、時期の判断は困難であった。

(13)SK2013（第 88 図）

３区の N97 区で検出した円形の土坑である。大きさの割に深さがあるため、柱穴か井戸跡の可能性があったが、埋土はオリーブ黒色粘性シルトの単一層で、遺物も出土しなかったため、柱穴、井戸跡のいずれとも判断できず、土坑と判断した。

(14)SK2014（第 88 図）

３区の N97 区で検出した円形の土坑である。埋土中に土器片を含んでいるが、時期を判断できるものはなかった。

(15)SK2015（第 88 図）

３区の N97 区と N98 区の境界付近で検出した小型の土坑である。調査当初は柱穴の可能性を考えたが、埋土は単一層で、柱根など、柱穴と判断できる所見は得られなかったため、土坑と判断した。

(16)SK2016（第 88 図）

３区の 097 区で検出した不整形の土坑である。土器の細片が出土したが､時期の判断は困難であった。後述の SK2017 と隣接している。

(17)SK2017（第 89 図）

３区の 097 区で検出した。須恵器の坏(第 90 図－１)が出土した。平底から体部がやや外反しながら、直線的に立ち上がっている。時期は８世紀代に入ると考えられる。SK2017 に接するように SK2016 がある。

(18)SK2019（第 89 図）

３区の 097 区で検出した円形に近い土坑である。これも柱穴の可能性が考えられたが、柱穴とする根拠が得られなかったため、土坑と判断した。遺物は出土しなかった。

(19)SK2020（第 89 図）

３区の Q97 区で検出した。奈良時代の SE2001 に切られていることから、奈良時代か、それ以前の土坑と判断できる。

(20)SK2021（第 89 図）

３区の Q96 区で検出した円形の浅い土坑である。埋土はオリーブ黒色粘性シルトの単一層である。

(21)SK2022（第 89 図）

３区の Q96 区で検出した浅い円形の土坑である。埋土はオリーブ黒色粘性シルトの単一層である。

(22)SK2023（第 89 図）

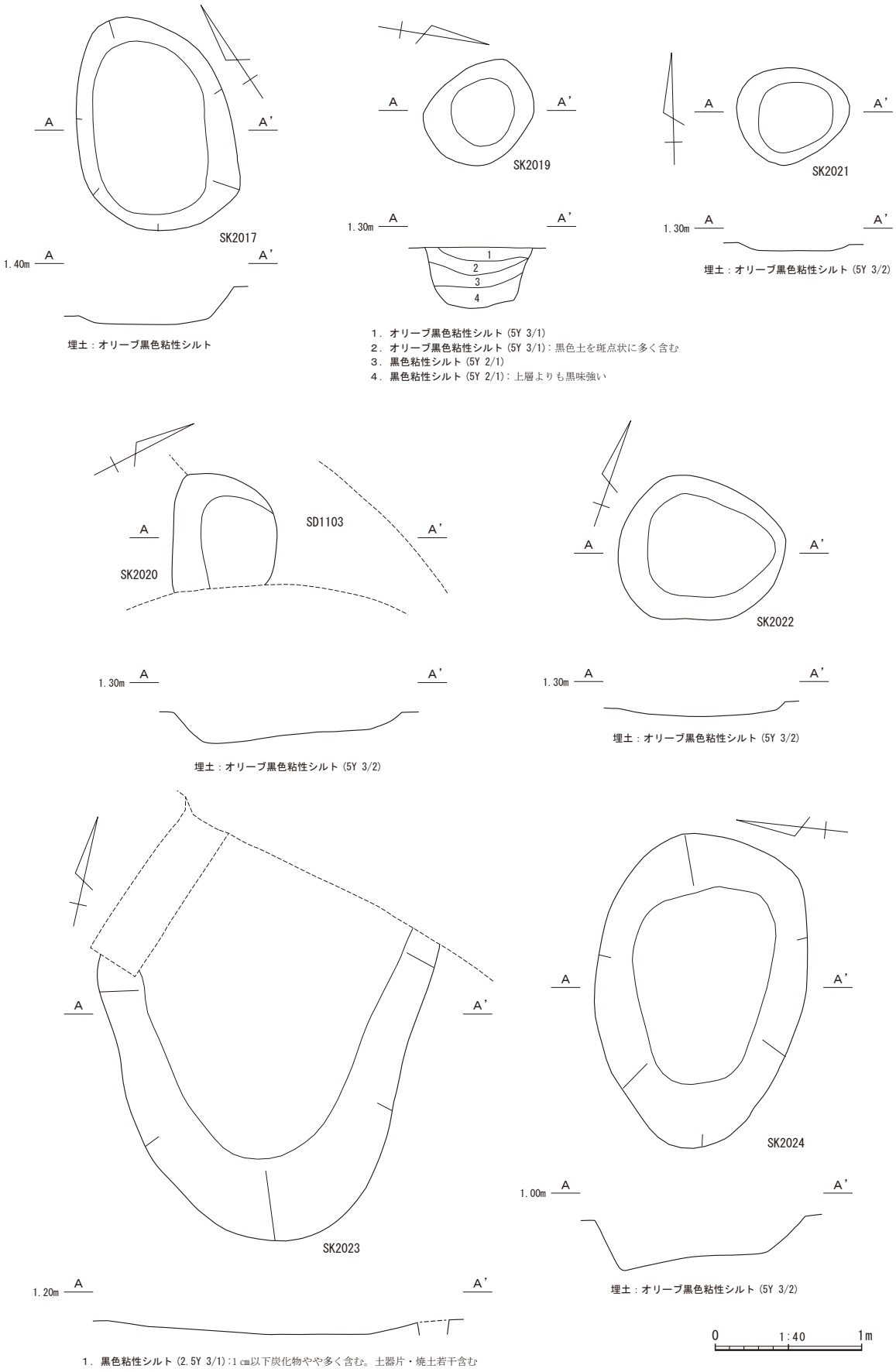
３区の M99 区､２区との境界で検出した不整形の非常に浅い土坑である。２区の側では検出できなかった。非常に浅いこともあり、２区と３区の境界付近で消滅していると考えられる。

(23)SK2024（第 89 図）

３区の M1 区で検出した楕円形に近い土坑である。

(24) SK2025

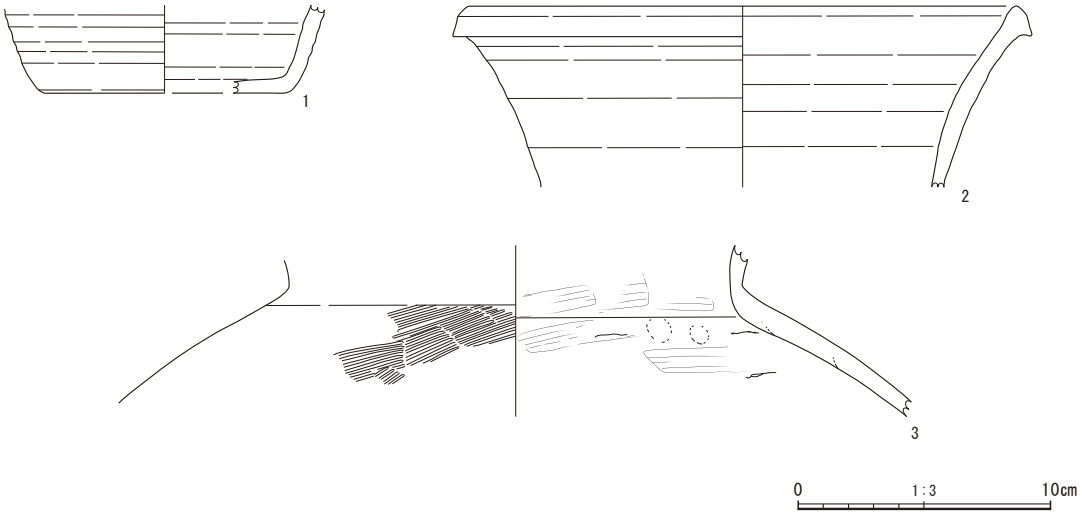
奈良時代の土坑であるが、当初、古墳時代の住居状遺構 SH3002 に伴う土坑と考えていたため、分離した経緯を含めて第４節で、SH3002 とともに報告する。



１．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)
２．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：黒色土を斑点状に多く含む
３．黒色粘性シルト (5Y 2/1)
４．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：上層よりも黒味強い

１．黒色粘性シルト (2.5Y 3/1)：1 ㎝以下炭化物やや多く含む。土器片・焼土若干含む

第 89 図　土坑 SK2017・2019 ～ 2024 実測図



第 90 図　土坑 SK2017、溝跡 SD2002 出土遺物実測図

５　溝跡

この時期の重要な溝として、掘立柱建物群と関連があると思われる SD2002 を報告する。

（１）SD2002（第 91 図）

１次調査で８世紀代の溝、SD3 として報告した溝の続きを検出した。この溝は微高地と低地の境界部分に、南北方向にほぼ一直線に掘られている。そして、この溝の西側の微高地上に掘立柱建物群がある。溝の北端は、１次調査の調査区外まで伸びているため、全長は不明である。南端は自然消滅している。掘立柱建物群の南端で、この溝もなくなっていることからも、掘立柱建物群との関連がうかがえる。

今回の調査で検出したのは、長さ 75 ｍで、１次調査で検出した部分を含めると 80 ｍを越える。平均的な幅は 0.75 ｍ程度、深さは 0.4 ｍ程度であるが、その後の洪水などで、上面を削られているため、本来はもっと広く、深い溝だったことは間違いない。埋土は、オリーブ黒色シルトを基調とする場所、灰色砂質土を基調とする場所などがある。

溝の性格は、次のように考えられる。

・掘立柱建物群の際に、一直線に掘られていること、掘立柱建物群の南端でこの溝も切れていることから、掘立柱建物群と関連があった可能性は高い。

・低地部分に掘られているため、常時滞水していたと考えられる。

・SD2002 の北端は、１次調査区外に出ているが、その延長上数十ｍに旧太田川が流れており、その流路は、現在の磐田市今之浦付近に存在したと考えられる大きな潟湖に通じている。その潟湖の脇には、奈良時代の国衙の可能性が指摘されている御殿・二之宮遺跡がある。

上記のような点を考えると、この溝の機能として、掘立柱建物群と他の地域を結ぶ水運用の溝の可能性が出てくる。この溝から出土した遺物は次のとおりである（第 90 図）。

２は、須恵器の壺の頸部で、口縁端部を強く撫で、下方につまみだすようにして口縁端部を拡張していることから、８世紀台（Ｖ期）に収まると思われる。

３は、土師器の甕の頸部付近の破片で、外面には叩き目が見られる。内面には横方向の撫でが見られる。口縁の形態が不明のため、時期の判断は難しいが、古墳時代後期～奈良時代と思われる。

この溝は、１次調査では８世紀代と報告されているが、上記の出土遺物から考えても、８世紀代の溝と考えられる。

６　遺物集積遺構

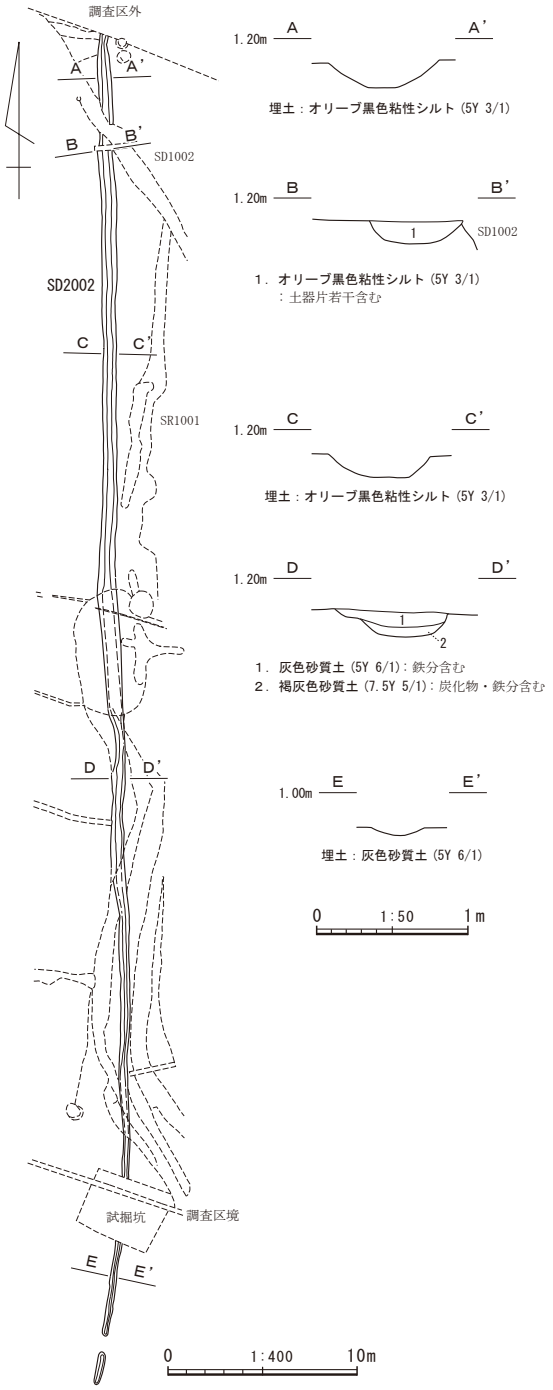
８世紀代の須恵器を主体とした遺物が集中して出土した箇所を遺物集積遺構として報告する。

（１）SX2001（第 92 図）

２区の K1 区で検出した須恵器を主体とした土器の集積である。遺物は 4,40 m× 3.90 mの範囲に分布している。遺物の出土レベルが揃っていることから、同一面での出土といって良い。土器は８世紀代（Ｖ期）の須恵器が主体で、多数の円礫を伴っているのが特徴である。西向遺跡の遺物包含層には、円礫は含まれていないため、これらの円礫は土器と一緒に持ち込まれたものと考えられる。土器の割れ面が摩滅していないことから、流れてきた土器や礫が集まったものではなく、この場所に集められたものと考えられる。出土した土器は次のとおりである（第 93 図）。

１～８は須恵器の蓋である。１は宝珠状のつまみがあり、口縁端部を折り曲げて強く撫でることによって、断面三角形の受部を作り出している。２は、宝珠状のつまみが潰れたように低くなっており、口縁端部を短く折り返して受け部を作っている。３は、全体的に潰れて平らになったような印象を受ける。全面を回転撫でで仕上げてあり、口縁端部を短く折り曲げて受け部を作ってある。４は、口縁端部を折り曲げて強く撫でることによって、断面三角形の受部を作り出している。５は、全体を回転撫でで仕上げてある。天井部が分厚く、宝珠状の摘みがややつぶれている。６も天井部が分厚い特徴がある。また、宝珠状の摘みに、工具で挟んだような潰れが見られる。

７は全面を回転撫で仕上げ、口縁端部を短く折り曲げて受け部を作ってある。８は全面を回転撫で仕上げ、口縁端部を短く折り曲げて受け部を作ってある。

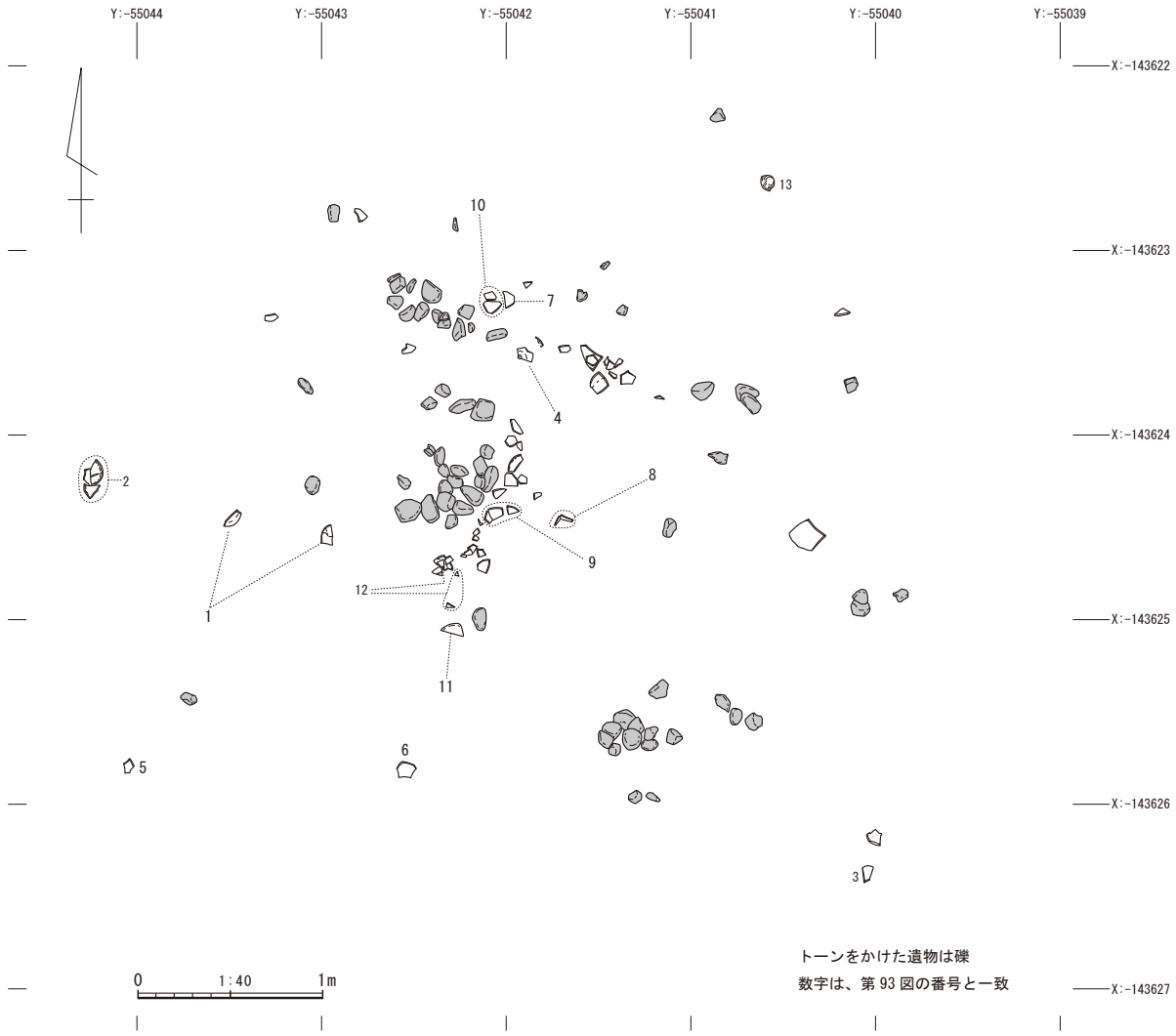


第 91 図　溝跡 SD2002 実測図

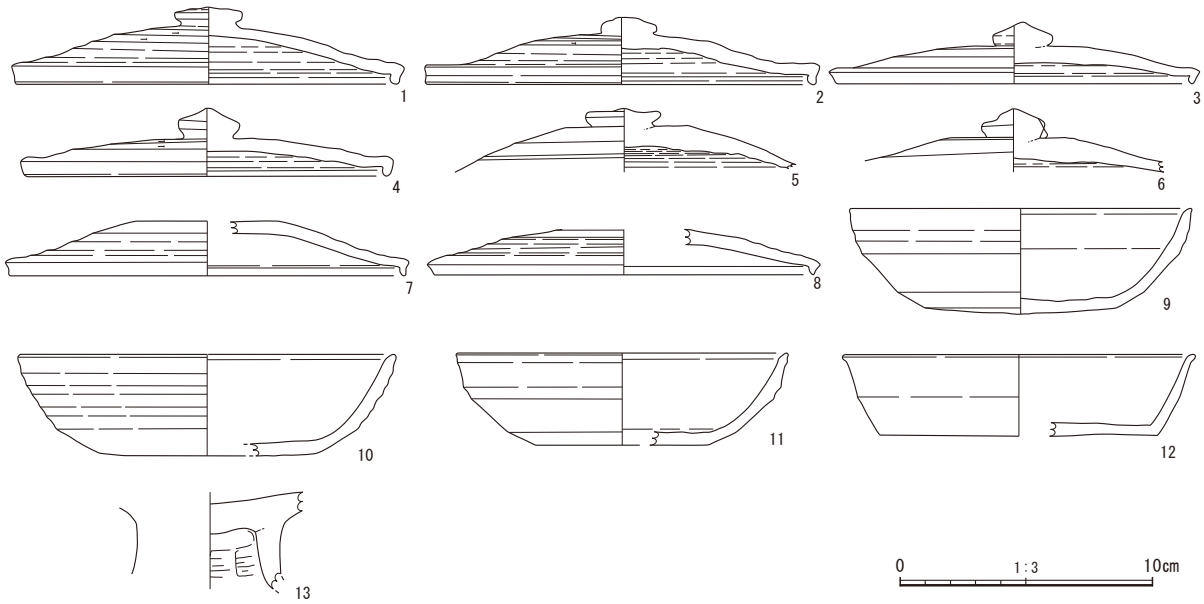
９～ 12 は須恵器の坏である。９は底部は平坦に近い。体部は下半を削ってあり、上半は撫でてある。口縁端部は面取りをしてある。焼成はやや甘い。10 は湖西産須恵器の坏で、焼成が不良である。底面が平底に近く、口径が 15cm ほどと考えられる。11 は底部が平坦に近い特徴がある。12 は箱形の坏で、これは８世紀中葉以降になる可能性がある。

13 は土師器の高坏の脚部で、坏の内側と脚部の外側に丹が残っている。

以上の遺物は、８世紀代に収まると考えられる。ただ、９と 10 は、復元口径の大きさから、７世紀後半～末までさかのぼる可能性がある。



第 92 図　遺物集積遺構 SX2001 実測図



第 93 図　遺物集積遺構 SX2001 出土遺物実測図

第５節　古墳時代の遺構と遺物

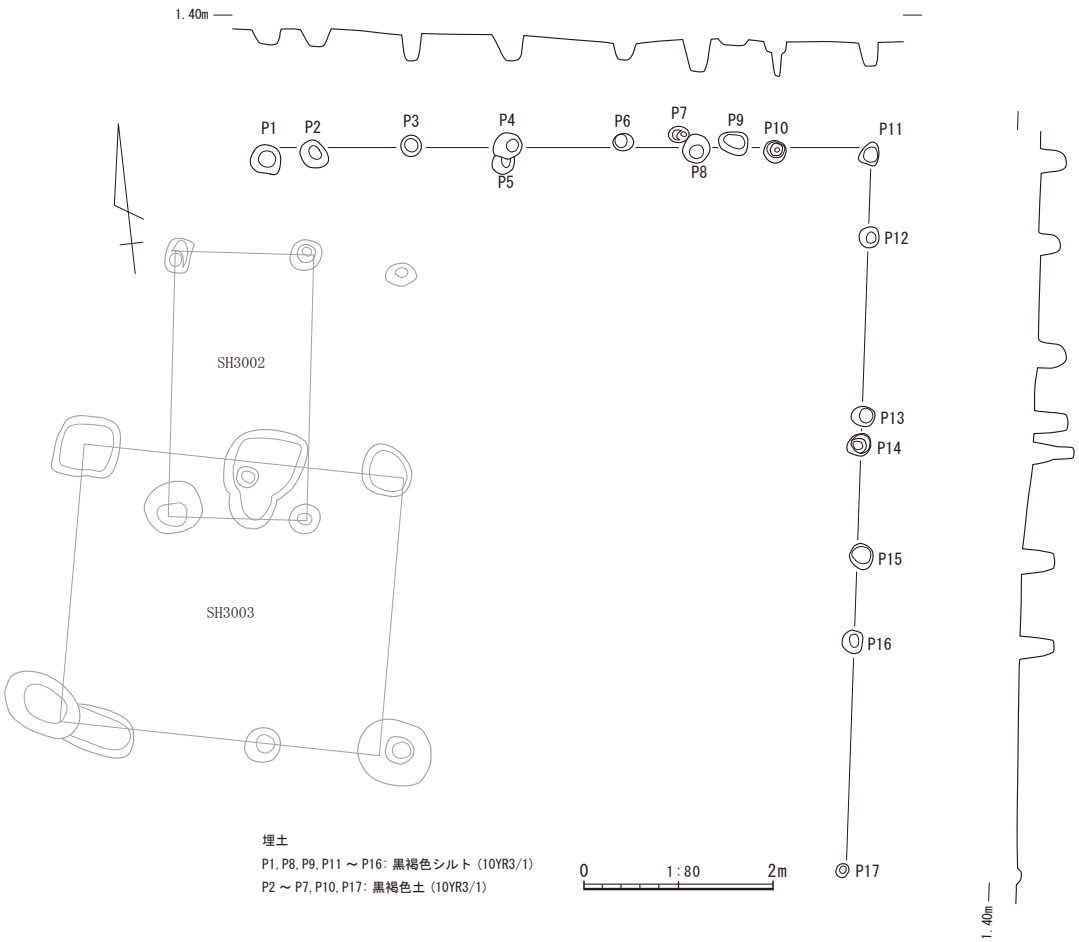
本節では、出土遺物から古墳時代の遺構と判断したもの、及び、周囲で検出した遺構との関連などから、古墳時代の可能性が高いと考えられる遺構を報告する。

１　柵列

（１）SA3001（第 94 図）

２区の K99 区、K1 区、L1 区で検出した柵列である。調査当初は２つの柵列に分けて調査していたが、両者が P11 で直角に近い角度で交わることから、同一の柵列と考えた。柱穴の間隔は不揃いで、一定の間隔になっている部分はほとんどない。この原因としては、３つの可能性が考えられる。１つ目は、柱穴の間隔が広い部分では、検出できなかった柱穴がある可能性。２つ目は、すべての柱穴が同時期に存在したのではなく、場所を変えて掘り直した柱穴がある可能性。３つ目は、柵列を構成しない柱穴が混ざっている可能性である。遺構の検出状況、柱穴相互の位置関係、埋土などを検討し、柵列を構成する可能性のある遺構をすべて掲載したが、柵列を構成しない柱穴が混ざっている可能性は捨てきれない。この３つの原因により、柱穴の間隔が一定になっていないように見えると考えられる。柱穴の埋土は黒褐色土が主体である。

遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難である。古墳時代後期（７世紀代）の住居状遺構 SH3002、SH3003 を囲むように作られていることから、これらと同時期になる可能性がある。



第 94 図　柵列 SA3001 実測図

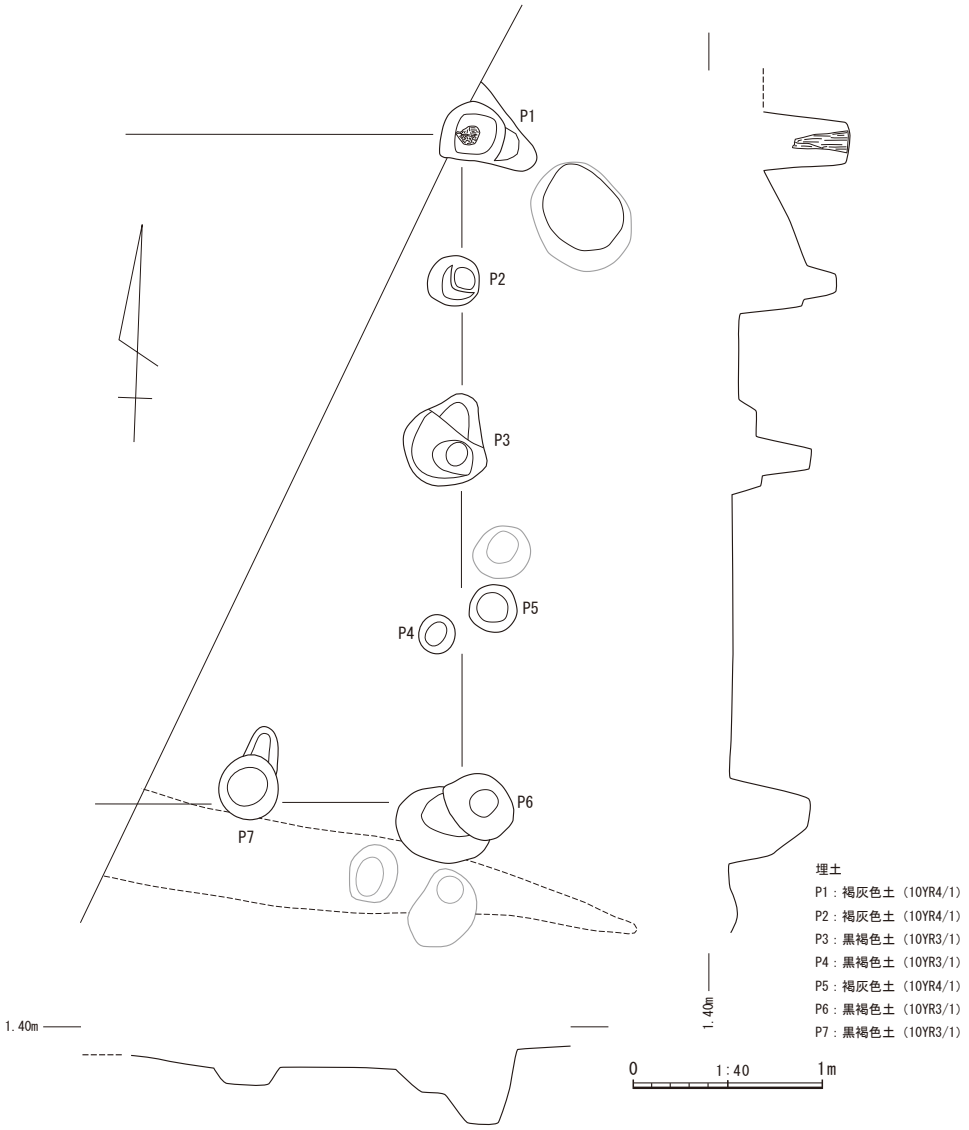
２　掘立柱建物跡

柱穴の平面形が円形、あるいは不整形になっている掘立柱建物跡は、少ないながらも柱穴から出土した遺物から、古墳時代の可能性が高いと判断した。

（１）SB3001（第 95 図）

２区の I99 区で検出した。大部分が調査区外に出ているため、間数、規模は不明である。検出できた柱穴間は４間で、3.52 ｍある。これが桁行なのか、梁行なのかははっきりしないが、４間あることから、桁行の可能性の方が高いと思われる。この考えが正しいとすると、この建物の主軸は N2°　W になり、柱穴間距離は、桁行 1.60 ｍ、梁行 2.48 ｍになる。

P3 と P6 には掘り直した跡が見られ、P7 には抜き取り痕が見られる。P4 と P5 は柱穴の軸からずれた場所にある。遺物は、P1 に柱根が残っていた（第 96 図）。腐食が著しく、加工痕ははっきりしない。樹種はイヌマキ属である。図示はできなかったが、P1 と P3 から、7 世紀代の須恵器が出土したことから、この掘立柱建物跡の時期は 7 世紀代と考えられる。



第 95 図　掘立柱建物跡 SB3001 実測図

（２）SB3002（第 97 図）

２区の I99 区、I1 区で検出した桁行３間、梁行２間の総柱の掘立柱建物跡である。規模は桁行 5.12 m、梁行 4.00 m、面積 20.48 ㎡である。SB3001 に隣接している上に、主軸の方向が N88°　W で、SB3001 の主軸の方向と直交していることから、同時期（７世紀代）の掘立柱建物跡と判断した。

柱穴間は、桁方向は 1.7 m程、梁方向は 2.0 m程で、ほぼ等間隔である。この建物の東西にある P14 ～ P17 は、建物の軸からは、ややずれた位置にあるが、棟持柱になる可能性がある。P12 と P13 の間にあった柱穴は、その後に掘られた SD1007 で壊されたらしく、検出できなかった。

柱穴の埋土は、黒褐色土と灰白色土の２種類が基本で、黒褐色土の単一層の埋土と、黒褐色土と灰白色土が互層のように堆積した埋土、黒褐色土と灰白色土が混在して斑になった埋土がある。P8 は黒褐色土と灰白色土が交互に堆積していることから、質の異なる土を交互に入れて突き固めて柱を固定する工法がとられたと考えられる。

この建物跡を構成する柱穴からは遺物が出土しなかったが、上記の通り、SB3001 と同時期の７世紀代と考えられる。

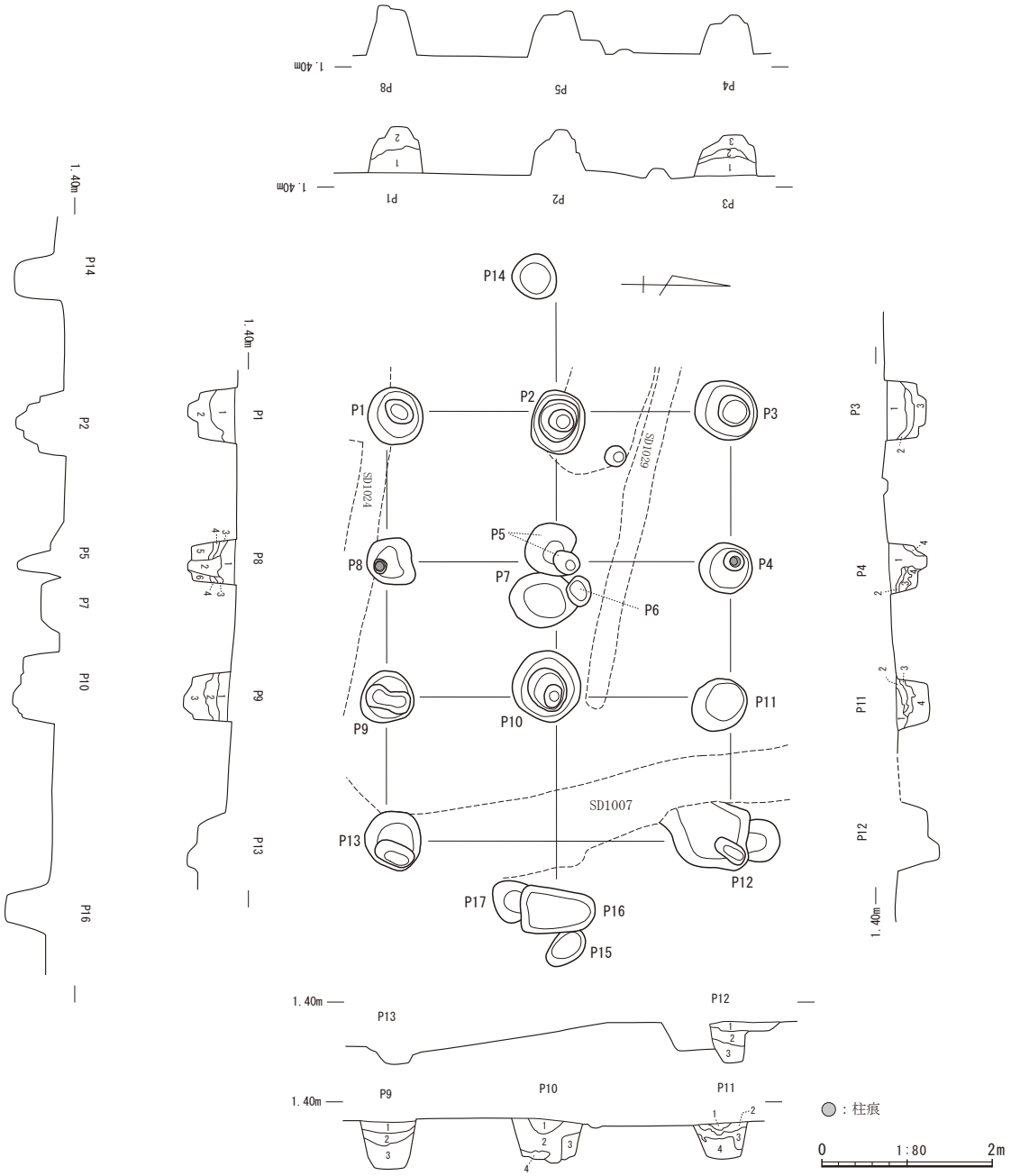
第 96 図　掘立柱建物跡 SB3001 出土遺物実測図

（３）SB3003（第 98 図）

２区の J1 区で検出した。２間×２間の側柱建物跡である。規模は一辺 4.08 mで、面積は 16.75 ㎡である。ほぼ正方形になっているため、桁行と梁行の区別がつきにくく、主軸の方向もわかりにくいが、主軸は N15°　W か、N75°　E のどちらかと考えられる。柱穴間距離は、主軸方向が N15°　W、N75°　E のどちらであっても、桁行、梁行とも 2.00 mである。時期を判断できる遺物が出土しなかったことと、主軸の方向が一致する建物跡がないため、時期の判断は困難である。可能性としては、P3 と P4 の間にあるはずの柱穴が、８世紀代の SB2001 の柱穴に壊されていることから、SB2001 以前に建てられていた建物である可能性は高い。なお､SA2001 の報告でも記載したが､SB3003 の P3 は､偶然ではあるが､SA2001（８世紀）の P7 と全く同じ位置にあるため、この柱穴が SB3003 に伴うものか、SA2001 に伴うものか、判断しがたい。SB3003 の P3 が SA2001 の柱穴であるとすると､SB3003 が掘立柱建物として成立しないため、SB3003 の柱穴の可能性の方が高いと思われる。

（４）SB3004（第 99 図）

４区の R96 区で検出した。桁行は３間、4.88 m、梁行は１間、2.24 m、面積は 10.93 ㎡である。主軸の方向は N80°　E である。柱間距離は、桁行で 1.60 m、梁行で 2.24 mである。柱穴の平面形や大きさが不揃いであるが、深さはほぼ一定になっている。P8 に対応する柱穴は、P2 と P3 の２つがあるが、いずれも P8 の対面に位置せず、ずれた場所になっている。また、P4 は、柱根が検出できたことから、柱穴であることに間違いはないが、他の柱穴よりも大きく、平面形も他の柱穴は円形に近いのに対して、これは方形に近い。北東隅の柱穴は検出できなかった。住居状遺構 SH3010 の中にあるため、この住居跡に壊されたのかもしれないが、同じ SH3010 の中にある P1 は検出できたことから、北東隅にあった柱穴は非常に浅かったため、SH3010 構築時に消滅した可能性がある。柱穴の埋土はいずれも黒褐色土の単一層であることから、短時間のうちに埋没したと考えられる。遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難である。積極的な根拠にはならないが、周囲で古墳時代前期～中期初頭（５世紀前半）の井戸跡や祭祀跡が検出されていることから、それらと同時期である可能性が考えられる。図示はしていないが、P8 から、砂岩の円礫を使用した凹石が出土した。流れ込みの可能性が高い。



P1
1．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色土（5Y 7/1）ブロックを多く含む
2．灰色砂質土（5Y 6/1）：灰白色土（5Y 7/1）ブロックを含む

P3
1．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色土（5Y 7/1）ブロックを含む
2．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色土（5Y 7/1）の斑状
3．灰白色土（5Y 7/1）：黒褐色土（5YR 2/1）ブロックを含む

P4
1．黒褐色土（5YR 2/1）
2．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色土（5Y 7/1）ブロックを多く含む
3．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色土（5Y 7/1）ブロックを含む
4．灰白色土（5Y 7/1）：黒褐色土（5YR 2/1）ブロックを少量含む

P8
1．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色土（5Y 7/1）ブロックを多く含む
2．灰白色土（5Y 7/1）：黒褐色土（5YR 2/1）ブロックを多く含む
3．灰白色土（5Y 7/1）：黒褐色土（5YR 2/1）ブロックを含む
4．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色土（5Y 7/1）ブロックを含む
5．灰白色土（5Y 7/1）：黒褐色土（5YR 2/1）ブロックを少量含む
6．灰白色砂質土（5Y 7/1）

P9
1．黒褐色土（5YR 2/1）
2．灰白色土（5Y 7/1）：黒褐色土（5YR 2/1）ブロックを含む
3．灰白色土（5Y 7/1）：黒褐色土（5YR 2/1）ブロックを多く含む

P11
1．黒褐色土（5YR 2/1）
2．灰白色土（5Y 7/1）：黒褐色土（5YR 2/1）ブロックを含む
3．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色土（5Y 7/1）ブロックを含む
4．灰白色土（5Y 7/1）

P12
1．黒褐色土（5YR 2/1）と灰白色土（5Y 7/1）の斑状
2．黒褐色土（5YR 2/1）：灰白色土（5Y 7/1）ブロックを多く含む
3．灰白色土（5Y 7/1）：黒褐色土（5YR 2/1）ブロックを多く含む

P2, P5 ～ 7, P13 ～ P17 黒褐色土（5YR 2/1）

第 97 図　掘立柱建物跡 SB3002 実測図

（５）SB3005（第 100 図）

４区のR96区、S96区で検出した。桁行３間、4.80 m、梁行３間、3.76 m、面積は 18.05 ㎡である。主軸の方向はN80°Eである。柱穴間距離は、桁行で 1.20 m、梁行で 1.20 m である。柱穴の平面形や掘削位置が不揃いであるが、柱を据えた位置は、ほぼ直線上に並ぶ。他の掘立柱建物跡でも指摘したが、柱穴を掘る場所を大まかに決めて柱穴を掘削した後、柱穴の中で柱を据える位置を決めたためと考えられる。この建物跡の柱穴の特徴として、柱穴の深さが不揃いであることと、P2 や P4 のように、直径の割に深いものがあることを指摘できる。柱を深く打ち込んだことになる。

柱穴の埋土は、黒色粘土と灰オリーブシルトを基調としており、P7 と P12 では、これら２種類の土を交互に入れてあることから、質の異なる土を交互に入れて柱を固定する方法がとられたと考えられる。

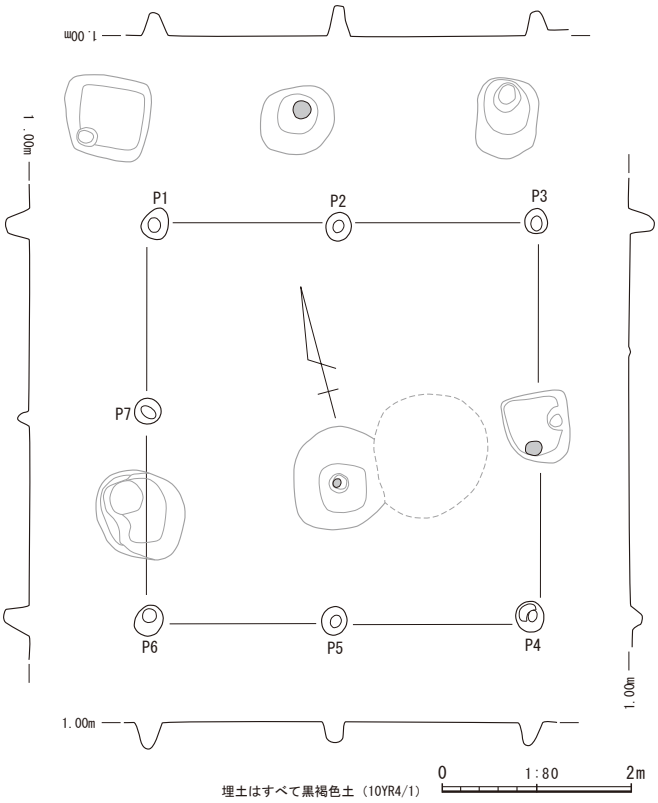
遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難である。積極的な根拠ではないが、周囲で古墳時代前期～中期初頭（５世紀前半）の井戸跡や遺物集積遺構が検出されていることから、それらと同時期の可能性がある。

（６）SB3006（第 101 図）

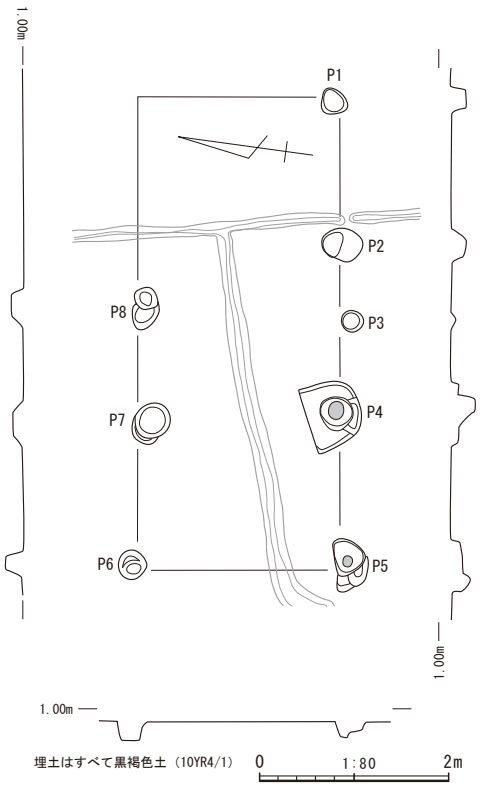
４区の S96 区と T96 区で検出した。規模は桁行３間、5.92 m、梁行３間、4.96 m、面積 29.36 ㎡である。主軸の方向はN80°E、柱穴間距離は、桁行で 1.60 m、梁行で 1.92 mである。柱穴は円形で、平面形は他の掘立柱建物跡に比べて小さいが、平面形、間隔とも揃っている。埋土は黒色粘土と灰色系のシルトが基調になっている。

この建物の特徴として、棟持柱を持つことがあげられる。P13 と P14 が棟持柱に該当する。P14 の断面図には、棟持柱を斜めに据え付けたことが現れている。

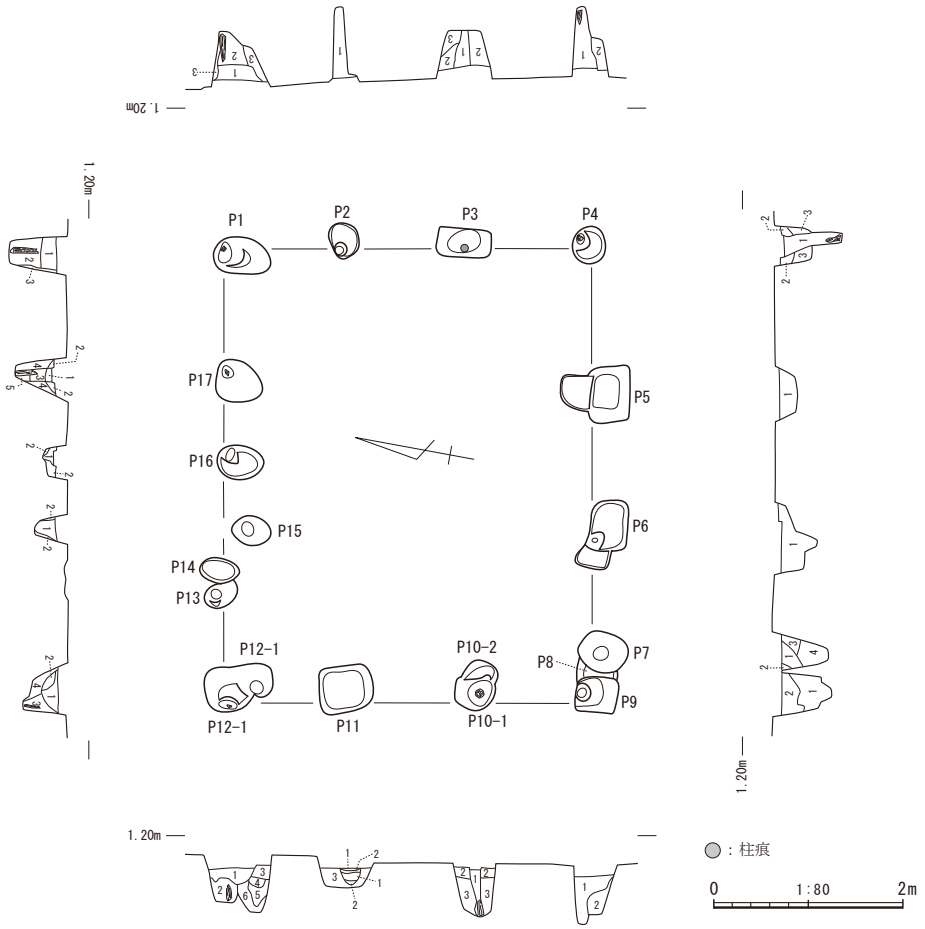
SB3004、3005 と同様、遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難であるが、SB3004、3005、3006 は近接して建てられて



第 98 図　掘立柱建物跡 SB3003 実測図



第 99 図　掘立柱建物跡 SB3004 実測図



P1
1．黒色粘土（10YR 2/1）
2．黒色粘土（10YR 1.7/2）
3．灰オリーブ色シルト（7.5Y 5/2）

P2
1．黒色粘土（10YR 1.7/1）

P3
1．黒色粘土（10YR 2/1）：柱痕
2．黒色粘土（10YR 2/2）
3．黒色粘土（10YR 1.7/1）

P4
1．黒色粘土（10YR 1.7/1）
2．灰オリーブ色シルト（7.5Y 5/2）
3．灰オリーブ色粘土（7.5Y 5/2）

P5
1．黒色粘土（10YR 1.7/1）

P7
1．黒色粘土（10YR 1.7/1）：灰オリーブ色ブロック含む

P7
1．灰オリーブ色シルト（7.5Y 5/2）
2．黒色粘土（10YR 1.7/1）
3．灰色粘土（7.5Y 4/1）：灰オリーブ色ブロック含む
4．黒色粘土（10YR 1.7/1）

P9
1．黒色粘土（10YR 1.7/1）
2．灰オリーブ色粘土（7.5Y 5/2）

P10
1．黒色粘土（10YR 1.7/1）
2．黒色シルト（10YR 1.7/1）：灰オリーブ色ブロック含む
3．黒色粘土（10YR 1.7/1）：灰オリーブ色ブロック含む

P11
1．黒色粘土（10YR 1.7/1）
2．灰オリーブ色シルト（7.5Y 5/2）
3．灰オリーブ色シルト（7.5Y 4/2）

P12
1．黒色粘土（10YR 1.7/1）
2．灰オリーブ色シルト（7.5Y 5/2）
3．黒色粘土（10YR 1.7/1）
4．灰オリーブ色粘土（7.5Y 5/2）
5．黒色粘土（10YR 2/1）
6．灰オリーブ色シルト（7.5Y 5/2）

P15
1．黒色粘土（10YR 1.7/1）
2．灰オリーブ色シルト（7.5Y 5/2）

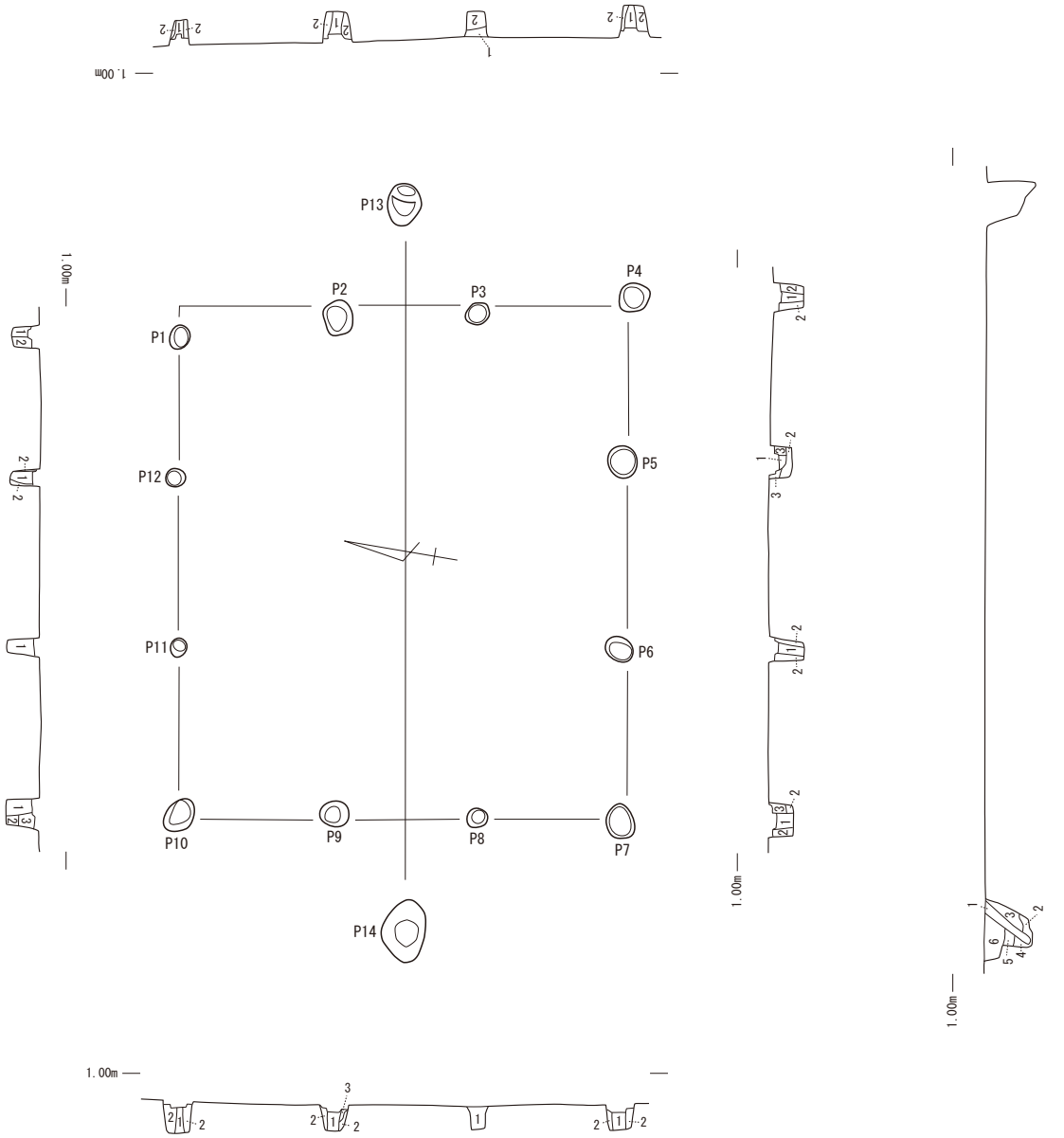
P16
1．黒褐色粘土（2.5Y 3/1）
2．灰オリーブ色シルト（7.5Y 5/2）

P17
1．黒色粘土（10YR 1.7/1）
2．黒色粘土（10YR 1.7/1）：炭化物を含む
3．黒色粘土（10YR 1.7/1）
4．灰オリーブ色粘土（7.5Y 5/2）
5．灰オリーブ色粘土（7.5Y 5/2）：黒色ブロックを含む

第 100 図　掘立柱建物跡 SB3005 実測図

いた上に、主軸の方向が一致していることから、同時期、もしくは近接した時期に立てられた可能性が高い。近隣では、古墳時代前期～中期初頭（５世紀前半）の井戸跡や遺物集積遺構が検出されていることから、SB3004、3005、3006 も同じ時期になる可能性が考えられる。

なお、SB3004、3005、3006 に近接して SD3016、3017、3018 が検出された。これらの溝跡の報告は後述するが、３本の溝跡が直交していることから、方形区画を意図した可能性がある。溝跡の方向が、SB3004、3005、3006 の主軸方向とは、ややずれるが、SB3004、3005、3006 と SD3016、3017、3018 は何らかの関係があるかもしれない。



P1・P2
１．黒色粘土（10YR 1.7/1）：柱痕
２．灰オリーブ色粘土（7.5Y 5/2）

P3
１．黒色粘土（10YR 1.7/1）：柱痕
２．灰オリーブ色粘土（7.5Y 5/2）

P4
１．緑灰色粘土（7.5GY 5/1）：黒色ブロック含む。柱痕
２．緑灰色シルト（7.5GY 6/1）

P5
１．黒色粘土（10YR 1.7/1）：柱痕
２．緑灰色シルト（7.5GY 5/1）：黒色ブロック含む
３．緑黒色粘土（7.5GY 2/1）：灰色ブロック含む

P6
１．黒色粘土（10YR 1.7/1）：柱痕
２．緑灰色シルト（7.5GY 5/1）

P7
１．灰オリーブ色シルト（7.5Y 4/2）：柱痕
２．灰オリーブ色シルト（7.5Y 4/1）
３．黒色粘土（7.5Y 2/1）

P8
１．黒色粘土（10YR 1.7/1）

P9
１．黒色粘土（10YR 1.7/1）：柱痕
２．灰オリーブ色シルト（7.5Y 4/1）
３．灰オリーブ色シルト（7.5Y 4/1）

P10
１．黒色粘土（10YR 1.7/1）：柱痕
２．灰オリーブ色シルト（7.5Y 5/2）
３．オリーブ黒色シルト（7.5Y 3/2）

P11
１．黒色粘土（10YR 1.7/1）

P12
１．黒色粘土（10YR 1.7/1）：遺物あり。柱痕
２．灰オリーブ色粘土（7.5Y 5/2）

P13
１．黒色粘土（10YR 1.7/1）

P14
１．黒色粘土（N 2/ ）：灰色ブロック含む。柱痕
２．緑灰色シルト質粘土（10GY 5/1）：黒色ブロックやや含む
３．暗オリーブ灰色粘土（5GY 4/1）：灰色ブロック含む
４．緑灰色シルト質粘土（7.5GY 5/1）
５．暗緑灰色シルト質粘土（7.5GY 4/1）
６．暗オリーブ灰色粘土（2.5GY 4/1）：黒色ブロック含む。抜き取り痕か

0　1:80　2m

第 101 図　掘立柱建物跡 SB3006 実測図

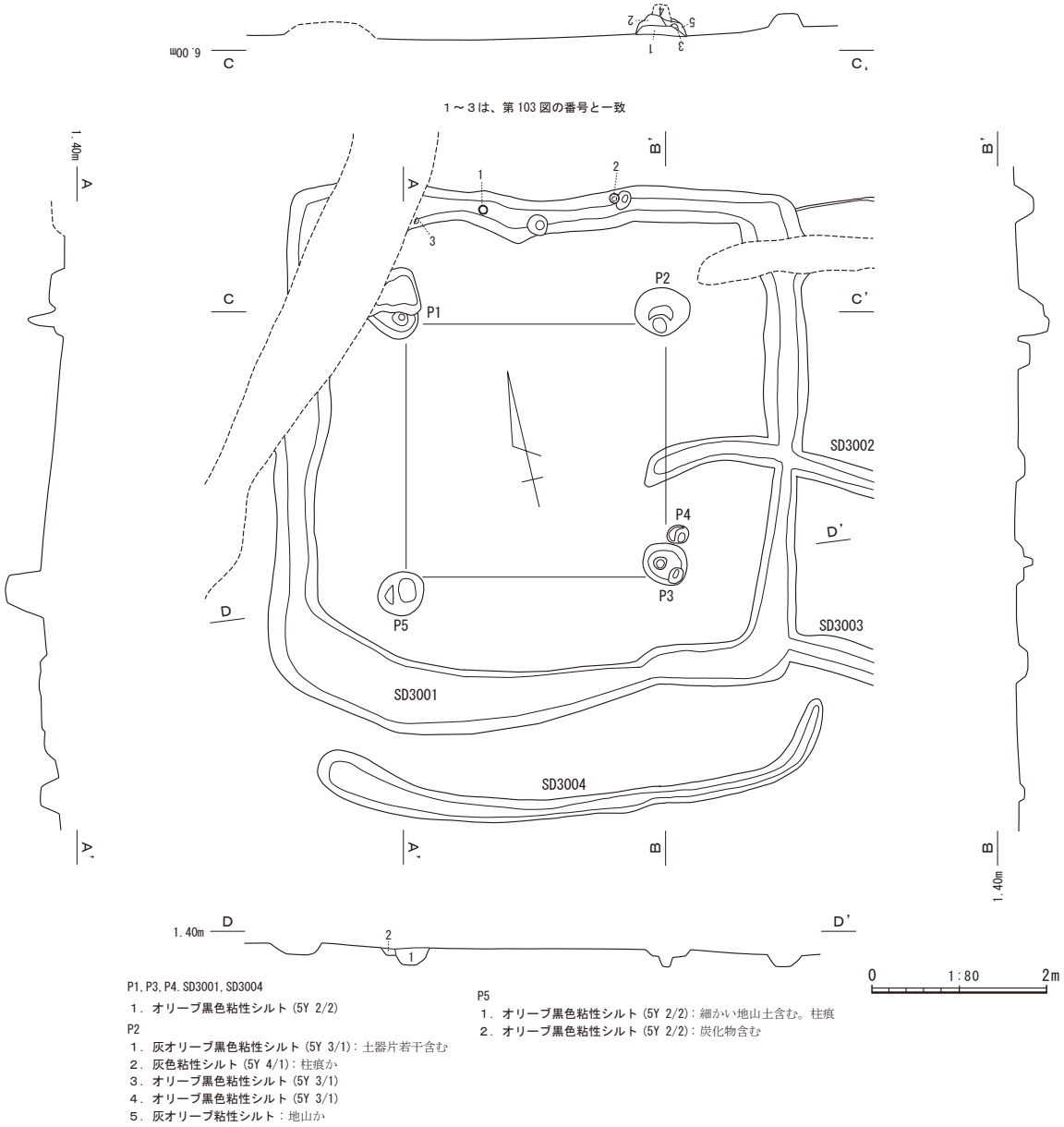
３　住居状遺構

住居跡の可能性が考えられる遺構を報告する。いずれも２区、３区、４区の各調査区の西端と西端に近い部分に分布している。地形的には微高地上になる。

（１）SH3001（第 102 図）

２区の K99 区、L99 区で検出した隅丸方形の住居状遺構である。規模は 6.40 m × 6.24 m、面積は 39.94 ㎡である。柱穴は４つ検出できた。柱穴のうち、P3 には柱根が残っていた。これに対して P2 の断面を見ると、柱の痕跡が柱穴断面の上面まで突き抜けていないことから、P2 は、柱が抜かれた後に埋没したと考えられる。

一部を SR1003 に壊されているが、壁溝 SD3001 は住居の周囲を１周している。SD3001 から SD3002 と SD3003 が延びている。これらが SD3001 と別の溝なのか精査したが、切り合いが確認できなかったため、SD3001 から延びていると考えた。この住居の排水用に掘られた溝の可能性がある。



第 102 図　住居状遺構 SH3001 実測図

この住居跡に近接して SD3004 が掘られている。SH3001 を建て替える前の住居状遺構の壁溝と思われる。この SH3001 から出土した遺物は次のとおりである。

１は須恵器の坏で、SD3001 から出土した。蓋の受け部は低く、口縁からわずかに突出する程度である。口径は 8.4cm と小さい。７世紀後半（Ⅳ期後半～末）と考えられる。

２も須恵器の坏で、これも SD3001 から出土した。口径は 8.9cm で、体部が直線的に立ち上がる特徴がある。これも７世紀後半（Ⅳ期後半～末）と考えられる。

３も須恵器の坏で、SD3001 から出土した。底部～体部の破片で、口径は 10cm 程度と思われる。７世紀代（Ⅲ期末～Ⅳ期）に収まると思われる。

４は須恵器の横瓶の胴部で、住居跡の床面付近で出土した。外面は回転撫でのあと、叩き目を入れている。内面は回転撫での後、工具によって撫でて、さらに一部を指で撫でて仕上げてある。頸部が残っていないため、時期の判断が困難だが、７世紀代（Ⅲ期末～Ⅳ期）に収まると思われる。

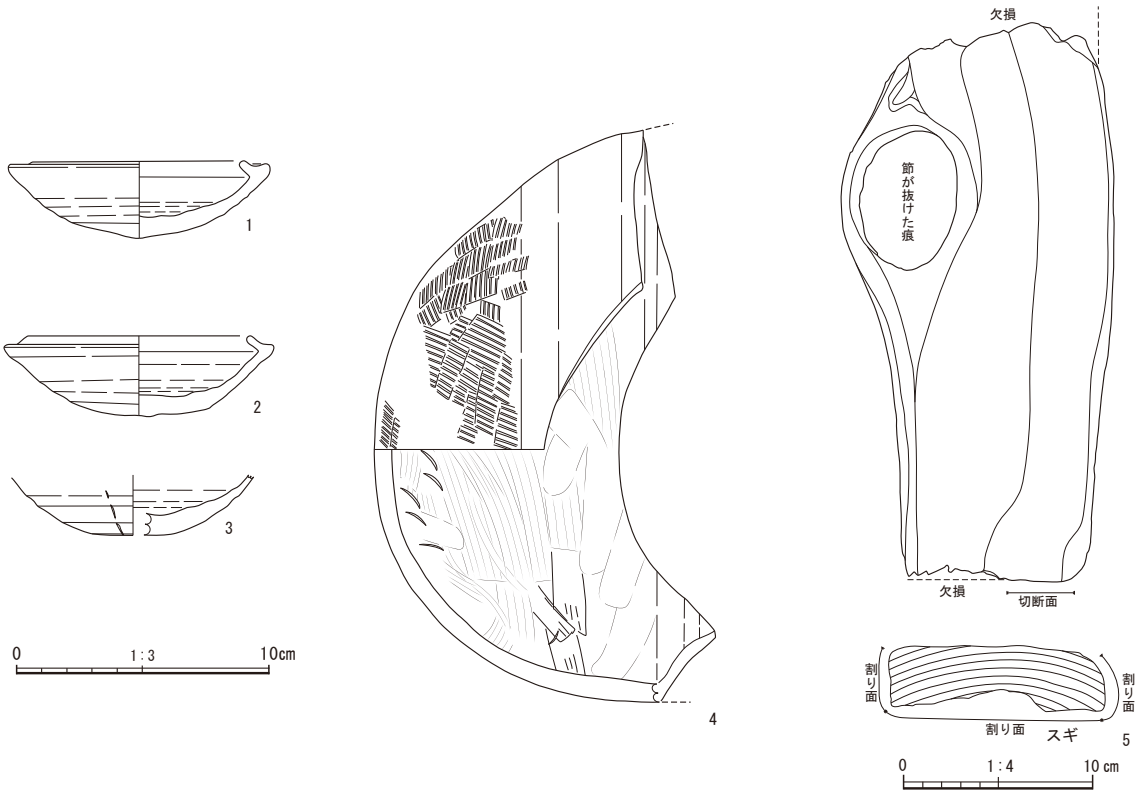
５は P3 に残っていた柱根である。樹種はスギで、下端に平坦な切断面が残っている。

以上の出土遺物から、SH3001 は７世紀後半と考えられる。

（２）SH3002（第 104 図）

２区の K99 区で検出した住居状遺構である。検出できたのは柱穴のみである。SH3001 と重複しており、SH3001 以前に建てられたものと考えられる。後述する SH3003 と近接しているが、切り合い関係がないため、SH3003 との前後関係は不明である。

この遺構からは遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難である。積極的な根拠にはならないが、SH3001 と重複していることから、SB3001 と近い時期（７世紀代）で、SH3001 以前に作られたと考えるのが妥当であろう。



第 103 図　住居状遺構 SH3001 出土遺物実測図

（３）SH3003（第 104 図）

２区の K99 区、L99 区で検出した住居状遺構で、検出できたのは柱穴のみである。SH3001 と重複しており、SH3001 以前に建てられたものと考えられる。検出できたのは柱穴のみで、調査当初は掘立柱建物跡として把握していた。その後の検討で、掘立柱建物跡と考えるには柱穴の大きさや形があまりに不揃いであること、SH3001 と重複し、SH3002 に近接していることなどから、住居状遺構の可能性の方が高いと考えた。SB3003 とは切り合い関係がないため、前後関係は不明である。

遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難であるが、SB3002 と同様、SH3001 と重複していることから、７世紀代で SH3001 以前と考えるのが妥当であろう。

（４）SH3004、SK2025（第 105 図）

３区の N98 区で検出した。隅丸方形の住居跡である。１面目の調査面で検出した遺構、SR1010、SK1009、SD1022、SD1023 に切られている。そのため、住居跡の北端は検出できなかった。規模は、南北の長さは不明であるが、東西の長さは 5.76 ｍである。柱穴は６か所検出した。これらのうち P2 としたものは、中から甕が出土したことから、柱穴というよりも、住居内に掘られた貯蔵穴と考えた方が良いかもしれない。P4 と P5 は、切り合いがないため、前後関係は不明であるが、両者は掘り直しの関係にあると考えられる。

土層断面のうち 11 層、18 層、19 層、23 層は、住居の貼り床の可能性がある。

住居跡の南端で SD3006 を検出したが、これは、SH3004 が建つ前、ここに建てられていた住居跡の壁溝の可能性が高い。したがって、SH3004 は少なくとも１回建て替えがあったと考えられる。

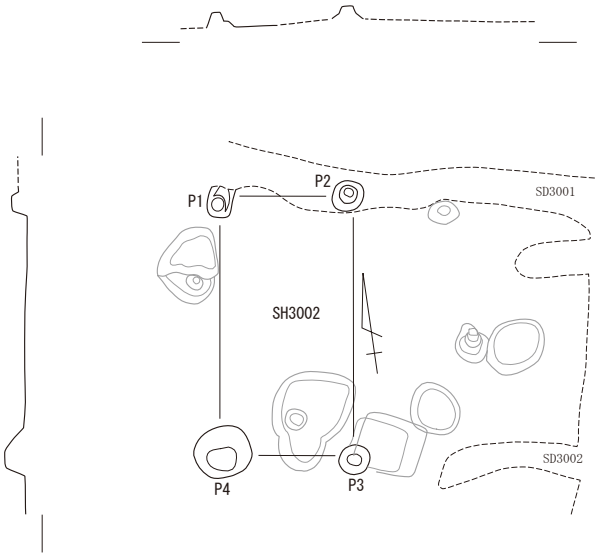
ここで、SH3004 と SK2025 の関係について報告する。SK2025 は SH3004 の床面で検出した土坑で、発掘当時の所見では、SK2025 は SH3004 の床面に掘られたもので、SK2025 と SH3004 から出土した土器から、ともに奈良時代の遺構で、SK2025 は SH3004 の床面に掘られた貯蔵穴のような性格の土坑と考えた。その後、資料整理の過程で、両遺構から出土した遺物を検討したところ、SK2025 から出土した土器は奈良時代であるのに対して、SH3004 から出土した土器は、７世紀後半のもので、奈良時代の遺物は認められなかったことから、両遺構に時期差があることが判明した。したがって、SK2025 は奈良時代の遺構、SH3004 は古墳時代の住居状遺構として、両者は別時代の遺構と判断した。

SK2025 は長径 4.00 ｍ、短径 0.96 ｍ、深さ 0.16 ｍの長楕円形の浅い土坑である。これに切られた浅い土坑も検出できたため、土坑が掘り直された可能性もある。出土した遺物は次のとおりである（第 106 図）。１は須恵器の坏で、平底から口縁がやや開きながら直線的に立ち上がっている。８世紀中頃～後半と思われる。２は須恵器の高坏で、坏の形態が不明であるが、残っている部分から、体部～口縁が広がるタイプになると思われる。少なくとも坏が半球体にはならないと思われる。このような特徴から、８世紀前半～中頃に収まる思われる。３は須恵器の長頸壺である。高台は付いていない。胴部上半と下半の境界に屈曲がなく、全体的に丸みを帯びていること、口縁端部を強く撫でて上下に拡張していることなどの特徴から、８世紀前半～中頃に収まると考えられる。

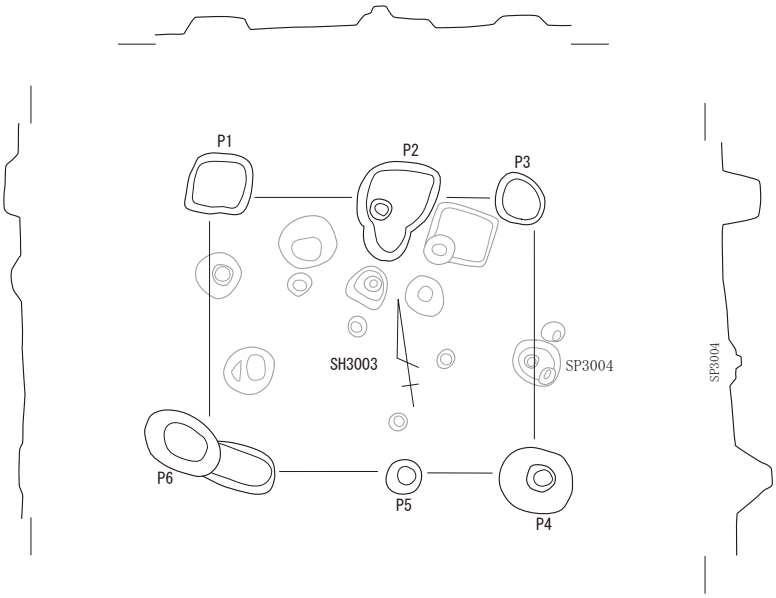
以上の出土土器から、SK2025 が掘られた時期を絞り込むことに限界はあるが、８世紀代に収まると考えて良いであろう。

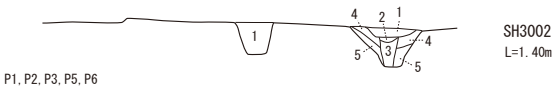
SH3004 からの出土遺物は次のとおりである（第 106 図）。４は須恵器の蓋で、復元口径が 10cm 程度の小型であることから、７世紀後半（Ⅳ期後半）と思われる。５は須恵器の坏の口縁付近の破片である。復元口径が 11cm 程度であることから、７世紀後半（Ⅳ期後半）と思われる。

６は P2 から出土した土師器の薄作りの甕である。胴部～頸部～口縁を連続して作ってある。外面には縦方向の刷毛目が見られる。内面には胴部内面を撫でた後、頸部を撫でた際に、頸部の粘土が胴部にはみ出しているのがはっきりと残っている。古墳時代後期と思われる。P2 は、これが出土したことから、



P1, P2, P3, P4
埋土：黒褐色土（10YR3/1）



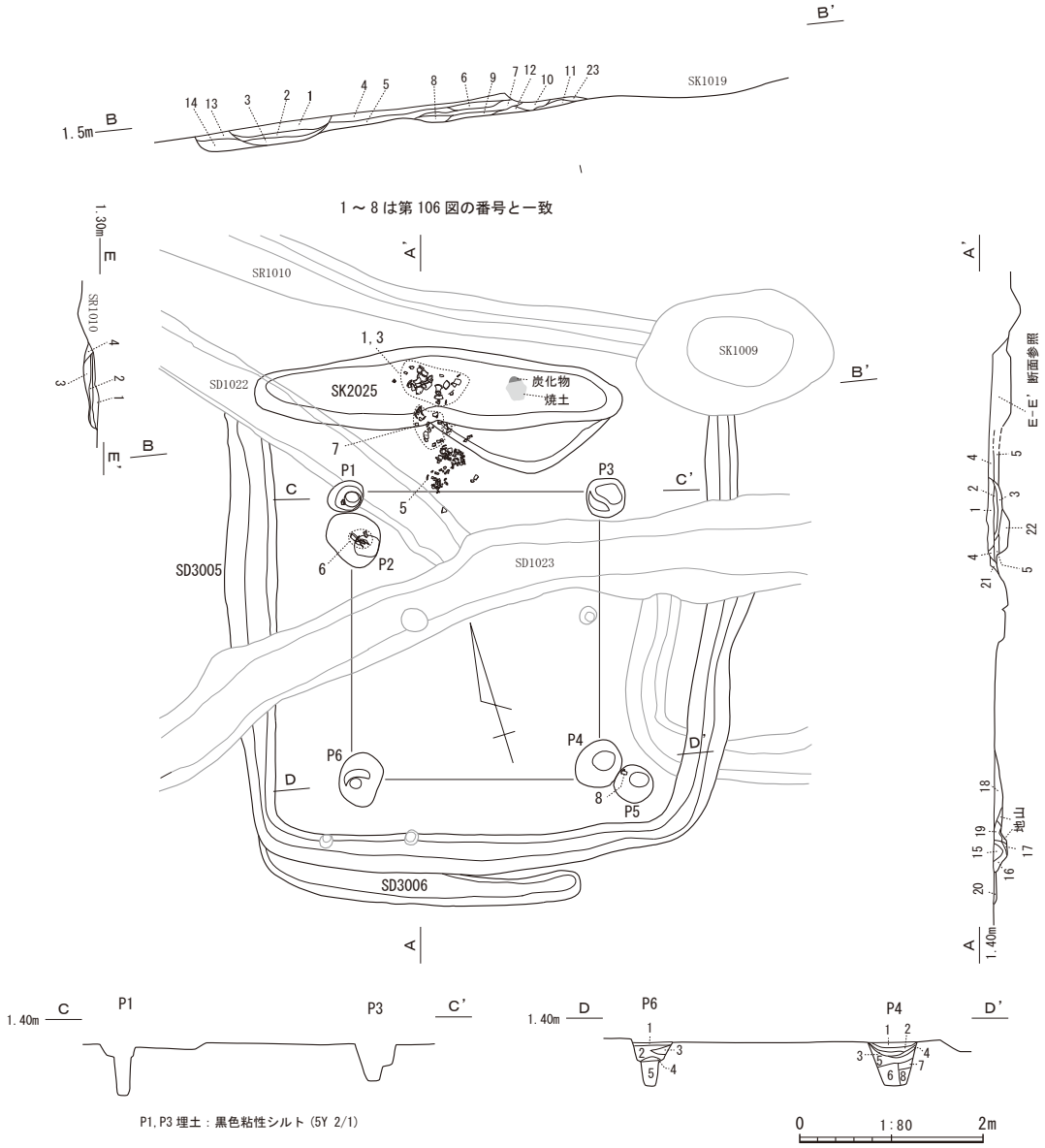


P1, P2, P3, P5, P6
１．黒色シルト（10YR 2/1）

P4
１．黒色シルト（10YR 2/1）P4
１．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 2/2）：1㎝大地山土含む
２．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 2/2）：1㎝大地山土多く含む
３．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 2/2）：2㎝以下地山土多く含む。柱痕
４．灰色粘性シルト（5Y 4/1）：黒色土やや多く含む

0　1:80　2m

第 104 図　住居状遺構 SH3002・3003 実測図



注記は A-A' と B-B' 共通

1．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：細かい地山土やや多く含む。3 ㎝大地山土を斑点状に若干含む。SD1022 の埋土
2．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：細かい地山土やや多く含む。SD1022 の埋土
3．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：細かい地山土多く含む。SD1022 の埋土
4．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：3 ㎝大地山土、土器片多く含む
5．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：細かい地山土多く含む。炭化物・焼土含む
6．灰色粘性シルト (5Y 4/1)：地山土の流れ込み
7．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：炭化物・焼土粒含む。上面に焼土と炭化物
8．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/2)：炭化物・焼土含む。SK2025 の埋土
9．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：炭化物含む。12 層と同一か。SK2025 の埋土
10．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：炭化物含む。SK2025 の埋土
11．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：貼床か
12．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：SK2025 の埋土
13．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：細かい地山土多く含む。SD3005 の埋土
14．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：細かい地山土多く含む。SD3005 の埋土
15．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：細かい地山土やや多く含む。壁溝
16．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1) と灰色粘性シルト (5Y 4/1) の混土：壁溝
17．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：1 ㎝大地山土やや多く含む。壁溝
18．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：細かい地山土やや多く含む。貼床か
19．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：細かい地山土多く含む。貼床か
20．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：2 ㎝大地山土やや多く含む。SD3006
21．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：細かい大地山土やや多く含む。SD1023
22．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：2 ㎝大地山土多く含む。SP3010 の埋土
23．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：貼床か

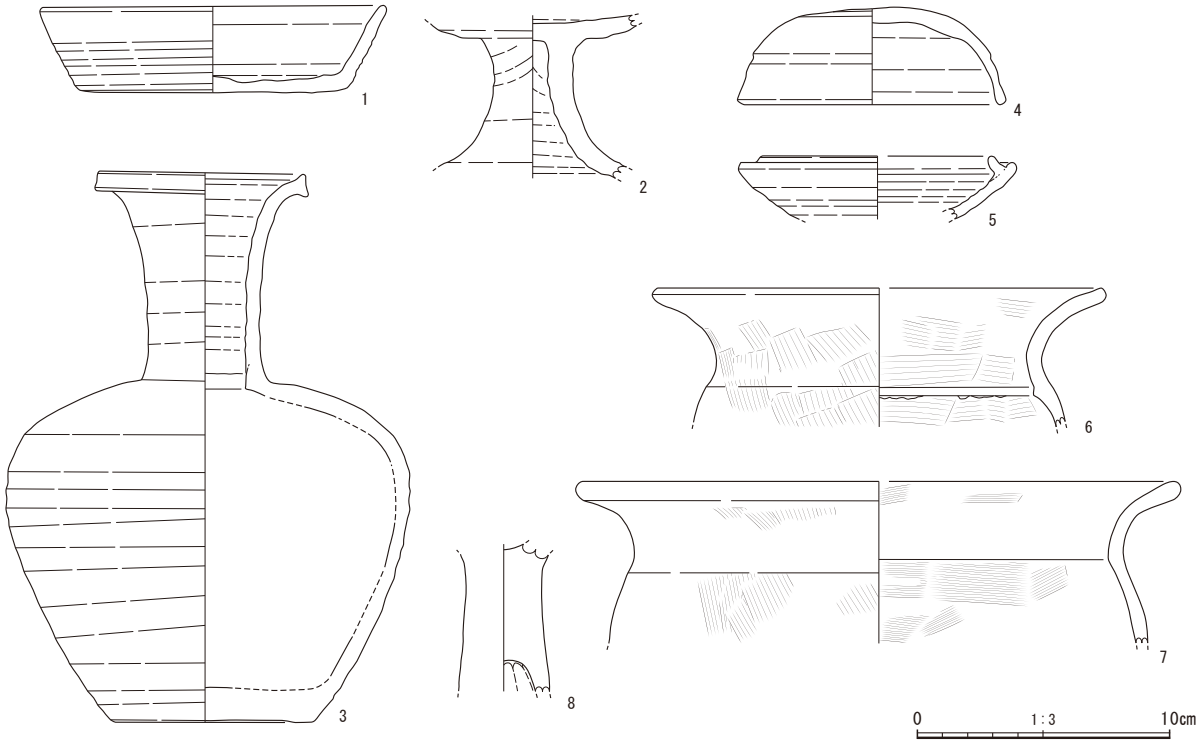
P6

1．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：細かい地山土やや多く含む
2．灰オリーブ色粘性シルト (5Y 4/2)：黒色土混じる
3．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：細かい地山土多く含む
4．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：1 ㎝大地山土やや多く含む
5．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)

P4

1．黒色粘性シルト (2.5Y 3/1)
2．黒色粘性シルト (2.5Y 3/1)：3 ㎝大地山土やや多く含む
3．灰色粘性シルト (5Y 4/1)：黒色混じる
4．灰色粘性シルト (5Y 4/1)
5．黒色粘性シルト (2.5Y 2/1)：細かい地山土含む
6．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：柱痕
7．黒褐色粘性シルト (2.5Y 3/1)：細かい地山土多く含む
8．灰色粘性シルト (5Y 4/1) とオリーブ黒色粘性シルトの混土

第 105 図　住居状遺構 SH3004、土坑 SK2025 実測図



第 106 図　住居状遺構 SH3004、土坑 SK2025 出土遺物実測図

柱穴ではなく、貯蔵穴のような機能を持った土坑と考えた方が良いかもしれない。

７も土師器の甕で、胴部上半から口縁にかけての破片である。胴部外面には縦方向の刷毛目が見られる。口縁直下には、刷毛目の工具を強く押し当て、器面がへこんでいる部分がある。内面には横方向の刷毛目が見られる。時期は、古墳時代後期と思われる。

以上の出土遺物から、SH3004 の時期は７世紀代と考えられる。他に P5 から、土師器の高坏（８）が出土した。裾部の広がり方が不明のため、時期判断が困難であるが、SH3004 で出土した他の遺物よりも古く、古墳時代前期～中期初頭まで遡る可能性がある。このことから、P5 は、SH3004 の床面で検出した遺構であるが、SH3004 に切られた、SH3004 よりも古い遺構の可能性がある。

（５）SH3005（第 107 図）

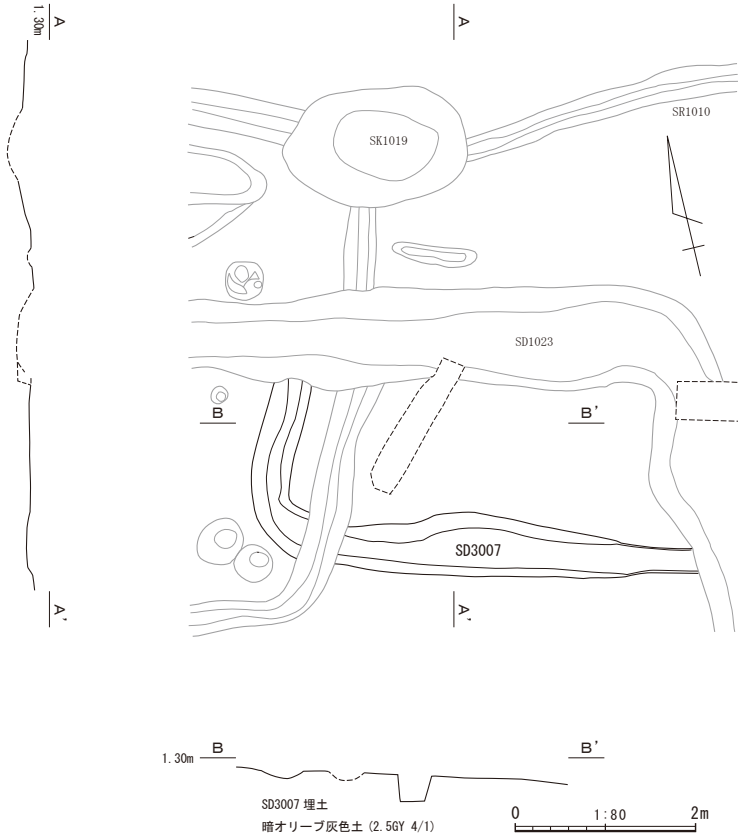
３区の N98、N99 区で検出した。SH3004 に切られていることから、SH3004 以前の遺構である。SH3004 の他に SD1023 にも大きく切られており、壁溝の一部を検出したに過ぎない。遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難であるが、古墳時代後期の SH3004 に切られていることから、古墳時代後期以前ということになる。SH3005 を建て替えて SH3004 を建てたと考えれば、SH3004 との時期差は近く、７世紀代と考えられる。

（６）SH3006（第 108 図）

３区の 097 区、098 区で検出した隅丸方形の住居状遺構である。平面形の大きさは 5.20 m × 4.48 m、面積は 23.30 ㎡である。住居内で柱穴と思われるものは、住居跡の北西隅で P1、北東隅で P2、南東隅で P3 を検出した。南西隅では遺構精査にもかかわらず、柱穴を検出できなかった。SP3022 も住居跡の北西隅に近い場所で検出したもので、柱穴の可能性がある。

住居内で検出した SD3009 は、壁溝の一部を思われるが、住居内を巡ってはいない。住居跡の北端では竈を検出した。内部には灰や焼土を含んだ土が堆積していた。煙道部分も明瞭に検出できた。

この住居跡に隣接して SD3008 を検出した。SH3006 の前に建てられていた住居跡の壁溝と考えられる。



第 107 図　住居状遺構 SH3005 実測図

SD3010 もこの住居状遺構に隣接して検出した溝で、直角に曲がる部分が見られないが、掘られた方向が SH3006 の主軸の方向に近く、同じく住居状遺構の壁溝の可能性が高い SD3008 とほぼ同じ方向であることから、SD3010 も住居状遺構の壁溝の可能性がある。

SH3006 の床面からは遺物が出土したが、図化できたものは、第 110 図－１に示した１点だけである。住居跡の北東隅の壁際で出土した土師器の長胴甕の破片で、外面には縦方向、内面には横方向の刷毛目が見られる。胴部に比べて頸部～口縁を肥厚させてある。時期は古墳時代後期と思われる。他の出土遺物も合わせて考えると、SH3006 は古墳時代後期と考えられる。

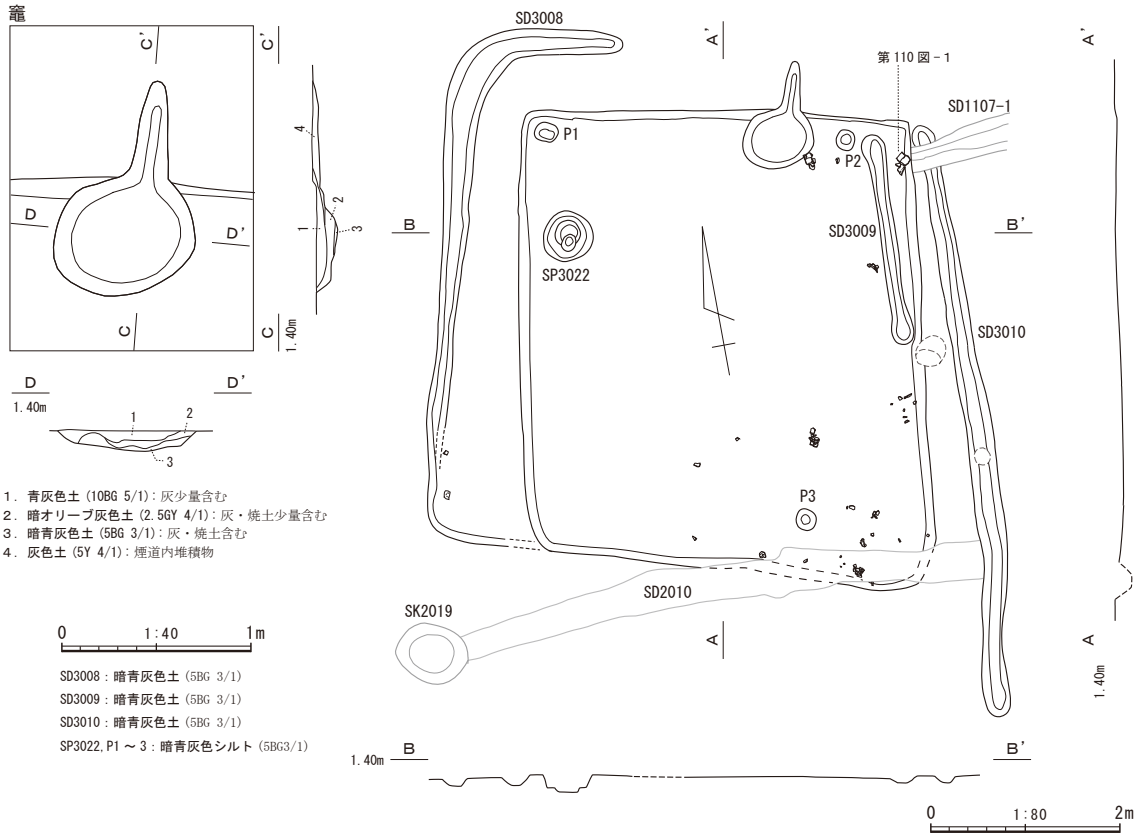
（７）SH3007（第 109 図）

３区の 098 区、P98 区で検出した隅丸方形の住居状遺構である。規模は 3.84 m × 3,84 m、面積 14.75 ㎡である。南西隅を試掘坑で壊されているが、柱穴は４カ所検出した。他に床面で P5 と P6 を検出した。いずれも柱穴の可能性がある。一部に貼り床と思われるオリーブ黒色粘性シルトが見られた（第 109 図 A-A’断面の３層）。柱穴の断面を観察すると、P1 は柱が残った状態で廃棄されたと考えられるのに対して、P2 は、柱が抜かれてから埋土が堆積したと考えられる。

遺物は、須恵器の蓋が出土した（第 110 図－２）。内面を撫でた際に、口縁直下を強く撫でてあるため、口縁直下に屈曲ができ、口縁端部を僅かに折り曲げたようになっている。直径が 10cm 強であることから、７世紀代と考えられる。この出土遺物から SH3007 の時期は７世紀代と考えられる。

（８）SH3008（第 109 図）

４区の R95 区で検出した。半分程度が調査区外に出ているため、規模は不明である。非常に浅い遺構であるが、想定される全体の大きさから、土坑よりも住居状遺構の可能性があると考えた。一部を隣接して検出した SH3009 に切られている。遺物は出土しなかったため、時期の判断は困難である。



第 108 図　住居状遺構 SH3006 実測図

（９）SH3009（第 109 図）

４区の R95 区で検出した。半分程度が調査区外に出ているため、規模は不明である。非常に浅い遺構であるが、内部で壁溝と思われる溝が検出できたことから、住居状遺構の可能性があると考えた。遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難である。

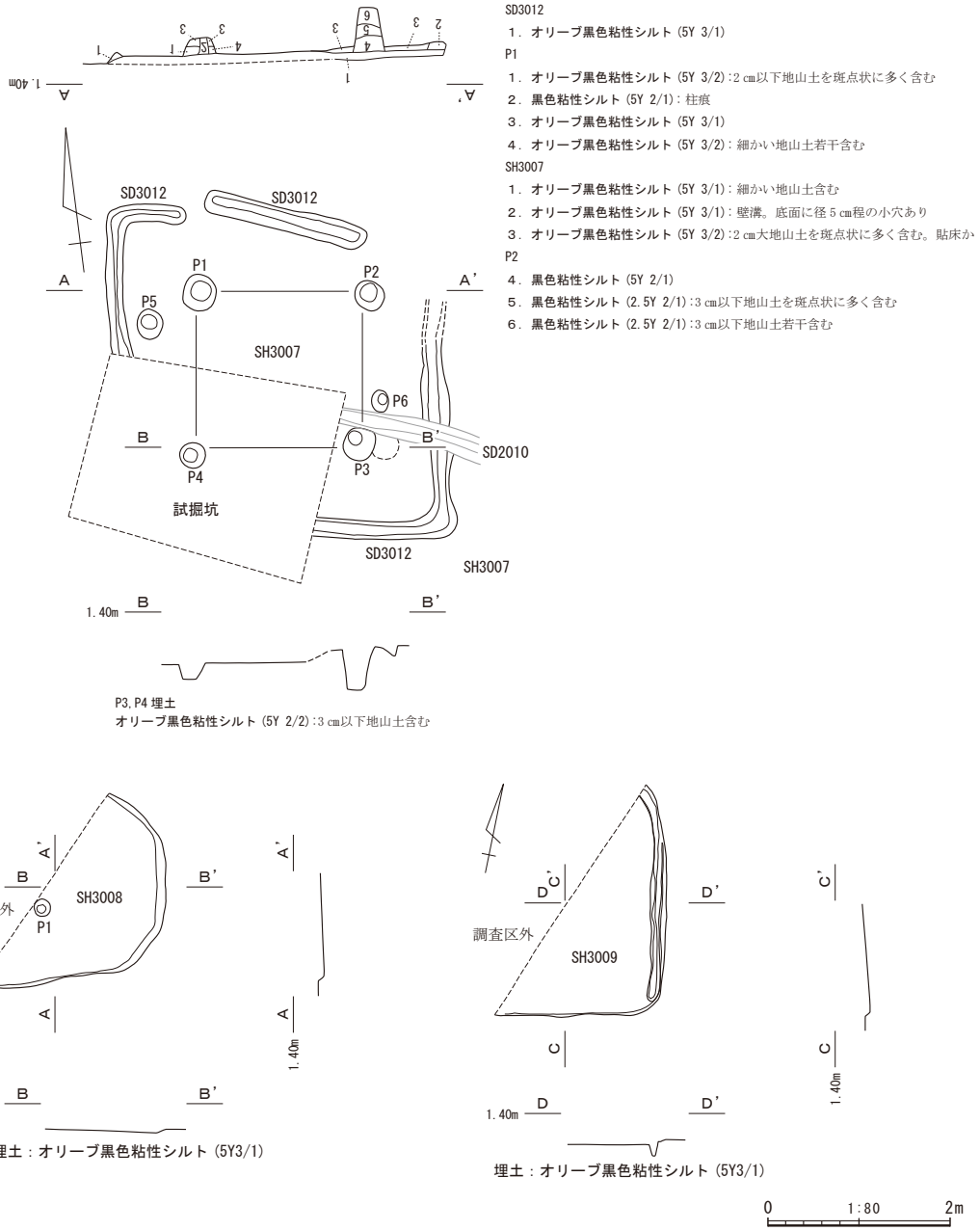
(10) SH3010（第 111 図）

４区の R96 区、R97 区、４区の R96 区で検出した住居状遺構に伴うと思われる方形に巡る溝である。SR1024 に切られている上に、自然消滅している部分があるため、全体を検出できた訳ではない。柱穴の可能性がある遺構は、P1 が検出できただけであった。壁溝と思われる SD3014 から西の方向に溝 SD3015 が延びている。SD3014 との切り合いが確認できなかったため、SD3014 から分岐する溝と考えた。これは SH3010 の排水用の溝の可能性が考えられる。

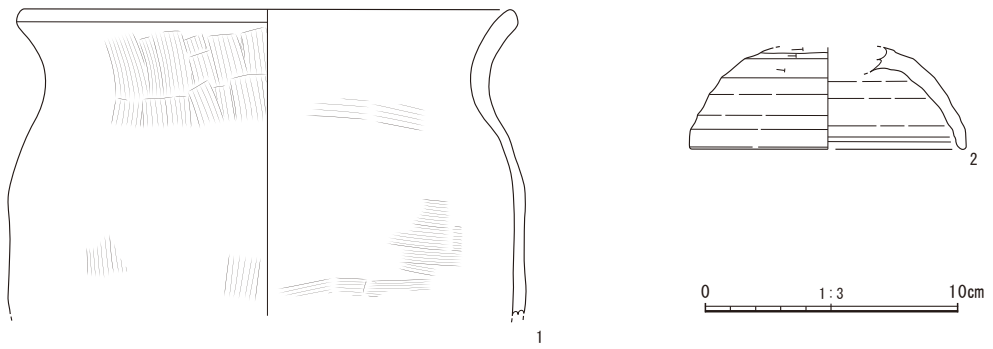
この住居状遺構からは遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難であるが、５世紀前半と考えられる掘立柱建物跡 SB3004 を切っていると考えられることから、５世紀前半以降の可能性が考えられる。今回の調査で検出された古墳時代の遺構の時期を参考にすると、５世紀前半か７世紀代の可能性がある。

(11) SH3011（第 111 図）

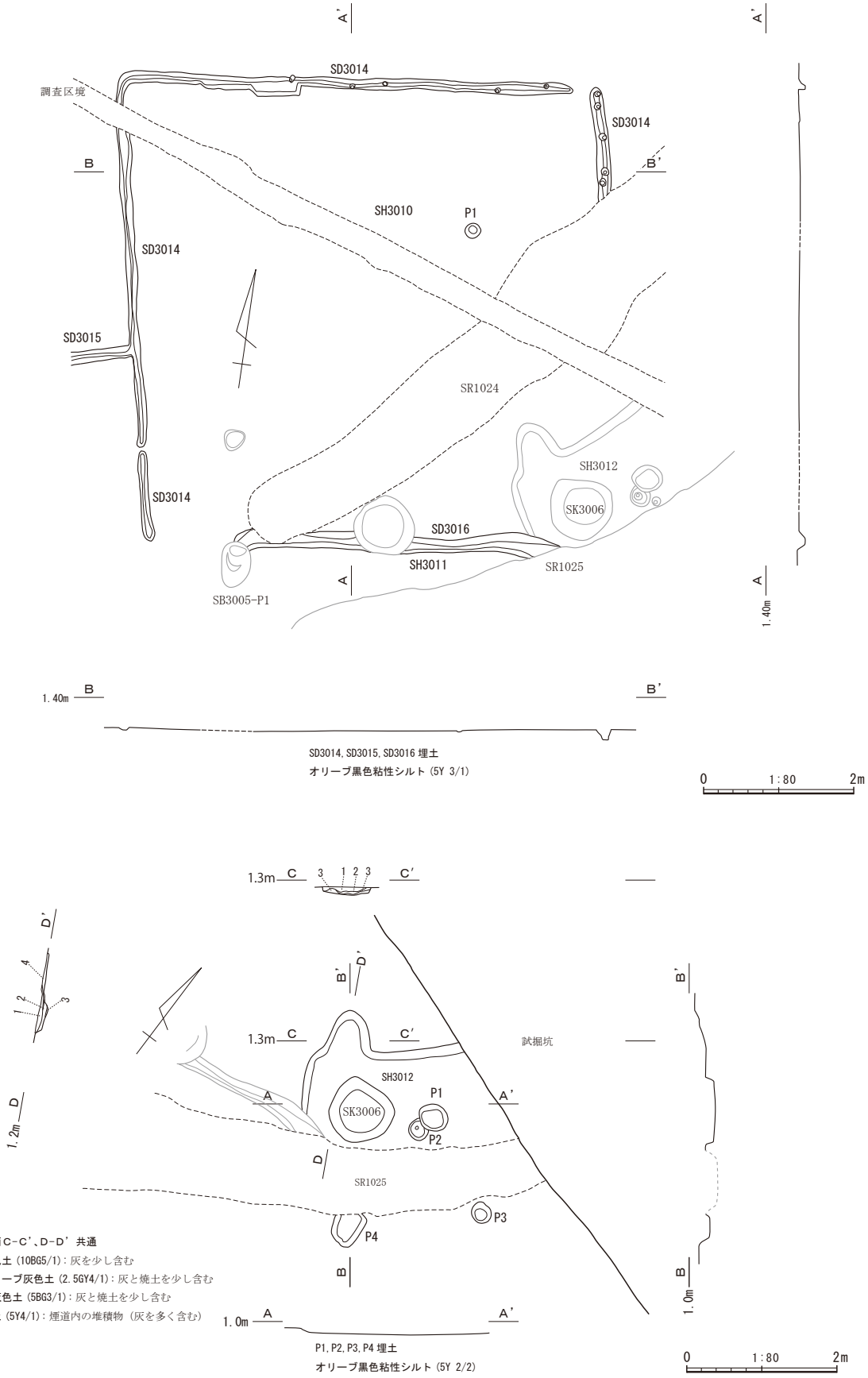
４区の R96 区、R97 区、SH3010 に隣接して検出した。SR1025 に大きく切られているため、壁溝と思われる溝の一部を検出したに過ぎないが、方形に巡る可能性があるため、住居状遺構の壁溝の一部の可能性があると考えた。遺物が出土しなかったため、時期の判断は困難であるが、５世紀前半と考えられる掘立柱建物跡 SB3005 の柱穴 P1 に切られていることから、５世紀前半以前ということになる。積極的な根拠ではないが、周辺で検出された遺構は、５世紀前半であることから、この住居跡の時期も５世紀前半の可能性がある。



第 109 図　住居状遺構 SH3007 ～ 3009 実測図



第 110 図　住居状遺構 SH3006・3007 出土遺物実測図



第 111 図　住居状遺構 SH3010 ～ 3012 実測図

(12) SH3012、SK3006（第 111 図）

４区の R97 区で検出した。 隅丸方形になると思われる住居状遺構である。SR1025 と試掘坑に大きく壊されているため、検出できたのは、全体の 1/4 程度である。柱穴と思われるものは、P1 ～ P4 の４か所が検出できた。掘り込みは非常に浅いことから、上面を削平されていると思われる。

北隅に竈が作られていた。竈内の堆積物には灰と炭化物が多く含まれていた。竈内の３層は竈を構築した粘土と思われ、Ｃ－Ｃ’の断面では、３層が盛り上がっている部分が観察でき、これが竈の壁の痕跡と思われる。煙道は崩れていたが、煙道跡に堆積した４層には、灰が多く含まれていた。

住居跡の床面では土坑 SK3006 を検出した。SH3012 と SK3006 の断面の観察から、両者に切り合い関係がなく、同時に埋没した可能性が高いことから、SK3006 は SH3012 に伴う土坑と判断した。SH3012 からは遺物が出土しなかったが、SK3006 から、図化はできなかったが、古墳時代前期と思われる土師器の甕、高坏の破片が出土した。また、５世紀前半の可能性がある SH3011 の壁溝に切られている。以上のことから、SH3012、SK3006 の時期は古墳時代前期に収まると考えられる。

２　井戸跡

井戸跡は８基検出した。これらのうち７基の井戸跡からは、廃棄の際に入れられた遺物が出土した。時期はいずれも古墳時代前期～中期初頭と考えられ、当時の井戸廃棄に伴う行為を示す資料となる。

（１）SE3001（第 112 図）

２区の J2 区で検出した。２区で検出した古墳時代の遺構は、他には SK3001 と SK3002 がある程度で、非常に少ない。平面形の大きさは 1.40 ｍ× 1.28 ｍ、深さは 1.28 ｍである。平面形は不整形で底は平面に近い。掘り方は逆台形になっている。壁面は硬く締まった地層になっており、湧水は期待できないが、水は溜まりやすいと思われる。埋土はオリーブ黒色系のシルトを基調としており、底に近い部分にだけ灰色粘性シルトが見られる。埋土は、比較的細かく 17 層に分層できたことから、時間をかけてゆっくり埋没したと考えられる。堆積は自然堆積である。

遺物は、底から土師器の壺の破片が出土した（第 114 図 - １）。胴部の破片で、外面を丁寧に磨いて仕上げてあり、内面も丁寧に撫でてある。時期の判定は困難であるが、古墳時代に入ると思われる。他に破片が見つからなかったことから、井戸を廃棄する際に破片の状態で沈められたと考えられる。

（２）SE3002（第 112 図）

３区の P99 区で検出した井戸跡である。平面形の大きさは 1.20 ｍ× 1.16 ｍで正円に近い。深さは 0.84 ｍである。周囲に遺構が少ない場所に掘られている。掘削途中で、掘削角度が急になっているため、段掘りのようになっている。埋土は黒色粘性シルトが基調になっている。埋土の色調が似ているため、包含物の違いで分層した。埋土は自然堆積である。出土遺物は次のとおりである（第 114 図 - ２、３）。

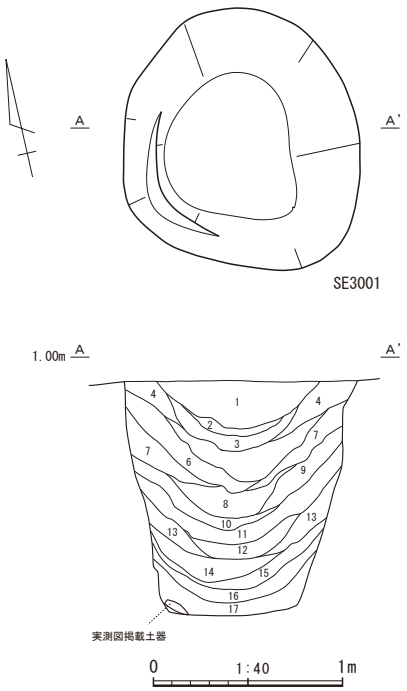
２は土師器の高坏の脚部で、裾の形態は不明であるが、裾に向かって脚部が開いていることは確かである。古墳時代前期～中期初頭に入ると思われる。３も土師器の高坏の脚部で、脚部から屈曲して裾が開いていることから、古墳時代前期～中期初頭と思われる。

これら以外に土器の破片が出土したが、土器の個体数は不明であった。

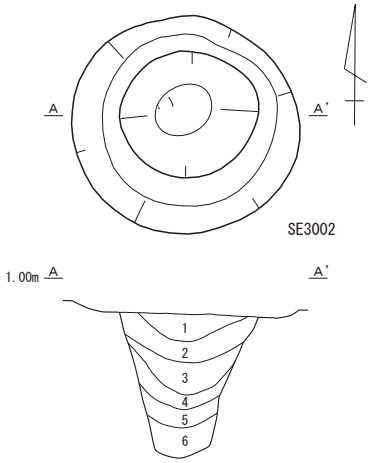
（３）SE3003（第 112 図）

４区の T97 区、奈良時代に掘削されたと考えられる SD2019 の下で検出した。平面形は円形に近く、規模は 1.56 ｍ× 1.36 ｍ、深さは 1.56 ｍである。近隣には同時期（古墳時代前期～中期初頭）の井戸 SE3005 と祭祀跡 SX3001 がある。井戸の底は締まった粘土層で止まっているため、、湧水は期待できないが、壁面は硬く締まった粘土で構成されていることから、水は溜まりやすかったと思われる。

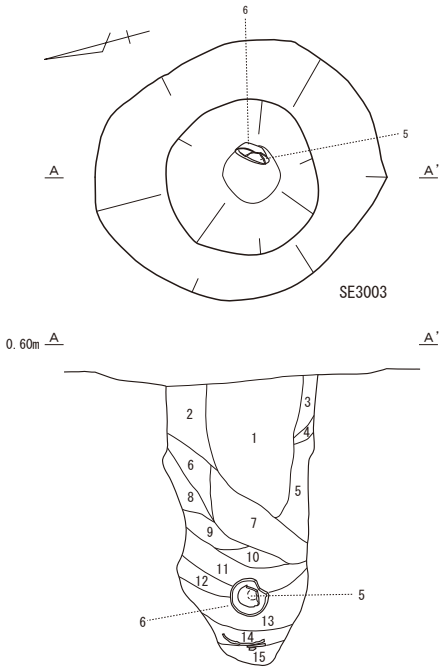
井戸の底に 15 層（緑灰色粘土）が堆積したところで、この井戸を廃棄したようで、15 層の上で、甕



１．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：土器片を若干含む
２．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/2）：3 ㎝大の地山土を含む
３．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：炭化物を多く含む
４．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/2）：細かい地山土を含む
５．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：3 ㎝以下の地山土をやや多く含む
６．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：3 ㎝以下の地山土を多く含む
７．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/2）：炭化物をやや多く含む
８．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/2）：炭化物・3 ㎝以下の地山土をやや多く含む
９．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/2）：5 ㎝以下の地山土を多く含む
10．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 2/2）：3 ㎝以下の地山土をやや多く含む
11．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：3 ㎝以下の黒色土・地山土をやや多く含む
12．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：3 ㎝以下の地山土をやや多く含む
13．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：細かい黒色土をやや多く含む
14．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：細かい黒色土を含む
15．灰色粘性シルト（5Y 4/1）：炭化物を若干含む
16．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：炭化物を多く含む
17．灰色粘性シルト（5Y 4/1）：土器片を含む



１．黒色粘性シルト（10YR 1.7/1）：焼土粒・炭化物粒を若干含む
２．黒色粘性シルト（2.5Y 2/1）：土器片を若干含む
３．黒色粘性シルト（2.5Y 2/1）
４．黒色粘性シルト（2.5Y 2/1）：径 2 ㎝以下の地山土を斑点状に多く含む
５．黒色粘性シルト（2.5Y 2/1）：径 2 ㎝以下の地山土を斑点状にやや多く含む
６．黒色粘性シルト（2.5Y 2/1）：径 1 ㎝以下の地山土をやや多く含む

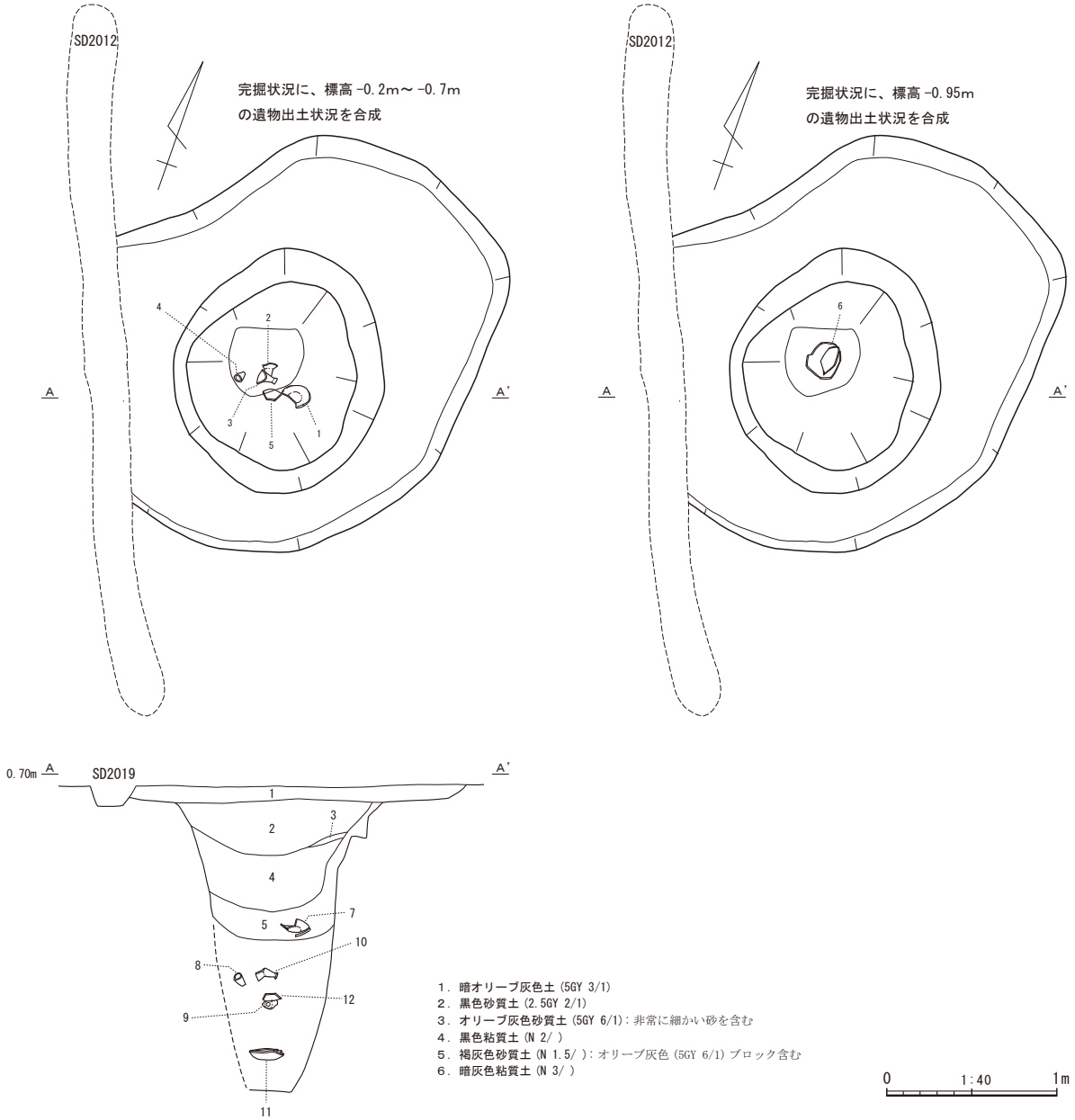


１．黒色粘土（N 1.5/ ）：灰色ブロックをやや含む
２．黒色シルト質粘土（N 2/ ）
３．黒色シルト質粘土（N 2/ ）
４．暗オリーブ粘土（2.5GY 4/1）
５．黒色シルト質粘土（N 2/ ）：下部に炭化物粒をやや含む
６．暗灰色粘土（N 3/ ）：灰色ブロックを含む
７．暗灰色粘土（N 3/ ）：炭化物を含む
８．灰色粘土（N 4/ ）
９．灰色粘土（N 4/ ）：炭化物を微量に含む
10．暗灰色粘土（N 3/ ）：炭化物を含む
11．灰色粘土（N 4/ ）：径 1 ㎜程度の灰色ブロックを多く含む
12．灰色粘土（N 4/ ）
13．緑灰色粘土（7.5GY 5/1）：径 5 ㎜の灰色ブロックを多く含む
14．オリーブ黒色粘土（5GY 6/1）：灰色ブロック、土器を含む
15．緑灰色粘土（10GY 6/1）

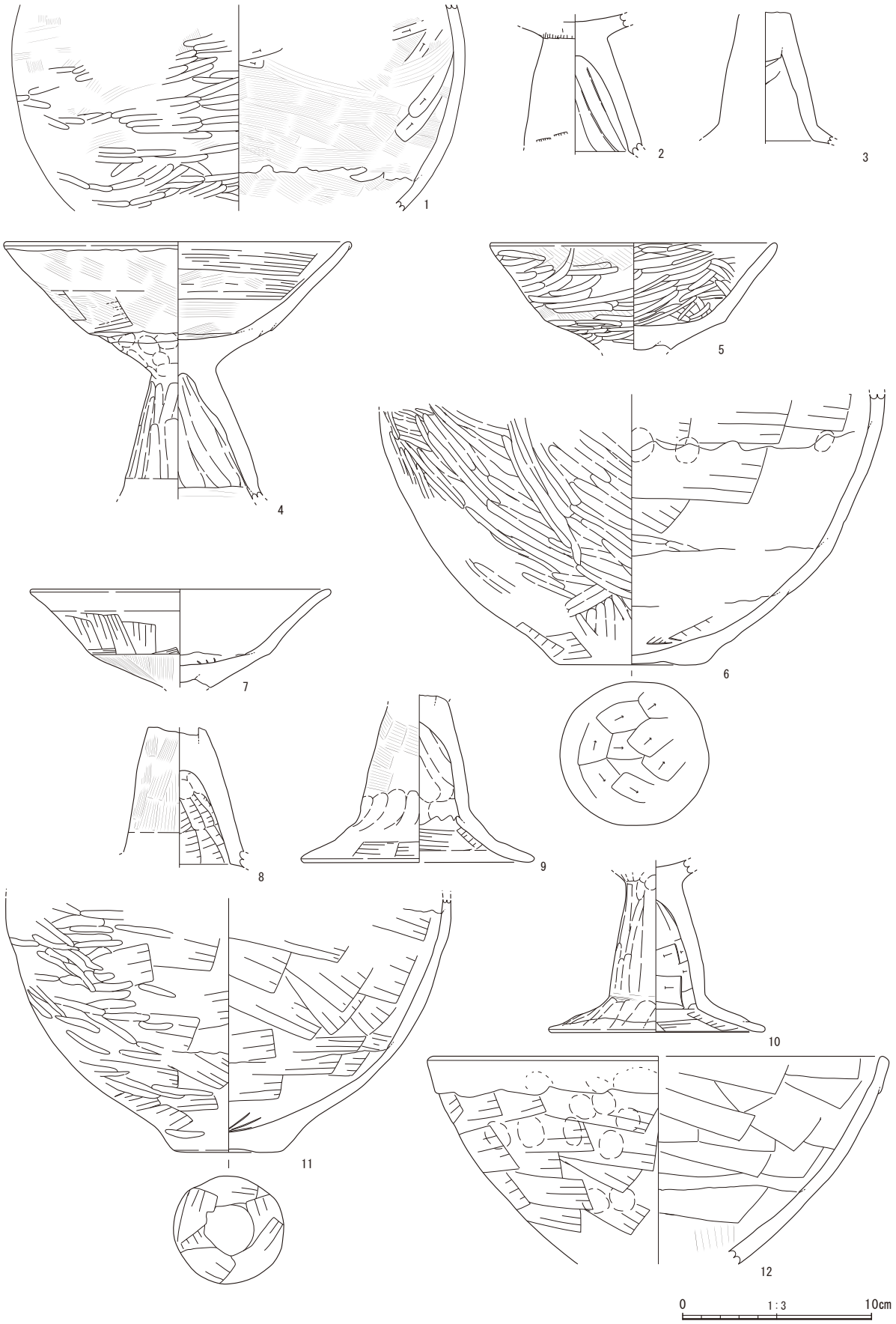
第 112 図　井戸跡 SE3001 ～ 3003 実測図

か壺の破片が３枚重なった状態で出土した。これらの破片は、図化が可能な程度まで接合しなかったことから、破片の状態で置いた、もしくは沈めたと考えられる。その後 14 層が堆積した後、灰色粘土のブロックを多く含んだ特徴的な 13 層が堆積する途中で、壺の底部～胴部の破片（第 114 図－６）に、高坏の坏の部分（第 114 図－５）が重なった状態で出土した。２つの土器は密着した状態で重なっていたことから、２つの土器を意図的に重ねて井戸に入れた可能性が高い。

２つの土器片を重ねて入れた後、12 層と 11 層が堆積。両層とも灰色粘土と黒色粘土の微細なブロックが細かい層をなして堆積していることから、時間をかけてゆっくり堆積したことがうかがえる。その後に堆積した 10 層～２層も締まった粘土であることから、時間をかけて堆積したと考えられる。１層の堆積状況を見ると、当初、井戸枠を入れてあり、その中に１層が堆積したように見えるが、井戸枠を入れた痕跡は認められないことから、この井戸が埋まった後、再度掘り返し、その中に１層が堆積した可能性がある。この井戸跡から出土した遺物は次のとおりである（第 114 図）。



第 113 図　井戸跡 SE3004 実測図



第 114 図　井戸跡 SE3001 ～ 3004 出土遺物実測図

４は土師器の高坏で、脚部は直線的に広がっている。外面は縦方向に撫でてあるが、裾に近い部分には、横方向の撫でが見られる。脚部内面は、縦方向に撫でてある。坏部は、内外面とも斜め方向の刷毛目調整の後、横方向に撫でてあるが、刷毛目が残っている。口縁部は、僅かに折り返してある。脚部の裾の欠損部分が、外側に向いていることから、裾部が広がっていたと考えらえる。この形態から、古墳時代前期～中期初頭と考えられる。

５は高坏のミニチュア土器である。ミニチュアであるが、作りは丁寧で、体部の途中で屈曲して口縁が立ち上がる形態が表現されている。内外面には細かい磨きが見られる。

６は甕か壺の底部～胴部の破片である。外面は刷毛目調整の後、ヘラ状工具により、丁寧に撫でてある。光沢が生じる程の調整ではないが、磨きに近い。このような調整から、壺の破片の可能性が高い。底部には、不定方向の撫でが見られる。内面は、指頭圧痕を消すように横方向に撫でているが、粘土のつなぎ目、指頭圧痕とも残っている。古墳時代前期～中期初頭と思われる。

これら以外にも土器の破片が出土したが、土器の個体数は不明であった。

（４）SE3004（第 113 図）

４区の 095 区で検出した。平面形は不整形で、一部を SD2012 に切られている。平面形の大きさは、2.48 m× 2.32 m、深さは 1.84 mである。ただし、2.48 m× 2.32 mの大きさで、深さ 0.1 m程度の穴を掘り、その中に 1.84 m× 1.24 mの穴を掘って井戸としているため、実質、この井戸の大きさは 1.84 m× 1.24 m、深さは 1.74 mと言っても良い。近隣に同時期（古墳時代前期～中期初頭）の祭祀跡 SX3001 がある。

埋土は、底から 0.88 mの厚さで６層の暗灰色粘質土が堆積している。６層は締まりのある粘質土であることから、時間をかけて堆積したと考えられる。この６層が堆積する過程で壺や高坏が破損した状態で入れらていた。出土位置に上下差があることから、一度に入れたのではなく、６層が堆積する過程で、複数回に渡って入れられたことになる。６層が時間をかけて堆積したことを考えると、時間的間隔を置いて土器を入れたことになる。出土した土器は次のとおりである（第 114 図）。

７は土師器の高坏で、坏外面の下半は目の細かい刷毛目が入り、坏外面の上半は、縦方向に撫でてある。口縁直下は横方向に撫でている。坏内面は横方向に撫でて仕上げてある。坏の上半と下半の境界で屈曲して口縁が広がっている。坏の形態から、時期は古墳時代前期～中期初頭と考えられる。

８は土師器の高坏の脚部で、脚部裾部の外面は、工具を使用して横方向に撫でてある。脚部屈曲部の外面は、指で縦方向に撫でてある。脚部上部外面には、不明瞭ながら、斜め方向の刷毛目が残っている。内面には、指で撫でた痕があり、裾部内面には、横方向に撫でた痕跡が残っている。脚部の裾が急激に広がっていることから、古墳時代前期～中期初頭と思われる。

９も土師器の高坏の脚部で、脚部裾部の外面は、縦方向に撫でてある。脚部屈曲部の外面には、僅かに横方向の刷毛目が観察できる。脚部上半外面には、縦方向に撫でてある。内面上部は削った痕跡があり、裾部内面には、横方向に撫でて仕上げてある。脚部の裾が急激に広がっていることから、古墳時代前期～中期初頭と思われる。

10 は土師器の高坏の脚部で、外面には縦方向の刷毛目調整、内面には横方向の刷毛目調整が見られる。外面と内面で刷毛目の間隔が異なることから違う原体を使っていることがわかる。脚部の端部に、裾部がはがれた跡があり、裾部が屈曲して外反していたことが分かる。このことから、古墳時代前期～中期初頭と考えられる、

11 は土師器の壺か甕の底部～胴部の破片で、外面は部分的に撫でた後、磨いて仕上げてあるが、磨きも局所的で、全面には及んでいない上に、磨きの間隔も広い。内面は、底に近い部分は横方向、胴部は斜め上に撫で上げるようにして仕上げてある。磨きが見られることから、甕よりも壺の可能性の方が高いと思われる。時期は古墳時代と考えて良いであろう。

12 は土師器の鉢の口縁～体部の破片で、口縁部を外側に折り返す特徴がある。折り返した部分の撫では雑である。古墳時代と考えて良いであろう。

これらの土器が井戸に入れらた順は次のとおりである。６層の堆積中に壺の底部～胴部の破片（11）が入れられた。その後、６層の堆積が進んだところで、高坏の脚部（９）と鉢の破片（12）が、同時に入れられた。さらに６層の堆積が進んだところで、高坏に脚部が２点（８、10）が同時、もしくは近接した間隔を置いて入れられた。６層の堆積が終わり、５層の堆積途中で高坏の坏（７）が入れられた。

このように、間隔を置いて高坏などの破片が入れられたと考えられる。

（５）SE3005（第 115 図）

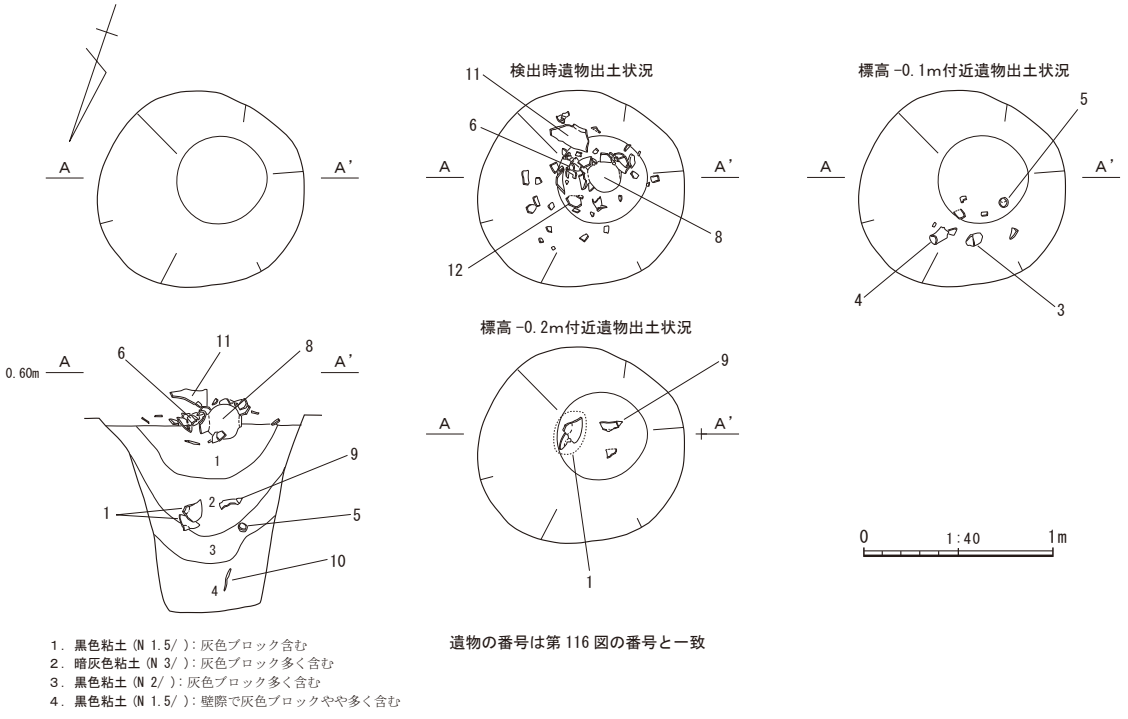
４区の T98 区で検出した。周囲に遺構が少ない場所で検出された。近い遺構としては、10 m程離れた場所に同時期（古墳時代前期～中期初頭）の井戸跡 SE3003 がある。平面形はほぼ円形で大きさは、1.12 m× 1.04 m、深さは 1.04 mである。最初に検出したのは、井戸跡の輪郭ではなく、井戸跡上面に露出した遺物の集中であった。古墳時代の遺物集中箇所を発見したため、周囲を精査したところ、井戸跡の輪郭が検出できた。埋土は黒色粘土を基調としている。各層とも灰色粘土の細かいブロックを含んでおり、細かい層状に堆積している状況から、時間をかけて自然堆積したと考えられる。

この井戸跡からは多くの遺物が出土した（第 116 図）。

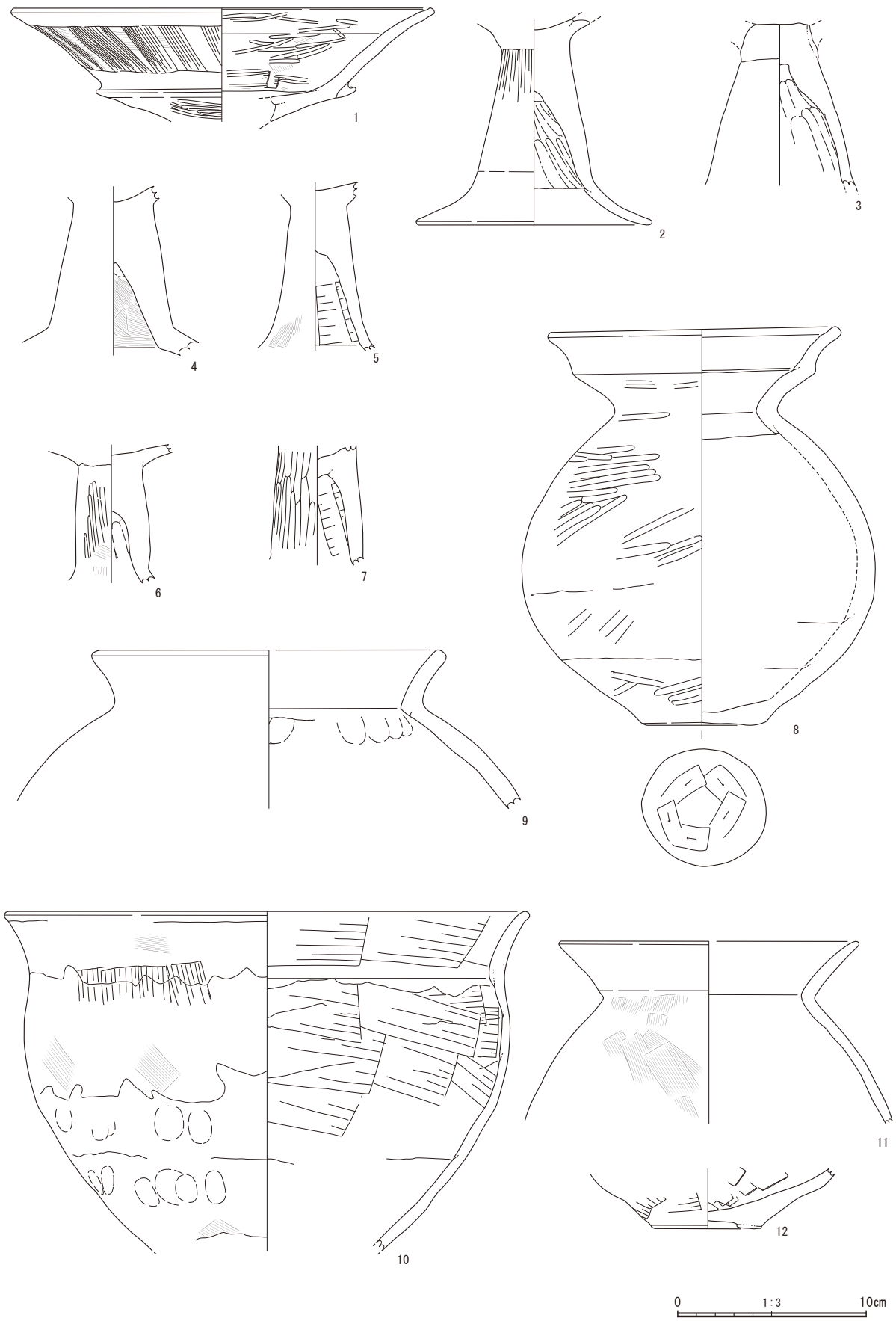
１は、土師器の高坏の坏の部分で、脚部以下は残っていない。坏は、下半と上半の粘土つなぎ目部分に貼り付けた粘土が明瞭に残っている。坏外面下半は磨いて仕上げてある。坏外面上半は、横方向の刷毛目調整の後、縦方向に撫でて仕上げてあるが、撫でた際の工具が当たらなかった部分に横方向の刷毛目が残っている。坏内面は、横方向に磨いて仕上げてある。坏の形態から、時期は古墳時代前期～中期初頭と考えらえる。

２～７は、土師器の高坏の脚部で、いずれも裾部が屈曲して広がる特徴から、古墳時代前期～中期初頭に位置付けられる

２は外面に縦方向の刷毛目、内面には縦方向の撫でが見られる。３は風化が進んでいるが、内面に撫



第 115 図　井戸跡 SE3005 実測図



第 116 図　井戸跡 SE3005 出土遺物実測図

で調整が見られる。裾部が残っていないが、脚部の裾に近い部分が外側に広がっていることから、裾部は広がっていたと考えられる。４は全体的に分厚い。内面に細かい刷毛目調整が見られる。５は風化が進んでいるが、外面に縦方向の刷毛目調整、内面に横方向の調整痕が見られる。６は外面に、縦方向の磨きに近い撫でが見られる。７は外面に、縦方向の磨きに近い撫で調整が見られる。内面には横方向の調整痕が見られる。裾部は欠損しているが、欠損部位から、裾部が広がっていたことがわかる。

８は土師器の壺で、胴部は丸く、頸部ははっきりと屈曲させてある。口縁は二重口縁になっている。口縁端部は面取りをしてある。風化が進んでいるため、調整痕は観察しにくいが、胴部外面は、磨いて仕上げてある。底部は時計回りに撫でてある。古墳時代前期に位置付けられる。

９は土師器の甕で、胴部から屈曲して口縁が立ち上がっている。時期の判断は困難であるが、古墳時代前期と思われる。

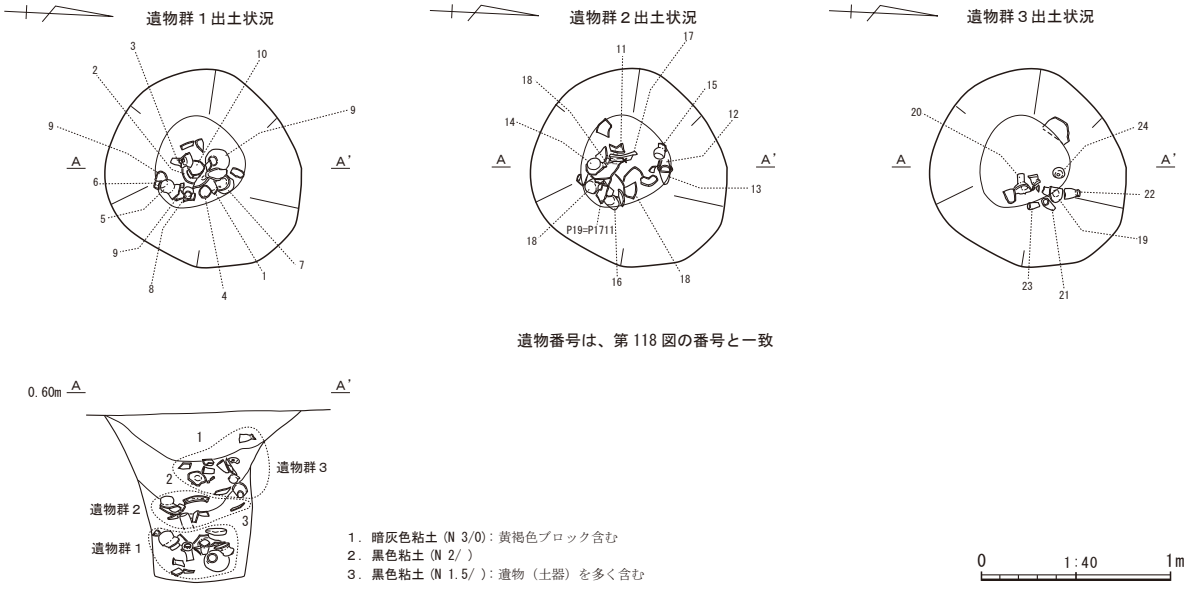
10 も土師器の甕で､胴部外面下半は､指頭圧痕が残っている。底に近い部分に僅かに刷毛目調整が残っている部分がある。胴部外面上半には斜め方向の刷毛目が僅かに残っている。胴部と頸部の境界の屈曲部分は縦方向に撫でて仕上げてある。頸部の立ち上がり部分には、僅かに斜め方向の刷毛目が残っている。胴部内面は斜め方向に撫で上げてあり、頸部内面は横方向に撫でて仕上げてある。時期は古墳時代前期と思われる。

11 は土師器の甕で、胴部から屈曲して口縁が直線的に開いている。大きさの割に薄く作ってある。古墳時代前期と思われる。

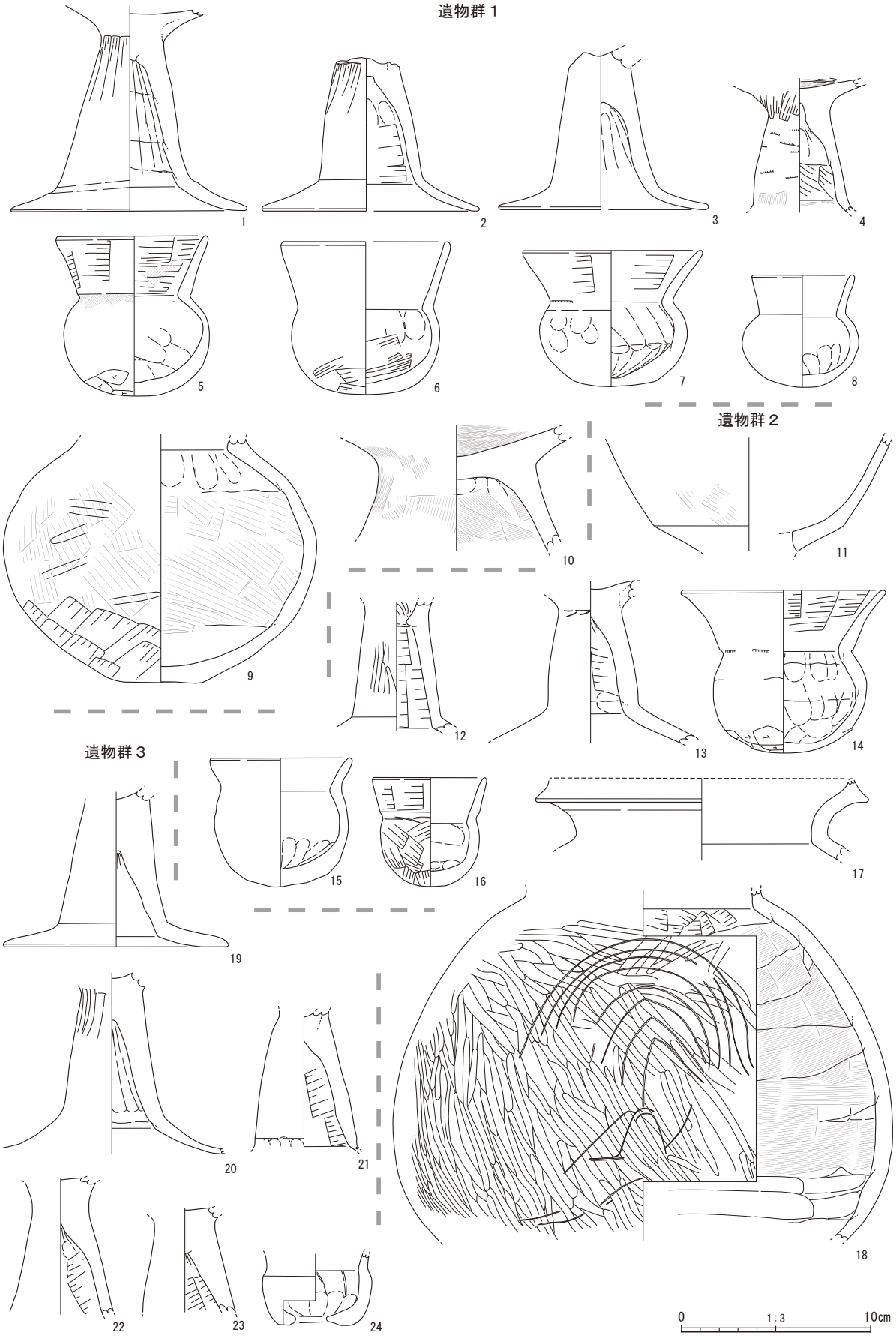
12 は土師器の甕の底部で甕の底部で、底部外面を調整する際、甕を逆さにして、底面に向かって調整し､底面に集まってきた粘土をそのままにして甕を立てたため､底面に集まった粘土が潰れた状態で､底面に残っている。底部の破片だけで時期を決めることは困難だが、共伴した土器から、古墳時代前期～中期初頭と思われる。

井戸の埋没過程を復元すると次のようになる。井戸廃棄後、４層が堆積する途中で、10 の甕の破片が入れられた。３層が堆積する途中で５の高坏の脚部が入れられた。その後、２層の堆積中に１の高坏の坏の部分と９の甕の破片が同時、もしくはあまり間隔を置かずに入れられた。井戸がほぼ埋没した段階で、６、８、11 などの土器が一括で廃棄された。

この井戸に廃棄された土器の最少個体数は次のとおりである。



第 117 図　井戸跡 SE3006 実測図



第 118 図　井戸跡 SE3006 出土遺物実測図

土師器の高坏６個体（坏の破片１点と脚部片６点があるが、坏と脚部のいずれかが同一個体の可能性あり）、土師器の壺２個体（完形１、底部１）、土師器の甕３個体（胴部片３点の他に台部片が１点あるが、胴部片３点のいずれかと台部片１が同一個体の可能性あり）

（６）SE3006（第 117 図）

４区の V94 区で検出した。周囲に遺構が少ない場所に掘られていた。平面形はほぼ円形で、規模は 1.08 m× 1.04 m、深さ 0.92 mである。埋土は自然堆積で、黒色粘土と暗灰色粘土からなる。

この井戸からは多くの遺物が出土した。遺物は、出土レベルによって３群に分けられる。井戸廃棄後、３層が堆積している途中で、最初の土器が廃棄された（遺物群１、第 117 図）。遺物群１の最少個体数は次のとおりである。

土師器の高坏の脚部４点、土師器の小型丸底壺４点、土師器の壺１点、土師器の台付甕１点

次に３層の堆積が終わり、２層が堆積し始めるあたりで次の土器が廃棄された（遺物群２、第 117 図）。遺物群２の最小個体数は次のとおりである。

土師器の高坏３点（坏の部分１点と脚部が２点あるが、坏と脚部２点は色調が異なり、別個体の可能性が高い）、土師器の小型丸底壺３点、土師器の壺２点（口縁部の破片１点と胴部の破片１点があるが、別個体）

最後、２層の堆積中と直後の１層堆積初期に段階で３回目の遺物廃棄があった（遺物群３、第 117 図）。遺物群３の最少個体数は次のとおりである。

土師器の高坏の脚部５点、ミニチュア土器１点

以上は、底部や高坏の脚部など、１個体に１点しかない部位をもとに数えた個体数であるが、個体数を数えられない土器片も多く、実際にはもっと多くの遺物が廃棄されたことは間違いない。

ア　遺物群１の土器（第 118 図－１～ 10）

１～４は、土師器の高坏の脚部で、裾部が屈曲してい広がる特徴があることから、古墳時代前期～中期初頭に位置付けられる。坏の部分と思われる土器片も出土したが、脚部の点数に見合った数ではないことから、いずれの高坏も坏を大きく欠損した状態で、脚部が廃棄された可能性が高い。

高坏に対して、小型丸底壺（５～８）は、完形、もしくは完形に近い状態で廃棄されたと考えられる。５は、小さいながらも丁寧な造りになっており、底部付近は細かい刷毛による調整で仕上げてある。胴部外面の調整は、風化のため不明瞭であるが、胴部内面は、指によって丁寧に撫でて仕上げてある。頸部は直線的に立ち上がり、外面は横方向に撫でてあり、内面は刷毛による調整の後、一部を撫でて仕上げてある。８はかなり小さく、ミニチュア土器に近い。

壺（９）は、胴部外面下半は、底から時計回りのに螺旋状に撫でて仕上げてある。胴部外面上半は、刷毛調整であるが、刷毛調整の後に部分的に磨いて仕上げてあるかもしれないが、風化により、不明瞭である。内面は刷毛目調整で、頸部直下は刷毛目調整の工具が当たらず、指頭圧痕が残っている。古墳時代中期と思われる。この壺は、頸部～口縁を欠損しており、ここに接合する破片が出土しなかったことから、頸部～口縁を欠いた状態で廃棄された可能性が高い。

台付甕（10）は底部～脚部の破片で、脚部は大きく分厚い。外面には刷毛目が見られる。底部内面には不定方向の刷毛目が付いている。脚部内面には反時計回りの刷毛目が見られる。これも台の部分しか見つからなかったことから、台の部分だけが廃棄された可能性が高い。

イ　遺物群２の土器（第 118 図 -11 ～ 18）

11 ～ 13 は土師器の高坏である。11 は、底部と体部の境界に屈曲がある。風化のため、調整痕は観察できない。坏の形態から古墳時代前期～中期に入ると思われる。12 と 13 は高坏の脚部で、裾部が屈曲して外反する特徴から、古墳時代前期～中期初頭と考えられる。11 の坏は浅黄橙色であるのに対して、

12 と 13 はにぶい橙色であることから、坏と脚部は別個体の可能性が高い。したがって、これらの高坏は、いずれも破片の状態で廃棄されたと考えられる。

14 ～ 16 は小型丸底壺で、いずれも古墳時代中期と思われる。

14 は小型丸底壺で、底部付近はヘラ削りによって仕上げていると思われるが、砂粒の流れが見えないため、撫でに近い。、胴部外面は、風化が進んでいるが、撫でて仕上げていると思われる。胴部内面は、撫で上げて仕上げてあるが、粘土のつなぎ目が残っている。頸部は僅かに外反しながら立ち上っており、内外面とも横方向に撫でて仕上げてある。

15 は胴部～頸部にかけて連続して成形している。外面は風化のため、調整痕がはっきりしないが、表面に残る凹凸から、指押さえによって仕上げていると思われる。内面は、底部付近に撫で上げた跡が僅かに残っている。

16 は胴部外面を工具により撫でてあり、頸部との境界の屈曲部に工具の端部の痕跡が残っている。胴部内面は横方向に指で撫でた跡が残っている。頸部は内外面とも横方向に撫でて仕上げてある。

17 は壺の頸部～口縁の破片で、二重口縁になっており、付け足した口縁をつまみだすようにして外反させている。風化のため、調整痕の観察はできない。これも古墳時代前期～中期初頭に入ると思われる。

18 は、壺の胴部～頸部の破片で、屈曲して立ち上がる頸部が剥落した跡が残っている。外面は丁寧にヘラミガキをして、表面を平滑にした後、細い工具で線刻を入れてある。線刻は、同心円の半円を描くような曲線を８本入れ、その下にも線刻を入れている。線刻は抽象化が進んでおり、何を表現したのかは不明である。内面は、底部に近い部分は横方向に撫でてあり、胴部は横方向の刷毛目が付いている。頸部直下は工具を使って撫でてある。内面には粘土の接合痕が顕著に残っている。当初、弥生土器の可能性を考えたが、線刻の抽象化が進んでいることから、古墳時代前期と考えた方が妥当と思われる。

ウ　遺物群３の土器（第 118 図 -19 ～ 24）

この井戸に最後に廃棄された土器で、19 ～ 23 は高坏の脚部である。19 ～ 21 は、裾部が屈曲して広がっている。22 は裾部が残っていないが、裾部につながる部分が外側に広がっていることから、これも裾部が広がるタイプと考えられる。23 は裾部が欠損しているが、脚部が裾部に向かって急激に薄くなっているのは、裾部が広がるタイプによく見られることで、これも裾部が広がっていたと思われる。以上から 19 ～ 23 は古墳時代前期～中期初頭と考えられる。

坏の破片と思われる土器片はあるが、これらの脚に接合するものはなかったことから、坏の部分を欠損した状態で廃棄されたと考えられる。

24 は坩（小型広口壺）のミニチュアである。表面の剥落が著しいため、調整は不明瞭だが、表裏とも撫でていると思われる。底部の穿孔は、生乾きの時に外側からあけている。

（７）SE3007（第 119 図）

４区の V95 区で検出した円形の井戸である。規模は 1.04 m × 1.00 m、深さは 1.04 mである。近接して次の報告する SE3008 がある。平面の大きさは 1.04 m × 1.00 m、深さは 1.04 mであるが、1.04 m × 1.00 mの大きさで 0.20 m程掘り、次に 0.72 m × 0.64 mの大きさの穴を掘って SE3007 にしているため、実質的なこの井戸の大きさは 0.72 m × 0.64 mと言っても良い。

埋土は黒色系の粘質土と暗青灰色粘質土を基調とした自然堆積である。井戸廃棄後、４層が堆積したところで、土器を一括で廃棄している。廃棄された土器は次のとおりである（第 120 図）。

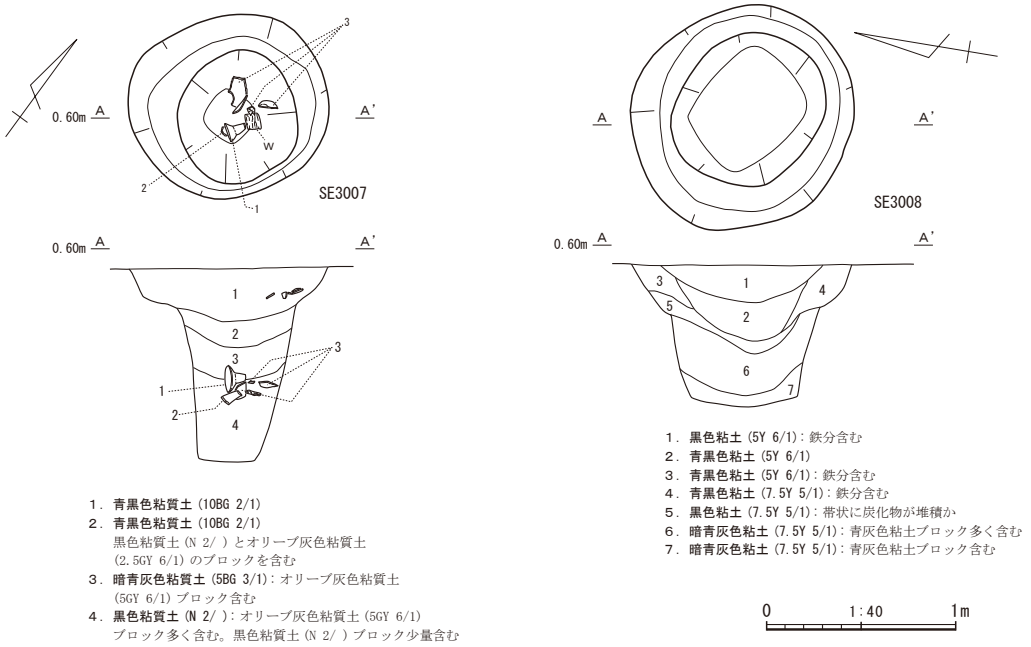
１は土師器の高坏で、脚部外面には下から上に向かう撫でが見られ、裾部では、上から下に向かう撫でが見られる。内面には指による圧痕が残っている。脚部から屈曲して裾が広がっていることから、古墳時代前期～中期初頭に位置付けられる。

２も土師器の高坏で、脚部外面には上から下に向かう撫でが見られる。裾部が屈曲する部分には撫で

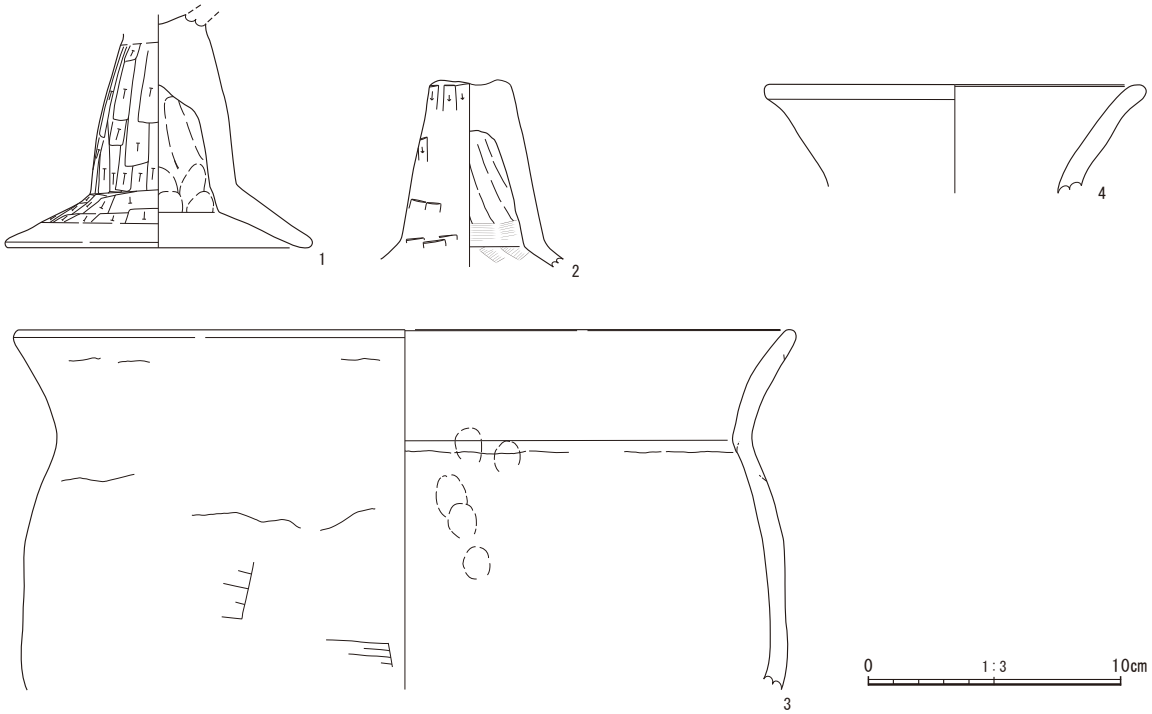
調整で使用した原体が当たった痕跡が見られる。内側には横方向の撫でが見られる。これも脚部から裾部が屈曲してい広がっていることから、古墳時代前期～中期初頭と考えられる。

３は土師器の甕で、復元口径が 30cm を超える。風化が著しく、調整痕は明瞭でない。これだけで時期を判断するのは困難だが、古墳時代に入ると思われる。

いずれも破片の状態で廃棄されていた。高坏は、坏の部分がなく、脚部だけが廃棄され、甕は胴部～口縁の破片が廃棄されていた。



第 119 図　井戸跡 SE3007・3008 実測図



第 120 図　井戸跡 SE3007・3008 出土遺物実測図

（８）SE3008（第 119 図）

４区の V95 区で検出した円形の井戸である。近隣に SE3007 がある。平面の大きさは 1.20 ｍ× 1.16 ｍ、深さは 0.80 ｍで、今回検出した井戸の中では比較的浅い井戸である。途中で段掘りになっている。埋土は青黒色粘土と暗青灰色粘土を基調としており、自然堆積である。遺物は１点だけ出土した（第 120 図 - ４）。土師器の壺の口縁の破片で、口縁端部を外反させ、端部内側を面取りする特徴がある。この遺物だけで時期を判断することは難しいが、古墳時代のものと思われる。

３　土坑

井戸や柱穴といった機能を推定できなかった掘り込みを土坑として報告する。

（１）SK3001（第 121 図）

２区の J1 区で検出した。平面形は円形に近く、規模は 1.40 ｍ× 1.36 ｍ、深さ 0.16 ｍである。埋土はオリーブ黒色粘性シルトの単一層である。非常に浅い土坑であるが、次の遺物が出土した（第 122 図）。

１は土師器の高坏で、内面に僅かに撫での痕跡が見られる以外は、風化のため、調整痕は観察できない。脚部から裾部が屈曲して広がっていることから、古墳時代前期～中期初頭と考えられる。

２も土師器の高坏で、内面に僅かに撫での痕跡が見られる以外は、風化のため、調整痕は観察できない。炭が付着していることから、羽口に転用された可能性がある。これも裾部が広がる形態から、古墳前期～中期初頭に位置付けられる。

３はＳ字甕の口縁部の破片で、風化が著しく調整痕などの観察は不可能である。古墳時代前期に位置付けられる。４は土師器の小型甕の胴部～口縁の破片。胴部に比べて、頸部～口縁がやや厚く作られている。古墳時代に入ることは確実と思われる。

以上の出土遺物から、この土坑の時期は古墳時代前期～中期初頭と考えられる。

（２）SK3002（第 121 図）

２区の J1 区で検出した。平面形は不整形で、大きさは 1.36 ｍ× 1.94 ｍ、深さは 0.16 ｍである。埋土はオリーブ黒色粘性シルトの単一層で、埋土から須恵器の坏（第 122 図 -5）が出土した。底部に２本線からなるヘラ記号が見られる。時期の判断が難しいが、７世紀代に入ると思われる。

（３）SK3003（第 121 図）

３区の 096 区、P96 区で検出した長楕円形の土坑である。規模は 7.76 ｍ× 3.92 ｍ、深さ 0.42 ｍと、平面形は大きいが、浅い土坑である。一部は調査区外に出ている。埋土はオリーブ黒色粘性シルトの単一層である。浅い土坑であるが、いくつかの遺物が出土している（第 122 図）

６は土師器の高坏の坏の部分で、風化が進んでいるため、調整の観察はできない。脚部の形態が不明であるが、残っている部分を見ると、脚部が外側に広がっていたと推定できることから、古墳時代前期になると思われる。

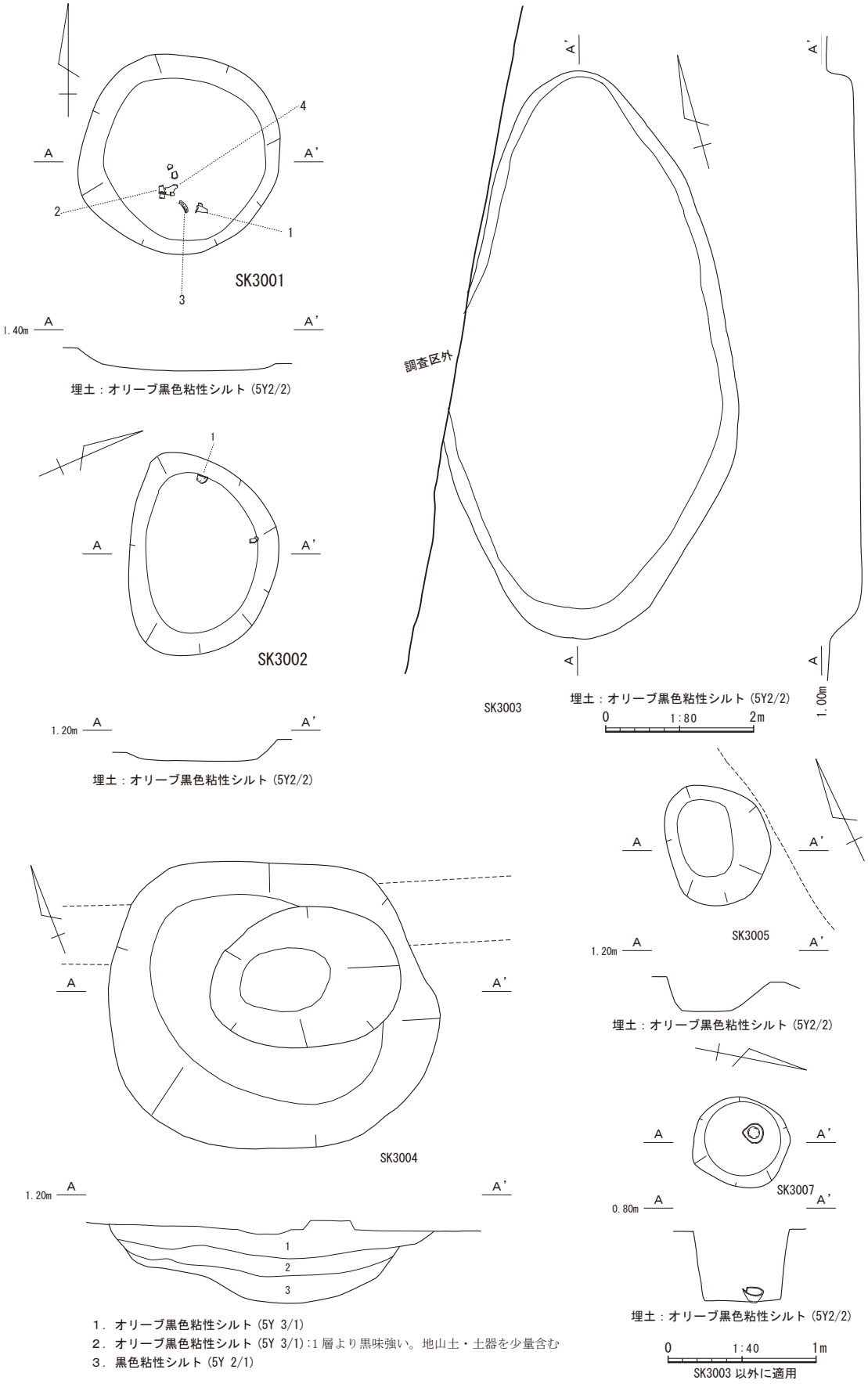
７は高坏の脚部で、長い脚部から、裾が屈曲して大きく広がっていることから、古墳時代前期～中期初頭になると思われる。

８は高坏の脚部で、裾は剥落している。裾に向かって脚部を広げるように粘土を伸ばしてあることから、裾は広がっていたと想定される。このことから、古墳時代前期～中期初頭に位置づけられる。

９は台付甕の底部～台の破片で、台は大きい割に薄く作ってある。時期の判断は難しいが、古墳時代前期～中期の中に入ると思われる。

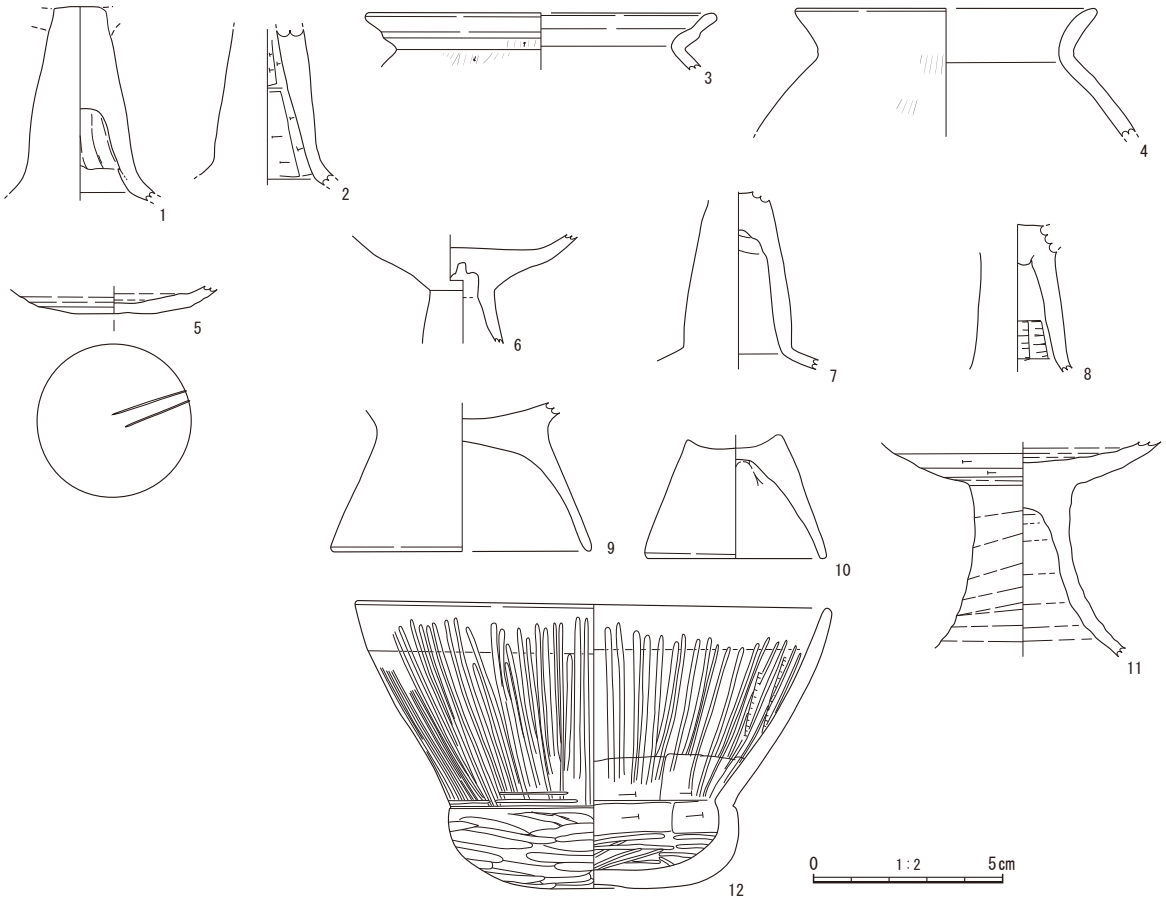
10 も台付甕の台の部分で、形態が整っていること、薄く作られていることから、古墳時代前期～中期の中に入ると思われる。

以上の出土遺物から、SK3003 の時期は古墳時代前期～中期初頭になると考えられる。



１．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)
２．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1):1 層より黒味強い。地山土・土器を少量含む
３．黒色粘性シルト (5Y 2/1)

第 121 図　土坑 SK3001 ～ 3005, 3007 実測図



第 122 図　土坑 SK3001・3002・3004 ～ 3006 出土遺物実測図

（４）SK3004（第 121 図）

３区の N99 区、N1 区、099 区、01 区で検出した不整形の土坑である。平面形の規模は 2.28 m × 2.24 m、深さは 0.30 m である。２段堀になっている。埋土は黒色系の粘質シルトを基調としている。埋土中から、須恵器の高坏の脚部（第 122 図 -11）が出土した。坏の全体形が不明であるが、坏の底部が平に近いことから、坏が半球状になる時期よりも新しく、７世紀後半～８世紀初頭と思われる。この出土遺物から、この土坑の時期は７世紀後半～８世紀初頭に中に入ると考えられる。

（５）SK3005（第 121 図）

３区の 099 区で検出した円形に近い土坑である。平面形の大きさは 0.84 m × 0.72 m、深さは 0.24 m である。埋土はオリーブ黒色粘性シルトの単一層である。図示はできなかったが、須恵器の瓿の破片が出土したことから、古墳時代に入ることは間違いないと思われる。

（６）SK3007（第 121 図）

３区の S97 区で検出した円形の土坑である。周囲に遺構がない場所に掘られていた。平面形の大きさは 0.64 m × 0.60 m、深さは 0.48 m である。埋土はオリーブ黒色粘性シルトの単一層である。底部に土師器の丸底壺（第 122 図 -12）が置かれた状態で出土した。

この壺は、頸部は僅かに内湾しながら立ち上っている。頸部は内外面とも横方向に刷毛調整の後、縦方向に細かく磨いて仕上げてある。頸部内面の下半のみヘラ削りの後、縦方向に磨いて仕上げてある。頸部と胴部の境界に、ヘラ状工具で調整した工具痕が残っている。胴部は、ヘラ削りの後、横方向に細かく磨いて仕上げてある。時期は古墳時代前期～中期初頭と考えられる。

４　溝跡

古墳時代の住居状遺構に伴う溝以外の溝で、出土遺物から古墳時代と判断できた溝は４本ある。

（１）SD3013（個別図なし、第 20 図参照）

３区の P97 区、Q97 区で検出した。８世紀の井戸 SE2001 に切られているため、全体の規模は不明であるが、検出できたのは、長さ 5.40 m、幅 0.84 m、深さ 0.38 mである。この溝からは、図示はできなかったが、古墳時代中期の土師器の丸底壺の破片が出土したことから、古墳時代中期と考えられる。なお、第 20 図には、弥生時代の方形周溝墓の構成溝 SD4011 が、この溝を切っているように図示してあるが、最終完掘状況の空中写真測量図を使用しているためで、実際には SD3013 が SD4011 を切っている。

（２）SD3016、SD3017、SD3018（第 123 図）

４区で検出した溝で、SD3016 と SD3018 は平行しており、両溝が SD3017 と直交するため、３本ではあるが、方形区画のような配置になっている。SD3016 からは遺物が出土しなかったが、SD3017 と SD3018 から、図示はできなかったが、古墳時代前期～後期初頭と思われる須恵器の破片が出土したことから、SD3016 ～ 3018 は古墳時代前期～中期初頭（５世紀前半）と考えられる。

各溝の規模は次のとおりである。SD3016 は、長さ 7.25 m、幅 0.85 m、深さ 0.15 m。SD3017 は長さ 16.50 m、幅 0.65 m、深さ 0.15 m。SD3018 は長さ 32.50 m、幅 0.70 m、深さ 0.30 m。埋土はいずれもオリーブ黒色粘性シルトの単一層であることから、短期間で埋没したと考えられる。

SD3018 からは用途不明の板状木製品が出土した（第 125 図 -1）。樹種はスギで、実測図上端に加工痕が見られる。腐食が進んでいるため、表面の加工痕ははっきりしない。実測図左側面～下端は欠損していることから、本来はもっと大きな板状であったことは確かである。

SD3016 ～ 3018 に近接して掘立柱建物跡の SB3004 ～ 3006 が存在する（第 123 図）。特に SB3006 は SD3016 ～ 3018 に囲まれた中に存在しているが、建物の主軸と SD3016、SD3018 の方向が異なっているため､SD3016 ～ 3018 による区画と SB3004 ～ 3006 に関連がある可能性は低い。ただ､SD3016 ～ 3018 は、少ないながらも出土した土器から古墳時代前期～中期初頭と考えられ、SB3004 ～ 3006 も、周囲で古墳時代前期～中期初頭の遺構が検出されたことから、同時期の可能性が考えられることから、SD3016 ～ 3018 と SB3004 ～ 3006 を積極的に関連付ける根拠は乏しいが、同時期に存在した可能性は考えられる。

５　遺物集積遺構

調査面２面目で､遺物の集積を２か所検出した。SX3001 は､出土遺物に時期差が認められることから、流水などにより流れてきた土器が溜まった可能性がある。SX3002 の方は、一時期の遺物集積で、高坏が多い、手捏ね土器を含むなどの内容から、祭祀跡の可能性が考えられる。

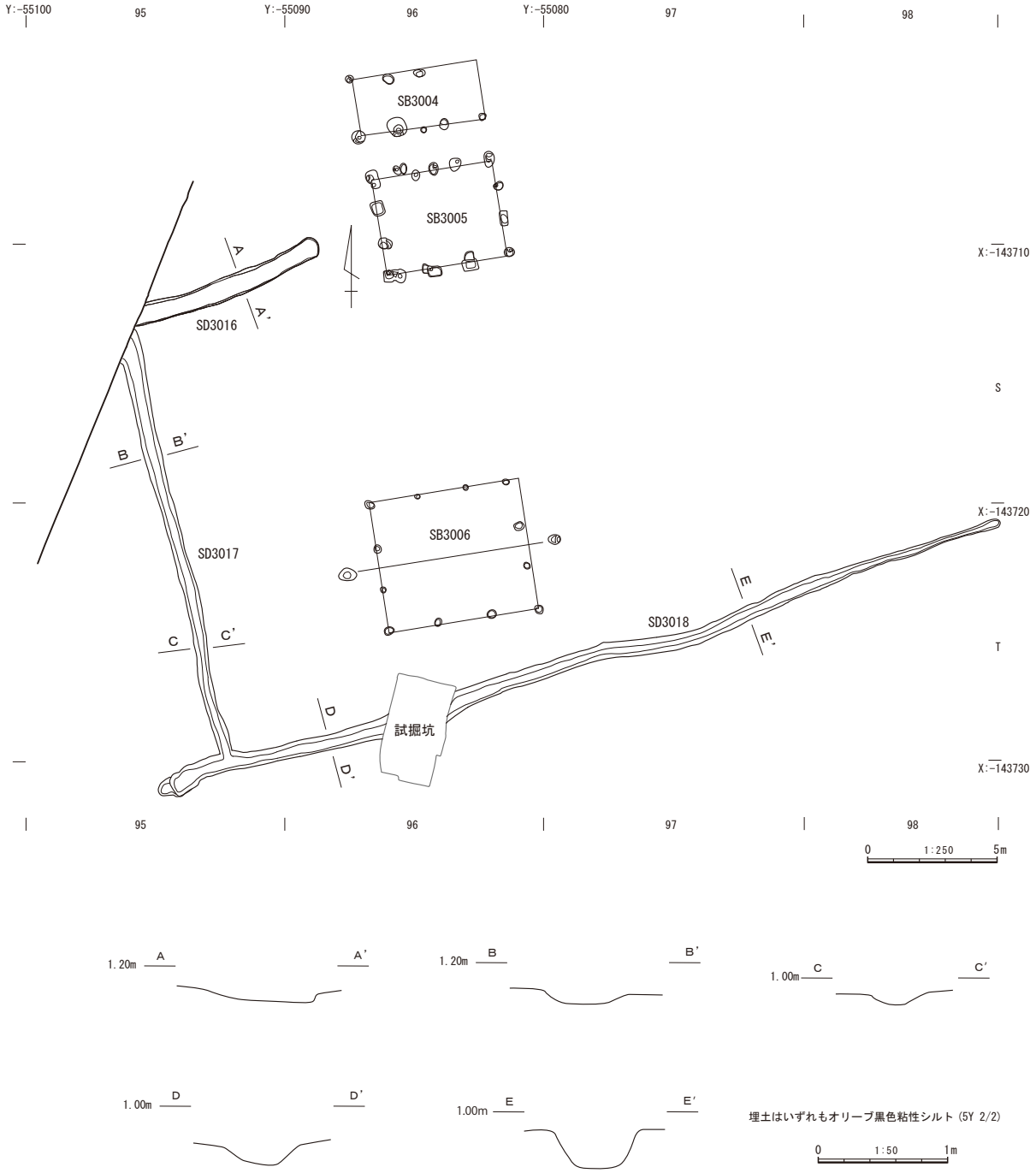
（１）SX3001（第 124 図）

２区の I1 区で検出した。４m四方の範囲に古墳時代の土器、土製品が散らばるように分布していた。接合の結果、完形に戻った土器はないことから、いずれも破片の状態で置かれた可能性が高い。出土した土器は次のとおりである（第 125 図）。

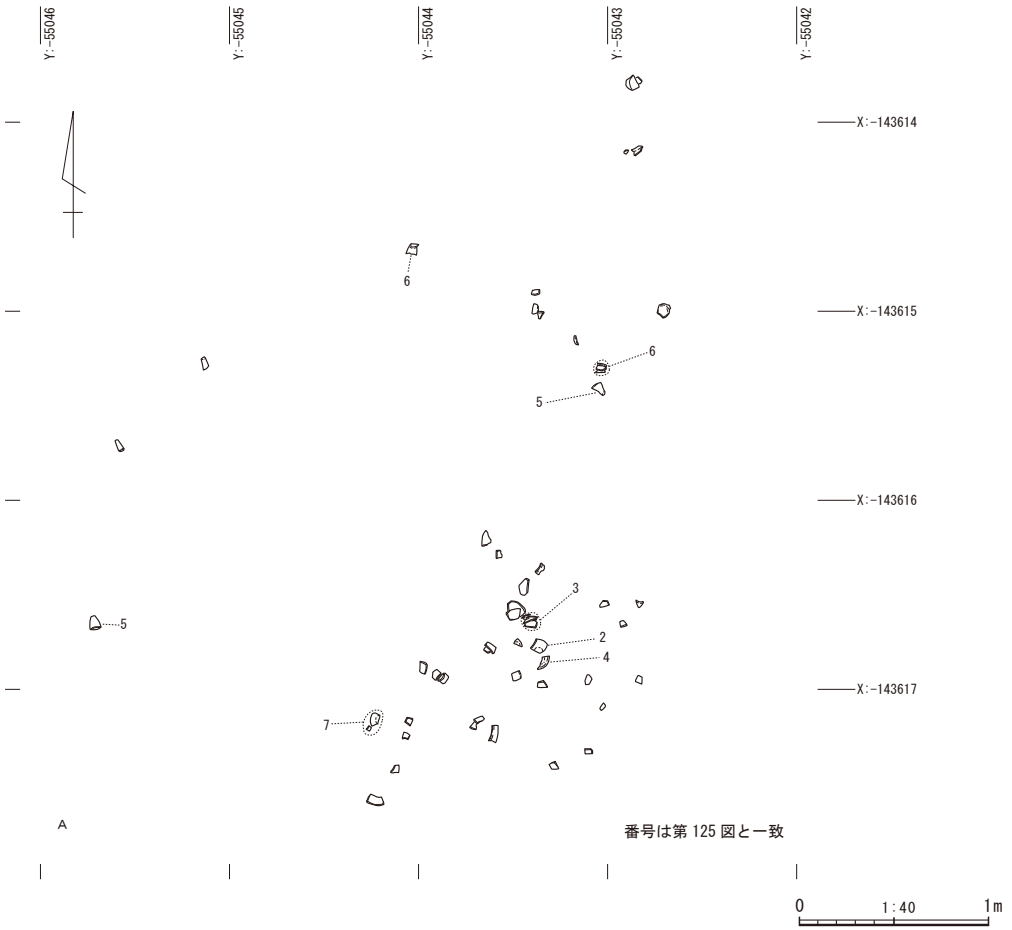
２～４は須恵器で、返りのある坏である。いずれも復元口径が小さいこと、返りの部分も小さいことなどから、７世紀代と考えられる。５、６は土師器の高坏の脚部である。いずれも脚部から屈曲して裾部が広がる形態で、古墳時代前期～中期初頭に位置付けられる。

７は台付甕の台で、薄く作られている点で、古墳時代前期の特徴がある。８は手捏ね土器である。

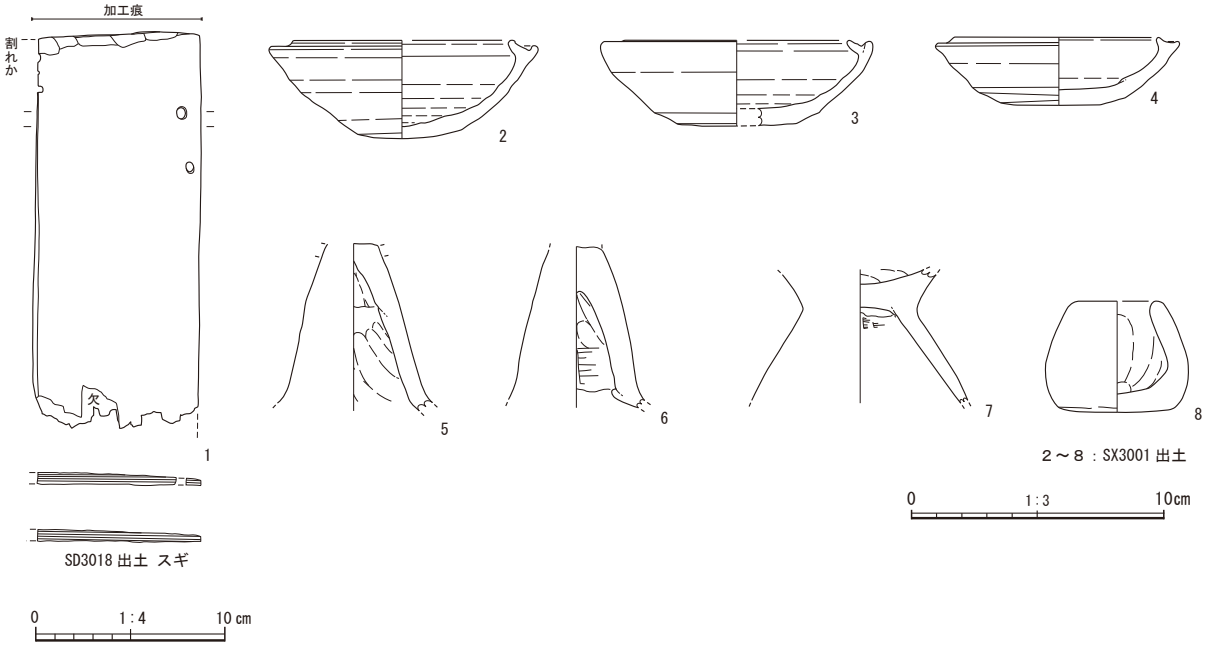
古墳時代以外の遺物は見られないが、須恵器は７世紀代、土師器のうち高坏は古墳時代前期～中期初頭で、時期差がある。



第 123 図　溝跡 SD3016 ～ 3018 実測図



第 124 図　遺物集積遺構 SX3001 実測図



第 125 図　溝跡 SD3018、遺物集積遺構 SX3001 出土遺物実測図

（２）SX3002（第 126 図）

４区の T95 区、T96 区、U95 区、U96 区にまたがって検出した。近隣には同時期（古墳時代前期～中期初頭）の井戸 SE3003、SE3004 がある。長径は復元長で 10.0 m、短径は最も広い所で 4.8 mの不整形の浅い土坑が掘られ、中に堆積した黒褐色シルトに多数の土師器が含まれていた。須恵器は出土しなかった。接合の結果、完形に戻った土器はないことから、すべて破片の状態で集積された可能性が高い。

出土した土器は次のとおりである（第 127 図）。

１～３は土師器の高坏の脚部で、いずれも風化が進んでいるため、調整痕の観察は困難であるが、脚部から裾部が屈曲して広がる形態から、古墳時代前期～中期初頭と考えられる。４は手捏ね土器である。

５は壺の口縁で、二重口縁のようになっている。風化か著しく、調整痕は確認できない。

６は甕の口縁の破片で、直線的に立ち上がる口縁と、屈曲する胴部の一部が残っている。古墳時代前期の台付甕と思われる。

７は、壺胴部の破片で、頸部が剥落した跡がある。胴部は球体で、底部には台が付いていたと思われる。時期は古墳時代前期と考えられる。８は甕の胴部～底部の破片である。風化が著しい。

９は、口縁が短く立ち上がる甕で、古墳時代前期～中期と思われる。

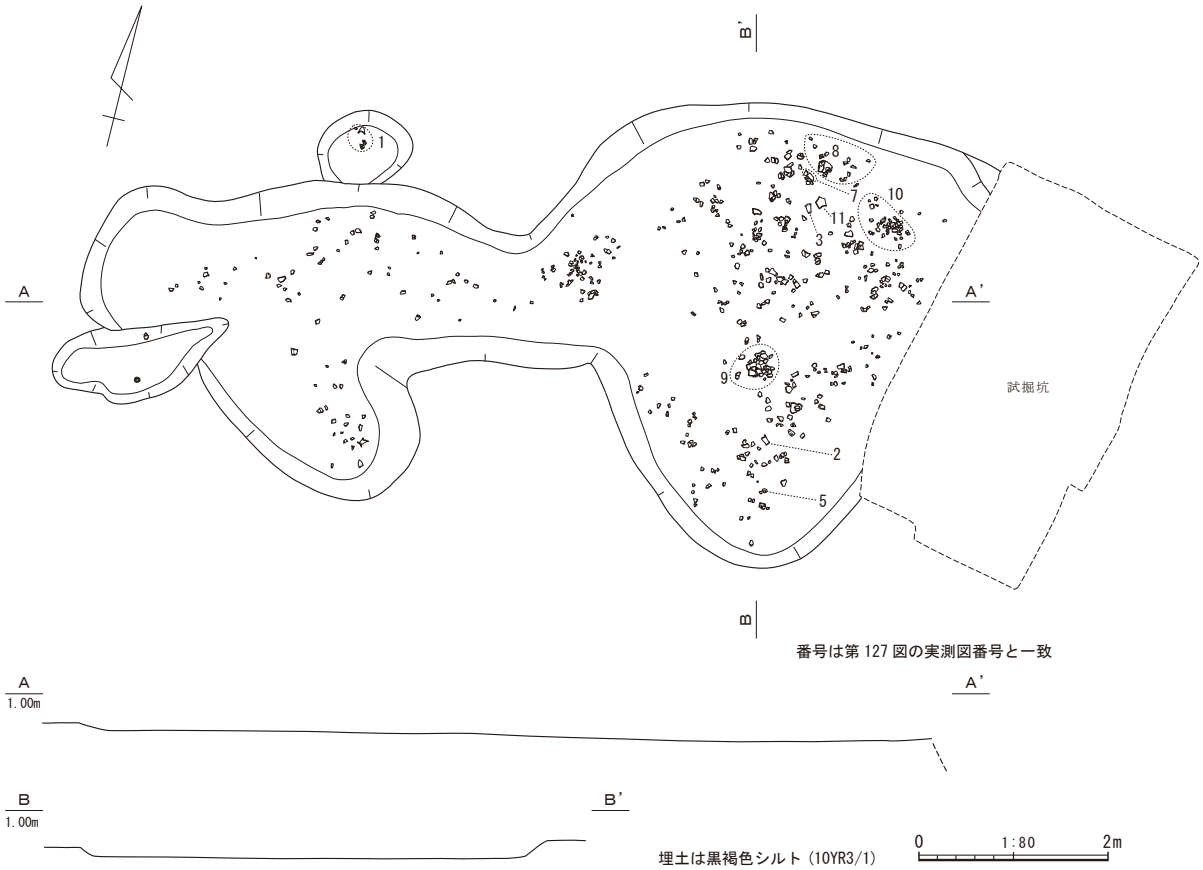
10 は甕の口縁～胴部で、口縁が内側に湾曲しながら立ち上っている。古墳時代前期～中頃と思われる。

以上の出土土器から、この土器の集積は、古墳時代前期～中期初頭に形成されたと考えられる。

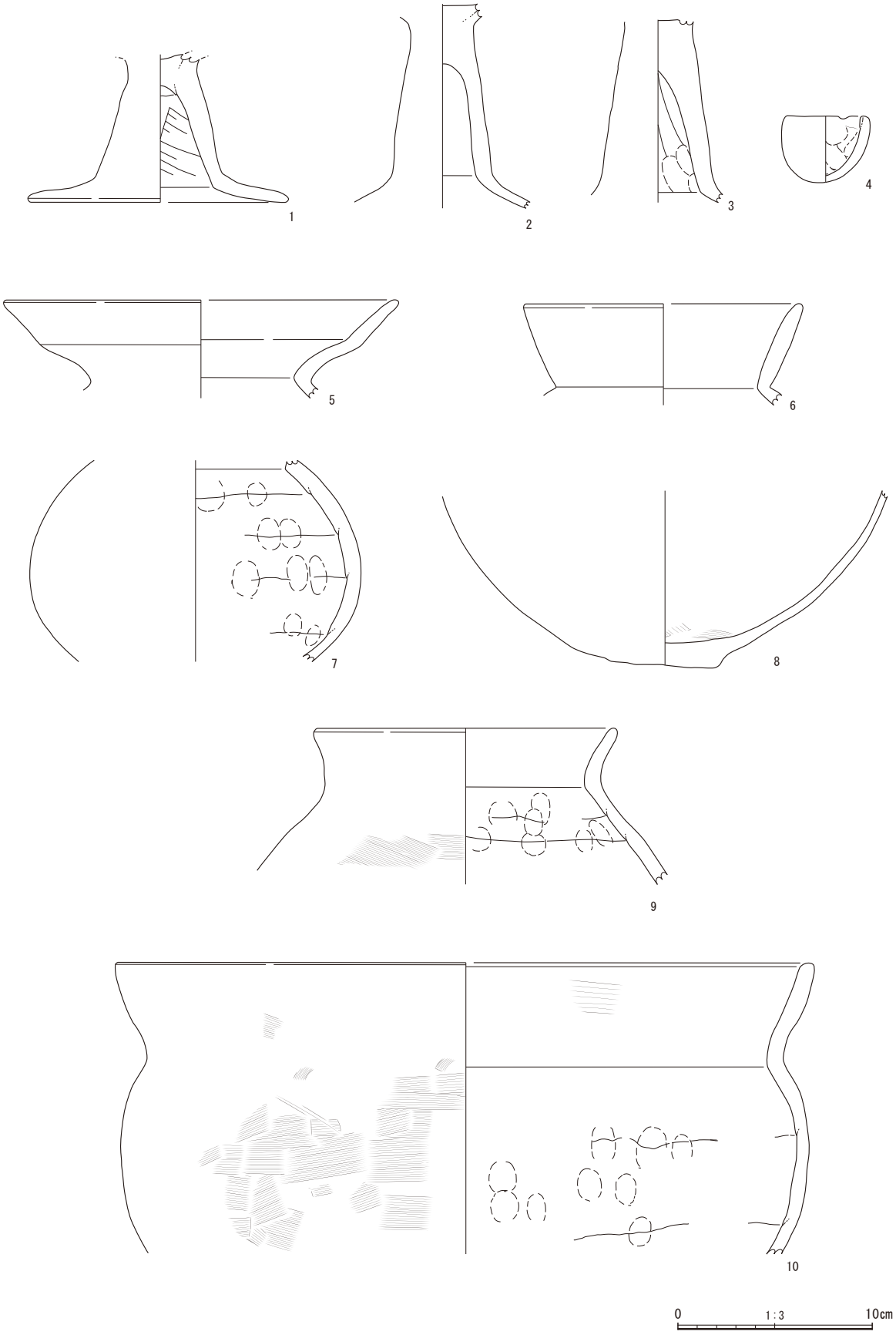
土器のうち、１個体に１点しかない部位から集計した土器の最少個体数は次のとおりである。

高坏の脚部 17 点　甕の台７点　壺の口縁１点　ミニチュア土器２点

細片の土器が多く、接合が困難であったが、さらに多くの土器が存在したことは確実である。



第 126 図　遺物集積遺構 SX3002 実測図



第 127 図　遺物集積遺構 SX3002 出土遺物実測図

第６節　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構としては、方形周溝墓を６基検出した（第 128 図）。分布は調査区の３区の中に集中しており、隣接する調査区では、３区の北側の２区で、周溝の一部が検出されただけである。今回掲出した方形周溝墓は、いずれも周溝の四隅が切れるタイプである。少ないながらも出土した土器から、弥生時代中期後葉に連続して作られたと考えられるある。主体部が検出できたものは１基だけで、盛土が残っていたものはない。

同時期の方形周溝墓は、西向遺跡の南２㎞にある元島遺跡で多数報告されている。

１　方形周溝墓

（１）SZ4001（第 129 図）

３区の北端で検出した方形周溝墓で、北側の周溝は２区にかかって検出した。周溝内側の範囲は、10.4ｍ×9.8ｍである。12 世紀後半の SR1010 と 13 世紀の SE1013 に切られているが、全体は把握できる。

各溝の埋土は黒色系の粘質シルトが基調となっている。主体部は検出できなかった。遺物は出土しなかったが、他の方形周溝墓と一連のものであることは間違いないことから、弥生時代中期後葉と考えられる。

（２）SZ4002（第 130 図）

周溝内側の範囲は、9.5ｍ×9.5ｍで正方形に近い。一部を奈良時代と思われる SK2012 と SK2016 に切られているが、全体は把握できる。溝の埋土は黒色系の粘性シルトが基調となっている。SD4008 は、隣接する SZ4003 との共用になっている。

SZ4002 では、今回検出した方形周溝墓で唯一主体部(SK4001)が検出できた(第 131 図)。検出したのは、周溝墓の中央付近で、平面形の大きさは 2.48 ｍ× 1.28 ｍ、深さは 0.20 ｍ程度の長方形の土坑である。主体部の方向は、ほぼ東西方向である。盛り土が残っていないこともあり、上部を削平されている可能性が高い。主体部の中央付近で、1.44 ｍ× 0.64 ｍの大きさの木棺の痕跡を検出できた。木棺は、底板の上に側板と小口板を乗せるタイプである。

主体部埋土の３層、４層、５層は、よく締まった粘土で、木棺の底板があったと思われる部分にのみ認められることから、木棺の底板の痕跡の可能性がある。７層と 7’層は酷似した粘土で、ともによく締まっており、木棺の側板があったと思われる部分にのみ分布していることから、木棺の側板の痕跡の可能性がある。この推定が正しければ、７層と 7’層の外側に見られる９層と 13 層は、木棺を据えた際の裏込めの土の可能性が考えられる。同様に 12 層も木棺の裏込めに入れた土の可能性がある。

出土遺物は次のとおりである（第 132 図）。

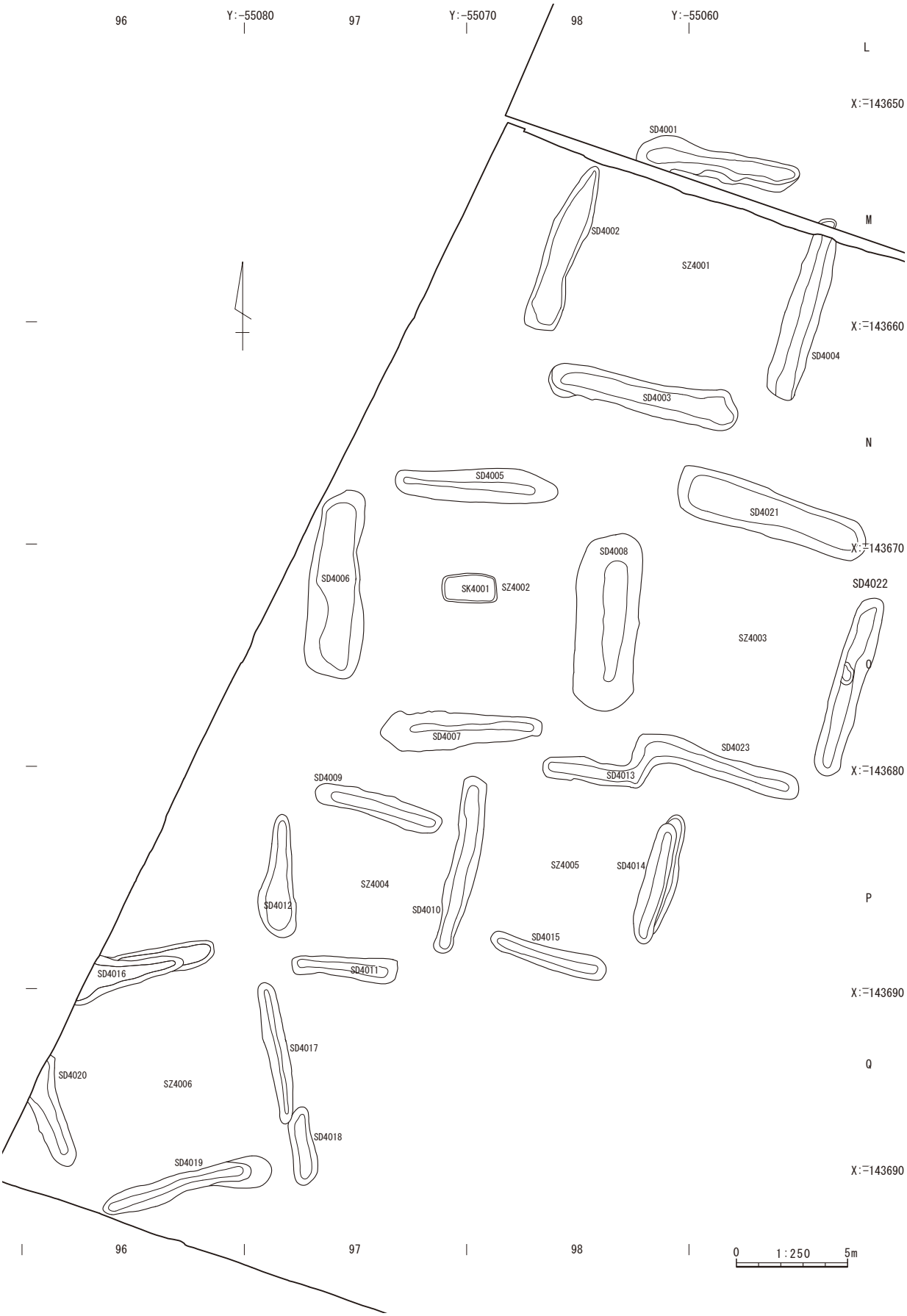
SD4005 からは１～３が出土した。１は壺の頸部～口縁の破片で、SD4005 の西端の底面で出土した（第 132 図拡大図１）。風化が著しく、文様、調整痕は全く確認できない。口縁が広がっていないことから、弥生時代中期後葉～後期初頭に位置付けられると考えられる。

２は壺の胴部の破片で、櫛描文が見られる。SD4005 の中央付近で、底面から 20㎝ほど上で状態で出土した（第 132 図拡大図２）。弥生時代中期後葉と考えられる。

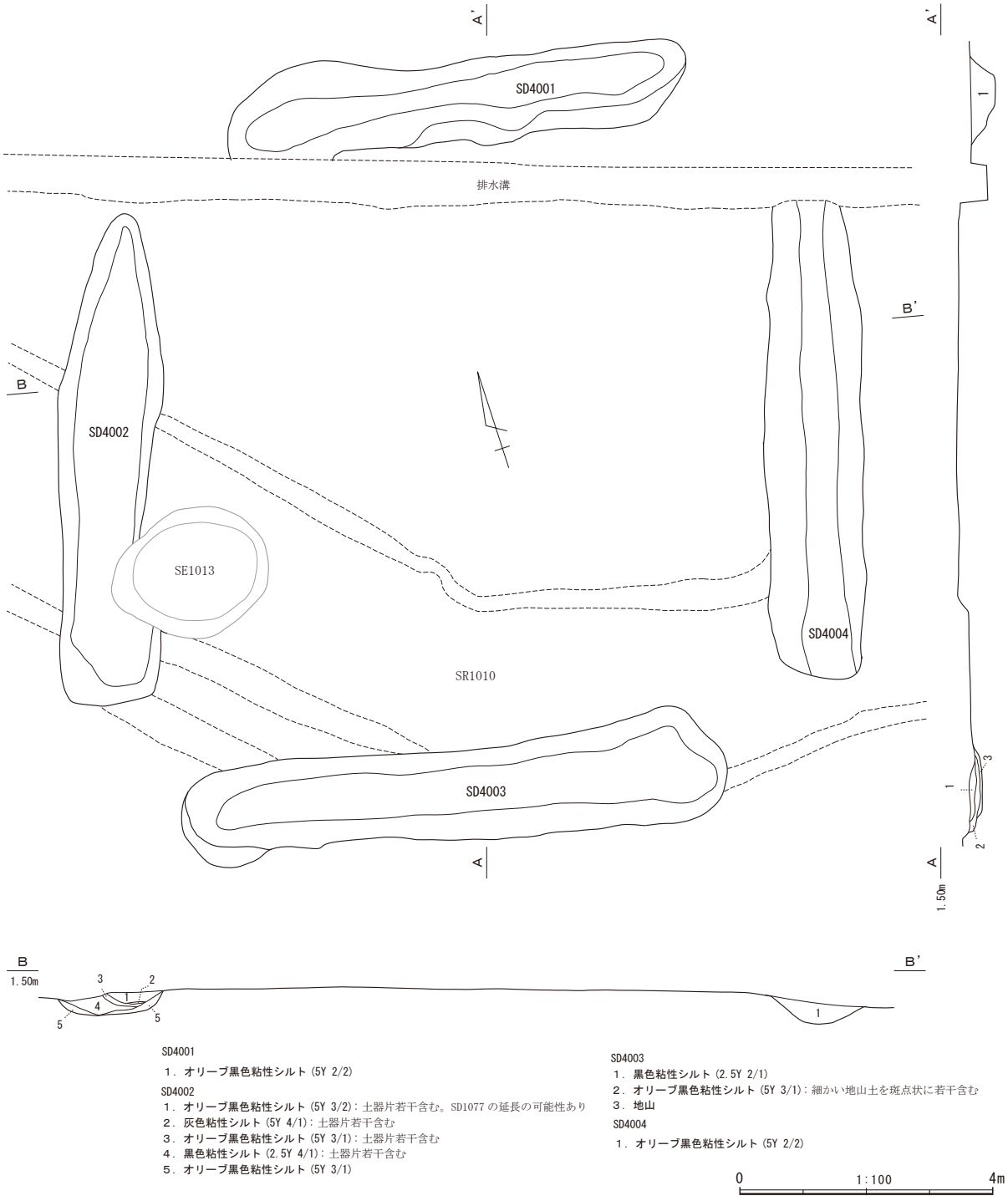
３は壺の胴部上半で、SD4005 の東隅の底面で出土した（第 132 図拡大図３）。胴部～頸部にかけてなだらかな曲線を描くように立ち上げてある。頸部が細く、口縁が広がっていないことから、弥生時代中期後葉～後期初頭と考えられる。

SD4006 からは４の石錘が出土した。砂岩の円礫を使っており、相対する両端を打ち欠いてある。

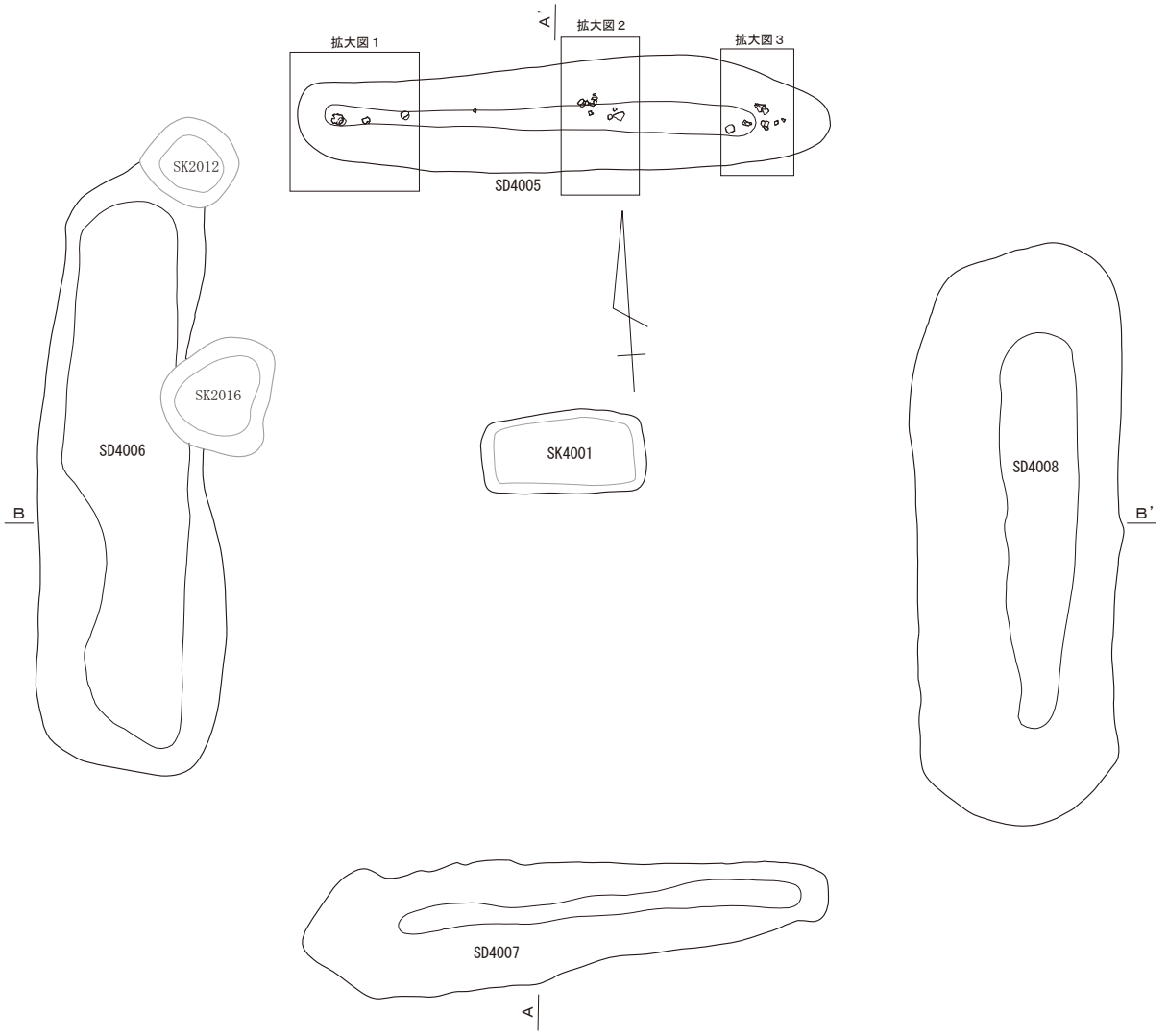
SD4008 からは５の壺が出土した。出土位置は、SD4008 の底面から 20㎝程度上である。出土状況から、

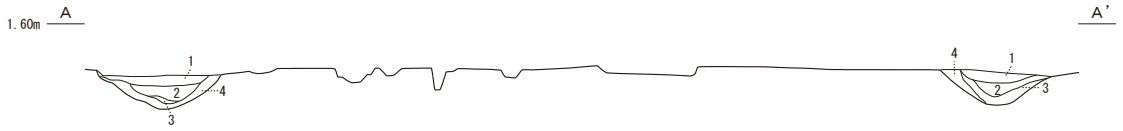


第 128 図　方形周溝墓分布図



第 129 図　方形周溝墓 SZ4001 実測図





１．黒色粘性シルト (2.5Y 2/1)：土器片若干含む
２．黒色粘性シルト (2.5Y 2/1)
３．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：炭化物含む
４．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)

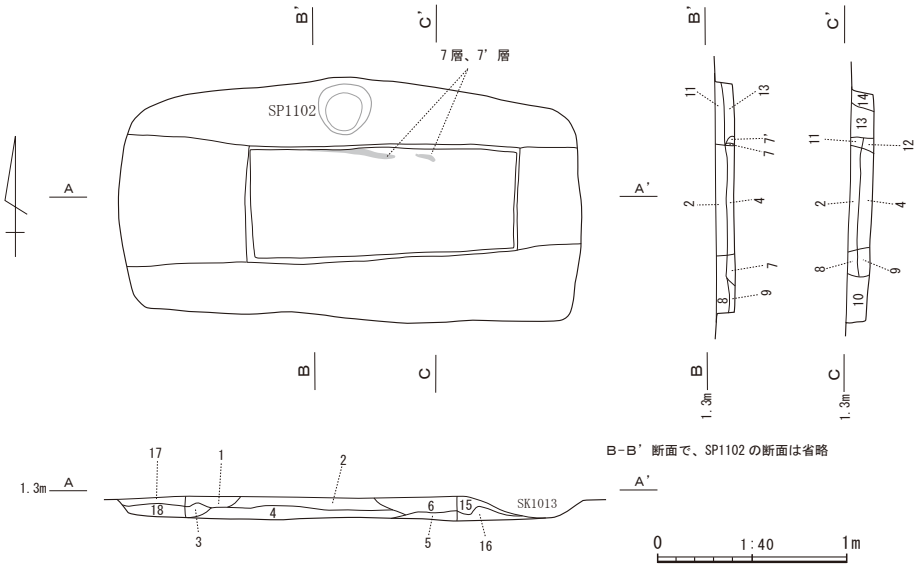
１．黒色粘性シルト (2.5Y 2/1)：鉄分多く含む。土器片やや多く含む
２．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：鉄分多く含む。炭化物含む。大型の土器含む
３．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：鉄分多く含む。土器片若干含む
４．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/2)

１．黒色粘性シルト (2.5Y 2/1)
２．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：土器片若干含む。
３．灰色砂質土 (5Y 6/1)：炭化物ブロック状に多く含む
４．褐灰色砂質土 (7.5Y 5/1)：炭化物・鉄分含む

１．黒色粘性シルト (2.5Y 2/1)

0　1:100　4m

第 130 図　方形周溝墓 SZ4002 実測図



1．オリーブ褐色粘性シルト (2.5Y4/3)：細かい黄褐色土を多く含む
2．暗灰黄色粘性シルト (2.5Y4/2):2cm 大の黄褐色土を多く含む
3．黒褐色粘土 (2.5Y3/2)：底板の痕跡か
4．暗灰黄色粘土 (2.5Y4/2)：底板の痕跡か
5．黒褐色粘土 (2.5Y3/2)：底板の痕跡か
6．黒褐色粘質シルト (2.5Y3/2)：鉄分の多い褐色土と黄褐色土の細かいブロックを多く含む
7．灰色粘土 (5Y4/1)：木棺の側板の痕跡か
7'．灰黄色粘土 (2.5Y4/2)：木棺の側板の痕跡か
8．暗灰黄色粘性シルト (2.5Y4/2)：細かい地山起源の土を多く含む
9．暗灰黄色粘性シルト (2.5Y4/2)
10．暗灰黄色粘性シルト (2.5Y4/2)
11．オリーブ褐色粘性シルト (2.5Y4/2)：3cm 大の黒褐色土のブロックを多く含む
12．オリーブ褐色粘性シルト (2.5Y4/2)：細かい地山起源の土を多く含む
13．オリーブ褐色粘性シルト (2.5Y4/3)：黒色土を斑状に含む
14．暗灰黄色粘性シルト (2.5Y4/2)：細かい地山起源の土を多く含む
15．黒褐色粘性シルト (2.5Y3/2)：鉄分の多い褐色土と 3cm 大の黄褐色土を多く含む
16．オリーブ褐色粘性シルト (2.5Y4/3)：地山に酷似
17．オリーブ褐色粘性シルト (2.5Y4/3)：黒色土を斑状に多く含む
18．オリーブ褐色粘性シルト (2.5Y4/3)：地山起源の土のブロックを含む

第 131 図　方形周溝墓 SZ4002 主体部実測図

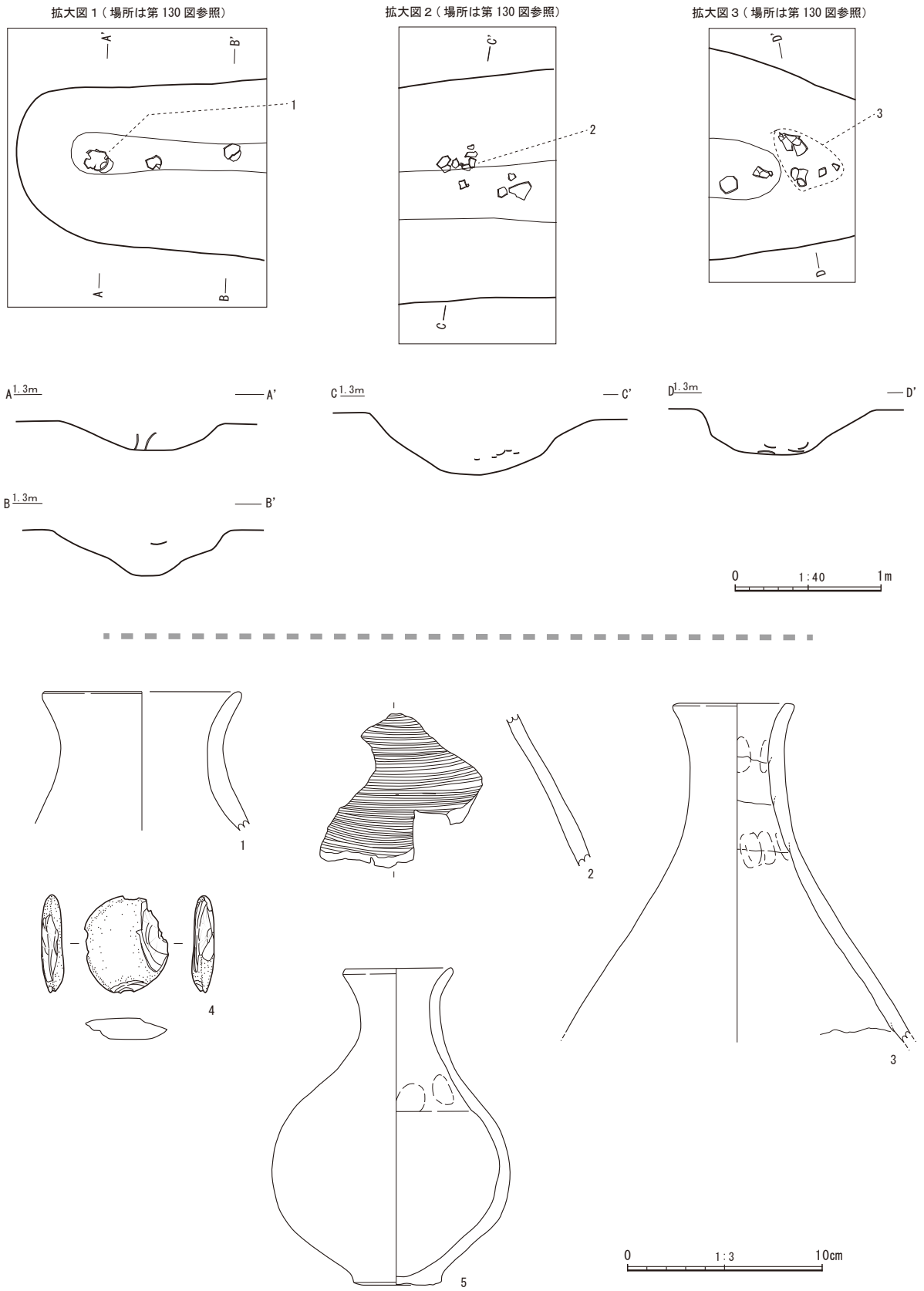
SD4008 の埋没途中で、墳丘上から SD4008 に落ちたことが考えられる。風化が進んでいるため、外面の調整痕はほとんど観察できない。内面には僅かに指頭圧痕が残っている。底部から口縁部まで、緩やかな曲線を描くように、連続して成形してある。弥生時代中期後葉～後期初頭に位置付けられる。SD4008 は、隣接する方形周溝墓 SZ4003 と共用になっているため、この土器が SZ4002、SZ4003 のどちらに伴うのかは不明である。

（３）SZ4003（第 133 図）

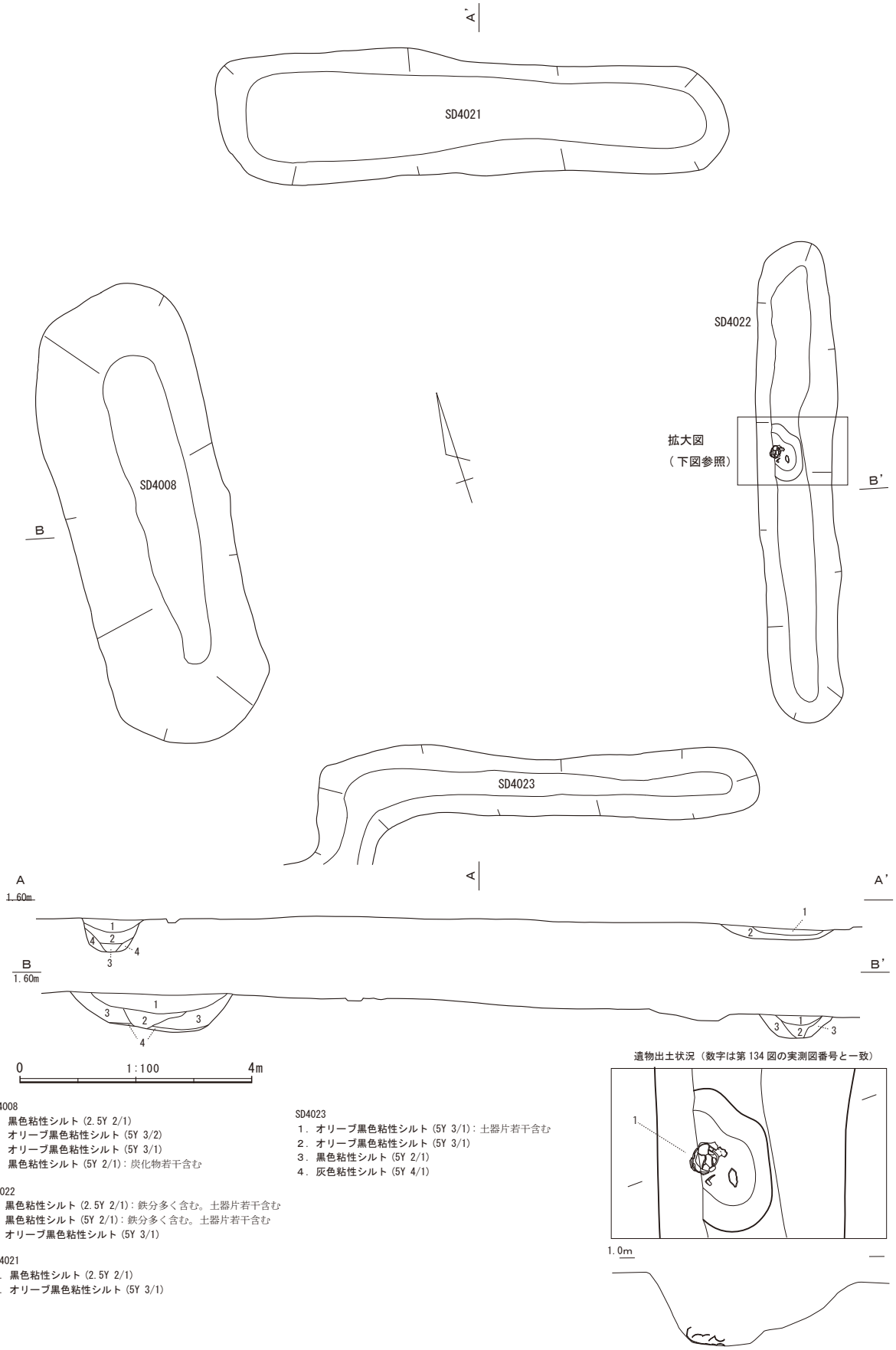
周溝内側の規模は 10.60 m× 9.40 mである。SD4008 は隣接する SZ4002 と共用になっている。また、SD4023 は SZ4005 の SD4013 と連続している。SD4023 と SD4013 が崩れてつながった可能性が考えられる。溝の埋土は黒色系の粘性シルトが基調となっている。主体部は検出できなかった。出土遺物は次のとおりである。

SD4022 の底面で弥生土器の壺（第 134 図－１）が出土した。底部から口縁部まで緩やかなカーブを描きながら連続して成形してある。胴部外面の底部付近は、刷毛目調整の後、磨いて仕上げてある。胴部外面下半は横方向に丁寧に磨いてある。胴部外面上半は、横方向の櫛描文を施した後、縦方向の櫛描文を入れている。頸部と胴部の間には、複合鋸歯文が見られる。頸部下半には、横方向に櫛描文を入れた後、縦方向の櫛描文を５か所入れて区画している。頸部上半は、斜め方向の刷毛目調整の後、縦方向に磨いて仕上げている。口縁直下は斜め方向の刷毛目調整が見られるだけである。口縁部には、刷毛目調整で使用した工具の端部を押し当て、押し引き文に似た文様を付けている。口縁部は若干肥厚させてある。口縁部内面には横方向の磨きが見られる。内面は、頸部に絞り痕が見られ、底部付近に刷毛目が見られる以外は、調整痕は明瞭でない。弥生時代中期後葉～後期初頭の白岩式である。

SD4023 からは砥石が出土した（第 134 図－２）。細粒の砂岩を使用しており、上下両端以外の全面に



第 132 図　方形周溝墓 SZ4002 出土遺物実測図



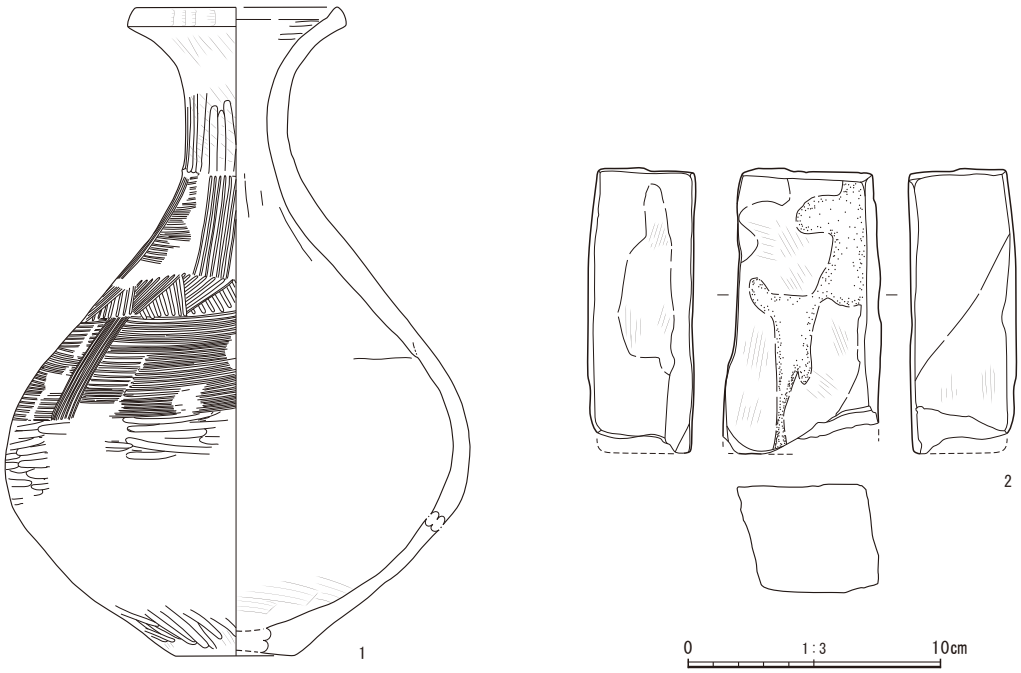
SD4008
１．黒色粘性シルト (2.5Y 2/1)
２．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/2)
３．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)
４．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：炭化物若干含む

SD4022
１．黒色粘性シルト (2.5Y 2/1)：鉄分多く含む。土器片若干含む
２．黒色粘性シルト (5Y 2/1)：鉄分多く含む。土器片若干含む
３．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)

SD4021
１．黒色粘性シルト (2.5Y 2/1)
２．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)

SD4023
１．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)：土器片若干含む
２．オリーブ黒色粘性シルト (5Y 3/1)
３．黒色粘性シルト (5Y 2/1)
４．灰色粘性シルト (5Y 4/1)

第 133 図　方形周溝墓 SZ4003 実測図



第 134 図　方形周溝墓 SZ4003 出土遺物実測図

研磨痕が見られる。

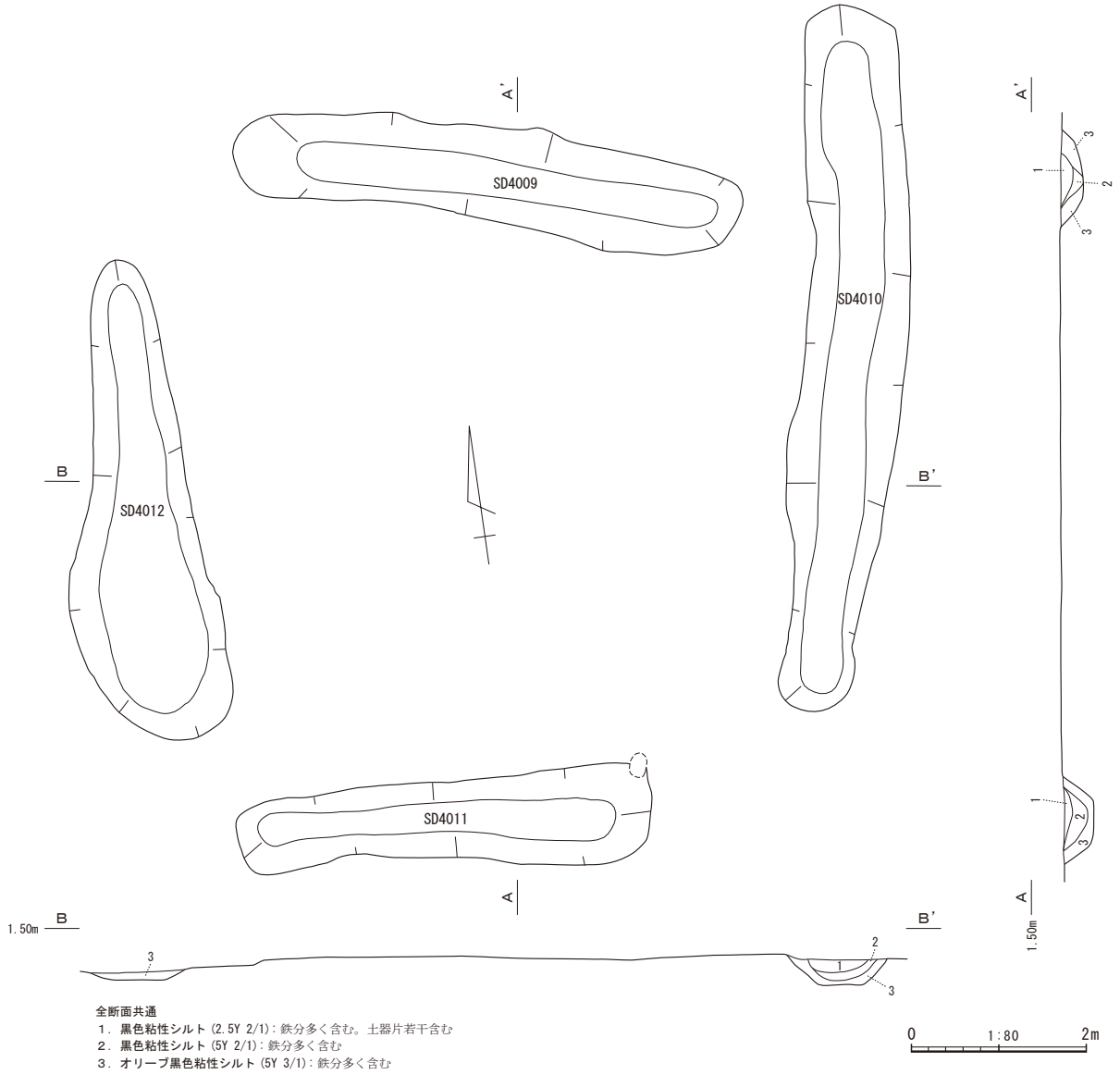
（４）SZ4004（第 135 図）

周溝内側の規模は 6.08 m× 5.84 mである。SD4010 は SZ4005 と供用になっている。また、相対する SD4012 よりも長くなっている。SD4010 は、SZ4004 の範囲から外れた部分で、方向が若干変わっていることから、隣接する SZ4005 を作る際、SD4010 を延長して掘ったことが考えられる。また、SD4012 は、SD4009、SD4011 に対して直角方向に掘られていない。また、相対する SD4009 と SD4011 は、平行になっていない。以上のことから、SZ4004 は、やや歪んだ方形になっている。周溝の埋土は黒色粘性シルトを基調としている。主体部は検出できなかった。遺物は出土しなかったが、SZ4005 と溝を共有していることから、SZ4005 と同時期の弥生時代中期後葉～後期初頭の中に入ると考えられる。

（５）SZ4005（第 136 図）

周溝内側の規模は、7.20 m四方で、ほぼ正方形である。SD4010 が少し長くなっているのは、隣接する SZ4004 と供用になっているためである。SZ4004 で報告したように、SZ4005 を作る際に SD4010 を延長して SZ4005 の溝にしたと考えられる。SD4013 は SZ4003 の周溝 SD4023 とつながっている。当初からつながっていたとは考えにくく、両溝が近接していたため、溝が埋没する前に流水等により溝が侵食されてつながったと考えられる。SD4014 には掘り直した痕跡が見られる。出土遺物は次のとおりである。SD4014 からは弥生土器の壺の頸部（第 137 図－１）が出土した。SD4014 の底面よりも上で出土したことから、SD4014 が埋没する過程で、墳丘上から落ちたことが考えられる。胴部から頸部にかけて緩やかな曲線を描くように、連続して作ってある。頸部は細く、口縁はあまり広がらないことから、弥生時代中期後葉と考えられる。

２は壺の胴部の破片で、胴部下半と上半の境界がなく、連続して作ってある。外面には横方向の刷毛調整が見られ、内面には、左斜め上方向の刷毛調整が見られる。底面には、反時計回りに撫でた痕跡が見られる。時期は弥生時代中期後葉～後期初頭の中に収まると思われる。

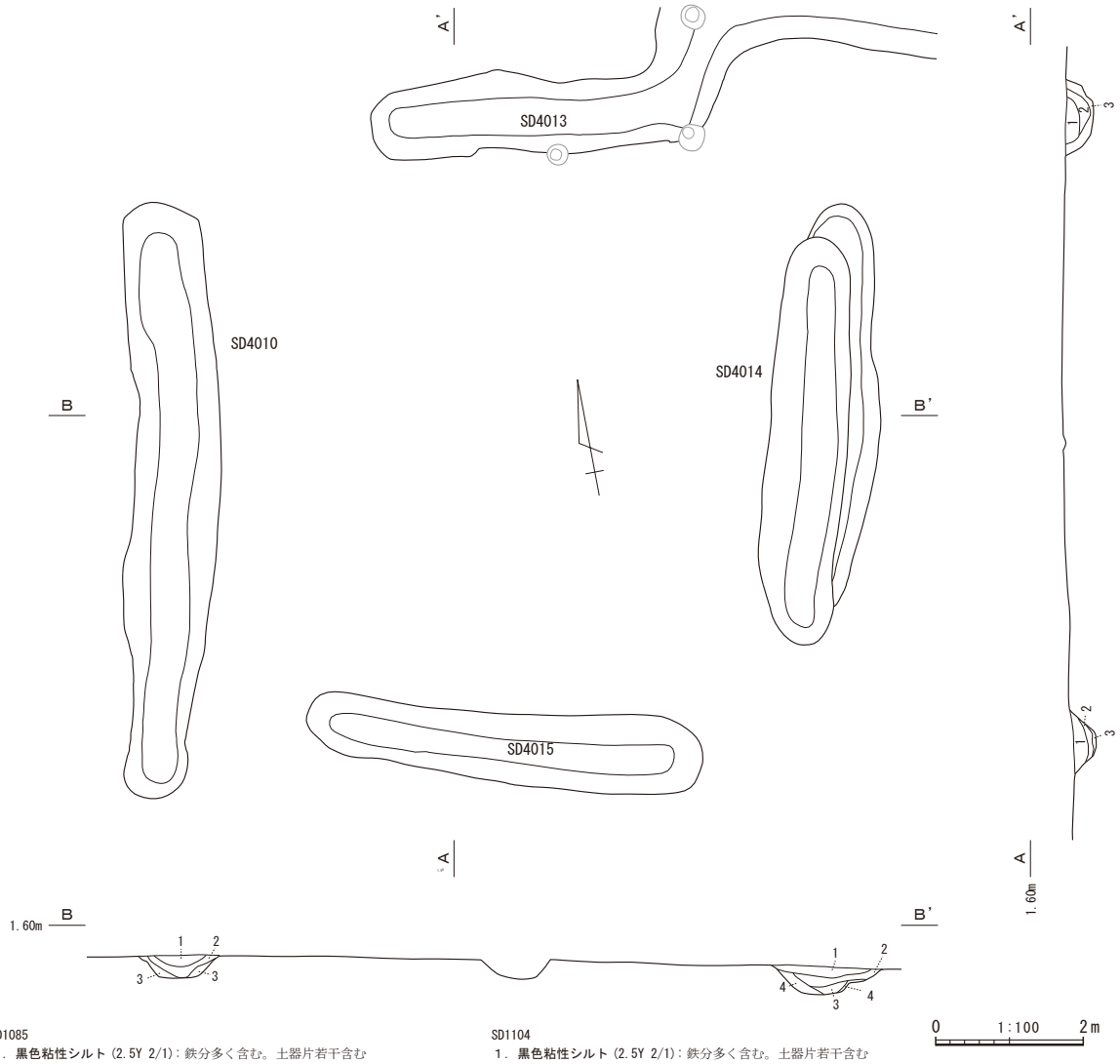


第 135 図　方形周溝墓 SZ4004 実測図

（６）SZ4006（第 138 図）

一部が調査区外に出ているが、全体の把握は可能である。周溝内側の規模は東西 9.60 m×南北 9.20 mである。主体部は検出できなかった。今回検出した方形周溝墓のうち、最も南にある方形周溝墓で、これより南の４区では、方形周溝墓は検出できなかった。

SD4016、SD4019 には掘り直しの痕跡が見られる。SD4017 と SD4018 は、２本で１本の周溝になっている。周溝としては、SD4017 で十分と思われるが、SD4017 に接して SD4018 を追加するように掘ってある。周溝の埋土は黒色系の粘性シルトが基調となっている。SD4019 の底面から 50cm 上で弥生土器の壺（実測図は第 137 - ３、出土状況は 138 図）が出土した。風化が進み、調整痕は観察できない。底部から直線的に立ち上がった胴部は、屈曲して上半に至る。上半は緩やかにすぼんで、胴部、頸部、口縁はなだらかな曲線を描くように、連続して作ってある。口縁部はつまみ上げるように立ち上げてある。焼成後に胴部下半に穿孔してある。時期は、弥生時代中期末～後期に位置付けられる。



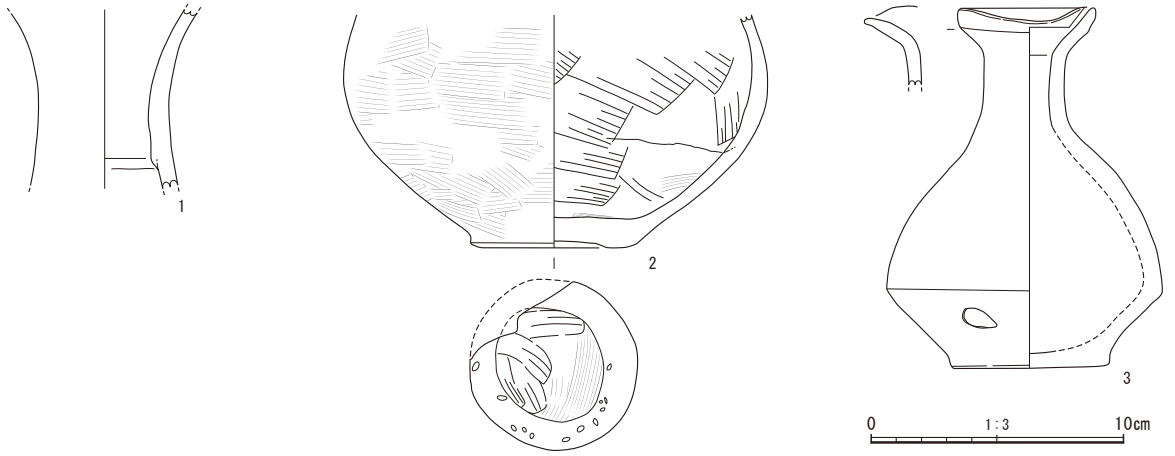
SD1085
１．黒色粘性シルト（2.5Y 2/1）：鉄分多く含む。土器片若干含む
２．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：鉄分多く含む。土器片含む
３．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：土器片含む

SD1086
１．黒色粘性シルト（2.5Y 2/1）：鉄分多く含む。土器片若干含む
２．黒色粘性シルト（2.5Y 2/1）：鉄分多く含む
３．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 2/1）：鉄分多く含む
４．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）

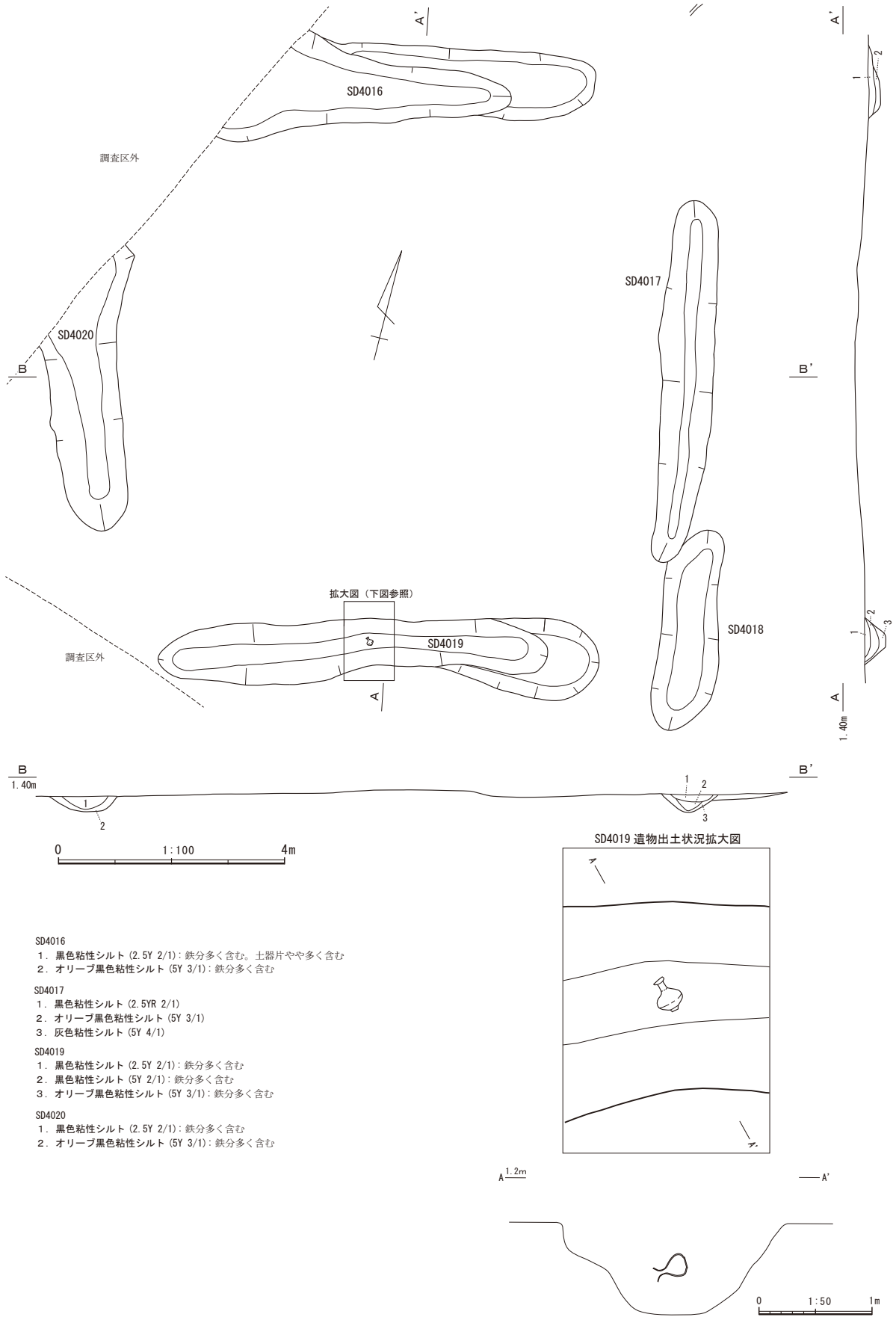
SD1104
１．黒色粘性シルト（2.5Y 2/1）：鉄分多く含む。土器片若干含む
２．黒色粘性シルト（5Y 2/1）：鉄分多く含む。土器片若干含む
３．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）

SD1052
１．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）：鉄分多く含む
２．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/1）
３．灰色粘性シルト（5Y 4/1）：炭化物粒やや多く含む

第 136 図　方形周溝墓 SZ4005 実測図



第 137 図　方形周溝墓 SZ4005・4006 出土遺物実測図



第 138 図　方形周溝墓 SZ4006 実測図

第７節　包含層出土の遺物

遺物包含層は２層あったが、２層とも中世～古墳時代の遺物を含んでおり、包含されていた遺物によって、包含層の形成時期を区別することはできなかったため、包含層出土遺物としてまとめて報告する。

５区で検出した谷状地形に堆積した層から出土した遺物は、時期が限定でき、地層の形成時期を限定できるため、５区の谷状地形の埋土から出土した土器は、別途まとめて報告する。

１　平安時代後期～鎌倉時代の遺物

包含層出土遺物で最も多いのが山茶碗である。産地では渥美・湖西産の山茶碗が主体である。これに東遠江産の山茶碗が少量伴い、知多産、瀬戸産の山茶碗がわずかに見られる。時期は 12 世紀代のものが圧倒的に多く、13 世紀代のものが少量認められる。

（１）山茶碗

第 139 図は、渥美・湖西産の山茶碗で、高台が非常に低い、あるいは高台が付けられていないこと、体部に丸みがなく、直線的に立ち上がっていることから、13 世紀前半と考えられるものである。１～７の底面には墨書が見られる。４は「太丸」と書いてあるように見える。４以外の墨書は判読不能である。以下、主な遺物について記載する。

12、19 の底面には黒い付着物が見られることから、硯に転用された可能性がある。14 ～ 16 の内面には煤が多く付着している。

21 の内面には自然釉が付いており、内面の中央付近には自然釉が付いていないことから、重ね焼きをした可能性が高い。特記できることは、外面にも自然釉がついており、茶碗の底から上に向かって流れていることである。外面に自然釉が付いた時、この山茶碗はひっくり返っていたことになる。このことから、この山茶碗は、当初は高台を下にした正位の状態で焼かれたが、その後、ひっくり返った状態で２次焼成を受けたことが考えられる。想定できる可能性としては、土師小皿の焼き台として再利用されたことが考えられる。

22 と 23 には高台が付けられていない。23 の内面には墨が付いていることから、硯に転用されたと思われる。24 と 25 は小碗である。24 には高台が付けられていない。25 の高台はすべて剥落している。高台が剥落した跡に糸切痕が見えることから、高台を付ける際、接着面を形成しないまま高台を付けたことになり、そのため、接着力が弱く、高台が剥落したと考えられる。26 は小碗、27、28 は小皿である。

第 140 図は、渥美・湖西産の山茶碗で、12 世紀代と考えられるものである。第 140 図に掲載したものには、底面に墨書が確認できる。

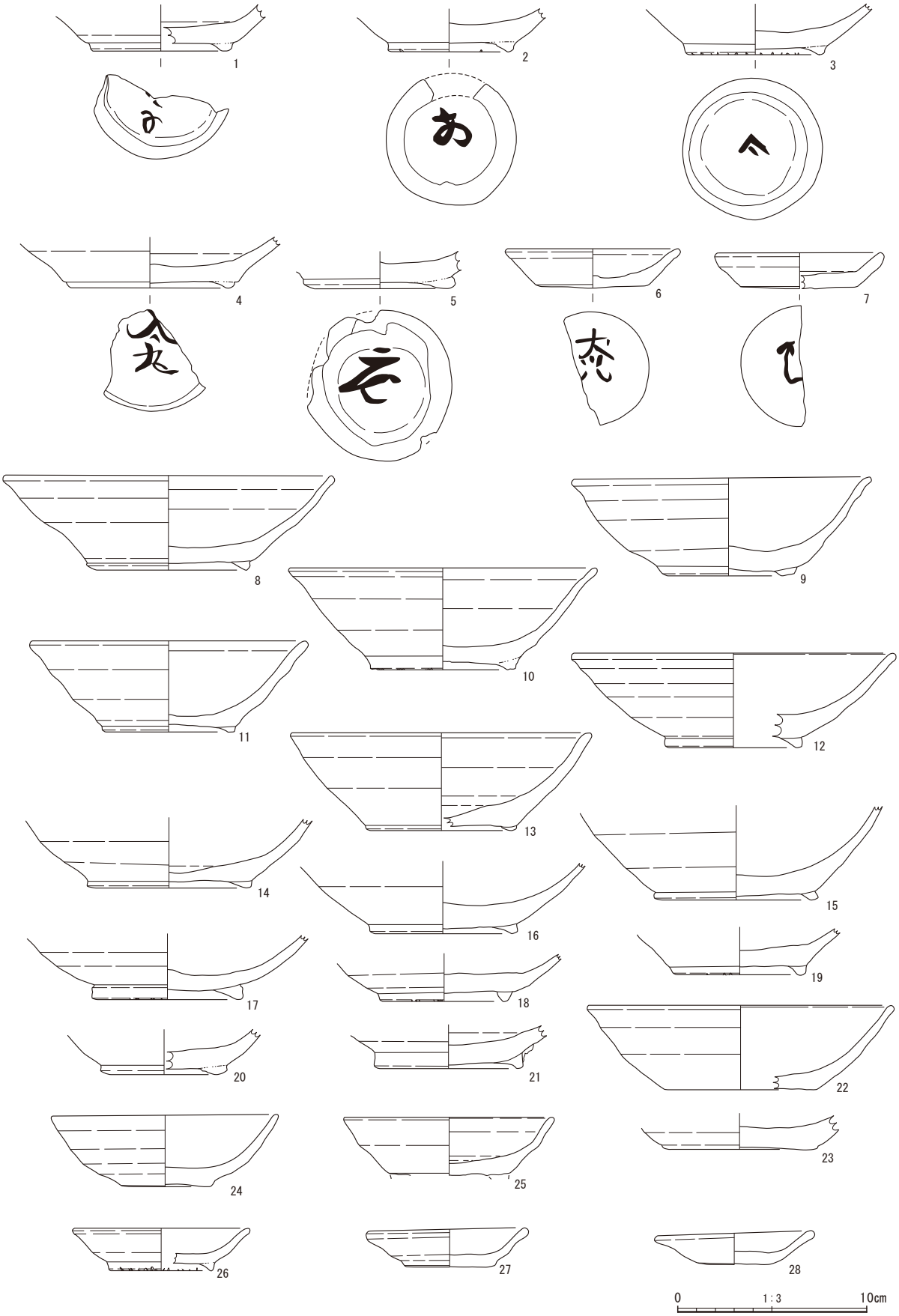
１は、高台が踏ん張るように外側に張り出している。体部は弧を描くように立ち上り、口縁部は外反している。内面に重ね焼きの跡が残っている。墨書は判読不能である。

２は、外側に張り出すような高台が付けられている。内面の重ね焼きの痕跡以外の部分と外面の高台内側以外の部分に自然釉が付いている。底面に墨書「大」が見られる。高台の形態、口縁の外反から、12 世紀前半と思われる。

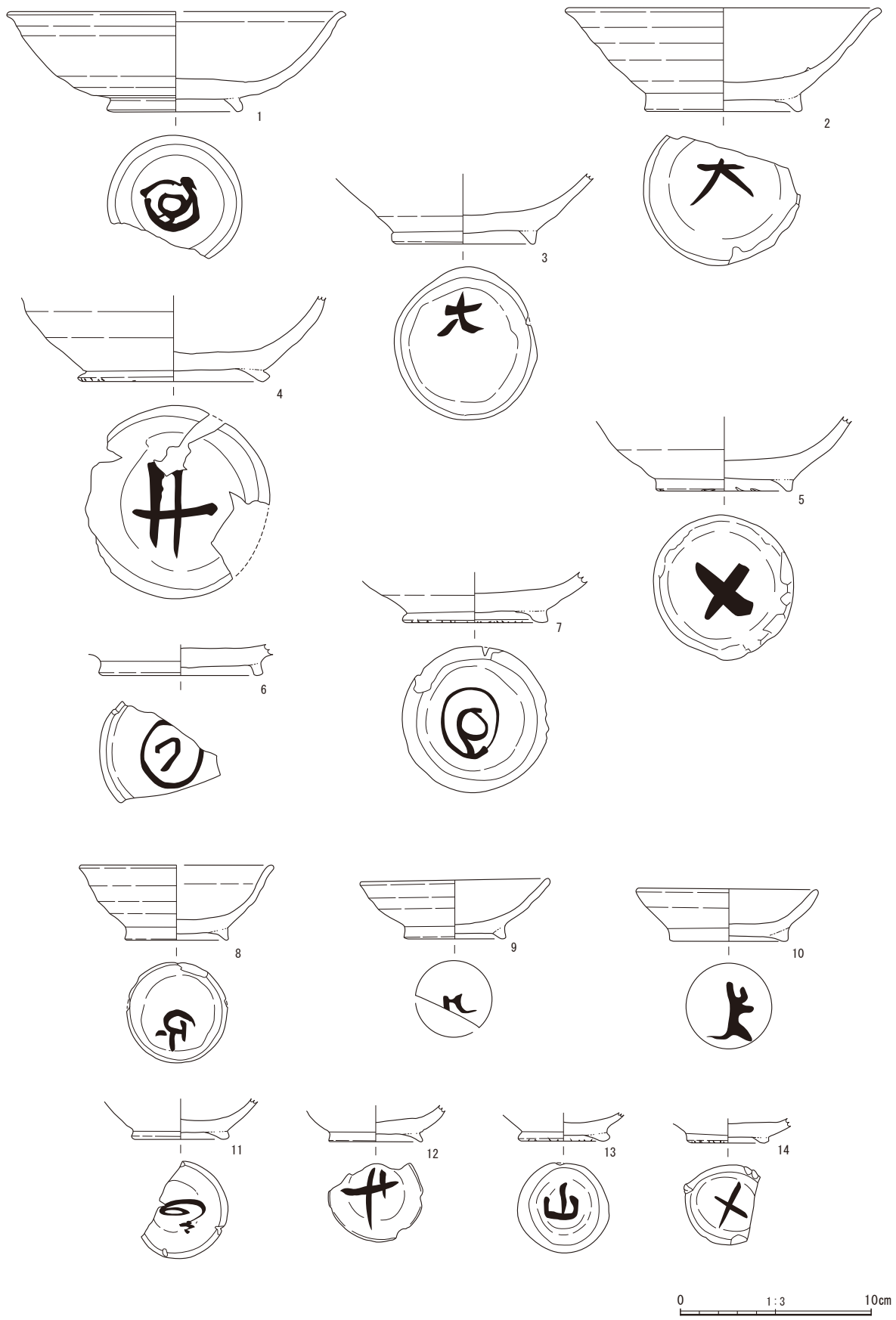
３は、高台は太さが一律でない上に歪んでいる。底部に「大」と見える墨書がある。内部に墨が付着していることから、硯に転用したと思われる。12 世紀後半と考えられる。

４の高台は、茶碗自身の重さで潰れている。高台接地面には籾痕が付いている。墨書は判読できない。12 世紀後半と考えられる。

５の高台は低く、接地面にスノコの痕跡が付いている。底面に「×」と見える墨書がある。体部に丸みがあることから、12 世紀後半～末と思われる。



第 139 図　包含層出土遺物実測図 1



第 140 図　包含層出土遺物実測図２

６の高台は、断面が四角形でしっかりしたものになっている。12 世紀代の山茶碗と思われるが、灰釉陶器の可能性もある。墨書は記号のように見えるが、判読できない。

７は高台に籾痕が見られる。高台が低くなっていない点では、12 世紀中頃の可能性が考えられるが、高台接地面の籾痕が付いていることから、12 世紀末になると思われる。13 世紀には入らないであろう。墨書は判読できない。

８～ 14 は小碗である。８の高台は三角形で、僅かに外反している。体部は弧を描くように立ち上り、口縁は僅かに外反している。12 世紀前半と考えられる。文字のような墨書があるが、判読できない。

９の高台は、外側に張り出している。体部は緩やかな曲線を描いて立ち上がっていて、口縁は外反していない。12 世紀前半と考えられる。墨書は判読できない。

10 の高台は、外側に張り出すように付けてある。高台の高さは低いが、断面が三角形になるように撫でてある。12 世紀代に収まると思われる。墨書は判読できない。

11 の高台も外側に張り出すように付けてある。12 世紀代に収まると思われる。墨書は崩し字を書いたように見えるが、判読できない。

12 は、外側に張り出すように低い高台を付けてある。墨書は判読できない。時期は 12 世紀前半～中頃と思われる。

13 の底面には「山」の墨書が見られる。高台には籾痕が付いている。高台は低いが、太くしっかりしたものになっていることから、12 世紀後半と考えられる。

14 には低い高台が付いていて、高台接地面には籾痕が付いている。体部の形態が不明であるが、12 世紀後半～末に収まるであろう。底面には「×」の墨書が見られる。

第 141 図に掲載した山茶碗も 12 世紀代と考えられるものである。１～６は輪花碗で、１～４には釉を漬け掛けしてある。口径は 16cm を超え、体部は緩やかな曲線を描くように作られている。高台は高さのあるしっかりしたものが付けられている。12 世紀前半～中頃のものと考えられる。

１には、断面が三角形のしっかりした高台が付けられていて、高台を付けた際に撫でた痕跡がはっきり残っている。体部は緩やかな曲線を描くように立ち上がり、口縁は外反している。外面に釉が付けられているが、発色は良くない。

２の高台は太く、外側に張り出すように付けてある。体部は緩やかな曲線を描くように立ち上がり、口縁は僅かに外反している。

３の高台は低いが、しっかりした作りで、高台を付けた際の撫でも丁寧である。体部は緩やかな曲線を描くように立ち上がり、口縁は外反している。輪花は口縁を指でつまんで作ってある。

４は、１～３に比べて体部の丸みが少ない。高台は高くしっかりしている。

５は、口縁が緩やかに外反している。体部上半～口縁の破片であるが、体部は緩やかな曲線を描いており、薄く丁寧な作りの印象を受ける。１～４と異なり、釉は付けられていない。

６は、体部が緩やかな曲線を描くように立ち上がり、口縁を外側につまみ出すように外反させている。

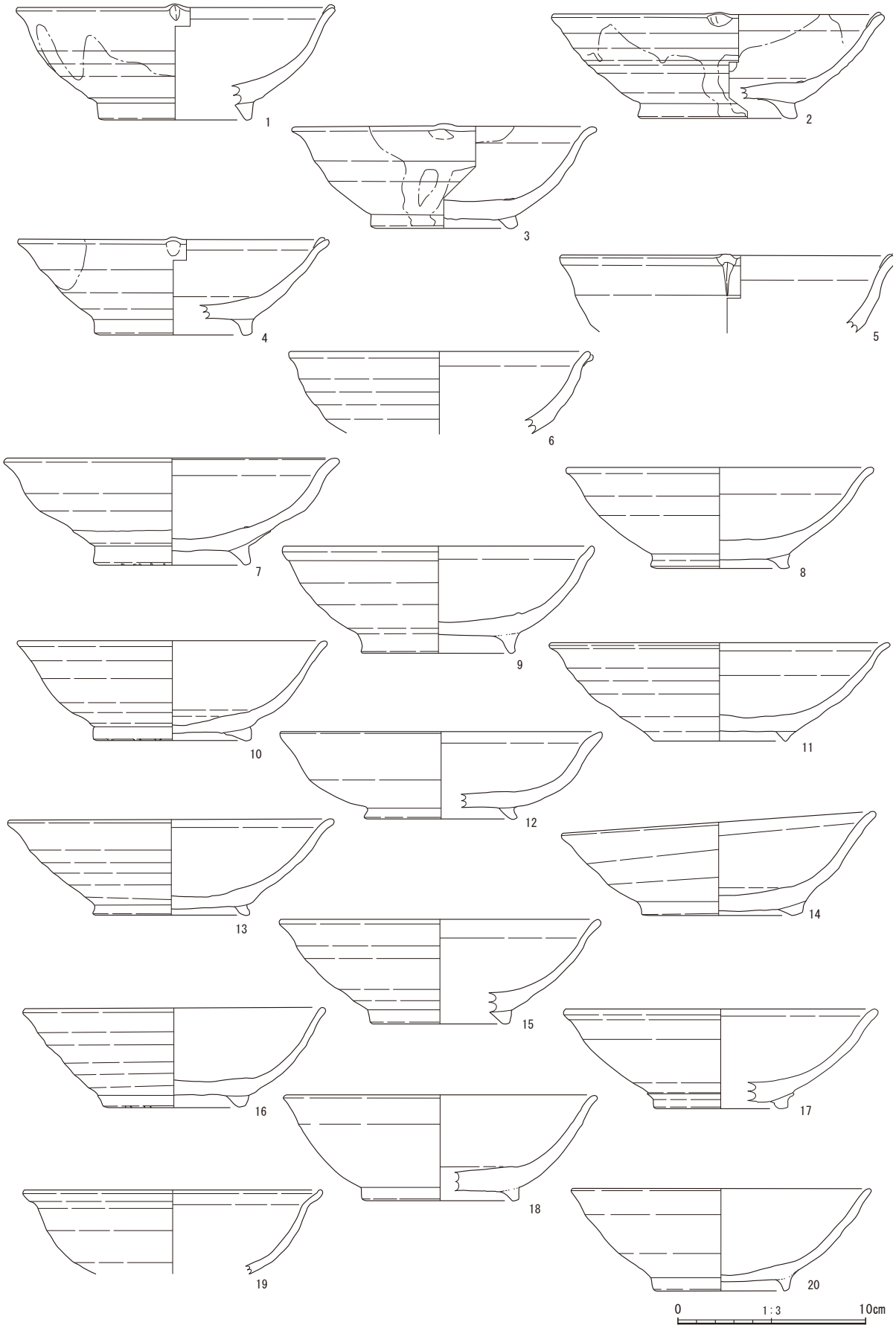
７～ 18 は、高さのあるしっかりした高台が付けられている。いずれも体部は緩やかな曲線を描くように立ち上がり、口縁は外反しているものが多い。概ね 12 世紀後半～末に位置付けられるであろう。

７の高台は太く、しっかりした作りになっている。接地面には籾痕が付いている。口縁は外反している。内面に重ね焼きの痕跡があり、外面にも重ね焼きをした際の別の茶碗の一部が付着している。

８の高台はしっかりした作りになっている、内面には重ね焼きの痕跡が残っている。

９には、断面三角形のしっかりした高台が付き、高台を付けた際の撫でも丁寧である。

10 の高台は低いが、外側に張り出すように付けてある。高台接地面には籾痕が付いている。口縁はわずかに外反している。



第 141 図　包含層出土遺物実測図３

11 には、断面三角形の低い高台が付いている。高台を付けた際に丁寧に撫でた結果、断面が三角形に仕上がっている。

12 の高台は、外側に張り出すように付けてある。内面には煤が付着している。

13 にも外側に張り出すように高台を付けてある。内面には重ね焼きの痕跡があり、重ね焼き以外の部分に厚く自然釉がかかっている。

14 の高台は低く、高台を付けた際の撫でも雑な印象を受ける。内面には煤が付いている。体部の丸みが残っていることから、12 世紀末と考えられる。

15 には断面が三角形のしっかりした高台が付いている。内面には自然釉が付いており、重ね焼きの痕跡もある。

16 には太く、しっかりした高台を付けてあるが、高台を付けた際の撫では雑である。口縁の外反は弱い。内面に墨が付いており、内面底面付近は磨滅していることから、硯に転用されたと思われる。

17 には断面が逆台形の高台が付いている。高台を付けた際の撫では雑である。

18 は、底部が部厚い特徴がある。高さのある高台、丸みを帯びた体部、外反する口縁といった特徴から、これも 12 世紀後半に位置付けられる。

19 は、高台の形態は不明であるが、口縁を大きく外反させたうえに、端部を持ち上げるようにして仕上げている特徴がある。

20 には、三日月形高台がやや崩れたような形態の高台が付いている。体部の丸みはあるが、口縁の外反は弱い。

第 142 図－１～ 11 も概ね 12 世紀後半～ 12 世紀末に位置付けられると考えられる。１は復元口径が 18cm 近くある。逆台形の高台を付けてあり、高台接地面には籾痕が見られる。体部の立ち上がりが直線に近いことから、口径は大きいが、12 世紀末になると思われる。

２は、高台接地面には籾痕が見られる。体部は緩やかな曲線を描くように立ち上り、口縁は僅かに外反している。復元口径は 18cm に及ぶ。３には断面三角形の低い高台が付いている。高台を付けた際の撫では丁寧である。復元口径は 18cm 近くある。

４は、爪形高台ではないが、高台が爪のように屈曲している。高台のつけ方は雑である。接地面には籾痕が付いている。２つの破片が接合しているが、片方は赤く変色していることから、被熱していると思われる。復元口径が 17cm 近くあることから、12 世紀中頃まで遡るかもしれない。

５は底が分厚く、高台は外に向かって張り出している。高台の一部に籾痕のような痕跡が見られる。口縁は外反している。内面は平滑になったうえに墨が付着していることから、硯に転用したと思われる。

６は高台は低く潰れたようになっている。接地面には籾痕が付いている。内面に墨が付いていることから、硯に転用されたと思われる。体部に丸みが残っていることから、13 世紀まで下ることはないと思われる。

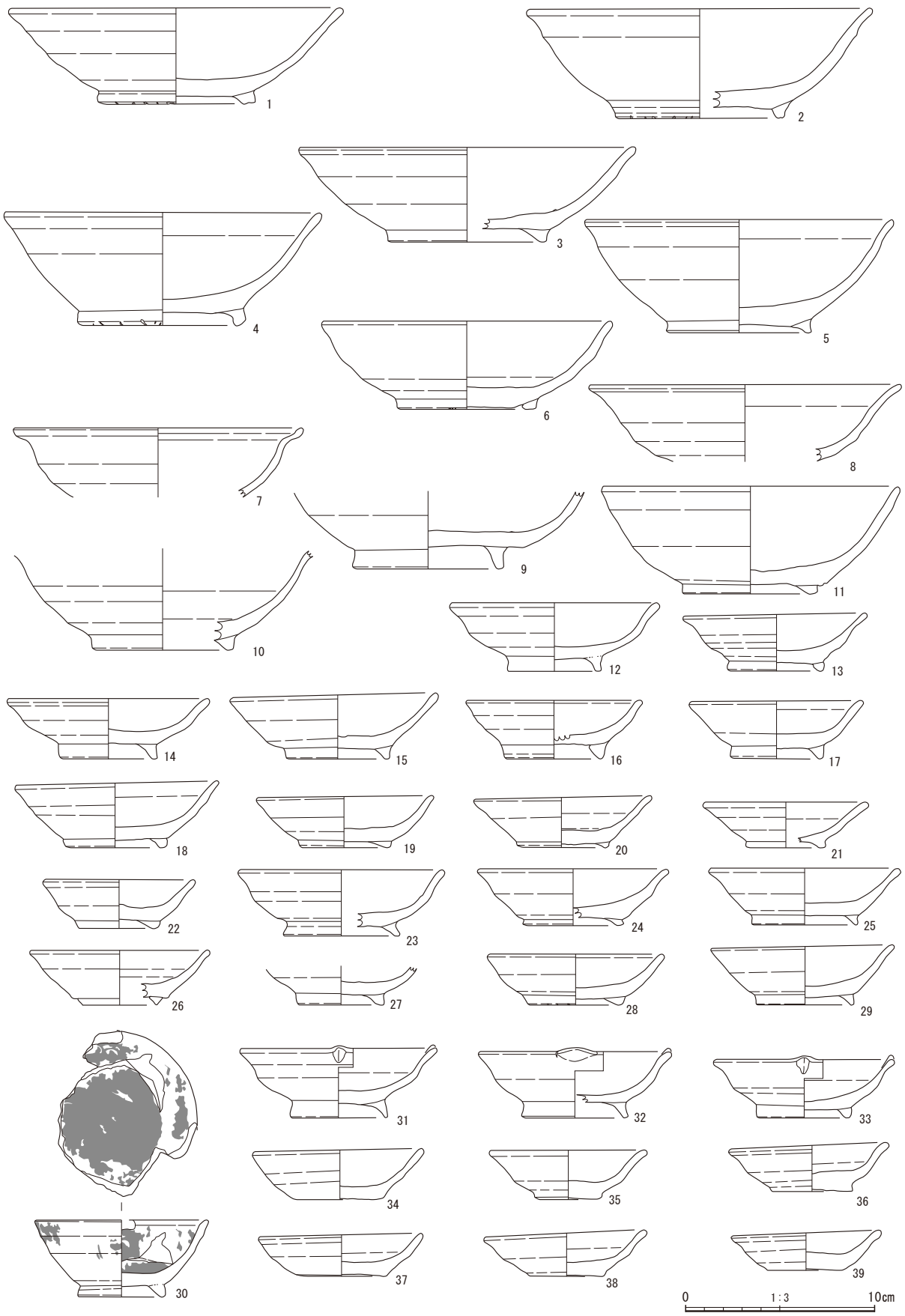
７は口縁～体部の破片であるが、口縁を大きく外反させ、口縁端部を持ち上げるようにして仕上げている特徴がある。胎土の状況から東遠江産の山茶碗の可能性がある。

８は体部～口縁の破片で、体部は緩やかな曲線を描くように立ち上り、口縁は僅かに外反している。

９には、高い高台が付いていて、高台を付けた際の撫でも丁寧である。高台接地面には籾痕が付いている。内面に自然釉が付き、重ね焼きの痕跡がある。

10 は断面が三角形のしっかりした高台が付いている。高台の復元直径が 7.5cm あることから、大型の碗になると思われる。内面に自然釉が付いている。

12 ～ 33 は小碗である。12 ～ 29 は概ね 12 世紀後半～末に収まると思われる。31 ～ 33 は輪花碗で、これらは 12 世紀中頃までさかのぼると思われる。34 ～ 39 は小皿で、時期の判断は難しいが、体部が



第 142 図　包含層出土遺物実測図４

丸みをもって立ち上がっていることから、13 世紀まで下ることはないと思われる。以下、主なものについて個別に記載する。

12 は、体部と高台で粘土が異なり、体部は白っぽく、高台は黒っぽくなっている。高台は高く、高台を付けた際の撫でも丁寧である。内面に自然釉が付いている。13 の底部には墨書が見られるが、判読できない。17 の底面にも墨書の可能性がある黒い滲みがある。21 は素焼きであるが、形態は山茶碗の小碗である。30 は断面が三角形のしっかりした高台が付いており、体部の立ち上がりが急角度のため、深碗のようになっている。内面には漆が付いている。

第 143 図は、東遠江産、知多産、瀬戸産の山茶碗で、12 世紀代と考えられるものである。

１～５はいずれも東遠江産の耳皿で、いずれも 11 世紀代に入ると思われる。６～ 25 は、東遠江産の山茶碗で、概ね 12 世紀中頃～後半に収まると考えられる。26 ～ 32 は、独特の白っぽい焼き上がりから、知多産の山茶碗と考えられる。いずれも 12 世紀後半と考えられる。33 は胎土から瀬戸産と考えられる山茶碗で、高台の形態が不明であるが、12 世紀中頃～後半に収まると思われる。次に、主なものについて個別に記載する。

６は、高台が茶碗自身の重みで潰れているが、本来はもっと高い高台だったと考えられる。高台接地面には籾痕が付いている。丸みを帯びた体部と外反する口縁から、12 世紀中頃と思われる。底面には記号と思われる墨書がある。７は小碗で、体部の外面に「×」の墨書が見られる。

26 は外側に張り出すようなしっかりした高台が付けてあり、体部は緩やかな曲線を描きながら立ち上がり口縁は外反している。良好な作りという印象を受ける。

（２）鍋（第 144 図）

１～６は中世の鍋で、いずれも口縁を短く折り返してある。口縁を内湾させる段階から、口縁を折り曲げる段階に移行した直後（北村 1996）と考えられ、この編年観によれば、いずれも 12 世紀後半に位置付けられる。

２　奈良時代～平安時代前期の遺物

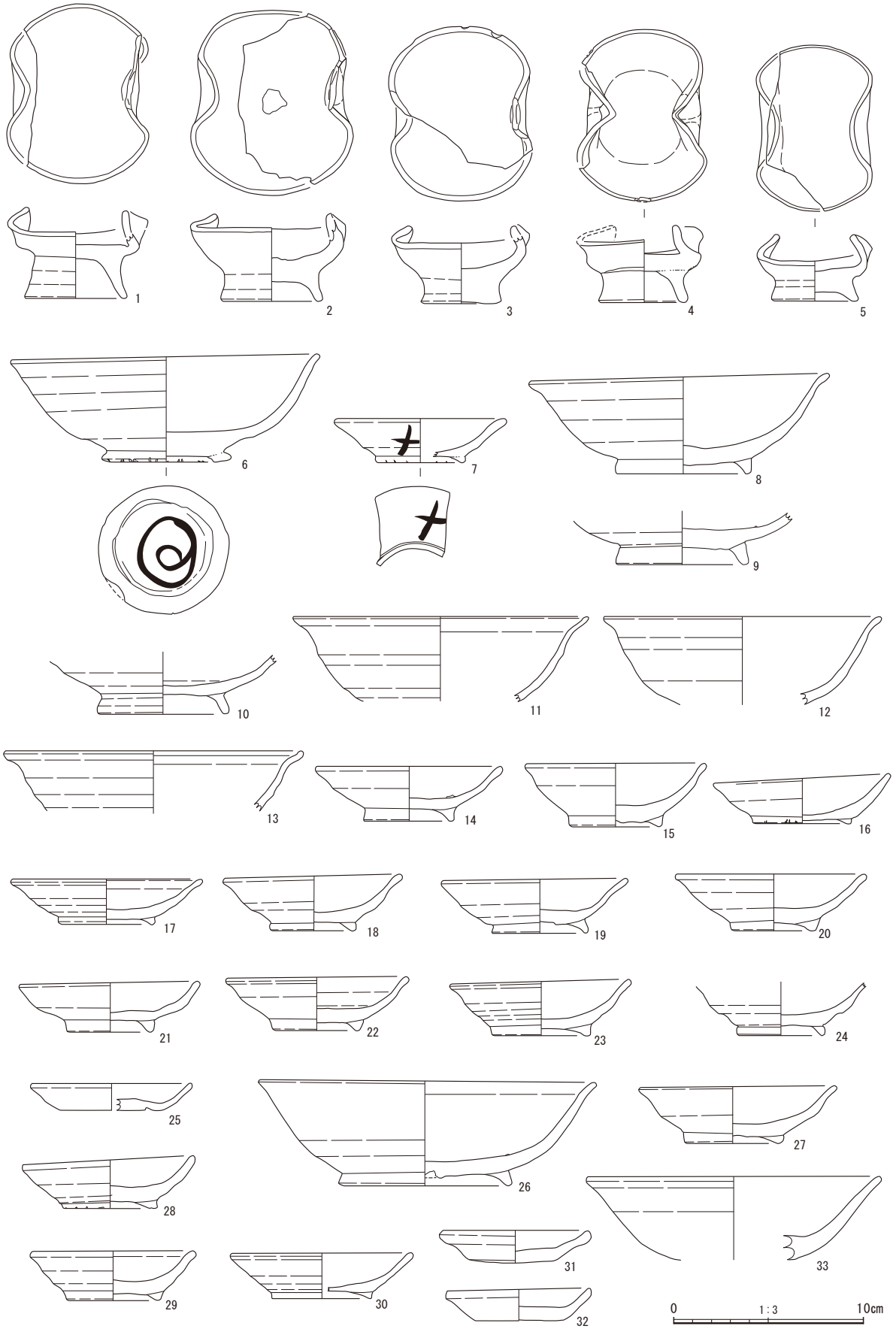
須恵器や土師器などの破片は多く出土したが、時期を特定できたものは少ない。特に灰釉陶器が極めて少ない点に特徴がある。

（１）須恵器（第 145 図）

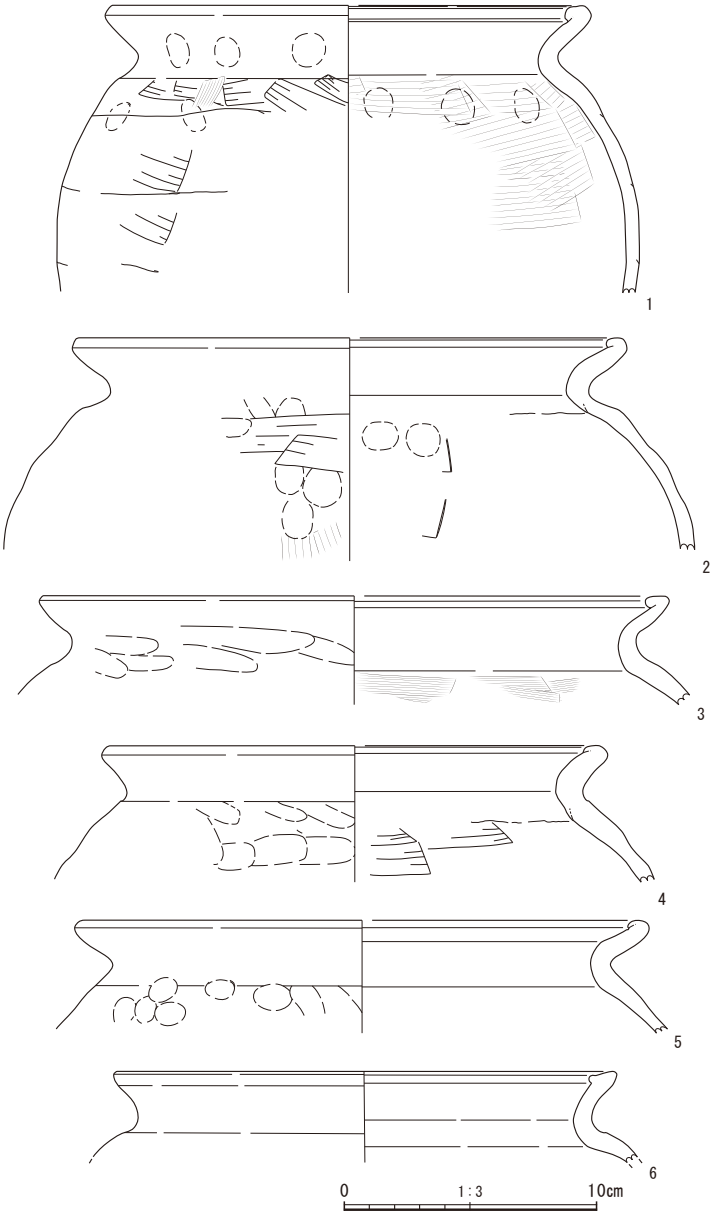
一部７世紀後半まで遡るものがあるかもしれないが、おおかた８世紀代に入るものを報告する。

１～６は８世紀代の蓋である。５と６は天井部が残っていないが、宝珠状の摘みが付いていたと思われる。１は天井部を同心円状に削ってある。端部は短く折り返して受け部を作っている。２は高さが低く、受け部は小さい。これは８世紀中頃と考えられる。３は、形態は須恵器の蓋であるが、質感は完全に土師質である。つまみの形態から８世紀の中に収まると思われる。４は湖西産の須恵器で、天井部を同心円状に削ってある。５は、全体的に弓なりになっているが、高さが低い。端部を短く折り曲げてある。これは８世紀中頃と思われる。６は器高が低く、平坦な印象を受けるが、受け部の立ち上がりがしっかりしている。

７～ 13 は無台の坏で、いずれも８世紀代に収まると考えられる。７は平底の坏で、体部～口縁は直線的に立ち上がる。８世紀中頃と考えられる。８は、平底から口縁が直線的に立ち上がっている。８世紀中頃～後半であろう。９は、平底無台坏で、ほぼ平坦な底部から体部が直線的に立ち上がっているため、底部と体部の境界にはっきりとした角ができている。口縁端部は面取りをしてある。10 は、推定直径が 10cm 程度の小型の箱坏である。11 も推定直径が 10cm 程度の小型の坏で、底部に「卜」のような墨書が見られる。12 は坏の底部で、「上」の墨書が見られる。13 は無台平底坏で、底部に「筒」の墨



第 143 図　包含層出土遺物実測図５



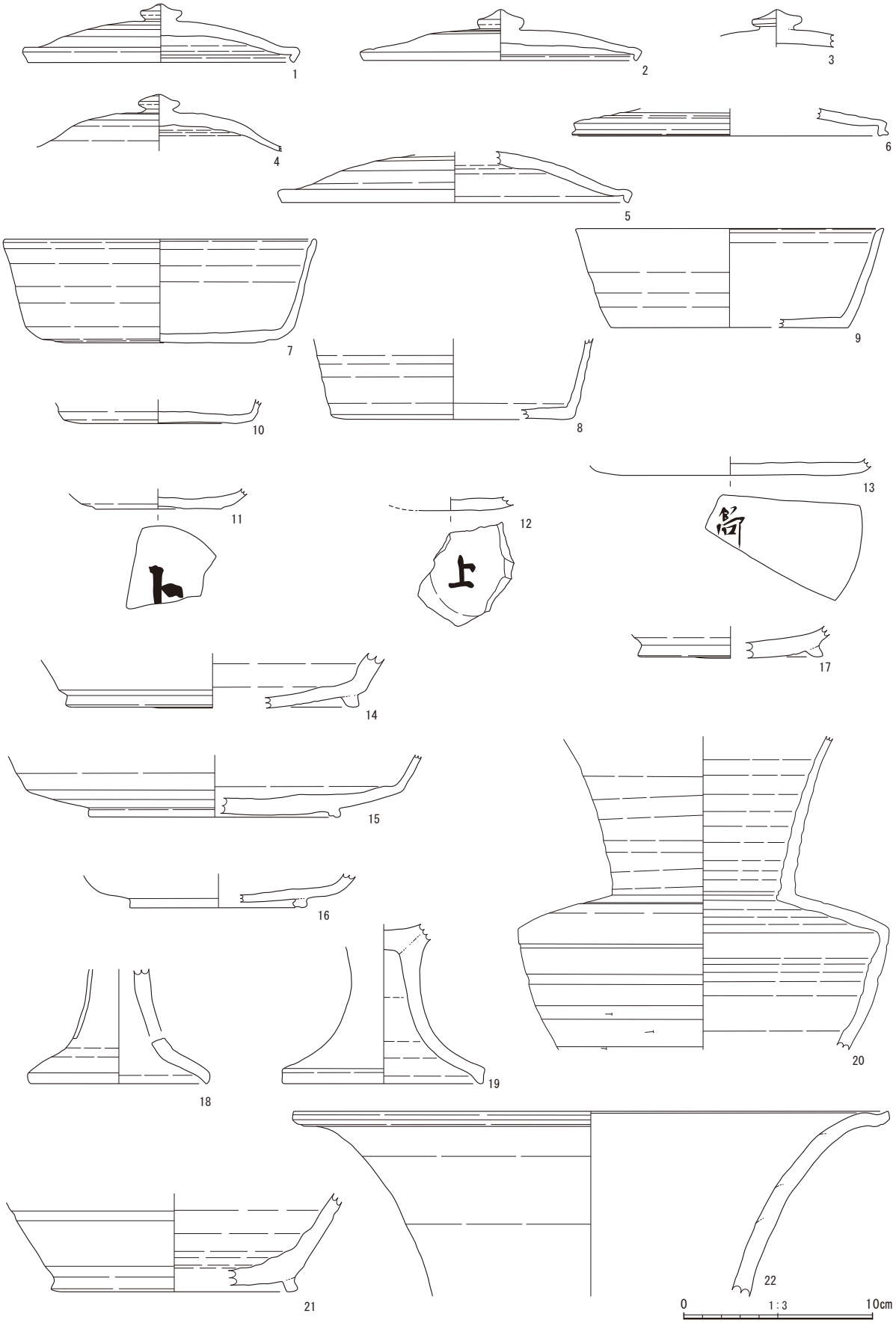
第 144 図　包含層出土遺物実測図６

書が認められる。

14、16、17 は有台坏、15 は有台の皿で、これらも８世紀代に入ると思われる。14 は高台が低く、坏の底部が接地するほどである。底部と体部の境界には明確な屈曲がある。８世紀前半～中頃と思われる。15 は、高台が低いため、皿の底面は接地している。皿の中心から高台までを砂の少ない粘土で作り、高台よりも外側に砂の多い粘土を継ぎ足して作っているため、高台を境に胎土の質と色が異なっている。16 も高台が低く、底面がわずかに接地している。底面が平らなことことから、８世紀代に収まると思われる。17 も高台が低く、底面が接地している。

18、19 は高坏の脚部で、両方とも坏の形態が不明であるが、裾が大きく広がっていることから、７世紀後半～８世紀前半に入ると思われる。

20 ～ 22 は長頸壺の頸部と底部で、いずれも８世紀代に入ると考えられる。20 は、胴部外面の下半は回転ヘラ削りで、胴部下半は内外面とも回転ヘラ削り、胴部上半は回転撫でで仕上げてある。胴部外面



第 145 図　包含層出土遺物実測図７

で強く撫でた部分が沈線状になっている。胴部～肩部は90度近く屈曲しており、肩部には自然釉がかかった部分がある。頸部～口縁は強い回転撫でで仕上げてある。口縁上端は、粘土の接合面で欠損している。８世紀前半～中頃と思われる。22は広口壺の破片で、口縁を水平になるまで広げ、端部を摘みあげている。これも８世紀代に収まると思われる。

（２）土師器ほか（第146図）

１は、復元口径は17cm近くある坏である。体部が急角度で直線的に立ち上がる特徴がある。内外面に丹を塗ってある。８世紀代と思われる。２は甕で、口縁が大きく開き、端部は水平になっていることから、８世紀代と思われる。

３と４は､いずれも布目のある８世紀代の瓦である｡３は焼成不良である｡包含層から出土したもので、遺構に伴うものではないが、摩滅が進んでいないことから、遠方から流れてきたとは考えにくい。近隣に奈良時代の瓦葺きの建物が存在したことを示唆する重要な遺物である。

５～８は清郷型鍋である。いずれも肥厚した短い口縁部が「く」の字に屈曲して外反している。口縁端部を撫でて面取りをしてある。北村（2001）の編年から、５～７は９世紀後半～10世紀初頭、８は口縁の肥厚が弱くなり、若干内湾気味になっていること、胴部上半の締まりが弱く、外反気味になっていることから、５～７より新しく、10世紀前半になると考えられる。

（３）陶磁器（第147図）

１は緑釉陶器の碗で、内面の底と体部の境界に段が形成されていることから、12世紀代と思われる。

２は陶器の皿で、内面に黒色の釉がかかっているが、鉄分を多く含んだ釉と思われる。時期は12世紀代と思われる。

３～６は青磁である。３、４は口縁を折り返して肥厚させた玉縁口縁で、12世紀代に位置付けられる（原1999)。５は碗の体部の破片で、底部に向かって急激に暑くなっている。３、４と同時期の12世紀代と思われる。６は碗の底部で、内面に稜線が形成されていることから、12世紀代と考えられる。

３　古墳時代の土器

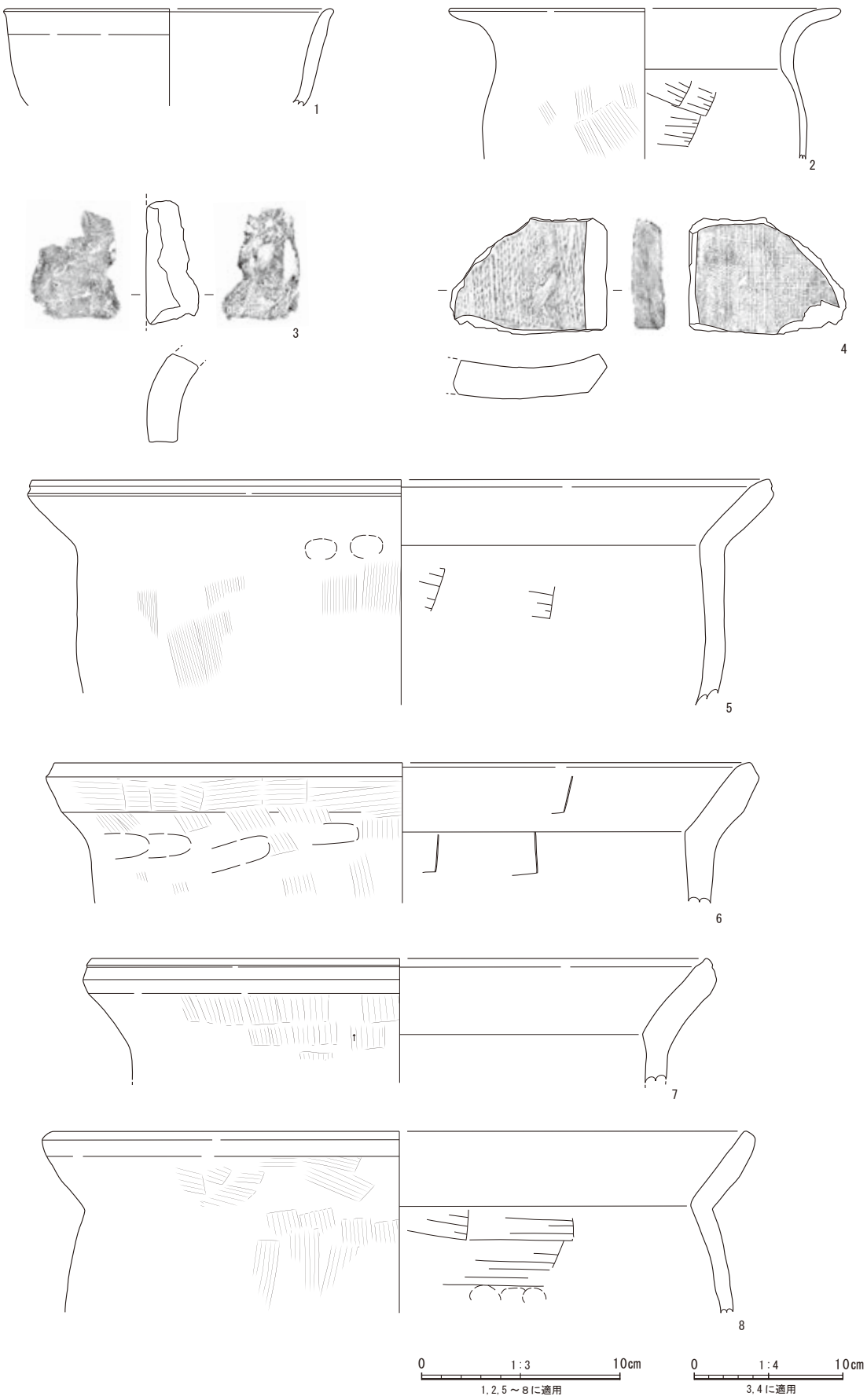
（１）須恵器（第148図）

包含層から出土した須恵器のうち、図化可能であったものは少ない。時期は５世紀代（１、５）から８世紀代（11）まで認められる。

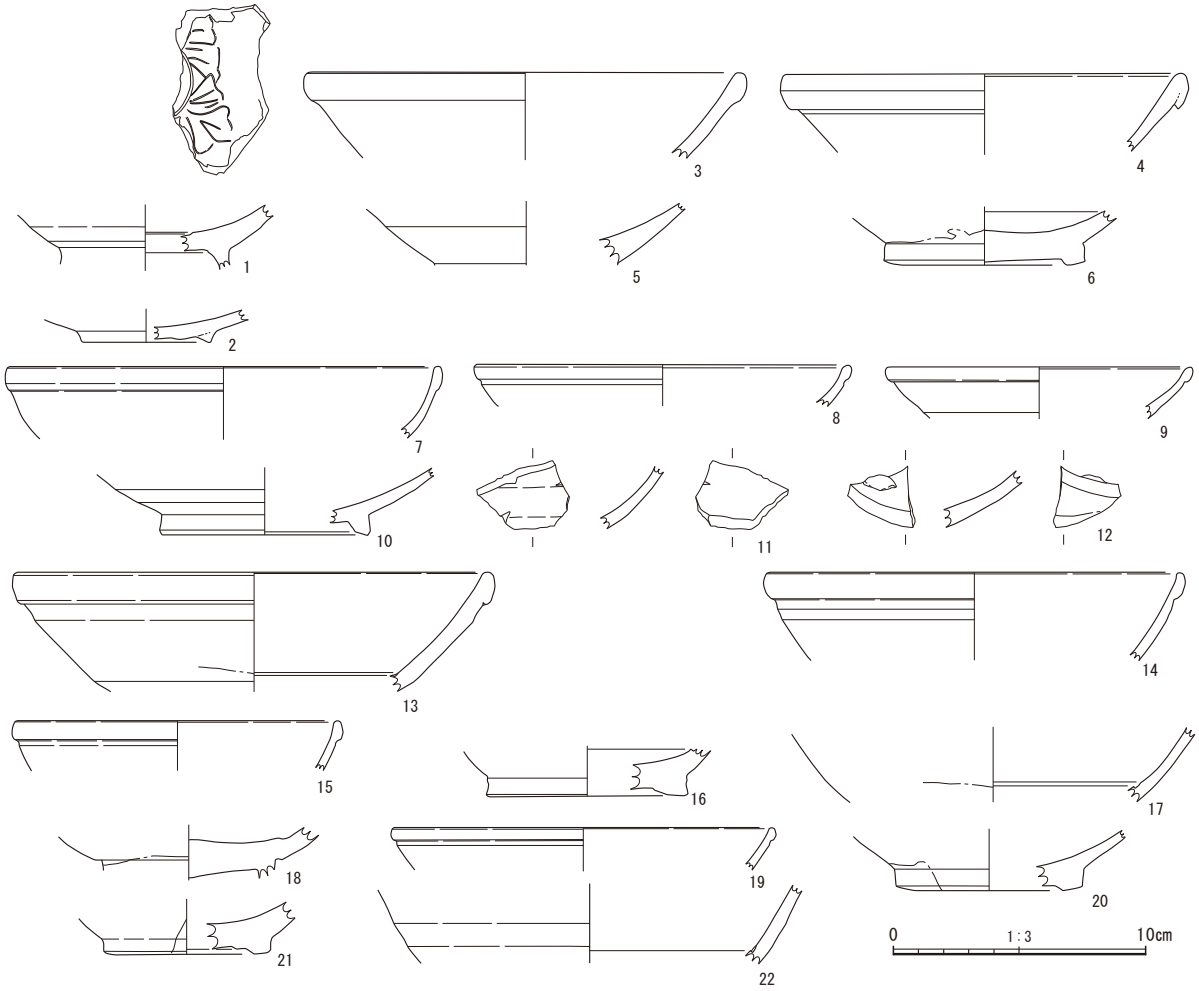
１～４は蓋である。１は、弓なりの天井部から、胴部が垂直に近い角度で降りていること、天井部と胴部の境目に明確な稜線があることから、口縁端部の形態は不明であるが、５世紀後半の中に収まると思われる。２は、小型の蓋で、口縁部は内湾している。底部のヘラ記号が見られる。小型化していることから、７世紀後半と考えられる。３は、復元口径が10cm弱で、口縁部と体部の境界が、段があった頃の名残のように屈曲している。7世紀前半～中頃と思われる。４は直径が10cmに満たない蓋。削りは同心円状になっている。口縁部は屈曲させてある。これも７世紀代と思われる。

５～９は坏である。５は湖西産と考えられる。口縁は長く立ち上がっている。底部と蓋受け部の境界に屈曲が見られる。口縁端部は面取りしてある。時期は５世紀後半と考えられる。６は、底部には同心円状の削りが見られる。蓋受けは口縁よりも立ち上っている。６世紀中頃と思われる。７は、復元口径が９cm程度であること、底部から体部の立ち上がり角度が急になっていることなどから、７世紀前半と思われる。８は湖西産で、半球体を呈する坏で、蓋の可能性もある。７世紀後半と思われる。９は、底部は削りの後､不定方向に粗く撫でてある。体部～口縁は直線状に立ち上がる。７世紀末と思われる。

10は、口縁は外側につまみだすように屈曲させてあり、口縁端部には段が付けられている。７世紀後半と考えられる。11は台付の皿で、高台が低いため、皿の底部は接地している。底部から屈曲して



第 146 図　包含層出土遺物実測図８



第 147 図　包含層出土遺物実測図９

口縁が立ち上がっている。口縁は外反せず、直線的に立ち上がっている。８世紀前半と思われる。

12 は、高坏の脚部で、脚部が長くないこと、裾部が大きく広がっていると思われることから、７世紀前半～中頃と思われる。

13 は瓹の頸部で、頸部と口縁の境界に凸帯を作ってあり、口縁端部は撫でて面取りをしてある。頸部外面には波状文が見られる。内外面に自然釉が付いている。７世紀中頃～後半と思われる。

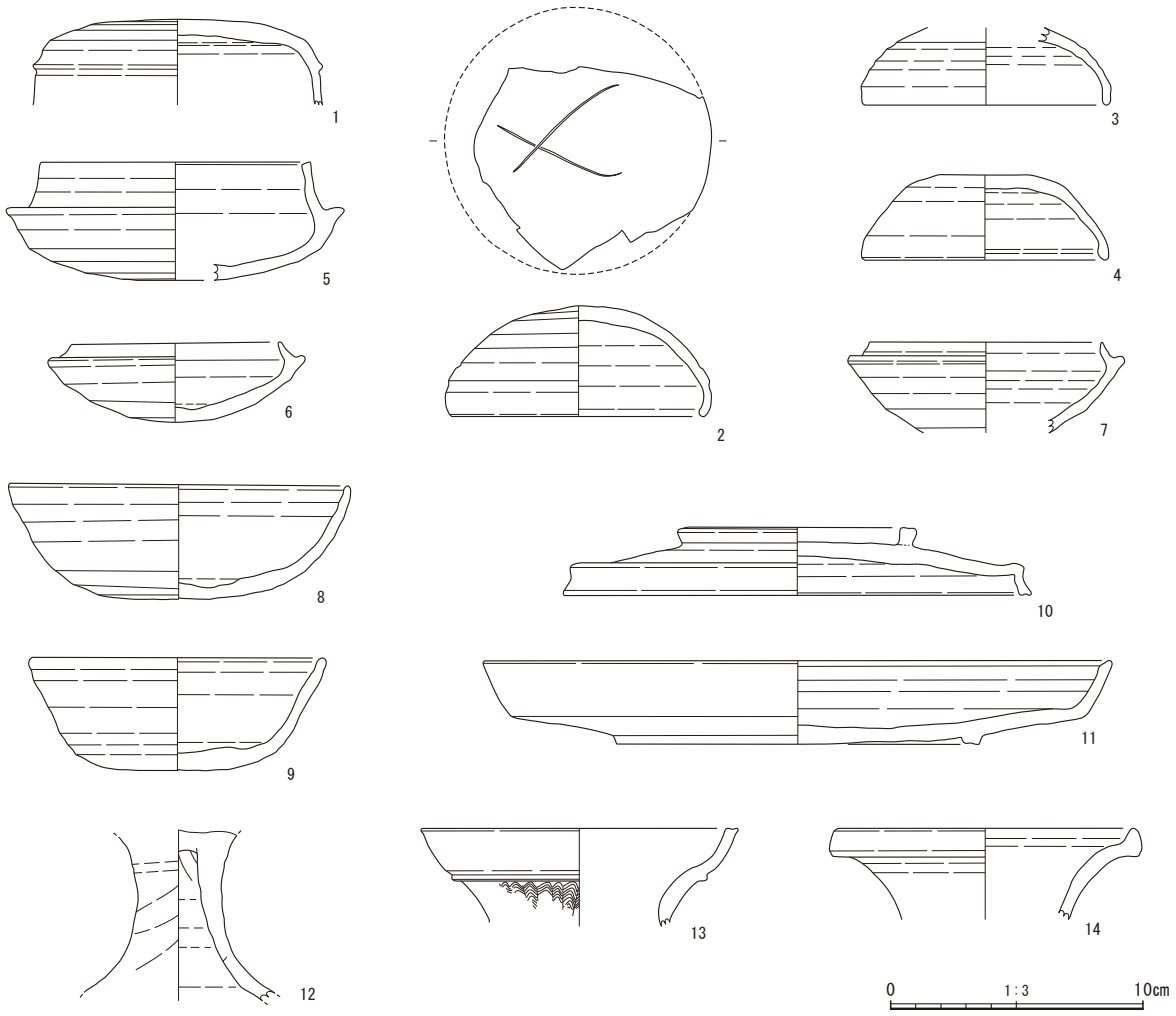
14 は壺の頸部で、口縁端部を強く撫でて上下に拡張してあることと、口縁が大きく開いていることから、７世紀後半と思われる。

（２）土師器（第 149 図）

素焼きの土器片は多く出土したが、時期を特定できたものは少ない。１、２は、坏との接合部から脚が大きく広がるもので、古墳時代前期に位置付けられる。１には三方向に円形の透かしが入っている。３は、脚部がやや長く延びているが、脚部と裾部の境界に屈曲が見られないことから、古墳時代前期の中に収まり、中期には至らないと考えられる。この土器は強い２次焼成を受けて、変色していることから、鞴の羽口に転用された可能性がある。４、５はやや長脚化しており、脚部と裾部の境界に屈曲が見られることから、古墳時代前期～中期初頭になると考えられる。

６は長脚化しているが、裾部が広がっていない。脚部と裾部の境界が屈曲していることから、古墳時代前期に入ると思われる。

７～ 17 は長脚化が進み、脚部で屈曲して裾部が広がっている。裾部が残っていないものもあるが、



第 148 図　包含層出土遺物実測図 10

脚部と裾部の接合部分で欠損しており、裾部が広がっていたことは想定できる。以上から、７～ 17 は古墳時代前期～中期初頭に位置付けられる。

18 は壺の頸部～口縁の破片で、口縁部は折り返して肥厚させてある。７世紀代に入ると思われる。

19、20 は台付甕の台の部分で、これだけで時期を判断することは困難であるが、薄く作ってある点では、古墳時代前期に入ると思われる。

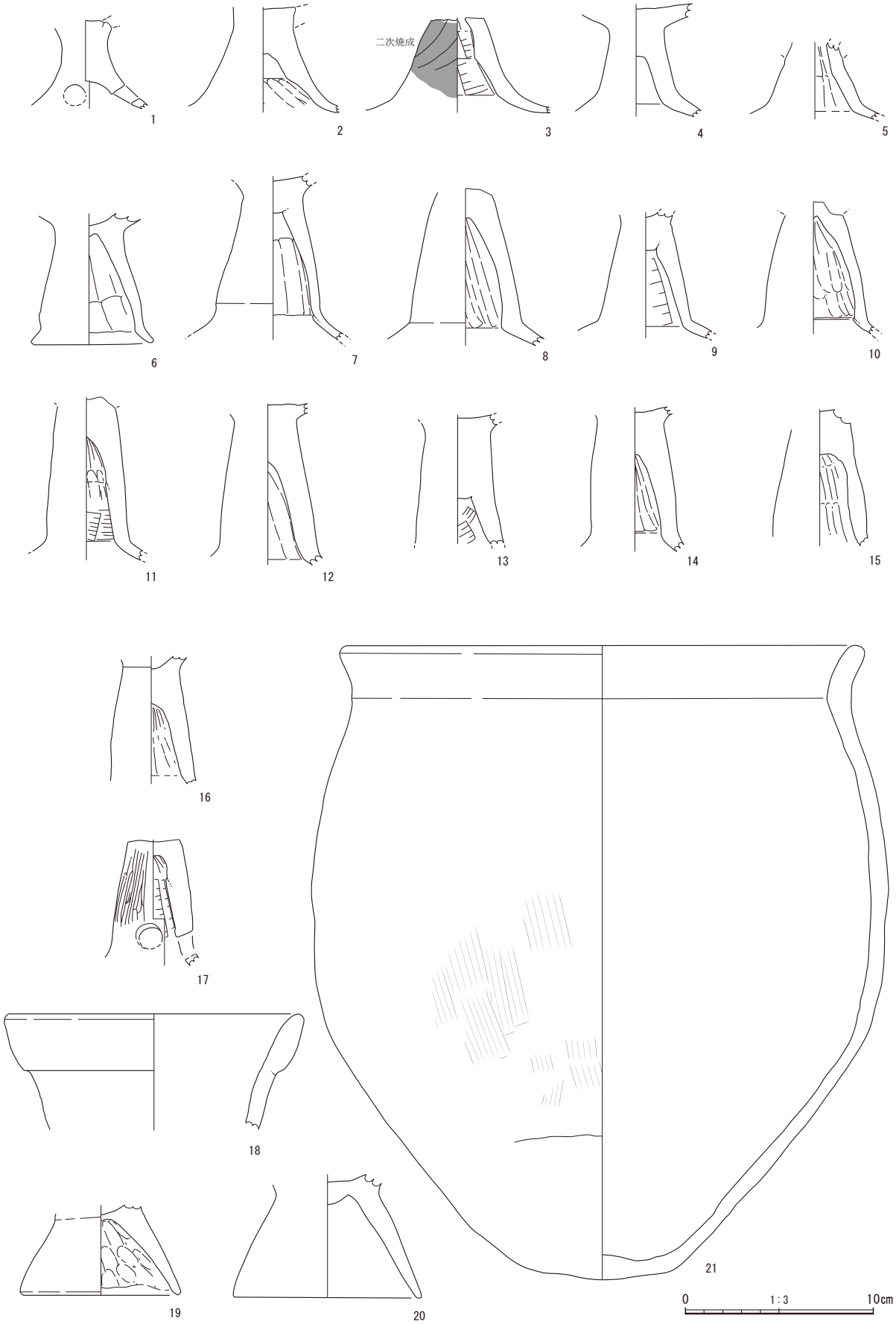
21 は甕で、全体的に風化が進んでいるため、調整痕ははっきりしない。胴部外面に僅かに縦方向の刷毛目が残っている部分があるが、器面全体に凹凸が多いことから、指頭圧痕が残っているのかもしれない。古墳時代のものと考えられる。

（３）　土製品（第 150 図）

１は甑の把手で、穿孔が見られる。２～ 15 はミニチュア土器である。５は壺、６は丸底壺を模したと思われる。８は底部に穿孔がある。11､12 はかなり小さな模倣品で､製作した際の指の跡が顕著に残っている。13 は甑の把手を模したと思われる。14、15 は口をすぼめていることから、無頸壺を模しているようである。

16 は須恵器の破片で、獣足が剥落した痕跡があることから、獣足が付いた壺の破片と思われる。

17 は土錘に見えるが、全体が被熱で黒くなっており、穴の中も黒く変色していることから、鞴の羽口の可能性が高い。18 ～ 20 も鞴の羽口の破片である。



第 149 図　包含層出土遺物実測図 11

22 ～ 24 は不明土製品である。22 は、須恵質で、台付の器の底部に見えるが、筒状にはなっていない。底面と思われる部分は平坦面を形成してあり、側面は撫でて仕上げてある。23 は僅かに湾曲した須恵質の焼き物の破片で、湾曲した外面にはナデの痕跡、内側には叩きの後に撫でた痕跡が見られる。側面の一端を面取りしてある。側面のその他の部分は、粘土の接合部分で割れている。24 は須恵質で、粘土紐を三つ編みのように編んだもので、湾曲していることと、何かに接着した痕跡があることから、装飾的な把手と思われる。25 は竈の支柱と思われる土製品である。

26 ～ 46 は土錘である。破片を含めると、土錘は多数出土した。

（４）石製品（第 151 図）

１はメノウ製の勾玉で、完形品である。２は滑石製の紡錘車で、これも完形に近い。３は磨製石斧の刀部片である。４～６は叩き石で、表面に敲打痕が見られる。７、８は磨石で、研磨によって平坦になった部分がある。９～ 17 は目の細かい砂岩製の砥石である。

特記すべきは９の石製品である。砂岩を使用した砥石であるが、砥石として使用した後に、非貫通の穴を開けて、別の用途に転用した可能性が高い。まずは事実を記載する。石材は目の細かい砂岩である。砥石として使用された結果、角柱状になっているが、角柱を形成する側面４面のうち、砥石として使用されたのは。実測図中に表示したＢ面とＣ面で、Ａ面とＤ面は自然面である。砥石として使用した後、Ｄ面のほぼ中央に穴が開けられ、その穴を中心に十字に配列された４つの穴が開けられている。これらの他に、中央の穴に接するように小さな穴が２つある。これら２つの穴は、十字を描くように穴を開けようとして、途中で断念したと思われる。Ｂ面にも６個の穴が開けられていて、うち４個の穴はＤ面と同様に十字に配列されたように開けられている。

これらの穴は、砥石の研磨痕を切っていることから、砥石として使用された後に開けられたことは間違いない。このことから、砥石を別の用途に転用したことになる。砥石に穴を開けることに実用上の意味はない。したがって、実用以外の用途に使用したことが考えられる。

十字に配列された穴で想起されるのは、島田市のミョウガハラ遺跡で発見された、10 世紀後半～ 11 世紀前半の地鎮・鎮壇祭の跡である（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004）。これは１基の土坑を中心として、東西南北の方向に１基ずつ土坑が掘られていた。いずれの土坑も、中に小円礫が入れられていた。小円礫は、白色系、黒色系、灰色系、赤色系、青緑系の５色が選択され、土坑によって、５色、３色、１色の各色の小円礫が入れられていた。また、４基の土坑には灰釉陶器の長頸瓶が据えられおり、残る土坑１基も、円形に小円礫が出土しなかった部分があったことから、そこに長頸瓶が置かれていた可能性が報告されている。

この土坑群の性格は、『覚禅鈔』の「地鎮〃壇法」に見える「五色玉」の埋納、「五穀五宝五香五薬」を入れた「金銅器」の埋納等の記載に則して考えると合理的な説明が可能であることから、『覚禅鈔』の「地鎮〃壇法」にのっとった地鎮・鎮壇祭の痕跡の可能性が高いと報告されている。

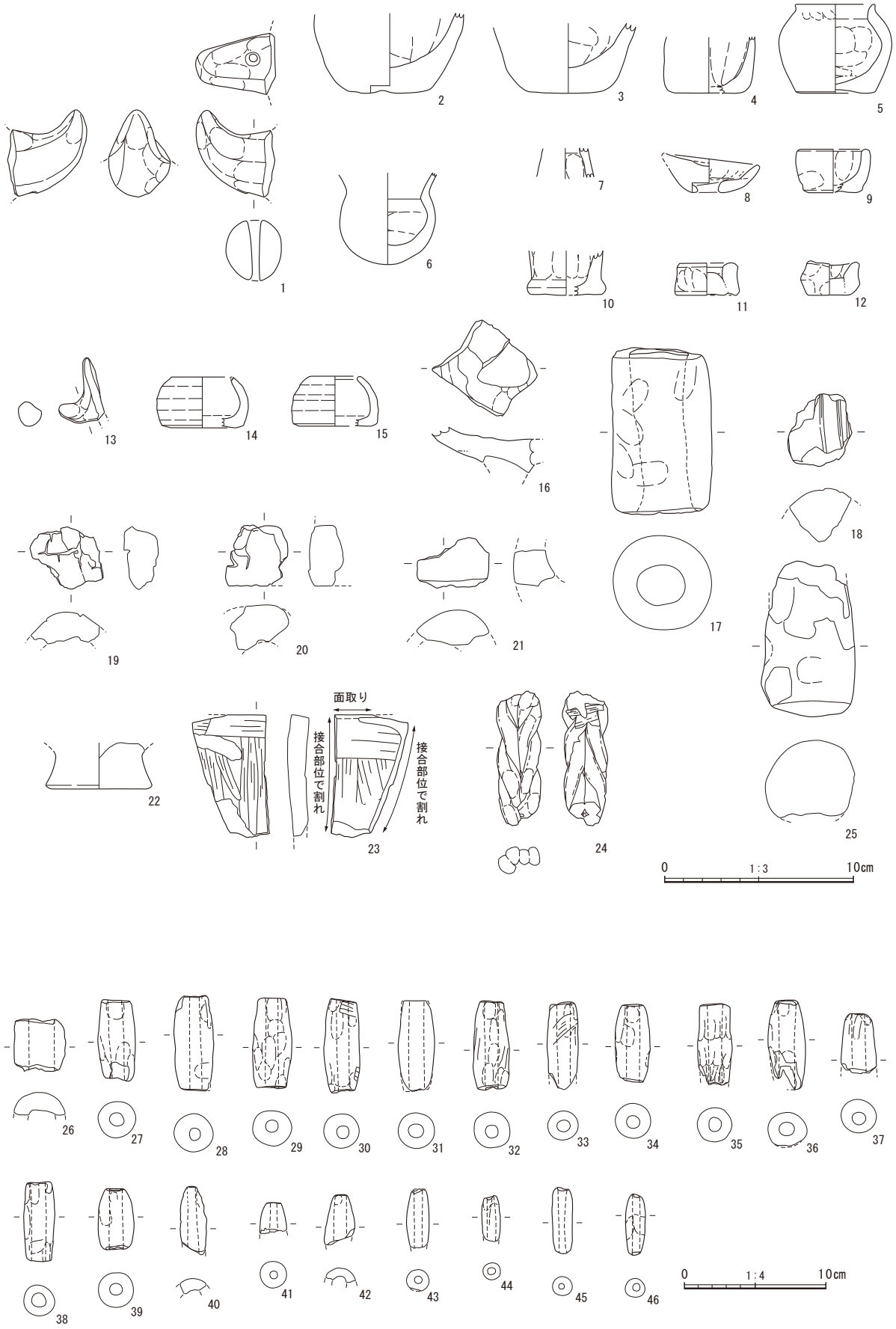
この砥石に穿孔された穴の配列自体は、ミョウガハラ遺跡の祭祀土坑群と同じである。

砥石を祭祀に使用した例としては、西向遺跡の近隣、太田川沿いにある袋井市（旧浅羽町）の中島遺跡（浅羽町 2000）で検出された祭祀土坑がある。これは、土坑内に被熱した砥石を立て、その上に山茶碗の輪花碗をかぶせるように乗せたもので、砥石に穿孔のような可能は見られないが、祭祀土坑として報告されている。この事例から、砥石が祭祀用品に転用されることはあったと考えられる。

以上の事例から、西向遺跡で出土した十字の穿孔のある砥石は、砥石としての機能を終えた後、祭祀用に転用された可能性、それも地鎮祭のような祭祀に用いられた可能性は考えられるであろう。

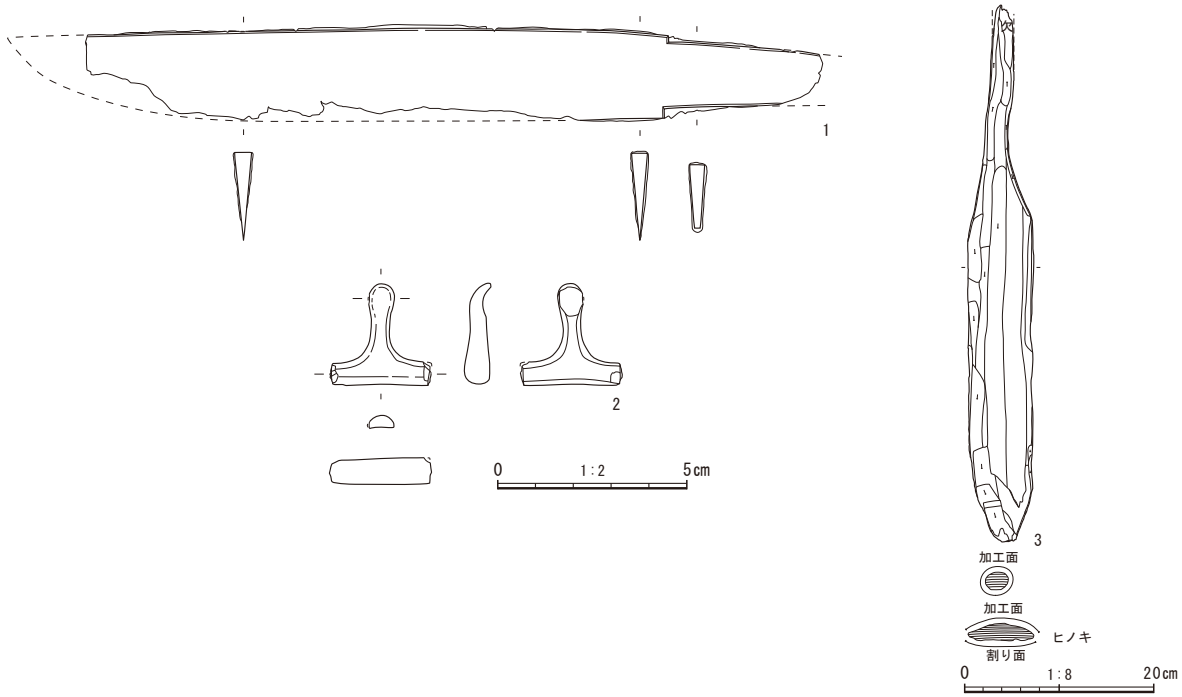
（５）　金属製品（第 152 図）

１は短刀で、錆びが進行しており、切っ先と茎尻の部分は失われている。２は鉸具である。いずれも



第 150 図　包含層出土遺物実測図 12

第 151 図　包含層出土遺物実測図 13



第 152 図　包含層出土遺物実測図 14

包含層出土のため、時期の判断は困難であるが、平安時代～鎌倉時代に入ると思われる。

（６）木製品

３は櫂である。柄の部分は断面が丸くなるよう加工してあり、オールの部分は片面は割れ面が残っており、反対側の面は断面が凸レンズ上になるように加工してある。材質はヒノキである。

４　５区谷地形出土の遺物

５区で検出した谷地形（第 17 図）からは、古墳時代～鎌倉時代といった広い時期幅の遺物が出土したため、ここでまとめて報告する。

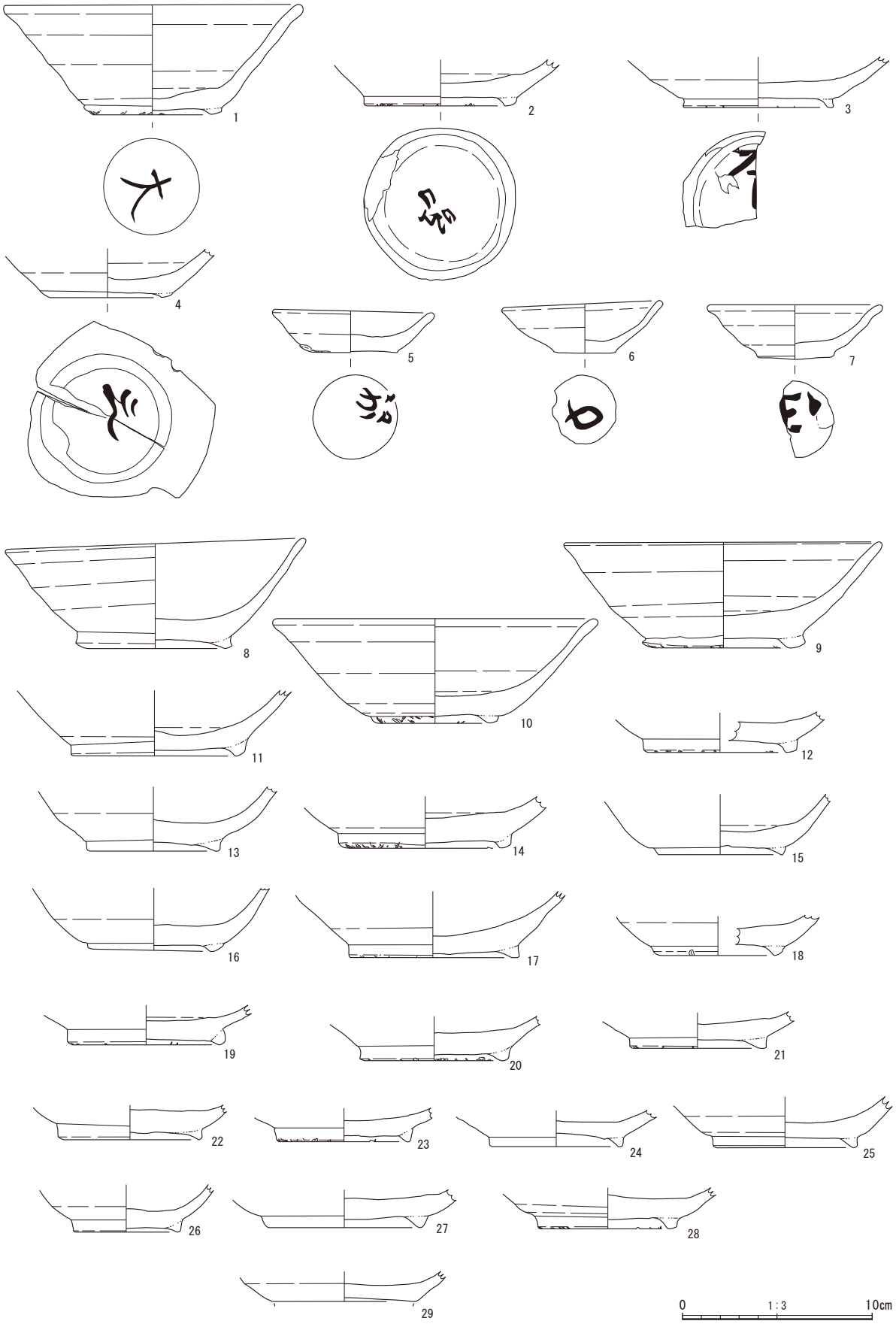
谷地形には、未分解の植物遺体を含んだ黒色の粘土が堆積し、その中に多くの遺物が含まれていた。最も多いのは渥美・湖西産の山茶碗で、特に 12 世紀中頃～後半のものである。また、２区～４区では少なかった 11 世紀代の灰釉陶器が目立つのも特徴である。堆積していた黒色粘土は、洪水のように一気に堆積した状況ではなく、時間をかけて堆積した状況を示していたことから、少なくとも 11 世紀～12 世紀にかけて堆積したと考えられる。

ア　平安時代後期以降の土器（第 153 図～第 155 図）

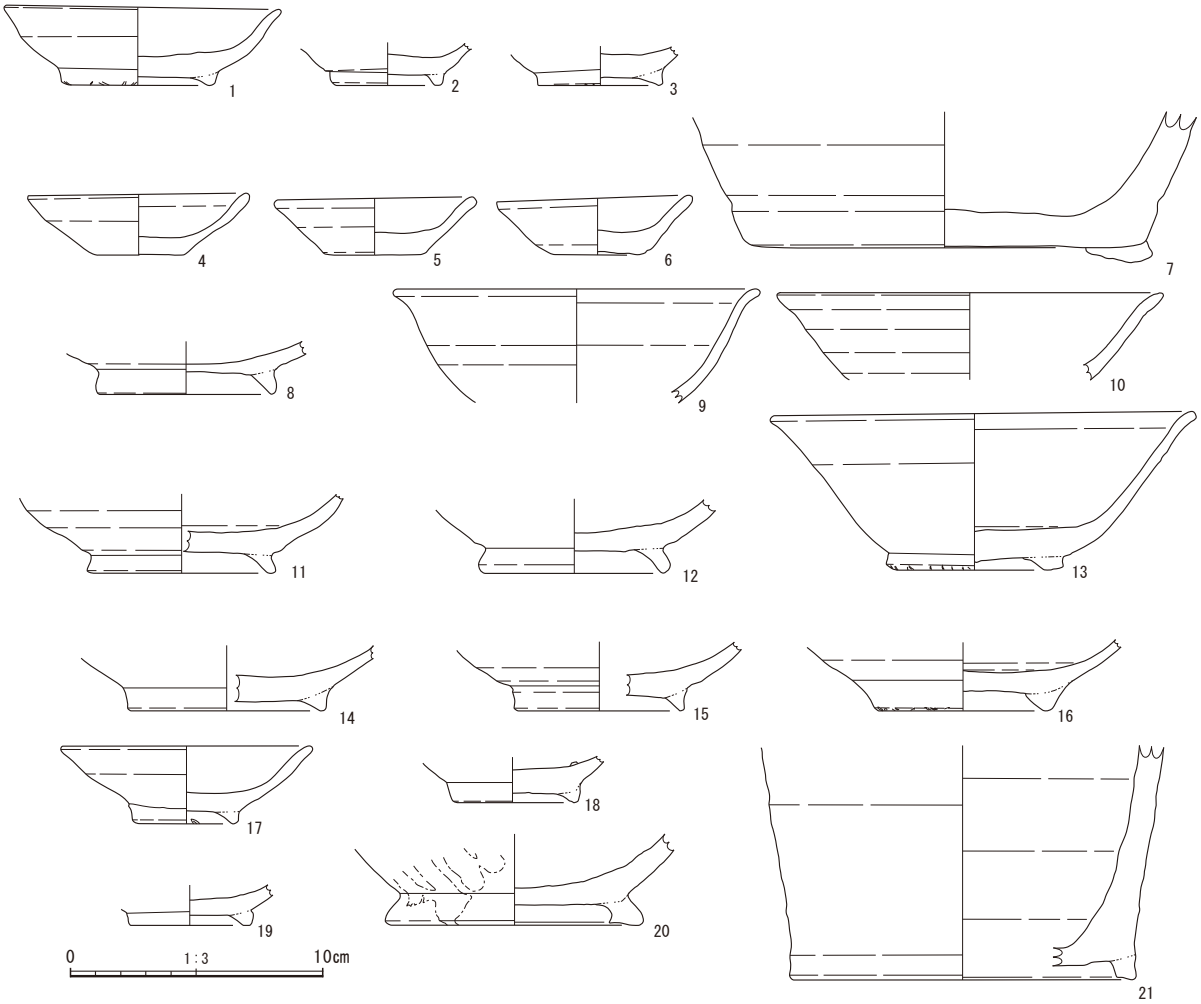
第 153 図、第 154 図－１～６に示したものは、渥美・湖西産の山茶碗で、高台が低くなっており、高台を付けた際の撫では雑である。第 154 図－４～６のように、高台が付けられていないものもある。第 153 図－１，８、９、10 は、体部が直線的に立ち上がって、丸みがなくなっている。以上の特徴から、いずれも 13 世紀前半と考えられる。１～７の底部には墨書が見られる。１の墨書は「大」、４は「之」と読める。２は「昭」であろうか。他は判読できない。

13 は内面に墨が付いていることから、硯に転用された可能性がある。26 は、高台を付ける前に、底面に粘土の円盤を貼り付け、その円盤の縁を摘み出して高台を形成している。28 は焼成不良である。

29 の高台はすべて剥落している。剥落した部分には、糸切痕がそのまま残っていることから、高台



第 153 図　包含層出土遺物実測図 15



第 154 図　包含層出土遺物実測図 16

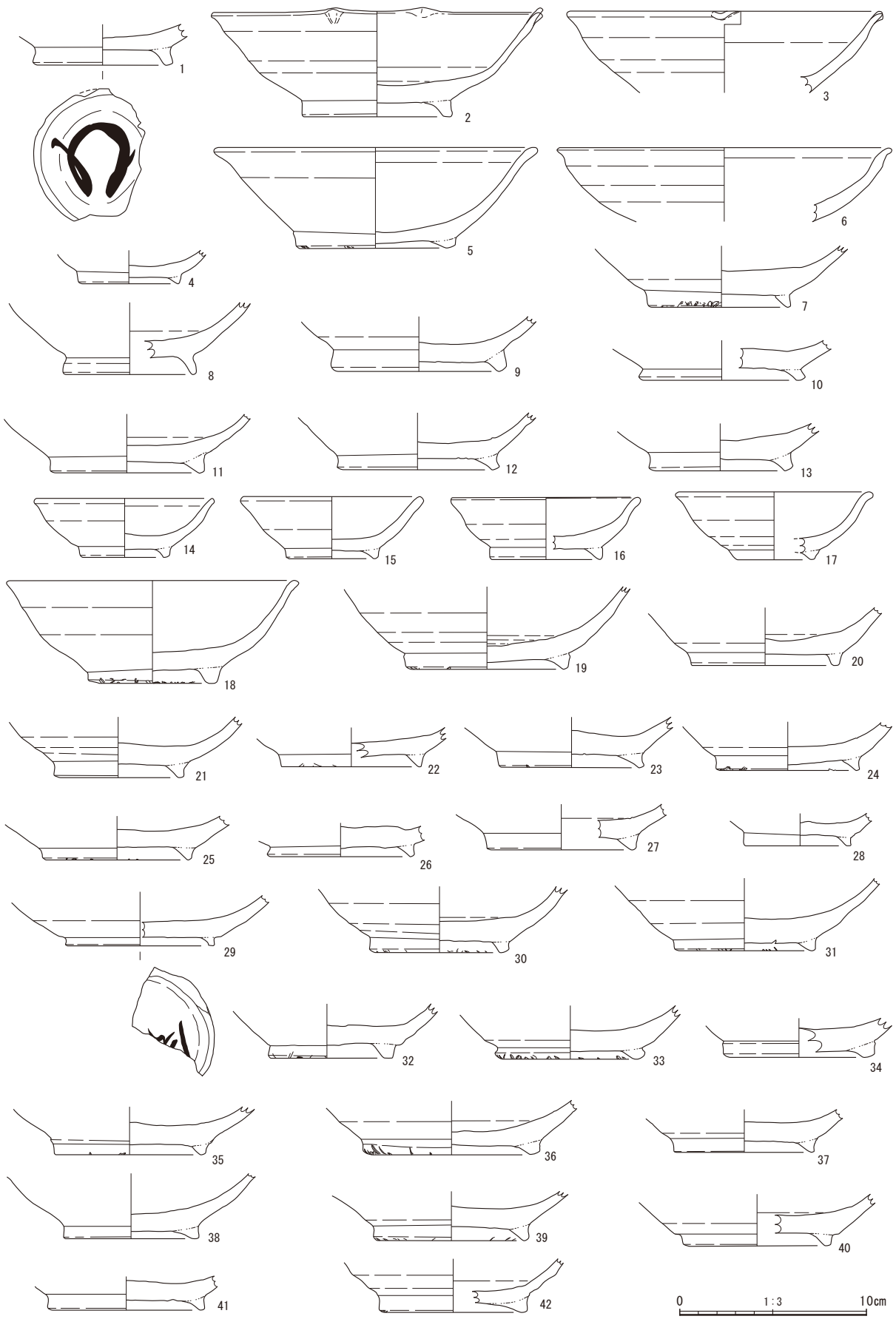
を付ける際、接着面に水を付けて撫でるなどの接着面形成をしないまま粘土紐を貼り付けて高台を作ったと考えられる。このような作り方では、底面と高台の接着力が弱いため、高台が剥落したと考えられる。

第 154 図－４～６は小皿で、高台は付けられていない。７は産地不明の壺の底部である。内外面に釉薬をかけてあり、底面には融着防止のために付けた粘土が残っている。これらの時期の判断は困難であるが、12 世紀代に収まると思われる。

第 154 図－８～ 19 は東遠江産の山茶碗である。８～ 12 は、高い高台、丸みのある体部、外反する口縁端部といった特徴から、12 世紀前半と考えられる。12 の高台は一部が剥落しているが、剥落した跡を見ると、底面の糸切痕を撫でて消して、高台の接着面を形成してから高台用の粘土紐を付けたことがわかる。13 ～ 19 は、高台が低くなっているが、高台を付けた際の撫では概ね丁寧であることから、12 世紀後半で 13 世紀までは下らないと考えられる。13 は、体部の立ち上がりが直線的になっているが、口縁端部が外反していること、高台が低くなっているが、高台の作りが丁寧であることから、12 世紀後半に収まると考えられる。

20 と 21 は壺の底部である。21 は厚く釉がかかっている。両方とも時期の判断が困難であるが、概ね 12 世紀代に入ると思われる。

第 155 図に図示したものは、渥美・湖西産の山茶碗で、12 世紀代と考えられるものである。１には底部に墨書が見られるが判読不能である。高い高台を付けてあることから、12 世紀前半と考えられる。



第 155 図　包含層出土遺物実測図 17

２、３は輪花碗で両方とも 12 世紀前半と考えられる。４は、断面が三角形の高台が付けられている。内面の中心まで釉がかかっている。これは 11 世紀代の灰釉陶器になる可能性がある。

５～ 17 は、外反する口縁や体部の丸み、高い高台といった特徴から、12 世紀前半になると考えられる。

18 以降は、高台がやや低くなり、高台を付けた際の撫でもやや雑になる傾向がある。高台接地面に籾痕やスノコ痕、砂粒痕が見られるものもある。このような特徴から、12 世紀中頃～後半と考えられる。

19、21、23、33、34 は、内面に墨と思われる黒色の付着物があることから、硯に転用された可能性がある。22、31 は、内面が煤で真っ黒になっていることから、燈明皿のような用途に再利用されたと思われる。29 に底面には墨書が見られるが判読不能である。

イ　古墳時代～平安時代前期の土器（第 156 図）

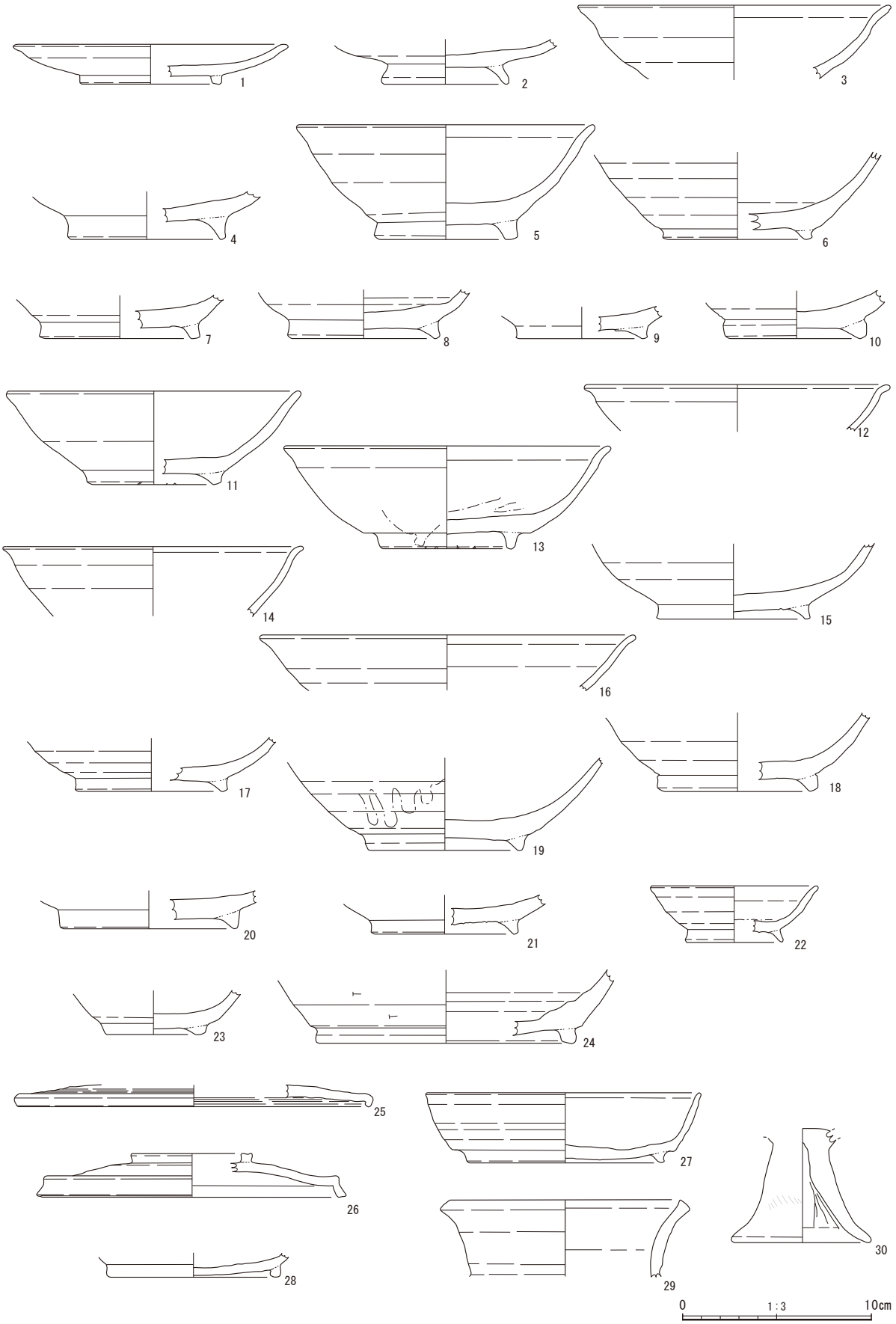
１～ 24 は灰釉陶器で、１、２は皿、３～ 23 は碗で、24 は壺の底部と思われる。１は、断面が四角形の高台が付いている。釉は内面にだけ刷毛塗りしてある。これは９世紀前半までさかのぼる可能性がある。２は、三日月形の高台が付いていることから、９世紀後半に位置付けられる。３は、体部は緩やかな曲線を描いて立ち上がり、口縁は外反している。釉は刷毛塗りである。口縁の外反、釉の刷毛塗りといった特徴から、９世紀末～ 10 世紀前半に位置付けられる。４は、高台の直径が８㎝を超えると思われる大型の碗で、高台はやや直線的に立ち上がっていることから、10 世紀代と考えられる。

５～ 10 は 11 世紀後半と考えられるものである。５は、口縁に近い部分に釉を漬け掛けしてある。高台は太く、体部はあまり湾曲せず、口縁はほとんど外反していない。６、７は外面全体に釉がかかっている。高台は低く、高台を付けた際のなでは雑である。８は体部が底部から急角度で立ち上がる特徴があることから、深碗になるの可能性がある。９は断面が三角形の低い高台が付いている。10 は素焼きに近い焼成であるが、内面の底が丸く窪み、体部が急角度で立ち上がると思われることから、灰釉陶器の深碗で、焼成不良のため、釉が発色しなかったものと思われる。高台が低い。

11 ～ 23 は 11 世紀代と考えられるものである。11 は高台は低く、釉薬は漬け掛けしてある。12 は器壁は薄く、口縁は外反している。13 には、漬け掛けと思われる施釉が見られる。14 は器壁は薄く、口縁は外反している。15 は高台は断面が三角形で、体部は緩やかな曲線を描いて立ち上がる。高台を付けた際のなでがやや雑である。16 は器壁は薄く、口縁は外反している。17 は、体部から口縁にかけて急角度で立ち上がっている。18 は高台は低い。体部は緩やかな曲線を描いて立ち上がる 19 は底部の断面に、高台を付ける際に粘土板を継ぎ足して厚底にした形跡が見られる。高台が低い。20 は非常に粒度の細かい胎土を使っている。高台を付ける際に底部に粘土を貼り付けてある。21 は高台は低く、僅かに外側に張り出している。22 は高台は外側に張り出すように付けてある。口縁は僅かに外反している。23 は低く潰れたような高台が付いており、剥落が著しい。

24 は壺の底部と思われる。外面に釉薬の垂れが見られる。時期の判断は困難である。

25 ～ 29 は８世紀代の須恵器である。25 は、端部を短く折り曲げて断面が三角形の受け部を作ってある。８世紀後半と考えられる。26 は自然釉が付いている面から、蓋として焼かれたと判断できる。これも８世紀前半と考えられる。27 は、平底にやや外側に張り出すように高台を付け、高台の外側を１周削る特徴がある。体部～口縁は僅かに湾曲するように立ち上がる。８世紀前半と考えられる。28 は高台は潰れたように低くなっている。底部は湾曲し、高台と同じように接地している。坏の形態が不明であるが、８世紀代に入ると思われる。29 は口縁端部を撫でて下方に拡張する特徴から、8 世紀代と思われる。30 は土師器の高坏の脚部で、脚は短く、坏との接合部から裾にかけて緩やかに広がることから、古墳時代前期になると思われる。



第 156 図　包含層出土遺物実測図 18

第５章　まとめ

今回の調査では、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の掘立柱建物跡、井戸跡、祭祀跡、奈良時代の掘立柱建物群、平安時代の掘立柱建物群、井戸跡などを検出し、各時代を通じて微高地上が利用されてきたことが判明した。西向遺跡の南約１㎞にある元島遺跡では、度重なる大地震による液状化現象の跡が発見されたが、西向遺跡では液状化現象、津波堆積物とも確認されなかった。このことから、今回調査した部分は、低地とは言え比較的安定した地盤だったことが考えられる。

１　弥生時代の調査成果

弥生時代では、中期後半の方形周溝墓を検出した。周溝の共有関係から、SZ4001 と SZ4002 が最初に作られ、SZ4002 の SD4008 を共有して SZ4003 が作られたと考えられる。その後、SZ4003 に隣接して SZ4005 が作られ、SZ4005 の SD4010 を共有して SZ4004 が作られたと考えられる。このように、周溝を共有しながら、方形周溝墓を増築していく方法は、元島遺跡でも確認されている（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2012）。方形周溝墓の増築方法は、墓道による規制があったことが想定されている（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998）。しかし、今回検出した方形周溝墓の場合、SZ4003、SZ4004、SZ4005 の間に墓道を想定すると、どのように通っても方形周溝墓の内部に入ってしまう。これは当たり前のことで、周溝を共有して増築する場合、一方向に増築を繰り返すのであれば、増築しない側に墓道を設定できるが、途中で 90 度方向を変えて増築する際に周溝を共有した場合、隣の方形周溝墓との間に墓道を設定する空間を作れないからである。したがって、今回検出した方形周溝墓の増築を規制したルールがあったとすれば、墓道以外に想定しなければらない。周溝を共有して連続して増築してあるということから、各方形周溝墓間の時期差は非常に小さいと考えられる。おそらくは、親子・兄弟関係といった極めて近い血縁関係にあった者が葬られたと想定される（前田 2009）。

方形周溝墓の規模については、２段階に分かれることが元島遺跡で指摘されており、西向遺跡で検出した方形周溝墓も､比較的大型の SZ4001 ～ 4003 と比較的小型の SZ4004 ～ 4006 に分けることができる。この規模の違いが生じる要因は、副葬品がほとんど出土しなかったため、不明である。ただ、規模の大きな SZ4003 と規模の小さな SZ4005 が、周溝を共有して連続して作られたことから、規模の違いが、明確な階級差といった、墓域を分けるような差によるものではないことは指摘できるであろう。

２　古墳時代の調査成果

５世紀前半の掘立柱建物跡と井戸跡、祭祀跡、７世紀後半と考えられる掘立柱建物跡と竪穴住居跡を検出した。特記できるのは、４区で検出した５世紀前半の井戸祭祀跡と祭祀跡と思われる土器集積である。出土した遺物のほとんどは土師器で、復元できなかったものが多いことから、当初から破片であったと考えられる。

近隣に方形区画とを伴う掘立柱建物群があるが、井戸の一部と祭祀跡が方形区画溝の下で検出されたことから、掘立柱建物群と同時期に存在した訳ではない。したがって、井戸跡と祭祀跡は、集落から離れた場所にあったことになり、井戸跡は集落に伴うものではなかったと考えられる。おそらくは畑耕作のような農耕用に水を貯めておく機能を持っていたと想定される。

出土した土師器の最少個体数をカウントできた遺構と最少個体数は次のとおりである。

井戸跡 SE3005：高坏６、壺２、甕３

井戸跡 SE3006：高坏 12、小型丸底壺７、壺３、台付甕１、ミニチュア土器１

土器集中 SX3002：高坏 17 点　甕７点　壺１点　ミニチュア土器２

いずれの遺構でも、高坏が多いことを指摘できる。脚部が残りやすい、あるいは目立つことも要因の１つであるが、出土した土器全体、他の井戸跡から出土した土器を見ても、やはり、高坏が多いことに間違いはない。また、多くの土器が、当初から破片の状態であったことも指摘したが、古墳時代の祭祀跡と思われる遺構から、破砕された土器が集中して見つかる事例は、すでに報告されている。埼玉県の御伊勢原遺跡で検出された祭祀跡からは、復元不可能な古墳時代の土器片がコンテナ 30 箱分出土したことが報告されている。SX3002 はこれに似た事例と言える。

また、井戸を廃棄する際に土器を沈める行為は、全国的に知られており、近隣の富里遺跡、元島遺跡でも報告されている（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998、静岡県埋蔵文化財センター 2018）。

３　奈良時代の調査成果

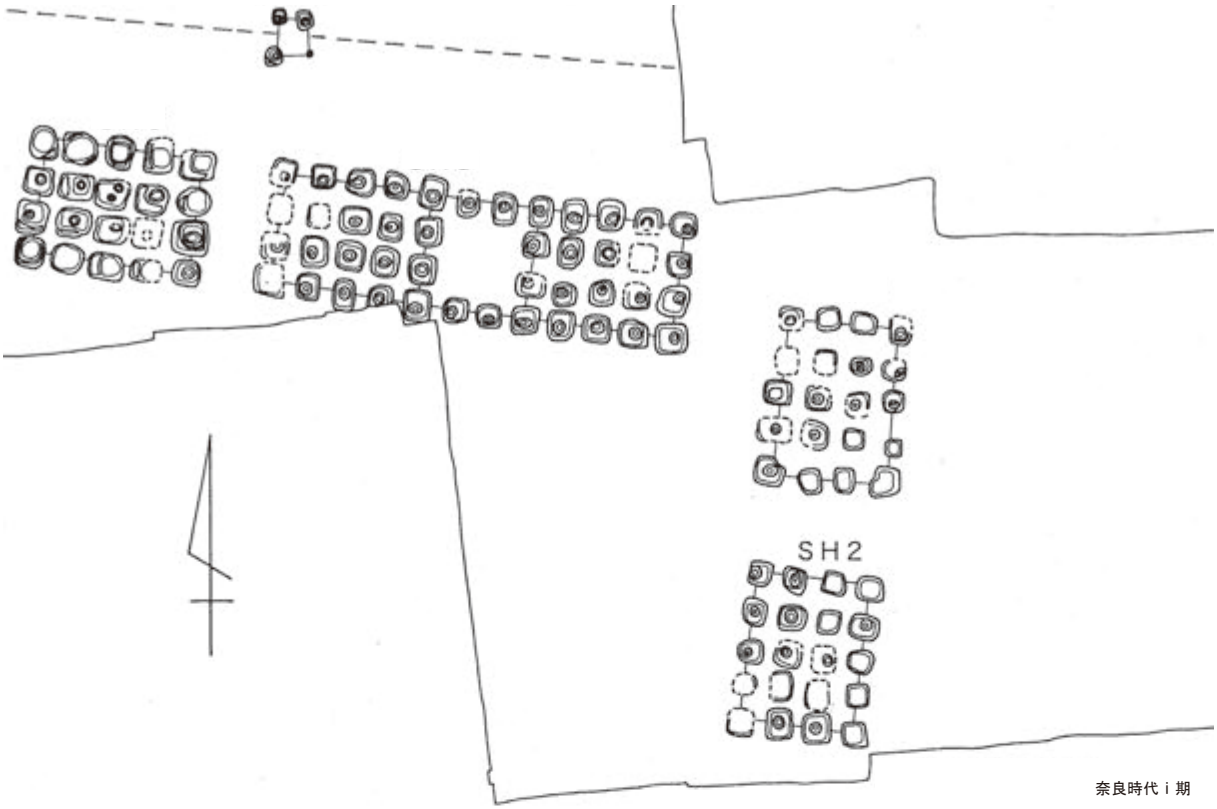
主要な建物の主軸の方向は、N84°Ｗとこれに直交する方向である。測定誤差を考慮しても、平面直角座標から西に 80 度、あるいは東に 10 度傾いていることは間違いない。太田川水系の広域条里は、袋井市の川田藤蔵渕遺跡（袋井市教育委員会 1993）や同市春岡遺跡（袋井市教育委員会 1992）で検出された条里水田から、N21°Ｗであることが報告されており、西向遺跡の近隣にある新堀遺跡で報告された掘立柱建物群（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993）が、この方向と一致している。掘立柱建物跡の時期は、報告書では奈良時代と推定されているが、新堀遺跡で報告された奈良時代の土器の時期を参考にすると、８世紀前半以降と考えられる。したがって、太田川水系に広域条里が敷かれたのは８世紀前半以降で、新堀遺跡の掘立柱建物群は広域条里に合わせて設置されたと考えられる。

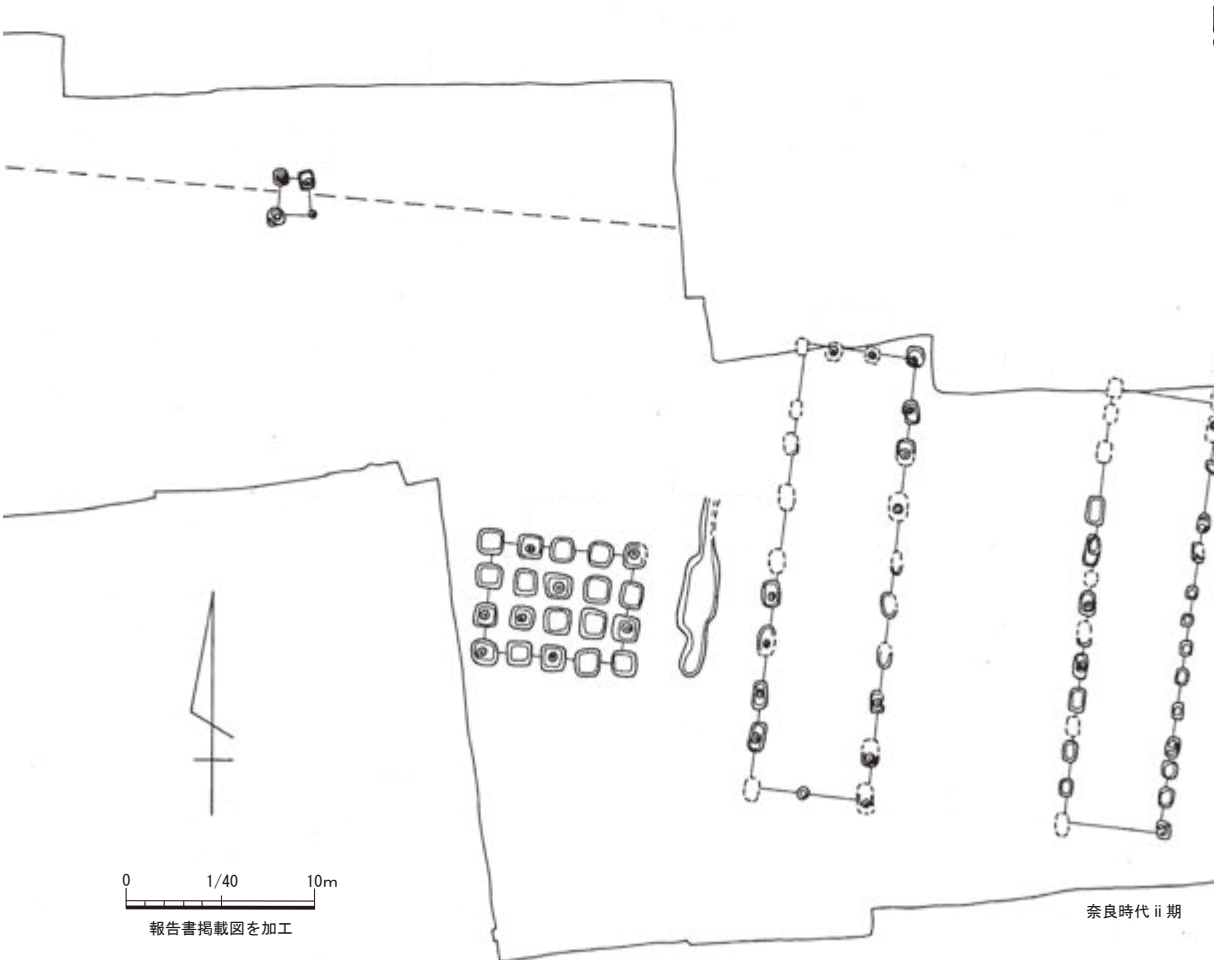
しかし、西向遺跡で検出された掘立柱建物群は、広域条里の方向とは一致しない。西向遺跡の掘立柱建物群と方向が一致するものとしては、掛之上遺跡で検出された掘立柱建物群がある（袋井市教育委員会　2012 年、第 157 図）。これは、主軸方向を決定した原理は不明としながら、奈良時代でも広域条里が制定される以前の郡衙正倉と報告されている。これを参考にすると、西向遺跡で検出した掘立柱建物跡 SB2001 ～ 2005 と、SB2005 に伴う可能性の高い柵列 SA2002 は、８世紀前半でも広域条里制定以前の遺構で、掛之上遺跡で検出された郡衙正倉とされる建物群と同時期と評価できる。

掘立柱建物群の性格を検討するため、掛之上遺跡で検出された、郡衙正倉の可能性が高い掘立柱建物群などと比較する。掛之上遺跡の掘立柱建物跡は、柱穴の形がほぼ正方形で整っており、等間隔で整然と配置されている（第 157 図）。これに対して西向遺跡の掘立柱建物跡は、SB2002、SB2003、SB2004 を例にとると、平面形が統一されていない上に、柱根間の距離は統一されているが、柱穴の配置は不揃いである。これは、掛之上遺跡でも同様で、正倉院と想定されている場所では、第 157 図に示した整った掘立柱建物跡が整然と配置されているが、その周辺で検出された掘立柱建物跡は、西向遺跡の場合と同様に、柱穴の平面形と配置が不揃いになる。

西向遺跡の近隣にある新堀遺跡は、奈良時代の溝から「山名厨」と書かれた墨書土器が出土したことから、山名郡衙厨家の出先としての機能が想定されている（松井 2003）。ここで検出された掘立柱建物跡は、柱根は確認されていないため、柱根間の距離は不明であるが、柱穴の平面形は統一されていない上に、配置も不揃いである。この点で、新堀遺跡の掘立柱建物群は、山名郡衙の存在を示唆する墨書土器が出土したとはいえ、郡衙ではなく、その下位の出先と考えられている。

郡衙推定遺跡の周辺で発見された建物群は、郡衙推定遺跡で発見される建物群とは、構造が劣ることから、郡の下位に設けられた郷、里といった単位の中心集落の共同建物といった評価がされている（松井 2003）。このように考えてくると、西向遺跡で検出された奈良時代の掘立柱建物群も郷、あるいは里の単位で設けられた中心集落の共同倉庫といった性格が想定できる。





第157図　掛之上遺跡検出の掘立柱建物群

4　平安時代～鎌倉時代の調査成果

この時期の遺構は、12 世紀後半～ 13 世紀前半と考えられる掘立柱建物跡、柵列、井戸などがある。掘立柱建物跡のうち、SB1001 ～ 1004 は、方形区画の中に作られ、柵列 SA1002 ～ 1004 を伴っていた。また、SB1005，SB1006 は方形区画の外に作られていたが、総柱の倉庫と想定される建物跡であった。奈良時代の掘立柱建物群とは、場所が異なるが、同じ微高地上に作られていたことから、奈良時代に引き続き、集落が管理する共同建物が作られていたと考えられる。

参考文献

【発掘調査報告書】

浅羽町教育委員会 1982『県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1：青木遺跡』

浅羽町教育委員会 1999『五ケ山 B2 号墳』

浅羽町教育委員会 2002『浅羽町内遺跡発掘調査報告書　I』

磐田市埋蔵文化財センター 1987『鎌田・鍬影遺跡発掘調査報告書』

磐田市教育委員会 1981『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告Ⅰ』ほか

磐田市埋蔵文化財センター 1987『長江崎遺跡発掘調査報告書』

磐田市埋蔵文化財センター 1996『長江崎遺跡発掘調査報告書』

磐田市教育委員会 2019『特別史跡　遠江国分寺跡　本編』ほか

袋井市教育委員会 2013『団子塚古墳群 H-1 号墳発掘調査概報』

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992『新堀遺跡』

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998『元島遺跡Ⅰ（遺構編　本文）』

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2005『元島遺跡Ⅱ』

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2011『西向遺跡』

静岡県学務部教育課県史編纂係 1939『静岡県磐田郡松林山古墳発掘調査報告』

静岡県埋蔵文化財センター 2012『元島遺跡Ⅲ』

静岡県埋蔵文化財センター 2018『富里遺跡』

袋井市教育委員会 1982『鶴松遺跡 1』ほか

袋井市教育委員会 1991『堀越ジョウヤマ遺跡発掘調査報告書』

袋井市教育委員会 1992『団子塚遺跡　遺構編』

袋井市教育委員会 2007『袋井市内遺跡発掘調査報告書 2：諸井十二所居館 2 ～ 6 次試掘確認調査諸井大学院遺跡試掘確認調査』

袋井市教育委員会　2012『平成 15・16 年度　掛之上遺跡　遺構・遺物図版編Ⅰ』

袋井市教育委員会　2016『遺跡でたどる袋井のあゆみ』1

【論文等】

北村和宏　2001「古代『三河型甕』考」『研究紀要』第２号　愛知県埋蔵文化財センター

産業技術総合研究所・磐田南高校・秋田大学　2019 「７世紀末と９世紀末の東海地震の痕跡を発見 -1300 年間にわたる東海地震の繰り返しと南海地震との連動性が明らかに -」『産総研・磐田南高校・秋田大学共同プレス発表資料』

鈴木敏則　2001「湖西窯古境時代須恵器編年の再検討」『須恵器生産の出現から消滅』東海の土器研究会

鈴木敏則　2004 「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』 浜松市教育委員会

原　廣志　1999「横地氏関連遺跡群と周辺遺跡の特徴について」『横地城跡－総合調査報告書－』菊川町教育委員会

廣内大助・松多信尚・佐藤善輝・坂本絵梨・堀和明・川上賢太・米原和哉　2017「6. 遠州灘の海岸平野における浜堤や堆積環境から見る南海トラフ巨大地震の地殻変動パターンの解明」『愛知工業大学地域防災研究センター年次報告書』第 13 号

藤原治・北村晃寿・佐藤善輝・青島晃・小野映介・小林小夏・小倉一輝・谷川晃一郎　2015「静岡県西部の太田川低地で見られる弥生時代中・後期の相対的海水準上昇」『第四紀研究』第 54 巻第１号

藤原治・小野映介・矢田俊文・海津正倫・鎌滝孝信・内田淳一　2008「完新世後半における太田川低地南西部の環境変化と津波堆積物」『活断層・古地震研究報告』№.８

前田清彦　2009「方形周溝墓の増募計画：群構成の歴史的意義」『金大考古』第 65 号

松井一明　1989「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県の窯業遺跡　本文編』 静岡県教育委員会

松井一明　2003「第７節　官衙関連遺跡－国衙・郡衙以外の官衙的遺跡について－」『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』静岡県教育委員会

松原彰子　2007「海岸低地における砂州・浜堤の形成と遺跡立地－浜松低地及び榛原低地を例にして－」『慶應義塾大学日吉紀要　社会科学』第 18 号

丸杉俊一郎　2000「井通遺跡出土・獣足付短頸壺の新例」『研究紀要』第７号　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

山下峯司　1995 「灰釉陶器・山茶椀」『概説中世の土器と陶磁器』 真陽社

渡辺二三彦　1995「静岡県袋井市南部、太田川低地の地形発達史」『季刊地理学』第 47 巻第２号

Garrett Ed, Fujiwara Osamu, Garrett Philip, Heyvaert Vanessa, Shishikura Masanobu, Yokoyama Yusuke, Hubert-Ferrari Aurélia, Brückner Helmut, Nakamura Atsunori, De-Batist Marc. 2016 A systematic review of geological evidence for Holocene earthquakes and tsunamis along the Nankai-Suruga Trough, Japan. *Earth Science Reviews* Vol.159 Newcastle University

第６章　自然科学分析

第１節 西向遺跡から出土した木材の樹種

東北大学名誉教授
鈴木三男

静岡県袋井市中地区の西向（にしむかい）遺跡から出土した木材 196 点の樹種を同定した。西向遺跡は太田川と支流の原野谷川の合流点付近の河川敷にあり、現在標高は４ｍほどである。奈良時代から室町時代の掘立柱建物、竪穴住居、土坑、井戸、溝、自然流路などの遺構が検出され、護岸の杭、柱材、櫂、曲げ物、柄杓などの木器、用途不明品などが出土した。樹種同定を行った 196 点の木材からは以下に記載する 40 の分類群が同定された。

１　同定された樹種

1. モミ属 Abies マツ科

写真５:1a- c （No.16972）

垂直・水平両樹脂道を持たない針葉樹材で、年輪界はやや明瞭、早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は年輪界に僅かにあるのみで、早材部、晩材部には無い。放射組織は、単列で放射柔細胞のみからなる。放射柔細胞の水平壁及び垂直壁は厚く多くの単穿孔があるモミ型壁孔である。分野壁孔は小型のスギ型で、１分野に２から４個ある。以上の形質から、マツ科のモミ属の材と同定した。

我が国に分布するモミ属には亜高山帯に分布するトドマツ Abies sachalinensis (Fr. Schm.) Mast.、アオモリトドマツ A. mariesii Mast.、シラビソ A. veitchii Lindley、冷温帯に分布するウラジロモミ A. homolepis Siebold et Zucc.、暖温帯に分布するモミ A.s firma Siebold et Zucc. があり、静岡県ではトドマツを除く全ての種が自生するが、いずれも材構造は近似しており個々の種の識別は難しい。遺跡周辺にはモミ属は自生していたとは考えられないが、一番近くに自生するのは山地帯のモミで、幹径１ｍ、樹高 30 ｍになる常緑高木である。材は軽軟で割裂性がよく、加工容易だが保存性は低い。大材が得易く、加工も容易でスギやヒノキと同じ用途の代用品に用いられることが多い。当遺跡出土材は柱材が２点、用途不明品が１点で、遺跡周辺外からの移入である。

2. カラマツ Larix kaempferi (Lamb.) Carrière マツ科

写真６:2a- c （No.17155）

垂直・水平の樹脂道があり、年輪が明瞭な針葉樹材で、早材から晩材への移行は急激、晩材部は一般に幅は狭い。早材部仮道管は径が大きく、薄壁で、放射面では有縁壁孔が対列状に２列に並ぶ。樹脂細胞は無い。放射組織は単列と紡錘形があり、放射柔細胞、放射仮道管、それに水平樹脂道を囲む分泌細胞からなる。放射柔細胞の水平及び垂直壁は厚く、多数の単壁孔があるモミ型である。放射仮道管は放射組織の上下辺に１－２細胞層あり、有縁壁孔は小型、有縁部の断面はなだらかである。分野壁孔は小型のトウヒ型～ヒノキ型で、１分野に２－５個ある。以上の形質からカラマツの材と同定した。

カラマツは中部～東北地方南部の山岳地帯の亜高山帯に分布し、静岡県では富士山の３合目～５合目くらいの高さで優先し、南アルプスにも分布する。木理は通直で肌目は粗く、重硬、加工性は中くらい、耐朽性は強い。建築材、土木用材、パルプ材などに使われる。当遺跡出土材は角杭３点と柱材１点で、

遺跡周辺外、恐らくは富士山地域からの移入である。

3. アカマツ Pinus densiflora Siebold et Zucc. マツ科

写真６:3a- c (No.17100)

水平・垂直の樹脂道を持つ、年輪が明瞭な針葉樹材で、早材部、晩材部とも幅広く、早材から晩材への移行はゆるやかであるが、晩材部は明瞭な幅広の帯となり、垂直樹脂道の多くは晩材部にある。樹脂細胞は無い。放射組織は単列と紡錘形があり、放射柔細胞、放射仮道管、それに水平樹脂道を囲む薄壁の分泌細胞からなる。放射組織の上下に１－数層の放射仮道管があり、その細胞内壁には顕著な歯牙状肥厚がある。放射仮道管の有縁壁孔は軸方向か道管の有縁壁孔より小さい。放射柔組織の水平壁は平滑で薄く、分野壁孔は大型の窓状で１分野に１個あり、分野のほぼ全域を占める。窓状の分野壁孔を持つことからマツ科のマツ属であることが分かり、分野壁孔が分野の大部分を占め、放射仮道管の内壁に顕著な歯牙状突起を持つことから、マツ属複維管束亜属のうち、アカマツの材と同定した。

アカマツは本州から九州までの低地から山地にかけて広く分布する常緑の針葉樹で、痩せた土地、陽光地、二次林に多い。幹径１m以上、樹高 30 mの大木となる。静岡県内にも海岸近くから山地帯までもっとも普通に見られる針葉樹の一つで、特に二次林に多い。材は木理通直、肌目は粗く、心材の保存性は良く、特に水湿に強い。大材が得られることもあり、建築材(特に基礎、土台回り、梁など)、土木用材(杭)、器具材などに幅広い用途があるほか、坑木などの特用がある。

本遺跡出土材は丸木の杭 11 点、杭２点、柱材２点、用途不明の木材１点、合計 16 点である。

4. クロマツ Pinus thunbergii Parl. マツ科

写真６:4a- c (No.16899)

垂直・水平の両樹脂道を持つ、アカマツに良く似た針葉樹材で、年輪幅は一般に広く、厚い早材部と厚い晩材部を持ち、早材から晩材への移行はゆるやかである。樹脂細胞はない。放射組織は単列と紡錘形で、放射柔細胞、放射仮道管、樹脂道を構成する分泌細胞からなる。放射仮道管の内壁の肥厚は不規則に肥厚するが、アカマツ程激しい歯牙状にはならない。以上の形質からマツ属複維管束亜属のうち、クロマツの材と同定した。

クロマツは津軽半島の大間岬以南の本州、四国、九州に広く分布し、南限は鹿児島県のトカラ列島である。アカマツが高標高地を除いたほぼ本州から九州の全域に分布するのに対し、クロマツは海岸部に限定され、近世以降には海岸砂丘の緑化に多用され、特に沿岸部に多い。材質、用途はアカマツ同様である。当遺跡出土材でクロマツであると断定できたのは杭材１本である。

5. マツ属単維管束亜属 Pinus subgen. Haploxylon マツ科

写真７:5a- c (No.16958)

年輪がやや不明瞭な針葉樹材で、年輪幅は一般に広くない。垂直、水平の両樹脂道を持ち、晩材部は一般に狭く、早材から晩材への移行はゆるやかである。垂直樹脂道は晩材部附近に分布することが多い。樹脂細胞はない。放射組織は単列と水平樹脂道をもつ紡錘形があり、放射柔細胞、放射仮道管、分泌細胞からなる。分野壁孔は大型の楕円～やや幅の狭い窓形で１分野１個、放射仮道管の内壁は厚くならず、ほとんど平滑である。これらの形質からマツ科マツ属のうち、ヒメコマツ（ゴヨウマツ）Pinus parviflora Siebold et Zucc. などの単維管束亜属（五葉松類）の材と同定した。

ヒメコマツは北海道から九州の暖温帯上部から冷温帯に分布し、樹高 25 m、幹径 60cm ほどになる。材は木理通直、緻密で柔らかく切削加工性がよい。建築材、組み物、指物、各種器具材など幅広く用い

られる。本遺跡出土材は用途不明品１点で、遺跡周辺外からの移入である。

6. ツガ属 Tsuga マツ科

写真７:6a- c (No.16948)

水平・垂直の両樹脂道を欠く針葉樹材で、早材から晩材への移行は急で、晩材部は一般に幅は狭い。軸方向要素はほとんど仮道管のみからなるが､年輪界付近にまれに樹脂細胞が混じる。放射組織は単列、背はあまり高くなく、放射柔細胞と放射仮道管からなり、後者は放射組織の上下縁にあり、ほぼ１細胞層である。放射仮道管の有縁壁孔は小さく、内壁に鋸歯状突起やらせん肥厚はなく、滑らか。樹脂細胞と放射柔細胞の垂直、水平壁は厚く、多数の単壁孔を持つ、いわゆるモミ型壁孔である。分野壁孔は小さいトウヒ型～ヒノキ型で、１分野２- ６個程度ある。以上の形質からマツ科のツガ属の材と同定した。

ツガ属は本州から九州の山地帯にツガ Tsuga Sieboldii Carr.、温帯上部から亜高山帯にかけてコメツガ Tsuga diversifolia (Maxim.) Masters. が分布している。静岡県でも標高 500 mほどの山地にはツガがあり､富士山や南アルプスなどの山岳地帯にはコメツガが分布している。いずれも樹高 20 m以上、幹径１mになる常緑高木で、いずれの材も木理通直で緻密、軽軟あるいはやや重硬で、建築材、各種器具材、土木材、パルプに用いられる。本遺跡出土材は柱材４点、角杭２点、用途不明の木材１点，合計７点で、遺跡周辺外からの移入である。

7. イヌマキ属 Podocarpus マキ科

写真７:7a- c (No.17172)

年輪が全く目立たない緻密な針葉樹材で、出土材の保存性は良い。早材から晩材への移行はとても緩やかで､晩材部は年輪界附近の数細胞しか認められない。樹脂細胞は横断面で扁平な四角形、量が多く、年輪内全体に均一に散在するが、ヒノキ科のような黒褐色の樹脂様物質を蓄積していないので、横断面では見つけにくい。樹脂細胞の水平壁は薄く平滑で、ヒノキ科のように数珠状に肥厚したり、マツ科のモミ型壁孔のようになることは無い。放射組織は背の低い単列で、放射柔細胞のみから成り、分野壁孔は、小型のヒノキ～トウヒ型で、１分野あたり１- ２個存在する。以上の形質から、マキ科のイヌマキ属の材と同定した。

我が国のイヌマキ属には関東地方南部以南の沿岸部の温暖地に生育するイヌマキ Podocarpus macrophyllus (Thunb.) Lambert と紀伊半島南部より南西に分布するナギ P. nagi (Thunb.) Zoll. et Moritzi の２種があり、静岡県地方では後者もしばしば植栽されているが、その自然分布から本遺跡出土材はイヌマキと考えられる。静岡県内の弥生時代～中世の遺跡からは他府県では例を見ない量のイヌマキ属の木材（多くは丸木弓や柱材）が出土している。イヌマキの材は年輪が不明瞭で木理通直、硬く緻密で粘りがあり特に水湿に強く、また、シロアリにも強く、建築材（柱、土台回り）によく使われたが、資源量が限られているので現在ではほとんど使われることはない。本遺跡出土材は柱材５点、丸杭１点、杭２点、用途不明品１点、合計９点である。

8. コウヤマキ Sciadopitys verticillata (Thunb.) Siebold et Zucc. コウヤマキ科

写真８:8a- c (No.16965)

水平・垂直の両樹脂道を欠く針葉樹材で、年輪は明瞭、一般に年輪幅は狭い。晩材部は幅狭く、早材から晩材への移行は急である。仮道管と放射組織のみからなり、樹脂細胞を欠く。放射組織は柔細胞のみからなる。分野壁孔が特徴的で、大型で菱形を丸く膨らました窓状で１分野あたり通常１個、時に２個ある。これらの形質からコウヤマキ科のコウヤマキの材と同定した。

コウヤマキは福島県と本州中部以西、紀伊半島、中国、四国、九州の冷温帯下部に生える常緑針葉樹で、幹径１ｍ、樹高 30 ｍの大高木となる。静岡県内では大井川の上流部、天竜川の中流部などに自生があり、静岡市清水区大平の大木が県の天然記念物として保護されている。材は比較的軽軟で緻密、木理通直で、均質であり、加工性よく、仕上がりが美しい。そしてなにより耐朽性、特に耐湿性に優れ、建築材を始めありとあらゆる用途に用いることが出来るが、資源量が少ない。当遺跡出土材は用途不明品１点で、他地域からの持ち込みの可能性がある。

9. ヒノキ Chamaecyparis obtusa Siebold et Zucc. ヒノキ科

写真８:9a- c （No.16971）

出土材は多くの場合スギに比して色が淡く、明るい褐色を呈するのが一般的である。水平・垂直の両樹脂道を持たない針葉樹材で、早材から晩材への移行は急である。年輪は明瞭だが、晩材部の量が少ないので年輪そのものは目立たない。樹脂細胞は早材部から晩材部にかけて接線方向に緩く集まって散在し、その水平壁は数珠状に肥厚する。放射組織は単列で、放射柔細胞のみからなり、分野壁孔は中型のヒノキ～トウヒ型で、１分野に１－２個ある。これらの形質から、ヒノキ科ヒノキ属のヒノキと同定した。ヒノキは関東地方北部から九州屋久島までの温帯域に広く分布するが、特に中部地方の山地帯に多い。わが国の針葉樹類中でもっとも材質が優れたものの一つで、古代の畿内地方を中心に大型の建築物の建築材や各種器具材、細工物、木簡や形代、斎串、曲物など、広く用いられてきている。本遺跡出土材は柱材、曲げ物、指物の部材と思われるもの、用途不明品など多様で 18 点あり、遺跡周辺外からの移入である。

10. サワラ Chamaecyparis pisifera Siebold et Zucc. ヒノキ科

写真８:10a- c （No.16970）

ヒノキ、スギによく似た針葉樹材で、水平・垂直の両樹脂道を欠き、仮道管、放射柔細胞、樹脂細胞からなる。年輪はヒノキより目立つがスギより目だたない。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は少ない。樹脂細胞は晩材部付近に散在し、水平壁は数珠状を呈する。分野壁孔は中型のヒノキ型～スギ型で、１分野当たり普通２個存在し、ヒノキよりもやや孔口が大きく、開口部の長軸は水平に近くなる。以上の形質からヒノキ属のサワラの材と同定した。

サワラは東北南部から本州中部の山地帯上部（温帯）に広く分布する常緑高木で、樹高 30 ｍ、幹径１ｍに達する。静岡県では北部山中に多い。材は木理通直で割裂性良く、ヒノキより軽軟で切削加工は容易であるが、光沢、香りはない。水湿に強いので桶類に、また、匂いが無いので飯びつや箸に用いられる。ヒノキに比べ材質はやや劣り、ヒノキの代用とされるほか、スギ同様の用途がある。本遺跡出土材は柱材２点、角杭１点、用途不明品１点、合計４点で、遺跡周辺外からの移入である。

11. スギ Cryptomeria japonica（Linn.f.）D.Don ヒノキ科

写真９:11a- c （No.16927）

保存性が良く、出土材は一般に黒褐色を呈する。水平・垂直の両樹脂道を持たない針葉樹材で、年輪は明瞭で、早材から晩材への移行はゆるやか～やや急で、年輪幅は広いものから非常に狭いものまでの変異がある。樹脂細胞は晩材部に接線方向にややまとまりながら散在している。樹脂細胞の水平壁はやや厚くなり、微小な単壁孔があるが、通常は数珠状に肥厚することはない。放射組織は単列で放射柔細胞のみからなる。放射柔細胞の水平壁、垂直壁は平滑で壁孔は見られない。分野壁孔は大型のスギ型で１分野あたり通常２個あり、開孔部の長軸は水平に近い方向になる。以上の形質より、ヒノキ科のスギ

の材と同定した。

スギは青森県南部から九州屋久島までの全国の温帯～暖帯に広く分布し、特に本州日本海側と東海地方に多い。成長が早く、幹径１ｍ以上、樹高 30 ｍを超える大木になり、大材が得易く、また、材は軽軟で割裂、切断がしやすく、加工が容易で、建築材を始め、各種器具材に縄文時代以来、北陸、東海地方でよく利用されてきている。静岡県地方の弥生時代～中世の遺跡では大量のスギ材が出土するのが一般的だが、当遺跡の出土量は、柱材２点、用途不明品３点と、県内の他遺跡と比べると非常に少ない。

12. アスナロ Thujopsis dolabrata (L.f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科

写真９:12a- c (No.16911)

水平・垂直の両樹脂道を欠き、仮道管、放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材で、早材から晩材への移行はやや急、幅の狭い年輪ではヒノキ同様晩材部は少なく、年輪は目立たない。早材部仮道管はヒノキ、サワラより径が小さい。樹脂細胞は晩材部付近に接線方向にまとまって散在し、水平壁は数珠状を呈する。放射組織は柔細胞のみから成り、分野壁孔はヒノキ、サワラより小さく、ヒノキ型～トウヒ型で、１分野当たり２- ４個ある。以上の形質からヒノキ科のアスナロの材と同定した。

アスナロは日本特産の樹種で、基準変種の狭義のアスナロと変種のヒノキアスナロがある。いずれも樹高 30 ｍ、幹径 80cm になる高木で、狭義のアスナロは東北南部以南の本州、四国、九州に分布する。変種のヒノキアスナロは北海道南部から東北地方、佐渡、能登半島と、本州北半の日本海側に分布し、青森では「ヒバ」、能登では「アテ」とよばれる。静岡県では山梨、長野両県に接する北部の山中にアスナロが分布するが量は多くはない。材は木理通直で肌目は精、やや軽軟で緻密、割裂容易、芳香を持ち、加工性は良く、仕上がりは美しい。特に水湿に強い。建築材の骨格部分のみならず装飾的部分、各種器具材、特に桶など水回りに使うものに特用され、保存性が良いので土木用材としても重要である。当遺跡出土材は柱材３点と用途不明品１点で、遺跡周辺外からの移入である。

12’ヒノキ科　Cupressaceae　ヒノキ科

垂直・水平の両樹脂道を持たない針葉樹で、仮道管内壁にらせん肥厚は認められず、細胞内に黒褐色の物質を持つ樹脂細胞があり、樹脂細胞の水平壁は数珠状に肥厚することからヒノキ科のヒノキ属、アスナロ属などと考えられるが、組織の保存がとても悪いため分野壁孔が全く観察されず、詳細な同定が出来なかったものである。当遺跡出土材は用途不明品１点である。

13. イヌガヤ Cephalotaxus harringtonia (Knight ex Forbes) K.Koch イチイ科

写真９:13a- c (No.16900)

保存性がたいへん良い針葉樹材で、年輪は極めて不明瞭、晩材と認められる部分はほんのわずかである。年輪内に樹脂細胞が多く散在するが細胞内容物が黒褐色になることは無く、またイヌマキのように扁平な四角形とはならないので横断面では全く目立たない。樹脂細胞の水平壁は数珠状に肥厚する。仮道管内壁には顕著ならせん肥厚がある。分野壁孔は小型のトウヒ型で、１分野あたり１- ２個ある。以上の形質から、イヌガヤ科のイヌガヤの材と同定した。

イヌガヤは本州から九州の暖温帯に分布する小高木で、幹径 20-30cm、樹高 10 ｍほどになる常緑の針葉樹である。本州日本海側～北海道の多雪地帯には変種のハイイヌガヤ Cephalotaxus harringtonia var. nana (Nakai) Rheder が分布する。これは樹高１- ２ｍ、幹根元径２- ５cm ほどで、積雪に押されて幹は横に這い、斜上する。イヌガヤ、ハイイヌガヤとも材質が極めて硬く粘りがあるので縄文時代から古代にかけて全国的に丸木弓に多用されるとともに、杓子、匙などの木器にも用いられる。しかし静

岡県地方の弥生時代～古墳時代の丸木弓のほとんどはイヌマキ属製で、イヌガヤの出土は極めて希である。本遺跡出土材は「容器？」の１点である。

14. カヤ Torreya nucifera (L.) Siebold et Zucc. イチイ科

写真 10:14a- c (No.16951)

保存性の良い出土材で、木材組織はしっかりしている。年輪は目立たず、早材部には断面が方形の仮道管が整然と並び、晩材部ではやや細く厚壁となる。晩材部の量はわずかである。樹脂細胞はなく、仮道管と放射柔細胞の２種類の細胞からなる。仮道管内壁には顕著ならせん肥厚があり、２－３本ずつまとまって走る。放射組織は柔細胞のみからなり、背が低く、分野壁孔は小さい。これらの形質からイチイ科のカヤの材と同定した。

カヤは岩手県南部以南から九州屋久島の暖帯に広く生える常緑針葉樹で、幹径１ｍを超え、樹高は 25 ｍ以上の大木となる。幹は通直で材の木理も通直、堅く粘りがあり、緻密で弾性が強く、切削加工が容易で木肌美しく、耐朽性、保存性も高くて、極めて優秀な針葉樹材である。神社、仏閣などの特別な建物の建築材、各種器具材など実に多様な用途があるが、特に彫刻材として優れ、仏像や神像、木魚などの木製仏具に、また碁盤、将棋盤などの特用がある。古代～近代にわたり、全国の寺院の木彫仏などに重用されている。本遺跡出土材は柱材 12 点で、この柱材が使われた建築物は一般の農村部の家屋などでは無い可能性が考えられる。

14’針葉樹　Conifer

仮道管、単列放射組織からなる木材で、針葉樹材であると判断される。垂直及び水平の樹脂道の痕跡は認められない。保存状態が極めて悪く、樹脂細胞の有無は不明、分野壁孔も全く観察されない。以上のことから針葉樹のどの分類群に属するかは不明である。

15. シキミ　Illicium religiosum Siebold et Zucc. マツブサ科

写真 10:15a- c (No.17167)

薄壁多角形の微細な道管がほぼ単独で年輪内に均一に分布する散孔材で、特に年輪始めに一回り大きい道管が一列に並ぶ傾向があり、また年輪界付近の晩材部では道管密度が低くなる傾向があるが、年輪界は目立たない。道管の穿孔は横棒がとても多い階段状である。放射組織は１－２細胞幅で背は低く、典型的な異性で、多列部は平伏細胞、単列部は直立細胞からなり、多列部は単列部よりわずかに幅広いだけである。これらの形質からシキミ科のシキミの材と同定した。

シキミは暖温帯の照葉樹林を特徴づける樹種の一つで、千葉県南部以西に分布する幹径 10-20cm、樹高５－８ｍ程の常緑小高木である。材は堅く緻密で粘りがあり、割れにくく、小細工もの、柄物などに僅かに使われる。枝葉を仏前に供える特用があり、屋敷内や墓地等での植栽がよく見られる。当遺跡出土材は丸木杭４点､杭３点である。これは遺跡内外に生育しているものを伐って杭としたと考えられる。

16. カゴノキ　Litsea coreana H.Lév. クスノキ科

写真 10:16a- c (No.16936)

茶褐色を呈する出土材で保存性は比較的良い。断面が縦長の楕円型の道管が単独あるいは２－３個、主に放射方向に複合して密度低く均一に分布する散孔材で、早材部から晩材部にかけてゆっくり径を減じ、半環孔材的であるが、年輪界は目立たない。道管の最大接線径は 100 μｍ程度。道管の穿孔は単一と横棒が 10 本以下と数が少ない階段状穿孔が混在する。木部柔組織は周囲状で比較的量が多い。放射

組織は異性、ほぼ２細胞幅で背は低い。木部柔組織と放射組織の直立細胞に大きく膨らんだ油細胞が多く混じる。これらの形質からクスノキ科のクスノキ以外の材であることがわかる。

クスノキ科には多くの属、種があるが、道管が大きく、多量の油細胞を持つクスノキ以外の材の基本構造は共通で互いによく似ている。静岡県に分布するクスノキ科の常緑高木にはヤブニッケイ Cinnamomum japonicum Siebold ex Nakai、タブノキ Machilus thunbergii Siebold et Zucc.、アオガシ（ホソバタブ）M. japonica Siebold et Zucc.、シロダモ Neolitsea sericea (Blume) Koidz.、イヌガシ N. aciculate (Blume) Koidz.、バリバリノキ Actinodaphne longifolia (Blume) Nakai、カゴノキ A. lancifolia (Siebold et Zucc.) Meisn.、落葉高木にはカナクギノキ Lindera erythrocarpa Makino、落葉低木にはクロモジ L. umbellate Thunb.、アブラチャン L. praecox (Siebold et Zucc.) Blume、シロモジ L. triloba (Siebold et Zucc.) Blume、ヤマコウバシ L. glauca (Siebold et Zucc.) Blume、ダンコウバイ L. obtusiloba Blume などがある。これらのうち道管の最大接線径が 100 μｍ前後になるのはアオガシ、バリバリノキ、カゴノキ、カナクギノキがある。そしてこれらのうち木部柔組織の量が多くて、木部柔細胞と放射組織の直立細胞に多数の油細胞を持つのはカゴノキである。これらのことから本出土材はカゴノキであると同定した。

カゴノキは茨城県以南西の暖温帯に分布する幹径 30-40cm、樹高 10 ｍ以上になる常緑高木で、照葉樹林の主要構成要素の一つであり、鹿の子まだら状に樹皮が剥げることからこの名（鹿子の木）がある。材はやや堅硬で肌目は少し粗く割裂困難で、床板、鼓の胴、和船の艪の臍などの用途がある。本遺跡出土材は柱材１点である。

17. クスノキ科 A　Lauraceae A　クスノキ科

写真 11:17a- ｃ (No.17169)

丸く壁がやや厚い最大接線径が 100 μｍ程度の道管が単独あるいは放射方向に２個複合してまばらに均一に分布する散孔材で、年輪は目立たない。年輪界近くの晩材部を除いて道管径はかなり均一である。道管の穿孔は横棒の少ない階段状と単一が混在する。木部柔組織は周囲状でときどきやや大型になって精油を含んだ油細胞が混じるが、多くは目立たない。放射組織は背が低く、２- ３細胞幅の紡錘形で、異性で、上下端にある直立細胞にわずかに膨らんだ油細胞が時に混じる。以上の形質からクスノキ科のクスノキ以外の材と同定した。

前項に述べたごとく静岡県内に分布する道管の最大接線径が 100 μｍ前後のクスノキ科樹木にはアオガシ、バリバリノキ、カゴノキ、カナクギノキがある。本出土材は油細胞が木部柔組織、放射組織ともに少ないことからカゴノキは候補から外れるが、その他の３樹種は材構造は互いによく似ており、識別は困難である。

アオガシ、バリバリノキは常緑性、カナクギノキは落葉性だが、いずれも房総半島以南西の暖帯に生育し、幹径 40cm、樹高 15 ｍほどになる。バリバリノキは建築材、家具、器具材、土木用材などに使われるが、他の樹種には特段の用途は無い。本遺跡出土材は丸木杭１点である。

18. クスノキ科 B　Lauraceae B　クスノキ科

写真 11:18a- ｃ (No.17186)

丸い小道管（最大接線径が 60 μｍ程度）が単独あるいは放射方向に２個複合してまばらに均一に分布する散孔材で、年輪は目立たない。年輪界近くの晩材部を除いて道管径はかなり均一である。道管の穿孔は横棒の少ない階段状と単一が混在する。木部柔組織は周囲状だが目立たない。放射組織は背が低く、２- ３細胞幅の紡錘形で、異性である。木部柔組織及び放射組織に顕著に膨らんだ油細胞はほとん

ど観察されない。以上の形質からクスノキ科のクスノキ以外の材と同定した。

カゴノキの項で記述したように、静岡県内には多数のクスノキ科の樹種が分布するが、このうち、道管の最大接線径が 60 μｍ前後ととても小さい樹種はダンコウバイ、アブラチャン、クロモジ、ヤマコウバシなどがある。いずれも材構造はよく近似し、材形質での識別は困難である。しかし、これらのうちダンコウバイとアブラチャンは少し標高の高い暖帯上部から温帯に分布し、遺跡周辺での自生は考えにくく、また、ヤマコウバシは小低木で本出土材（杭）に利用できるサイズにはならないことから、本出土材はクロモジである可能性が考えられる

19. クスノキ科Ｃ　Lauraceae C　クスノキ科

写真 11:19a- ｃ（No.17188）

丸い小道管（最大接線径が 90 μｍ程度）が単独あるいは放射方向に２個複合してまばらに均一に分布する散孔材で、年輪は目立たない。年輪界近くの晩材部を除いて道管径はかなり均一である。道管の穿孔は横棒の少ない階段状と単一が混在する。木部柔組織は周囲状。放射組織は背が低く、2 細胞幅の紡錘形で、異性である。木部柔組織及び放射組織に膨らんだ油細胞が散在する。以上の形質からクスノキ科のクスノキ以外の材と同定した。

カゴノキの項で記述したように、静岡県内には多数のクスノキ科の樹種が分布するが、このうち、道管の最大接線径が 90 μｍ前後になる樹種はヤブニッケイ、カナクギノキ、シロダモなどがある。いずれも材構造はよく近似し、材形質での識別は困難である。いずれも暖帯の照葉樹林に自生する常緑あるいは落葉の高木で幹径 40cm、樹高 15 ｍくらいになる。材は柔らかく緻密で、建築材、小細工もの、薪炭材とされる。本遺跡出土材は杭１点である。

20. ヤマビワ Meliosma rigida Siebold et Zucc. アワブキ科

写真 12:20a- ｃ（No.17129）

丸～楕円形の中小型の道管が単独あるいは２- ３個、主に放射方向に複合してまばらで均一に分布する散孔材。道管の穿孔は横棒が 10 本以下の階段状。木部柔組織は周囲状で、やや目立つ。放射組織は１- ４細胞幅で背が高く、構成細胞は大振りで粗雑である。これらの形質からアワブキ科アワブキ属のヤマビワの材と同定した。

ヤマビワは東海地方以南西の暖帯～亜熱帯に分布する幹径 30cm、樹高 15 ｍになる常緑高木で、材は柄物や棒などに使われる。当遺跡出土材は杭と丸木杭の２点である。

21. ネムノキ Albizzia julibrissin Durazz. マメ科

写真 12:21a- ｃ（No.17154）

丸い大道管が年輪始めにまばらに１- ５層ほど並び、順次径を減じて晩材部ではやや壁の厚い丸い小道管が単独あるいは数個が主に放射方向に複合したものがまばらに散在する環孔材で、道管の穿孔は単一、木部柔組織は周囲状及び翼状で、特に晩材部で目立つ。放射組織は２- ３細胞幅くらいの同性で、接線断面での形状は紡錘形だが、輪郭はやや不整である。以上の形質からマメ科のネムノキの材と同定した。

ネムノキは東北地方中部以南の全国の山野、沢沿いの陽光地に普通に生育する落葉高木で、幹径 30cm、樹高８ｍくらいになる。材の成長は早く、軽軟で脆く、保存、耐朽性も低く、各種器具材に使われる程度である。本遺跡出土材は杭１点である。

22. エノキ Celtis sinensis Pers. アサ科

写真 12:22a- c (No.16980)

出土材はやや透明感のある淡黒褐色となることが多く、保存性は低い。年輪始めに丸～楕円の大道管が１- ３層ほどに並び、順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管と木部柔組織が集まって斜め接線方向に長い塊をつくり、全体として波状の紋をなす環孔材。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、小道管内壁には微細ならせん肥厚があり、大道管にはチローシスが発達する。放射組織は３- ７細胞幅、時に 10 細胞幅近い大型の紡錘形で鞘細胞を持ち、異性である。これらの形質からニレ科のエノキの材と同定した。

エノキは東北地方南部以南の暖帯に広く分布し、特に二次林や屋敷林に多い。成長が早く時には幹径２m樹高 30m の大木となり、材は比較的堅硬で柔曲性に富み、割裂困難で、建築材、家具、ラケット、柄物などの用途がある。本遺跡出土材は丸木杭５点、杭４点、用途不明品が６点、合計 15 点である。

23. クリ Castanea crenata Siebold et Zucc. ブナ科

写真 13:23a- c (No.16982)

年輪のはじめに円～卵形の大道管が１- ３層に並び、そこから順次径を減じ、晩材部では薄壁多角形の小道管が周囲状仮道管や木部柔組織と共に集合して火炎状の紋をなす環孔材で年輪が明瞭である。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状にやや隙間を開けて配列する。らせん肥厚はない。木部柔組織は周囲状及び単細胞幅の独立帯状で、後者は晩材部で目立つ。放射組織は単列同性で背は低い。道管－放射組織間壁孔は不定形の楕円形で大振り、柵状にきちんと並ぶことはない。これらの形質からブナ科のクリの材と同定した。

クリは北海道石狩低地周辺から九州鹿児島県までの温帯から暖帯に広く分布する落葉高木で、幹径１m以上、樹高 30 mになる。材質は堅く、割裂が容易で心材は耐久力つよく水湿に特に強い。大材が得られるので大型建造物から一般の家屋の大黒柱や土台回り、屋根葺き材（くれこば）などに用いられるほか、家具、農具、などさまざまな部分に用いられ、また水湿に強いことから土木用材や鉄道枕木などの特用があった。本遺跡出土材は柱材５点、杭材２点である。

24. コジイ Castanopsis cuspidata (Thunb.) Schottky ブナ科

写真 13:24a- c (No.17115)

年輪の始めに丸～楕円形の中～やや大型の道管が間隔を置いて１- ３層に並び、順次径を減じて、晩材部ではクリ同様薄壁多角形の小道管、周囲状仮道管、木部柔組織が集まって火炎状となる放射孔材的環孔材で、年輪はやや明瞭である。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は丸い小孔紋で交互状、木部柔組織は散在状及び単接線状である。放射組織は単列同性と集合放射組織の２型がある。集合放射組織は時に放射組織細胞の割合が高くなり複合状となるがアカガシ亜属のように幅広にはならない。道管－放射組織間壁孔は楕円形でしばしば縦に柵状に並ぶ。これらの形質からブナ科シイノキ属のコジイの材と同定した。スダジイからは集合放射組織があることで区別される。

コジイ（別名ツブラジイ）は関東地方南部以西の暖地に分布する常緑高木で、照葉樹林の主要な要素のひとつである。スダジイが海岸部に多いのに対し、コジイは内陸部に多い。コジイは樹高 20 m、幹径１mの大木となり、材はやや堅硬で緻密、割裂容易であるが肌目は粗く保存性は低い。建築材、器具材（柄物など）、下駄、薪炭材などに用いる。本遺跡出土材は杭が２点である。

25. スダジイ Castanopsis sieboldoldii (Makino) Hatusima ex T.Yamaz. et Mashiba ブナ科

写真 13:25a- c (No.17163)

クリ、コジイによく似た材で、年輪の始めに大～中型の円形～楕円形の道管が間隔を置いて配列し、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管、周囲状仮道管、木部柔組織が集まって火炎状となる放射孔材的環孔材で、年輪はやや明瞭である。幅広い年輪では年輪内側から外側に向かっての道管径の減少率は小さく、あたかもカシ類などの放射孔材に似てくることもある。木部柔組織は接線状で晩材部で目立つ。道管の穿孔は単一､側壁の壁孔は小孔紋で交互状である。放射組織は単列同性である。以上の形質からブナ科シイ属のスダジイの材と同定した。道管形態、配列はコジイとほとんど変わらない環孔材であるが、集合状～複合状の放射組織を持たないことから区別される。また、クリに比べ大道管の径が小さく、年輪はじめに間隔を置いて配列することから区別される。

スダジイは東北地方の南部以南九州屋久島までの照葉樹林帯に広く分布する常緑高木で、照葉樹林の主要要素の一つで、特に海岸部に多い。樹高 20 m、幹径１m以上となり、特に海岸部では幹は高くならず横枝が発達する独特の樹形となる。材はコジイ同様、やや堅硬で緻密であるが、肌目粗く、保存性が低い。用途等はコジイと区別されない。本遺跡出土材は丸木杭５点と杭２点である。

26. コナラ属クヌギ節 Quercus sect. Aegilops ブナ科

写真 14:26a- c (No.16988)

年輪の始めに丸い大道管が１－数層に配列する環孔材で、孔圏外では丸い小道管が複合せずに単独で緩く放射方向に散在して配列する。道管の穿孔は単一、らせん肥厚はない。木部柔組織は接線状で孔圏外でよく目立つ。放射組織は単列同性と複合状で、複合放射組織内には大きな結晶細胞が混じる。これらの形質からブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節の材と同定した。

クヌギ節には東北中部以南から九州までの全国に広く分布するクヌギ Quercus acutissima Carr. と関東・北陸以西から九州北部まで分布するアベマキ Q. variabilis Blume があり、これら両者の材構造は互いによく似ていて識別は困難である。両者とも暖帯性の落葉高木で､幹径60cm､樹高20m以上になり、クヌギは水湿地～乾いた山地丘陵にあるのに対し、アベマキは水湿地には無い。いずれも陽樹で二次林に多い。いずれの材もやや堅硬、木理は粗く、割裂自在で、ミカン割り材をつくりやすい。各種柄類、車軸、艪の柄などの用途があるが、近年は椎茸栽培のほだ木としてよく使われる。本遺跡出土材は杭１点と用途不明品２点である。

27. コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus ブナ科

写真 14:27a- c (No.16897)

年輪の始めに丸い大道管が１－数層並び、晩材部では薄壁多角形の小道管が多数集まって火炎状～放射状となる環孔材で、道管の穿孔は単一、木部柔組織は 2-3 細胞幅の独立帯状で晩材部でよく目立つ。放射組織は単列同性と複合状があり、道管－放射組織間の壁孔はカシ類と異なり、いびつな楕円形で縦に長くならない。以上の形質からコナラ属コナラ亜属のうち、コナラ節の材と同定した。コナラ節の材は晩材部の小道管が火炎状に配列することでクリ、シイノキ属に類似し、更に複合放射組織を持つことでコジイと非常に似てくる。クリとの識別は、横断面、接線断面の切片を大きくつくることで複合放射組織の存在を確認する一方、スダジイ、コジイとの識別は年輪はじめの大道管が隙間なく配列することに注意を払って行う。

コナラ節には北海道から九州の山野に普通で特に二次林に多いコナラ Quercus serrata Thunb.、青森県から九州の暖帯から温帯に分布するナラガシワ Q. aliena Blume、全国の温帯に多いミズナラ Q.

mongolica Fish. var. grosseserata Rhed.、暖帯、温帯から亜寒帯にあるカシワQ. dentata Thunb.などがあり、静岡県地方ではコナラが普通にあり、山地上部に行くとミズナラが出現し、カシワが希にあるがナラガシワは余り見かけない。コナラは幹径60cm、樹高20ｍくらいになる落葉高木で、材はやや堅硬で肌目は粗く、割裂容易で、建築材、各種器具材、柄物、細工物など、特に薪炭材に用いる。ミズナラは幹径１ｍ、樹高20ｍを超える大木となり、材質もコナラより優れていて、特に家具材に重用される。本遺跡出土材は柱材10点と杭１点である。

28. イチイガシ Quercus gilva Blume ブナ科

写真14:28a- c (No.17109)

最大接線径が230μｍ程度になる丸い厚壁の道管がゆるくまとまりながら放射方向に年輪を越えて配列する放射孔材で、木部柔組織は独立帯状で接線状に多数配列してよく目立つ。道管の穿孔は単一、道管内壁にらせん肥厚はない。放射組織は単列のものと複合放射組織があり、道管－放射組織間壁孔は縦に長い楕円形で柵状に配列する。これらの形質からブナ科のコナラ属アカガシ亜属のイチイガシの材と同定した。

イチイガシは房総半島南部以南西の暖帯に分布する常緑高木で西日本の照葉樹林の主要構成要素の一つである。幹径１ｍ、樹高25m以上の大木となり、材は堅硬緻密で強靭で割裂性よく、建築材、各種器具材、柄物などさまざまな用途に利用される。関東地方以西の弥生時代～古代の木製農具に特用されていた。本遺跡出土材は転用の杭材１点である。

29. コナラ属アカガシ亜属 Quercus subgen. Cyclobalanopsis ブナ科

写真15:29a- c (No.17131)

最大接線径が160μｍ程度の中型で丸い厚壁の道管がゆるくまとまりながら放射方向に年輪を越えて配列する放射孔材。木部柔組織は独立帯状で接線状に多数配列してよく目立つ。道管の穿孔は単一、道管内壁にらせん肥厚はない。放射組織は単列のものと複合放射組織があり、道管－放射組織間壁孔は縦に長い楕円形で柵状に配列する。これらの形質からブナ科のコナラ属のうち、常緑のカシ類であるアカガシ亜属（イチイガシを除く）の材と同定した。

アカガシ亜属（カシ類）はブナ科コナラ属のうち、アカガシQuercus acuta Thunb.、シラカシQ. myrsinaefolia Blume、イチイガシなど常緑の樹種からなる亜属で、東北地方以南の全国の暖帯に広く分布し、照葉樹林の主要素である。多数の種があり、イチイガシ以外の樹種を材構造により識別するのは困難である。いずれの材も硬く緻密で強靭で粘りがあり、加工性には難があるが、建築材、各種器具材、車輛材、柄物など広い用途がある。本遺跡出土材は杭材１点である。

30. カバノキ属 Betula カバノキ科

写真15:30a- c (No.17166)

中型で楕円形の単独あるいは２，３個放射方向に複合した道管が密度低く均一に分布する散孔材で、年輪界は目立たない。道管の穿孔は10-20本程度の横棒からなる階段状、道管相互の壁孔は微細な小孔紋で交互状に密にある。放射組織は１－３細胞幅のほぼ同性で、接線面では幅の狭い端正な紡錘形となる。これらの形質からカバノキ科カバノキ属の材と同定した。

日本には亜高山帯から山地帯に分布するダケカンバBetula ermanii Cham.、山地帯に分布するウダイカンバB. maximowicziana Regelや二次林に多いシラカンバB. platyphylla Sukaczev var. japonica (Miq.) H.Haraをはじめ、カバノキ属には多くの樹種がある。材構造は互いに似ていて樹種

の識別は困難である。材質はいずれも堅硬緻密で粘りがあって割裂困難である。家具、指物、漆器木地、柄物、櫛、楽器などの材質を活かした用途がある。当遺跡出土材は杭材１点である。

31. シラキ Neoshirakia japonica (Sieboldold et Zucc.) Esser トウダイグサ科

写真 15:31a- c (No.17148)

丸く壁の厚い小道管が単独あるいは２- ４個が放射方向に複合したものが均一に密度低く散在する散孔材で、年輪は全く目立たない。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状。木部柔組織は散在し、目立たない。放射組織は単列で直立細胞と平伏細胞が混じる異性である。以上の形質からトウダイグサ科のシラキの材と同定した。

シラキは東北地方中部以南の日本列島、南西諸島に分布する落葉小高木で幹径 30cm、樹高８ｍほどになる。材は重硬緻密で小細工ものに利用される。本遺跡出土材は丸木杭１点である。

32. ムクロジ Sapindus mukorossi Gaertn. ムクロジ科

写真 16:32a- c (No.16946)

年輪始めに楕円形の大道管が数層並び、順次径を減じて、晩材部では厚壁で多角形の小道管が数個集まって塊となったものが散在する環孔材で、周囲状柔組織おより連合翼状柔組織があり、特に晩材部で量が多く、肉眼では多層の縞模様に見える。道管の穿孔は単一、小道管の内壁にはらせん肥厚があり、また道管内に黄褐色の透明物質がしばしば詰まっている。放射組織は３- ５細胞幅で背は高くなく、接線面で見たときの輪郭が不整形である。これらの形質からムクロジの材と同定した。

ムクロジは関東地方以西から九州沖縄までの暖地に比較的希に生える幹径 40cm、樹高 15 ｍほどになる落葉高木で、しばしば社寺、鎮守様、農家敷地などに植えられるので天然分布は明らかでない。材は軽軟で肌目は粗く、脆いが切削加工容易である。机や箱類、小細工もの、キリの代用として下駄などの用途がある。果実にサポニンを含み、若実を「石鹸」の代用にするほか、黒くて丸い種子を羽根つきの羽根の頭にする。本遺跡出土材は柱材１点である。

33. タイミンタチバナ Myrsine seguinii Lev. サクラソウ科

写真 16:33a- c (No.17118)

薄壁で角が丸みを帯びた多角形の小道管が単独あるいは２- ３個放射方向に複合したものが、まばらに均一に散在する散孔材で、道管径は年輪内でほとんど変わらず、年輪は全く目立たない。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は微少孔紋で、交互状に密に配列する。木部柔組織は周囲状、繊維細胞は薄い隔壁を持つ。放射組織は単列と多列があり、前者は極めて背の高い直立細胞のみからなる。多列放射組織は３- ８細胞幅程度で極めて背が高い。構成細胞は大振りで不整形、時に結晶を持つ。以上の形質からサクラソウ科のタイミンタチバナの材と同定した。

タイミンタチバナは千葉県南部以南西の温暖地、特に海岸近くに生える常緑小高木で、幹径 15cm、樹高６ｍくらいになる。材はやや重く堅硬緻密で、保存性も良いが狂いやすく、小細工ものなどに使われるにすぎない。本遺跡出土材は丸木杭２点と杭１点である。

34. ヤブツバキ Camellia japonica Linn. ツバキ科

写真 16:34a- c (No.17194)

薄壁多角形の微細な道管がほとんど単独で均一に分布する散孔材で、年輪始めに一回り大きい道管が並び年輪界に向かってゆっくりと径を減じ、年輪界付近では繊維細胞とあまり径が違わないくらいに小

さくなる。道管の穿孔は横棒が 10 本くらいの階段状で、側壁の壁孔も階段状である。木部柔組織は散在状で年輪内に均一に散在する。放射組織は 1-3 細胞幅で異性、背は低く、直立細胞がときどき大きく膨らんで中に大きな結晶を一つ持つ。以上の形質からツバキ科のヤブツバキの材と同定した。

ヤブツバキは照葉樹林を特徴づける常緑小高木で、東北地方以南の沿岸部から、関東以西では内陸部まで広く分布し、幹径 30cm、樹高 10 ｍくらいになる。材質は堅硬強靭で粘りがあり、割裂、加工は困難だが、柄物、滑り台、滑車、轆轤部品など強度を必要とする部分によく用いられる。本遺跡出土材は杭２点である。

35. ナツツバキ Stewartia pseudocamellia Maxim. ツバキ科

写真 17:35a- ｃ（No.17157）

最大接線径が 90 μｍ程で輪郭が楕円形の小道管が単独で年輪内に均一に分布する散孔材で、道管径は年輪界に近づくと小さくなる。道管の穿孔は横棒が 10 数本程度の階段状である。木部柔組織は単細胞状でまばらに散在する。放射組織は１－３細胞幅。単列放射組織は直立細胞のみからなる。多列放射組織の単列の翼部も直立細胞からなり，典型的な異性放射組織である。以上の形質からツバキ科のナツツバキ属の材と同定した。静岡県内にはナツツバキとヒメシャラ Stewartia monadelpha Siebold et Zucc. の２種が分布する。ナツツバキの方が道管径がやや小さく、最大接線径は 80-90 μｍ程度であるのに対し､ヒメシャラでは 130-140 μｍになる。この道管径の違いから出土材をナツツバキと同定した。

ナツツバキは福島・新潟県以南の本州、四国、九州の暖帯上部～温帯に分布する落葉高木で、幹径 30cm、樹高 10 ｍになる。材は堅硬緻密、強靭で割裂困難であり、硬い材質を活かして鑿、槌、農具の柄などに用いられる。本遺跡出土材は丸杭１点である。

36. サカキ Cleyera japonica Thunb. モッコク科

写真 17:36a- ｃ（No.17140）

薄壁で多角形の微細な道管が均一に分布する散孔材で、年輪は全く目立たない。道管はほぼ単独で、道管径は年輪内でほとんど変化しない。道管の穿孔は横棒の多い（40 本ほど）階段状である。木部柔組織は散在状で均一に分布し、目立たない。放射組織はほぼ単列の異性で、背は比較的高く、平伏細胞及び背の大変高い直立細胞からなる。これらの形質からモッコク科のサカキの材と同定した。

サカキは関東南部以西～九州、南西諸島に分布する照葉樹林を特徴づける常緑小高木で、幹径 20cm、樹高８ｍくらいになる。材は堅硬で肌目はやや粗く、強靭で割裂困難であり、蒴芽枝がまっすぐによく伸びることから丸木の柄物に重用される。各種柄物、杵、天秤棒、舟の棹、櫛等に用いられる。本遺跡出土材は丸木杭が 10 点、杭が８点、柱材が１点、合計 19 点である。

37. ヒサカキ属 Eurya モッコク科

写真 17:37a- ｃ（No.17180）

薄壁多角形の微細な道管が単独あるいは２個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で、年輪は目立たない。道管の穿孔は横棒の数が多い（40 本ほど）階段状。木部柔組織は散在状で目立たない。放射組織は１－４細胞幅で異性、単列部は直立細胞と方形細胞から、多列部は平伏細胞で構成される。これらの形質からモッコク科のヒサカキ属の材と同定した。

静岡県では平地～低山地にかけてヒサカキ Eurya japonica Thunb. が普通に分布し、沿岸部にはハマヒサカキ E. emarginata（Thunb.）Makino がある。ヒサカキは東北地方以南、九州、琉球列島の暖帯に広く分布する常緑小高木で、幹径 15cm、樹高８ｍ程度になる。材は堅硬緻密で粘りがあり割裂折損が

困難でサカキ同様の用途がある。本遺跡出土材は杭１点である。

38. クロバイ Symplocos prunifolia Siebold et Zucc. ハイノキ科

写真 18:38a- c (No.17103)

最大接線径が 40-50 μ m の薄壁多角形の小道管が単独あるいは数個様々な方向に複合したものが比較的密度高く均一に分布する散孔材で、年輪界附近では道管密度は低い。年輪は目立たない。道管の穿孔は横棒が 30 本あるいはそれ以上ある階段状。木部柔組織は散在状。放射組織は１- ３列で異性である。単列放射組織と多列の放射組織の単列部は背の高い直立細胞からなる。これらの形質からハイノキ科ハイノキ属のクロバイの材と同定した。

静岡県に自生するハイノキ属には低標高地に照葉樹林の構成要素である常緑高木のクロバイ、ミミズバイ Symplocos glauca (Thunb.) Koidz.、カンザブロウノキ S. theophrastifolia Siebold et Zucc. があり、平野部から山地帯には落葉低木のサワフタギ S.s sawafutagi Nagam.、タンナサワフタギ S. coreana (H.Lév.) Ohwi が、そして丘陵地の湿原周囲に希に落葉低木のクロミノニシゴリ S. paniculata (Thunb.) Miq. がある。サワフタギとタンナサワフタギは出土材に比べ道管径が大きく、断面が楕円形であることで明確に区別される。ミミズバイとカンザブロウノキも出土材より道管径が大きく、放射組織の幅も大きいことで区別される。クロミノニシゴリは出土材に比べ道管径がやや大きく（最大接線径が 60 μ m)、道管の断面がやや丸みを帯び、道管密度がやや低く、また生育地が湿原周辺部など特殊な環境に限定され、また静岡県では希な樹木であることから出土材がこの種である可能性は低いと考えられる。クロバイの道管径（最大接線径）は 50-60 μ m と出土材より僅かに大きく、放射組織も個体により２細胞幅のものから４細胞幅になるものもあるなど変異は大きいが、道管の断面が多角形で、出土材では収縮により道管径が実際より小さめに計測されるなどのことから、出土材はクロバイである可能性が非常に高いと言える。

クロバイは房総半島南部以南西の低標高地に分布する常緑高木で、樹高 10 m、幹径 30cm ほどになり、照葉樹林の主要構成種の一つである。材はやや堅硬で緻密であるが、器具材、薪炭材などに僅かに用いられるに過ぎない。本遺跡出土材は柱材１点、丸木杭、杭が各１点、柄かと思われるもの１点の合計４点である。

39. エゴノキ属 Styrax エゴノキ科

写真 18:39a- c (No.17132)

小型の道管が多くは放射方向に数個複合して長楕円形となったものが年輪界に向けて徐々に径を減じながら比較的均一に散在する散孔材で、年輪後半では道管は径が小さくなり目立たず、独立帯状の木部柔組織が目立つ。道管の穿孔は横棒の 10-20 本程度の階段状である。放射組織は異性で、１- ３細胞幅である。以上の形質から、エゴノキ科のエゴノキ属の材と同定した。

静岡県に自生するエゴノキ属には、エゴノキ Styrax japonicus Siebold et Zucc.、ハクウンボク S. obassia Siebold et Zucc.、コハクウンボク S. shiraianus Makino の３種があり、いずれも落葉小高木である。ハクウンボクとコハクウンボクは多少とも標高のある山地帯に多く、平野部ではエゴノキが普通に生えることから出土材はエゴノキである可能性が高い。エゴノキは北海道最南部以南から九州、南西諸島の温帯から暖帯、亜熱帯に広く分布する落葉小高木で、幹径 20cm、樹高８ｍほどになる。材は白色で、やや堅硬、緻密均質で粘りがあり、切削加工がよく、木製玩具などに用いられる。当遺跡出土材は杭１点である。

40. イボタノキ属 Ligustrum モクセイ科

写真 18:40a- c （No.17159）

年輪のはじめに薄壁でまるい微細な道管が断続的に１列にならび、その外側ではそれより一回り以上径の小さい丸い道管が単独あるいは２個放射方向に複合したものが均一に分布する散孔材で、年輪界に向けて直径がわずかに小さくなる。木部柔組織は散在状で目立たない。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で２細胞幅、背は低く、道管との壁孔はやや小型の楕円形でやや疎ら。これらの形質からモクセイ科のイボタノキ属の材と同定した。

静岡県に分布するイボタノキ属には本州から琉球まで分布する常緑小高木のネズミモチ Ligustrum japonicum Thunb.、全国の丘陵、原野に普通に分布する落葉小高木のイボタノキ Ligustrum obtusifolium Siebold et Zucc.、オオバイボタ L. ovalifolium Hassk.、ミヤマイボタ L. tschonoskii Decne. などがある。これらはいずれも最大接線径が 60 μ m 以下の微細な道管を持ち、年輪はじめに他より一回り大きい道管が一列に並び、道管の穿孔は単一、放射組織は２時に３細胞幅で背の低い異性放射組織を持つ、など、形質が極めて近似しており、材構造での識別は困難である。本遺跡出土材は杭１点である。

２　出土木材の樹種組成

以上に記載した通り、196 点の出土材から 40 の樹種が同定された。その樹種組成は表２の通りである。もっとも出土数が多かったのがサカキ（19 点）で、次いでヒノキ（18 点）、アカマツ（16 点）、カヤ（12 点）、コナラ属コナラ節（11 点）と続く。針葉樹は合計 97 点、広葉樹が 99 点でほぼ半数ずつである。これらの木材の時期は平安時代後期～鎌倉時代が 131 点で出土材の 2/3 を占め、奈良～平安時代を合わせたものがが 41 点で、あとは、古墳時代が 16 点、弥生時代が２点、時期不明が１点である。それらの用途との関係から見ると（第３表）、平安時代後期～鎌倉時代の６割は杭で、14%が柱材である。一方、奈良～平安時代は 41 点中 23 点が柱材である。

平安時代後期～鎌倉時代の杭材の利用樹種は最も多いのがアカマツ（13 点）で、次いでエノキ（９点）、スダジイ（７点）、シキミ（６点）、などがあり、全 77 点で針葉樹で 8，広葉樹で 23、合計 31 もの樹種が認められた（表３）。針葉樹はアカマツの他、イヌマキ属、カラマツ、ヒノキ、ツガ属、クロマツ、サワラ、アスナロで 26 点あり、いずれの種も３～１点と数は少ない。一方、広葉樹は上に挙げた４種に加えてヒサカキ属、タイミンタチバナ、コジイ、クロバイなど 23 樹種が同定された。大部分の樹種は１あるいは２点の出土で、非常に多様な樹木がまんべんなく杭として利用されたことが分かる。その樹種組成を見ると、照葉樹林の常緑広葉樹が 10 種 30 点、落葉樹が 9 種 18 点、不明 4 種 4 点で、落葉広葉樹の大部分も暖温帯の山野、特に二次林に普通に分布する樹種であり、これらのほとんどが当時の遺跡周辺に自生していたと推定される樹種である。すなわち、広葉樹の杭は遺跡周辺のムラ、居住域など手近なところから得られた木材が使用されたことが分かる。それは小径で樹皮の残存した丸木材が杭として少なからずあることと整合する。一方、針葉樹では遺跡周辺に自生していたと考えられるのはアカマツ、クロマツ、イヌマキの 3 樹種で、あとの樹種は山地帯からの移入と考えられ、それらは建築材等の転用で杭とされたことが推定される。

柱材は平安時代後期～鎌倉時代が 45 点、奈良～平安時代が 26 点出土しているので、その組成も比較することが出来る。奈良～平安時代の 26 点の内訳は針葉樹が 10 種 18 点、広葉樹が 5 種 8 点で、針葉樹ではツガ属、ヒノキ、アスナロなど遺跡周辺には自生しない移入材が比較的多いのに対し、広葉樹材はナラ類の 4 点など遺跡周辺で手に入るものばかりである。平安時代後期～鎌倉時代の 45 点の内訳は針葉樹が 12 種 24 点、広葉樹は 3 種 21 点で、針葉樹は前期同様移入材と看做されるものが多く、また

樹種も多様となっている。一方広葉樹材は３種のみで、そのうち 18 点がサカキであった。これはおそらくある時期のある建物にサカキの丸木材を柱材として多用したものに由来するのだろう。

以上を踏まえて今回調べられた木材の樹種組成で全般的な特徴を挙げると、一つには「スギ材の出土が極めて少ない」ことが挙げられる。東海地方の弥生時代～古墳時代の遺跡ではスギは建築材、土木用材、各種器具などありとあらゆる用途に大量に使われていたことはよく知られている。それに対し当遺跡では全 196 点中スギ材はわずか５点である。登呂遺跡では遺跡のすぐ傍にスギの天然林があったことが知られているように、かつては静岡県地方では平地にもスギの天然林があり、膨大な資源をなしていたと考えられるが、弥生時代以降に大量に消費したことにより古代の頃には平地部でのスギ天然林は消滅し、以後、低山部から順次奥地のスギ資源も消費され、現在では天城山域や愛鷹山、山梨、長野県境近くの奥地に残存しているに過ぎない状態になっている。今回調べられた平安時代後期～鎌倉時代のスギ材が僅か１点であることは、この時期には既に平地～低山帯のスギ資源は枯渇していたことを示していると考えられる。

当遺跡の樹種組成の特徴の二つ目は遺跡周辺には全く生育していなかったと考えられるカラマツ、ツガ属、五葉松類（マツ属単維管束亜属）などの出土である。これらは富士山や静岡県北部の奥地林に自生するもので、それらの木材が建築材等に使われていたと言うことは、奥地林域からの木材の供給がなされていたことを示している。スギ資源を求めて奥地に入ると同時にそこにあったこれまで利用されてこなかったこれらの針葉樹材が供給されるようになったものと解釈できる。

第３表　樹種同定結果一覧

プレパラート No.	取上 No.	地区	遺構名	時期	器種	樹種
16894	W085	４区	SR1022	鎌倉	曲物	ヒノキ
16898	W008	２区	SE1003	鎌倉	用途不明品	ヒノキ
16925	W056	３区	SR1022	鎌倉	用途不明品	ヒノキ
16966	W077	３区	SH3004-P6	古墳後期	柱	クロバイ
16938	W014	２区	SB3001-P4	古墳後期	柱	コナラ属コナラ節
16939	W015	２区	SB3001-P3	古墳後期	柱	コナラ属コナラ節
16994	W076	３区	SH3007-P5	古墳後期	柱	針葉樹
16916	W034	３区	SH3001-P3	古墳後期	柱	スギ
16902	W016	２区	SB3001-P1	古墳後期	柱	イヌマキ属
16981	W095	４区	SB3005	古墳前期	柱	クリ
16982	W096	４区	SB3005	古墳前期	柱	クリ
16986	W099	４区	SB3005	古墳前期	柱	クリ
16973	W086	４区	SE3004	古墳前期	用途不明品	コナラ属クヌギ節
16988	W102	４区	SE3003	古墳前期	用途不明品	コナラ属クヌギ節
16984	W097	４区	SB3005	古墳前期	柱	コナラ属コナラ節
16985	W098	４区	SB3005	古墳前期	柱	コナラ属コナラ節
16970	W082	４区	SD3017	古墳前期	用途不明品	サワラ
16927	W094	４区	SD3019	古墳前期	用途不明品	スギ
16974	W087	４区	SE3005	古墳前期	用途不明品	スギ
16911	W029	２区	SB2002-P8	奈良	柱	アスナロ
16936	W017	２区	SB2005-P5	奈良	柱	カゴノキ
16904	W020	２区	SB2001-P2	奈良	柱	カヤ
16907	W024	２区	SB2001-P4	奈良	柱	カヤ
16967	W078	３区	SE2001	奈良	用途不明品	クロマツ
16903	W019	２区	SB2002-P14	奈良	柱	コナラ属コナラ節
16908	W023	２区	SB2002-P13	奈良	柱	コナラ属コナラ節
16935	W013	２区	SB2002-P10	奈良	柱	コナラ属コナラ節
16957	W060	３区	SB2005-P9	奈良	柱	スギ
16905	W021	２区	SB2002-P9	奈良	柱	ヒノキ

16906	W022	２区	SB2001-P1	奈良	柱	ヒノキ
16930	W003	２区	SP2143	奈良～平安前期	柱	アスナロ
16989	W026	２区	SB2002-P1	奈良～平安前期	柱	クロマツ
16940	W018	２区	SP2102	奈良～平安前期	柱	コナラ属コナラ節
16934	W012	２区	SP2030	奈良～平安前期	柱	イヌマキ属
16983	W100	４区		不明	用途不明品	アカマツ
16900	W010	２区	排水溝	不明	容器？	イヌガヤ
16922	W041	３区	包含層	不明	杭	クリ
16987	W101	４区		不明	用途不明品	ツガ属
16972	W084	４区		不明	用途不明品	モミ属
16971	W083	４区		不明	用途不明品	ヒノキ
16932	W005	２区	SA1001-P1	平安	柱	アカマツ
16975	W088	４区	SE1017	平安	用途不明品	エノキ
16976	W089	４区	SE1017	平安	用途不明品	エノキ
16977	W090	４区	SE1017	平安	用途不明品	エノキ
16978	W091	４区	SE1017	平安	用途不明品	エノキ
16979	W092	４区	SE1017	平安	用途不明品	エノキ
16980	W093	４区	SE1017	平安	用途不明品	エノキ
16944	W046	３区	SB1001-P5	平安	柱	カヤ
16918	W037	３区	SA1004-P1	平安	柱	クリ
16928	W081	３区	SE1013	平安	柄？	クロバイ
16943	W039	３区	SB1001-P3	平安	柱	クロマツ
16949	W051	３区	SA1004-P3	平安	柱	サカキ
16947	W049	３区	SB1002-P6	平安	柱	サワラ
16896	W002	２区	SR1001	平安	用途不明品	スギ
16915	W032	３区	SB1002-P6	平安	柱	ツガ属
16948	W050	３区	SB1002-P6	平安	柱	ツガ属
16955	W058	３区	SB1002-P6	平安	柱	ツガ属
16942	W038	３区	SB1003-P1	平安	柱	イヌマキ属
16931	W004	２区	SA1001-P2	平安	柱	モミ属
16909	W027	２区	SE1010	平安	下駄	ヒノキ
16910	W028	２区	SE1010	平安	曲物	ヒノキ
16912	W030	２区	SE1010	平安	曲物？	ヒノキ
16901	W011	２区	SE1009	平安	用途不明品	ヒノキ
16926	W062	３区	SE1013	平安	用途不明品	ヒノキ
16929	W001	２区	SR1001	平安	用途不明品	ヒノキ科
16946	W048	３区	SB1001-P14	平安	柱	ムクロジ
16954	W057	３区	SP1086	平安後期～鎌倉	柱	アカマツ
16956	W059	３区	SP1135	平安後期～鎌倉	柱	アスナロ
16917	W036	３区	包含層	平安後期～鎌倉	柱	カヤ
16921	W043	３区	SP1070	平安後期～鎌倉	柱	カヤ
16924	W045	３区	SP1070	平安後期～鎌倉	柱	カヤ
16950	W052	３区	SP1061	平安後期～鎌倉	柱	カヤ
16951	W053	３区	SP1028	平安後期～鎌倉	柱	カヤ
16953	W055	３区	SP1028	平安後期～鎌倉	柱	カヤ
16959	W063	３区	SP1061	平安後期～鎌倉	柱	カヤ
16960	W064	３区	SP1028	平安後期～鎌倉	柱	カヤ
16964	W069	３区	SP1061	平安後期～鎌倉	柱	カヤ
16961	W065	３区	SP1180	平安後期～鎌倉	柱	カラマツ
16913	W031	３区	SA1002-P1	平安後期～鎌倉	柱	クリ
16899	W009	２区	SE1007	平安後期～鎌倉	杓	クロマツ
16923	W044	３区	包含層	平安後期～鎌倉	柱	クロマツ
16993	W075	３区	SP1186	平安後期～鎌倉	柱	クロマツ
16962	W066	３区	包含層	平安後期～鎌倉	用途不明品	クロマツ
16965	W072	３区	SD1023	平安後期～鎌倉	用途不明品	コウヤマキ
16897	W007	２区	SP1013	平安後期～鎌倉	柱	コナラ属コナラ節

16933	W006	２区	SP1036	平安後期～鎌倉	柱	コナラ属コナラ節
16945	W047	３区	SP1038	平安後期～鎌倉	柱	サワラ
16941	W035	３区	SP1120	平安後期～鎌倉	柱	ツガ属
16895	W070	３区	SP1110	平安後期～鎌倉	柱	イヌマキ属
16990	W071	３区	SA1003-P2	平安後期～鎌倉	柱	イヌマキ属
16920	W042	３区	包含層 +D76	平安後期～鎌倉	柱	モミ属
16919	W040	３区	包含層	平安後期～鎌倉	櫂	ヒノキ
16914	W033	３区	SP1210	平安後期～鎌倉	柱	ヒノキ
16991	W073	３区	SP1038	平安後期～鎌倉	柱	ヒノキ
16937	W025	２区	SP1212	平安後期～鎌倉	柱片？	ヒノキ
16968	W079	３区	包含層	平安後期～鎌倉	用途不明品	ヒノキ
16969	W080	３区	包含層	平安後期～鎌倉	用途不明品	ヒノキ
16963	W067	３区	包含層	平安後期～鎌倉	柱	マツ属単維管束亜属
16992	W074	３区	SA1003-P4	平安後期～鎌倉	柱	針葉樹
16952	W054	３区	SD4008	弥生	用途不明品	イヌマキ属
16958	W061	３区	SD4008	弥生	用途不明品	マツ属単維管束亜属
17128	W205	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	アカマツ
17173	W200	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	アカマツ
17100	W192	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	アカマツ
17102	W186	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	アカマツ
17106	W179	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	アカマツ
17107	W206	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	アカマツ
17110	W144	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	アカマツ
17114	W191	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	アカマツ
17116	W175	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	アカマツ
17117	W171	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	アカマツ
17125	W182	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	アカマツ
17145	W149	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	アカマツ
17174	W198	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	アカマツ
17108	W153	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	アスナロ
17109	W120	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭（転用）	イチイガシ
17159	W177	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	イボタノキ属
17133	W160	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	エノキ
17149	W134	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	エノキ
17179	W146	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	エノキ
17192	W125	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	エノキ
17111	W172	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	エノキ
17139	W152	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	エノキ
17143	W166	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	エノキ
17160	W156	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	エノキ
17177	W159	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	エノキ
17131	W176	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	コナラ属アカガシ亜属
17166	W123	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	カバノキ属
17134	W204	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	角杭	カラマツ
17155	W203	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	角杭	カラマツ
17183	W199	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	角杭	カラマツ
17169	W154	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	クスノキ科 A
17186	W140	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	クスノキ科 B
17188	W139	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	クスノキ科 C
17187	W222	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	クリ
17103	W136	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	クロバイ
17105	W170	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	クロバイ
17184	W201	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	クロマツ
17115	W190	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	コジイ
17182	W135	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	コジイ
17193	W217	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	コナラ属クヌギ節

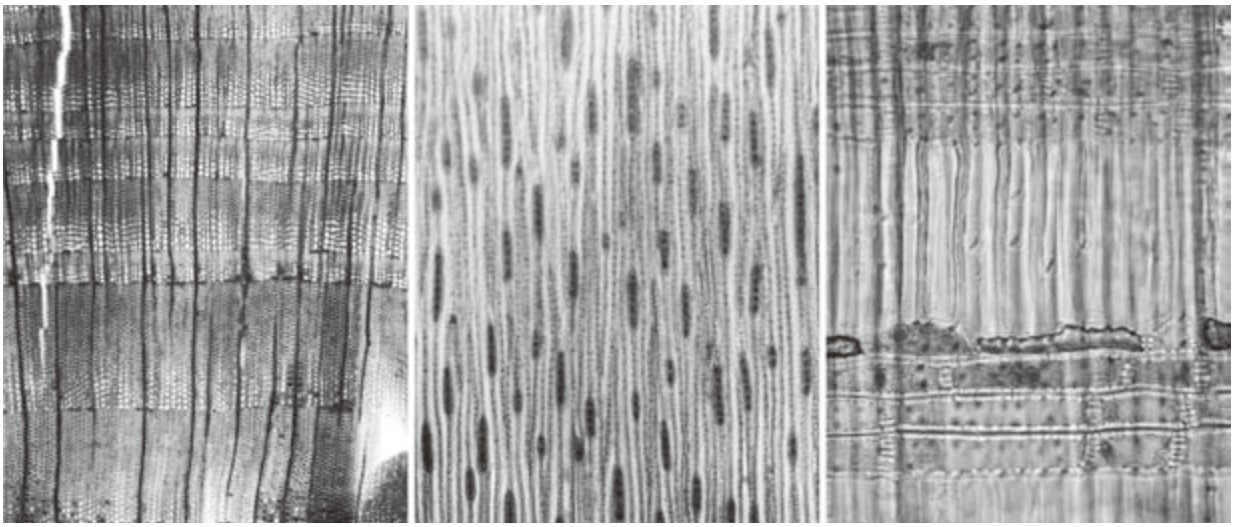
17176	W185	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	コナラ属コナラ節
17113	W142	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	サカキ
17120	W207	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	サカキ
17137	W163	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	サカキ
17142	W158	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	サカキ
17151	W187	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	サカキ
17165	W143	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	サカキ
17170	W208	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	サカキ
17191	W165	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	サカキ
17121	W117	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	サカキ
17135	W116	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	サカキ
17140	W157	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	サカキ
17144	W162	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	サカキ
17152	W150	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	サカキ
17161	W164	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	サカキ
17168	W115	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	サカキ
17171	W118	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	サカキ
17175	W113	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	サカキ
17181	W147	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	サカキ
17141	W197	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	角杭	サワラ
17122	W173	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	シキミ
17130	W180	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	シキミ
17146	W130	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	シキミ
17119	W119	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	シキミ
17123	W167	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	シキミ
17167	W132	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	シキミ
17148	W145	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	シラキ
17136	W223	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	スダジイ
17147	W137	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	スダジイ
17126	W133	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	スダジイ
17127	W141	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	スダジイ
17153	W169	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	スダジイ
17163	W184	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	スダジイ
17185	W168	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	スダジイ
17101	W194	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	角杭	ツガ属
17104	W195	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	角杭	ツガ属
17132	W183	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	エゴノキ属
17150	W131	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	ヒサカキ属
17156	W230	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	ヒサカキ属
17158	W181	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	ヒサカキ属
17180	W174	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	ヒサカキ属
17162	W196	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	ナツツバキ
17172	W219	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	イヌマキ属
17189	W138	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	イヌマキ属
17138	W112	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	イヌマキ属
17112	W161	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	タイミンタチバナ
17118	W178	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	タイミンタチバナ
17124	W155	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	タイミンタチバナ
17157	W202	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	ナツツバキ
17154	W127	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	ネムノキ
17164	W124	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	ヒノキ
17190	W216	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	ヤブツバキ
17194	W211	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	ヤブツバキ
17178	W221	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	杭	ヤマビワ
17129	W151	５区	谷地形	平安後期～鎌倉	丸杭	ヤマビワ

第４表　時期別樹種構成一覧

樹　　種	弥生	古墳	奈良	平安	奈良～平安前期	平安後期～鎌倉	鎌倉	不明	総計
ヒノキ			2	5		7	3	1	18
アカマツ				1		14		1	16
カヤ			2	1		9			12
イヌマキ属	1	1		1	1	5			9
クロマツ			1	1	1	5			8
ツガ属				3		3		1	7
スギ		3	1	1					5
アスナロ			1		1	2			4
カラマツ						4			4
サワラ		1		1		2			4
モミ属				1		1		1	3
マツ属複維管束亜属	1					1			2
針葉樹		1				1			2
イヌガヤ								1	1
コウヤマキ						1			1
ヒノキ科				1					1
針葉樹合計	2	6	7	16	3	55	3	5	97
サカキ				1		18			19
エノキ				6		9			15
コナラ属コナラ節		4	3		1	3			11
クリ		3		1		2		1	7
スダジイ						7			7
シキミ						6			6
クロバイ		1		1		2			4
ヒサカキ属						4			4
コナラ属クヌギ節		2				1			3
タイミンタチバナ						3			3
コジイ						2			2
ナツツバキ						2			2
ヤブツバキ						2			2
ヤマビワ						2			2
イチイガシ						1			1
イボタノキ属						1			1
エゴノキ属						1			1
カゴノキ			1						1
カバノキ属						1			1
クスノキ科 A						1			1
クスノキ科 B						1			1
クスノキ科 C						1			1
コナラ属アカガシ亜属						1			1
シラキ						1			1
ネムノキ						1			1
ムクロジ				1					1
広葉樹合計	0	10	4	10	1	73	0	1	99
総計	4	22	18	42	7	183	6	11	196

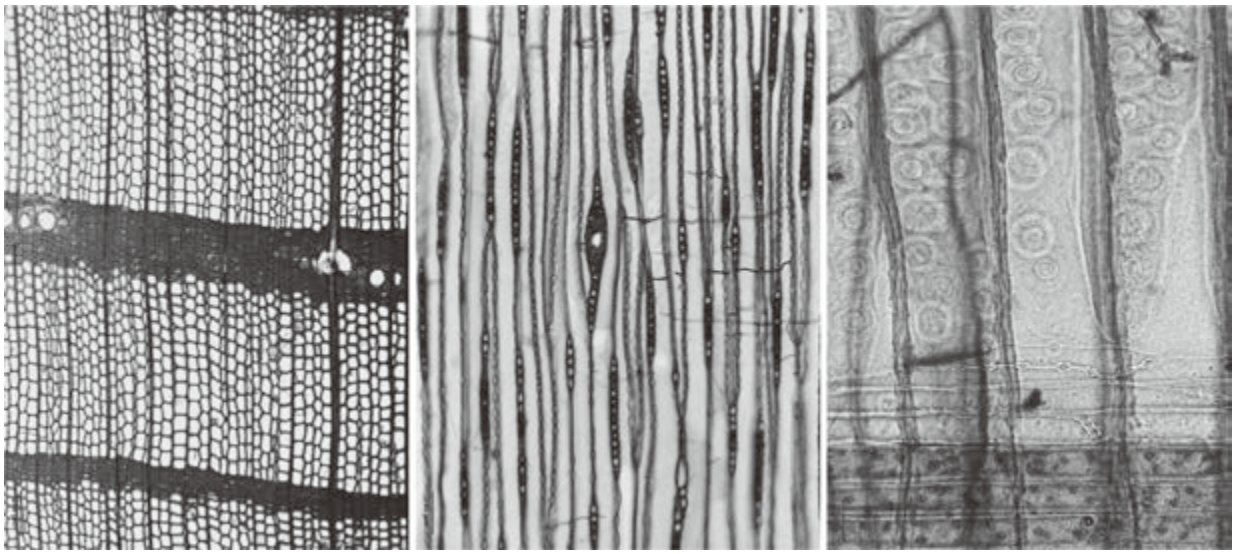
第５表　時期別器種別樹種構成一覧

時期	弥生	古墳		奈良		平安					奈良～平安前期	平安後期～鎌倉					鎌倉		不明			合計
樹種　用途	不明	柱	不明	柱	不明	下駄	曲物	柱	柄？	不明	柱	杓	櫂	柱	杭	不明	曲物	不明	容器	杭	不明	
サカキ								1							18							19
ヒノキ				2		1	2			2			1	3	1	2	1	2			1	18
アカマツ								1						1	13						1	16
エノキ										6					9							15
カヤ				2				1						9								12
コナラ属コナラ節		4		3							1			2	1							11
イヌマキ	1	1						1			1			2	3							9
クロマツ					1			1			1	1		2	1	1						8
スダジイ															7							7
ツガ								3						1	2						1	7
クリ		3						1						1	1					1		7
シキミ															6							6
スギ		1	2	1						1												5
ヒサカキ属															4							4
カラマツ														1	3							4
クロバイ		1							1						2							4
サワラ			1	1										1	1							4
アスナロ				1				1						1	1							4
タイミンタチバナ															3							3
モミ																						0
コナラ属クヌギ節			2												1							3
コジイ															2							2
ナツツバキ															2							2
ヤブツバキ															2							2
ヤマビワ															2							2
モミ属								1		1				1								3
マツ属単維管束亜属	1													1								2
針葉樹		1												1								2
イチイガシ															1							1
イボタノキ属															1							1
エゴノキ属															1							1
カバノキ属															1							1
クスノキ科A															1							1
クスノキ科B															1							1
クスノキ科C															1							1
コナラ属アカガシ亜属															1							1
シラキ															1							1
ネムノキ															1							1
コウヤマキ																1						1
ヒノキ科										1												1
ムクロジ								1														1
イヌガヤ																			1			1
カゴノキ				1																		1
総計	2	11	5	11	1	1	2	12	1	11	3	1	1	45	77	4	1	2	1		3	196

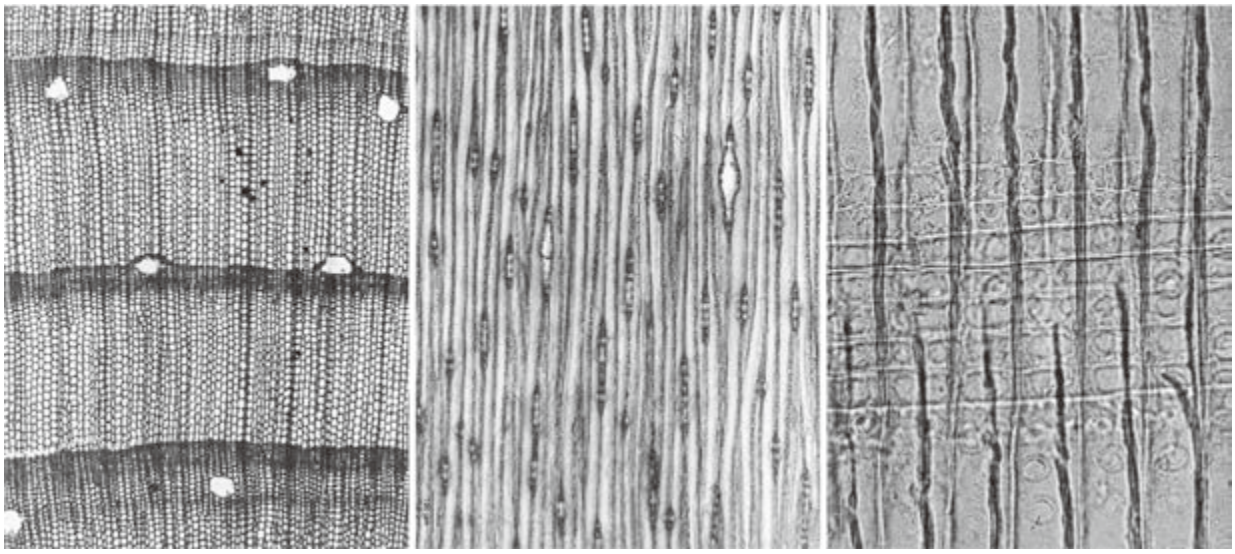


1a.　モミ属 No.16972 木口× 30　　1b.　同　板目× 60　　1c.　同　柾目× 240

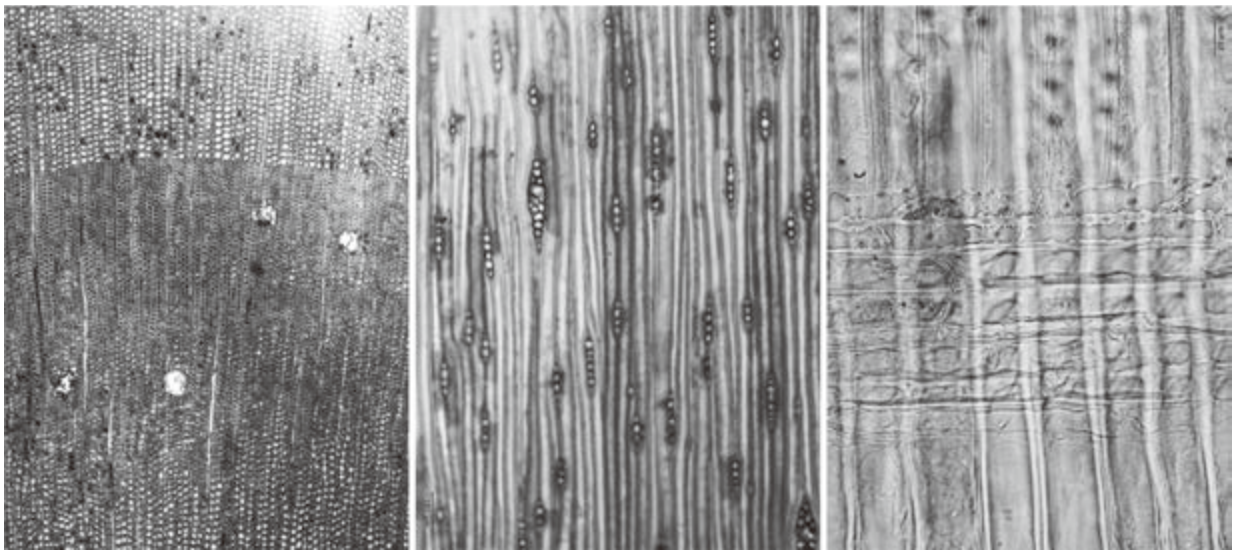
写真５　出土木材顕微鏡写真１



2a. カラマツ No.17155 木口× 30　　2b. 同　板目× 60　　2c. 同　柾目× 240

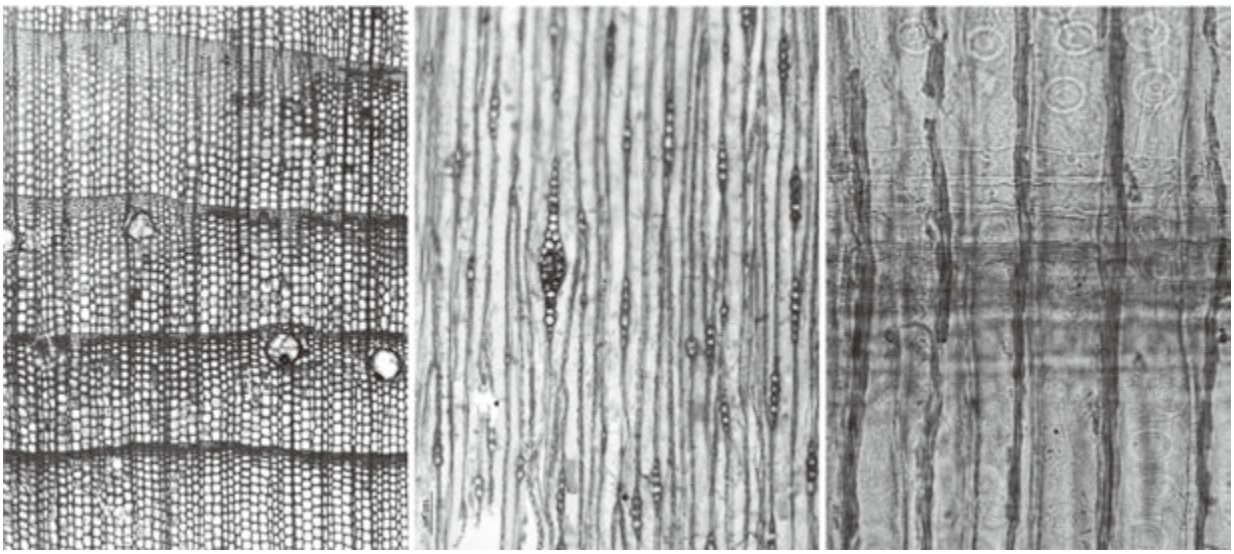


3a. アカマツ No.17100 木口× 30　　3b. 同　板目× 60　　3c. 同　柾目× 240

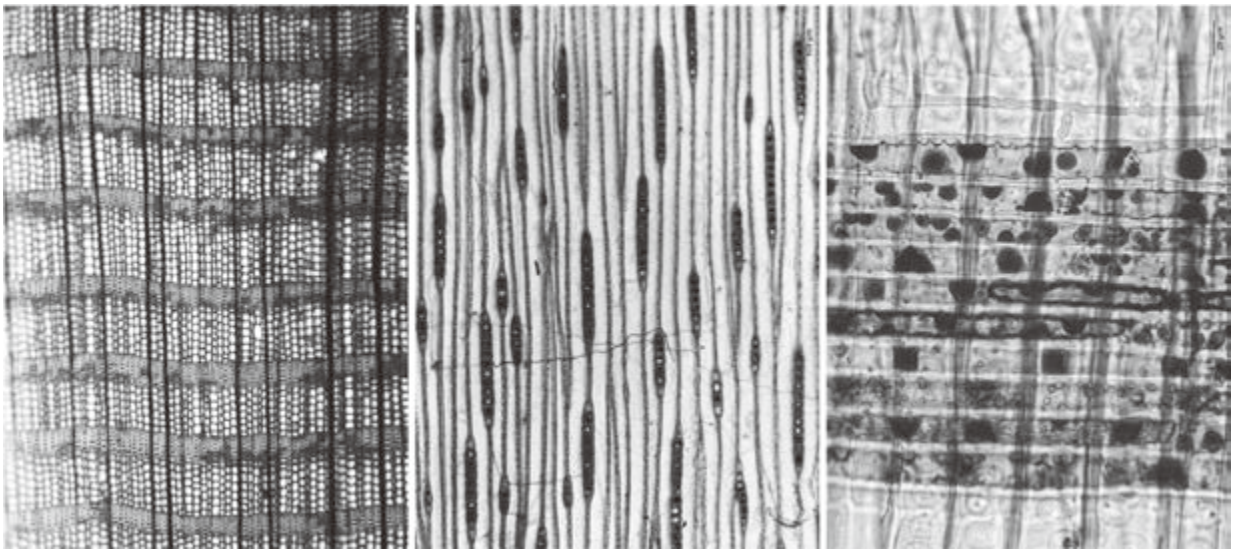


4a. クロマツ No.16899 木口× 30　　4b. 同　板目× 60　　4c. 同　柾目× 240

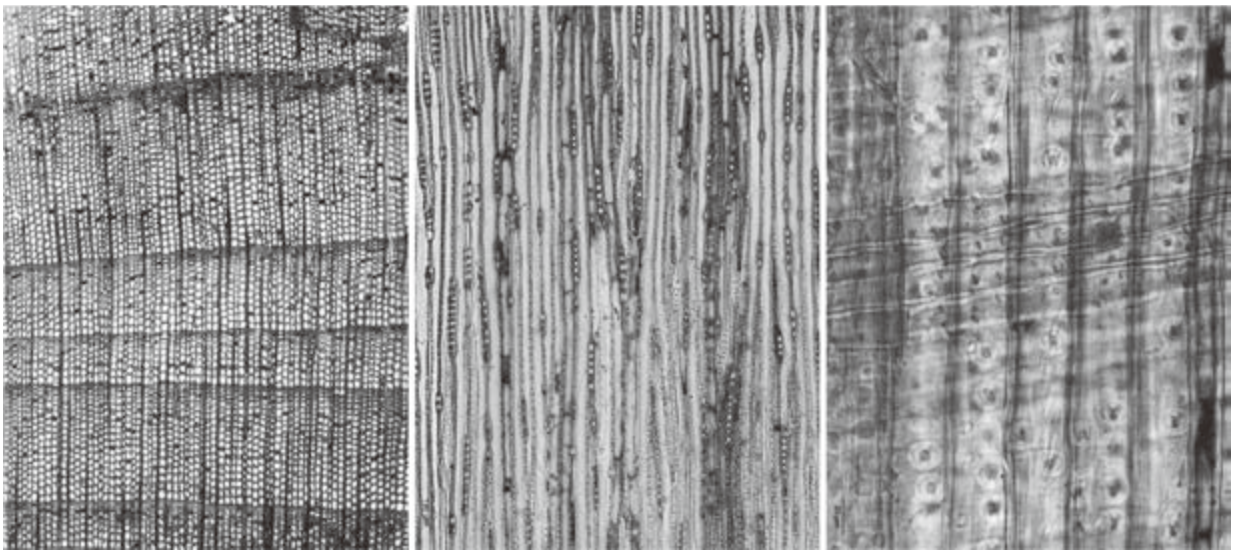
写真６　出土木材顕微鏡写真２



5a. 単維管束亜属 No.16958 木口× 30　5b. 同　板目× 60　5c. 同　柾目× 240

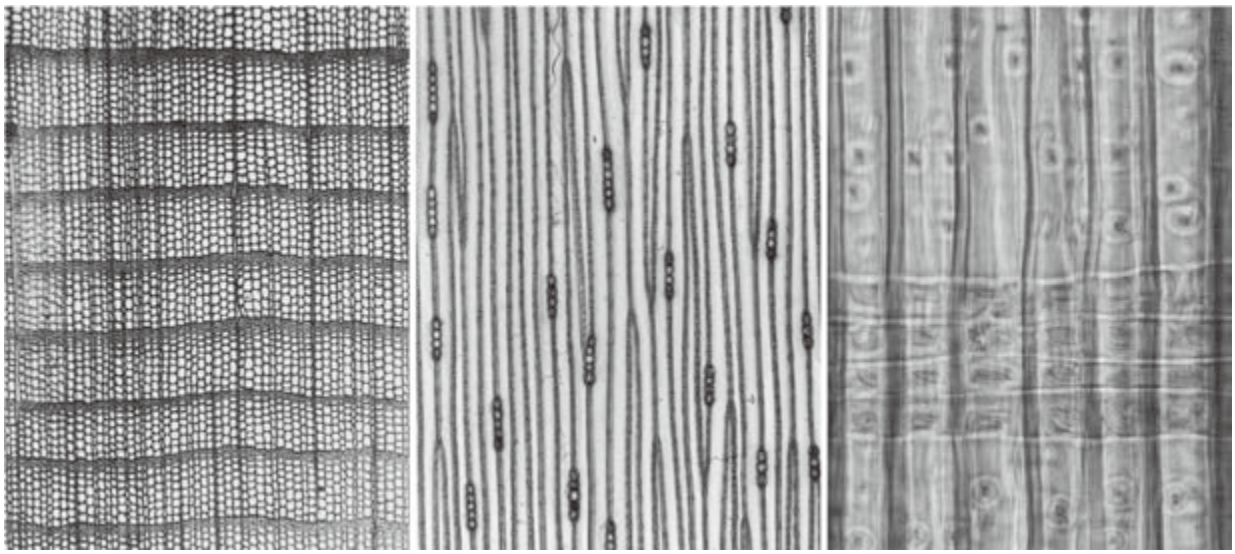


6a. ツガ属 No.16948 木口× 30　6b. 同　板目× 60　6c. 同　柾目× 240

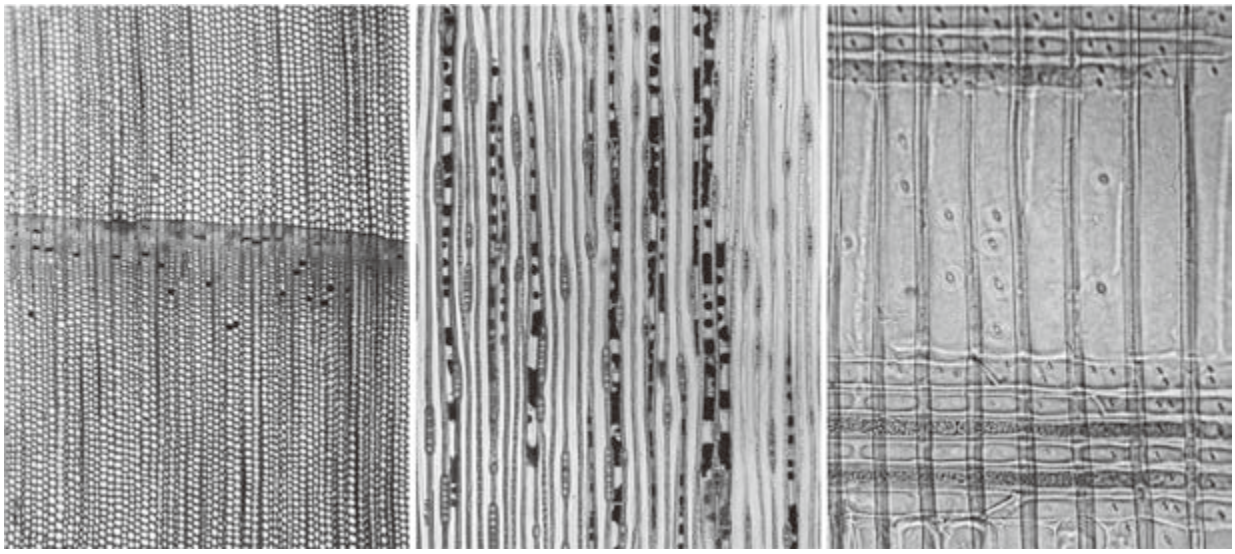


7a. イヌマキ属 No.17172 木口× 30　7b. 同　板目× 60　7c. 同　柾目× 240

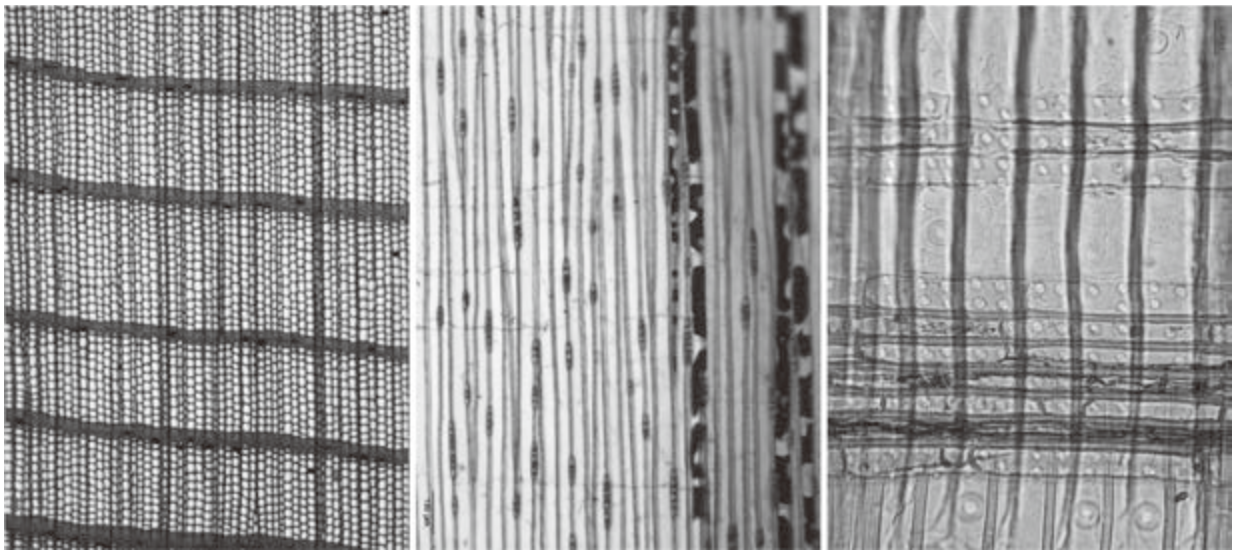
写真７　出土木材顕微鏡写真３



8a. コウヤマキ No.16965 木口× 30　8b. 同　板目× 60　8c. 同　柾目× 240

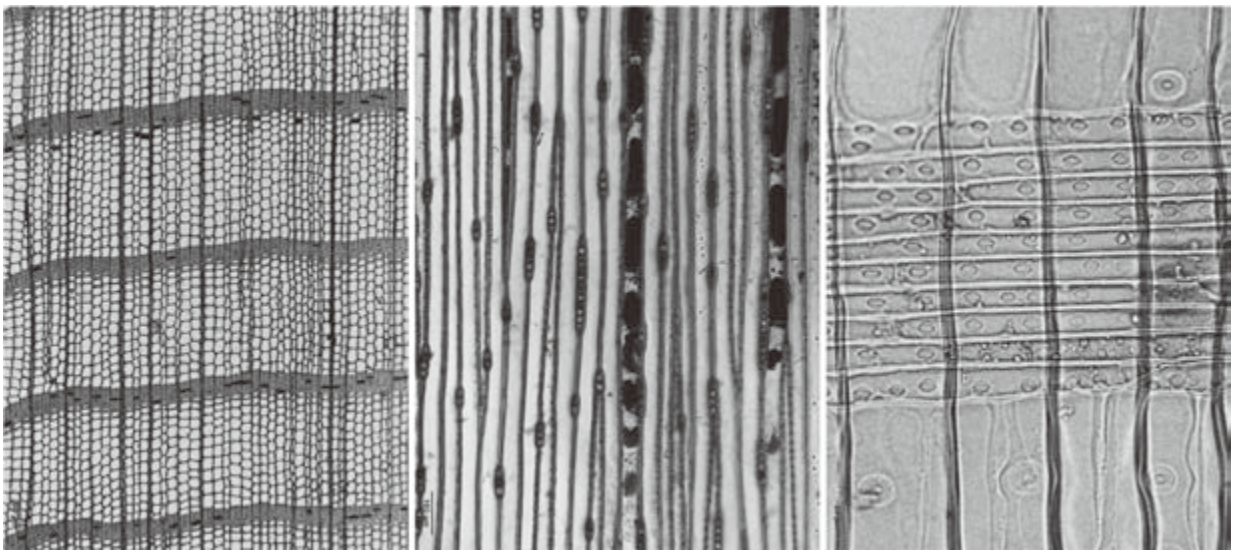


9a. ヒノキ No.16971 木口× 30　9b. 同　板目× 60　9c. 同　柾目× 240

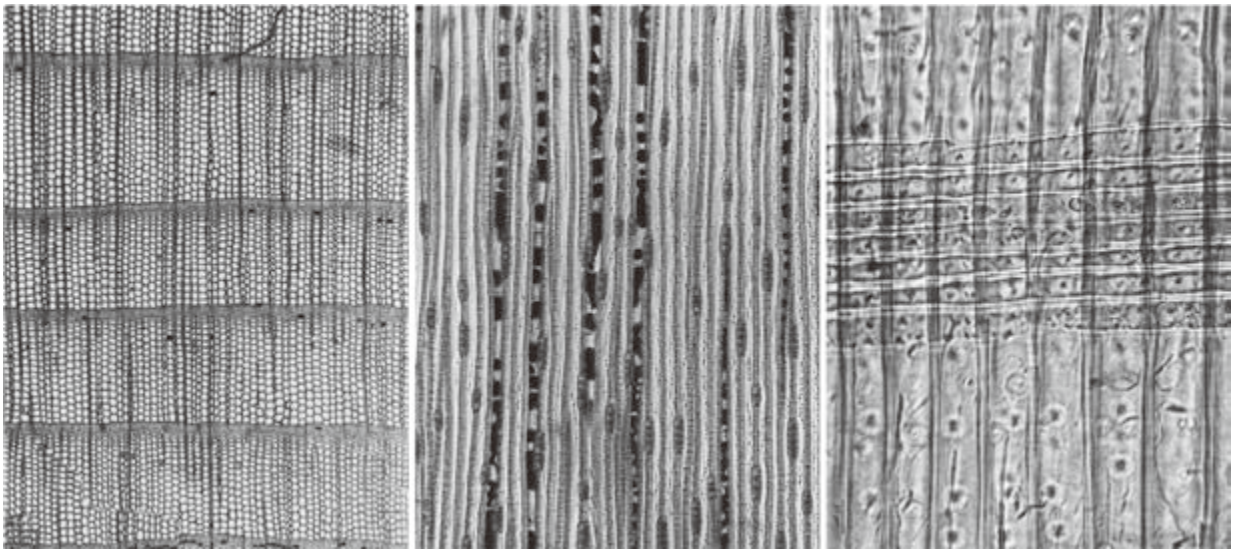


10a. サワラ No.16970 木口× 30　10b. 同　板目× 60　10c. 同　柾目× 240

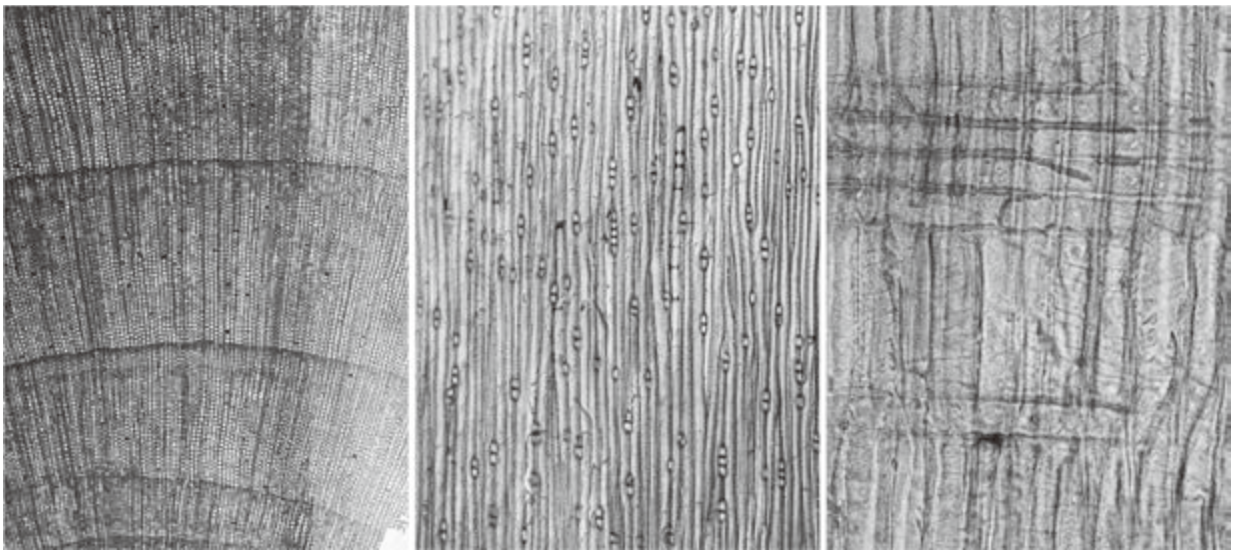
写真８　出土木材顕微鏡写真４



11a. スギ No.16927 木口× 30　　11b. 同　板目× 60　　11c. 同　柾目× 240



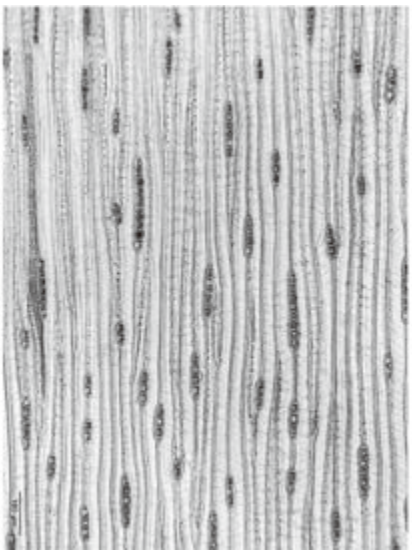
12a. アスナロ No.16911 木口× 30　　12b. 同　板目× 60　　12c. 同　柾目× 240

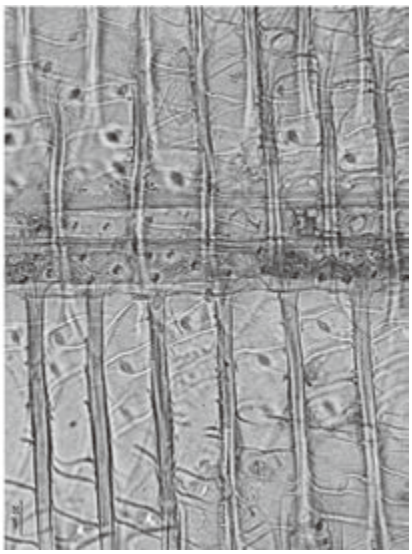


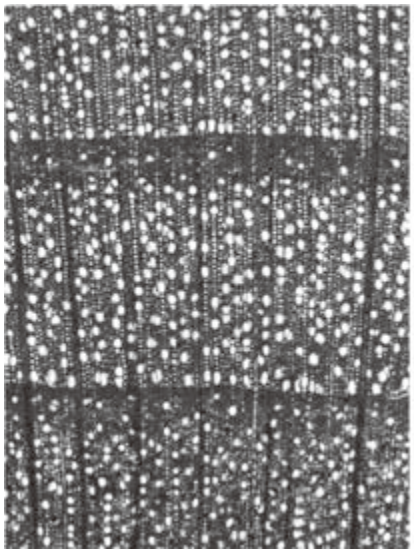
13a. イヌガヤ No.16900 木口× 30　　13b. 同　板目× 60　　13c. 同　柾目× 240

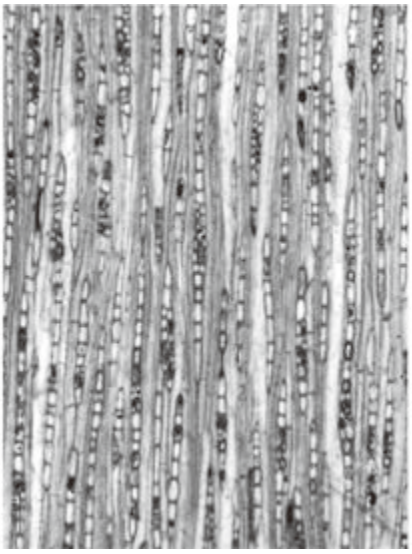
写真９　出土木材顕微鏡写真５

14a. カヤ No.16951 木口× 30

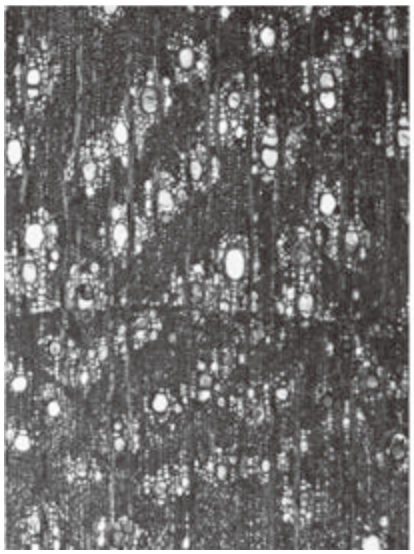

14b. 同　板目× 60

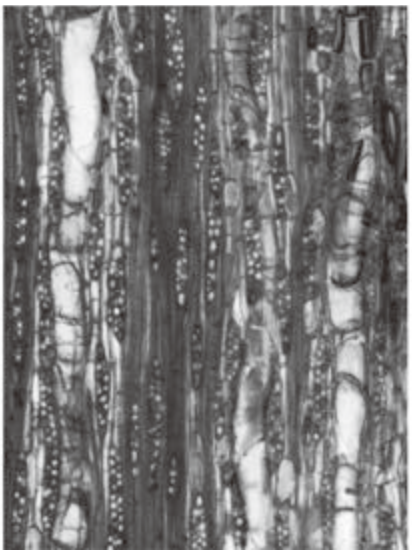

14c. 同　柾目× 240


15a. シキミ No.17167 木口× 30


15b. 同　板目× 60

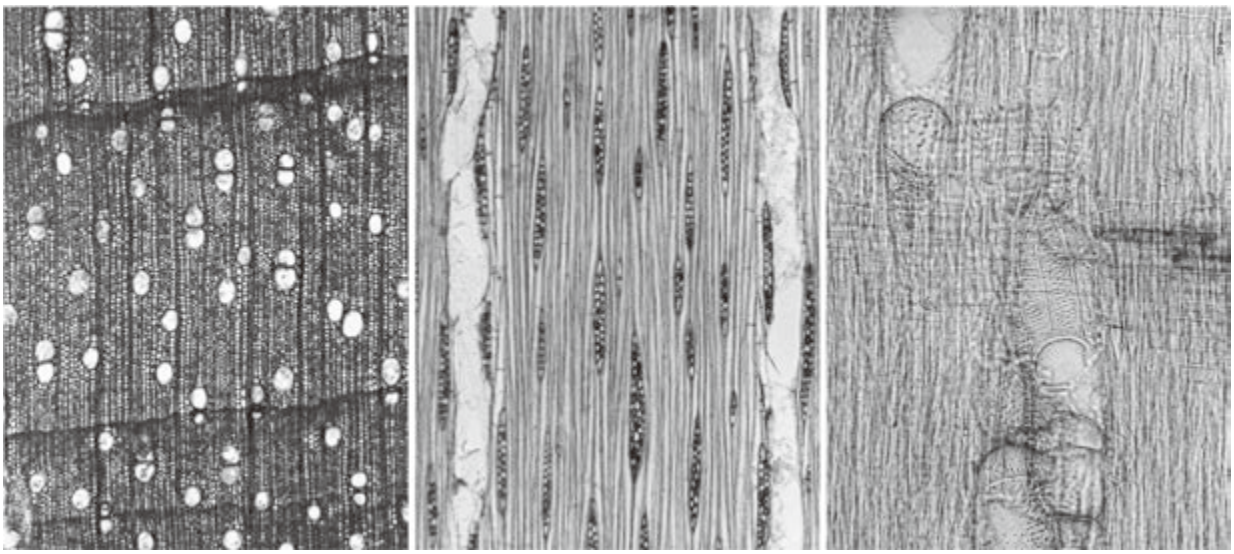
15c. 同　柾目× 120


16a. カゴノキ No.16936 木口× 30

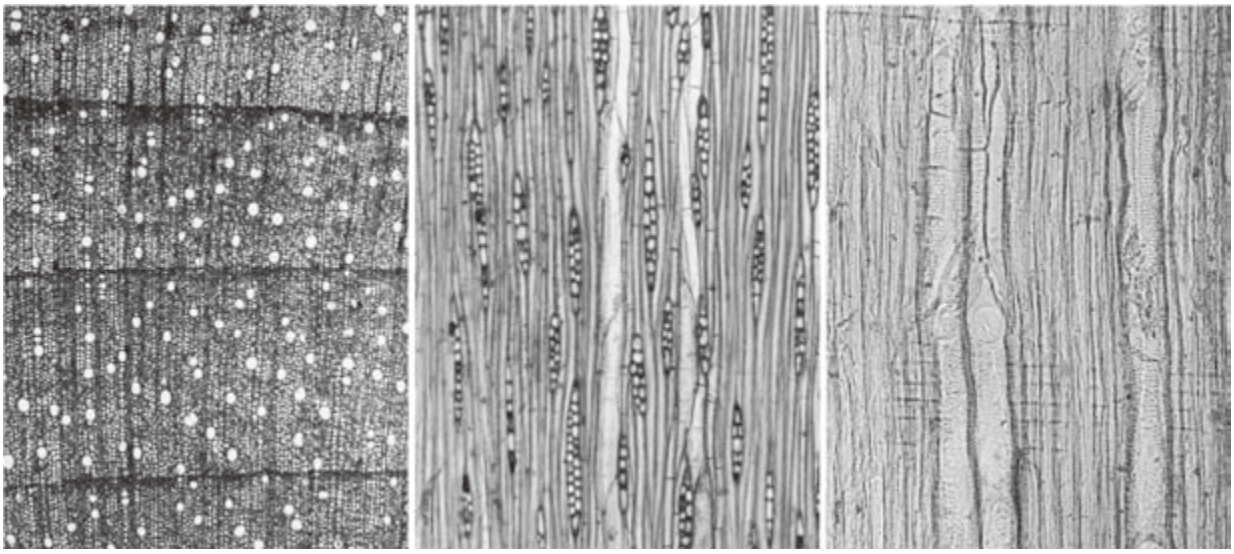

16b. 同　板目× 60

16c. 同　柾目× 120

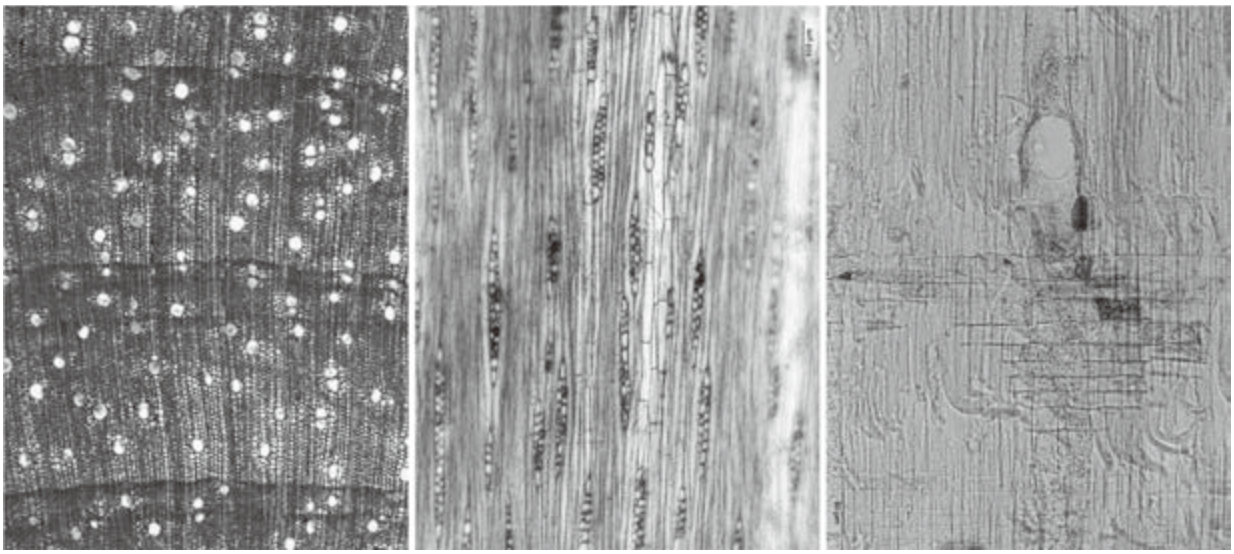
写真 10　出土木材顕微鏡写真６



17a. クスノキ科 A No.17169 木口× 30　17b. 同　板目× 60　17c. 同　柾目× 120

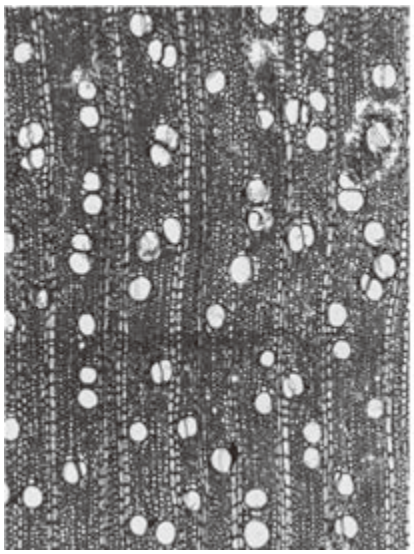


18a. クスノキ科 B No.17186 木口× 30　18b. 同　板目× 60　18c. 同　柾目× 120



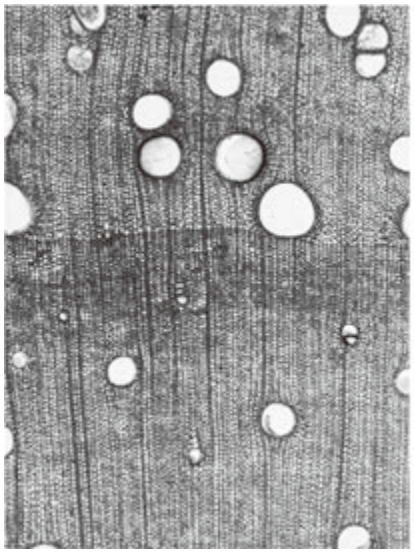
19a. クスノキ科 C No.17188 木口× 30　19b. 同　板目× 60　19c. 同　柾目× 120

写真 11　出土木材顕微鏡写真 7


20a. ヤマビワ No.17129 木口× 30

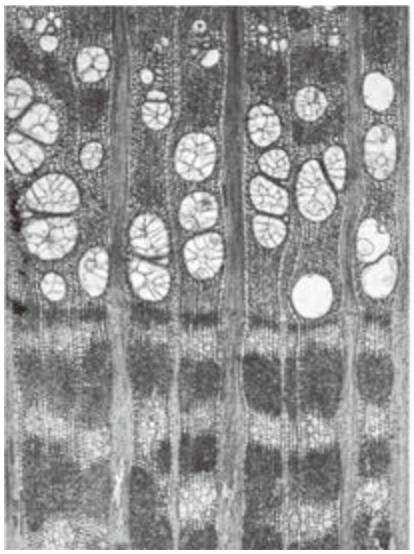
20b. 同　板目× 60

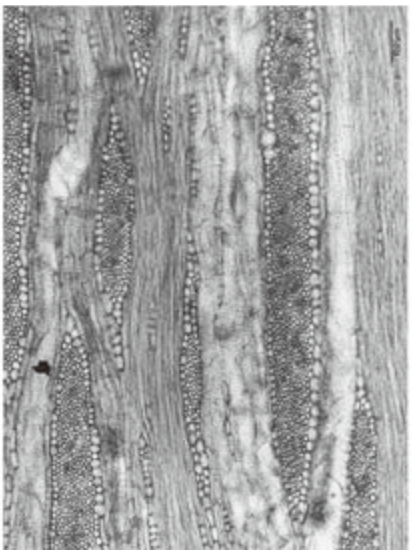
20c. 同　柾目× 120


21a. ネムノキ No.17154 木口× 30

21b. 同　板目× 60

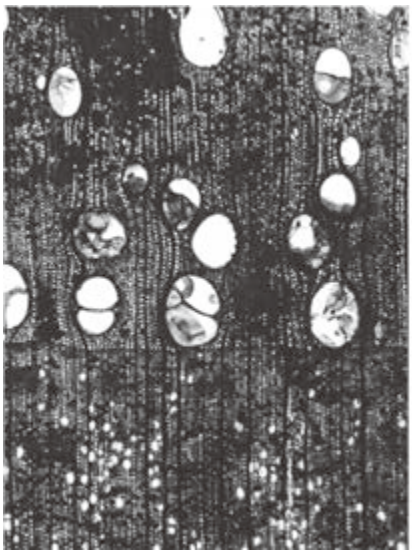
21c. 同　柾目× 120


22a. エノキ No.16980 木口× 30

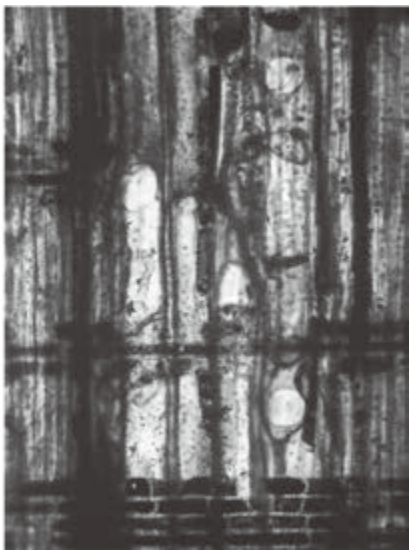

22b. 同　板目× 60

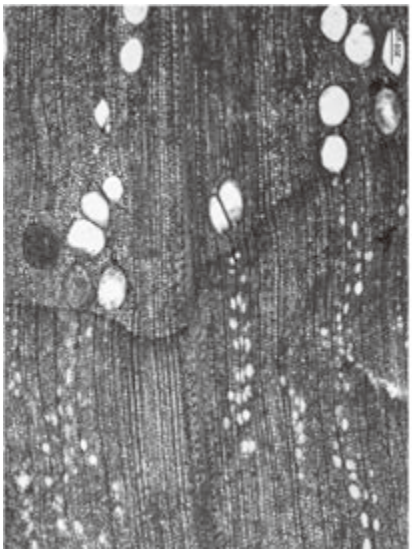
22c. 同　柾目× 120

写真 12　出土木材顕微鏡写真８

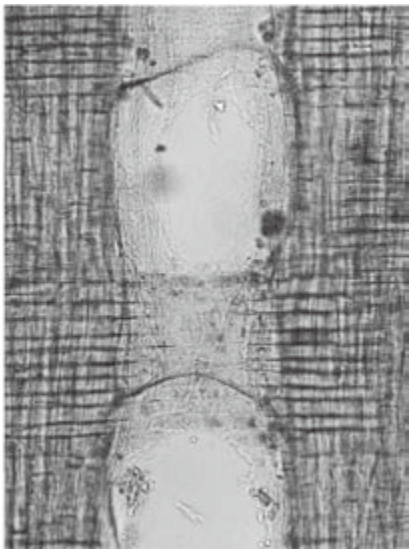

23a. クリ No.16982 木口× 30

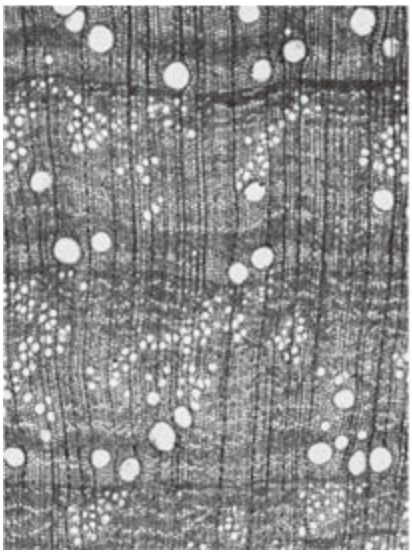
23b. 同　板目× 60

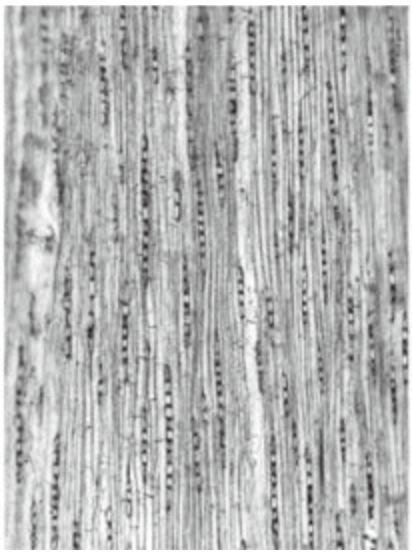

23c. 同　柾目× 120


24a. コジイ No.17115 木口× 30

24b. 同　板目× 60

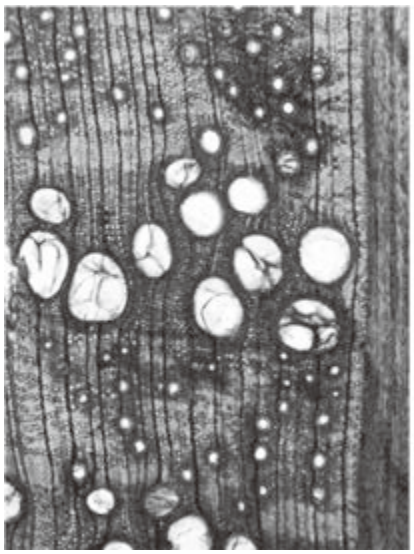

24c. 同　柾目× 120

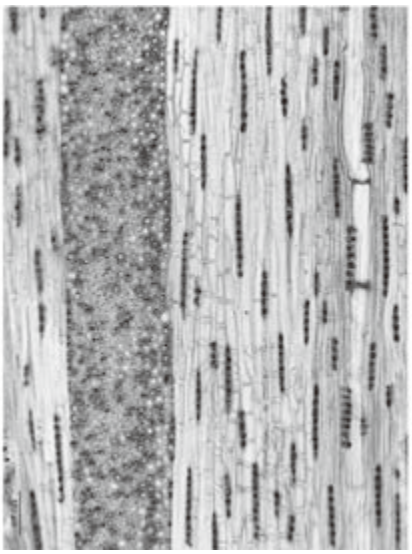

25a. スダジイ No.17163 木口× 30

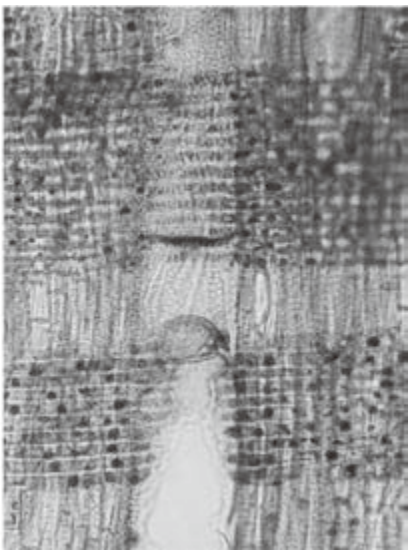

25b. 同　板目× 60

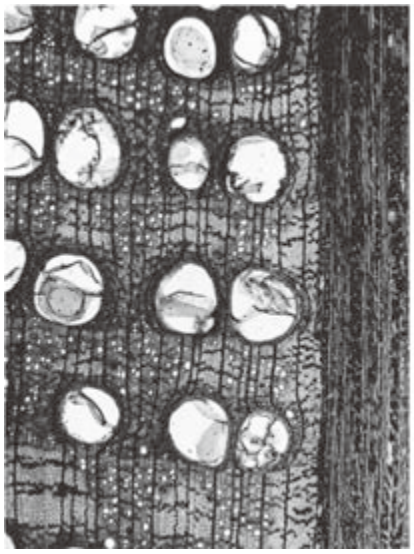
25c. 同　柾目× 120

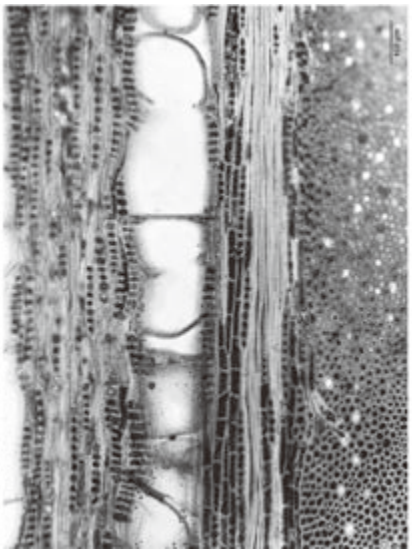
写真 13　出土木材顕微鏡写真９


26a. クヌギ節 No.16988 木口× 30

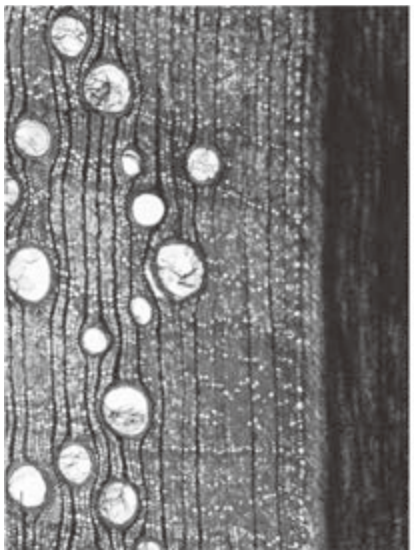

26b. 同　板目× 60

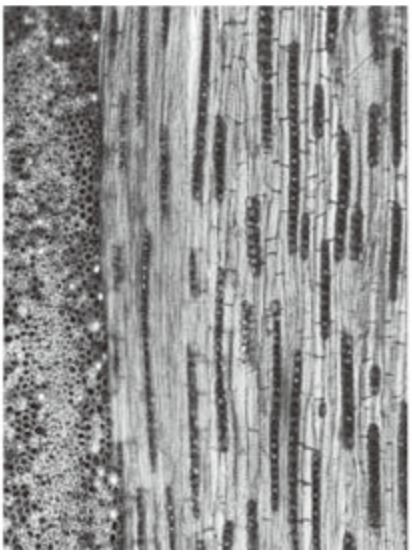

26c. 同　柾目× 120


27a. コナラ節 No.16897 木口× 30


27b. 同　板目× 60

27c. 同　柾目× 120


28a. イチイガシ No.17109 木口× 30


28b. 同　板目× 60

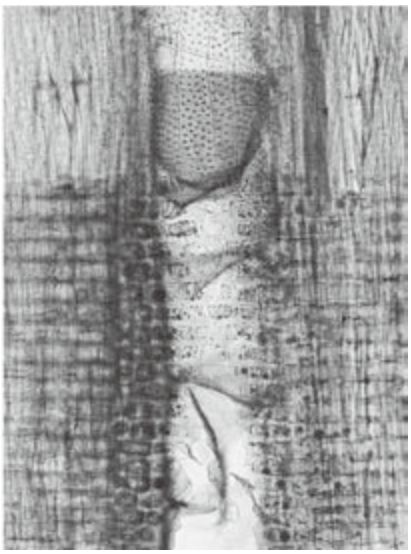
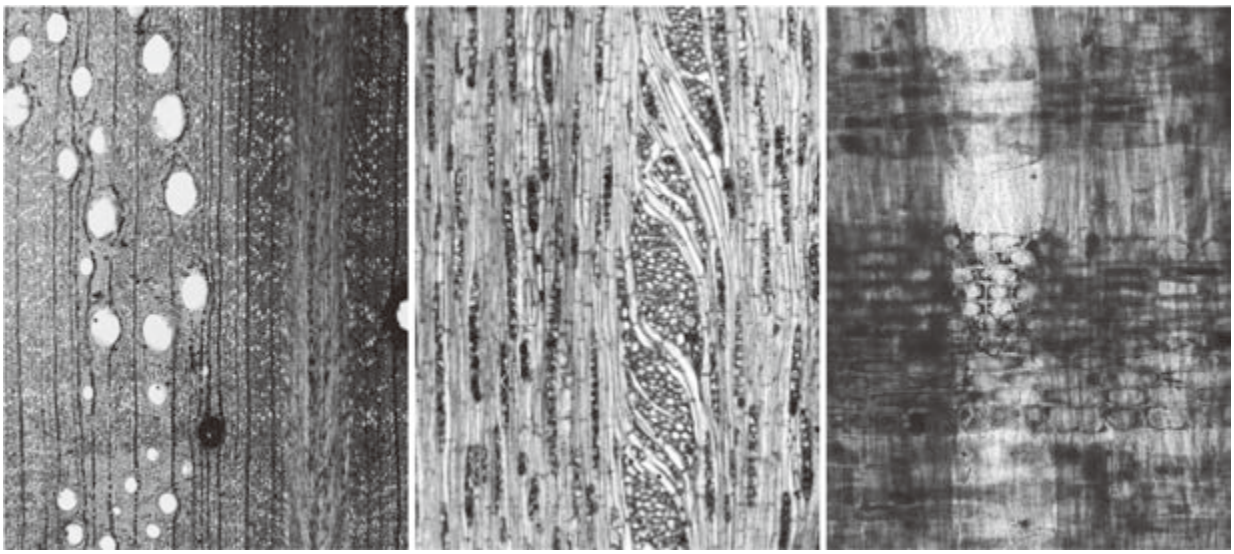
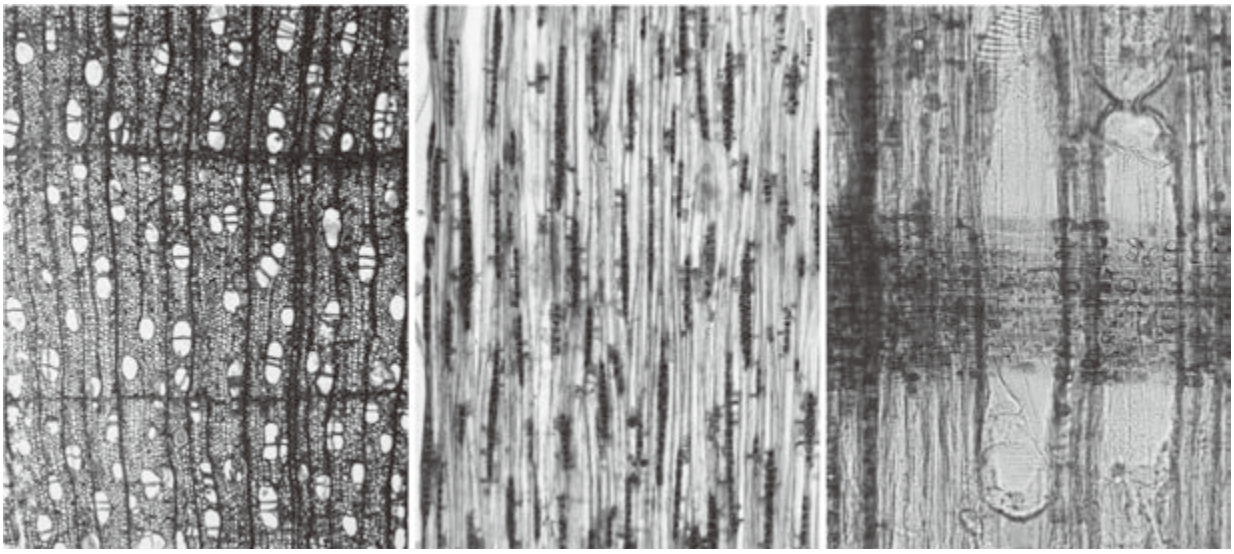

28c. 同　柾目× 120

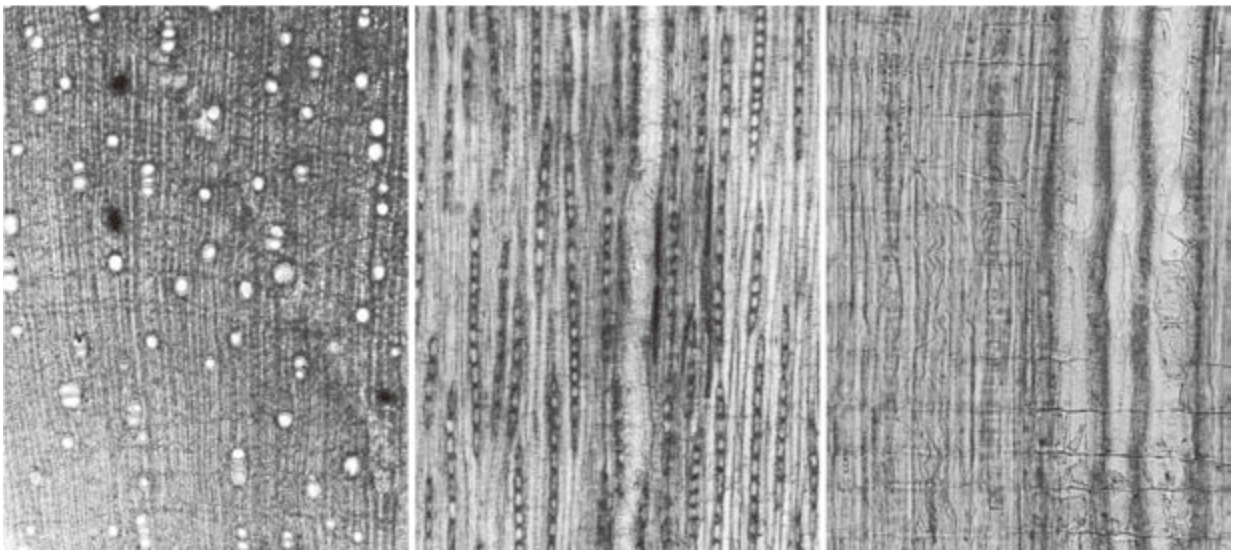
写真 14　出土木材顕微鏡写真 10



29a. アカガシ亜属 No.17131 木口× 30　29b. 同　板目× 60　29c. 同　柾目× 120

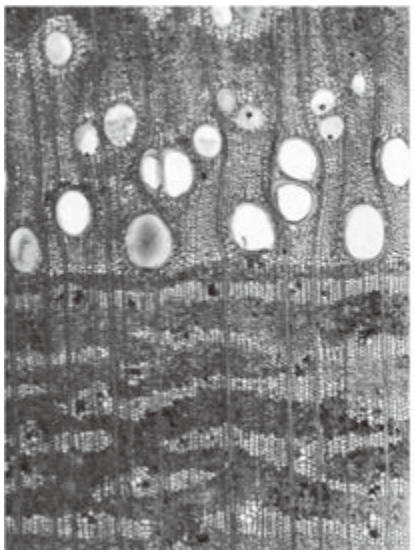


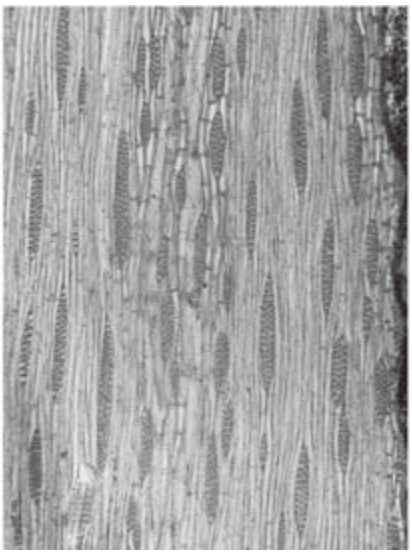
30a. カバノキ属 No.17166 木口× 30　30b. 同　板目× 60　30c. 同　柾目× 120



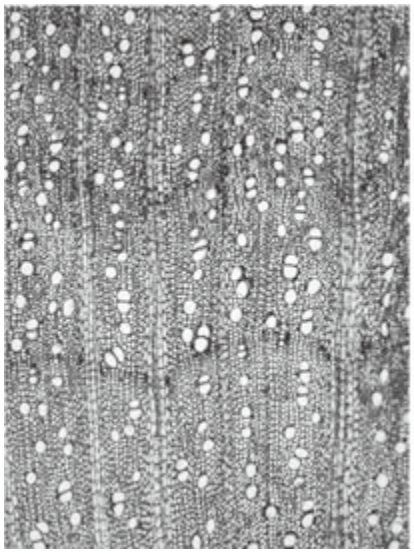
31a. シラキ No.17148 木口× 30　31b. 同　板目× 60　31c. 同　柾目× 120

写真 15　出土木材顕微鏡写真 11

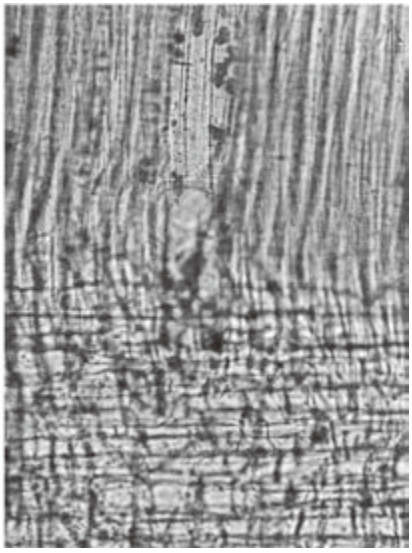

32a. ムクロジ No.16946 木口× 30

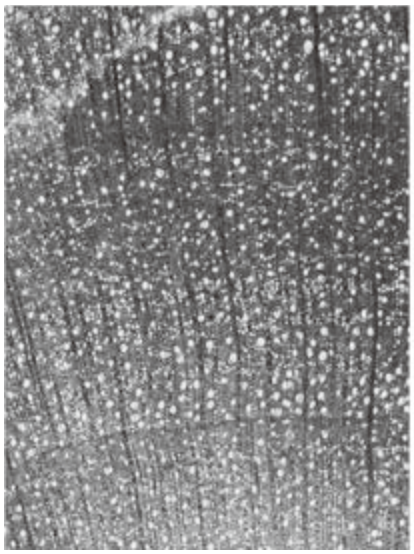

32b. 同　板目× 60

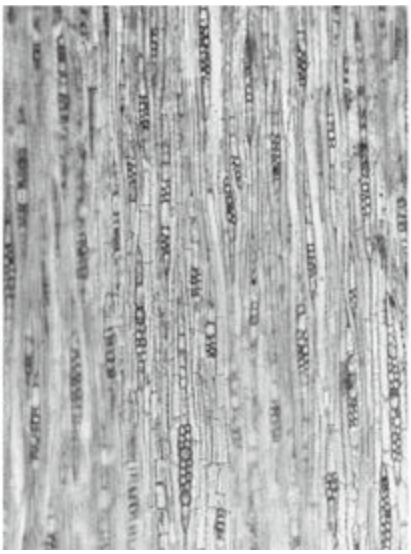
32c. 同　柾目× 120


33a. タイミンタチバナ No.17118 木口× 30

33b. 同　板目× 60

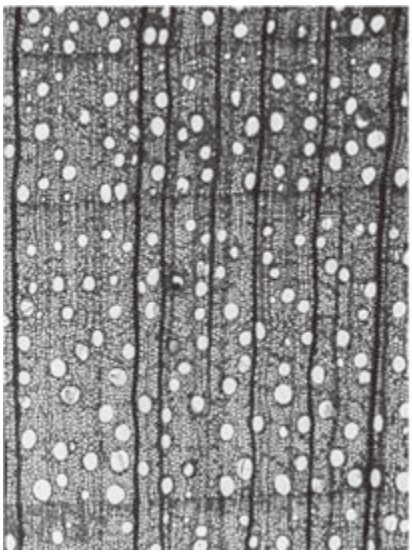

33c. 同　柾目× 120


34a. ヤブツバキ No.17194 木口× 30


34b. 同　板目× 60

34c. 同　柾目× 120

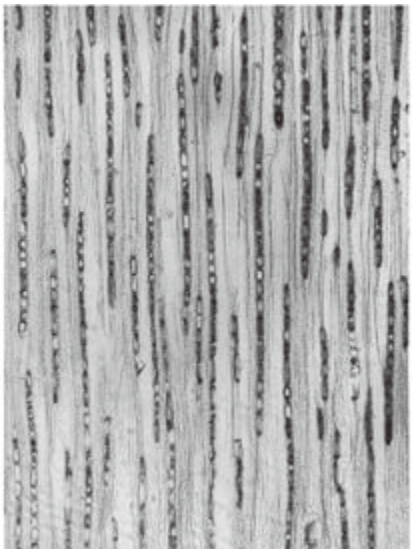
写真 16　出土木材顕微鏡写真 12


35a. ナツツバキ No.17157 木口× 30

35b. 同　板目× 6

35c. 同　柾目× 120

36a. サカキ No.17140 木口× 30


36b. 同　板目× 60

36c. 同　柾目× 120

37a. ヒサカキ属 No.17180 木口× 30

37b. 同　板目× 60

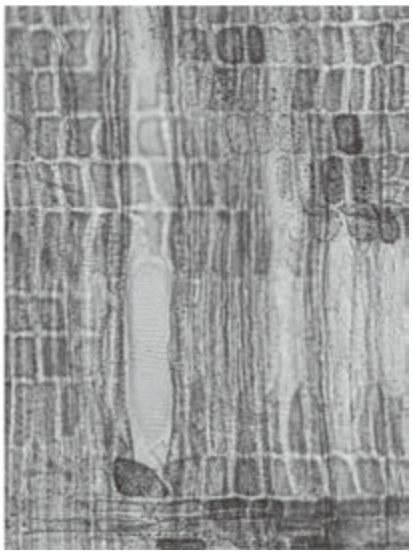
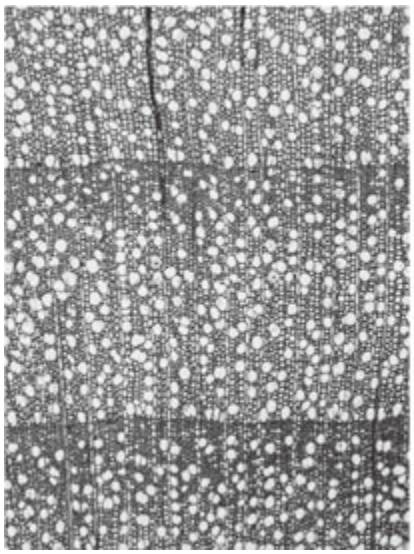
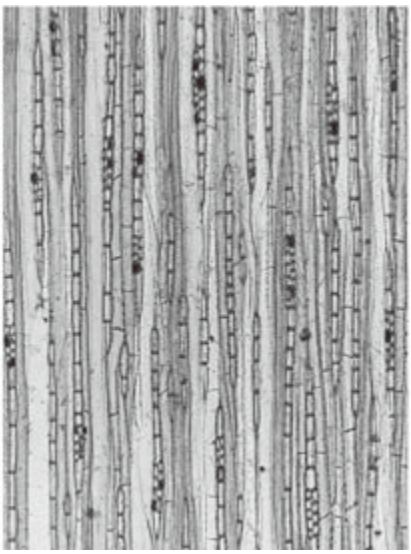
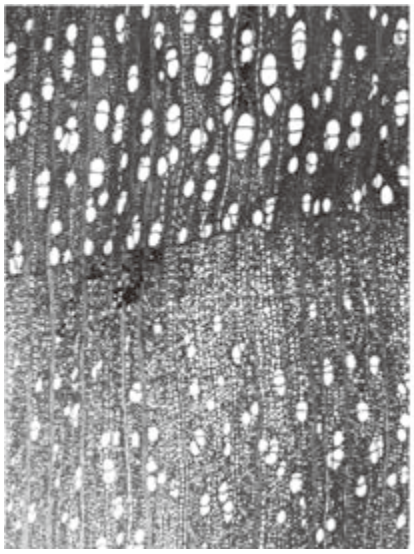

37c. 同　柾目× 120

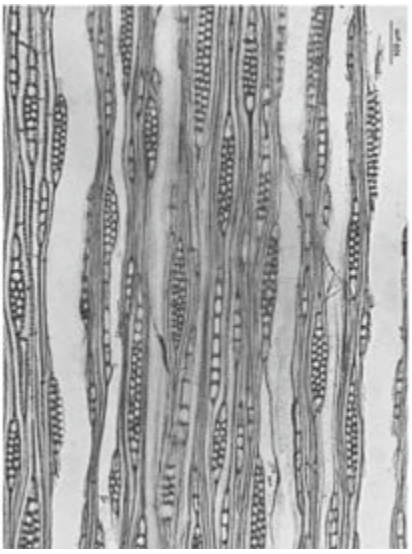
写真 17　出土木材顕微鏡写真 13


38a. クロバイ No.17103 木口× 30

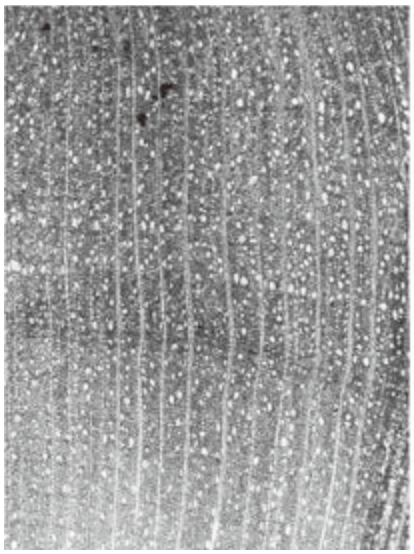

38b. 同　板目× 60

38c. 同　柾目× 120


39a. エゴノキ属 No.17132 木口× 30


39b. 同　板目× 60

39c. 同　柾目× 120


40a. イボタノキ属 No.17159 木口× 30

40b. 同　板目× 60

40c. 同　柾目× 120

写真 18　出土木材顕微鏡写真 14

第２節　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
Zaur Lomtatidze・小林克也

１　はじめに

静岡県袋井市の西向遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行われている（樹種同定の項参照）。

２　試料と方法

試料は、土器焼成遺構 SX1001 から５点（試料 No.１～５：PLD-42620 ～ 42624）、土坑 SK1015 から１点（試料 No.６：PLD-42625）、井戸跡 SE1015 から１点（試料 No.７：PLD-42626）、SE3007 から１点（試料 No.９：PLD-42628）、竪穴住居跡 SH3007 から１点（試料 No.８：PLD-42627）、住居状遺構 SH3012 から１点（試料 No.10:PLD-42629）の、計 10 点の出土炭化材である。試料 No.1、4、8 ～ 10 は炭化材であり、いずれも最終形成年輪は残っていなかった。試料 No.2、3、5 ～ 7 は炭化草本類であった。なお樹種同定の結果、試料 No.1 と 10 はヒノキ科、試料 No.2、3、5 ～ 7 はイネ科、試料 No.4 はマツ属複維管束亜属、試料 No.8 はクスノキ、試料 No.9 はコナラ属アカガシ亜属であった。

発掘調査所見によれば、SE1015 は中世、SH3012 と SE3007、SH3012 は古墳時代の遺構と考えられており、SX1001 と SK1015 の時期は不明である。測定試料の情報、調製データは第６表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた 14C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C 年代、暦年代を算出した。

３　結果

第７表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ 13C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した 14C 年代、第 159、160 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。14C 年代（yrBP）の算出には、14C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した 14C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14C 年代がその 14C 年代誤差内に入る確率が 68.27％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された 14C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、および半減期の違い（14C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C 年代の暦年較正には OxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された 14C 年代誤差に相当する 68.27％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.45％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦

年較正曲線を示す。

４　考察

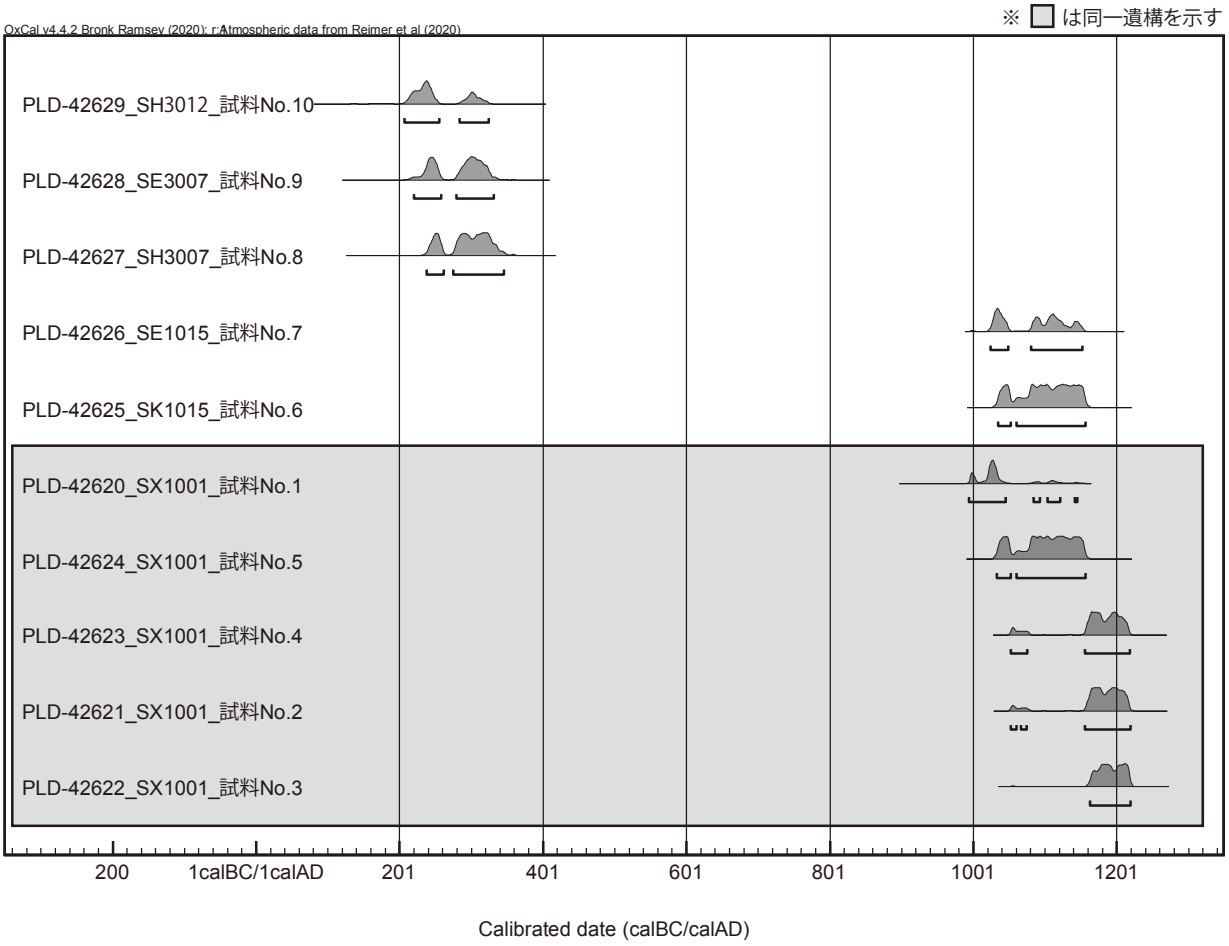
以下、２σ暦年代範囲（確率 95.45%）に着目して、暦年代の古い順に結果を整理する。また、マルチプロット図を第 158 図に示す。なお、古墳時代の暦年代については、赤塚（2009）を参照した。

住居状遺構 SH3012 の試料 No.10（PLD-42629）は、207-256 cal AD（67.38%）および 284-325 cal AD（28.07%）で、3 世紀初頭～ 4 世紀前半の暦年代を示した。これは、弥生時代後期～古墳時代前期に相当する。

井戸跡 SE3007 の試料 No.9(PLD-42628)は、220-259 cal AD（33.89%）および 279-332 cal AD（61.56%）で、３世紀前半～ 4 世紀前半の暦年代を示した。これは、弥生時代後期～古墳時代前期に相当する。

竪穴住居跡 SH3007 の試料 No.8（PLD-42627）は、238-262 cal AD（21.82%）および 275-346 cal AD（73.63%）で、3 世紀前半～ 4 世紀中頃の暦年代を示した。これは、弥生時代後期末～古墳時代前期に相当する。

なお、試料 No.8 ～ 10 には最終形成年輪が残っていなかった。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。したがって、試料 No.8 ～ 10 の測定結果は古木効果の影響を受けていると考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりもやや新しい年代であると考



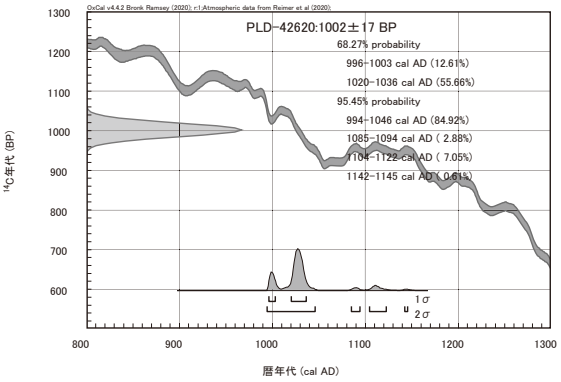
第 158 図　マルチプロット図

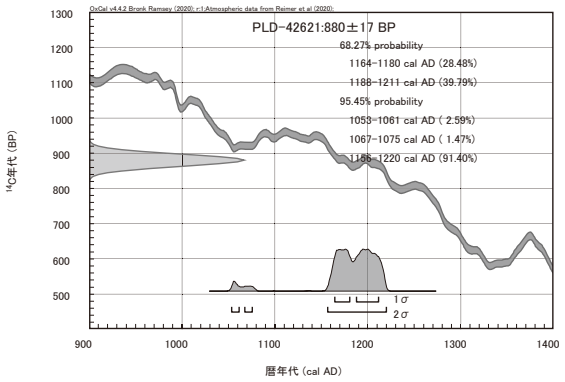
第６表　測定資料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-42620	試料 No.1 調査区：3 区 遺構：SX1001 遺物 No.38	種類：炭化材（ヒノキ科） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-42621	試料 No.2 調査区：3 区 遺構：SX1001 遺物 No.39	種類：炭化草本類（イネ科） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-42622	試料 No.3 調査区：3 区 遺構：SX1001 遺物 No.40	種類：炭化草本類（イネ科） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-42623	試料 No.4 調査区：3 区 グリッド：南西 遺構：SX1001 遺物 No.25	種類：炭化材（マツ属複維管束亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-42624	試料 No.5 調査区：3 区 遺構：SX1001 層位：硬化面上層 遺物 No.77	種類：炭化草本類（イネ科） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-42625	試料 No.6 調査区：3 区 遺構：SK1015 遺物 No.46	種類：炭化草本類（イネ科） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-42626	試料 No.7 調査区：3 区 遺構：SE1015 遺物 No.43	種類：炭化草本類（イネ科） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-42627	試料 No.8 調査区：3 区 遺構：SH3007 位置：カマド炭化物 遺物 No.44	種類：炭化材（クスノキ） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-42628	試料 No.9 グリッド：V-95 調査区：4 区 遺構：SE3007 遺物 No.107	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-42629	試料 No.10 グリッド：R-97 調査区：4 区 遺構：SH3012 遺物 No.106	種類：炭化材（ヒノキ科） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

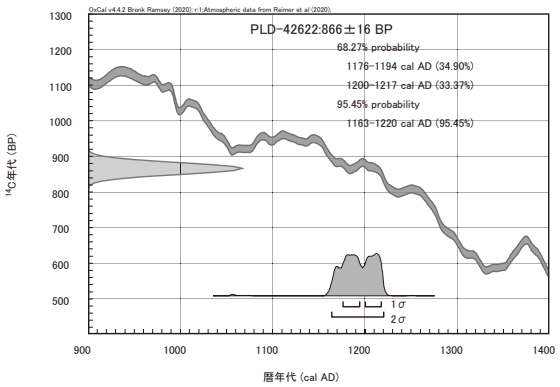
第７表　放射性炭素年代測定および暦年補正の結果

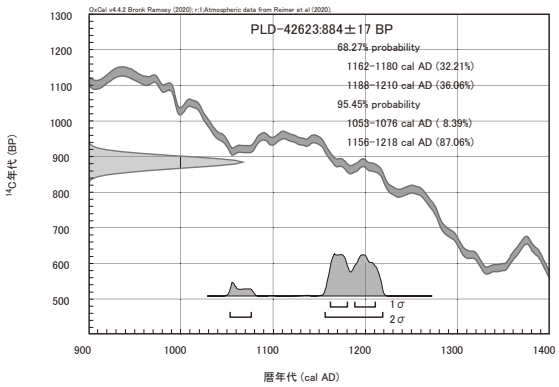
測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-42620 SX1001 試料 No. 1	-22.92 ± 0.24	1002 ± 17	1000 ± 15	996-1003 cal AD (12.61%) 1020-1036 cal AD (55.66%)	994-1046 cal AD (84.92%) 1085-1094 cal AD (2.88%) 1104-1122 cal AD (7.05%) 1142-1145 cal AD (0.61%)
PLD-42621 SX1001 試料 No. 2	-27.36 ± 0.23	880 ± 17	880 ± 15	1164-1180 cal AD (28.48%) 1188-1211 cal AD (39.79%)	1053-1061 cal AD (2.59%) 1067-1075 cal AD (1.47%) 1156-1220 cal AD (91.40%)
PLD-42622 SX1001 試料 No. 3	-8.94 ± 0.21	866 ± 16	865 ± 15	1176-1194 cal AD (34.90%) 1200-1217 cal AD (33.37%)	1163-1220 cal AD (95.45%)
PLD-42623 SX1001 試料 No. 4	-25.27 ± 0.22	884 ± 17	885 ± 15	1162-1180 cal AD (32.21%) 1188-1210 cal AD (36.06%)	1053-1076 cal AD (8.39%) 1156-1218 cal AD (87.06%)
PLD-42624 SX1001 試料 No. 5	-21.50 ± 0.23	950 ± 17	950 ± 15	1040-1049 cal AD (9.00%) 1081-1108 cal AD (25.70%) 1113-1134 cal AD (19.92%) 1137-1152 cal AD (13.65%)	1033-1053 cal AD (15.92%) 1061-1157 cal AD (79.53%)
PLD-42625 SK1015 試料 No. 6	-24.25 ± 0.22	947 ± 17	945 ± 15	1041-1050 cal AD (8.18%) 1081-1089 cal AD (8.01%) 1090-1107 cal AD (15.62%) 1115-1153 cal AD (36.46%)	1035-1053 cal AD (14.88%) 1061-1157 cal AD (80.57%)
PLD-42626 SE1015 試料 No. 7	-25.31 ± 0.21	976 ± 17	975 ± 15	1027-1046 cal AD (29.11%) 1084-1094 cal AD (11.72%) 1104-1123 cal AD (24.39%) 1142-1145 cal AD (3.04%)	1024-1049 cal AD (32.95%) 1081-1153 cal AD (62.50%)
PLD-42627 SH3007 試料 No. 8	-29.85 ± 0.32	1767 ± 19	1765 ± 20	247-257 cal AD (13.22%) 282-300 cal AD (23.02%) 303-328 cal AD (32.02%)	238-262 cal AD (21.82%) 275-346 cal AD (73.63%)
PLD-42628 SE3007 試料 No. 9	-26.47 ± 0.25	1788 ± 19	1790 ± 20	239-253 cal AD (22.26%) 290-320 cal AD (46.01%)	220-259 cal AD (33.89%) 279-332 cal AD (61.56%)
PLD-42629 SH3012 試料 No. 10	-24.98 ± 0.21	1811 ± 19	1810 ± 20	216-248 cal AD (58.09%) 298-306 cal AD (10.18%)	207-256 cal AD (67.38%) 284-325 cal AD (28.07%)

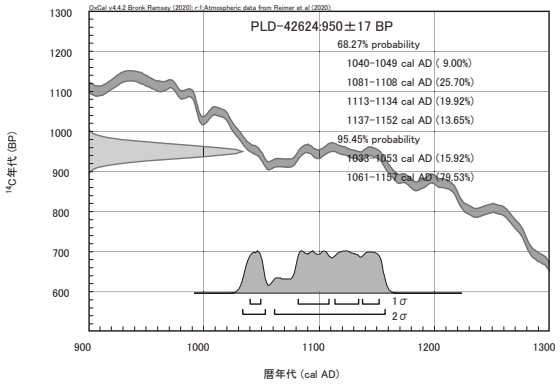


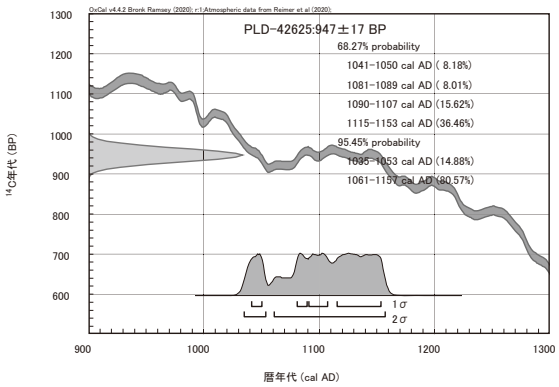


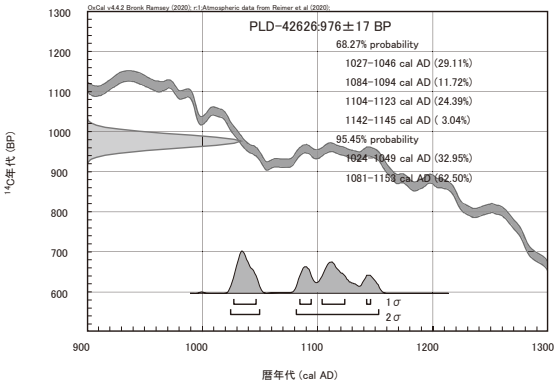
第 159 図　暦年較正結果 1

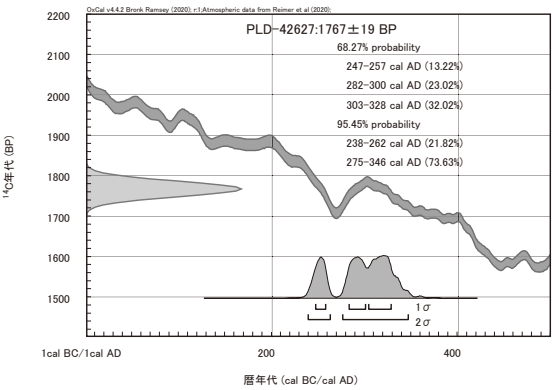


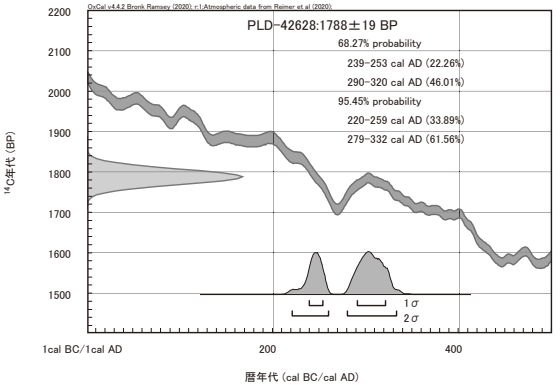


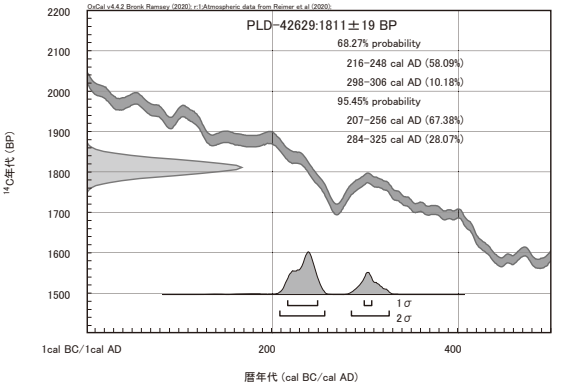












第 160 図　暦年較正結果２

えられる。発掘調査所見によれば、SH3012、SE3007、SH3007は古墳時代の遺構と考えられており、測定結果と調査所見は整合的である。

井戸跡SE1015の試料No.7（PLD-42626）は、1024-1049 cal AD（32.95%）および1081-1153 cal AD（62.50%）で、11世紀前半～12世紀中頃の暦年代を示した。これは、平安時代中期～後期に相当する。試料No.7は炭化草本類であり、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示す。発掘調査所見によれば、SE1018は中世の遺構と考えられており、測定結果は推定時期よりも40年以上古い値を示した。やや古い時期の炭化草本類が遺構内に再堆積した可能性が考えられる。

土坑SK1015の試料No.6（PLD-42625）は、1035-1053 cal AD（14.88%）および1061-1157 cal AD（80.57%）で、11世紀前半～12世紀中頃の暦年代を示した。これは、平安時代中期～後期に相当する。試料No.6は炭化草本類であり、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示す。SK1015は時期不明の遺構であり、測定結果により、平安時代中期～後期である可能性が示された。

土器焼成遺構SX1001の試料No.1（PLD-42620）は994-1046 cal AD（84.92%）、1085-1094 cal AD（2.88%）、1104-1122 cal AD（7.05%）、1142-1145 cal AD（0.61%）で、10世紀末～12世紀中頃の暦年代を示した。また、試料No.5（PLD-42624）は、1033-1053 cal AD（15.92%）および1061-1157 cal AD（79.53%）で、11世紀前半～12世紀中頃の暦年代を示した。これは、平安時代中期～後期に相当する。一方、試料No.2（PLD-42621）は1053-1061 cal AD（2.59%）、1067-1075 cal AD（1.47%）、1156-1220 cal AD（91.40%）、試料No.4（PLD-42623）は1053-1076 cal AD（8.39%）および1156-1218 cal AD（87.06%）で、11世紀中頃～後半および12世紀中頃～13世紀前半の暦年代を示した。これは、平安時代中期～鎌倉時代に相当する。また、試料No.3（PLD-42622）は、1163-1220 cal AD（95.45%）で、12世紀後半～13世紀前半の暦年代を示した。これは、平安時代後期～鎌倉時代に相当する。

SX1001の試料No.2、3、5は炭化草本類であり、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示す。一方、試料No.1と4は炭化材で、最終形成年輪が残っていなかったため、測定結果は古木効果の影響を受けていると考えられる。

SX1001は時期不明の遺構であり、測定結果により、平安時代中期～鎌倉時代の遺構である可能性が示された。

引用・参考文献

赤塚次郎（2009）弥生後期から古墳中期（八王子古宮式から宇田式期）の暦年代．日本文化財科学会第26回大会実行委員会編「日本文化財科学会第26回大会研究機発表要旨集」：14-20，日本文化財科学会．

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」：3-20，日本第四紀学会．

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S.（2020）The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41（cited 12 August 2020）

第３節　西向遺跡出土炭化材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ
小林克也

1. はじめに

静岡県袋井市の西向遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2. 試料と方法

試料は、被熱遺構 SX1001 から 5 点、土坑 SK1015 から 1 点、井戸跡 SE1015 と SE3007 から各 1 点、住居状遺構 SH3012 から 1 点、住居状遺構 SH3007 から 1 点の、計 10 点の出土炭化材である。発掘調査所見による遺構の時期は、SX1001 と SK1015 が時期不明、SE1015 が中世、SH3012、SE3007、SH3007 が古墳時代と考えられている。年代測定の結果では、SX1001 が平安時代中期～鎌倉時代、SK1015 と SE1015 が平安時代中期～後期、SH3012 と SE3007、SH3007 が弥生時代後期～古墳時代前期の暦年代を示した。

樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製　VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、針葉樹ではマツ属複維管束亜属とヒノキ科の 2 分類群、広葉樹ではクスノキとコナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属）の 2 分類群、単子葉のイネ科 1 分類群の、計 5 分類群がみられた。イネ科が 5 点で最も多く、ヒノキ科が 2 点、マツ属複維管束亜属とクスノキ、アカガシ亜属が各 1 点であった。同定結果を第８表に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

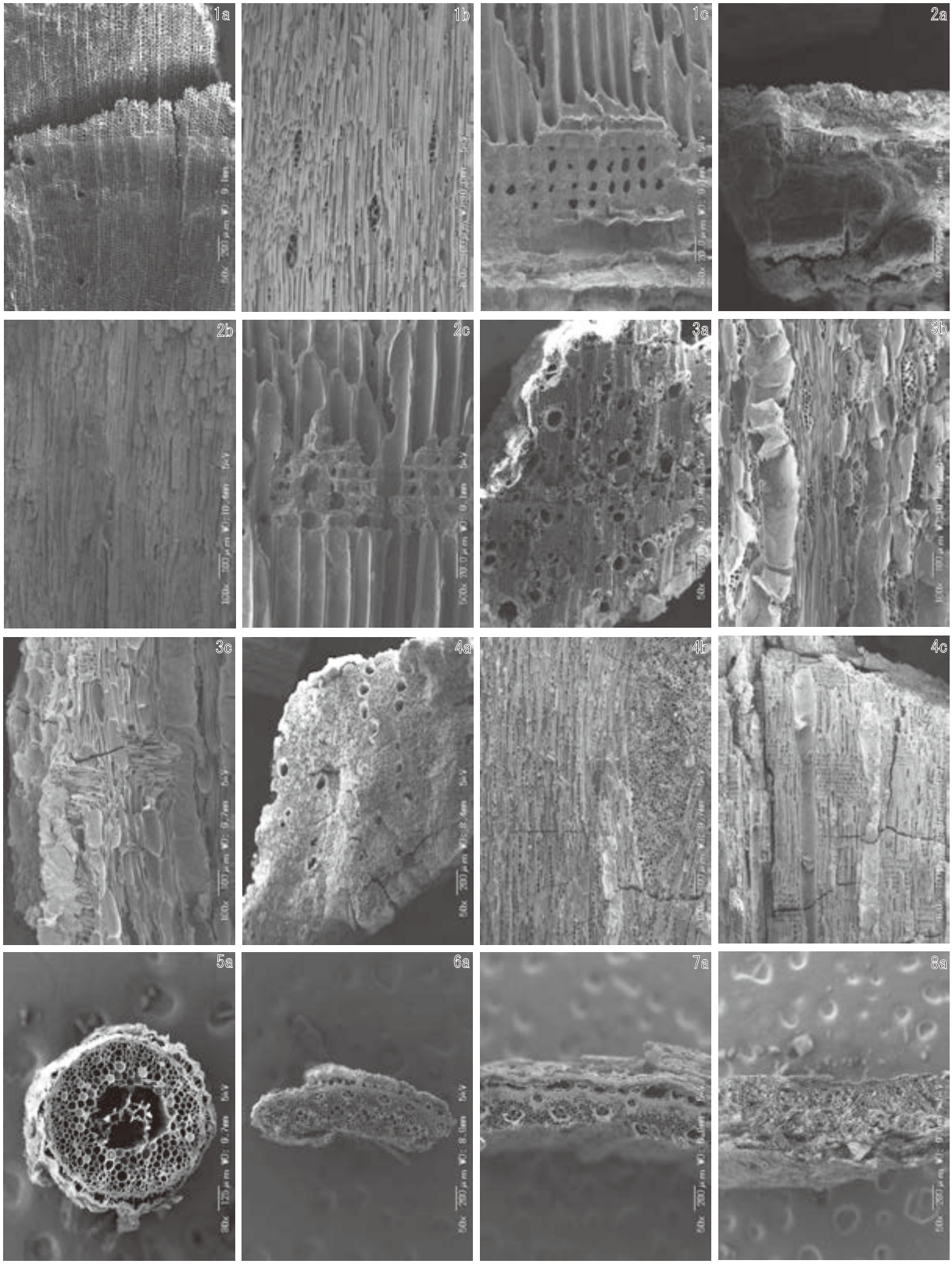
(1) マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Diploxylon　マツ科　写真 19　1a-1c(No.4)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で、切削等の加工は容易である。

第８表　西向遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料 No.	遺物 No.	調査区	グリッド	出土遺構	層位等	種類	樹種	時期	年代測定番号
1	38	3 区		SX1001		炭化材	ヒノキ科	時期不明	PLD-42620
2	39	3 区		SX1001		炭化材	イネ科	時期不明	PLD-42621
3	40	3 区		SX1001		炭化材	イネ科	時期不明	PLD-42622
4	25	3 区	南西	SX1001		炭化材	マツ属複維管束亜属	時期不明	PLD-42623
5	77	3 区		SX1001	硬化面上層	炭化材	イネ科	時期不明	PLD-42624
6	46	3 区		SK1015		炭化材	イネ科	時期不明	PLD-42625
7	43	3 区		SE1015		炭化材	イネ科	中世	PLD-42626
8	49	3 区		SH3007	カマド炭化物	炭化材	クスノキ	古墳時代	PLD-42627
9	107	4 区	V-95	SE3007		炭化材	コナラ属アカガシ亜属	古墳時代	PLD-42628
10	106	4 区	R-97	SH3012		炭化材	ヒノキ科	古墳時代	PLD-42629



西向遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. マツ属複維管束亜属 (No.4)、2a-2c. ヒノキ科 (No.10)、3a-3c. クスノキ (No.8)

4a-4c. コナラ属アカガシ亜属 (No.9)、5a. イネ科 (No.3)、6a. イネ科 (No.5)、7a. イネ科 (No.6)、8a. イネ科 (No.7)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

写真 19　西向遺跡出土炭化財の走査型電子顕微鏡写真

(2) ヒノキ科　Cupressaceae　写真 19　2a-2c(No.10)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は同性で、高さ１～６列となる。分野壁孔は１分野に２個みられるが、炭化していて形状が確認できなかった。

ヒノキ科にはスギ、ヒノキ、サワラ、アスナロ、ネズコなどがみられる。

(3) クスノキ　Cinnamomum camphora (L.) J.Presl　クスノキ科　写真 19　3a-3c(No.8)

中型の道管が単独ないし２～３個複合してやや疎らに散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端１列が直立する異性で、幅１～２列となる。また、放射組織や木部繊維には油細胞がみられる。

クスノキは暖帯から亜熱帯にかけての本州中南部、四国、九州に分布する常緑高木の広葉樹である。材はやや軽軟なものから中庸なものまであり、切削加工は容易である。また、耐朽性および耐虫性がきわめて高い。

(4) コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　写真 19　4a-4c(No.9)

厚壁で丸い大型の道管が､放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

道管の大きなイチイガシ以外のコナラ属アカガシ亜属は､材組織の観察では種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強靭で、耐水性があり、切削加工は困難である。

(5) イネ科　Gramineae　写真 19　5a(No.3)、6a(No.5)、7a(No.6)、8a(No.7)

向軸側の原生木部、その左右の２個の後生木部、背軸側の篩部の三つで構成される維管束が散在する単子葉植物の稈である。維管束の配列は不整中心柱となる。維管束鞘の細胞は比較的薄い。

イネ科はタケ亜科やキビ亜科など７亜科がみられる単子葉植物であるが、対照標本が少なく、同定までには至っていない。

4. 考察

弥生時代後期～古墳時代前期の暦年代を示した試料では、SH3007 の炭化材がクスノキ、SE3007 の炭化材がアカガシ亜属、SH3012 の炭化材がヒノキ科であった。SH3012 の試料はカマドから出土しており、燃料材の残渣と考えられる。SE3007 と SH3012 の炭化材は、用途不明である。いずれの樹種も遺跡周辺に生育可能な樹種であり（伊東ほか，2011)、遺跡周辺の樹木が伐採利用されたと考えられる。

平安時代中期～後期の暦年代を示した SK1015 と SE1015 の炭化材は、ともにイネ科であった。いずれも遺跡周辺に生育していたイネ科植物が伐採利用されたと考えられる。

炭化材の年代測定結果が平安時代中期～鎌倉時代の暦年代を示した SX1001 では、マツ属複維管束亜属とヒノキ科、イネ科がみられた。SX1001 は被熱遺構であり、マツ属複維管束亜属とヒノキ科は燃料材の残渣、イネ科は焚き付けの際の着火材の可能性が考えられる。いずれの樹種も遺跡周辺に生育可能な樹種であり（伊東ほか，2011)、遺跡周辺の樹木およびイネ科植物が伐採利用されたと考えられる。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌．238p，海青社.

第４節　西向遺跡出土の動物遺体

株式会社パレオ・ラボ
三谷智広

１　はじめに

西向遺跡の発掘調査において出土した動物遺体の同定結果を報告する。

２　試料と方法

試料は、中世の井戸跡 SE1013 から出土した動物遺体である。破片試料のため、接合および復元を行った。復元後、肉眼で試料を観察し、標本との比較により分類群を同定した。

３　結果

ウシ（Bos taurus）およびイノシシ（Sus scrofa）が同定された。

ウシは、角突起のある頭蓋骨である。すべての破片試料の接合はできなかったが、一個体分の頭蓋骨が復元できた。頭蓋骨は左右で遺存状態が異なり、右側に比べ左側の遺存状態が比較的良好である。左側は、頬骨を除き、切歯骨から上顎骨、前頭骨、角突起まで残存しているのに対し、右側は上顎骨から頬骨の一部は残るものの、角突起や切歯骨は欠損している。右側の前頭骨は眼窩付近の破片が認められたが、接合はできなかった。また、鼻骨や臼歯は、左右ともに、取り上げられた破片の中には含まれておらず、また下顎骨や後頭骨と思われる破片も見られなかった。

なお、頭蓋骨に解体痕や加工痕など明瞭な傷は見られないが、角突起の根元には外側から突いたと思われる楕円形の孔が一か所認められた。これが人為的にあけられた孔であるかは不明である。

イノシシは、雄の左下顎犬歯である。先端から歯根にかけて大きく割れている。かなり大型の犬歯であるため、少なくともすべての臼歯が生えそろう 3.5 歳以上の個体と考えられる。犬歯に加工の痕跡はみられない。

４　考察

発掘時の土層観察によると、埋土は自然に溜まった堆積物の可能性が高く、井戸は廃絶後そのまま放置されたと考えられる。今回同定した動物骨が出土したのは、井戸跡の底面ではなく埋土中であり、井戸の廃絶後、やや時間が経ってから、動物骨が入れられたとわかる。偶然の廃棄活動によってこうした動物骨がたまたま混入した可能性も考えられるが、後述するように、井戸跡へ人為的にウシ頭蓋骨を投棄する例もあり、意図的に投げ入れられた可能性が高いと考えられる。

ウシ頭蓋骨は、解剖学的位置を留めず出土した。取り上げられた破片の中に臼歯や下顎骨はみられなかった。特に、歯のエナメル質は他の部位と比べて残りやすいため、歯があれば取り上げられているはずである。したがって、ウシ頭蓋骨が井戸へ投げ入れられた時点では、下顎骨が外れ、臼歯も脱落した状態の頭蓋骨であったと考えられる。また、接合できなかった破片の中には、明らかに後頭骨や右側の角突起、切歯骨が認められなかった。これらの部位だけが埋土中で消失したとは考えにくいため、投棄時点ではすでに欠損していた可能性が高い。

なお、これらの部位が、人為的に取り除かれたのか、あるいは長年放置されたために自然に遊離・脱落したのか不明である。また､頭蓋骨がどの時点で解剖学的位置を失ったのかについても定かではない。頭蓋骨の出土状況と残存状態を考えると、人為的な力が加わった可能性もある。

今回の事例のように、井戸跡からウシの頭蓋骨が出土する例として、岡山県鹿田遺跡があげられる（松木ほか，1993）。鹿田遺跡では、井戸跡の埋土から、上下が逆転した状態のウシ一個体分の頭蓋骨が出土した。この他にも、周囲からは完形の小皿などが出土しており、さらに投棄後はすぐに埋め戻しが行われたと考えられている。ウシ頭蓋骨は、後世の杭打ちにより吻部と右前頭部を欠損している。頭蓋骨の解体痕からは、皮や肉、角の利用があった点がわかっている。ここでも下顎骨は見られず、臼歯も左第 2、第 3 後臼歯を残して脱落、欠損している。残存する頭蓋骨の保存状態や、生首の状態で頭蓋骨を損傷せずに下顎骨や歯を取り外すのは困難な点から、「下顎骨や遊離歯がないことは、井戸に入れられるまえに、死後かなりの日数が経過し筋肉、腱などが乾燥し、切断が容易になってから下顎骨がはずされ、歯もその時に 2 本を残して人為的に抜いたか自然に遊離した状態で、井戸の中に入れられた」と解釈されている（松井，1993）。今回の事例と比較すると、埋土の堆積状況や骨の出土状況は異なるが、井戸跡埋土から下顎骨や臼歯の脱落したウシの頭蓋骨が出土した点は共通しており、西向遺跡 SE1016 においても、廃絶された井戸跡に、人為的に投げ入れられた可能性は高いと考えられる。

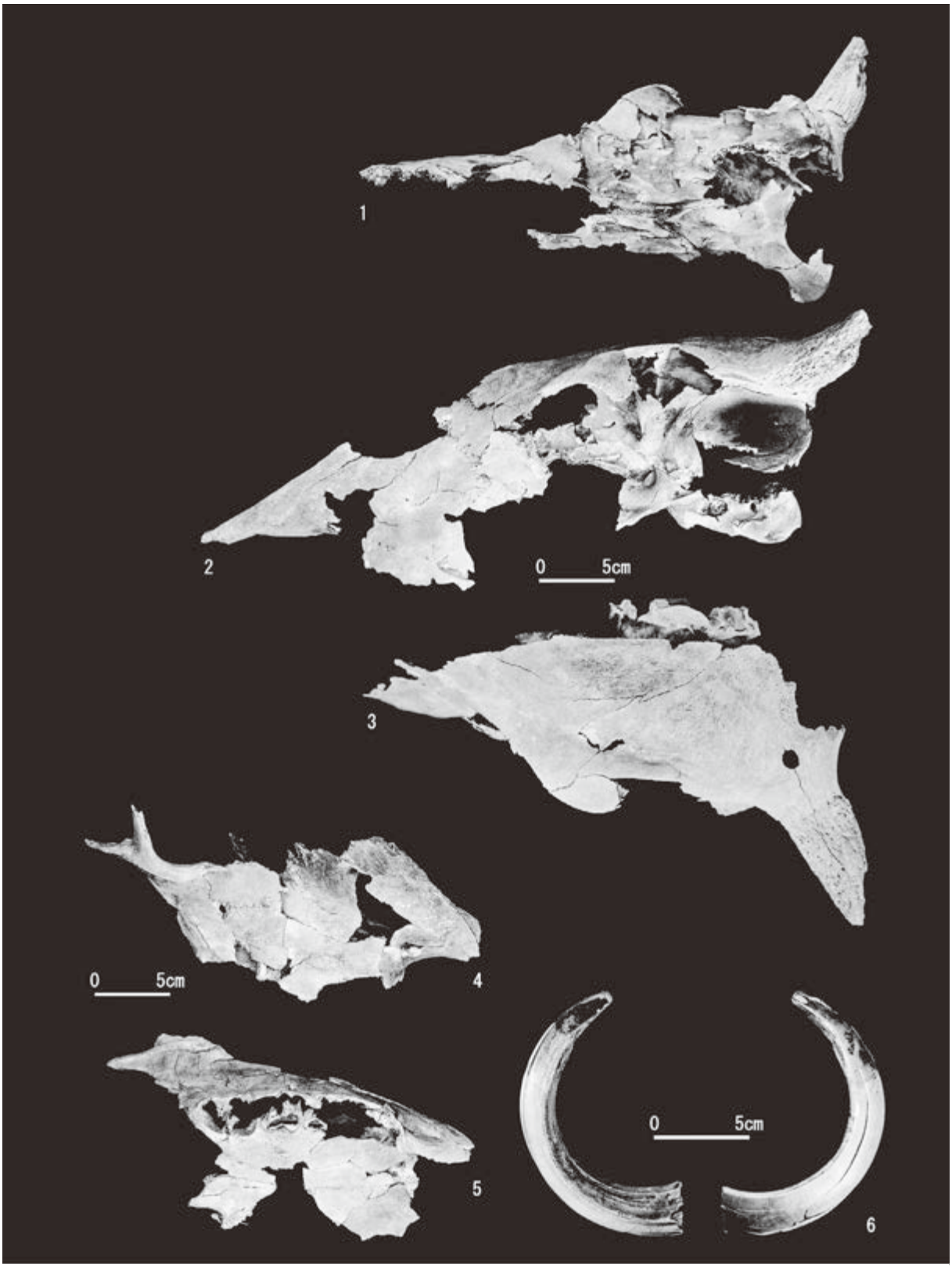
これまで、井戸跡から出土する牛馬遺存体は、祭祀に伴う動物犠牲や、歯・骨を用いた呪術的祭祀的行為との関わりが注目されてきた（桜井，1992）。今回の西向遺跡の場合、井戸の廃絶直後に直接ウシが犠牲とされ、その首が投棄された状況ではない。しかし、ある程度白骨化したウシの首が人為的に投棄されたとすれば、何らかの祭祀の構成要素として、井戸跡の中に投棄されたと考えるのが妥当であろう。今後、類例をはじめ、時期や地域、民俗例などもふまえて、井戸跡にかかわる祭祀やその過程について考えていく必要があると思われる。

引用・参考文献

桜井秀雄（1992）井戸から出土する牛馬遺存体について―動物犠牲との関係―．考古学研究，39-2，125-138.

松井　章（1993）鹿田遺跡第 5 次調査（医学部附属病院管理棟新営に伴う発掘調査）出土のウシ．松木武彦ほか編「鹿田遺跡―第 5 次調査―」：115-118.

松木武彦・山本悦世・小田嶋梧郎・松井　章・能條修一（1993）岡山大学構内遺跡発掘調査報告 6：鹿田遺跡―第 5 次調査―．180p，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター.



井戸跡（SE1016）出土の動物遺体
1～5. ウシ頭蓋骨（同一個体）【1：口蓋面から　2：左側面　3：頭頂部　4：右側面　5：口蓋面】
6. イノシシ左犬歯【左：頬側　右：舌側】

写真 20　井戸跡 SE1013 出土の動物遺体

第９表　遺構観察表・新旧遺構名対照表

旧遺構名	新遺構名	調査区	グリッド	全長	幅	深さ	埋土色調	マンセル値
SA1001	SA1001	２区	H1	4.16	－	－	－	－
SP1028	SA1001-P1	２区	H1	0.32	0.24	0.16	実測図記載	実測図記載
SP1027	SA1001-P2	２区	H1	0.24	0.24	0.32	実測図記載	実測図記載
SA3004	SA1002	３区	N97 ～ N98	5.68	－	－	－	－
SP3219	SA1002-P1	３区	N97	0.32	0.32	0.48	実測図記載	実測図記載
SP3054	SA1002-P2	３区	N97	0.32	0.32	0.24	実測図記載	実測図記載
SP3052	SA1002-P3	３区	N98	0.40	0.40	0.40	実測図記載	実測図記載
SA3003	SA1003	３区	N98	5.76	－	－	－	－
－	SA1003-P1	３区	N98	0.24	0.24	0.40	実測図記載	実測図記載
SP3060	SA1003-P2	３区	N98	0.24	0.24	0.48	実測図記載	実測図記載
SP3059	SA1003-P3	３区	N98	0.24	0.24	0.32	実測図記載	実測図記載
SP3220	SA1003-P4	３区	N98	0.16	0.16	0.24	実測図記載	実測図記載
SA3002	SA1004	３区	097 ～ 098	8.48	－	－	－	－
SP3217	SA1004-P1	３区	097	0.32	0.32	0.16	実測図記載	実測図記載
SP3079	SA1004-P2	３区	097	0.32	0.32	0.56	実測図記載	実測図記載
SP3078	SA1004-P3	３区	097	0.32	0.32	0.16	実測図記載	実測図記載
SP3064	SA1004-P4	３区	098	0.32	0.32	0.40	実測図記載	実測図記載
SP3027	SA1004-P5	３区	098	0.32	0.32	0.48	実測図記載	実測図記載
SB3001	SB1001	３区	097 ～ P97	10.56	3.44	－	－	－
SP3233	SB1001-P1	３区	097	0.56	0.56	0.24	実測図記載	実測図記載
SP3232	SB1001-P2	３区	097	0.20	0.20	0.10	実測図記載	実測図記載
SP3105	SB1001-P3	３区	097	0.24	0.24	0.32	実測図記載	実測図記載
SP3084	SB1001-P4	３区	097	0.40	0.40	0.48	実測図記載	実測図記載
SP3089	SB1001-P5	３区	097	0.24	0.24	0.40	実測図記載	実測図記載
SP3092	SB1001-P6	３区	097	0.16	0.16	0.24	実測図記載	実測図記載
SP3051	SB1001-P7	３区	P99	0.32	0.32	0.24	実測図記載	実測図記載
SP3083	SB1001-P8	３区	P99	0.24	0.24	0.16	実測図記載	実測図記載
SP3111	SB1001-P9	３区	P99	0.24	0.24	0.32	実測図記載	実測図記載
SP3110	SB1001-P10	３区	P99	0.24	0.24	0.30	実測図記載	実測図記載
SP3109	SB1001-P11	３区	P99	0.16	0.16	0.20	実測図記載	実測図記載
SP3103	SB1001-P12	３区	P99	0.40	0.32	0.24	実測図記載	実測図記載
SP3097	SB1001-P13	３区	097	0.40	0.32	0.24	実測図記載	実測図記載
SP3218	SB1001-P14	３区	097	0.40	0.32	0.16	実測図記載	実測図記載
SP3231	SB1001-P15	３区	097	0.40	0.40	0.16	実測図記載	実測図記載
SB3002	SB1002	３区	097	8.32	2.16	－	－	－
SP3067	SB1002-P1	３区	098	0.40	0.32	0.40	実測図記載	実測図記載
SP3066	SB1002-P2	３区	098	0.32	0.32	0.48	実測図記載	実測図記載
SP3194	SB1002-P3	３区	098	0.16	0.16	0.32	実測図記載	実測図記載
SP3192	SB1002-P4	３区	098	0.48	0.48	0.40	実測図記載	実測図記載
SP3190	SB1002-P5	３区	098	0.56	0.48	0.32	実測図記載	実測図記載
SP3187	SB1002-P6	３区	098	0.32	0.32	0.64	実測図記載	実測図記載
SP3172	SB1002-P7	３区	098	0.24	0.24	0.56	実測図記載	実測図記載
SP3177	SB1002-P8	３区	098	0.32	0.32	0.56	実測図記載	実測図記載
SP3046	SB1002-P9	３区	098	0.32	0.32	0.40	実測図記載	実測図記載
SP3073	SB1002-P10	３区	098	0.32	0.32	0.40	実測図記載	実測図記載
SP3061	SB1002-P11	３区	098	0.32	0.32	0.32	実測図記載	実測図記載
SB3003	SB1003	３区	098	5.35	2.00	－	－	－
SP3070	SB1003-P1	３区	098	0.24	0.24	0.40	実測図記載	実測図記載
SP3075	SB1003-P2	３区	098	0.16	0.16	0.16	実測図記載	実測図記載
SP3032	SB1003-P3	３区	098	0.32	0.32	0.48	実測図記載	実測図記載
SP3088	SB1003-P5	３区	098	0.26	0.24	0.19	実測図記載	実測図記載
SP3189	SB1003-P4	３区	098	0.24	0.24	0.24	実測図記載	実測図記載
SP3038	SB1003-P6	３区	098	0.40	0.40	0.32	実測図記載	実測図記載
SP3076	SB1003-P7	３区	098	0.32	0.32	0.40	実測図記載	実測図記載
SP3072	SB1003-P8	３区	098	0.32	0.24	0.24	実測図記載	実測図記載
SB3002	SB1004	３区	099 ～ 01	2.80	1.36	－	－	－
SP3211	SB1004-P1	３区	098	0.16	0.12	0.16	実測図記載	実測図記載
SP3168	SB1004-P2	３区	099	0.16	0.12	0.20	実測図記載	実測図記載
SP3204	SB1004-P3	３区	099	0.16	0.16	0.16	実測図記載	実測図記載
SP3201	SB1004-P4	３区	099	0.12	0.12	0.16	実測図記載	実測図記載
SP3199	SB1004-P5	３区	098	0.16	0.12	0.16	実測図記載	実測図記載
SP3202	SB1004-P6	３区	098	0.20	0.20	0.16	実測図記載	実測図記載
SB3004, SB3005	SB1005	３区	099 ～ 01	10.00	1.36	－	－	－
－	SB1005-P1	３区	099	0.32	0.32	0.32	実測図記載	実測図記載
－	SB1005-P2	３区	099	0.32	0.32	0.32	実測図記載	実測図記載
SP3117	SB1005-P3	３区	099	0.40	0.40	0.32	実測図記載	実測図記載
SP3118	SB1005-P4	３区	099	0.40	0.40	0.32	実測図記載	実測図記載
SP3119	SB1005-P5	３区	01	0.40	0.32	0.48	実測図記載	実測図記載

旧遺構名	新遺構名	調査区	グリッド	全長	幅	深さ	埋土色調	マンセル値
SP3115	SB1005-P6	３区	099	0.32	0.24	0.24	実測図記載	実測図記載
SP3161	SB1005-P7	３区	099	0.40	0.32	0.56	実測図記載	実測図記載
SP3164	SB1005-P8	３区	01	0.48	0.40	0.56	実測図記載	実測図記載
SP3162	SB1005-P9	３区	01	0.56	0.56	0.40	実測図記載	実測図記載
SP3297	SB1005-P10	３区	01	0.32	0.32	0.24	実測図記載	実測図記載
SP3122	SB1005-P11	３区	01	0.40	0.40	0.56	実測図記載	実測図記載
SP3130	SB1005-P12	３区	01	0.56	0.40	0.24	実測図記載	実測図記載
SP3131	SB1005-P13	３区	01	0.40	0.40	0.56	実測図記載	実測図記載
SP3132	SB1005-P14	３区	01	0.32	0.32	0.56	実測図記載	実測図記載
SP3332	SB1005-P15	３区	01	0.24	0.24	0.24	実測図記載	実測図記載
SP3333	SB1005-P16	３区	01	0.16	0.16	0.20	実測図記載	実測図記載
SP3144	SB1005-P17	３区	01	0.56	0.32	0.48	実測図記載	実測図記載
SP3148	SB1005-P18	３区	01	0.48	0.48	0.40	実測図記載	実測図記載
SP3150	SB1005-P19	３区	01	0.48	0.32	0.40	実測図記載	実測図記載
SP3149	SB1005-P20	３区	01	0.48	0.32	0.56	実測図記載	実測図記載
－	SB1006	３区	099 ～ 01	4.40	3.84	－	－	－
SP3124	SB1006-P1	３区	099	0.34	0.33	0.41	実測図記載	実測図記載
SP3126	SB1006-P2	３区	01	0.24	0.24	0.40	実測図記載	実測図記載
SP3120	SB1006-P3	３区	01	0.40	0.32	0.24	実測図記載	実測図記載
SP3298	SB1006-P4	３区	01	0.24	0.24	0.48	実測図記載	実測図記載
SP3295	SB1006-P5	３区	01	0.24	0.16	0.32	実測図記載	実測図記載
－	SB1006-P6	３区	099	0.31	0.30	0.17	実測図記載	実測図記載
－	SB1006-P7	３区	099	0.30	0.30	0.18	実測図記載	実測図記載
SP3012	SB1006-P8	３区	099	0.32	0.32	0.32	実測図記載	実測図記載
SP3163	SB1006-P9	３区	01	0.48	0.40	0.48	実測図記載	実測図記載
SB3006	SB1007	３区	P2	3.92	3.76	－	－	－
SP3319	SB1007-P1	３区	P2	0.40	0.40	0.24	実測図記載	実測図記載
－	SB1007-P2	３区	P2	0.24	0.24	0.32	実測図記載	実測図記載
－	SB1007-P3	３区	P2	0.24	0.24	0.32	実測図記載	実測図記載
－	SB1007-P4	３区	P2	0.40	0.40	0.40	実測図記載	実測図記載
SP3323	SB1007-P5	３区	P2	0.24	0.24	0.40	実測図記載	実測図記載
SP3321	SB1007-P6	３区	P2	0.32	0.32	0.40	実測図記載	実測図記載
SE1013	SE1001	２区	H1	不明	1.52	0.96	実測図記載	実測図記載
SE1008	SE1002	２区	G2	0.72	0.72	0.60	実測図記載	実測図記載
SE1011	SE1003	２区	G1	1.20	1.20	1.00	実測図記載	実測図記載
SE1009	SE1004	２区	H2	0.72	0.68	0.56	実測図記載	実測図記載
SE1005	SE1005	２区	J1	1.40	1.30	0.90	実測図記載	実測図記載
SE1006	SE1006	２区	J1	1.84	1.56	1.04	実測図記載	実測図記載
SE1010	SE1007	２区	J1	1.40	1.36	0.96	実測図記載	実測図記載
SE1004	SE1011	２区	L99	1.24	1.16	1.24	実測図記載	実測図記載
SE1002	SE1008	２区	K98	2.30	2.30	1.25	実測図記載	実測図記載
SE1017	SE1012	３区	M97	1.44	0.96	1.52	実測図記載	実測図記載
SE1016(	SE1013	３区	M98	2.04	1.96	1.60	実測図記載	実測図記載
SE1001	SE1009	２区	L98	3.60	2.80	1.00	実測図記載	実測図記載
SE1003	SE1010	２区	L99	4.60	4.50	2.00	実測図記載	実測図記載
SE1007	SE1014	３区	M99	0.92	0.88	0.56	実測図記載	実測図記載
SE1018	SE1015	３区	099	1.48	1.44	1.20	実測図記載	実測図記載
SE1014	SE1016	３区	M1	1.08	1.00	0.68	実測図記載	実測図記載
SE4021	SE1017	４区	R96	1.36	1.36	0.80	実測図記載	実測図記載
SK1010	SK1001	２区	H1	1.12	不明	0.08	実測図記載	実測図記載
SK1007	SK1002	２区	I1	1.76	1.68	0.16	実測図記載	実測図記載
SK1005	SK1003	２区	I1	1.04	1.04	0.16	実測図記載	実測図記載
SK1036	SK1004	３区	M97	1.68	1.32	0.16	実測図記載	実測図記載
SK1044	SK1005	３区	M98	1.32	0.84	0.12	実測図記載	実測図記載
SK1029	SK1006	３区	M99	2.00	1.68	0.16	実測図記載	実測図記載
SK1034	SK1007	３区	N98	1.60	1.52	0.40	実測図記載	実測図記載
SK1041	SK1008	３区	N98	2.64	2.16	0.24	実測図記載	実測図記載
SK1032	SK1009	３区	N99	2.04	1.36	0.32	実測図記載	実測図記載
SK1030	SK1010	３区	N99	1.28	1.28	0.16	実測図記載	実測図記載
SK1057	SK1011	３区	096	1.12	－	0.08	実測図記載	実測図記載
SK1040	SK1013	３区	097	1.28	0.80	0.24	実測図記載	実測図記載
SK1027	SK1014	３区	P97	1.68	1.68	0.16	実測図記載	実測図記載
SX1021	SK1015	３区	P98	3.50	1.70	0.15	実測図記載	実測図記載
SK1023	SK1017	３区	P99	－	2.08	0.08	実測図記載	実測図記載
SK1024	SK1018	３区	01	1.16	0.88	0.44	実測図記載	実測図記載
SK1033	SK1019	３区	01	1.16	0.84	0.32	実測図記載	実測図記載
SK1042	SK1020	３区	Q96	1.16	0.60	0.12	実測図記載	実測図記載
SK1028	SK1021	３区	Q97	0.80	0.72	0.16	実測図記載	実測図記載
SK1021	SK1023	３区	P98	1.32	1.20	0.12	実測図記載	実測図記載
SK1031	SK1024	３区	Q98	1.20	0.84	0.12	実測図記載	実測図記載

旧遺構名	新遺構名	調査区	グリッド	全長	幅	深さ	埋土色調	マンセル値
SK1025	SK1025	３区	Q98	1.08	0.76	0.08	実測図記載	実測図記載
SP1031	SP1013	２区	K1	-	0.28	0.12	実測図記載	実測図記載
SP1030	SP1014	２区	K1	0.40	0.40	0.20	実測図記載	実測図記載
SP1002	SP1020	２区	L98	0.28	0.24	0.40	実測図記載	実測図記載
SP3030	SP1043	３区	M99	0.24	0.24	0.36	実測図記載	実測図記載
SP3069	SP1086	３区	O98	0.36	0.32	0.24	実測図記載	実測図記載
SP3095	SP1120	３区	P97	0.28	0.24	0.36	実測図記載	実測図記載
SP3127	SP1180	３区	Q97	0.40	0.36	0.24	実測図記載	実測図記載
SP3175	SP1185	３区	Q98	0.28	0.24	0.52	実測図記載	実測図記載
SD1002	SD1001	２区	-	80.00	0.80	0.70	実測図記載	実測図記載
SR1003	SD1025	２区	-	40.00	0.40	0.20	実測図記載	実測図記載
SD1034	SD1003	２区	I99	9.00	0.40	0.20	実測図記載	実測図記載
SD1025	SD1004	２区	I99	9.00	0.40	0.20	実測図記載	実測図記載
SD1029	SD1005	２区	I99	3.40	0.40	0.15	実測図記載	実測図記載
SD1028	SD1006	２区	I99	2.60	0.40	0.15	実測図記載	実測図記載
SD1024	SD1008	２区	J99	6.60	0.40	0.10	実測図記載	実測図記載
SR1004	SD1009	２区	J99	2.40	0.60	0.20	実測図記載	実測図記載
SR1004	SR1003	２区	J99	22.40	1.10	0.15	実測図記載	実測図記載
SD1022	SD1010	２区	J1	1.40	0.80	0.20	実測図記載	実測図記載
SD1026	SD1011	２区	J1	3.80	0.45	0.10	実測図記載	実測図記載
SX1007	SR1004	２区	J99	1.80	2.60	0.30	実測図記載	実測図記載
SR1006	SR1005	２区	J99	8.20	1.40	0.10	実測図記載	実測図記載
SD1019	SD1007	２区	I1	23.40	1.20	0.20	実測図記載	実測図記載
SD1004	SD1015	２区	K1	26.20	1.00	0.45	実測図記載	実測図記載
SR1013,SR1050	SD1023	３区	N98	34.00	1.40	0.10	実測図記載	実測図記載
SR1001	SR1001	２区	-	64.00	2.00	0.15	実測図記載	実測図記載
SD1036	SR1002	２区	I2	6.80	0.80	0.20	実測図記載	実測図記載
SR1020	SR1022	３区	P3	76.50	5.00	0.25	実測図記載	実測図記載
SD1005	SD1012	２区	K98	24.00	0.80	0.25	実測図記載	実測図記載
SD1013	SD1013	２区	K1	11.60	0.40	0.60	実測図記載	実測図記載
SD1014	SD1014	２区	K1	2.80	0.40	0.20	実測図記載	実測図記載
SD1006	SD1016	２区	L98	6.00	0.80	0.25	実測図記載	実測図記載
SD1007	SD1017	２区	L99	5.80	0.40	0.20	実測図記載	実測図記載
SD1027	SD1019	３区	M2	0.80	0.40	0.20	実測図記載	実測図記載
SD1009	SD1020	２区	L1	11.20	0.75	0.14	実測図記載	実測図記載
SD1021	SR1007	２区	L98	3.80	0.80	1.00	実測図記載	実測図記載
SD1020	SR1008	２区	L98	1.60	0.40	0.15	実測図記載	実測図記載
SR1002	SR1009	２区	L99	17.60	2.00	0.50	実測図記載	実測図記載
SR1010	SR1010	３区	M98	13.00	3.15	0.20	実測図記載	実測図記載
SR1012	SR1011	３区	N99	2.80	0.40	0.05	実測図記載	実測図記載
SD1059	SD1024	３区	O98	12.20	1.60	0.25	実測図記載	実測図記載
SD1060	SD1026	３区	P98	3.20	1.00	0.40	実測図記載	実測図記載
SD1066	SD1027	３区	O2	3.60	1.00	0.15	実測図記載	実測図記載
SR1026	SD1028	３区	O2	11.80	1.00	0.30	実測図記載	実測図記載
SR1028	SD1029	３区	P1	5.80	1.00	0.40	実測図記載	実測図記載
SR1027	SD1030	３区	P2	6.60	0.60	0.40	実測図記載	実測図記載
SD4119	SD1031	４区	R96	8.60	0.80	0.20	実測図記載	実測図記載
SR1031	SR1012	３区	O97	43.60	-	0.30	実測図記載	実測図記載
SR1014	SR1015	３区	O99	7.60	1.00	0.48	実測図記載	実測図記載
SR1024	SR1016	３区	P97	6.20	2.20	0.25	実測図記載	実測図記載
SR1019	SR1017	３区	P97	5.60	1.60	0.10	実測図記載	実測図記載
SR1022	SR1018	３区	P97	3.20	0.80	0.30	実測図記載	実測図記載
SD1064,SD1075	SR1019	３区	P98	2.80	1.00	0.10	実測図記載	実測図記載
SR1017	SR1021	３区	P1	37.20	0.80	0.40	実測図記載	実測図記載
SR1018	SR1024	３区	Q97	9.40	0.60	1.50	実測図記載	実測図記載
SR1015	SR1025	３区	R97	30.00	1.20	0.55	実測図記載	実測図記載
SR1016	SR1026	３区	R98	9.00	1.10	0.30	実測図記載	実測図記載
SD5121	SD1032	５区	Bb89	17.40	0.90	0.10	実測図記載	実測図記載
-	SD1033	５区	Dd88	12.00	0.40	0.20	実測図記載	実測図記載
SD5123	SD1034	５区	Ee90	3.60	0.60	0.20	実測図記載	実測図記載
SD5124	SD1035	５区	Ff91	4.40	0.20	0.15	実測図記載	実測図記載
SD5125	SD1036	５区	Ff91	3.80	0.75	0.25	実測図記載	実測図記載
SX1015	SX1001	２区	O98	4.80	2.56	0.24	-	-
SX1003	SX1002	２区	K1	1.00	1.00	-	-	-
SX1018	SX1003	３区	N98	2.40	1.92	-	-	-
-	SA2001	２区	I1	11.80	-	-	-	-
SP1304	SA2001-P1	２区	I1	0.48	0.40	0.48	実測図記載	実測図記載
SP1149	SA2001-P2	２区	I1	0.32	0.32	0.40	実測図記載	実測図記載
SP1150	SA2001-P3	２区	I1	0.24	0.24	0.32	実測図記載	実測図記載
SP1151	SA2001-P4	２区	I1	0.24	0.16	0.32	実測図記載	実測図記載

旧遺構名	新遺構名	調査区	グリッド	全長	幅	深さ	埋土色調	マンセル値
SP1152	SA2001-P5	2区	I1	0.16	0.16	0.40	実測図記載	実測図記載
SP1349	SA2001-P6	2区	J1	0.32	0.32	0.32	実測図記載	実測図記載
SP1299	SA2001-(P7)	2区	J1	0.16	0.16	0.32	実測図記載	実測図記載
SB1005	SB2001	2区	I1	4.48	3.92	-	-	-
SP1159	SB2001-P1	2区	J1	0.96	0.96	0.80	実測図記載	実測図記載
SP1164	SB2001-P2	2区	J1	0.80	0.72	0.80	実測図記載	実測図記載
SP1163	SB2001-P3	2区	J1	0.88	0.72	0.56	実測図記載	実測図記載
SP1162	SB2001-P4	2区	J1	0.72	0.64	0.48	実測図記載	実測図記載
SP1161	SB2001-P5	2区	J1	1.04	1.04	0.88	実測図記載	実測図記載
SP1160	SB2001-P6	2区	J1	0.96	0.96	0.72	実測図記載	実測図記載
SB1003	SB2002	2区	K99				-	-
SP1112	SB2002-P1	2区	K99	0.74	0.66	0.46	実測図記載	実測図記載
SP1111	SB2002-P2	2区	K99	0.65	0.51	0.47	実測図記載	実測図記載
SP1110	SB2002-P3	2区	K99	0.69	0.63	0.26	実測図記載	実測図記載
SP1109	SB2002-P4	2区	K99	0.82	0.82	0.50	実測図記載	実測図記載
SP1116	SB2002-P5	2区	K99	0.74	0.66	0.54	実測図記載	実測図記載
SP1115	SB2002-P6	2区	K99	0.62	0.57	0.33	実測図記載	実測図記載
SP1114	SB2002-P7	2区	K99	0.74	0.66	0.41	実測図記載	実測図記載
SP1113	SB2002-P8	2区	K99	0.86	0.80	0.46	実測図記載	実測図記載
SP1120	SB2002-P9	2区	K99	0.80	0.74	0.40	実測図記載	実測図記載
SP1118	SB2002-P10	2区	K99	0.66	0.57	0.40	実測図記載	実測図記載
SP1117	SB2002-P11	2区	K99	0.84	0.79	6.88	実測図記載	実測図記載
SP1124	SB2002-P12	2区	K99	0.75	0.67	0.66	実測図記載	実測図記載
SP1123	SB2002-P13	2区	K99	0.79	0.77	0.50	実測図記載	実測図記載
SP1122	SB2002-P14	2区	K99	0.82	0.63	0.65	実測図記載	実測図記載
SP1121	SB2002-P15	2区	K99	0.84	0.81	0.59	実測図記載	実測図記載
SP1128	SB2002-P16	2区	K99	0.82	0.81	0.74	実測図記載	実測図記載
SP1127	SB2002-P17	2区	K99	0.79	0.67	0.50	実測図記載	実測図記載
SP1126	SB2002-P18	2区	K99	0.78	0.72	0.58	実測図記載	実測図記載
SP1125	SB2002-P19	2区	K99	0.82	0.74	0.66	実測図記載	実測図記載
SB1002	SB2003	2区	K1	4.40	3.60	-	-	-
SP1276	SB2003-P1	2区	K1	0.59	0.51	0.41	実測図記載	実測図記載
SP1275	SB2003-P2	2区	K1	0.71	0.64	0.37	実測図記載	実測図記載
SP1203	SB2003-P3	2区	K1	0.64	0.62	0.52	実測図記載	実測図記載
SP1267	SB2003-P4	2区	K1	0.66	0.57	0.48	実測図記載	実測図記載
SP1104	SB2003-P5	2区	K1	0.55	0.55	0.38	実測図記載	実測図記載
SP1105	SB2003-P6	2区	K1	0.55	0.51	0.46	実測図記載	実測図記載
SP1279	SB2003-P7	2区	K1	0.78	0.74	0.72	実測図記載	実測図記載
SP1280	SB2003-P8	2区	K1	0.86	0.82	0.94	実測図記載	実測図記載
SP1130	SB2003-P9	2区	K1	0.75	0.67	0.62	実測図記載	実測図記載
SP1216	SB2003-P10	2区	K1	0.82	0.71	0.42	実測図記載	実測図記載
SP1129	SB2003-P11	2区	K1	0.82	0.74	0.50	実測図記載	実測図記載
SP1205	SB2003-P12	2区	K1	1.02	0.74	0.41	実測図記載	実測図記載
SP1204	SB2003-P13	2区	K1	0.82	0.79	0.46	実測図記載	実測図記載
SP1106	SB2003-P14	2区	K1	0.83	0.67	0.48	実測図記載	実測図記載
SB1004	SB2004	2区	K1	3.68	3.20	-	-	-
SP1274	SB2004-P1	2区	K1	0.81	0.75	0.57	実測図記載	実測図記載
SP1099	SB2004-P2	2区	K1	0.82	0.77	0.57	実測図記載	実測図記載
SP1100	SB2004-P3	2区	K1	0.78	0.74	0.55	実測図記載	実測図記載
SP1101	SB2004-P4	2区	K1	0.90	0.82	0.42	実測図記載	実測図記載
SP1098	SB2004-P5	2区	K1	-	0.54	0.17	実測図記載	実測図記載
SP1093	SB2004-P6	2区	K1	-	0.66	0.25	実測図記載	実測図記載
SP1094	SB2004-P7	2区	K1	0.82	0.74	0.24	実測図記載	実測図記載
SP1097	SB2004-P8	2区	K1	0.40	0.40	0.14	実測図記載	実測図記載
SP1102	SB2004-P9	2区	K1	0.90	0.70	0.43	実測図記載	実測図記載
SP1103	SB2004-P10	2区	J1	0.82	0.66	0.47	実測図記載	実測図記載
SP1096	SB2004-P11	2区	K1	0.91	0.71	0.08	実測図記載	実測図記載
SP1095	SB2004-P12	2区	K1	0.82	0.82	0.57	実測図記載	実測図記載
SB1001	SB2005	2区	L1	5.30	3.60	-	-	-
SP1051	SB2005-P1	2区	L1	0.70	0.66	0.51	実測図記載	実測図記載
SP1050	SB2005-P2	2区	L1	0.60	0.55	0.42	実測図記載	実測図記載
SP1049	SB2005-P3	2区	L1	0.73	0.69	0.30	実測図記載	実測図記載
SP1048	SB2005-P4	2区	L1	0.57	0.55	0.48	実測図記載	実測図記載
SP1047	SB2005-P5	2区	L1	0.67	0.58	0.42	実測図記載	実測図記載
SP1046	SB2005-P6	2区	L1	0.67	0.63	0.46	実測図記載	実測図記載
SP1045	SB2005-P7	2区	L1	0.73	0.70	0.34	実測図記載	実測図記載
SP1044	SB2005-P8	2区	L1	0.58	0.56	0.25	実測図記載	実測図記載
SP1043	SB2005-P9	2区	L1	0.63	0.61	0.33	実測図記載	実測図記載
SP1054	SB2005-P10	2区	L1	0.73	0.72	0.46	実測図記載	実測図記載
SP1053	SB2005-P11	2区	L1	0.75	0.65	0.38	実測図記載	実測図記載

旧遺構名	新遺構名	調査区	グリッド	全長	幅	深さ	埋土色調	マンセル値
SP1052	SB2005-P12	２区	L1	0.62	0.58	0.38	実測図記載	実測図記載
-	SA2002	２区	L1				-	-
SP1062	SA2002-P1	２区	L1	0.66	0.58	0.41	実測図記載	実測図記載
SP1063	SA2002-P2	２区	L1	0.58	0.50	0.36	実測図記載	実測図記載
SP1064	SA2002-P3	２区	L1	0.62	0.58	0.46	実測図記載	実測図記載
SP1065	SA2002-P4	２区	L1	0.57	0.50	0.34	実測図記載	実測図記載
SP1061	SA2002-(P5)	２区	L1	0.59	0.50	0.47	実測図記載	実測図記載
SE1019	SE2001	３区	Q97	3.32	3.24	1.28	実測図記載	実測図記載
SE1015	SE2002	２区	L1	2.24	1.24	0.36	実測図記載	実測図記載
SK1015	SK2001	２区	J99	2.16	1.20	0.24	実測図記載	実測図記載
SK1017	SK2002	２区	J99	0.88	0.80	0.12	実測図記載	実測図記載
SK1012	SK2003	２区	J99	-	2.12	0.20	実測図記載	実測図記載
SK1013	SK2004	２区	J99	1.12	1.12	0.16	実測図記載	実測図記載
SK1014	SK2005	２区	J2	-	0.92	0.08	実測図記載	実測図記載
SK1054	SK2006	３区	M98	0.66	0.36	0.04	実測図記載	実測図記載
SK1045	SK2007	３区	M98	1.24	1.16	0.19	実測図記載	実測図記載
SK1051	SK2008	３区	M98	1.65	0.88	0.14	実測図記載	実測図記載
SK1046	SK2009	３区	N97	1.60	-	0.23	実測図記載	実測図記載
SK1048	SK2010	３区	N97	1.12	0.56	0.21	実測図記載	実測図記載
SK1049	SK2011	３区	N97	0.92	0.52	0.11	実測図記載	実測図記載
SK1055	SK2012	３区	N97	1.20	1.16	0.25	実測図記載	実測図記載
SK1053	SK2013	３区	N97	0.68	0.64	0.56	実測図記載	実測図記載
SK1047	SK2014	３区	N97	1.60	1.28	0.28	実測図記載	実測図記載
SK1052	SK2015	３区	N98	0.56	0.44	0.20	実測図記載	実測図記載
SK1050	SK2016	３区	O97	1.64	1.44	0.28	実測図記載	実測図記載
SK1020	SK2017	３区	O97	1.48	1.12	0.29	実測図記載	実測図記載
SK1060	SK2019	３区	O97	0.76	0.72	0.41	実測図記載	実測図記載
SK1064	SK2020	３区	P97	-	0.72	0.21	実測図記載	実測図記載
SK1058	SK2021	３区	Q96	0.76	0.64	0.06	実測図記載	実測図記載
SK1059	SK2022	３区	Q96	1.16	1.00	0.07	実測図記載	実測図記載
SK1056	SK2023	３区	M99	2.80	2.36	0.10	実測図記載	実測図記載
SK1018	SK2024	３区	N1	2.16	1.44	0.36	実測図記載	実測図記載
SD1018	SD2002	２区	H1	75.20	0.75	0.20	実測図記載	実測図記載
SX1002	SX2001	２区	K1	4.40	3.90	-	-	-
SA1002+SA1003	SA3001	２区	K99	13.92	-	-	-	-
SP1021	SA3001-P1	２区	K99	0.32	0.32	0.16	実測図記載	実測図記載
SP1228	SA3001-P2	２区	K99	0.30	0.26	0.18	実測図記載	実測図記載
SP1333	SA3001-P3	２区	K99	0.24	0.24	0.31	実測図記載	実測図記載
SP1232	SA3001-P4	２区	K99	0.30	0.26	0.27	実測図記載	実測図記載
SP1233	SA3001-P5	２区	K99	-	0.26	0.27	実測図記載	実測図記載
SP1336	SA3001-P6	２区	K99	0.22	0.18	0.22	実測図記載	実測図記載
SP1337	SA3001-P7	２区	K1	0.22	0.18	0.17	実測図記載	実測図記載
SP1088	SA3001-P8	２区	K1	0.31	0.29	0.35	実測図記載	実測図記載
SP1089	SA3001-P9	２区	K1	0.31	0.25	0.10	実測図記載	実測図記載
SP1225	SA3001-P10	２区	K1	0.25	0.25	0.39	実測図記載	実測図記載
SP1080	SA3001-P11	２区	K1	0.26	0.19	0.26	実測図記載	実測図記載
SP1078	SA3001-P12	２区	K1	0.22	0.22	0.24	実測図記載	実測図記載
SP1073	SA3001-P13	２区	K1	0.25	0.24	0.38	実測図記載	実測図記載
SP1072	SA3001-P14	２区	K1	0.25	0.24	0.46	実測図記載	実測図記載
SP1071	SA3001-P15	２区	L1	0.30	0.26	0.34	実測図記載	実測図記載
SP1070	SA3001-P16	２区	L1	0.24	0.22	0.35	実測図記載	実測図記載
SP1343	SA3001-P17	２区	L1	0.17	0.15	0.08	実測図記載	実測図記載
SB1010	SB3001			-	3.52	-	-	-
SP1199	SB3001-P1	２区	I99	0.52	0.32	0.44	実測図記載	実測図記載
SP1200	SB3001-P2	２区	I99	0.28	0.24	0.52	実測図記載	実測図記載
SP1285	SB3001-P3	２区	I99	0.48	0.44	0.40	実測図記載	実測図記載
SP1287	SB3001-P4	２区	I99	0.20	0.20	0.20	実測図記載	実測図記載
SP1214	SB3001-P5	２区	I99	0.28	0.28	0.21	実測図記載	実測図記載
SP1132	SB3001-P6	２区	I99	0.36	0.36	0.44	実測図記載	実測図記載
SP1292	SB3001-P7	２区	I99	0.36	0.32	0.12	実測図記載	実測図記載
SB1006	SB3002	２区	I99	5.12	4.00	-	-	-
SP1251	SB3002-P1	２区	J99	0.64	0.64	0.56	実測図記載	実測図記載
SP1250	SB3002-P2	２区	I99	0.72	0.64	0.56	実測図記載	実測図記載
SP1259	SB3002-P3	２区	I99	0.72	0.72	0.48	実測図記載	実測図記載
SP1260	SB3002-P4	２区	I99	0.64	0.64	0.48	実測図記載	実測図記載
SP1265	SB3002-P5	２区	I99	0.64	0.56	0.56	実測図記載	実測図記載
SP1309	SB3002-P6	２区	I1	0.32	0.24	0.27	実測図記載	実測図記載
SP1257	SB3002-P7	２区	I1	0.80	0.64	0.24	実測図記載	実測図記載
SP1252	SB3002-P8	２区	J99	0.64	0.64	0.56	実測図記載	実測図記載
SP1253	SB3002-P9	２区	J1	0.64	0.64	0.56	実測図記載	実測図記載

旧遺構名	新遺構名	調査区	グリッド	全長	幅	深さ	埋土色調	マンセル値
SP1254	SB3002-P10	2区	I1	0.88	0.80	0.48	実測図記載	実測図記載
SP1261	SB3002-P11	2区	I1	0.64	0.64	0.40	実測図記載	実測図記載
SP1168	SB3002-P12	2区	I1	1.04	1.04	0.48	実測図記載	実測図記載
SP1029	SB3002-P13	2区	J1	0.64	0.64	0.16	実測図記載	実測図記載
SP1249	SB3002-P14	2区	I99	0.48	0.48	0.40	実測図記載	実測図記載
SP1166	SB3002-P15	2区	I1	0.48	0.32	0.40	実測図記載	実測図記載
SP1167	SB3002-P16	2区	I1	0.86	0.52	0.54	実測図記載	実測図記載
SP1193	SB3002-P17	2区	I1	0.52	0.50	0.44	実測図記載	実測図記載
-	SB3003	2区	J1	4.08	4.08	-	-	-
SP1297	SB3003-P1	2区	J1	0.32	0.32	0.24	実測図記載	実測図記載
SP1302	SB3003-P2	2区	J1	0.24	0.24	0.32	実測図記載	実測図記載
SP1299	SB3003-P3	2区	J1	0.16	0.16	0.32	実測図記載	実測図記載
SP1319	SB3003-P4	2区	J1	0.32	0.32	0.24	実測図記載	実測図記載
SP1321	SB3003-P5	2区	J1	0.32	0.32	0.20	実測図記載	実測図記載
SP1208	SB3003-P6	2区	J1	0.32	0.32	0.32	実測図記載	実測図記載
SP1322	SB3003-P7	2区	J1	0.24	0.24	0.14	実測図記載	実測図記載
-	SB3004	4区	R96	4.88	2.24	-	-	-
SP4410	SB3004-P1	4区	R96	0.31	0.26	0.18	実測図記載	実測図記載
SP4371	SB3004-P2	4区	R96	0.46	0.33	0.14	実測図記載	実測図記載
SP4372	SB3004-P3	4区	R96	0.22	0.21	0.08	実測図記載	実測図記載
SP4335	SB3004-P4	4区	R96	0.80	0.72	0.26	実測図記載	実測図記載
SP4336	SB3004-P5	4区	R96	0.57	0.33	0.21	実測図記載	実測図記載
SP4370	SB3004-P6	4区	R96	0.32	0.32	0.24	実測図記載	実測図記載
SP4368	SB3004-P7	4区	R96	0.68	0.40	0.10	実測図記載	実測図記載
SP4366	SB3004-P8	4区	R96	0.26	0.24	0.16	実測図記載	実測図記載
SB4017	SB3005	4区	R96	4.80	3.76	-	-	-
SP4392	SB3005-P1	4区	R96	0.65	0.41	0.62	実測図記載	実測図記載
SP4391	SB3005-P2	4区	R96	0.41	0.30	0.81	実測図記載	実測図記載
SP4390	SB3005-P3	4区	R96	0.58	0.31	0.49	実測図記載	実測図記載
SP4389	SB3005-P4	4区	S96	0.40	0.34	0.74	実測図記載	実測図記載
SP4388	SB3005-P5	4区	S96	0.73	0.55	0.19	実測図記載	実測図記載
SP4385	SB3005-P6	4区	S96	0.73	0.44	0.44	実測図記載	実測図記載
SP4384	SB3005-P7	4区	S96	0.51	0.49	0.60	実測図記載	実測図記載
SP4383	SB3005-P8	4区	S96	-	-	0.09	実測図記載	実測図記載
SP4382	SB3005-P9	4区	S96	0.47	0.42	0.66	実測図記載	実測図記載
SP4381	SB3005-P10-1	4区	R96	0.48	0.33	0.57	実測図記載	実測図記載
SP4380	SB3005-P10-2	4区	R96	0.42	-	0.53	実測図記載	実測図記載
SP4379	SB3005-P11	4区	R96	0.62	0.46	0.34	実測図記載	実測図記載
SP4377	SB3005-P12-1	4区	R96	0.58	-	0.47	実測図記載	実測図記載
SP4378	SB3005-P12-2	4区	R96	-	0.34	0.66	実測図記載	実測図記載
SP4397	SB3005-P13	4区	R96	0.38	0.31	0.05	実測図記載	実測図記載
SP4396	SB3005-P14	4区	R96	0.41	0.26	0.05	実測図記載	実測図記載
SP4395	SB3005-P15	4区	R96	0.42	0.30	0.33	実測図記載	実測図記載
SP4394	SB3005-P16	4区	R96	0.50	0.40	0.35	実測図記載	実測図記載
SP4393	SB3005-P17	4区	R96	0.50	0.44	0.57	実測図記載	実測図記載
SB4018	SB3006	4区	S96	5.92	4.96	-	-	-
SP4419	SB3006-P1	4区	S96	0.26	0.23	0.31	実測図記載	実測図記載
SP4398	SB3006-P2	4区	T96	0.41	0.31	0.39	実測図記載	実測図記載
SP4399	SB3006-P3	4区	T96	0.26	0.26	0.27	実測図記載	実測図記載
SP4400	SB3006-P4	4区	T96	0.33	0.33	0.34	実測図記載	実測図記載
SP4401	SB3006-P5	4区	T96	0.41	0.33	0.26	実測図記載	実測図記載
SP4402	SB3006-P6	4区	T96	0.33	0.26	0.39	実測図記載	実測図記載
SP4403	SB3006-P7	4区	T96	0.41	0.30	0.28	実測図記載	実測図記載
SP4404	SB3006-P8	4区	T96	0.25	0.22	0.26	実測図記載	実測図記載
SP4405	SB3006-P9	4区	T96	0.34	0.32	0.31	実測図記載	実測図記載
SP4406	SB3006-P10	4区	T96	0.34	0.33	0.34	実測図記載	実測図記載
SP4407	SB3006-P11	4区	S96	0.19	0.18	0.34	実測図記載	実測図記載
SP4408	SB3006-P12	4区	S96	0.20	0.20	0.32	実測図記載	実測図記載
SP4427	SB3006-P13	4区	T97	0.49	0.37	0.55	実測図記載	実測図記載
SP4429	SB3006-P14	4区	T96	0.68	0.49	0.54	実測図記載	実測図記載
SH1005	SH3001	2区	K99	6.40	6.24	-	実測図記載	実測図記載
SD1012	SD3001	2区	K99	25.60	0.40	0.24	実測図記載	実測図記載
SD1031	SD3002	2区	L99	2.90	0.26	0.14	実測図記載	実測図記載
SD1030	SD3003	2区	L99	2.80	0.25	0.12	実測図記載	実測図記載
SD1011	SD3004	2区	L99	5.76	0.40	0.24	実測図記載	実測図記載
SP1184	SH3001-P1	2区	K99	0.88	-	0.42	実測図記載	実測図記載
SP1016	SH3001-P2	2区	K99	0.63	0.57	0.33	実測図記載	実測図記載
SP1013	SH3001-P3	2区	L99	0.50	0.50	0.17	実測図記載	実測図記載
SP1014	SH3001-P4	2区	L99	0.26	0.23	0.22	実測図記載	実測図記載
SP1011	SH3001-P5	2区	L99	0.54	0.50	0.40	実測図記載	実測図記載

旧遺構名	新遺構名	調査区	グリッド	全長	幅	深さ	埋土色調	マンセル値
SB1009	SH3002	２区	K99	－	2.80	－	実測図記載	実測図記載
SP1294	SH3002-P1	２区	K99	－	0.30	0.18	実測図記載	実測図記載
SP1339	SH3002-P2	２区	K99	0.33	0.33	0.16	実測図記載	実測図記載
SP1238	SH3002-P3	２区	K99	0.32	0.32	0.46	実測図記載	実測図記載
SP1186	SH3002-P4	２区	K99	0.58	0.57	0.22	実測図記載	実測図記載
SB1008	SH3003	２区	K99	3.36	3.04	－	実測図記載	実測図記載
SP1185	SH3003-P1	２区	K99	0.74	0.65	0.18	実測図記載	実測図記載
SP1187	SH3003-P2	２区	K99	1.07	0.87	0.22	実測図記載	実測図記載
SP1189	SH3003-P3	２区	K99	0.56	0.51	0.10	実測図記載	実測図記載
SP1183	SH3003-P4	２区	L99	0.78	0.70	0.46	実測図記載	実測図記載
SP1182	SH3003-P5	２区	L99	0.38	0.34	0.33	実測図記載	実測図記載
SP1012	SH3003-P6	２区	L99	0.79	0.70	0.08	実測図記載	実測図記載
SH1003	SH3004	３区	N98	5.76	－	－	実測図記載	実測図記載
SD1054	SD3005	３区	N98	19.20	0.52	0.19	実測図記載	実測図記載
SD1068	SD3006	３区	N98	3.52	0.35	0.21	実測図記載	実測図記載
－	SH3004-P1	３区	N98	0.39	0.34	0.32	実測図記載	実測図記載
－	SH3004-P3	３区	N98	0.42	0.42	0.34	実測図記載	実測図記載
－	SH3004-P2	３区	N98	0.53	0.50	0.46	実測図記載	実測図記載
SP3264	SH3004-P4	３区	N98	0.50	0.50	0.45	実測図記載	実測図記載
SP3058	SH3004-P5	３区	N98	0.42	0.41	0.32	実測図記載	実測図記載
SP3327	SH3004-P6	３区	N98	0.58	0.50	0.47	実測図記載	実測図記載
SK1035	SK2025	３区	N98	4.00	0.96	0.16	実測図記載	実測図記載
SH1004	SH3005	３区	N98	－	－	－	実測図記載	実測図記載
－	SD3007	３区	N98	－	－	0.20	実測図記載	実測図記載
SH1006	SH3006	３区	O97	5.20	4.48	－	実測図記載	実測図記載
－	SD3008	３区	O97	5.60	0.36	0.18	実測図記載	実測図記載
－	SD3009	３区	O98	2.24	0.25	0.07	実測図記載	実測図記載
－	SD3010	３区	O97	6.24	0.28	0.08	実測図記載	実測図記載
－	SH3006-P1	３区	O97	0.26	0.21	0.18	実測図記載	実測図記載
－	SH3006-P2	３区	O98	0.25	0.19	0.18	実測図記載	実測図記載
－	SH3006-P3	３区	O98	0.18	0.18	0.15	実測図記載	実測図記載
SP3282	SP3022	３区	O97	0.57	0.56	0.51	実測図記載	実測図記載
SH1007	SH3007	３区	O98	3.84	3.84		実測図記載	実測図記載
－	SD3012	３区	O98	6.40	0.14	0.10	実測図記載	実測図記載
－	SH3007-P1	３区	O98	0.40	0.35	0.22	実測図記載	実測図記載
SP3329	SH3007-P2	３区	O98	0.34	0.30	0.50	実測図記載	実測図記載
－	SH3007-P3	３区	P98	0.34	0.33	0.46	実測図記載	実測図記載
－	SH3007-P4	３区	P98	0.33	0.32	0.15	実測図記載	実測図記載
SP3328	SH3007-P5	３区	O98	0.33	0.26	0.24	実測図記載	実測図記載
－	SH3007-P6	３区	P98	0.26	0.25	0.12	実測図記載	実測図記載
SH4011	SH3008	４区	R95	－	－	－	実測図記載	実測図記載
－	SH3008-P1	４区	R97	0.22	0.22	0.18	実測図記載	実測図記載
SH4012	SH3009	４区	R95	－	－	－	実測図記載	実測図記載
SH4013(1008)	SH3010	４区	R96	－	－	－	実測図記載	実測図記載
SD1096	SD3014	４区	R96	14.64	0.16	0.13	実測図記載	実測図記載
SD4116	SD3015	４区	R96	3.80	0.36	0.25	実測図記載	実測図記載
SH4015	SH3011	４区	R96	－	－	－	実測図記載	実測図記載
－	SD3016	４区	R96	4.24	0.22	0.10	実測図記載	実測図記載
SH4014	SH3012	４区	R97	－	－	－	実測図記載	実測図記載
SK4069	SK3006	４区	R97	0.84	0.84	0.24	実測図記載	実測図記載
SP4422	SH3012-P1	４区	R97	0.41	0.39	0.32	実測図記載	実測図記載
－	SH3012-P2	４区	R97	0.24	0.24	0.21	実測図記載	実測図記載
SP4420	SH3012-P3	４区	R97	0.27	0.26	0.21	実測図記載	実測図記載
SP4421	SH3012-P4	４区	R97	0.52	0.46	0.39	実測図記載	実測図記載
SE1012	SE3001	２区	J2	1.40	1.28	1.28	実測図記載	実測図記載
SE1020	SE3002	３区	P99	1.20	1.16	0.84	実測図記載	実測図記載
SE4025	SE3003	４区	T97	1.56	1.36	1.56	実測図記載	実測図記載
SE4024	SE3004	４区	U95	2.48	2.32	1.84	実測図記載	実測図記載
SK4065	SE3005	４区	T98	1.12	1.04	1.04	実測図記載	実測図記載
SE4026	SE3006	４区	V94	1.08	1.04	0.92	実測図記載	実測図記載
SE4023	SE3007	４区	V95	1.04	1.00	1.04	実測図記載	実測図記載
SE4022	SE3008	４区	V95	1.20	1.16	0.80	実測図記載	実測図記載
SK1006	SK3001	２区	J1	1.40	1.36	0.16	実測図記載	実測図記載
SK1008	SK3002	２区	J1	1.36	1.04	0.16	実測図記載	実測図記載
SD1093	SK3003	３区	P96	7.76	3.92	0.42	実測図記載	実測図記載
SK1022	SK3004	３区	N99	2.28	2.24	0.30	実測図記載	実測図記載
SK1037	SK3005	３区	O99	0.84	0.72	0.24	実測図記載	実測図記載
SK4071	SK3007	４区	S97	0.64	0.60	0.48	実測図記載	実測図記載
SD4111	SD3017	４区	S95	7.25	0.85	0.15	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SD4109	SD3018	４区	S95	16.50	0.65	0.15	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2

旧遺構名	新遺構名	調査区	グリッド	全長	幅	深さ	埋土色調	マンセル値
SD4108	SD3019	４区	T96	32.50	0.70	0.30	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SX1004	SX3001	２区	I1	4.00	4.00	－	－	－
SX4025	SX3002	４区	T96	10.40	4.96	0.24	－	－
SZ3001	SZ4001	３区	－	－	－	－	－	－
SD1017	SD4001	２区	M99	7.28	1.43	0.40	実測図記載	実測図記載
SD1110	SD4002	３区	M98	8.50	1.65	0.48	実測図記載	実測図記載
SD1078	SD4003	３区	N98	8.45	1.42	0.32	実測図記載	実測図記載
SD1055	SD4004	３区	M99	7.60	0.50	0.51	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SZ3002	SZ4002	３区	－	－	－	－	－	－
SK1043	SK4001	３区	O98	2.50	1.20	0.43	実測図記載	実測図記載
SD1074	SD4005	３区	N97	7.30	1.60	0.51	実測図記載	実測図記載
SD1083	SD4006	３区	O97	8.50	2.50	0.33	実測図記載	実測図記載
SD1084	SD4007	３区	O97	7.30	1.60	0.52	実測図記載	実測図記載
SD1082	SD4008	３区	O98	8.10	2.85	0.73	黒色粘性シルト	2.5Y 2/1
SZ3003	SZ4003	３区	－	－	－	－	－	－
SD1079	SD4021	３区	N99	8.90	2.20	0.23	実測図記載	実測図記載
SD1080	SD4022	３区	O99	8.30	1.30	0.42	実測図記載	実測図記載
SD1081	SD4023	３区	O99	7.70	1.10	0.62	実測図記載	実測図記載
SZ3005	SZ4004	３区	－	－	－	－	－	－
SD1087	SD4009	３区	P97	5.84	1.12	0.26	実測図記載	実測図記載
SD1085	SD4010	３区	P97	8.08	1.12	0.38	実測図記載	実測図記載
SD1089	SD4011	３区	P97	4.72	0.96	0.35	実測図記載	実測図記載
SD1088	SD4012	３区	P97	6.24	1.12	0.13	実測図記載	実測図記載
SZ3004	SZ4005	３区	－	－	－	－	－	－
SD1104	SD4013	３区	P98	3.60	0.84	0.31	実測図記載	実測図記載
SD1086	SD4014	３区	P98	4.40	1.20	0.33	実測図記載	実測図記載
SD1052	SD4015	３区	P98	4.32	0.72	3.12	実測図記載	実測図記載
SZ3006	SZ4006	３区	－	－	－	－	－	－
SD1091	SD4016	３区	P96	9.60	1.26	0.67	実測図記載	実測図記載
SD1090	SD4017	３区	Q96	5.12	0.76	0.26	実測図記載	実測図記載
－	SD4018	３区	Q96	2.88	0.88	0.46	実測図記載	実測図記載
SD1061	SD4019	３区	R96	6.24	0.66	0.30	実測図記載	実測図記載
SD1092	SD4020	３区	Q96	4.08	0.96	0.24	実測図記載	実測図記載
SD1033	SD1002	２区	H2	6.40	0.40	0.20	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SD1065	SD1022	３区	N98	5.00	0.50	0.25	暗青灰色シルト	5BG3/1
SD1008	SD1018	２区	L99	4.80	0.40	0.15	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SD5122	SD1032	５区	Bb89	4.20	1.10	0.10	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SD5120	SD1037	５区	Bb89	3.60	0.30	0.15	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SD1023,SD1032	SD2001	２区	G1	4.80	－	0.30	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SD1041	SD2003	２区	H1	2.40	0.60	0.20	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SD1042	SD2004	２区	I1	0.56	0.16	0.26	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SD1105	SD2005	３区	O98	3.60	0.28	0.18	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SD1062	SD2007	３区	O98	5.60	0.54	0.37	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SD1095	SD2006	３区	P97	2.60	0.26	0.19	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SD1097	SD2008	３区	Q96	1.60	0.42	0.31	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SD4115	SD2009	４区	R95	2.60	0.26	0.14	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SD4114	SD2010	４区	R96	3.40	0.22	0.12	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SD4112	SD2011	４区	T95	2.00	0.42	0.23	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SD4113	SD2012	４区	U95	3.80	0.42	0.22	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SD4117	SD2013	４区	U96	1.50	0.40	0.23	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SD4118	SD2014	４区	U96	2.80	0.60	0.22	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SD1107	SD3011	３区	O98	1.78	0.42	0.17	暗オリーブ灰色土	2.5GY4/1
SD1103	SD3013	３区	Q97	5.40	0.84	0.38	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SK1029	SK1012	３区	O97	1.60	0.80	0.30	黒褐色土	10YR3/1
SX1020	SK1016	３区	P99	3.30	2.80	0.30	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SX1024	SK1022	３区	Q97	2.25	1.60	0.10	灰色粘性シルト	5Y4/1
SK1066	SK2018	３区	O97	1.72	1.08	0.19	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SP1143	SP1001	２区	H1	0.20	0.20	0.20	黒褐色土	10YR3/1
SP1148	SP1002	２区	I2	0.80	0.80	0.40	黒褐色土	10YR3/1
SP1032	SP1003	２区	J2	0.24	0.24	0.16	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1023	SP1004	２区	K99	0.40	0.40	0.20	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1025	SP1005	２区	K99	0.40	0.40	0.20	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1024	SP1006	２区	K99	0.40	0.40	0.20	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1055	SP1007	２区	K99	0.20	0.20	0.10	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1035	SP1008	２区	K99	0.20	0.20	0.10	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1034	SP1009	２区	K99	0.40	0.40	0.20	褐灰色シルト	10YR4/1
－	SP1010	２区	K1	0.20	0.20	0.10	黒褐色土	10YR3/1
SP1038	SP1011	２区	K1	0.60	0.60	0.30	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1039	SP1012	２区	K1	0.40	0.40	0.20	褐灰色シルト	10YR4/1
SP1018	SP1015	２区	L99	0.20	0.20	0.20	黒色シルト	10YR2/1

旧遺構名	新遺構名	調査区	グリッド	全長	幅	深さ	埋土色調	マンセル値
SP1019	SP1016	２区	L99	0.20	0.20	0.20	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1020	SP1017	２区	L99	0.20	0.20	0.20	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1017	SP1018	２区	L99	0.20	0.20	0.20	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1001	SP1019	２区	L98	0.60	0.60	0.40	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1003	SP1021	２区	L99	0.80	0.80	0.20	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1041	SP1022	２区	L99	0.20	0.20	0.20	褐灰色シルト	10YR4/1
SP3040	SP1027	３区	M98	0.20	0.20	0.20	青黒色シルト	5BG2/1
SP3041	SP1025	３区	M98	0.20	0.20	0.20	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3037	SP1026	３区	M98	0.20	0.20	0.20	オリーブ黒色シルト	5Y3/2
SP3034	SP1023	３区	M98	0.20	0.20	0.20	青黒色シルト	5BG2/1
SP3033	SP1024	３区	M98	0.20	0.20	0.20	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3223	SP1028	３区	M98	0.20	0.20	0.20	暗灰色シルト	N3/0
SP3229	SP1035	３区	M98	0.40	0.40	0.20	暗灰色シルト	N3/0
SP3026	SP1036	３区	M98	0.20	0.20	0.20	オリーブ黒色シルト	7.5Y3/2
SP3228	SP1037	３区	M98	0.20	0.20	0.20	灰色シルト	7.5Y4/1
SP3225	SP1034	３区	M98	0.40	0.40	0.30	灰オリーブ色シルト	5Y4/2
SP3227	SP1038	３区	M98	0.20	0.20	0.20	灰色シルト	7.5Y4/1
SP3226	SP1039	３区	M98	0.40	0.40	0.30	灰色シルト	7.5Y4/1
SP3216	SP1033	３区	M98	0.40	0.40	0.30	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SK1004	SP1030	３区	M98	0.40	0.40	0.30	黒褐色土	10YR3/1
SP1008	SP1029	３区	M98	0.60	0.60	0.30	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1007	SP1031	３区	M99	0.60	0.60	0.30	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1010	SP1032	３区	M99	0.20	0.20	0.10	黒褐色シルト	10YR3/1
SP3029	SP1040	３区	M99	0.40	0.40	0.20	暗青灰色シルト	10BG3/1
SP3022	SP1041	３区	M99	0.20	0.20	0.20	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3025	SP1046	３区	M2	0.20	0.20	0.20	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3044	SP1047	３区	M2	0.20	0.20	0.20	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3215	SP1043	３区	M99	0.20	0.20	0.20	オリーブ黒色シルト	7.5Y3/2
SP3214	SP1044	３区	M99	0.60	0.60	0.40	オリーブ黒色シルト	7.5Y3/2
SP3151	SP1045	３区	M99	0.20	0.20	0.20	オリーブ黒色	7.5Y3/2
SP1004	SP1049	３区	M99	0.60	0.60	0.30	黒褐色シルト	10YR3/1
SP3043	SP1048	３区	M99	0.20	0.20	0.20	暗青灰色シルト	5BG3/1
SK1009	SP1051	３区	M99	0.60	0.60	0.40	黒褐色土	10YR3/1
SP1056	SP1050	３区	M99	0.40	0.40	0.20	黒褐色シルト	10YR3/1
SP3053	SP1052	３区	N97	0.40	0.40	0.20	青黒色シルト	5BG2/1
SP3055	SP1053	３区	N97	0.20	0.20	0.20	暗青灰色シルト	5BG4/1
SP3050	SP1058	３区	N98	0.40	0.40	0.20	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3047	SP1057	３区	N98	0.40	0.40	0.20	青黒色シルト	5BG2/1
SP3048	SP1056	３区	N98	0.40	0.40	0.20	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3224	SP1054	３区	N98	0.20	0.20	0.10	暗灰色シルト	N3/0
SP3221	SP1059	３区	N98	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3049	SP1055	３区	N98	0.40	0.40	0.20	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3290	SP1060	３区	N98	0.40	0.40	0.20	暗青灰色シルト	5BG4/1
SP3326	SP1061	３区	N98	0.20	0.20	0.10	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3230	SP1064	３区	O97	0.40	0.40	0.30	暗灰色シルト	N3/0
－	SP1066	３区	O97	0.20	0.20	0.10	褐灰色土	10YR4/1
SP3085	SP1065	３区	O97	0.40	0.40	0.20	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3086	SP1068	３区	O97	0.40	0.40	0.20	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3087	SP1067	３区	O97	0.20	0.20	0.10	オリーブ黒色シルト	5Y3/2
－	SP1069	３区	O97	0.60	0.40	0.20	褐灰色土	10YR4/1
SP3096	SP1070	３区	O97	0.20	0.20	0.10	オリーブ灰色シルト	5GY2/1
SP3091	SP1071	３区	O97	0.40	0.40	0.20	暗青灰色シルト	5BG4/1
SP3104	SP1062	３区	O97	0.40	0.40	0.20	青灰色シルト	5PB4/1
SP3080	SP1063	３区	O97	0.24	0.22	0.11	暗オリーブ灰色シルト	5GY4/1
SP3081	SP1072	３区	O98	0.40	0.40	0.20	暗青灰色シルト	10BG3/1
SP3082	SP1074	３区	O98	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	5GY4/1
SP3039	SP1076	３区	O98	0.20	0.20	0.20	青黒色シルト	5BG2/1
SP3045	SP1077	３区	O98	0.60	0.40	0.30	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3042	SP1078	３区	O98	0.60	0.40	0.30	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3024	SP1079	３区	O98	0.40	0.40	0.20	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3235	SP1082	３区	O98	0.40	0.40	0.30	暗青灰色シルト	5BG4/1
SP3065	SP1073	３区	O98	0.40	0.40	0.30	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3098	SP1075	３区	O98	0.40	0.40	0.30	オリーブ黒色シルト	7.5Y3/1
－	SP1081	３区	O98	0.20	0.20	0.10	褐灰色土	10YR4/1
SP3180	SP1080	３区	O98	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3193	SP1087	３区	O98	0.16	0.16	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3068	SP1088	３区	O98	0.40	0.40	0.20	暗青灰色	10BG3/1
SP3035	SP1085	３区	O98	0.20	0.20	0.20	オリーブ黒色シルト	5Y3/2
SP3071	SP1083	３区	O98	0.20	0.20	0.10	暗青灰色シルト	10BG4/1
SP3074	SP1084	３区	O98	0.40	0.40	0.30	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY4/1

旧遺構名	新遺構名	調査区	グリッド	全長	幅	深さ	埋土色調	マンセル値
SP3063	SP1094	3区	01	0.20	0.20	0.10	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3174	SP1090	3区	098	0.20	0.20	0.20	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3206	SP1091	3区	098	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3181	SP1089	3区	098	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3186	SP1095	3区	098	0.40	0.40	0.30	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3062	SP1092	3区	098	0.40	0.40	0.30	暗青灰色シルト	5BG4/1
SP3242	SP1093	3区	098	0.20	0.20	0.20	青黒色シルト	5BG1.7/1
-	SP1097	3区	01	0.80	0.40	0.20	褐灰色土	10YR4/1
SP3191	SP1096	3区	098	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3169	SP1098	3区	098	0.60	0.60	0.30	青黒色シルト	5PB2/1
SP3210	SP1102	3区	098	0.20	0.20	0.10	オリーブ黒色シルト	7.5Y3/2
SP3170	SP1099	3区	098	0.60	0.60	0.40	オリーブ灰色シルト	2.5GY6/1
SP3203	SP1101	3区	098	0.40	0.40	0.30	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3212	SP1103	3区	098	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3200	SP1100	3区	098	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3167	SP1104	3区	099	0.20	0.20	0.10	暗青灰色シルト	5PB3/1
SP3166	SP1105	3区	099	0.60	0.60	0.40	青黒色シルト	5PB2/1
SP1042	SP1142	3区	M1	0.80	0.80	0.40	黒褐色シルト	10YR3/1
SP3158	SP1144	3区	N1	0.40	0.40	0.10	青灰色シルト	5BG5/1
SP3334	SP1107	3区	099	0.40	0.40	0.20	暗青灰色シルト	5BG4/1
SP3116	SP1110	3区	099	0.20	0.20	0.10	青黒色シルト	5PB2/1
SP3108	SP1114	3区	P97	0.20	0.20	0.10	青黒色シルト	5PB2/1
SP3107	SP1115	3区	P97	0.20	0.20	0.10	青黒色シルト	5PB2/1
-	SP1116	3区	P99	0.16	0.16	0.20	オリーブ黒色シルト	7.5Y3/1
SP3113	SP1117	3区	P97	0.20	0.20	0.10	暗青灰色シルト	5BG4/1
SP3112	SP1118	3区	P97	0.20	0.20	0.10	暗青灰色シルト	5BG4/1
-	SP1126	3区	P99	0.24	0.24	0.16	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3114	SP1127	3区	P97	0.20	0.20	0.10	青黒色シルト	5BG2/1
SP3106	SP1119	3区	P97	0.20	0.20	0.10	青黒色シルト	5PB2/1
SP3101	SP1121	3区	P97	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	5GY4/1
SP3100	SP1122	3区	P97	0.40	0.40	0.20	オリーブ黒色シルト	7.5Y3/1
SP3099	SP1123	3区	P97	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ褐色シルト	2.5Y3/3
SP3156	SP1128	3区	P98	0.20	0.20	0.10	青黒色シルト	5BG2/1
SP3094	SP1124	3区	P97	0.20	0.20	0.10	暗灰色シルト	N3/0
SP3093	SP1125	3区	P97	0.40	0.40	0.20	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3234	SP1129	3区	P97	0.80	0.60	0.40	暗灰色シルト	N3/0
SP3057	SP1130	3区	P97	0.20	0.20	0.10	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3155	SP1132	3区	P98	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3157	SP1131	3区	P97	0.40	0.40	0.20	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3173	SP1133	3区	P98	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3195	SP1134	3区	P98	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3188	SP1135	3区	P98	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3159	SP1136	3区	P98	0.60	0.60	0.30	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3160	SP1137	3区	P98	0.40	0.40	0.20	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3205	SP1138	3区	P98	0.40	0.40	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3152	SP1139	3区	P98	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3154	SP1140	3区	P98	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3198	SP1141	3区	P98	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3197	SP1142	3区	P98	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3165	SP1106	3区	01	0.60	0.60	0.30	青灰色シルト	5PB5/1
SP3299	SP1113	3区	01	0.40	0.40	0.20	オリーブ黒色シルト	5Y3/2
SP3300	SP1145	3区	01	0.40	0.40	0.20	オリーブ黒色シルト	5Y3/2
SP3296	SP1108	3区	01	0.20	0.20	0.10	オリーブ黒色シルト	5Y3/2
SP3121	SP1109	3区	01	0.80	0.80	0.40	青黒色シルト	5PB2/1
SP3146	SP1111	3区	01	0.20	0.20	0.10	暗青灰色シルト	5PB3/1
SP3138	SP1112	3区	01	0.24	0.24	0.32	暗オリーブ灰色シルト	5GY3/1
SP3213	SP1146	3区	01	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3306	SP1147	3区	01	0.20	0.20	0.10	黒褐色シルト	2.5Y3/1
SP3307	SP1148	3区	01	0.20	0.20	0.10	黒褐色シルトと 灰白色シルトの斑	2.5Y3/2, 5GY8/1
SP3308	SP1149	3区	01	0.20	0.20	0.10	黒褐色シルト	2.5Y3/2
SP3309	SP1150	3区	01	0.20	0.20	0.10	黒褐色シルト	2.5Y3/2
SP3310	SP1151	3区	01	0.20	0.20	0.10	黒褐色シルト	2.5Y3/2
SP3311	SP1152	3区	01	0.20	0.20	0.10	黒褐色シルト	2.5Y3/2
SP3316	SP1153	3区	01	0.20	0.20	0.10	黒褐色シルト	2.5Y3/2
SP3302	SP1154	3区	02	0.20	0.20	0.10	黒褐色シルト	2.5Y3/1
SP3303	SP1155	3区	02	0.20	0.20	0.10	黒褐色シルト	2.5Y3/1
SP3304	SP1156	3区	02	0.20	0.20	0.10	黒褐色シルト	2.5Y3/1
SP3305	SP1157	3区	02	0.40	0.20	0.20	黒褐色シルト	2.5Y3/1
SP3312	SP1158	3区	02	0.20	0.20	0.10	黒褐色シルト	2.5Y3/2

旧遺構名	新遺構名	調査区	グリッド	全長	幅	深さ	埋土色調	マンセル値
SP3313	SP1159	３区	O2	0.20	0.20	0.10	黒褐色シルト	2.5Y3/2
SP3314	SP1160	３区	O2	0.20	0.20	0.10	黒褐色シルト	2.5Y3/2
SP3315	SP1161	３区	O2	0.20	0.20	0.10	黒褐色シルト	2.5Y3/2
SP3318	SP1162	３区	P2	0.20	0.20	0.10	オリーブ黒色シルト	7.5Y3/1
SP3320	SP1163	３区	P2	0.20	0.20	0.10	オリーブ黒色シルト	5GY2/1
SP3123	SP1164	３区	P97	0.20	0.20	0.10	青黒色シルト	5BG2/1
SP3171	SP1165	３区	P98	0.20	0.20	0.10	オリーブ灰色シルト	10Y6/2
SP3196	SP1166	３区	P98	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3153	SP1167	３区	Q96	0.20	0.20	0.10	暗紫灰色シルト	5P3/1
SP3133	SP1168	３区	Q96	0.20	0.20	0.10	青黒色シルト	5PB2/1
SP3134	SP1169	３区	Q96	0.20	0.20	0.10	暗青灰色シルト	5PB3/1
SP3141	SP1170	３区	Q96	0.40	0.40	0.30	暗紫灰色シルト	5P4/1
SP3125	SP1171	３区	Q96	0.20	0.20	0.10	オリーブ褐色シルト	2.5Y4/6
SP3023	SP1172	３区	Q96	0.80	0.60	0.30	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3135	SP1173	３区	Q96	0.20	0.20	0.10	暗青灰色シルト	5PB4/1
SP3140	SP1174	３区	Q96	0.40	0.20	0.10	暗青灰色シルト	5BG4/1
SP3137	SP1175	３区	Q97	0.40	0.20	0.10	暗青灰色シルト	5BG4/1
SP3128	SP1176	３区	Q97	0.20	0.20	0.10	青黒色シルト	5PB2/1
SP3129	SP1177	３区	Q97	0.20	0.20	0.10	暗紫灰色シルト	5P4/1
SP3145	SP1179	３区	Q97	0.60	0.40	0.30	青黒色シルト	5PB2/1
SP3139	SP1178	３区	Q97	0.20	0.20	0.10	暗青灰色シルト	5PB3/1
SP3136	SP1181	３区	Q97	0.60	0.40	0.20	暗青灰色シルト	5PB3/1
SP3147	SP1182	３区	Q97	0.20	0.20	0.10	青黒色シルト	5BG2/1
SP3182	SP1183	３区	Q97	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3183	SP1184	３区	Q97	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP3176	SP1186	３区	Q98	0.40	0.40	0.20	灰色シルト	N5/0
SP3178	SP1187	３区	Q98	0.40	0.40	0.20	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP4354	SP1188	４区	R95	0.20	0.20	0.10	オリーブ灰	5GY5/1
SP4355	SP1189	４区	R95	0.20	0.20	0.10	オリーブ灰	5GY5/1
SP4356	SP1190	４区	R95	0.20	0.20	0.10	オリーブ灰	5GY5/1
SP4339	SP1198	４区	R95	0.20	0.20	0.10	オリーブ灰	5GY5/1
SP4359	SP1199	４区	R95	0.20	0.20	0.10	オリーブ灰	5GY5/1
SP4344	SP1191	４区	R95	0.20	0.20	0.10	オリーブ灰	5GY5/1
SP4345	SP1192	４区	R95	0.20	0.20	0.10	オリーブ灰	5GY5/1
SP4346	SP1193	４区	R95	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰	5GY4/1
SP4347	SP1194	４区	R95	0.40	0.40	0.10	暗オリーブ灰	5GY4/1
SP4343	SP1195	４区	R95	0.20	0.20	0.10	オリーブ灰	5GY5/1
SP4348	SP1196	４区	R95	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰	5GY4/1
SP4342	SP1197	４区	R95	0.20	0.20	0.10	オリーブ灰	5GY5/1
SP4341	SP1200	４区	R95	0.40	0.20	0.20	暗オリーブ灰	5GY4/1
SP4349	SP1201	４区	R95	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰	5GY4/1
SP4338	SP1202	４区	R96	0.20	0.20	0.10	オリーブ灰	5GY5/1
SP4358	SP1204	４区	R96	0.20	0.20	0.10	オリーブ灰	5GY5/1
SP4340	SP1205	４区	R96	0.40	0.40	0.20	オリーブ灰	5GY5/1
SP4357	SP1203	４区	R96	0.40	0.20	0.20	オリーブ灰	5GY5/1
SP4337	SP1206	４区	R96	0.40	0.40	0.10	オリーブ灰	5GY5/1
SP4352	SP1207	４区	S95	0.40	0.40	0.20	オリーブ灰	5GY5/1
SP4361	SP1208	４区	S95	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰	5GY4/1
SP4362	SP1209	４区	S95	0.40	0.40	0.20	暗オリーブ灰	5GY4/1
SP4351	SP1210	４区	S95	0.20	0.20	0.10	オリーブ灰	5GY5/1
SP4350	SP1211	４区	S95	0.40	0.40	0.20	オリーブ灰	5GY5/1
SP4360	SP1212	４区	S95	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰	5GY4/1
SP3185	SP1213	３区	R98	0.20	0.20	0.10	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY3/1
SP1145	SP2001	２区	H1	0.52	0.46	0.17	黒褐色土	10YR3/1
SP1146	SP2002	２区	H1	0.32	0.30	0.19	褐灰色土	10YR4/1
SP1144	SP2003	２区	H1	0.28	0.24	0.14	黒褐色土	10YR3/1
SP1147	SP2004	２区	H1	0.34	0.26	0.25	褐灰色土	10YR4/1
SP1210	SP2005	２区	H1	0.72	0.56	0.43	黒褐色土	10YR3/1
SP1211	SP2006	２区	H1	0.38	0.28	0.21	褐灰色土	10YR4/1
SP1135	SP2007	２区	H1	0.30	0.26	0.24	褐灰色土	10YR4/1
SP1134	SP2008	２区	H1	0.52	0.54	0.46	褐灰色土	10YR4/1
SP1194	SP2009	２区	H1	0.32	0.28	0.25	褐灰色土	10YR4/1
SP1310	SP2010	２区	H1	0.28	0.24	0.17	黒褐色土	10YR3/1
SP1136	SP2011	２区	H1	0.50	0.48	0.38	褐灰色土	10YR4/1
SP1138	SP2012	２区	H1	0.28	0.24	0.16	褐灰色土	10YR4/1
SP1140	SP2013	２区	H1	0.36	0.32	0.28	褐灰色土	10YR4/1
SP1137	SP2014	２区	H1	－	0.30	0.21	黒褐色土	10YR3/1
SP1195	SP2015	２区	H1	0.36	0.34	0.25	褐灰色土	10YR4/1
SP1139	SP2016	２区	H1	0.32	0.28	0.21	黒褐色土	10YR3/1
SP1303	SP2017	２区	H1	1.24	－	0.34	黒褐色土	10YR3/1

旧遺構名	新遺構名	調査区	グリッド	全長	幅	深さ	埋土色調	マンセル値
SP1198	SP2018	2区	I99	0.54	0.50	0.32	褐灰色土	10YR4/1
SP1213	SP2019	2区	I99	0.32	0.30	0.28	黒褐色土	10YR3/1
SP1291	SP2020	2区	I99	0.30	0.28	0.26	褐灰色土	10YR4/1
SP1290	SP2021	2区	I99	0.34	0.32	0.27	褐灰色土	10YR4/1
-	SP2033	2区	I99	0.44	0.42	0.36	黒褐色土	10YR3/1
SP1131	SP2022	2区	I99	0.28	0.24	0.19	黒褐色土	10YR3/1
SP1247	SP2023	2区	I99	0.30	0.28	0.22	黒褐色土	10YR3/1
SP1248	SP2024	2区	I99	0.28	0.26	0.18	黒褐色土	10YR3/1
SP1197	SP2026	2区	I1	0.36	0.32	0.21	黒褐色土	10YR3/1
SP1142	SP2027	2区	I1	0.60	0.30	0.28	黒褐色土	10YR3/1
SP1141	SP2028	2区	I1	0.34	0.32	0.24	黒褐色土	10YR3/1
SP1286	SP2025	2区	I1	0.32	0.28	0.25	黒褐色土	10YR3/1
SP1284	SP2029	2区	I1	0.42	0.38	0.32	黒褐色土	10YR3/1
SP1133	SP2030	2区	I1	0.34	0.32	0.30	黒褐色土	10YR3/1
SP1305	SP2031	2区	I1	0.38	0.34	0.29	黒褐色土	10YR3/1
SP1306	SP2032	2区	I1	0.20	0.20	0.18	黒褐色土	10YR3/1
SP1307	SP2034	2区	I1	0.22	0.20	0.12	黒褐色土	10YR3/1
SP1308	SP2035	2区	I1	0.20	0.20	0.10	黒褐色土	10YR3/1
SP1311	SP2036	2区	I1	0.40	-	0,25	褐灰色土	10YR4/1
SP1298	SP2037	2区	I1	0.26	0.24	0.11	黒褐色土	10YR3/1
SP1153	SP2043	2区	I1	0.46	0.42	0.35	黒褐色土	10YR3/1
SP1156	SP2038	2区	I2	0.32	0.30	0.15	褐灰色土	10YR4/1
SP1157	SP2039	2区	I2	0.30	0.28	0.13	黒褐色土	10YR3/1
SP1155	SP2040	2区	I2	0.34	0.32	0.17	黒褐色土	10YR3/1
SP1158	SP2041	2区	I2	0.28	0.26	0.15	黒褐色土	10YR3/1
SP1154	SP2042	2区	I2	0.34	0.30	0.16	黒褐色土	10YR3/1
SP1282	SP2044	2区	J99	0.70	0.48	0.42	黒褐色土	10YR3/1
SP1262	SP2050	2区	J99	0.54	0.50	0.46	黒褐色土	10YR3/1
SP1263	SP2051	2区	J99	0.88	0.82	0.32	黒褐色土	10YR3/1
SP1266	SP2045	2区	J99	0.52	0.41	0.67	褐灰色土	10YR4/1
SP1171	SP2046	2区	J99	0.25	0.24	0.46	黒褐色土	10YR3/1
SP1172	SP2074	2区	J99	0.43	0.36	0.43	褐灰色土	10YR4/1
SP1170	SP2047	2区	J99	0.22	0.21	0.32	黒褐色土	10YR3/1
SP1327	SP2048	2区	J99	0.13	0.12	0.21	褐灰色土	10YR4/1
SP1169	SP2049	2区	J99	0.90	0.75	0.86	黒褐色土	10YR3/1
SP1278	SP2052	2区	J99	0.39	0.32	0.54	黒褐色土	10YR3/1
SP1277	SP2053	2区	J99	0.91	0.72	0.56	褐灰色土	10YR4/1
SP1313	SP2055	2区	J1	0.28	0.26	0.12	黒褐色土	10YR3/1
SP1320	SP2056	2区	J1	0.36	0.34	0.27	黒褐色土	10YR3/1
SP1315	SP2057	2区	J1	0.30	0.26	0.12	黒褐色土	10YR3/1
SP1314	SP2058	2区	J1	0.24	0.22	0.11	黒褐色土	10YR3/1
SP1316	SP2059	2区	J1	0.20	0.20	0.10	黒褐色土	10YR3/1
SP1317	SP2060	2区	J1	-	0.20	0.11	褐灰色土	10YR4/1
SP1318	SP2061	2区	J1	0.24	0.22	0.12	黒褐色土	10YR3/1
SP1165	SP2062	2区	J1	-	0.86	0.46	黒褐色土	10YR3/1
SP1264	SP2054	2区	J1	0.71	0.59	0.65	褐灰色土	10YR4/1
SP1312	SP2063	2区	J1	0.34	0.32	0.23	褐灰色土	10YR4/1
SP1209	SP2064	2区	J2	0.28	0.26	0.19	黒褐色土	10YR3/1
SP1236	SP2065	2区	K99	0.51	0.42	0.43	黒褐色土	10YR3/1
SP1202	SP2066	2区	K99	1.40	0.83	0.76	褐灰色土	10YR4/1
SP1173	SP2067	2区	K99	0.21	0.21	0.36	黒褐色土	10YR3/1
SP1329	SP2068	2区	K99	0.21	0.13	0.25	黒褐色土	10YR3/1
SP1328	SP2069	2区	K99	0.22	0.13	0.24	褐灰色土	10YR4/1
SP1330	SP2070	2区	K99	0.63	0.30	0.27	黒褐色土	10YR3/1
SP1176	SP2071	2区	K99	0.42	0.40	0.44	黒褐色土	10YR4/1
SP1174	SP2072	2区	K99	0.61	0.35	0.56	褐灰色土	10YR4/1
SP1175	SP2073	2区	K99	0.24	0.22	0.33	黒褐色土	10YR3/1
SP1244	SP2075	2区	K99	0.24	0.23	0.29	褐灰色土	10YR4/1
SP1243	SP2076	2区	K99	0.40	0.37	0.51	黒褐色土	10YR3/1
SP1245	SP2077	2区	K99	0.14	0.14	0.21	褐灰色土	10YR4/1
SP1119	SP2078	2区	K99	0.37	0.31	0.36	褐灰色シルト	10YR4/1
SP1347	SP2080	2区	K99	0.12	0.12	0.18	褐灰色土	10YR4/1
SP1348	SP2081	2区	K99	0.19	0.18	0.22	褐灰色土	10YR4/1
SP1295	SP2082	2区	K99	0.23	0.21	0.33	褐灰色土	10YR4/1
SP1246	SP2083	2区	K99	0.44	0.38	0.45	褐灰色土	10YR4/1
SP1334	SP2079	2区	K99	0.21	0.19	0.21	褐灰色土	10YR4/1
SP1335	SP2084	2区	K99	0.21	0.21	0.23	褐灰色土	10YR4/1
SP1240	SP2085	2区	K99	0.18	0.17	0.27	黒褐色土	10YR3/1
SP1222	SP2086	2区	K99	0.18	0.16	0.21	褐灰色土	10YR4/1
SP1241	SP2087	2区	K99	0.17	0.16	0.28	黒褐色土	10YR3/1

旧遺構名	新遺構名	調査区	グリッド	全長	幅	深さ	埋土色調	マンセル値
-	SP2088	２区	K99	0.41	0.40	0.51	黒褐色土	10YR3/1
SP1179	SP2089	２区	K99	0.29	0.28	0.34	黒褐色土	10YR3/1
SP1177	SP2090	２区	K99	0.40	0.30	0.47	黒褐色土	10YR3/1
SP1223	SP2091	２区	K99	0.24	0.22	0.32	褐灰色土	10YR4/1
SP1331	SP2092	２区	K99	0.72	0.33	0.35	黒褐色土	10YR3/1
SP1332	SP2095	２区	K99	0.16	0.14	0.18	黒褐色土	10YR3/1
SP1180	SP2093	２区	K99	0.31	0.23	0.38	褐灰色土	10YR4/1
SP1181	SP2094	２区	K99	0.21	0.21	0.34	黒褐色土	10YR3/1
SP1293	SP2096	２区	K99	0.67	0.48	0.54	黒褐色土	10YR3/1
SP1219	SP2098	２区	K99	0.36	0.30	0.24	黒褐色土	10YR3/1
SP1229	SP2097	２区	K99	0.31	0.21	0.34	黒褐色土	10YR3/1
SP1230	SP2101	２区	K99	0.31	0.21	0.34	黒褐色土	10YR3/1
SP1227	SP2099	２区	K99	0.21	0.21	0.24	黒褐色土	10YR3/1
SP1226	SP2100	２区	K99	0.23	0.22	0.19	黒褐色土	10YR3/1
SP1206	SP2106	２区	K99	0.52	0.51	0.65	黒褐色土	10YR3/1
SP1234	SP2107	２区	K99	0.25	0.25	0.28	黒褐色土	10YR3/1
SP1188	SP2104	２区	K99	0.61	0.60	0.76	黒褐色土	10YR3/1
SP1283	SP2102	２区	K99	0.42	0.37	0.48	黒褐色土	10YR3/1
SP1190	SP2103	２区	K99	0.62	0.57	0.48	黒褐色土	10YR3/1
SP1076	SP2108	２区	K99	0.31	0.28	0.38	褐灰色シルト	10YR4/1
SP1077	SP2105	２区	K99	0.21	0.20	0.22	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1092	SP2109	２区	K1	-	0.72	0.66	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1218	SP2110	２区	K1	0.39	0.34	0.43	褐灰色土	10YR4/1
SP1217	SP2111	２区	K1	0.49	-	0.31	黒褐色土	10YR3/1
SP1324	SP2112	２区	K1	0.23	0.21	0.28	褐灰色土	10YR4/1
SP1268	SP2114	２区	K1	-	-	0.43	黒褐色土	10YR3/1
SP1351	SP2113	２区	K1	0.96	-	0.54	黒褐色土	10YR3/1
SP1352	SP2115	２区	K1	0.61	-	0.56	黒褐色土	10YR3/1
SP1325	SP2116	２区	K1	-	-	0.12	褐灰色土	10YR4/1
SP1326	SP2117	２区	K1	-	-	0.11	黒褐色土	10YR3/1
SP1338	SP2118	２区	K1	0.21	0.21	0.24	黒褐色土	10YR3/1
SP1201	SP2119	２区	K1	0.29	0.21	0.31	褐灰色土	10YR4/1
SP1085	SP2120	２区	K1	0.34	0.32	0.39	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1079	SP2125	２区	K1	0.34	0.32	0.18	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1081	SP2121	２区	K1	0.44	0.42	0.39	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1084	SP2122	２区	K1	0.21	0.20	0.27	黒色シルト	10YR2/1
SP1083	SP2123	２区	K1	0.23	0.22	0.34	黒色シルト	10YR2/1
SP1082	SP2124	２区	K1	0.14	0.13	0.11	褐灰色シルト	10YR4/1
SP1086	SP2126	２区	K1	0.18	0.17	0.25	黒色シルト	10YR2/1
SP1090	SP2137	２区	K1	0.42	0.40	0.32	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1108	SP2136	２区	K1	-	0.60	0.40	黒褐色土	5YR2/1
SP1087	SP2138	２区	K1	0.26	0.24	0.14	黒色シルト	10YR2/1
SP1272	SP2139	２区	K1	0.24	0.22	0.10	褐灰色土	10YR4/1
SP1273	SP2140	２区	K1	0.24	0.22	0.10	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1342	SP2131	２区	L99	0.18	0.16	0,19	褐灰色土	10YR4/1
SP1224	SP2132	２区	L99	0.33	0.31	0.41	黒褐色土	10YR3/1
SP1237	SP2127	２区	L99	0.22	0.20	0.23	黒褐色土	10YR3/1
SP1207	SP2128	２区	L99	0.49	0.40	0.48	黒褐色土	10YR3/1
SP1340	SP2130	２区	L99	0.20	0.20	0.20	黒褐色土	10YR3/1
SP1341	SP2129	２区	L99	0.21	0.20	0.21	黒褐色土	10YR3/1
SP1075	SP2133	２区	L99	0.32	0.31	0.41	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1344	SP2179	２区	L99	0.26	0.24	0.13	黒褐色土	10YR3/1
SP1221	SP2183	２区	L99	0.36	0.32	0.27	褐灰色土	10YR4/1
SP1069	SP2134	２区	L1	0.22	0.21	0.27	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1060	SP2141	２区	L1	0.36	0.32	0.22	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1057	SP2180	２区	L1	0.78	0.54	0.29	褐灰色シルト	10YR4/1
SP1058	SP2181	２区	L1	0.24	0.22	0.18	褐灰色シルト	10YR4/1
SP1059	SP2182	２区	L1	0.22	0.20	0.11	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1074	SP2135	２区	L1	0.58	0.55	0.47	黒褐色シルト	10YR3/1
SP3254	SP2142	３区	M98	0.42	0.42	0.18	暗青灰色シルト	5PB4/1
SP3253	SP2146	３区	M98	0.36	0.30	0.21	暗オリーブ灰色シルト	5GY4/1
SP3255	SP2147	３区	M98	0.24	0.24	0.14	暗青灰色シルトと 明青灰色シルトの斑	5BG3.1, 10BG7/1
SP1006	SP2143	２区	M98	0.18	0.18	0.11	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1005	SP2145	２区	M98	0.42	0.38	0.26	黒褐色シルト	10YR3/1
SP1345	SP2184	２区	M99	0.24	0.22	0.11	黒褐色土	10YR3/1
SP1192	SP2185	２区	M99	0.34	0.32	0.23	褐灰色土	10YR4/1
SP1191	SP2186	２区	M99	0.24	0.22	0.13	褐灰色土	10YR4/1
SP1066	SP2187	２区	M99	0.54	0.36	0.33	黒色シルト	10YR2/1
SP1068	SP2188	２区	M1	0.76	0.70	0.46	褐灰色シルト	10YR4/1

旧遺構名	新遺構名	調査区	グリッド	全長	幅	深さ	埋土色調	マンセル値
SP1220	SP2189	２区	M1	0.22	0.20	0.18	黒褐色土	10YR3/1
SK1016	SP2190	２区	M1	0.48	0.44	0.32	黒褐色土	10YR3/1
SP3248	SP2148	３区	N98	0.22	0.22	0.12	灰色シルト	5Y4/1
SP3247	SP2149	３区	N98	0.26	0.24	0.13	暗青灰色シルト	5BG4/1
SP3246	SP2150	３区	N98	0.36	0.28	0.14	暗青灰色シルト	5BG4/1
SP3245	SP2151	３区	N98	0.24	0.24	0.16	暗灰色シルト	N3/0
SP3256	SP2152	３区	N98	0.36	0.34	0.23	暗青灰色シルト	5BG4/1
SP3244	SP2153	３区	N98	0.30	0.28	0.11	青黒色シルト	5BG2/1
SP3243	SP2154	３区	N98	0.22	0.22	0.09	暗オリーブ灰色シルト	5GY4/1
SP3273	SP2155	３区	O97	0.22	0.22	0.11	暗青灰色シルト	5BG4/1
SP3262	SP2156	３区	N98	0.24	0.22	0.17	青灰色シルト	5BG5/1
SP3261	SP2157	３区	N98	0.24	0.22	0.16	暗青灰色シルト	5BG4/1
SP3288	SP2158	３区	O98	0.26	0.22	0.14	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3241	SP2161	３区	O98	0.26	0.22	0.16	暗オリーブ灰色シルト	2.5GY4/1
SP3289	SP2159	３区	O98	0.36	0.32	0.23	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3252	SP2162	３区	O98	0.38	0.34	0.21	灰色シルト	10Y4/1
SP3266	SP2163	３区	O98	0.42	0.38	0.29	暗青灰色シルト	5BG4/1
SP3267	SP2164	３区	O98	0.34	0.32	0.24	暗青灰色シルト	５BG4/1
SP3268	SP2165	３区	O98	0.30	0.28	0.21	暗青灰色シルト	５BG4/1
SP3278	SP2166	３区	P96	0.58	0.54	0.34	暗オリーブ褐色シルト	2.5Y3/3
SP3279	SP2167	３区	P96	0.36	0.34	0.28	暗オリーブ褐色シルト	2.5Y3/3
SP3260	SP2168	３区	P97	0.30	0.28	0.18	暗青灰色シルト	5BG4/1
SP3272	SP2171	３区	P97	0.76	0.74	0.49	暗青灰色シルト	5BG4/1
SP3258	SP2169	３区	P97	0.22	0.20	0.10	青灰色シルト	5BG5/1
SP3259	SP2170	３区	P97	0.24	0.22	0.12	暗青灰色シルト	5BG4/1
SP3236	SP2172	３区	P98	0.28	0.24	0.18	青黒色シルト	5BG2/1
SP3330	SP2173	３区	P98	0.34	0.32	0.24	青黒色シルト	10BG2/1
SP3257	SP2174	３区	P98	0.28	0.26	0.19	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3238	SP2175	３区	P98	0.30	0.26	0.17	暗青灰色シルト	5BG3/1
SP3240	SP2176	３区	P98	0.24	0.22	0.11	暗オリーブ灰色シルト	5GY3/1
SP3239	SP2177	３区	P98	0.26	0.22	0.13	暗オリーブ灰色シルト	5GY3/1
SP3277	SP2178	３区	P98	0.18	0.18	0.10	青黒色シルト	10BG2/1
SP4374	SP2191	４区	R95	0.44	0.42	0.32	暗オリーブ灰	5GY4/1
SP4375	SP2192	４区	R95	0.36	0.34	0.21	黒色	N2/
SP4376	SP2193	４区	R95	0.46	0.42	0.24	オリーブ黒	5GY2/1
SP4416	SP2194	４区	R95	0.28	0.24	0.14	黒色	N2/
-	SP2195	４区	R96	0.33	0.32	0.27	オリーブ黒色粘性シルト	5Y3/1
SP4411	SP2204	４区	T99	0.58	0.54	0.31	黒色	N2/
SP4423	SP2196	４区	U95	0.52	0.50	0,33	黒	N2/
SP4424	SP2197	４区	U95	0.42	0.40	0.31	オリーブ黒	7.5Y2/2
SP4425	SP2198	４区	U95	0.38	0.36	0.29	黒	N2/
SP4409	SP2199	４区	U95	0.56	0.42	0.38	黒色	N2/
SP4418	SP2200	４区	U96	0.44	0.38	0.28	黒褐	2.5Y3/1
SP4417	SP2201	４区	U96	0.50	0.44	0.31	黒褐	2.5Y3/1
SP4412	SP2202	４区	U97	0.80	0.64	0.47	オリーブ黒	5GY2/1
SP4414	SP2203	４区	U97	0.52	0.56	0.41	暗オリーブ灰	2.5GY3/1
SP4413	SP2205	４区	V97	0.38	0.34	0.27	オリーブ黒	5GY2/1
SP4415	SP2206	４区	V97	0.46	0.42	0.38	黒色	10Y2/1
SP1258	SP3001	２区	I1	0.66	0.62	0.47	黒褐色土	10YR3/1
SP1009	SP2144	２区	M99	0.42	0.40	0.18	黒褐色シルト	10YR3/1
SD1035	SR1006	２区	J2	1.60	0.40	0.10	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SR1011	SR1013	３区	N1	11.40	-	0.30	オリーブ黒色粘性シルト	5Y3/1
SR1030	SR1014	３区	O99	1.60	0.40	0.20	オリーブ黒色粘性シルト	5Y3/1
SD1073	SR1020	３区	P98	1.00	0.20	0.10	灰色砂質土	5Y6/1
SR1025	SR1023	３区	Q97	4.80	1.20	0.40	オリーブ黒色粘性シルト	5Y3/1
SD1063	SR1027	３区	Q99	2.40	0.40	0.25	灰色砂質土	5Y6/1
SD1043	SR2001	２区	I1	5.40	4.20	0.36	オリーブ黒色粘性シルト	5Y2/2
SR1034	SR2002	３区	P99	3.60	0.86	0.31	オリーブ黒色粘性シルト	5Y3/1

第 10 表　遺物観察表（土器）

挿図番号	図版番号	調査区	出土場所	種類	器種	残存部位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調
26-1	83	2区	SA1001-P1	山茶碗	碗	全体	60%	(16.9)	6.1	6.9	内：N 7/0 灰白色 外：N 6/0　灰色
26-2	83	2区	SA1001-P2	山茶碗	小碗	全体	70%	(9.2)	4.8	3.1	N 7/0　灰白色
26-3	83	2区	SA1001-P2	須恵器	坏蓋	天井部	20%	-	-	(1.4)	内：N 7/0　灰白色 外：7.5Y 7/1　灰白色
26-6	83	3区	SA1004-P3	山茶碗	小碗	全体	100%	10.3	5.5	3.2	N 7/0　灰白色
29-2	-	3区	SB1002-P11	山茶碗	鉢	底部～高台部	20%	-	(14.0)	(2.8)	N 8/0　灰白色
35-1	-	2区	SE1003	山茶碗	碗	底部～高台部	20%	-	(8.2)	(1.8)	5Y 7/1　灰白色
35-2	-	2区	SE1005	山茶碗	碗		30%	-	(8.2)	(3.6)	7.5Y 7/1　灰白色
35-3	-	2区	SE1005	山茶碗	碗	口縁部～体部	10%	(16.4)	-	(4.8)	内：N 5/0　灰色 外：2.5YR 6/1　黄灰色
35-4	-	2区	SE1005	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	8.5	(2.2)	内：2.5Y 8/2　灰白色 外：10YR 8/1　灰白色
35-5	-	2区	SE1005	山茶碗	碗	底部～高台部	50%	-	(8.4)	(2.4)	5Y 7/1　灰白色
37-1	84	2区	SE1008	弥生土器	壺	体部～底部	90%	(14.8)	3.2	(7.6)	10YR 5/2　灰黄褐色
37-2	84	2区	SE1012	山茶碗	碗	全体	80%	16.5	8.0	5.5	10YR 7/1　灰白色
37-3	84	2区	SE1012	山茶碗	小碗	全体	100%	10.0	5.2	3.3	内：10YR 7/1　灰白色 外：10YR 6/1　褐灰色
37-4	84	2区	SE1012	山茶碗	小碗	全体	70%	(9.6)	4.6	3.3	内：2.5Y 7/1　灰白色 外：2.5Y 5/1　黄灰色
37-5	84	2区	SE1013	山茶碗	碗	全体	80%	17.2	8.0	7	2.5Y 7/1　灰白色
37-6	84	2区	SE1013	山茶碗	小碗	全体	60%	(10.6)	5.2	3.6	2.5Y 7/1　灰白色
37-7	-	2区	SE1013	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	6.0	(2.1)	内：10YR 8/3　浅黄橙色 外：10YR 7/3　にぶい黄橙色
37-8	-	2区	SE1013	山茶碗	鉢	全体	10%	(34.0)	(16.2)	14.0	N 7/0　灰白色
37-9	-	2区	SE1013	須恵器	陶臼	体部～底部	25%	-	(10.0)	(8.9)	N 7/0　灰白色
39-1	85	2区	SE1009	山茶碗	碗	全体	50%	17.1	(7.95)	6.2	10YR 7/1　灰白色
39-2	85	2区	SE1009	山茶碗	碗	全体	65%	16.2	7.5	5.4	内：2.5Y 6/1　黄灰色 外：5Y 7/1　灰白色
39-3	85	2区	SE1009	山茶碗	碗	全体	30%	(16.8)	(8.2)	5.15	5Y 8/1　灰白色
39-4	85	2区	SE1009	須恵器	坏蓋	全体	40%	(14.8)	-	3.9	N 7/0　灰白色
39-5	-	2区	SE1009	須恵器	壺	底部	40%	-	(6.2)	(3.2)	内：N 8/0　灰白色 外：N 4/0　灰色
39-6	85	2区	SE1009	土師器	小皿	全体	70%	9.5	-	2.4	10YR 7/4　にぶい黄橙色
39-7	-	2区	SE1009	須恵器	坏身	全体	20%	(8.8)	-	2.8	5Y 7/1　灰白色
41-1	-	2区	SE1010	須恵器	壺	口縁部	30%	(11.2)	-	(2.7)	内：5Y 8/1　灰白色 外：5Y 7/1　灰白色
41-2	86	2区	SE1010	山茶碗	輪花碗	全体	70%	(15.4)	7.9	5.2	内：5Y 7/2　灰白色 外：5Y 7/1　灰白色
41-3	85	2区	SE1010	山茶碗	小碗	全体	100%	9.5	4.9	2.8	内：5Y 6/1　灰色 外：N 7/0　灰白色
41-4	86	2区	SE1010	山茶碗	小碗	全体	100%	8.4	4.7	2.6	内：7.5Y 7/1　灰白色 外：N 7/0　灰白色
41-5	-	2区	SE1010	山茶碗	碗	全体	40%	(15.8)	(6.9)	5.2	内：2.5Y 8/1　灰白色 外：2.5Y 7/1　灰白色
41-6	-	2区	SE1010	山茶碗	碗	全体	30%	(16.4)	(8.2)	5.7	内：10YR 6/2　灰黄褐色 外：10YR 6/1　褐灰色
41-7	-	2区	SE1010	山茶碗	碗	底部～高台部	50%	-	(7.4)	(2.8)	10YR 7/1　灰白色
41-8	-	2区	SE1010	山茶碗	碗	全体	40%	(16.2)	(9.2)	5.0	N 8/0　灰白色
41-9	-	2区	SE1010	山茶碗	碗	底部～高台部	90%	-	8.2	(2.7)	N 8/0　灰白色
41-10	-	2区	SE1010	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	8.2	(3.5)	2.5Y 7/1　灰白色
41-11	-	2区	SE1010	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	9.0	(3.3)	5Y 8/1　灰白色
41-12	-	2区	SE1010	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	8.4	(3.8)	2.5Y 8/1　灰白色
41-13	-	2区	SE1010	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	7.4	(3.2)	2.5Y 7/1　灰白色
41-14	-	2区	SE1010	山茶碗	碗	底部～高台部	90%	-	8.2	(2.8)	5Y 8/1　灰白色
41-15	-	2区	SE1010	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	7.1	(2.9)	内：10YR 8/1　灰白色 外：10YR 7/1　灰白色
41-16	-	2区	SE1010	山茶碗	碗	底部～高台部	40%	-	(7.6)	(2.8)	N 8/0　灰白色
41-17	-	2区	SE1010	山茶碗	小碗	底部～高台部	100%	-	4.4	(1.7)	10YR 8/1　灰白色
41-18	-	2区	SE1010	山茶碗	鉢	底部	40%	-	(11.0)	(4.2)	N 8/0　灰白色
41-19	-	2区	SE1010	白磁	碗	口縁部	5%	(17.7)	-	(3.2)	素地：N 8/0　灰白色 釉：5Y 8/1　灰白色
43-1	-	3区	SE1014	山茶碗	碗	底部～高台部	70%	-	6.8	(2.8)	N 7/0　灰白色
43-2	-	3区	SE1015	山茶碗	碗	全体	40%	(16.8)	(7.0)	5.0	2.5Y 7/1　灰白色
43-3	86	3区	SE1015	山茶碗	碗	全体	50%	(17.4)	8.0	6.0	N 8/0　灰白色
43-4	87	3区	SE1015	山茶碗	小碗	全体	80%	10.6	(5.4)	3.3	N 7/0　灰白色
43-5	-	3区	SE1015	土師器	鍋	口縁部	15%	(23.0)	-	(5.3)	10YR 5/1　褐灰色
43-6	86	3区	SE1016	山茶碗	碗	全体	95%	16.6	7.5	5.7	7.5Y 8/1　灰白色

挿図番号	図版番号	調査区	出土場所	種類	器種	残存部位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調
43-7	-	4区	SE1017	山茶碗	小碗	全体	100%	9.3	5.4	2.7	2.5Y 8/1　灰白色
47-1	-	3区	SK1005	山茶碗	小碗	全体	30%	(10.0)	(6.1)	3.4	2.5Y 8/1　灰白色
47-2	-	3区	SK1011	土師器	鍋	口縁部	10%	(28.6)	-	(7.8)	10YR 7/3　にぶい黄橙色
47-3	87	3区	SK1014	山茶碗	鉢	全体	20%	(29.4)	(11.2)	13.2	内：N 7/0　灰白色 外：N 6/0　灰色
51-1	87	2区	SD1001	山茶碗	小碗	全体	70%	(9.8)	5.0	3.0	5Y 8/1　灰白色
51-2	-	2区	SD1001	山茶碗	小碗	全体	30%	(9.8)	5.0	3.2	5Y 8/1　灰白色
51-3	-	2区	SD1001	山茶碗	小碗	底部～高台部	70%	-	5.4	(1.7)	2.5Y 7/1　灰白色
51-4	-	2区	SR1003	山茶碗	碗	口縁部	10%	(16.0)	-	(3.1)	内：5Y 8/1　灰白色 外：5Y 6/1　灰色
51-5	-	2区	SR1003	山茶碗	碗	底部～高台部	60%	-	(8.4)	(3.0)	7.5Y 8/1　灰白色
51-6	-	2区	SR1003	山茶碗	小碗	底部～高台部	30%	-	(5.2)	(1.5)	内：5Y 6/2　灰オリーブ色 外：5Y 8/1　灰白色
51-7	-	2区	SR1003	須恵器	坏身	体部～底部	25%	(11.6)	-	(2.9)	内：N 7/0　灰白色 外：N 6/0　灰色
51-8	-	2区	SR1003	須恵器	甕	口縁部	5%	(40.7)	-	(3.1)	内：N 7/0　灰白色 外：5PB 6/1　青灰色
51-9	87	2区	SR1005	土師器	坏	全体	90%	10.5	-	3.8	7.5YR 8/4　浅黄橙色
51-10	-	2区	SD1007	須恵器	坏身	口縁部～体部	40%	(11.5)	-	(4.0)	PB 5/1　青灰色
51-11	-	3区	SD1023	須恵器	坏身	全体	20%	(14.6)	-	(3.6)	2.5Y 7/1　灰白色
51-12	-	3区	SD1023	須恵器	甕	口縁部	25%	(12.2)	-	(7.1)	内：2.5Y 7/1　灰白色 外：2.5Y 6/1　黄灰色
55-1	87	2区	SR1001	土師器	甕	底部	60%	-	9.0	(10.8)	2.5Y 7/3　浅黄色
55-2	-	2区	SR1001	須恵器	高坏	脚部	80%	-		(6.6)	N 6/0　灰色
55-3	-	2区	SR1001	須恵器	盤	底部～高台部	20%	-	(14.4)	(1.6)	N 7/0　灰白色
55-4	87	2区	SR1001	須恵器	獣足付短頸壷	全体	30%	(23.2)	-	(18.5)	N 7/0　灰白色
55-5	-	2区	SR1001	山茶碗	碗	全体	30%	(15.4)	(7.0)	5.7	5Y 7/1　灰白色
55-6	87	2区	SR1001	山茶碗	碗	底部～高台部	40%	-	(8.2)	(2.9)	内：5Y 7/1　灰白色 外：5Y 6/1　灰色
55-7	87	2区	SR1001	山茶碗	碗	全体	65%	(16.0)	7.1	5.7	5Y 7/1　灰白色
55-8	87	2区	SR1001	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	8.4	(2.9)	5Y 7/1　灰白色
55-9	88	2区	SR1001	山茶碗	小碗	全体	70%	(8.7)	4.6	3.0	内：7.5Y 6/2　灰オリーブ色 外：N 8/0　灰白色
55-10	-	2区	SR1001	山茶碗	碗	全体	50%	-	8.5	(4.2)	2.5Y 8/1　灰白色
55-11	88	2区	SR1001	山茶碗	碗	底部～高台部	70%	-	8.2	(3.0)	N 8/0　灰白色
55-12	88	2区	SR1001	山茶碗	小碗	全体	70%	9.7	5.1	3.2	内：5Y 8/1　灰白色 外：N 8/0　灰白色
56-1	-	2区	SR1001	土師器	甕	口縁部	10%	(36.2)	-	(6.2)	10YR 7/2　にぶい黄橙色
56-2	88	2区	SR1001	土師器	羽釜	口縁部	10%	(29.0)	-	(5.5)	7.5YR 5/4　にぶい褐色
58-1	88	3区	SR1020	山茶碗	碗	底部～高台部	80%	-	8.2	(2.6)	N 8/0　灰白色
58-2	-	2区	SR1020	山茶碗	碗	全体	60%	-	7.6	4.1	内：10YR 7/1　灰白色 +0116 外：2.5Y 7/1　灰白色
60-1	-	2区	SD1016	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	7.2	(2.8)	2.5Y 8/1　灰白色
60-2	-	3区	SD1019	須恵器	坏身	底部	40%	-	(11.0)	(2.9)	5Y 7/1　灰白色
60-3	88	2区	SR1009	山茶碗	小碗	全体	100%	11.1	5.6	3.5	5Y 8/1　灰白色
60-4	-	2区	SR1009	山茶碗	碗	底部～高台部	80%	-	7.5	(2.2)	2.5Y 8/1　灰白色
60-5	-	2区	SR1009	須恵器	坏蓋	天井部～摘み部	30%	(2.7)	-	(2.0)	N 7/0　灰白色
60-6	89	2区	SR1009	須恵器	甕	全体	80%	(15.2)	-	23.5	N 6/0　灰色
60-7	-	3区	SR1010	山茶碗	小碗	全体	40%	(9.7)	(4.2)	3.0	2.5Y 8/1　灰白色
60-8	-	3区	SR1010	須恵器	坏蓋	全体	30%	(9.6)	-	(3.2)	内：N 7/0 灰白色 外：N 6/0　灰色
60-9	88	3区	SR1010	須恵器	坏身	全体	50%	(7.8)	-	(3.6)	内：N 7/0 灰白色 外：N 6/0　灰色
60-10	-	3区	SR1011	須恵器	広口壷	体部～底部	40%	-	-	(14.4)	5Y 7/1　灰白色
62-1	-	3区	SD1024	山茶碗	碗	底部～高台部	20%	-	(7.4)	(3.3)	2.5Y 7/1　灰白色
62-2	-	3区	SD1024	山茶碗	小碗	底部～高台部	95%	-	4.7	(1.7)	N 7/0　灰白色
62-3	-	3区	SD1024	須恵器	蓋	口縁部～天井部	30%	(18.0)	-	(2.3)	内：口縁部 N 7/0　灰白色 天井部 N 5/0 灰色 外：N 7/0　灰白色
62-4	-	3区	SD1024	須恵器	坏蓋	天井部～摘み部	50%	2.2	-	(2.8)	N 6/0　灰色
62-5	-	3区	SD1026	山茶碗	碗	全体	20%	(15.0)	(7.0)	5.9	N 6/0　灰色
62-6	-	3区	SD1026	山茶碗	碗	底部～高台部	30%	-	(7.2)	(2.7)	2.5Y 7/1　灰白色
62-7	-	3区	SD1026	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	7.2	(2.8)	2.5Y 7/2　灰黄色
62-8	-	3区	SD1026	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	7.9	(3.0)	2.5Y 8/1　灰白色
62-9	-	3区	SD1026	山茶碗	小碗	底部～高台部	100%	-	5.7	(2.0)	2.5Y 8/1　灰白色
62-10	-	3区	SD1026	土師器	鍋	口縁部	50%	(20.2)	-	(4.4)	10YR 8/2　灰白色

挿図番号	図版番号	調査区	出土場所	種類	器種	残存部位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調
62-11	-	3区	SR1019	山茶碗	小碗	全体	50%	(10.4)	5.4	2.5	内：10YR 8/1　灰白色 外：10YR 7/1　灰白色
62-12	89	3区	SR1021	須恵器	台付壺	頸部～高台部	45%	(17.8)	(10.2)	(13.7)	N 7/0　灰白色
62-13	89	3区	SR1024	須恵器	坏蓋	全体	40%	(17.9)	-	3.0	2.5Y 7/1　灰白色
62-14	-	3区	SR1025	山茶碗	碗	口縁部～体部	20%	(16.6)	-	(4.7)	5Y 8/1　灰白色
62-15	89	3区	SR1025	山茶碗	碗	全体	70%	15.8	7.4	5.1	2.5Y 7/1　灰白色
62-16	-	3区	SR1025	須恵器	台付壺	底部～高台部	40%	-	(11.0)	(5.6)	N 7/0　灰白色
64-1	-	5区	SD1032	山茶碗	碗	底部	30%	-		(2.7)	N 7/0　灰白色
64-2	-	5区	SD1034	山茶碗	碗	底部～高台部	10%	-	(8.0)	(2.6)	N 8/0　灰白色
64-3	-	5区	SD1036	山茶碗	碗	底部～高台部	30%	-	(6.4)	(2.6)	N 8/0　灰白色
66-1	-	2区	SX1001	土師器	小皿	全体	20%	(13.0)	-	2.35	2.5Y 8/1　灰白色
66-2	89	2区	SX1001	土師器	小皿	全体	80%	12.6	-	2.8	内：7.5YR 7/3　にぶい橙色 外：7.5YR 8/3　浅黄橙色
66-3	89	2区	SX1001	土師器	小皿	全体	30%	(8.4)	-	1.8	内：10YR 8/3 灰白色 外：10YR 8/2　灰白色
66-4	89	2区	SX1001	土師器	小皿	全体	50%	8.4	-	1.6	内：7.5YR 7/3　にぶい橙色 外：10YR 8/3　浅黄橙色
66-5	89	2区	SX1001	土師器	小皿	全体	90%	8.6	-	2.0	7.5YR 7/3　にぶい橙色
66-6	89	2区	SX1001	土師器	小皿	全体	95%	8.5	-	2.1	10YR 8/2　灰白色
66-7	89	2区	SX1001	土師器	小皿	全体	85%	8.3	-	2.1	5YR 7/3　にぶい橙色
66-8	89	2区	SX1001	土師器	小皿	全体	90%	8.5	-	2.1	5YR 7/4　にぶい橙色
65-9	-	2区	SX1001	白磁	碗	口縁部	10%以下	(14.0)	-	(1.3)	素地：N 8/0　灰白色 釉：5Y 7/2　灰白色
65-10	-	2区	SX1001	山茶碗	碗	全体	60%	(17.7)	6.6	5.5	N 7/0　灰白色
65-11	89	2区	SX1001	須恵器	広口壺	頸部～高台部	50%	(17.9)	(11.7)	(18.2)	5Y 7/1　灰白色
72-1	-	2区	SX1002	山茶碗	碗	底部～高台部	50%	-	(8.4)	(2.7)	5Y 7/1　灰白色
72-2	-	2区	SX1002	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	7.3	(3.1)	2.5Y 8/1　灰白色
72-4	-	3区	SX1003	山茶碗	輪花碗	全体	70%	(16.1)	7.7	5.5	5Y 8/1　灰白色
72-5	-	3区	SX1003	山茶碗	輪花碗	全体	90%	10.8	5.1	4.1	N 7/0　灰白色
72-6	-	3区	SX1003	山茶碗	碗	全体	50%	(15.4)	7.4	5.2	N 8/0　灰白色
72-7	-	3区	SX1003	山茶碗	碗	口縁部	15%	(16.4)	-	(3.1)	内：10Y 6/2　オリーブ灰色 外：N 7/0　灰白色
72-8	-	3区	SX1003	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	8.0	3.2	N 7/0　灰白色
72-9	-	3区	SX1003	山茶碗	小碗	全体	80%	10.5	4.8	3.2	N 7/0　灰白色
72-10	-	3区	SX1003	山茶碗	小碗	全体	80%	10.5	5.3	3.1	N 7/0　灰白色
72-11	-	3区	SX1003	山茶碗	小碗	全体	100%	10.3	5.0	3.5	N 7/0　灰白色
72-12	-	3区	SX1003	山茶碗	小碗	全体	70%	9.95	5.6	3.0	N 8/0　灰白色
72-13	-	3区	SX1003	山茶碗	小碗	全体	30%	(10.4)	(4.6)	3.1	内：N 8/0 灰白色 外N 7/0　灰白色
72-14	-	3区	SX1003	土師器	坏	全体	70%	14.2	7.0	4.4	10YR 8/3 浅黄橙色
78-1	-	2区	SB2002-P12	須恵器	坏蓋	口縁部	25%	(9.7)	-	(2.6)	N 6/0　灰色
78-2	-	2区	SB2002-P1	須恵器	坏身	口縁部～体部	20%	(13.1)	-	(4.1)	N 7/0　灰白色
78-3	-	2区	SB2002-P1	須恵器	坏身	口縁部～体部	25%	(8.5)	-	(2.6)	内：N 6/0 灰色 外：N 4/0　灰色
82-1	-	2区	SB2005-P10	須恵器	坏蓋	口縁部	10%	(13.6)	-	(3.1)	内：N 6/0 灰色 外：N 4/0　灰色
85-1	-	3区	SE2001	須恵器	壺	全体	50%	(19.0)	(11.8)	(12.4)	内：2.5Y 6/1　黄灰色 外：5Y 7/1　灰白色
85-2	93	3区	SE2001	須恵器	坏身	全体	30%	(12.8)	8.3	3.8	N 7/0　灰白色
85-3	-	3区	SE2001	土師器	坏	体部～高台部	15%	-	(12.2)	(4.3)	10YR 6/2　灰黄褐色
85-4	93	3区	SE2001	土師器	坏蓋	全体	70%	18.0	-	4.1	10YR 7/3　にぶい黄橙色
85-5	-	3区	SE2001	土師器	坏蓋	全体	30%	(17.2)	-	(3.9)	10YR 7/3　にぶい黄橙色
90-1	-	3区	SK2017	須恵器	坏	体部～底部	10%	-	(10.0)	(3.5)	N 7/0　灰白色
90-2	-	2区	SD2002	須恵器	広口壺	口縁部	25%	(23.0)	-	(7.2)	5Y 7/1　灰白色
90-3	-	2区	SD2002	須恵器	甕	頸部	30%	-	-	(6.7)	N 7/0　灰白色
93-1	93	2区	SX1002	須恵器	坏蓋	全体	50%	15.6	-	3.1	N 7/0　灰白色
93-2	-	2区	SX1002	須恵器	坏蓋	全体	85%	15.55	2.2	2.2	5Y 7/1　灰白色
93-3	-	2区	SX1002	須恵器	坏蓋	全体	50%	(14.7)	-	2.5	N 6/0　灰色
93-4	-	2区	SX1002	須恵器	坏蓋	全体	70%	(14.8)	-	2.7	N 7/0　灰白色
93-5	-	2区	SX1002	須恵器	坏蓋	天井部～摘み部	40%	2.5	-	(2.5)	N 7/0　灰白色
93-6	-	2区	SX1002	須恵器	坏蓋	天井部～摘み部	60%	2.6	-	(2.5)	N 6/0　灰色
93-7	-	2区	SX1002	須恵器	坏蓋	全体	20%	(16.0)	-	(2.2)	N 7/0　灰白色
93-8	-	2区	SX1002	須恵器	坏蓋	全体	20%	(15.6)	-	(1.8)	N 7/0　灰白色
93-9	-	2区	SX1002	須恵器	坏身	全体	30%	(13.6)	(7.6)	4.2	2.5Y 8/1　灰白色
93-10	-	2区	SX1002	須恵器	無台坏	全体	15%	(15.0)	-	4.1	2.5Y 7/1　灰白色
93-11	-	2区	SX1002	須恵器	坏身	全体	25%	(13.2)	(6.8)	3.7	N 8/0　灰白色
93-12	-	2区	SX1002	須恵器	坏身	全体	30%	(14.0)	(11.0)	3.3	N 5/0　灰色

挿図番号	図版番号	調査区	出土場所	種類	器種	残存部位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調
93-13	-	2区	SX1002	土師器	高坏	底部～脚部	30%	-	-	(4.0)	10YR 7/4　にぶい黄橙色
103-1	93	2区	SD3001	須恵器	坏身	全体	100%	8.4	-	3.1	N 6/0　灰色
103-2	93	2区	SD3001	須恵器	坏身	全体	100%	8.9	-	3.2	N 7/0　灰白色
103-3	-	2区	SD3001	須恵器	坏身	体部～底部	40%	-	-	(2.4)	内：N 7/0　灰白色 外：N 6/0　灰色
103-4	-	2区	SD3001	須恵器	横瓶	体部～底部	25%	-	-	(22.7)	N 7/0　灰白色
106-1	93	3区	SK2025	須恵器	坏身	全体	70%	16.8	10.6	3.5	N 6/0　灰色
106-2	93	3区	SK2025	須恵器	高坏	底部～脚部	70%	-	-	(6.4)	N 8/0　灰白色
106-3	94	3区	SK2025	須恵器	長頸壷	全体	80%	8.2	8.1	21.9	7.5Y 7/1　灰白色
106-4	94	3区	SH3004	須恵器	坏蓋	全体	70%	(10.6)	-	3.9	2.5Y 7/1　灰白色
106-5	-	3区	SH3004	須恵器	坏身	口縁部～体部	15%	(9.3)	-	(2.45)	N 5/0　灰色
106-6	-	3区	SH3004-P2	土師器	甕	口縁部	25%	(18.0)	-	(5.5)	内：10YR 6/4　にぶい黄橙色 外：7.5YR 5/3　にぶい褐色
106-7	-	3区	SH3004	土師器	甕	口縁部	15%	(24.0)	-	(6.4)	2.5Y 7/2　灰黄色
106-8	94	3区	SH3004-P5	土師器	高坏	脚部	50%	-	-	(5.8)	7.5YR 7/6　橙色
110-1	-	3区	SH3006	土師器	甕	口縁部～肩部	20%	(20.0)	-	(12.2)	10YR 7/2　にぶい黄橙色
110-2	-	3区	SH3007	須恵器	坏蓋	全体	25%	(11.0)	-	4.0	N 8/0　灰白色
114-1	-	2区	SE3001	弥生土器	壷	体部	60%	(24.0)	-	(11.0)	5YR 5/6　明赤褐色
114-2	94	3区	SE3002	土師器	高坏	脚部	50%	(27.0)	-	(7.5)	10YR 7/3　にぶい黄橙色
114-3	94	3区	SE3002	土師器	高坏	脚部	50%	-	-	(7)	7.5YR 7/4　にぶい橙色
114-4	94	4区	SE3003	土師器	高坏	全体	80%	18.45	-	(13.7)	10YR 8/3　浅黄橙色
114-5	94	4区	SE3003	土師器	高坏	坏部	95%	15.3		(5.7)	2.5Y 7/1　灰白色
114-6	94	4区	SE3003	土師器	壷	体部～底部	60%	-	8.0	(14.4)	10YR 6/2　灰黄褐色
114-7	94	4区	SE3004	土師器	高坏	坏部	90%	16.0	-	(5.2)	7.5YR 7/3　にぶい橙色
114-8	95	4区	SE3004	土師器	高坏	脚部	50%	-	-	(7.4)	7.5YR 7/4　にぶい橙色
114-9	95	4区	SE3004	土師器	高坏	脚部	60%	-	(12.4)	(8.9)	10YR 6/3　にぶい黄橙色
114-10	95	4区	SE3004	土師器	高坏	脚部	60%	-	(11.5)	(9.2)	7.5YR 6/4　にぶい橙色
114-11	95	4区	SE3004	土師器	鉢	口縁部～体部	30%	(24.4)	-	(11.0)	10YR 7/3　にぶい黄橙色
114-12	95	4区	SE3004	土師器	壷	体部～底部	60%	-	5.8	(13.5)	内：7.5Y 7/3　にぶい橙色 外：2.5Y 7/2　灰黄色
116-1	95	4区	SE3005	土師器	高坏	坏部	60%	22.5	-	(6.0)	10YR 7/3　にぶい黄橙色
116-2	95	4区	SE3005	土師器	高坏	脚部	60%	-	12.5	(10.9)	7.5YR 7/4　にぶい橙色
116-3	95	4区	SE3005	土師器	高坏	脚部	40%	-	-	(8.5)	2.5Y 8/2　灰白色
116-4	96	4区	SE3005	土師器	高坏	脚部	60%	-	-	(9.0)	7.5YR 7/4　にぶい橙色
116-5	95	4区	SE3005	土師器	高坏	脚部	60%	-	-	(8.9)	10YR 7/4　にぶい黄橙色
116-6	95	4区	SE3005	土師器	高坏	底部～脚部	60%	-	-	(7.4)	7.5YR 6/3　にぶい褐色
116-7	95	4区	SE3005	土師器	高坏	脚部	60%	-	-	(6.4)	10YR 8/2　灰白色
116-8	96	4区	SE3005	土師器	壷	全体	95%	15.6	6.6	21.2	10YR 6/3　にぶい黄橙色
116-9	96	4区	SE3005	土師器	甕	口縁部	15%	(18.8)	-	(8.5)	10YR 5/2　灰黄褐色
116-10	96	4区	SE3005	土師器	台付甕		25%	(27.9)	-	(18.0)	7.5YR 5/3　にぶい褐色
116-11	-	4区	SE3005	土師器	甕	口縁部	20%	(15.9)	-	(9.7)	7.5YR 8/3　浅黄橙色
116-12	-	4区	SE3005	土師器	壷？	底部	100%	-	5.8	(3.2)	10YR 5/2　灰黄褐色
118-1	-	4区	SE3006	土師器	高坏	底部～脚部	70%	-	12.5	(10.7)	5YR 7/3　にぶい橙色
118-2	96	4区	SE3006	土師器	高坏	脚部	60%	-	(11.5)	(8.1)	7.5YR 7/2　明褐灰色
118-3	96	4区	SE3006	土師器	高坏	脚部	70%	-	(11.1)	(8.4)	5YR 7/4　にぶい橙色
118-4	96	4区	SE3006	土師器	高坏	底部～脚部	60%	-	-	(7.0)	内：7.5YR 5/3　にぶい褐色 外：10YR 6/2　灰黄褐色
118-5	96	4区	SE3006	土師器	広口壷	全体	90%	(8.1)	-	8.5	10YR 6/2　灰黄褐色
118-6	-	4区	SE3006	土師器	小型壷	全体	30%	(9.0)	-	8.1	10YR 6/3　にぶい黄橙色
118-7	96	4区	SE3006	土師器	広口壷	全体	80%	(9.6)	-	7.2	10YR 7/2　にぶい黄橙色
118-8	97	4区	SE3006	土師器	広口壷	全体	80%	(5.5)	-	5.9	10YR 8/4　浅黄橙色
118-9	97	4区	SE3006	土師器	壷	体部～底部	80%	-	4.8	(12.9)	2.5Y 7/2　灰黄色
118-10	97	4区	SE3006	土師器	台付甕	台部	50%	-	-	(6.6)	10YR 7/3　にぶい黄橙色
118-11	-	4区	SE3006	土師器	高坏	坏部	10%	-	-	(6.0)	7.5YR 8/3　浅黄橙色
118-12	97	4区	SE3006	土師器	高坏	脚部	60%	-	-	(6.8)	5YR 6/4　にぶい橙色
118-13	97	4区	SE3006	土師器	高坏	底部～脚部	70%	-	-	(8.6)	5YR 7/4　にぶい橙色
118-14	97	4区	SE3006	土師器	広口壷	全体	90%	10.8	-	8.7	2.5Y 7/2　灰黄色
118-15	97	4区	SE3006	土師器	広口壷	全体	40%	(7.5)	-	6.9	10YR 7/2　にぶい黄橙色
118-16	98	4区	SE3006	土師器	広口壷	全体	80%	(6.1)	-	5.8	10YR 7/2　にぶい黄橙色
118-17	-	4区	SE3006	土師器	壷	口縁部～頸部	30%	(17.6)	-	(4.3)	10YR 8/3　浅黄橙色
118-18	97	4区	SE3006	土師器	壷	頸部～体部	25%	(27.0)	-	(18.5)	10YR 7/2　にぶい黄橙色
118-19	98	4区	SE3006	土師器	高坏	脚部	60%	-	11.9	(8.2)	10YR 8/3　浅黄橙色
118-20	98	4区	SE3006	土師器	高坏	脚部	80%	-	-	(9.6)	7.5YR 8/3　浅黄橙色
118-21	98	4区	SE3006	土師器	高坏	脚部	60%	-	-	(7.4)	10YR 7/2　にぶい黄橙色
118-22	98	4区	SE3006	土師器	高坏	底部～脚部	50%	-	-	(7.3)	10YR 6/3　にぶい橙色
118-23	98	4区	SE3006	土師器	高坏	底部～脚部	40%	-	-	(5.6)	10YR 8/2　灰白色

挿図番号	図版番号	調査区	出土場所	種類	器種	残存部位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調
118-24	98	4区	SE3006	土師器	広口壺	体部～底部	60%	-	3.9	(3.8)	内：5YR 7/6　橙色 外：7.5YR 8/4　浅黄橙色
120-1	98	4区	SE3007	土師器	高坏	脚部	100%	-	12.2	(9.3)	10YR 6/3　にぶい黄橙色
120-2	98	4区	SE3007	土師器	高坏	脚部	70%	-	-	(7.4)	2.5Y 7/2　灰黄色
120-3	-	4区	SE3007	土師器	甕	口縁部～体部	25%	(31.0)	-	(14.3)	10YR 6/3　にぶい黄橙色
120-4	-	4区	SE3008	土師器	壺	口縁部	15%	(15.2)	-	(4.3)	10YR 7/3　にぶい黄橙色
122-1	-	2区	SK3001	土師器	高坏	脚部	50%	-	-	(7.7)	10YR 7/3　にぶい黄橙色
122-2	-	2区	SK3001	土師器	高坏	脚部	40%	-	-	(6.2)	5YR 5/4　にぶい赤褐色
122-3	-	2区	SK3001	土師器	S字甕	口縁部	20%	(14.0)	-	(2.3)	5YR 6/4　にぶい橙色
122-4	-	2区	SK3001	土師器	小型甕	口縁部	15%	(12.0)	-	(5.1)	内：10YR 7/4　にぶい黄橙色 外：7.5YR 6/6　橙色
122-5	-	2区	SK3002	須恵器	坏身	底部	45%	-	-	(1.1)	7.5Y 7/1　灰白色
122-6	-	3区	SK3003	土師器	高坏	底部～脚部	30%	-	-	(4.3)	内：10YR 7/2　にぶい黄橙色 +0272 外：7.5YR 8/3　浅黄橙色
122-7	-	3区	SK3003	土師器	高坏	底部～脚部	40%	-	-	(7)	10YR 8/3　浅黄橙色
122-8	-	3区	SK3003	土師器	高坏	底部～脚部	40%	-	-	(4.9)	10YR 7/3　にぶい黄橙色
122-9	-	3区	SK3003	土師器	台付甕	台部	30%	-	(10.3)	(5.9)	10YR 8/2　灰白色
122-10	-	3区	SK3003	土師器	台付甕	台部	100%	-	7.2	(4.9)	10YR 7/3　にぶい黄橙色
122-11	99	3区	SK3004	須恵器	高坏	底部～脚部	40%	-	-	(8.5)	N 7/0　灰白色
122-12	99	4区	SK3007	土師器	丸底壺	全体	90%	12.6	-	7.6	2.5Y 7/2　灰黄色
125-2	99	2区	SX3001	須恵器	坏身	全体	70%	(8.8)	-	3.9	N 7/0　灰白色
125-3	-	2区	SX3001	須恵器	坏身	全体	30%	(9.0)	-	3.4	N 4/0　灰色
125-4	-	2区	SX3001	須恵器	坏身	全体	90%	8.2	-	2.7	N 6/0　灰色
125-5	-	2区	SX3001	土師器	高坏	脚部	50%	-	-	(6.6)	7.5YR 6/6　橙色
125-6	-	2区	SX3001	土師器	高坏	脚部	50%	-	-	(6.2)	10YR 7/3　にぶい黄橙色
125-7	-	2区	SX3001	土師器	台付甕	台部	40%	-	-	(5.3)	5YR 5/6　明赤褐色
127-1	99	4区	SX3002	土師器	高坏	底部～脚部	50%	-	(13.4)	(7.6)	
127-2	-	4区	SX3002	土師器	高坏	底部～脚部	60%	-	-	(10.4)	7.5YR 7/4　にぶい橙色
127-3	-	4区	SX3002	土師器	高坏	底部～脚部	60%	-	-	(9.4)	5YR 7/4　にぶい橙色
127-5	-	4区	SX3002	土師器	壺	口縁部	10%	(20.3)	-	(5.1)	7.5YR 8/3　浅黄橙色
127-6	100	4区	SX3002	土師器	壺	口縁部	70%	(14.4)	-	(5.2)	5YR 7/6　橙色
127-7	-	4区	SX3002	土師器	壺	体部	30%	(17.0)	-	(10.4)	10YR 7/3　にぶい黄橙色
127-8	-	4区	SX3002	土師器	甕	底部	80%	-	5.6	(9.1)	内：10YR 5/3　にぶい黄褐色 外：5YR 4/6　赤褐色
127-9	100	4区	SX3002	土師器	甕	口縁部～肩部	75%	15.6	-	(8.0)	7.5YR 5/4　にぶい褐色
127-10	-	4区	SX3002	土師器	甕	口縁部～肩部	15%	(36.0)	-	(15.1)	2.5Y 6/2　灰黄色
132-1	100	3区	SZ4005	弥生土器	壺	口縁部	40%	(10.2)	-	(7.2)	2.5Y 7/3　淡黄色
132-2	-	3区	SZ4005	弥生土器	壺	体部	5%	-	-	(7.8)	内：2.5Y 8/2　灰白色 外：2.5Y 4/1　黄灰色
132-3	100	3区	SZ4005	弥生土器	壺	口縁部～体部	30%	(6.3)		(17.5)	2.5Y 8/3　淡黄色
132-5	100	3区	SZ4005	土師器	壷	全体	50%	5.7	4.5	16.4	10YR 8/2　灰白色
134-1	101	3区	SD4022	弥生土器	壺	全体	50%	(8.2)	4.8	25.8	内：10YR 5/1　褐灰色 外：10YR 4/1　褐灰色
137-1	-	3区	SD4014	弥生土器	壺	頸部	70%	-	-	(7.2)	10YR 8/3　浅黄橙色
137-2	-	3区	SZ4005	弥生土器	壺	体部～底部	80%	-	6.6	(9.2)	内：2.5Y 5/1　黄灰色 外：2.5Y 7/3　浅黄色
137-3	-	3区	SD4019	弥生土器	壺	全体	100%	5.5	6.3	14.4	10YR 6/3　にぶい黄橙色
139-1	101	-	包含層	山茶碗	碗	底部～高台部	40%	-	(7.5)	(2.5)	5Y 7/1　灰白色
139-2	101	-	包含層	山茶碗	碗	全体	50%	-	6.6	(2.3)	内：N 6/0　灰色 +0303 外：5Y 7/1　灰白色
139-3	101	-	包含層	山茶碗	碗	全体	60%	-	7.4	(2.7)	2.5Y 7/2　灰白色
139-4	101	-	包含層	山茶碗	碗	底部～高台部	20%	-	(9.0)	(2.7)	5Y 7/1　灰白色
139-5	101	-	表土	山茶碗	碗	全体	40%	-	8.0	(2)	5Y 7/1　灰白色
139-6	101	-	包含層	山茶碗	小皿	全体	50%	(9.0)	(6.0)	2.1	5Y 7/1　灰白色
139-7	102	-	包含層	山茶碗	小皿	全体	50%	(8.6)	(6.2)	1.9	5Y 7/1　灰白色
139-8	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	50%	(17.6)	8.6	5.0	5Y 7/1　灰白色
139-9	102	-	表土	山茶碗	碗	全体	70%	15.9	7.0	5.2	2.5Y 8/1　灰白色
139-10	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	30%	(16.4)	(7.7)	5.4	2.5Y 7/1　灰白色
139-11	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	30%	(14.8)	(7.0)	4.8	5Y 7/1　灰白色
139-12	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	20%	(17.2)	(7.3)	5.0	5Y 7/1　灰白色
139-13	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	30%	(16.0)	(8.0)	5.2	10YR 8/1　灰白色
139-14	-	-	包含層	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	8.65	(3.7)	内：N 5/0　灰色 外：N 8/0　灰白色
139-15	-	-	包含層	山茶碗	碗	体部～高台部	100%	-	8.7	(5.0)	N 8/0　灰白色
139-16	-	-	包含層	山茶碗	碗	底部～高台部	80%	-	7.8	(3.8)	内：N 8/0　灰白色 外：N 5/0　灰色
139-17	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	40%	-	(8.0)	(3.4)	2.5Y 8/1　灰白色

挿図番号	図版番号	調査区	出土場所	種類	器種	残存部位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調
139-18	-	-	包含層	山茶碗	碗	底部～高台部	40%	-	(6.8)	(2.5)	内：5Y 7/1　灰白色 外：5Y 8/1　灰白色
139-19	-	-	包含層	山茶碗	碗	底部	100%	-	7.0	(2.5)	内：5Y 4/1　灰色 外：5Y 8/1　灰白色
139-20	-	-	包含層	山茶碗	碗	底部～高台部	50%	-	(6.7)	(2.4)	2.5Y 7/1　灰白色
139-21	102	-	包含層	山茶碗	碗	底部	30%	-	(7.9)	(2.3)	N 8/0　灰白色
139-22	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	20%	(16.3)	(8.2)	4.5	2.5Y 7/1　灰白色
139-23	-	-	包含層	山茶碗	碗	底部	30%	-	(8.2)	(1.8)	内：5Y 5/1　灰色 外：5Y 7/1　灰白色
139-24	-	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	60%	(12.0)	4.7	3.8	N 7/0　灰白色
139-25	-	-	包含層	山茶碗	小碗	口縁部～底部	20%	(11.2)		(3.1)	2.5Y 8/1　灰白色
139-26	-	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	30%	(9.4)	(5.5)	2.3	2.5Y 7/1　灰白色
139-27	102	-	包含層	山茶碗	小皿	全体	100%	8.6	4.8	2.1	10YR 8/1 灰白色
139-28	102	-	包含層	山茶碗	小皿	全体	100%	8.5	3.7	1.8	2.5Y 7/1　灰白色
140-1	102	-	包含層	山茶碗	碗	全体	40%	(17.8)	7.1	5.3	2.5Y 7/1　灰白色
140-2	102	-	包含層	山茶碗	碗	全体	55%	(16.2)	(8.2)	5.4	内：5Y 6/3　オリーブ黄色 外：5Y 7/1　灰白色
140-3	102	-	包含層	山茶碗	碗	全体	60%	-	7.5	(3.7)	内：N 7/0　灰白色 外：N 8/0　灰白色
140-4	102	-	包含層	山茶碗	碗	全体	50%	-	10.2	(4.5)	5Y 7/1　灰白色
140-5	102	-	包含層	山茶碗	碗	全体	60%	-	7.2	(3.9)	N 8/0　灰白色
140-6		-	包含層	山茶碗	碗	全体	20%	-	(8.6)	(1.6)	N 7/0　灰白色
140-7	103	-	包含層	山茶碗	碗	全体	50%	-	7.7	(2.6)	7.5Y 7/1　灰白色
140-8	103	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	65%	(10.0)	5.4	3.9	N 8/0　灰白色
140-9	103	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	60%	10.0	5.4	3.2	5Y 8/1　灰白色
140-10		-	包含層	山茶碗	小碗	全体	60%	9.6	6.2	2.8	7.5Y 8/1　灰白色
140-11	103	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	50%	-	(5.1)	(2.1)	5Y 7/1　灰白色
140-12	103	-	包含層	山茶碗	小碗	底部～高台部	70%	-	4.9	(1.9)	内：5Y 7/1　灰白色 外：N 7/0　灰白色
140-13	103	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	40%	-	4.8	(1.5)	5Y 7/1　灰白色
140-14	-	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	25%	-	4.3	(1.3)	N 8/0　灰白色
141-1	-	-	包含層	山茶碗	輪花碗	全体	30%	(17.0)	(8.2)	6.2	内：N 7/0 灰白色 +0342 外 5Y 7/1　灰白色
141-2	-	-	包含層	山茶碗	輪花碗	全体	30%	(17.8)	(8.5)	5.6	2.5Y 7/1　灰白色 釉：5Y 5/2　灰オリーブ色
141-3	103	-	包含層	山茶碗	輪花碗	全体	50%	(16.2)	7.8	5.6	N 8/0　灰白色
141-4	-	-	包含層	山茶碗	輪花碗	全体	30%	(16.6)	(8.4)	4.2	5Y 8/1　灰白色
141-5	-	-	包含層	山茶碗	輪花碗	口縁部～体部	15%	(18.0)	-	(4.1)	内：N 7/0　灰白色 外：N 8/0　灰白色
141-6	-	-	包含層	山茶碗	輪花碗	口縁部～体部	10%	(16.1)	-	(4.4)	10YR 8/1　灰白色
141-7	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	60%	(17.9)	(8.4)	5.7	N 8/0　灰白色
141-8	104	-	包含層	山茶碗	碗	全体	50%	(16.4)	7.4	5.4	5Y 7/1　灰白色
141-9	-	-	表土	山茶碗	碗	全体	20%	(16.6)	(8.2)	5.7	内：2.5Y 7/1　灰白色 外：2.5Y 8/1　灰白色
141-10	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	40%	(16.6)	(8.4)	5.3	2.5Y 7/1　灰白色
141-11	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	30%	(18.2)	(7.2)	5.3	5Y 7/1　灰白色
141-12	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	30%	(17.2)	(8.2)	4.6	内：N 6/0　灰色 外：N 7/0　灰白色
141-13	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	80%	(17.4)	8.4	5.1	N 8/0　灰白色
141-14	104	-	包含層	山茶碗	碗	全体	80%	16.8	8.6	5.0	N 7/0　灰白色
141-15	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	20%	(17.2)	(7.5)	5.6	2.5Y 8/1　灰白色
141-16	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	60%	(16.2)	(7.6)	5.3	5Y 7/1　灰白色
141-17	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	30%	(16.8)	(7.2)	5.3	2.5Y 7/2　灰白色
141-18	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	30%	(16.7)	(8.4)	5.6	N 8/0　灰白色
141-19	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	10%	(16.0)	-	(4.5)	5Y 7/1　灰白色
141-20	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	20%	(16.0)	(7.2)	5.5	N 8/0　灰白色
142-1	-	-	表土	山茶碗	碗	全体	30%	(17.8)	8.4	5.1	2.5Y 8/1　灰白色
142-2	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	20%	(18.4)	(9.0)	5.8	5Y 7/1　灰白色
142-3	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	40%	(17.9)	(8.4)	5.0	5Y 8/1　灰白色
142-4	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	50%	(16.8)	(8.9)	6.0	内：2.5Y 8/2　灰白色 外：10Y 8/2　灰白色
142-5	-	-	表土	山茶碗	碗	全体	40%	(16.4)	7.7	6.0	内：5Y 7/1　灰白色 外：5Y 6/1　灰色
142-6	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	40%	(15.4)	7.4	4.7	内：5Y 6/1　灰色 外：5Y 7/1　灰白色
142-7	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	10%	(15.4)	-	3.7	内：N 8/0 灰白色 外：N 7/0　灰白色
142-8	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	15%	(16.6)	-	(4.1)	内：2.5Y 7/2　灰黄色 +0369 外：2.5Y 8/2　灰白色

挿図番号	図版番号	調査区	出土場所	種類	器種	残存部位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調
142-9	-	-	表土	山茶碗	碗	全体	40%	-	8.0	4.1	2.5Y 8/1　灰白色
142-10	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	15%	-	(7.5)	(5.3)	2.5Y 8/1　灰白色
142-11	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	40%	(15.8)	7.2	5.7	5Y 8/1　灰白色
142-12	-	-	表土	山茶碗	小碗	全体	50%	(11.1)	5.0	3.7	5Y 7/1　灰白色
142-13	104	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	90%	9.7	5.1	3.1	2.5Y 7/1　灰白色
142-14	-	-	表土	山茶碗	小碗	全体	60%	(10.8)	5.2	3.2	2.5Y 7/2　灰黄色
142-15	104	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	80%	11.1	5.5	3.5	2.5Y 7/1　灰白色
142-16		-	包含層	山茶碗	碗	全体	40%	(9.4)	5.2	3.1	5Y 7/1　灰白色
142-17	104	-	表土	山茶碗	小碗	全体	80%	9.2	4.9	3.1	N 8/0　灰白色
142-18	104	-	表土	山茶碗	小碗	全体	90%	10.8	5.5	3.4	N 8/0　灰白色
142-19	104	-	表土	山茶碗	小碗	全体	80%	9.4	4.9	2.7	N 8/0　灰白色
142-20	104	-	表土	山茶碗	小碗	全体	80%	9.4	4.9	2.6	N 8/0　灰白色
142-21	104	-	包含層	土師器	小皿	全体	50%	(18.8)	4.2	2.9	10YR 8/3 浅黄橙色
142-22	104	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	60%	(8.1)	4.3	2.6	2.5Y 7/1　灰白色
142-23	-	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	30%	(11.0)	(6.2)	3.5	N 8/0　灰白色
142-24	-	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	40%	(9.9)	(4.7)	3.0	7.5Y 7/1　灰白色
142-25	-	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	40%	(9.2)	(5.6)	3.0	内：2.5Y 7/1　灰白色 外：2.5Y 8/1　灰白色
142-26	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	30%	(9.6)	(4.0)	2.9	内：10YR 7/3　にぶい灰黄橙色 外：10YR 6/4　にぶい黄橙色
142-27	-	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	50%		4.6	2.0	内：2.5Y 3/1　黒褐色 外：2.5Y 8/1　灰白色
142-28	-	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	50%	(9.4)	(5.0)	3.7	2.5Y 8/1　灰白色
142-29	105	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	70%	9.7	5.2	3.2	2.5Y 8/1　灰白色
142-30	105	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	70%	(9.2)	4.6	4.1	N 8/0　灰白色
142-31	-	-	表土	山茶碗	輪花碗	全体	30%	(10.4)	5.2	3.9	内：10YR 7/2 にぶい黄橙色 外：10YR 7/1　灰白色
142-32	105	-	包含層	山茶碗	輪花碗	全体	20%	(10.0)	(5.2)	3.7	2.5Y 8/1　灰白色
142-33	105	-	包含層	山茶碗	輪花碗	全体	70%	(9.6)	4.9	3.3	N 7/0　灰白色
142-34	105	-	包含層	山茶碗	山皿	全体	70%	9.0	4.6	2.7	2.5Y 8/1　灰白色
142-35	105	-	包含層	山茶碗	山皿	全体	50%	(8.4)	(3.6)	2.6	10YR 8/1　灰白色
142-36	105	-	包含層	山茶碗	山皿	全体	100%	8.5	4.3	2.6	2.5Y 7/1　灰白色
142-37	105	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	100%	8.7	4.8	2.3	5Y 8/1　灰白色
142-38	105	-	包含層	山茶碗	山皿	全体	80%	8.6	4.0	2.5	5Y 8/1　灰白色
142-39		-	包含層	山茶碗	山皿	全体	50%	8.0	4.0	2.1	2.5Y 8/1　灰白色
143-1	106	-	包含層	山茶碗	耳皿	全体	80%	9.5	5.4	4.5	内：2.5Y 7/1　灰白色 外：2.5Y 6/2　灰黄色
143-2	106	-	包含層	山茶碗	耳皿	全体	60%	-	(5.4)	4.3	内：2.5Y 7/1　灰白色 外：2.5Y 8/1　灰白色
143-3	106	-	包含層	山茶碗	耳皿	全体	70%	-	4.2	(4.1)	内：5Y 8/1　灰白色 外：5Y 7/1　灰白色
143-4	-	-	包含層	山茶碗	耳皿	全体	90%	9.1	4.7	4.1	5Y 7/1　灰白色
143-5	-	-	包含層	灰釉陶器	耳皿	全体	80%	(8.8)	4.6	3.5	2.5Y 8/1　灰白色
143-6	106	-	包含層	山茶碗	碗	全体	90%	16.0	6.8	5.7	内：5Y 7/1　灰白色 外：5Y 7/1　灰白色
143-7	106	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	20%	(9.0)	(4.8)	2.3	2.5Y 8/3　淡黄色
143-8	-	-	表土	山茶碗	碗	全体	70%	15.9	7.1	5.3	5Y 7/1　灰白色
143-9	-	-	包含層	山茶碗	碗	底部～高台部	40%	-	(7.0)	(2.7)	5Y 7/1　灰白色
143-10	-	-	包含層	山茶碗	碗	底部～高台部	80%	-	7.0	(3.1)	5Y 7/1　灰白色
143-11	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	10%	(15.6)	-	(4.5)	N 7/0　灰白色
143-12	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	10%	(14.7)	-	(4.7)	内：5Y 7/1　灰白色 外：5Y 6/1　灰色
143-13	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	10%	(15.9)	-	(3.2)	N 7/0　灰白色
143-14	106	-	表土	山茶碗	小碗	全体	60%	(9.9)	4.8	2.9	N 8/0　灰白色
143-15	-	-	表土	山茶碗	小碗	全体	30%	(9.6)	(4.9)	3.4	N 8/0　灰白色
143-16	107	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	95%	9.3	5.2	2.6	5Y 7/1　灰白色
143-17	-	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	40%	(9.9)	(4.8)	2.4	N 6/0　灰色
143-18	107	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	80%	9.5	4.5	3.0	5Y 7/1　灰白色
143-19	107	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	80%	9.9	5.1	2.9	5Y 7/1　灰白色
143-20	107	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	80%	10.1	4.5	3.0	5Y 7/1　灰白色
143-21	107	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	80%	9.6	4.6	2.7	5Y 7/1　灰白色
143-22	107	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	80%	9.7	4.6	2.9	2.5Y 8/2　灰白色
143-23	107	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	100%	9.7	5.2	3.0	5Y 7/1　灰白色
143-24	-	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	50%	-	(4.7)	(2.8)	N 8/0　灰白色
143-25	-	-	包含層	山茶碗	小皿	全体	30%	(8.5)	(3.6)	1.9	N 5/0　灰色
143-26	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	60%	(17.9)	9.2	5.6	N 7/0　灰白色
143-27	107	-	表土	山茶碗	小碗	全体	80%	105	5.2	3.0	N 8/0　灰白色

挿図番号	図版番号	調査区	出土場所	種類	器種	残存部位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調
143-28	107	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	100%	9.2	5.0	2.8	内：5Y 7/1　灰白色 外：5Y 8/1　灰白色
143-29	-	-	表土	山茶碗	小碗	全体	50%	(8.8)	5.0	2.6	内：2.5Y 7/1　灰白色 外：2.5Y 8/1　灰白色
143-30	-	-	包含層	山茶碗	小碗	全体	20%	(9.7)	(5.2)	2.4	N 8/0　灰白色
143-31	107	-	包含層	山茶碗	小皿	全体	100%	8.0	4.4	1.7	5Y 8/1　灰白色
143-32	108	-	包含層	山茶碗	小皿	全体	100%	7.7	4.7	1.7	5Y 8/1　灰白色
143-33	-	-	包含層	山茶碗	碗	全体	20%	(15.6)	-	(4.4)	2.5Y 8/2　灰白色
144-1	108	-	包含層	土師器	鍋	口縁部～体部	20%	(19.8)	-	(11.5)	内：10YR 7/2　にぶい黄橙色 +0438 外：7.5YR 7/6　橙色
144-2	108	-	包含層	土師器	鍋	口縁部～肩部	20%	(22.0)	-	(8.4)	5Y 8/1　灰白色
144-3	-	-	包含層	土師器	伊勢鍋	口縁部	20%	(25.0)	-	(4.3)	10YR 7/2　にぶい黄橙色
144-4	-	-	包含層	土師器	鍋	口縁部～肩部	20%	(20.0)	-	(5.4)	7.5YR 8/3　浅黄橙色
144-5	-	-	包含層	土師器	伊勢鍋	口縁部	25%	(22.8)	-	(4.5)	10YR 7/2　にぶい黄橙色
144-6	-	-	包含層	土師器	伊勢鍋	口縁部	10%	(20.0)	-	(3.7)	10YR 3/3　暗褐色
145-1	-	-	包含層	須恵器	坏蓋	全体	25%	(14.8)	-	3.1	N 7/0　灰白色
145-2	-	-	包含層	須恵器	坏蓋	全体	40%	(14.0)	-	2.7	5Y 7/1　灰白色
145-3	-	-	包含層	須恵器？	坏蓋	天井部～摘み	50%	(2.6)	-	(2.0)	7.5YR 8/4　浅黄橙色
145-4	-	-	包含層	須恵器	坏蓋	天井部～摘み	30%	2.2	-	(3.0)	5Y 8/1　灰白色
145-5	-	-	包含層	須恵器	坏蓋	全体	60%	(18.4)	-	(2.7)	N 8/0　灰白色
145-6	-	-	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部	40%	(16.8)	-	(1.5)	N 8/0　灰白色
145-7	-	-	包含層	須恵器	坏身	全体	30%	(16.6)	(14.2)	5.5	N 7/0　灰白色
145-8	-	-	包含層	須恵器	坏身	底部	10%	-	(11.4)	(4.3)	N 7/0　灰白色
145-9	-	-	包含層	須恵器	坏身	全体	25%	(16.3)	(12.6)	5.3	N 7/0　灰白色
145-10	-	-	包含層	須恵器	坏身	底部	50%	-	(8.2)	(1.3)	N 6/0　灰色
145-11	108	-	包含層	須恵器	坏身	底部	25%	-	(6.6)	(1.1)	N 7/0　灰白色
145-12	108	-	包含層	須恵器	坏身	底部	一部分	-	-	(0.7)	N 7/0　灰白色
145-13	108	-	包含層	須恵器	坏身	全体	10%	-	(12.2)	(0.9)	N 6/0　灰色
145-14	-	-	包含層	須恵器	坏	底部～高台部	25%	-	(15.5)	(2.9)	N 7/0　灰白色
145-15	-	-	表土	須恵器	盤	底部～高台部	15%	-	(13.4)	(3.3)	N 6/0　灰色
145-16	-	-	包含層	須恵器	皿	底部	80%	-	-	(1.8)	2.5Y 7/1　灰白色
145-17	-	-	包含層	須恵器	坏	底部～高台部	40%	-	(9.8)	(1.7)	N 7/0　灰白色
145-18	-	-	包含層	須恵器	高坏	脚部	40%	-	(9.7)	-	5Y 7/1　灰白色
145-19	108	-	包含層	須恵器	高坏	脚部	80%	-	10.7	(8.5)	5Y 7/1　灰白色
145-20	108	-	包含層	須恵器	長頸壷	全体	40%	(19.6)	-	(16.7)	N 6/0　灰色
145-21	-	-	包含層	須恵器	壺	底部～高台部	45%	-	(13.1)	(5.3)	内：N 7/0　灰白色 外：N 5/0　灰色
145-22	-	-	表土	須恵器	広口壷	口縁部	15%	(31.7)	-	(9.8)	内：2.5Y 7/1　灰白色 外：2.5Y 5/1　黄灰色
146-1	-	-	包含層	土師器	坏	口縁部～体部	60%	(16.7)	-	(4.9)	10YR 7/3　にぶい黄橙色
146-2	-	-	包含層	土師器	甕	口縁部～体部	15%	(19.8)	-	(7.6)	10YR 6/3　にぶい黄橙色
146-5	109	-	包含層	土師器	鍋	口縁部～頸部	20%	(37.6)	-	(11.4)	7.5YR 6/4　にぶい橙色
146-6	-	-	包含層	土師器	鍋	口縁部	20%	(35.2)	-	(7.1)	内：10YR 5/1　褐灰色 外：10YR 7/1　黒色
146-7	-	-	包含層	土師器	甕	口縁部	15%	(32.0)	-	(6.3)	10YR 6/3　にぶい黄橙色
146-8	-	-	包含層	土師器	鍋？	口縁部	10%	(36.0)	-	(9.2)	10YR 5/3　にぶい黄橙色
147-1	-	-	包含層	緑釉陶器	碗	底部～高台部	20%	-	-	(2.6)	素地：10YR 7/1　灰白色 釉：7.5Y 6/3　オリーブ黄色
147-2	-	-	包含層	緑釉陶器	皿	底部～高台部	25%	-	(5.0)	(1.3)	5Y 8/1　灰白色
147-3	-	-	包含層	青磁	鉢	口縁部	10%	(17.6)	-	(3.4)	素地：N 8/0　灰白色 釉：10Y 7/1　灰白色
147-4	-	-	包含層	青磁	碗	口縁部	10%	(15.8)	-	(3.1)	素地：5Y 7/1　灰白色 釉：10Y 6/2　オリーブ灰色
147-5	-	-	包含層	白磁	碗	体部	25%	-	-	(2.5)	露胎：2.5Y 8/2　灰白色 素地：2.5Y 8/2　灰白色 釉：5Y 8/2　灰白色
147-6	-	-	包含層	青磁	碗	底部～高台部	30%	-	(8.0)	(2.2)	露胎：10Y 8/1　灰白色 素地：10Y 8/1　灰白色 釉：7.5Y 7/1　灰白色
147-7	-	-	包含層	白磁	碗	口縁部	10%	(17.0)	-	(2.8)	露胎：N 8/0　灰白色 釉：2.5GY 8/1　灰白色
147-8	-	-	包含層	白磁	碗	口縁部	5%	-	-	(1.7)	素地：N 7/0　灰白色 釉：5Y 8/1　灰白色
147-9	-	-	包含層	？	？	口縁部	5%	(12.2)	-	(2.1)	素地：7.5Y 7/1　灰白色 釉：N 7/0　灰白色
147-10	-	-	包含層	白磁	碗	底部～高台部	10%	-	(8.2)	(2.7)	露胎：2.5Y 7/2　灰白色 釉：10YR 8/1　灰白色
147-11	-	-	包含層	白磁	碗	体部	5%	-	-	(2.5)	露胎：7.5Y 8/1　灰白色 釉：2.5Y 8/2　灰白色

挿図番号	図版番号	調査区	出土場所	種類	器種	残存部位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調
147-12	-	-	包含層	白磁	碗	体部	5%	-	-	(2.3)	露胎：N 8/0　灰白色 釉：2.5GY 8/1　灰白色
147-13	-	-	包含層	白磁	碗	口縁部	20%	(18.8)	-	(4.8)	露胎：N 8/0　灰白色 釉：7.5Y 7/1　灰白色
147-14	-	-	包含層	白磁	碗	口縁部	10%	(16.2)	-	(3.5)	露胎：5Y 7/1　灰白色 釉：5Y 8/1　灰白色
147-15	-	-	包含層	白磁	碗	口縁部	5%	(12.7)	-	(2.0)	露胎：N 8/0　灰白色 釉：2.5GY 8/1　灰白色
147-16	-	-	包含層	白磁	碗	底部～高台部	20%	-	(7.7)	(1.9)	露胎：2.5Y 8/1　灰白色 釉：2.5GY 8/1　灰白色
147-17	-	-	包含層	白磁	碗	体部	10%	-	-	(2.7)	露胎：5Y 8/1　灰白色 釉：5Y 7/1　灰白色
147-18	-	-	包含層	白磁	碗	底部	60%	-	-	(2.1)	露胎：10Y 8/1　灰白色 素地：10Y 8/1　灰白色 釉：7.5Y 7/1　灰白色
147-19	-	-	包含層	白磁	碗	口縁部	5%	(15.0)	-	(1.7)	露胎：7.5Y 8/1　灰白色 釉：7.5Y 7/2　灰白色
147-20	-	-	包含層	白磁	碗	底部～高台部	20%	-	(7.4)	(2.4)	露胎：5Y 8/2　灰白色 素地：5Y 8/2　灰白色 釉：7.5Y 8/1　灰白色
147-21	-	-	包含層	白磁	碗	底部～高台部	10%	-	(5.4)	(2.1)	露胎：N 8/0　灰白色 釉：7.5Y 8/1　灰白色
147-22	-	-	包含層	白磁	碗	体部	10%以下	-	-	(3.2)	素地：10Y 8/1　灰白色 釉：5Y 8/2　灰白色
148-1	-	-	包含層	須恵器	坏蓋	全体	30%	-	-	(3.4)	内：N 5/0 灰色 外：N 6/0　灰色
148-2	-	-	包含層	須恵器	坏蓋	全体	50%	(10.2)	-	4.4	N 6/0　灰色
148-3	-	-	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部	30%	(9.8)	-	(3.1)	N 6/0　灰色
148-4	-	-	包含層	須恵器	坏蓋	全体	40%	(9.8)	-	3.4	内：N 7/0 灰白色 外：N 6/0　灰色
148-5	109	-	包含層	須恵器	坏身	全体	40%	(10.8)	-	4.7	N 6/0　灰色
148-6	-	-	包含層	須恵器	坏身	全体	80%	8.4	-	3.2	N 6/0　灰色
148-7	-	-	包含層	須恵器	坏身	全体	20%	(9.2)	-	(10.9)	内：N 7/0 灰白色 外：N 6/0　灰色
148-8	109	-	包含層	須恵器	坏身	全体	80%	(13.6)	-	4.6	内：N 6/0　灰色 外：2.5Y 7/1　灰白色
148-9	-	-	包含層	須恵器	坏身	全体	30%	(11.8)	-	4.5	10YR 7/1　灰白色
148-10	109	-	包含層	須恵器	坏蓋	全体	70%	(18.6)	-	2.7	2.5Y 7/1　灰白色
148-11	109	-	包含層	須恵器	台付皿	全体	40%	(25.0)	14.4	3.3	5Y 7/1　灰白色
148-12	-	-	包含層	須恵器	高坏	脚部	40%	-	-	(6.6)	5Y 7/1　灰白色
148-13	-	-	包含層	須恵器	はそう	口縁部	20%	(12.6)	-	(3.9)	N 6/0　灰色
148-14	-	-	包含層	須恵器	壺	口縁部	50%	(12.4)	-	(3.6)	内：2.5Y 7/2　灰黄色 外：2.5Y 6/1　黄灰色
149-1	-	-	包含層	土師器	高坏	底部～脚部	40%	-	-	(4.7)	10YR 6/2　灰黄褐色
149-2	-	-	包含層	土師器	高坏	脚部	70%	-	-	(5.7)	7.5YR 8/3　浅黄橙色
149-3	110	-	包含層	鞴	羽口	全体	80%	2.8	-	(5.1)	10YR 7/3　にぶい黄橙色
149-4	-	-	包含層	土師器	高坏	脚部	50%	-	-	(6.0)	7.5YR 7/6　橙色
149-5	-	-	包含層	土師器	高坏	脚部	40%	-	-	(4.1)	内：7.5Y 8/6　浅黄橙色 外：5YR 7/4　にぶい橙色
149-6	-	-	包含層	土師器	高坏	脚部	40%	-	(6.5)	(7.0)	10YR 6/2　灰黄褐色
149-7	-	-	包含層	土師器	高坏	底部～脚部		-	-	(8.7)	内：10YR 5/1　褐灰色 外：10YR 8/2　灰白色
149-8	-	-	包含層	土師器	高坏	脚部	80%	-	-	(8.4)	内：7.5YR 2/1　黒色 外：7.5YR 6/6　橙色
149-9	-	-	包含層	土師器	高坏	脚部	60%	-	-	(6.7)	10YR 7/2　にぶい黄橙色
149-10	-	-	包含層	土師器	高坏	底部～脚部	60%	-	-	(7.0)	7.5YR 6/4　にぶい橙色
149-11	-	-	包含層	土師器	高坏	底部～脚部	70%	-	-	(8.7)	10YR 7/4　にぶい黄橙色
149-12	-	-	包含層	土師器	高坏	脚部	80%	-	-	(8.6)	10YR 6/3　にぶい黄橙色
149-13	-	-	包含層	土師器	高坏	底部～脚部	40%	-	-	(7.0)	7.5YR 7/3　にぶい橙色
149-14	-	-	包含層	土師器	高坏	脚部	80%	-	-	(7.7)	7.5Y 6/3　にぶい褐色
149-15	-	-	包含層	土師器	高坏	脚部	40%	-	-	(7.3)	10YR 8/2　灰白色
149-16	-	-	包含層	土師器	高坏	脚部	40%	-	-	(6.8)	10YR 7/4　にぶい黄橙色
149-17	-	-	包含層	土師器	高坏	脚部	60%	-	-	(6.7)	5YR 5/6　明赤褐色
149-18	-	-	包含層	土師器	壺	口縁部	25%	(16.0)	-	(6.2)	10YR 8/3　浅黄橙色
149-19	-	-	包含層	土師器	台付甕	台部	70%	-	8.5	(4.8)	内：10YR 5/4　にぶい黄褐色 外：10YR 6/6　明黄褐色
149-20	-	-	包含層	土師器	台付甕	台部	60%	-	10.0	(6.6)	10YR 7/3　にぶい橙色
149-21	109	-	包含層	土師器	甕	全体	25%	(28.0)	7.7	33.8	10YR 7/3　にぶい黄橙色
153-1	111	-	谷地形	山茶碗	碗	全体	40%	(15.7)	6.7	5.8	2.5Y 7/1　灰白色
153-2	-	-	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	90%	-	7.9	(2.5)	N 8/0　灰白色
153-3	-	-	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	25%	-	(8.0)	(2.7)	5Y 7/1　灰白色

挿図番号	図版番号	調査区	出土場所	種類	器種	残存部位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調
153-4	111	-	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部		-	6.0	(2.5)	2.5Y 8/1　灰白色
153-5	111	-	谷地形	山茶碗	小皿	全体	100%	8.5	4.6	2.3	2.5Y 7/2　灰黄色
153-6	111	-	谷地形	山茶碗	小皿	全体	100%	8.5	3.3	2.8	2.5Y 6/1　灰色
153-7	-	-	谷地形	山茶碗	小皿	全体	45%	(9.0)	(4.0)	2.9	5Y 7/1　灰白色
153-8	111	-	谷地形	山茶碗	碗	全体	80%	15.7	8.2	5.8	2.5Y 7/1　灰白色
153-9	112	-	谷地形	山茶碗	碗	全体	100%	16,7	8.6	5.6	2.5Y 8/1　灰白色
153-10	112	-	谷地形	山茶碗	碗	全体	40%	(17.2)	(6.5)	5.5	2.5Y 8/1　灰白色
153-11	-	-	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	70%	-	9.2	(3.5)	2.5Y 7/1　灰白色
153-12	-	-	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	25%	-	(8.0)	(2.1)	5Y 7/1　灰白色
153-13	-	-	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	40%	-	7.0	(3.4)	2.5Y 7/1　灰白色
153-14	-	-	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	30%	-	(9.1)	(2.8)	2.5Y 7/1　灰白色
153-15	-	-	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	6.6	(3.2)	10YR 7/1　灰白色
153-16	-	-	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	90%	-	(7.1)	(3.4)	N 7/0　灰白色
153-17	-	-	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	9.0	(3.5)	7.5Y 7/1　灰色
153-18	-	-	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	30%	-	(6.8)	(2.1)	N 8/0　灰白色
153-19	-	-	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	8.3	(2.1)	N 7/0　灰白色
153-20	-	-	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	7.8	(2.4)	2.5Y 7/1　灰白色
153-21	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	90%	-	7.2	(1.9)	2.5Y 7/1　灰白色
153-22	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	80%	-	7.6	(1.8)	2.5Y 7/1　灰白色
153-23	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	50%	-	(7.1)	(1.8)	N 7/0　灰白色
153-24	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	20%	-	(7.0)	(1.9)	2.5Y 7/1　灰白色
153-25	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	50%	-	7.6	(2.7)	10YR 7/1　灰白色
153-26	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	70%	-	5.7	(2.5)	2.5Y 8/1　灰白色
153-27	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	20%	-	(8.2)	(2.0)	N 8/0　灰白色
153-28	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	7.3	(2.2)	2.5Y 7/1　灰白色
153-29	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	50%	-	-	(1.6)	N 8/0　灰白色
154-1	112	5区	谷地形	山茶碗	小碗	全体	80%	(11.0)	6.1	3.2	5Y 7/1　灰白色
154-2	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	4.4	(1.7)	2.5Y 7/1　灰白色
154-3	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	70%	-	5.0	(1.6)	2.5Y 7/1　灰白色
154-4	112	5区	谷地形	山茶碗	小皿	全体	100%	8.8	3.5	2.0	2.5Y 8/1　灰白色
154-5	112	5区	谷地形	山茶碗	小皿	全体	100%	8.0	3.8	2.3	2.5Y 8/1　灰白色
154-6	112	5区	谷地形	山茶碗	小皿	全体	80%	7.8	3.8	2.4	10YR 8/3　浅黄橙色
154-7	-	5区	谷地形	山茶碗	壺？	底部	40%	-	(15.6)	(5.5)	2.5Y 8/1　灰白色
154-8	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	60%	-	(7.1)	(2.1)	2.5Y 6/1　黄灰色
154-9	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	口縁部～体部	15%	(14.6)	-	(4.5)	2.5Y 7/1　灰白色
154-10	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	口縁部～体部	20%	(15.3)	-	(3.5)	2.5Y 7/1　灰白色
154-11	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	30%	-	(7.5)	(3.2)	2.5Y 7/1　灰白色
154-12	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	5%	-	(7.6)	(3.0)	N 6/0　灰色
154-13	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	全体	80%	16.9	7.0	6.3	5Y 7/1　灰白色
154-14	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	40%	-	(7.8)	(2.6)	2.5Y 7/1　灰白色
154-15	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	30%	-	(6.7)	(2.8)	2.5Y 7/1　灰白色
154-16	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	50%	-	(7.0)	(2.7)	2.5Y 7/1　灰白色
154-17	-	5区	谷地形	山茶碗	小碗	全体	50%	(10.0)	4.2	3.1	N 7/0　灰白色
154-18	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	5.0	(1.8)	N 6/0　灰色
154-19	-	5区	谷地形	山茶碗	小皿	底部～高台部	10%	-	4.9	(1.6)	2.5Y 6/1　灰白色
154-20	-	5区	谷地形	灰釉陶器	壺	底部～高台部	80%	-	10.2	(3.6)	2.5Y 8/1　灰白色
154-21	-	5区	谷地形	山茶碗	壺	底部～高台部	45%	-	(13.5)	(9.3)	N 8/0　灰白色
155-1	112	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	70%	-	(7.5)	(2.2)	内：N 6/0　灰色 外：N 8/0　灰白色
155-2	112	5区	谷地形	山茶碗	碗	全体	60%	(17.7)	8.1	5.8	2.5Y 7/1　灰白色
155-3	-	5区	谷地形	山茶碗	輪花碗	口縁部～体部	30%	(16.9)	-	(4.4)	2.5Y 7/1　灰白色
155-4	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	口縁部～体部	90%	-	5.4	(1.8)	2.5Y 7/1　灰白色
155-5	112	5区	谷地形	山茶碗	碗	全体	40%	(17.4)	8.6	5.4	10YR 7/3　にぶい黄橙色
155-6	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	口縁部～体部	20%	(18.0)	-	(3.9)	2.5Y 7/1　灰白色
155-7	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	口縁部～体部	100%	-	7.6	(3.3)	2.5Y 7/1　灰白色
155-8	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	口縁部～体部	40%	-	(7.2)	(3.9)	7.5YR 7/1　明褐灰色
155-9	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	口縁部～体部	40%	-	(9.4)	(3.0)	N 8/0　灰白色
155-10	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	口縁部～体部	20%	-	(8.9)	(2.2)	10YR 7/1　灰白色
155-11	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	口縁部～体部	60%	-	8.2	(3.2)	2.5Y 7/1　灰白色
155-12	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	口縁部～体部	100%	-	8.7	(3.0)	2.5Y 7/1　灰白色
155-13	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	口縁部～体部	100%	-	7.7	(2.5)	2.5Y 8/1　灰白色
155-14	112	5区	谷地形	山茶碗	小碗	全体	50%	(9.7)	4.8	5.15	2.5Y 7/1　灰白色
155-15	-	5区	谷地形	山茶碗	小碗	全体	30%	(9.8)	(5.0)	3.3	N 8/0　灰白色
155-16	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	全体	40%	(10.0)	(6.0)	3.3	2.5Y 7/1　灰白色
155-17	-	5区	谷地形	山茶碗	小碗	全体	25%	(10.6)	(4.2)	3.6	N 8/0　灰白色
155-18	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	全体	40%	(15.5)	6.9	5.5	2.5Y 7/1　灰白色

挿図番号	図版番号	調査区	出土場所	種類	器種	残存部位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調
155-19	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	50%	-	(8.6)	(4.4)	N 7/0　灰白色
155-20	112	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	40%	-	(8.0)	(3.1)	5Y 7/1　灰白色
155-21	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	90%	-	7.0	(3.2)	2.5Y 7/1　灰白色
155-22	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	50%	-	(7.5)	(2.1)	5Y 6/1　灰色
155-23	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	60%	-	7.8	(2.7)	2.5Y 7/1　灰白色
155-24	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	20%	-	(7.7)	(2.6)	内：N 6/0　灰白色 外：10YR 7/1　灰白色
155-25	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	40%	-	(8.0)	(2.4)	2.5Y 7/1　灰白色
155-26	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	70%	-	7.9	(1.6)	N 8/0　灰白色
155-27	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	25%	-	(8.0)	(2.4)	N 7/0　灰白色
155-28	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	90%	-	5.7	(1.7)	2.5Y 7/1　灰白色
155-29	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	15%	-	(8.0)	(2.7)	2.5Y 7/1　灰白色
155-30	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	7.5	(3.6)	2.5Y 8/1　灰白色
155-31	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	90%	-	7.5	(3.9)	2.5Y 7/1　灰白色
155-32	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	6.7	(2.9)	7.5Y 7/1　灰色
155-33	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	50%	-	(8.0)	(2.9)	2.5Y 7/1　灰白色
155-34	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	30%	-	(8.1)	(2.2)	2.5Y 7/1　灰白色
155-35	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	100%	-	8.1	(2.6)	2.5Y 7/1　灰白色
155-36	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	30%	-	(9.4)	(2.9)	10YR 8/1　灰白色
155-37	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	50%	-	(7.5)	(2.3)	2.5Y 7/1　灰白色
155-38	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	50%	-	(7.3)	(3.5)	2.5Y 7/1　灰白色
155-39	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	80%	-	8.4	(2.6)	2.5Y 7/1　灰白色
155-40	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	30%	-	(7.9)	(2.8)	N 7/0　灰白色
155-41	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	30%	-	(8.4)	(1.8)	2.5Y 7/1　灰白色
155-42	-	5区	谷地形	山茶碗	碗	底部～高台部	60%	-	(8.0)	(3.3)	N 7/0　灰白色
156-1	-	5区	谷地形	灰釉陶器	皿	全体	40%	(14.6)	(7.5)	2.1	素地：5Y 8/1　灰白色 釉：5Y 7/1　灰白色
156-2	-	5区	谷地形	灰釉陶器	皿	底部～高台部	50%	-	(6.7)	(2.4)	N 6/0　灰色
156-3	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	口縁部～体部	40%	(16.6)	-	(3.9)	2.5Y 7/1　灰白色
156-4	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	底部～高台部	40%	-	(8.4)	(2.6)	N 8/0　灰白色
156-5	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	全体	30%	15.8	7.6	6.1	N 8/0　灰白色
156-6	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	体部～高台部	50%	-	(8.0)	(4.7)	2.5Y 8/1　灰白色
156-7	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	底部～高台部	40%	-	(8.5)	(2.3)	2.5Y 8/1　灰白色
156-8	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	底部～高台部	50%	-	(8.0)	(2.6)	10YR 8/1　灰白色
156-9	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	底部～高台部	30%	-	(7.0)	(1.7)	N 8/0　灰白色
156-10	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	底部～高台部	90%	-	7.5	(2.5)	10YR 8/3　浅黄橙色
156-11	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	全体	30%	(15.6)	(7.1)	4.95	2.5Y 7/1　灰白色
156-12	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	口縁部	15%	(16.1)	-	(2.5)	10YR 7/1　灰白色
156-13	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	全体	30%	(17.2)	(7.1)	5.45	2.5Y 7/1　灰白色
156-14	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	口縁部～体部	25%	(16.0)	-	(3.7)	2.5Y 7/1　灰白色
156-15	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	底部～高台部	10%	-	(8.1)	(4.0)	10YR 8/1　灰白色
156-16	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	口縁部	20%	(20.0)	-	(2.9)	2.5Y 7/1　灰白色
156-17	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	底部～高台部	20%	-	(8.0)	(2.8)	2.5Y 7/1　灰白色
156-18	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	底部～高台部	30%	-	(8.5)	(4.2)	2.5Y 7/1　灰白色
156-19	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	底部～高台部	30%	-	(8.2)	(4.9)	素地：N 7/0　灰色 釉：7.5Y 5/1　灰オリーブ色
156-20	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	底部～高台部	20%	-	(9.4)	(2.0)	N 8/0　灰白色
156-21	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	底部～高台部	20%	-	(7.8)	(2.1)	N 8/0　灰白色
156-22	-	5区	谷地形	灰釉陶器	小碗	全体	25%	(8.9)	(5.2)	3.0	N 7/0　灰白色
156-23	-	5区	谷地形	灰釉陶器	碗	底部～高台部	80%	-	5.3	(2.4)	5Y 7/1　灰白色
156-24	-	5区	谷地形	灰釉陶器	壺	底部～高台部	30%	-	(13.8)	(4.0)	2.5Y 8/1　灰白色
156-25	-	5区	谷地形	須恵器	坏蓋	口縁部	20%	(19.2)	-	(1.7)	2.5Y 7/1　灰白色
156-26	-	5区	谷地形	須恵器	蓋	全体	15%	(16.4)	-	2.4	N 8/0　灰白色
156-27	-	5区	谷地形	須恵器	坏身	全体	30%	(14.6)	10.4	3.7	2.5Y 7/1　灰白色
156-28	-	5区	谷地形	須恵器	坏身	底部～高台部	30%	-	(9.2)	(1.3)	10YR 7/1　灰白色
156-29	-	5区	谷地形	須恵器	壺	口縁部	30%	(13.2)	-	(4.1)	N 6/0　灰色
156-30	-	5区	谷地形	土師器	高坏	脚部	70%	-	(7.4)	(6.1)	10YR 8/6　黄橙色

第 11 表　遺物観察表（土製品）

挿図番号	図版番号	出土場所	種類	器種	残存部位	残存率	長さ(cm)	幅(cm)	T: 厚さ D: 孔径(cm)	H: 高さ(cm) W: 重量(g)	色調
56-3		SR1001	土製品	土錘	全体	100%	6.55	2.7	D:1.0	W：46.3	10YR 7/1　灰白色
72-15		SX1003	土製品	土錘	全体	100%	6.5	2.7	D:0.9	W：37.1	10YR 8/2　灰白色
125-8	99	SX3001	手捏ね土器	不明	全体	40%	(3.6)	(4.6)		H:4.4	7.5YR 6/6　橙色
127-4	99	SX3002	手捏ね土器	甕？	全体	100%	4.5	3.4			7.5YR 7/4　にぶい橙色
146-3		包含層	土製品	瓦	全体	—	—	—	—	—	
146-4	109	包含層	土製品	瓦	全体	—	—	—	—	—	
150-1		包含層	土師器	甑	把手	100%					10YR 7/3　にぶい黄橙色
150-2		包含層	手捏ね土器	甕？	全体	60%			T:4.4	H:(4.3)	7.5YR 6/4　にぶい橙色
150-3		包含層	手捏ね土器	甕？	全体	50%			T:4.4	H:(3.7)	7.5YR 6/4　にぶい橙色
150-4		包含層	手捏ね土器	甕？	全体	60%			T:4.1	H:(3.0)	10YR 6/3　にぶい黄橙色
150-5		包含層	手捏ね土器	壺	全体	30%	(4.2)	(6.0)	T:(4.2)	H:4.7	内：7.5YR 6/4　にぶい橙色 外：7.5YR 6/3　にぶい褐色
150-6	110	包含層	土師器	壺	全体	80%		5.0		H:(4.9)	2.5Y 6/3　にぶい黄色
150-7		包含層	手捏ね土器	高坏？	全体					H:(1.5)	7.5YR 7/4　にぶい橙色
150-8		包含層	手捏ね土器	不明	全体	80%	(5.3)			H:(1.5)	10YR 8/4　浅黄橙色
150-9		包含層	手捏ね土器	甕？	全体	40%	(3.9)		T:(3.1)	H:2.3	10YR 8/4　浅黄橙色
150-10		包含層	手捏ね土器	不明	全体	20%			T:(4.2)	H:(2.4)	7.5YR 7/4　にぶい橙色
150-11	110	包含層	手捏ね土器	不明	全体	70%	(3.2)		T:(3.4)	H:1.7	7.5YR 6/6　橙色
150-12	110	包含層	手捏ね土器	不明	全体	100%	2.6	3.1	T:2.7	H:1.8	7.5YR 7/3　にぶい橙色
150-13		包含層	手捏ね土器	甑	把手	100%					10YR 8/4　浅黄橙色
150-14	110	包含層	手捏ね土器	甕？	全体	20%	(3.3)		T:(4.4)	H:2.7	N 7/0　灰白色
150-15	110	包含層	手捏ね土器	甕？	全体	20%	(2.8)		T:(4.4)	H:2.7	内：5Y 6/1　灰色 外：5Y 5/1　灰色
150-16	111	包含層	須恵器	獣足	付けね	—					2.5Y 7/1　灰白色
150-17		包含層	土製品	羽口	全体	100%	8.9	1.3	D:2.6	W:253.1	7.5YR 8/6　浅黄橙色
150-18		包含層	土製品	羽口	一部	—	(3.8)				10YR 8/2　灰白色
150-19		包含層	土製品	羽口	一部	—	(3.3)				N 7/0　灰白色
150-20		包含層	土製品	羽口	一部	—	(3.1)				5Y 7/1　灰白色
150-21		包含層	土製品	羽口	一部	—	(2.7)				内：10YR 8/2　灰白色 外：5Y 8/1　灰白色
150-22		包含層	土製品	不明	—	—			T:(5.6)	H:(2.0)	10YR 8/2　灰白色
150-23		包含層	土製品	特殊遺物	—	—	(6.5)	3.9	T:0.9		2.5Y 6/1　黄灰色
150-24		包含層	土製品	不明	—	—	(7.1)	2.2	T:1.5		N 7/0　灰白色
150-25		包含層	土製品	竈の支柱？	全体	—	(8.3)	(5.0)		W:151.4	2.5Y 8/2　灰白色
150-26		包含層	土製品	土錘	全体	30%	(3.7)	(3.6)	D:(1.8)	W:20.7	2.5YR 5/6　明赤褐色
150-27		包含層	土製品	土錘	全体	90%	5.8	2.7	D：1.1	W:35.4	10YR 7/2　にぶい黄橙色
150-28		包含層	土製品	土錘	全体	95%	6.8	1.3	D：0.8	W:52.3	10YR 7/1　灰白色
150-29		包含層	土製品	土錘	全体	100%	6.4	2.8	D：0.9	W:47.3	2.5Y 7/2　灰黄色
150-30		包含層	土製品	土錘	全体	100%	6.7	2.6	D：0.9	W:40.0	10YR 7/1　灰白色
150-31		包含層	土製品	土錘	全体	80%	6.4	2.6	D：1.1	W:34.6	10YR 7/1　灰白色
150-32		包含層	土製品	土錘	全体	100%	6.3	2.5	D：0.9	W:40.4	10YR 7/2　にぶい黄橙色
150-33		包含層	土製品	土錘	全体	90%	(6.2)	1.3	D：1.0	W:23.1	10YR 7/2　にぶい黄橙色
150-34		包含層	土製品	土錘	全体	80%	5.5	2.5	D：0.9	W:28.2	2.5Y 7/2　灰黄色
150-35		包含層	土製品	土錘	全体	80%	5.8	2.45	D：0.9	W:26.9	10YR 7/2　にぶい黄橙色
150-36		包含層	土製品	土錘	全体	80%	6.3	2.8	D：1.1	W:31.6	10YR 5/1　褐灰色
150-37		包含層	土製品	土錘	全体	70%	(4.3)	2.3	D：1.0	W:22.4	10YR 6/1　灰白色
150-38		包含層	土製品	土錘	全体	90%	5.65	2.2	D：1.0	W:24.5	10YR 8/2　灰白色
150-39		包含層	土製品	土錘	全体	100%	4.3	2.5	D：0.9	W:25.6	10YR 6/3　にぶい黄橙色
150-40		包含層	土製品	土錘	全体	30%	(4.9)	(1.8)	D:(1.0)	W:52.3	10YR 4/1　褐灰色
150-41		包含層	土製品	土錘	全体	40%	(2.2)	(1.9)	D:(0.6)	W:6.8	5Y 5/1　灰色
150-42		包含層	土製品	土錘	全体	50%	(3.6)	(2.1)	D:(1.0)	W:5.6	2.5Y 5/1　黄灰色
150-43		包含層	土製品	土錘	全体	80%	4.2	1.6	D：0.6	W:8.8	10YR 8/3　浅黄橙色
150-44		包含層	土製品	土錘	全体	70%	(3.3)	1.3	D：0.6	W: 4.4	10YR 8/2　灰白色
150-45		包含層	土製品	土錘	全体	100%	4.7	1.4	D：0.4	W:9.5	7.5YR 6/1　褐灰色
150-46		包含層	土製品	土錘	全体	100%	4.3	1.4	D：0.5	W:8.4	2.5Y 6/3　にぶい黄色

第 12 表　遺物観察表（木製品）

挿図番号	図版番号	調査区名	遺構名	材質	大別	小別	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
26-4	83	２区	SA1002-P1	クリ	土木材	柱	57	12	12
26-5	83	３区	SA1004-P1	クリ	土木材	柱	25	10	10
29-1	83	３区	SB1002-P6	ツガ属	土木材	柱	40	20	20
35-6	84	２区	SE1003	ヒノキ	不明	板状木製品	23	2	1
35-7	84	２区	SE1007	クロマツ	食事具	杓	23	23	5
37-10	85	３区	SE1013	ヒノキ	不明	板状木製品	12	5	1
37-11	85	３区	SE1013	ヒノキ	不明	板状木製品	11	4	1
37-12	85	３区	SE1013	クロバイ	食事具	柄？	23	5	3
39-8	84	２区	SE1009	ヒノキ	不明	板状木製品	7	2	1
41-21	86	２区	SE1010	ヒノキ	食事具	曲物	16	16	5
41-22	86	２区	SE1010	ヒノキ	食事具	曲物	16	16	5
41-23	86	２区	SE1010	ヒノキ	食事具	曲物	16	16	5
41-24	86	２区	SE1010	ヒノキ	服飾具	下駄	20	12	3
41-25	85	２区	SE1010	ヒノキ	不明	板状木製品	55	5	1
56-4	84	２区	SR1001	スギ	不明	不明	12	3	3
58-3	88	４区	SR1022	ヒノキ	食事具	曲物	30.5	1	1
58-4	88	３区	SR1022	ヒノキ	不明	不明	40	3	2
69-1	90	５区	谷地形	エノキ	土木材	杭	55	14	11
69-2	90	５区	谷地形	イヌマキ属	土木材	丸杭	46	10	8
69-3	90	５区	谷地形	ツガ属	土木材	角杭	50	6	5
69-4	90	５区	谷地形	カラマツ	土木材	角杭	45	6	5
69-5	90	５区	谷地形	シキミ	土木材	杭	43	8	6.3
69-6	90	５区	谷地形	イチイガシ	土木材	杭（転用）	70	7	5.5
69-7	90	５区	谷地形	アスナロ	土木材	丸杭	93	11	8.6
69-8	—	５区	谷地形	サカキ	土木材	丸杭	97	8	6.3
69-9	—	５区	谷地形	アカマツ	土木材	丸杭	96	9	7.1
69-10	—	５区	谷地形	スダジイ	土木材	丸杭	84	7	5.5
69-11	—	５区	谷地形	アカマツ	土木材	丸杭	79	8	6.3
69-12	90	５区	谷地形	ナツツバキ	土木材	丸杭	70	10	7.9
70-1	91	５区	谷地形	シキミ	土木材	丸杭	65	14	11.0
70-2	91	５区	谷地形	ナツツバキ	土木材	丸杭	86	10	7.9
70-3	91	５区	谷地形	アカマツ	土木材	丸杭	84	7	5.5
70-4	91	５区	谷地形	サカキ	土木材	丸杭	66	8	6
70-5	91	５区	谷地形	アカマツ	土木材	丸杭	56	8	6.3
70-6	90	５区	谷地形	タイミンタチバナ	土木材	丸杭	57	8	6.3
70-7	91	５区	谷地形	クロバイ	土木材	杭	57	7	5.5
70-8	91	５区	谷地形	アカマツ	土木材	丸杭	49	7	5.5
70-9	90	５区	谷地形	アカマツ	土木材	丸杭	37	8	6.3
70-10	90	５区	谷地形	シキミ	土木材	杭	38	8	6.3
70-11	90	５区	谷地形	サカキ	土木材	杭	25	7	5.5
70-12	90	５区	谷地形	ヒサカキ属	土木材	杭	43	4	3.1
75-1	92	２区	SB2001-P1	ヒノキ	土木材	柱	50	15	15
75-2	92	２区	SB2001-P2	カヤ	土木材	柱	50	15	15
75-3	92	２区	SB2001-P4	カヤ	土木材	柱	40	15	15
78-4	92	２区	SB2001-P13	コナラ属コナラ節	土木材	柱	30	20	20
78-5	92	２区	SB2001-P14	コナラ属コナラ節	土木材	柱	30	15	15
78-6	92	２区	SB2001-P9	ヒノキ	土木材	柱	20	20	20
78-7	92	２区	SB2001-P8	アスナロ	土木材	柱	50	25	25
96	93	２区	SB3001-P1	イヌマキ属	土木材	柱	30	10	10
103-5	93	２区	SB3001-P4	スギ	土木材	柱	30	15	4
125-1	99	４区	SD3019	スギ	不明	不明	21	9	0.5
152-3	110	３区	包含層	ヒノキ		櫂	56	7	1.5

第 13 表　遺物観察表（石器・石製品）

挿図番号	図版番号	調査区名	グリッド	遺構名	層位	材質	器種	全長(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
37-13	—	3 区	M98	SE1013	—	砂岩	砥石	64	35	11	37.2
41-20	—	2 区	L99	SE1010	—	砂岩	砥石	(7.2)	(6.0)	(3.4)	
82-2	93	3 区	L1	SP1054	—	チャート	紡錘車	40	40	14	
132-4	100	3 区	N97	SZ4005	—	砂岩	石錘	5.0	4.3	1.1	31.1
134-2	—	3 区	O99	SZ4022	—	砂岩	砥石	11.35	6.2	4.3	471.3
151-1	110	—	—	—	包含層	勾玉	めのう	3.1	1.65	1.05	6.8
151-2	—	5 区	—	—	包含層	珪質岩	紡錘車	上端径：4.65	下端径：2.85	1.3	孔径：0.8
151-3	110	2 区	M3	—	包含層	砂岩	太型蛤刃石斧	5.6	6.4	4.0	22.4
151-4	—	3 区	O3S	—	包含層	砂岩	敲き石	10.3	7.4	2.8	276.4
151-5	—	3 区	O98S	—	包含層	砂岩	敲き石	7.9	6.0	2.9	205.8
151-6	110	4 区	U95	—	包含層	結晶片岩	敲き石	5.6	3.5	3.5	106.5
151-7	—	5 区	Ff87	—	包含層	砂岩	磨石	10.2	8.65	3.2	286.1
151-8	—	2 区	K2	—	包含層	砂岩	磨石	10.2	7.9	6.7	528.4
151-9	110	3 区	N98	—	包含層	砂岩	砥石	6.0	3.8	4.0	193.4
151-10	—	3 区	—	—	包含層	砂岩	砥石	11.95	7.95	6.9	660.7
151-11	—	2 区	—	—	包含層	砂岩	砥石	143.0	9.5	3.7	543.2
151-12	—	3 区	O98	—	包含層	砂岩	磨石	8.3	5.0	1.4	72.1
151-13	—	4 区	V96	—	包含層	砂岩	砥石	4.7	4.2	3.3	73.4
151-14	—	2 区	L98	—	包含層	砂岩	砥石	9.8	3.55	1.8	81.3
151-15	—	3 区	P98	—	包含層	砂岩	砥石	8.45	5.0	3.4	144.0
151-16	—	3 区	Q98N	—	包含層	砂岩	砥石	5.65	3.4	2.9	74.5
151-17	—	3 区	O98	—	包含層	砂岩	砥石	5.45	4.5	3.05	98.3

第 14 表　遺物観察表（金属製品）

挿図番号	図版番号	調査区名	グリッド	遺構名	層位	材質	大別	小別	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
72-3	92	2 区		SX1002	—		刀	短刀	(19.4)	(2.4)	0.4
152-1	110	2 区		—	包含層		刀	短刀	19.6	2.4	0.5
152-2	110	2 区		—	包含層		帯金具	鉸具	2.8	2.6	0.6

第 15 表　掘立柱建物跡観察表

遺構番号	主軸方向	間数		桁行(m)	梁行(m)	桁行平均柱間(cm)	梁行平均柱間(cm)
		桁	梁				
SB1001	N8°　W	5	1	10.56	3.44	194.7	320.0
SB1002	N8°　W	4	1	8.32	2.16	119.0	152.0
SB1003	N5°　W	3	1	5.35	2	139.2	160.0
SB1004	N8°　W	2	1	2.80	1.36	104.0	108.0
SB1005	N82°　W	5	2	10.00	1.36	161.6	138.0
SB1006	N8°　E	2	2	4.40	3.84	193.3	164.0
SB1007	N3°　W	2	1	3.92	3.76	164.0	356.0
SB2001	N84°　W	2	1	2.32	3.76	114.0	272.0
SB2002	N84°　W	4	3	6.72	4.00	97.7	49.2
SB2003	N84°　W	3	3	4.40	3.60	80.0	75.2
SB2004	N6°　E	3	2	3.68	3.20	48.0	76.0
SB2005	N6°　E	3	3	5.36	3.60	101.3	45.3
SB3001	N2°　W	4	不明	不明	不明	54.0	64.0
SB3002	N88°　W	3	2	5.12	4.00	98.0	129.3
SB3003	N15°　W，N75°　E	2	2	4.08	4.08	176.0	174.0
SB3004	N80°　E	4	1	4.88	2.24	86.7	192.0
SB3005	N80°　E	4	2	4.80	3.76	80.0	78.7
SB3006	N80°　E	3	3	5.92	4.96	156.0	136.0